

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 188

伊福定国前遺跡 2

県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴う発掘調査

2005

岡山県教育委員会



1 調査区西半部全景（北西から）



2 竪穴住居19（西から）

巻頭図版 2



1 竪穴住居41-P1出土礎板(北西から)



2 竪穴住居32-P10出土礎板(南東から)



3 玉類(小玉・管玉・勾玉)



210



S21

4 赤色顔料付着遺物(鉢・石杵)

序

この報告書は、県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴い、平成14年度に発掘調査を実施した、伊福定国前遺跡の発掘調査報告書です。

調査地は、岡山県南部のほぼ中央を南流する旭川下流域に広がる岡山平野に位置します。周辺には、国指定史跡の津島遺跡をはじめ、南方遺跡、上伊福遺跡などの弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡が密集しており、古代の吉備地域の中核の一つとして、県内はもとより全国的にも注目されている地域であります。

ところで、岡山工業高等学校の敷地内では、平成6年度に同校産業教育施設（実習棟）改築に伴って発掘調査が実施され、弥生時代から室町時代の遺構・遺物が多数確認されたことで遺跡の一端が明らかになりました。その成果は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125に記載されているところです。

今回の調査では、弥生時代後期から中世の集落跡が見つかりました。特に弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡では、狭い調査区ながら多くの竪穴住居が密集していたばかりでなく、その柱穴からは礎板と呼ばれる柱の基礎構造が多数発見されました。これほど多くの礎板が検出されたのは県内でも例がなく、竪穴住居の変遷や柱穴の構造を考えるうえで貴重な資料と言えます。

これらの成果を収載いたしましたこの報告書が、学術研究に寄与でき、さらに文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

発掘調査および報告書作成にあたりましては、岡山県教育庁財務課ならびに県立岡山工業高等学校の関係各位から、多大な御協力を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡睦夫

例 言

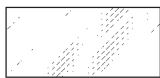
- 1 本書は、県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した伊福定国前遺跡^{いふくさだくにまえ}の調査報告書である。
- 2 伊福定国前遺跡は岡山県岡山市伊福町4-3-92に所在する。
- 3 発掘調査は、平成14年10月1日から平成15年3月31日まで、岡山県古代吉備文化財センター職員が実施し、平成14年10月から平成15年3月までは金田善敬・米田克彦・安永周平、平成15年1月から3月までは亀山行雄・重根弘和、平成15年1月は光永真一・物部茂樹・福井優が担当した。調査面積は1,080㎡である。
- 4 本書の作成は、平成15年度に金田・米田・安永・稲谷知子が担当して実施した。
- 5 本書の執筆は、第1章を稲谷、第2章を金田、第3章を亀山・金田・米田・安永、第4章を金田・米田が担い、文責は第1・2・4章を章あるいは節末に、第3章を項目の末に記した。
- 6 本書の編集は金田が行った。
- 7 遺跡の環境や遺物の材質などに関する鑑定・同定については、次の方々および機関に依頼し、有益な御教示と御指導を賜った。また、この成果の一部については報告文を頂き、掲載した。記して感謝の意を表する次第である。

鉄滓の鑑定	大澤正己 (㈱九州テクノロジー・TACセンター)
ガラス滓の分析	木戸一博 (㈱ニコン)
樹種の同定	環境考古研究会
土壌の分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
動物遺存体の分析	富岡直人 (岡山理科大学)
石材の鑑定	妹尾 護 (倉敷芸術科学大学)
陶磁器の鑑定	家田淳一 (佐賀県立博物館)
赤色顔料の分析	志賀智史
	本田光子 (九州国立博物館 (仮称) 設立準備室)
炭化物の放射性炭素年代測定	小林謙一 (国立歴史民俗博物館)
	春成秀爾 (国立歴史民俗博物館)
	坂本 稔 (国立歴史民俗博物館)
	尾寄大真 (国立歴史民俗博物館)
	新免歳靖 (国立歴史民俗博物館)
	村本周三 (総合研究大学院大学)
	松崎浩之 (東京大学原子力研究総合センター)

- 8 遺構写真については調査員が撮影した。また遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 9 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター (岡山市西花尻1325-3) に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標第V系（日本測地系）の座標北である。また、抄録に記載した経緯度は日本測地系に準拠している。ただし、第4図においては、日本測地系とともに世界測地系を併記した図を掲載している。
- 2 本書掲載の遺構および遺物の実測図の縮尺については明記しているが、次のように統一している。
遺構 竪穴住居・掘立柱建物（1/60） 井戸・土壇（1/30） 土器棺墓（1/20）
溝・河道（1/30・1/60）
遺物 土器（1/4） 石器・石製品（1/3・1/6） 金属製品（1/2） 土製品（1/3・1/4）
木製品・有機物製品（1/4・1/8） 玉類（1/1）
- 3 本報告書に掲載した遺物の番号については、土器、石器・石製品、金属製品、土製品、木器・有機物製品、玉類に分けて通し番号をつけ、土器以外については、次のアルファベットを番号の前に付している。
石器・石製品：S 金属製品：M 土製品：C 木製品・有機物製品：W 玉類：J
- 4 本報告書に掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、口径が全体の1/6以下のため、口径が不確実なものである。
- 5 土層断面および土器観察表における色調は、『新版標準土色帖（2002年度版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。
- 6 本報告書に掲載した地図のうち、第3図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 7 本報告に用いた遺構・遺物の時期区分については、一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。なお、弥生時代・古墳時代の時期区分上での表現については各執筆者の意向に沿っているが、基本的に次頁の第1表に示した編年によっている。
- 8 本報告で出土した礎板の部分名称については、基本的に各調査担当者の意向に沿っているが、その詳細な名称および定義については第4章第2節で述べている。
- 9 本報告書に掲載した遺構・遺物図においては、遺構断面図の地山、炭・焼土・粘土塊の分布範囲、樹皮残存部、欠損部等を次に示すトーンで表現している。また、木製品の断面には、木取りがわかるように、年輪を模式的に記載している。



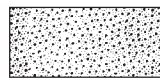
遺構の地山



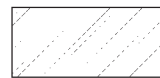
炭の範囲



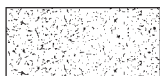
焼土



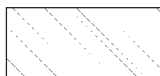
粘土塊



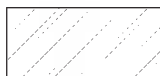
柱痕



植物質有機物



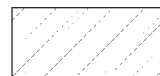
石器の断面



土・鉄製品の断面



樹皮残存部



木製品の欠損部

第1表 岡山県の土器編年対比表

時代	遺跡	伊福定国前 (1)	津寺 (2)	百間川 (3)	上東 (4)	雄町 (5)	高橋編年 (6)		
弥生時代	前期		弥・前・I	百・前・I			I期	a	
			弥・前・II	百・前・II			雄町1	II期	a
			弥・前・III	百・前・III			雄町2	II期	b
								III期	c
			弥・中・I	百・中・I			雄町3	III期	a
			弥・中・II	百・中・II				IV期	b
	中期	伊福・弥・中III	弥・中・III	百・中・III	鬼川市0	雄町6	V期	a	
							雄町4	IV期	b
							雄町5	V期	c
								VI期	a
								VI期	b
								VII期	a
									b
								VIII期	c
			d						
後期	伊福・弥・後I	弥・後・I	百・後・I	鬼川市1	雄町7	VII期	a		
		弥・後・II	百・後・II				鬼川市2	雄町8	b
		弥・後・III	百・後・III	鬼川市3	雄町9	VIII期	c		
		弥・後・IV	百・後・IV				才の町1 才の町2	雄町10	d
					IX期	a			
						雄町11 雄町12	b		
古墳時代	前期	伊福・古・前I	古・前・I	百・古・I	下田所	X期	a		
							雄町13	b	
							雄町14	c	
		伊福・古・前II	古・前・II	百・古・II	亀川上層			d	
								e	
		伊福・古・前III	古・前・III	百・古・III				XI期	a
						XI期	b		

参考文献 (表註)

- (1) 氏平昭則「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器」『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125 岡山県教育委員会 1998
米田克彦「弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188 岡山県教育委員会 2005 (本書)
- (2) 亀山行雄「時期区分」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 岡山県教育委員会 1996
- (3) 江見正己「時期区分について」『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査I』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 岡山県教育委員会 1980
- (4) 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会 1977
- (5) 正岡睦夫「弥生式土器、土師器」『雄町遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告 岡山県教育委員会 1972
- (6) 高橋 護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館 1988
高橋 護「山陽」『弥生土器I』佐原真編 ニューサイエンス社 1983

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	(稲谷)	1
第2章 発掘調査の契機と経過	(金田)	5
第1節 発掘調査の契機		5
第2節 発掘調査の体制		5
第3節 発掘調査の経過		6
第4節 口誌抄		6
第5節 報告書の作成と体制		7
第3章 発掘調査の概要		9
第1節 調査区の概要	(金田)	9
1 構内座標系の設定について		9
2 調査区について		10
3 基本層序		10
第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物	(金田・亀山・米田・安永)	16
1 弥生時代後期から古墳時代前期の概要		16
2 竪穴住居		19
3 井戸		66
4 土器棺墓		71
5 土壌・ピット		72
6 溝		124
7 遺構に伴わない遺物		125
第3節 古墳時代後期・古代の遺構・遺物	(金田)	130
1 古墳時代後期・古代の概要		130
2 竪穴住居		131
3 掘立柱建物		134
4 土壌		137
5 河道		138
6 遺構に伴わない遺物		139
第4節 中・近世の遺構・遺物	(金田)	141
1 中・近世の概要		141

2	土壙・ピット	142
3	溝・河道	147
4	遺構に伴わない遺物	148
第4章	まとめ	150
第1節	発掘調査の成果	(金田) 150
第2節	「礎板」について	(金田) 156
第3節	弥生時代後期から古墳時代前期の土器について	(米田) 172

自然科学的分野における分析・鑑定

伊福定国前遺跡における樹種同定	(環境考古研究会)	185
伊福定国前遺跡における古環境解析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	198
伊福定国前遺跡出土の赤色顔料	(志賀智史・本田光子)	214
伊福定国前遺跡出土ガラス滓	(木戸一博)	219
伊福定国前遺跡出土の動物遺存体の分析	(富岡直人)	226
伊福定国前遺跡出土炭化物の年代測定	(小林謙一・春成秀爾・坂本 稔・尾寄大真・新免歳靖・村本周三・松崎浩之)	230

遺構一覧表

遺物観察表

遺構名称新旧対照表

図版

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	調査区西西部全景（北西から）	2	竪穴住居32-P10出土礎板（南東から）
	2	竪穴住居19（西から）	3	玉類（小玉・管玉・勾玉）
巻頭図版 2	1	竪穴住居41-P1出土礎板（北西から）	4	赤色顔料付着遺物（鉢・石杵）

挿 図 目 次

第1図	伊福定国前遺跡の位置 (★印) ……………	1	第37図	竪穴住居22 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	45
第2図	伊福定国前遺跡周辺の地質概略図 (1/150,000) ……………	2	第38図	竪穴住居23・24 (1/60) ……………	47
第3図	調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000) ……………	3	第39図	竪穴住居23・24柱穴 (1/30) ……………	48
第4図	調査区の位置と構内座標の設定 (1/2,500) ……………	9	第40図	竪穴住居23・24出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/1) ……………	48
第5図	調査区周辺の座標 (1/1,000) ……………	10	第41図	竪穴住居23・24周辺柱穴・ピット出土遺物① (1/4) ……	48
第6図	遺構全体図 (1/150) ……………	11・12	第42図	竪穴住居23・24周辺柱穴・ピット出土遺物② (1/8) ……	49
第7図	調査区南壁上層断面図 (1/50) ……………	13・14	第43図	竪穴住居25 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/1) ……………	50
第8図	上層柱状模式図相関 (1/60) ……………	15	第44図	竪穴住居26 (1/60) ……………	51
第9図	弥生時代後期・古墳時代前期遺構全体図 (1/150) ……	17・18	第45図	竪穴住居27 (1/60) ……………	51
第10図	竪穴住居1 (1/60) ……………	19	第46図	竪穴住居27出土遺物 (1/4・1/8) ……………	52
第11図	竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/8) ……………	20	第47図	竪穴住居28～30 (1/60) ……………	53
第12図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	21	第48図	竪穴住居28出土遺物 (1/4・1/1) ……………	54
第13図	竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	22	第49図	竪穴住居29出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	54
第14図	竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	23	第50図	竪穴住居30出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	54
第15図	竪穴住居5 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4・1/8) ……	25	第51図	竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	55
第16図	竪穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	26	第52図	竪穴住居32・33 (1/60・1/30) ……………	56
第17図	竪穴住居6出土遺物 (1/8) ……………	27	第53図	竪穴住居32・33出土遺物 (1/4・1/3・1/8) ……………	57
第18図	竪穴住居7～9 (1/60)・出土遺物 (1/8) ……………	28	第54図	竪穴住居34～36 (1/60) ……………	58
第19図	竪穴住居7～9出土遺物 (1/4) ……………	29	第55図	竪穴住居36出土遺物 (1/4) ……………	59
第20図	竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	30	第56図	竪穴住居35・36出土遺物 (1/4・1/3・1/1・1/8) ……	60
第21図	竪穴住居11 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/8) ……………	31	第57図	竪穴住居37・38 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	61
第22図	竪穴住居12 (1/60) ……………	32	第58図	竪穴住居39・40 (1/60) ……………	62
第23図	竪穴住居12出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/8) ……………	33	第59図	竪穴住居40出土遺物 (1/4) ……………	63
第24図	竪穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	34	第60図	竪穴住居39・40出土遺物 (1/4・1/3・1/8) ……………	64
第25図	竪穴住居14 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	34	第61図	竪穴住居41 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/6・1/8) ……	65
第26図	竪穴住居15 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	35	第62図	井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/8) ……………	66
第27図	竪穴住居16 (1/60) ……………	36	第63図	井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/1) ……………	67
第28図	竪穴住居16出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8) ……………	37	第64図	井戸3 (1/30) ……………	68
第29図	竪穴住居17 (1/60) ……………	38	第65図	井戸3出土遺物① (1/4) ……………	69
第30図	竪穴住居17出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8) ……………	39	第66図	井戸3出土遺物② (1/4・1/8) ……………	70
第31図	竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	40	第67図	土器棺墓1 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	71
第32図	竪穴住居19 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……	41	第68図	土器棺墓2 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	72
第33図	竪穴住居20 (1/60) ……………	42	第69図	土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	72
第34図	竪穴住居20出土遺物 (1/4・1/2) ……………	43	第70図	土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	73
第35図	竪穴住居21 (1/60) ……………	44	第71図	土壇3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	73
第36図	竪穴住居21出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8) ……………	45	第72図	土壇4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	73

第73图	土城5 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	74	第112图	土城37 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	96
第74图	土城6 (1/30)	74	第113图	土城38 (1/30)	96
第75图	土城6出土遗物 (1/4 · 1/3 · 1/2)	75	第114图	土城38出土遗物 (1/4)	97
第76图	土城7 (1/30) · 出土遗物① (1/4)	76	第115图	土城39 (1/30)	97
第77图	土城7出土遗物② (1/4)	77	第116图	土城39出土遗物① (1/4)	98
第78图	土城8 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	78	第117图	土城39出土遗物② (1/4 · 1/1)	99
第79图	土城9 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	78	第118图	土城40 (1/30)	99
第80图	土城10 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	78	第119图	土城41 (1/30)	99
第81图	土城11 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	79	第120图	土城42 (1/30) · 出土遗物 (1/2)	99
第82图	土城12 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	80	第121图	土城43 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	100
第83图	土城13 (1/30)	80	第122图	土城44 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	100
第84图	土城13出土遗物 (1/4)	81	第123图	土城45 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	100
第85图	土城14 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	81	第124图	土城46 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	101
第86图	土城15 (1/30)	81	第125图	土城47 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	101
第87图	土城16 (1/30)	82	第126图	土城48 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	102
第88图	土城17 (1/30)	82	第127图	土城49 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/3)	102
第89图	土城18 (1/30)	82	第128图	土城50 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	103
第90图	土城19 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/2)	83	第129图	土城51 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	103
第91图	土城20 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/3)	83	第130图	土城52 (1/30)	103
第92图	土城21 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	84	第131图	土城53 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	104
第93图	土城22 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	84	第132图	土城54 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	104
第94图	土城23 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	85	第133图	土城55 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	105
第95图	土城24 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	85	第134图	土城56 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/3)	105
第96图	土城25 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	86	第135图	土城57 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	106
第97图	土城26 (1/30)	86	第136图	土城58 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	106
第98图	土城26出土遗物 (1/4)	87	第137图	土城59 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	106
第99图	土城27 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	88	第138图	土城60 (1/30)	106
第100图	土城28 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/3)	88	第139图	土城61 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	107
第101图	土城29 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	89	第140图	土城62 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	108
第102图	土城30 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	90	第141图	土城63 (1/30) · 出土遗物 (1/4 · 1/3)	109
第103图	土城31 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	90	第142图	土城64 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	110
第104图	土城32 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	91	第143图	土城65 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	110
第105图	土城33 (1/30)	91	第144图	土城66 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	111
第106图	土城33出土遗物 (1/4)	92	第145图	土城67 (1/30)	112
第107图	土城34 (1/30)	92	第146图	土城68 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	112
第108图	土城34出土遗物 (1/4)	93	第147图	土城69 (1/30)	112
第109图	土城35 (1/30) · 出土遗物① (1/4)	94	第148图	土城70 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	112
第110图	土城35出土遗物② (1/4)	95	第149图	土城71 (1/30)	113
第111图	土城36 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	96	第150图	土城72 (1/30) · 出土遗物 (1/4)	113

第151図	土壇73 (1/30) ……………	113	第190図	竪穴住居42出土遺物② (1/4) ……………	133
第152図	土壇74 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	113	第191図	竪穴住居42出土遺物③ (1/4・1/2) ……………	134
第153図	土壇75 (1/30) ……………	113	第192図	掘立柱建物1 (1/60) ……………	135
第154図	土壇76 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	114	第193図	掘立柱建物1 出土遺物 (1/4・1/8) ……………	136
第155図	土壇77 (1/30) ……………	114	第194図	掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/8) ……………	136
第156図	土壇78 (1/30) ……………	115	第195図	土壇102 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	137
第157図	土壇79 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	115	第196図	土壇103 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	138
第158図	土壇80 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	116	第197図	土壇104 (1/30) ……………	138
第159図	土壇81 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	117	第198図	河道1 上層断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	139
第160図	土壇82 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	117	第199図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	139
第161図	土壇83 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	117	第200図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/1) ……………	140
第162図	土壇84 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	118	第201図	中・近世遺構全体図 (1/300) ……………	141
第163図	土壇85 (1/30) ……………	118	第202図	土壇105～107 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	142
第164図	土壇86 (1/30) ……………	118	第203図	土壇108 (1/30) ……………	143
第165図	土壇87 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	118	第204図	土壇109 (1/30) ……………	143
第166図	土壇88 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	119	第205図	土壇110 (1/30) ……………	144
第167図	土壇89 (1/30) ……………	119	第206図	土壇111 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	144
第168図	土壇90 (1/30) ……………	119	第207図	土壇112 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2) ……………	144
第169図	土壇91 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	119	第208図	土壇113 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	144
第170図	土壇92 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	120	第209図	土壇114 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	144
第171図	土壇93 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	120	第210図	土壇115 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	144
第172図	土壇94 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ……………	121	第211図	土壇116 (1/30) ……………	145
第173図	土壇95 (1/30) ……………	122	第212図	土壇117 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	145
第174図	土壇96 (1/30) ……………	122	第213図	ピット9～26出土遺物 (1/4・1/2・1/8) ……………	146
第175図	土壇97 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	122	第214図	溝3 上層断面図 (1/60) ……………	147
第176図	土壇98 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	122	第215図	河道2 上層断面図 (1/60) ……………	147
第177図	土壇99 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	123	第216図	河道2 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	148
第178図	土壇100 (1/30) ……………	123	第217図	遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	149
第179図	土壇101 (1/30) ……………	123	第218図	遺構変遷模式図 ……………	150
第180図	ピット1～8出土遺物 (1/4) ……………	124	第219図	伊福定国前遺跡遺構全体図 (1/600) ……………	151
第181図	溝1 上層断面図 (1/30) ……………	124	第220図	時期別遺構変遷図① (1/800) ……………	152
第182図	溝2 土層断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/1) ……………	125	第221図	時期別遺構変遷図② (1/800) ……………	154
第183図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	126	第222図	柱の基礎構造の各部名称 ……………	156
第184図	遺構に伴わない遺物② (1/4) ……………	127	第223図	伊福定国前遺跡の柱の基礎構造分類模式図 ……………	158
第185図	遺構に伴わない遺物③ (1/3) ……………	128	第224図	竪穴住居にみる礎板の検出状況 (1/100) ……………	161
第186図	遺構に伴わない遺物④ (1/3) ……………	129	第225図	高杯の計量値分布と口縁角度 ……………	175
第187図	古墳時代後期・古代遺構全体図 (1/300) ……………	130	第226図	弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年案① (1/10) ……………	178
第188図	竪穴住居42 (1/60) ……………	131	第227図	弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年案② (1/10) ……………	179
第189図	竪穴住居42出土遺物① (1/4) ……………	132			

図 版 目 次

- 図版 1 1 調査地遠景 (南西から) 後方に津島遺跡を望む
2 調査区東半部全景 (東から)
- 図版 2 1 竪穴住居 1 (北から)
2 竪穴住居 2 (北から)
3 竪穴住居 3 (東から)
- 図版 3 1 竪穴住居 4 (南から)
2 竪穴住居 5 (南から)
3 竪穴住居 6 (北から)
- 図版 4 1 竪穴住居 7~9 (南から)
2 竪穴住居 10 (西から)
3 竪穴住居 11 (西から)
- 図版 5 1 竪穴住居 15 (南から)
2 竪穴住居 16 (西から)
3 竪穴住居 18 (北西から)
- 図版 6 1 竪穴住居 19 (北から)
2 竪穴住居 20 (北から)
3 竪穴住居 21 (南から)
- 図版 7 1 竪穴住居 23・24 (南西から)
2 竪穴住居 25 (南から)
3 竪穴住居 26 (南から)
- 図版 8 1 竪穴住居 27 (西から)
2 竪穴住居 30西半 (南から)
3 竪穴住居 28~30東半 (南から)
- 図版 9 1 竪穴住居 31 (北から)
2 竪穴住居 32・33 (北から)
3 竪穴住居 35・36 (南から)
- 図版 10 1 竪穴住居 38 (南から)
2 竪穴住居 39・40 (南から)
3 竪穴住居 41 (南から)
- 図版 11 1 井戸 1 (南から)
2 井戸 2 (北から)
3 井戸 3 (北から)
- 図版 12 1 土器棺墓 1 (西から)
2 土器棺墓 2 (東から)
3 土壇 7 (南西から)
- 図版 13 1 土壇 13 (南から)
2 土壇 26 (南から)
3 土壇 29 (東から)
- 図版 13 1 土壇 34 (南から)
2 土壇 35 (南から)
3 土壇 39 (北東から)
- 図版 15 1 土壇 49 (東から)
2 土壇 50 (北西から)
3 土壇 63 (東から)
- 図版 16 1 土壇 94 (南から)
2 溝 2 (北東から)
- 図版 17 1 竪穴住居 42 (南から)
2 掘立柱建物 1 (北東から)
- 図版 18 1 土壇 107 (南西から)
2 土壇 117 (南から)
3 河道 2 (南東から)
- 図版 19 1 竪穴住居 1-P1 (北東から)
2 竪穴住居 1-P2 (南東から)
3 竪穴住居 1-P3 (北東から)
4 竪穴住居 1-P4 (北西から)
5 竪穴住居 2-P1 (南から)
6 竪穴住居 2-P3 (北から)
7 竪穴住居 4-P2 (東から)
8 竪穴住居 6-P2・P3 (北東から)
- 図版 20 1 竪穴住居 5-P1 (南から)
2 竪穴住居 5-P2 (東から)
3 竪穴住居 7~9-P2 (北西から)
4 竪穴住居 7~9-P4 (東から)
5 竪穴住居 7~9-P5・P6 (南から)
6 竪穴住居 7~9-P7 (西から)
7 竪穴住居 11-P2 (南から)
8 竪穴住居 11-P3 (西から)
- 図版 21 1 竪穴住居 11-P4 (南東から)
2 竪穴住居 12-P3 (南から)
3 竪穴住居 16-P1 (東から)
4 竪穴住居 16-P3 (東から)
5 竪穴住居 16-P4 (北東から)

	6 竪穴住居17-P5 (南西から)	図版29	土壙13・19・22出土土器
	7 竪穴住居20-P1(北から)	図版30	土壙21・27・29・31・34出土土器
	8 竪穴住居20-P2 (北から)	図版31	土壙34出土土器
図版22	1 竪穴住居21-P1 (北から)	図版32	土壙35・37~39出土土器
	2 竪穴住居21-P3 (北から)	図版33	土壙39出土土器
	3 竪穴住居23・24-P1~3 (北から)	図版34	土壙39・57・58・61~64出土土器
	4 竪穴住居23・24-P5 (南東から)	図版35	1 土壙94出土土器
	5 竪穴住居23・24-P7 (南西から)		2 竪穴住居42出土土器
	6 竪穴住居23・24-P9 (東から)	図版36	1 古代・中世土器
	7 竪穴住居23・24-P17(東から)		2 統制陶器
	8 竪穴住居24-P20 (西から)		3 土製品
図版23	1 竪穴住居23・24-P18 (南から)	図版37	1 石器・石製品
	2 竪穴住居23・24-P18 (南から)		2 金属器
	3 竪穴住居29-P3 (北から)	図版38	1 竪穴住居1出土礎板
	4 竪穴住居30-P5 (西から)		2 竪穴住居5出土礎板
	5 竪穴住居32・33-P8 (北から)		3 竪穴住居6出土礎板
	6 竪穴住居36-P1 (西から)	図版39	1 竪穴住居16出土礎板
	7 竪穴住居36-P3(南西から)		2 竪穴住居23・24周辺出土礎板
	8 竪穴住居41-P1 (西から)	図版40	1 竪穴住居32・33出土礎板
図版24	竪穴住居4・7・9・11・13・16・18~20出土土器		2 竪穴住居36出土柱根・礎板
図版25	竪穴住居21・23~25・40出土土器		3 竪穴住居40出土柱根
図版26	井戸3出土土器		4 竪穴住居41出土礎板
図版27	1 土器棺墓1出土土器		5 井戸3出土木製品
	2 土壙6・7・9出土土器		6 井戸1出土環
図版28	土壙11・12出土土器		7 掘立柱建物2出土柱根

目 次

第1表	岡山県の土器編年対比表	第6表	伊福定国前遺跡における土器の掲載点数 ……………173
第2表	柱の基礎構造の分類 ……………157	第7表	伊福定国前遺跡における土器の器種組成 ……………173
第3表	柱の基礎構造の変遷 ……………159	第8表	甕口縁部の各類型掲載点数 ……………174
第4表	伊福定国前遺跡出土竪穴住居の柱基礎構造一覧 ……………164	第9表	鉢口縁部の各類型掲載点数 ……………177
第5表	伊福定国前遺跡における土器の遺構別掲載点数 ……………173		

第1章 地理的・歴史的環境

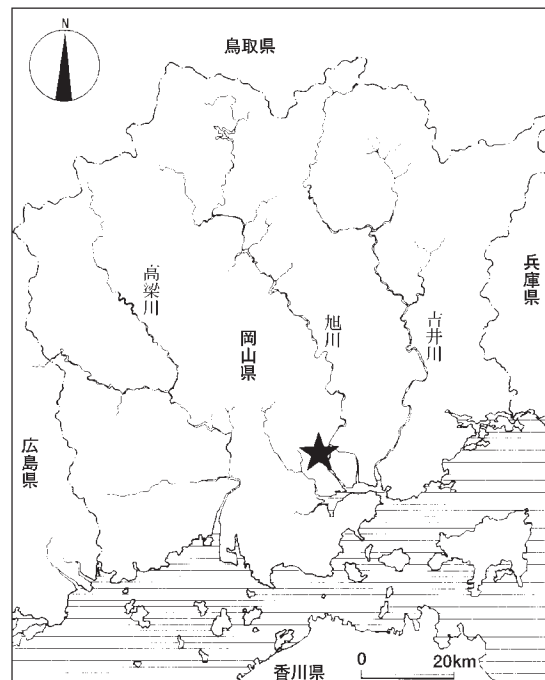
伊福定国前遺跡は、岡山県岡山市伊福町の県立岡山工業高等学校敷地内に所在する、弥生時代後期から中世にかけての集落遺跡である。地理的には岡山県の中央南部に位置し、岡山県三大河川の一つである旭川の下流西岸、岡山平野の中央北側にあたる（第1図）。この岡山平野はかつて氷河期終わりの海面上昇時には浅海となっており、この海に蒜山火山群に源を発する旭川やその支流の河川が多数流れ込み、その沖積作用によって肥沃な岡山平野が形成されることとなる。その後、海面後退により現れた岡山平野では大小さまざまな河川が氾濫を繰り返す、各流域に次々と微高地を形成していった⁽¹⁾。伊福定国前遺跡はこのようにして形成された微高地上に展開した集落の一部である（第2図）。

伊福定国前遺跡周辺では現在までに数多くの遺跡が確認・調査されているが、未だ旧石器時代の遺跡は発見されていない。やや内陸部に位置する田益田中遺跡⁽²⁾で、縄文晩期に形成された河道から後期旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器が出土しているほかはその痕跡を見出せない。

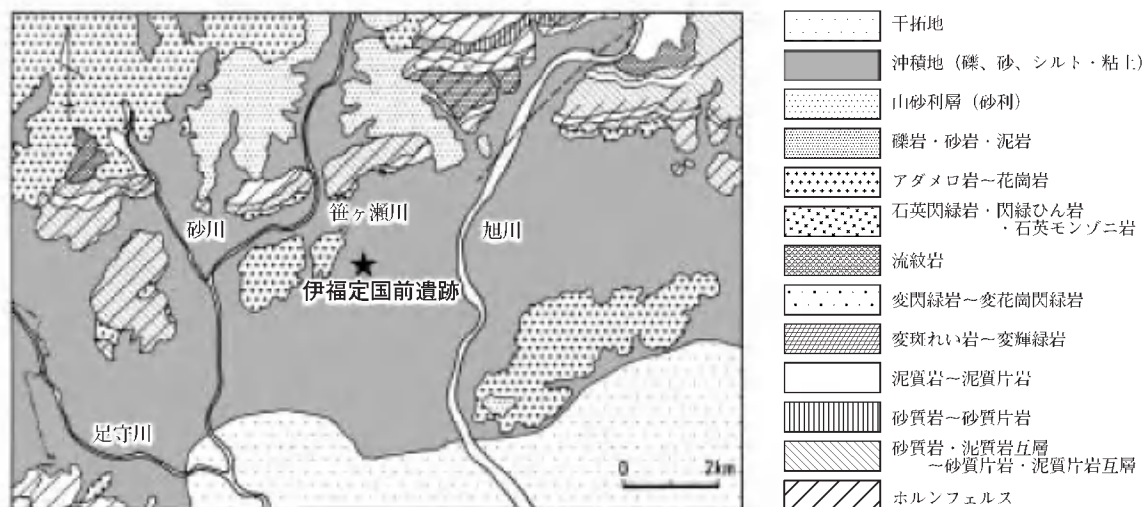
縄文時代になると半田山南麓で徐々に人々の生活が確認できるようになる。前期には土層中からイネのプラントオパールが検出された朝寝鼻貝塚や、津島岡大遺跡で活動がみられるが、本格的な定住が開始されるのは後期以降となる。津島岡大遺跡では貯蔵穴や土壇、炉跡などの遺構が検出されており、朝寝鼻貝塚もこの時期を中心とした遺跡である⁽³⁾⁽⁴⁾。晩期に入ってからこれらの遺跡は継続し、規模を拡大し遺構・遺物ともにその数を増やしていく。また伊福定国前遺跡のすぐ北に位置する津島遺跡⁽⁵⁾でも晩期の遺物が出土している。

弥生時代には旭川の沖積作用により微高地域が拡大される。それに伴い集落はさらに発展し、微高地縁辺の低湿地では水田が営まれるようになる。すでに縄文時代にプラントオパールが検出される遺跡も存在するが、弥生時代前期には畦畔によって区画された水田に、本格的な稲作が開始される。津島遺跡をはじめ、周辺の津島岡大遺跡・北方遺跡群⁽⁶⁾⁽⁷⁾には大規模な耕作地が展開された。

中期になると集落は南に拡大を始める。南方遺跡では居住区とは別に微高地縁辺に土壇墓がまとまっており、墓域が形成されていたものと思われる。さらに河道からは精巧な木製品が出土しているほか、石器未製品も多く見られることから石器製作が行なわれていたことも示唆されている。上伊福遺跡の一部である上伊福九坪遺跡⁽⁸⁾では住居址のほかガラス滓と鉞滓の出土する遺構があり、焼土や炭の検出状況からも高温を伴う作業の行われた工房跡であった可能性が



第1図 伊福定国前遺跡の位置（★印）



第2図 伊福定国前遺跡周辺の地質概略図 (1/150,000)

⁽⁹⁾
ある。

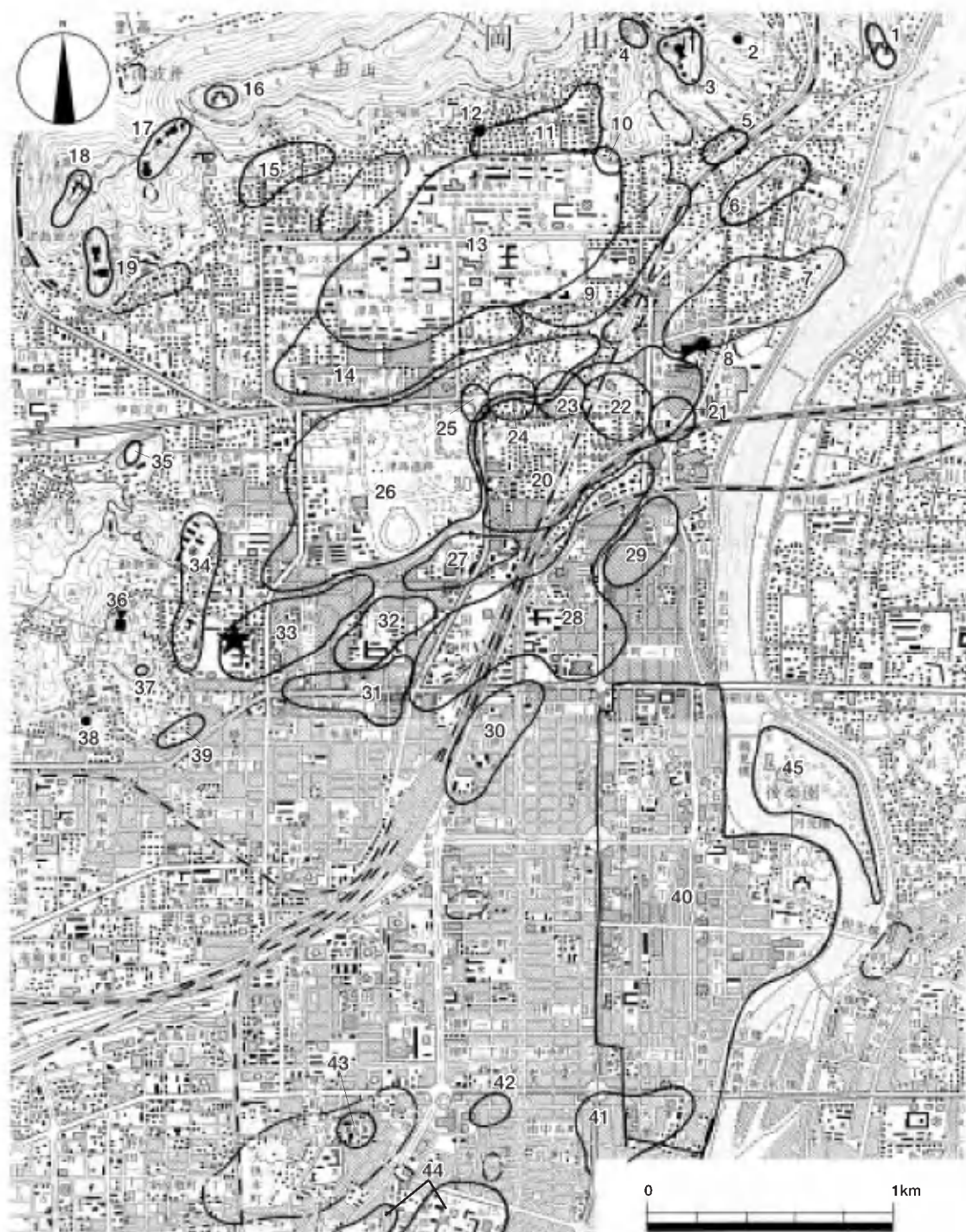
後期も引き続き沖積作用は進み、微高地域の更なる拡大に伴って多くの集落が築かれる。この段階に至って伊福定国前遺跡でも集落が形成されるようになる。津島遺跡では多くの住居址が見つかったり、河道からは建築部材を含む大量の木製品が出土している⁽¹¹⁾。津島江道遺跡でも集落が生まれ、これらの遺跡は古墳時代初頭まで存続する。⁽¹²⁾

弥生時代終末期から古墳時代には新たに丘陵上での造墓活動が始まる。半田山丘陵の西方に20m×16mの長方形を呈す都月坂2号弥生墳丘墓⁽¹³⁾が築かれると、同丘陵上には相次いで都月坂1号墳、9基の前方後方墳や方墳で構成される七つ塚古墳群⁽¹⁴⁾が、京山山塊には前方後方墳である津倉古墳が築造される。都月坂1号墳は全長33mの前方後方墳で、後方に縦穴式石室を持ち、特殊器台形埴輪が出土している。最古式であるこの埴輪は「都月型」として知られているが、七つ塚1号墳からも出土しており、これら2基は最古の古墳として位置付けられる。また平野部には4世紀末から5世紀前半の築造と推定される、全長約150mの前方後円墳である神宮寺山古墳が築かれる。丘陵上でなく平野に立地することが注目され、旭川西岸の集落の首長墓と考えられる。

古墳時代後期になると、周辺での古墳造営や集落はあまりみられなくなる。尾針神社南遺跡で5世紀末の須恵器埋納土壙が見つかったり⁽¹⁷⁾、津島江道遺跡で鍛冶炉を敷設した住居が見つかり、鉄器や砥石も出土していることから製鉄関連の集落と考えられる。⁽¹⁸⁾

古代には条里制が施行されるが、津島遺跡や津島岡大遺跡でも条里に関連すると思われる溝が見られ、津島江道遺跡では掘立柱建物群が検出されており官衙的な要素をもつと言える。⁽¹⁹⁾ また岡山平野南端の鹿田遺跡では古代末～中世の集落が存在し、鹿田荘との関連が窺えるような木簡、斎串、墨書土器といったものが出土している。⁽²⁰⁾

中世以降平野部では水田化が進み、鹿田遺跡に遺構がみられる程度となる。戦国期には半田山山塊西寄りの山頂に半田山城や妙見山城といった山城が築かれる。⁽²¹⁾ 近世に入り岡山城と城下町の形成が図られ、現在の市街地形成の基が築かれるなか、伊福定国前遺跡周辺は穀倉地として水田化される。近代に入ると、穀倉地帯から一転、津島遺跡周辺は明治40年に郷土部隊の第十七師団の将校集会所が建



- | | | | | |
|--------------|------------|----------------|----------------|-----------|
| 1 妙見山城 | 2 不動堂古墳 | 3 一本松古墳群 | 4 津島東三丁目遺跡第一地点 | 5 鍵口遺跡 |
| 6 三之宮之段遺跡 | 7 北方長田遺跡 | 8 神宮山古墳 | 9 津島江道遺跡 | 10 朝寝鼻貝塚 |
| 11 津島東遺跡 | 12 お塚様古墳 | 13 津島岡大遺跡 | 14 津島新屋遺跡 | 15 津島福居遺跡 |
| 16 半田山遺跡 | 17 都月坂墳丘墓群 | 18 烏山城 | 19 七つ塚古墳群 | 20 北方遺跡群 |
| 21 北方敷ノ内遺跡 | 22 北方地蔵遺跡 | 23 北方中溝遺跡 | 24 北方横田遺跡 | 25 北方下沼遺跡 |
| 26 津島遺跡 | 27 絵凶遺跡 | 28 南方遺跡 | 29 広瀬遺跡 | 30 集落 |
| 31 上伊福(立花)遺跡 | 32 上伊福九坪遺跡 | 33 上伊福・伊福定岡前遺跡 | 34 上伊福西・尾針神社遺跡 | 35 古墳 |
| 36 津倉古墳 | 37 妙林寺遺跡 | 38 古墳 | 39 津倉遺跡 | 40 岡山城跡 |
| 41 天瀬遺跡 | 42 大供中道遺跡 | 43 大供東浦遺跡 | 44 鹿田遺跡 | 45 後樂園 |
| ★ 調査地 | --- 散布地 | | | |

第3図 調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/25,000)

第1章 地理的・歴史的環境

設され、続いて陸軍の練兵場が造営される。その後も宅地化が進み、戦時下になると、昭和16年4月には、海軍が上伊福の片倉製糸紡績株式会社岡山工場を買収、同年11月、呉海軍軍需部岡山作業所を開設し、昭和17年には第二海軍衣料廠岡山支廠と改称して海軍被服の裁断・縫製・部外発注等に当たっていた。⁽²²⁾伊福定国前遺跡の所在する岡山工業高等学校敷地内には現在もこの衣料廠の施設の一部が残っており、本調査で戦争関連遺物として昭和16年製造と思われる統制陶器を採取している。(稲谷知子)

註

- (1) 岡山県『岡山県史』第一巻 自然風土 1983
- (2) 柳瀬昭彦ほか「田益田中(国立岡山病院)遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』141 岡山県教育委員会 1999
- (3) 小林青樹・野崎貴博ほか「津島岡大遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998
- (4) 富岡直人ほか「岡山市津島東3丁目 朝寝鼻貝塚発掘調査概報」『加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告』2 1998
鎌木義昌・亀田修一「朝寝鼻貝塚」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (5) 岡本泰典ほか「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004
- (6) 近藤義郎「津島遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (7) 岡田博ほか「北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126 1998
- (8) 扇崎由・安川満「上伊福・南方(済生会)遺跡(南蓮田調査区)Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994(平成6)年度 岡山市教育委員会 1996
扇崎由・安川満「上伊福・南方(済生会)遺跡(南蓮田調査区Ⅱ)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成7)年度 岡山市教育委員会 1997
- (9) 中野雅美・根木 修「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (10) 杉山一雄ほか「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 岡山県教育委員会 1998
- (11) 島崎東ほか「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173 岡山県教育委員会 2003
- (12) 高畑知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』18 岡山県教育委員会 1988
- (13) 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (14) 七つ塚古墳群発掘調査団編『七つ塚古墳群』1987
- (15) 近藤義郎「都月坂1号墳」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (16) 鎌木義昌「神宮寺山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県 1986
- (17) 岡山市教育委員会「尾針神社南遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成7)年度』1997
- (18) 草原孝典「津島江道(岡北中)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996(平成8)年度』岡山市教育委員会1998
- (19) 註12文献に同じ。
- (20) 吉留秀敏・山本悦世「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (21) 葛原克人『日本城郭大系』13巻 新人物往来社 1980
- (22) 岡山県『岡山県史』第十巻 近代Ⅰ 1985
岡山市役所『岡山市史 戦災復興編』1960

第2図は光野千春・杉田宗満編「岡山県地質図」(岡山県)の成果をもとに作成した。

第2章 発掘調査の契機と経過

第1節 発掘調査の契機

県立岡山工業高等学校は平成13年に創立100周年を迎えた伝統校であり、現在、機械・土木・化学工学・デザイン・建築・情報技術・電気の七つの小科をもつ工業高校である。現在、1950年代に建築された校舎の老朽化も著しく、校舎の建て替えが順次行われている。ところで、岡山工業高等学校の敷地は、平成6年に行われた発掘調査等から、弥生時代から中世にかけての集落跡が存在していることが判明しており、伊福定国前遺跡、上伊福遺跡、上伊福西遺跡の名称で周知されている。今回、改築が計画された土木・化学工学科棟の地点は、平成6年度に行った発掘調査地点からわずか15mしか離れておらず、弥生時代から中世にかけての集落が存在することが十分に想定された。そこで、県文化課では、平成14年7月18日付の埋蔵文化財発掘調査の通知（第57条の3）を受け、全面調査の指示を行った。これを受け、校舎改築により影響を受ける1,080㎡について、岡山県古代吉備文化財センター（以下、センター）が発掘調査を実施することになった。（金田善敬）

第2節 発掘調査の体制

平成14年度（2002年度）

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化課

課長 西山 猛

課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男

課長代理 宮田 正彦

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

〈総務課〉

課長 安西 正則

課長補佐(総務係長) 田中 秀樹

主任 小坂 文男

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第一係長) 山磨 康平

文化財保護主幹 光永 真一(調査担当)

文化財保護主査 亀山 行雄(調査担当)

文化財保護主任 金田 善敬(調査担当)

文化財保護主事 物部 茂樹(調査担当)

文化財保護主事 重根 弘和(調査担当)

文化財保護主事 米田 克彦(調査担当)

主事 安永 周平(調査担当)

主事 福井 優(調査担当)

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成14年10月11日付で文化財保護法第58条の2に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、平成14年10月1日からセンター職員3名が調査にあたった。調査は、重機により造成土等を除去したのち、人力で遺構の検出・掘り下げを行い、随時、遺構の実測・写真撮影を行った。当遺跡は、遺構の残存状況が極めて良好で、かつ、遺構密度の高い遺跡であることが知られており、多くの遺構・遺物が検出されることが想定された。調査では、予想どおり竪穴住居を中心とする多くの遺構が検出され、それに伴って多くの遺物が出土した。また、調査の進展に伴い、県内の調査ではまれな礎板の検出など、貴重な調査成果をあげる反面、調査の進展を遅らせる一因ともなった。このような状況を受け、平成15年1月に調査員が当初の3名から8名に増員され、2月からも調査員5名による調査体制が3月まで継続されることとなった。このような調査体制の拡充もあり、発掘調査は予定通り平成15年3月20日に終了することができ、3月28日付で岡山西警察署長あてに文化財保護法第59条に基づく「埋蔵文化財発見通知」を提出した。成果として、主に弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期～近世にいたる集落跡を確認し、出土した遺物はコンテナ箱にして約350箱を数えた。なお、発掘調査中においては、当遺跡が学校の構内でもあったことから、当校の教職員および生徒の関心を集めることとなった。その中で、当遺跡の体験発掘が「現代社会」の授業の一環として計画され、平成15年11月に高校1年生による体験授業が行われた。これらの授業内容は、学会誌や教育機関紙（古市秀治『現代社会』の授業と考古学』『考古学研究』第199号 2003年12月、古市秀治「埋蔵文化財をどう教えるか」『岡山の歴史地理教育』第31号 2003年3月）でも紹介された。（金田）



写真1 高校生による体験発掘

第4節 日誌抄

平成14年9月24日（火）表土掘削開始
10月1日（火）調査準備開始
10月7日（月）発掘資材搬入
東半部調査開始
11月15日（木）体験発掘（土木科）
12月20日（金）空中写真撮影（東半部）

平成15年1月7日（火）西半部調査開始
1月17日（金）東半部調査終了
2月24日（月）空中写真撮影（西半部）
3月20日（木）西半部調査終了
3月21日（土）調査区埋め戻し開始
3月31日（月）調査区埋め戻し終了
調査終了

第5節 報告書の作成と体制

報告書作成は、平成15年4月1日から平成16年3月31日までの期間、センターにおいて行い、金田（平成15年4月～平成16年3月）、安永（平成15年7月）、稲谷（平成15年8月～平成16年3月）、米田（平成16年1月～3月）の4名が担当した。

発掘調査は平成15年3月には終了していたが、調査の最終段階まで遺構および遺物の検出作業が続いていたことから、発掘調査期間中にすべての遺物の洗浄および注記、遺物整理、遺構図面整理、写真整理といった整理作業を終了することができなかった。そのため、報告書作成業務は、これらの未整理の遺物、図面、写真等の整理作業から開始することとなった。出土した遺物はコンテナ箱約350箱を数えたが、そのうち半数ほどは未洗浄であったため、まず洗浄作業を終了させることが急務となった。

また、遺構図面や写真の整理作業は、台帳等の整理から開始した。洗浄作業は、土器についてはコンプレッサー機器の導入などにより、作業の効率化につとめたが、木製品類については手洗いで行ったため時間を労した。また、現場で採取した土の洗浄作業等も行い、獣骨等を採取した。これらの一連の作業は5月には終了し、その後センターにおいて、土器の注記・復元・抽出、石器と石製品・金属製品・木製品等の抽出、遺物実測、遺物の写真撮影と作業を進めていった。遺物の実測は主に整理作業員、実測の一部・浄書は調査員が行った。遺構図は調査員が作成し、浄書はその一部を整理作業員が行った。調査で検出し、整理を行った遺構は、最終的に竪穴住居42軒・掘立柱建物2棟・井戸3基・土器棺墓2基・土壌約180基・ピット約1400個、溝と河道5条におよんだ。

出土した遺物のうち、土器890点・石器と石製品49点・金属製品27点・土製品35点・木製品58点・玉類10点について実測を行い、そのうち土器140点・石器と石製品19点・金属製品9点・土製品16点・木製品39点・玉類10点については写真撮影を行った。それらの成果を受けて、遺構は竪穴住居42軒・掘立柱建物2棟・井戸3基・土器棺墓2基・土壌117基・溝3条・河道2条、遺物は土器700点・石器と石製品39点・金属製品20点・土製品28点・木製品57点・玉類10点を、本報告書に掲載するに至った。

出土した遺物のうち、報告書に掲載したものについては、報告書に記載されている遺構名および遺物番号で整理している。また、その他の遺物は、調査時の旧遺構番号で保管している。なお、これらの遺物は、図面や写真とともに、センターで保管している。（金田）

報告書作成の体制

平成15年度（2003年度）

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

文化財課

課長 西山 猛

課長代理 田村 啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）平井 泰男

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長 止岡 睦夫

次長 藤川 洋二

文化財保護参事 松本 和男

〈総務課〉

課長 中田 哲雄

課長補佐（総務係長）笏本 弘忠

主任 小坂 文男

〈調査第二課〉

課長 伊藤 晃

課長補佐（第二係長）江見 正己

文化財保護主任 金田 善敬（報告書担当）

文化財保護主事 米田 克彦（報告書担当）

主事 安永 周平（報告書担当）

主事 稲谷 知子（報告書担当）

報告書作成協力者

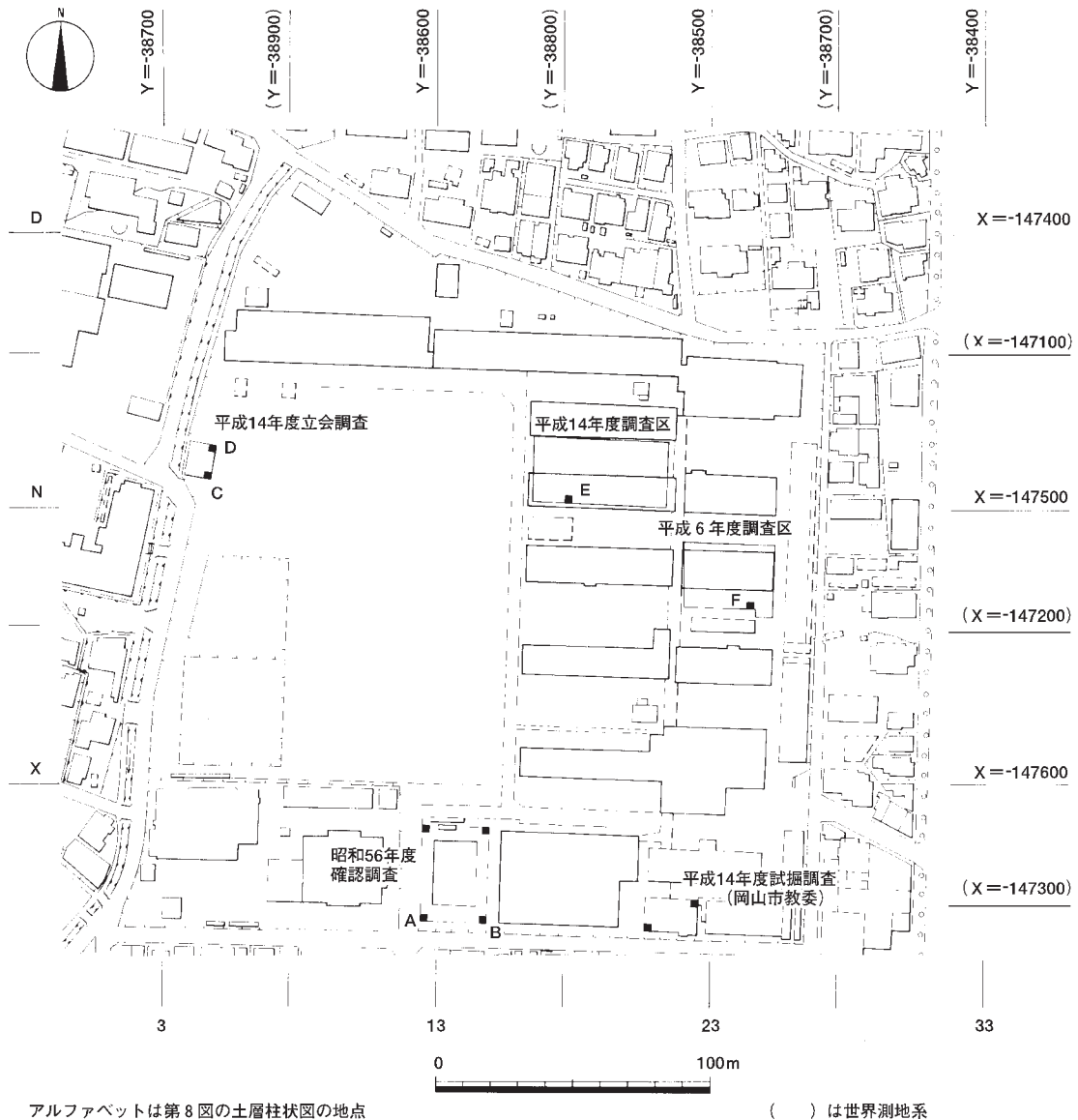
古市秀治（岡山県立図書館）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

1 構内座標系の設定について

県立岡山工業高等学校には敷地内に伊福定国前遺跡をはじめとする埋蔵文化財包蔵地が存在していることが周知されている。その中で、岡山工業高等学校では校舎の老朽化に伴う改築や工事が増加し



第4図 調査区の位置と構内座標の設定 (1/2,500)

第3章 発掘調査の概要

ていくことが予想された。そこで、平成6年度の発掘調査で、岡山工業高等学校の構内には、今後の埋蔵文化財調査に対応するために、個々の調査区や遺構が相対的な位置で示せるように、構内全域を国土座標にあわせて独自に構内座標系を設定することになった（『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125 1998年 5頁）。今回の発掘調査においても、基本的にこの座標系にしたがって、各個別の遺構等の報告を行う。ところが、この座標系の採用にあたり、前回の報告で誤記があったため、ここで改めて座標系の概要について述べておく。

この座標系は、岡山工業高等学校の敷地内を国土座標（日本測地系）にあわせて、 $X=-147,370$ 、 $Y=-38,730$ を基点（1A）とし、10m方眼で、西から1～31、北からA～eのグリッド線を設定するものである。グリッド名で使用する場合は北西優位とする。なお、現在、国土座標系における表示が、日本測地系から世界測地系に移行している。ただ、現時点においては、その移行期ということもあり、旧来から使用している日本測地系をもとに座標を組んでいる。ただ将来的には世界測地系に収斂されていくことも考慮し、世界測地系に基づく座標をも第4図に併記している。なお、平成6年度の全面調査以後におこなわれた主な調査とその位置は次のとおりである。

平成14年度 100周年記念会館試掘調査（岡山市教育委員会）…29C・22B区

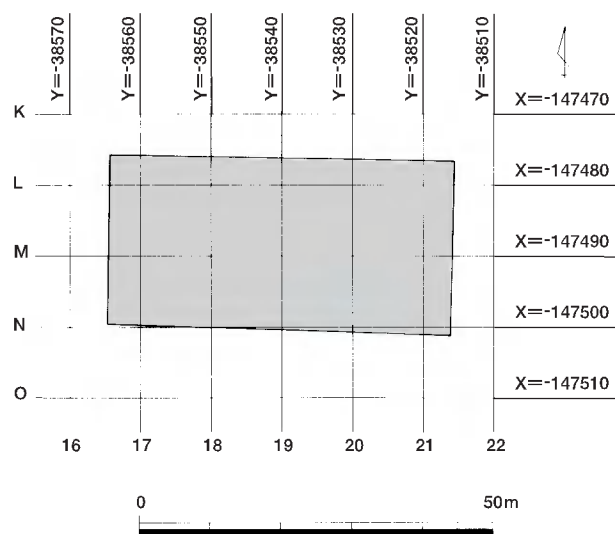
平成14年度 倉庫解体に伴う立会調査（岡山県教育委員会）…4K・4L区

2 調査区について

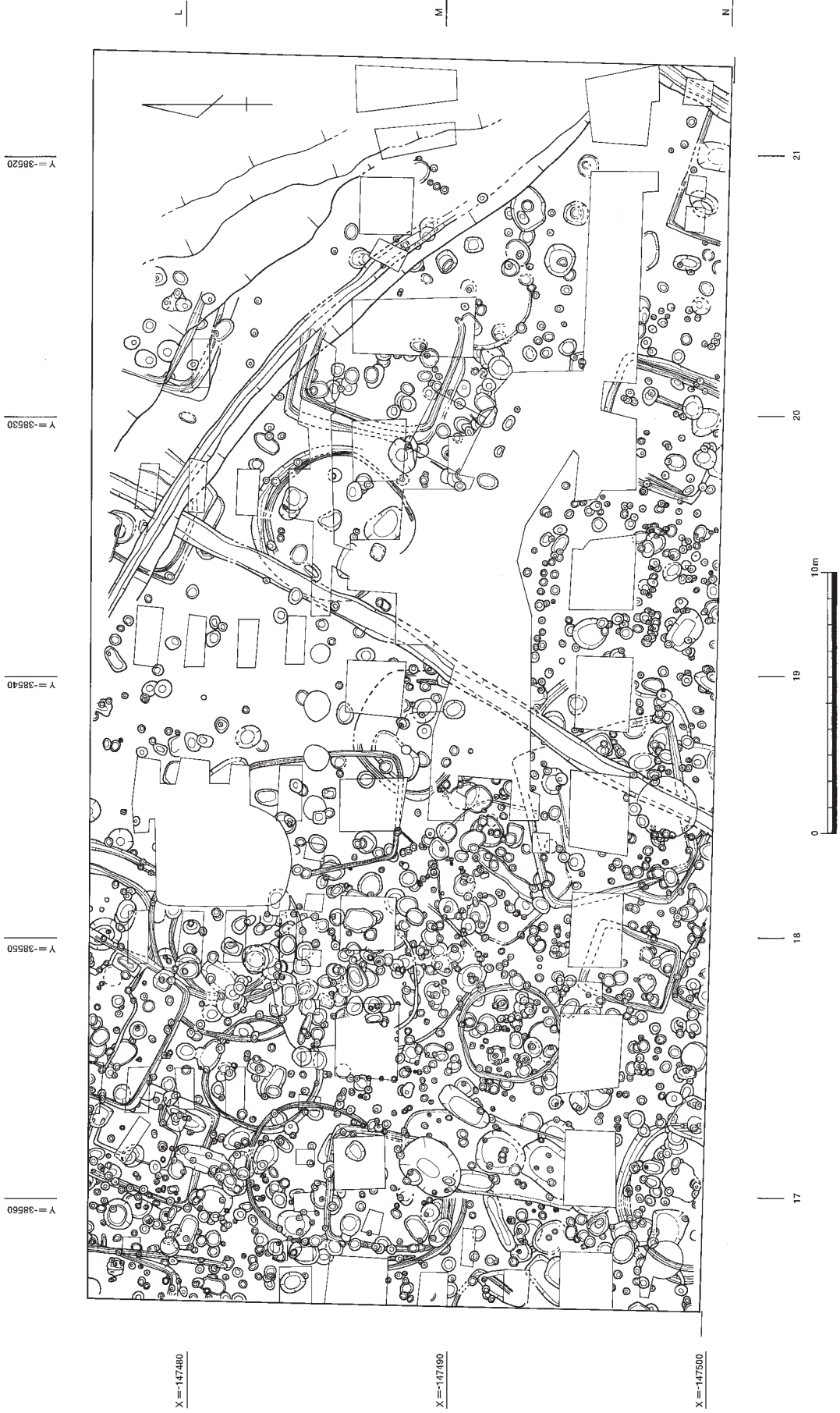
今回報告する調査区は、前述の座標系によると、16K～21N区の中に位置する。調査区は東西に約50m、南北に約20mを測る長方形を呈し、調査面積は1,080㎡である。調査区内は、当地に存在していた旧校舎の基礎等により破壊されている部分があったが、その他の部分は良好な状態で残存していた。その結果、今回の発掘調査では、最終的に弥生時代から中・近世にかけての遺構が多く検出された。しかし、詳細には、これらの遺構は主に弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中・近世に属することから、このような時期区分で以下の報告を行っている。

3 基本層序

伊福定国前遺跡における堆積土は、河川等により運搬されてきた土砂からなり、当地は河川の下流域に広がる三角洲状を呈する沖積平野に立地する。伊福定国前遺跡における沖積作用は、旭川から隣接する津島遺跡等を経由して流れてくる河道によるものと考えられるが、笹ヶ瀬川から京山の東裾を流れてくる河道の影響も考慮しておく必要がある。伊福定国前遺跡周辺では、過去にいくつかの発掘調査が行われ、当地の古環境を復元できる資料がある。昭和56年度におけるプール予定地の確認調査においては、奈良時代以降の水田遺構が検出され



第5図 調査区周辺の座標 (1/1,000)

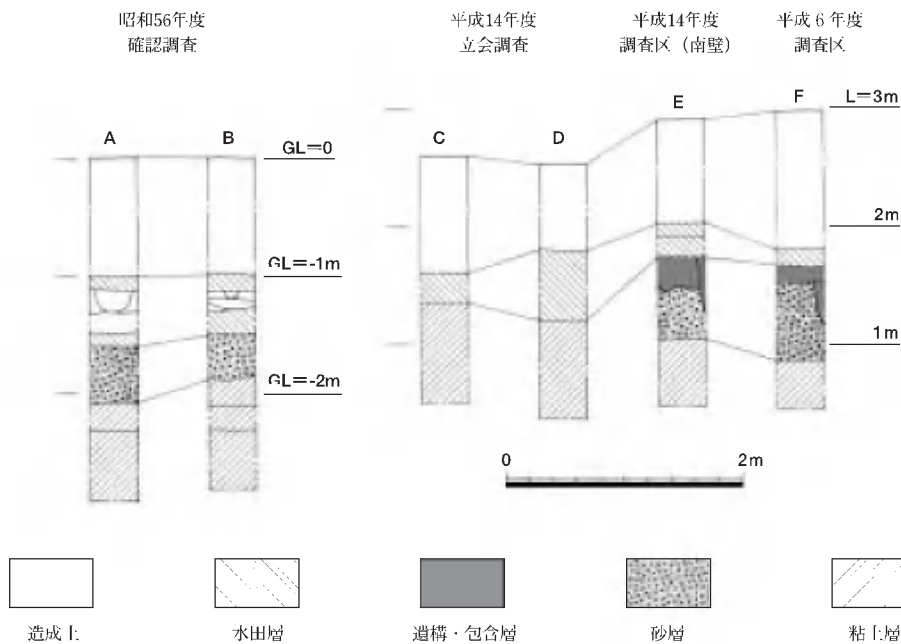


第6図 遺構全体図 (1/150)

ている。その後、平成6年の発掘調査で弥生時代後期以降の集落の存在する微高地が構内の東半分に広がっていることが確認され、つづく平成14年度の岡山市教育委員会による確認調査で構内の南東部にも同様の微高地が広がっていることが確認された。一方、平成14年の倉庫解体に伴い構内の西端部で立会調査が行われたが、当地は旧河道あるいは湿地の様相を呈していたことから、構内の東半部の微高地は、ちょうど運動場の中までしかのびてこないことが推測された。このことから、今回報告する調査区は、おそらく隣接する上伊福遺跡から広がる微高地の西端部に位置することが想定され、岡山平野での弥生集落の中でもっとも下流に位置する集落のひとつであることが判明した。これらの成果を踏まえ、今回の発掘調査において、残存状態のよかった調査区南壁の土層断面を標高約50cmの高さまで掘り下げて、土層の観察、土壌のサンプルの採取および花粉等の微化石の分析をおこなった。その結果、伊福定国前遺跡の堆積層からおよそ次のことが明らかになった。

今回調査した最下層（119層）は粗砂を多く含む標高約50cmの層であるが、珪藻分析から海成層上限付近で多産する種が認められたことから、感潮河川域あるいは河口干潟のような堆積環境が考えられる。ところが、標高約80～90cmに位置する117層付近では、河川氾濫をうける氾濫原あるいは後背湿地のような堆積環境へと変化している。この117層と118層では放射性炭素年代測定から2940±40、2760±60B.P.という年代を得ており、この時期が当地における堆積環境のひとつの画期であるといえる。この年代は、津島遺跡の弥生時代前期の水田層の堆積物から得られた年代に近く、この両層は弥生時代前期の堆積上である可能性が高い。その後、標高1.5m付近までは不安定な後背湿地や氾濫原であったが、遺構の基盤層となっている標高140cm付近の100層以降になって当地が本格的に離水することになる。その後、この土地に人々が居住を開始することになるが、本遺跡での遺構の出現は伊福・弥・後Ⅲ期であることから、当地が安定した土地になったのは弥生時代後期に入ってからと推測できる。その後、当地は弥生時代から中世にかけて集落が営まれるが、近世以後、水田としての利用が想定される。

(金田)



第8図 土層柱状模式図相関 (1/60)

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物

1 弥生時代後期から古墳時代前期の概要

今回、発掘調査をした調査区では、弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺構として、竪穴住居41軒、井戸3基、土器棺墓2基、土壙約120基、ピット約650個を検出することができた。これらの遺構は、主に弥生時代後期後半期から古墳時代前期の間に集中して存在しており、この伊福定国前遺跡の集落変遷の中でもっとも遺構密度の高い時期となっている。これらの遺跡を厳密に弥生時代と古墳時代に区別することは容易ではないため、ここでは一括して弥生時代後期から古墳時代前期の遺構として掲載するが、以下、時期別の概要を述べる。

弥生時代後期に属する遺構として、ここでは竪穴住居23基、井戸3基、土器棺墓2基、土壙89基、柱穴5個を報告している。伊福定国前遺跡での本格的な集落の出現は伊福・弥・後Ⅲ期にさかのぼる。この時期の遺構としては竪穴住居10、井戸3基、土器棺1基、土壙39基を掲載している。この時期の竪穴住居の平面形はすべて円形であり、径3.40～5.58mのものがある。全体的に埋土が基盤となる土層とよく似ていたり、切り合いなどで輪郭が検出しにくかったりと、検出に困難を極めた住居が多い。しかしながら、住居の部分の柱穴にはいわゆる礎板と呼ばれる柱の基礎構造の痕跡が明瞭に観察できるものがあり、当時の建築技法を解明するうえで貴重な資料が得られた。井戸はいずれも素掘りであった。また、土壙の中には多量の上器が出土するものがあった。なお、弥生時代後期に属する遺物で特筆すべきものとして、土壙33で出土した石杵、井戸3で出土した鉢などがあり、いずれも朱が付着していた。伊福・弥・後Ⅳ期に属する遺構として竪穴住居13軒、土壙47基、土器棺1基がある。この時期になると円形の住居に加えて、方形の住居が出現してくるが、この時期の方形の住居で残存状況が良好なものは少ない。この時期の住居の柱穴にも礎板が多くみられるが、中には長さが約55cmにもおよぶおおきな木材を使用するものが散見される。

古墳時代前期に属する遺構として、ここでは竪穴住居18基、土壙11基、柱穴3個を報告している。竪穴住居は方形を中心とするもので、中には削平されているものもあったが、全体的に良好に残存しているものが多かった。竪穴住居19では床面に敷石がみられたほか、竪穴住居19・20では方形土壙など住居内部の構造がよくわかる遺構も検出された。また、竪穴住居内から多くの土器が出土した。竪穴住居の柱穴には、弥生時代に引き続き、礎板がみられるものも存在したが、礎板が存在しない柱穴もみられたことから、礎板といった柱基礎構造の退化現象が想定できる。竪穴住居はおおむね伊福・古・前Ⅱ期頃まで継続して営まれており、その後は第3節で述べる古墳時代後期後葉に属する竪穴住居42まで見ることはできない。調査区の北東から南西にかけて流れている溝2は、その形態から人工的に掘削された流路である。この時期に属する遺物で特筆すべきものとして、土壙94で出土した土器の一括資料がある。土壙94では在地の系譜とは異なる土器群が出土している。

以上、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのこの時期は、この遺跡の最盛期にあたる。この時期の遺構は、その主軸が、真北よりも約10～30度東にふった位置に集中していることから、地割など、土地に対する何らかの規制があったことをうかがわせる。

(金田)

Y = -39520

Y = -39530

Y = -39540

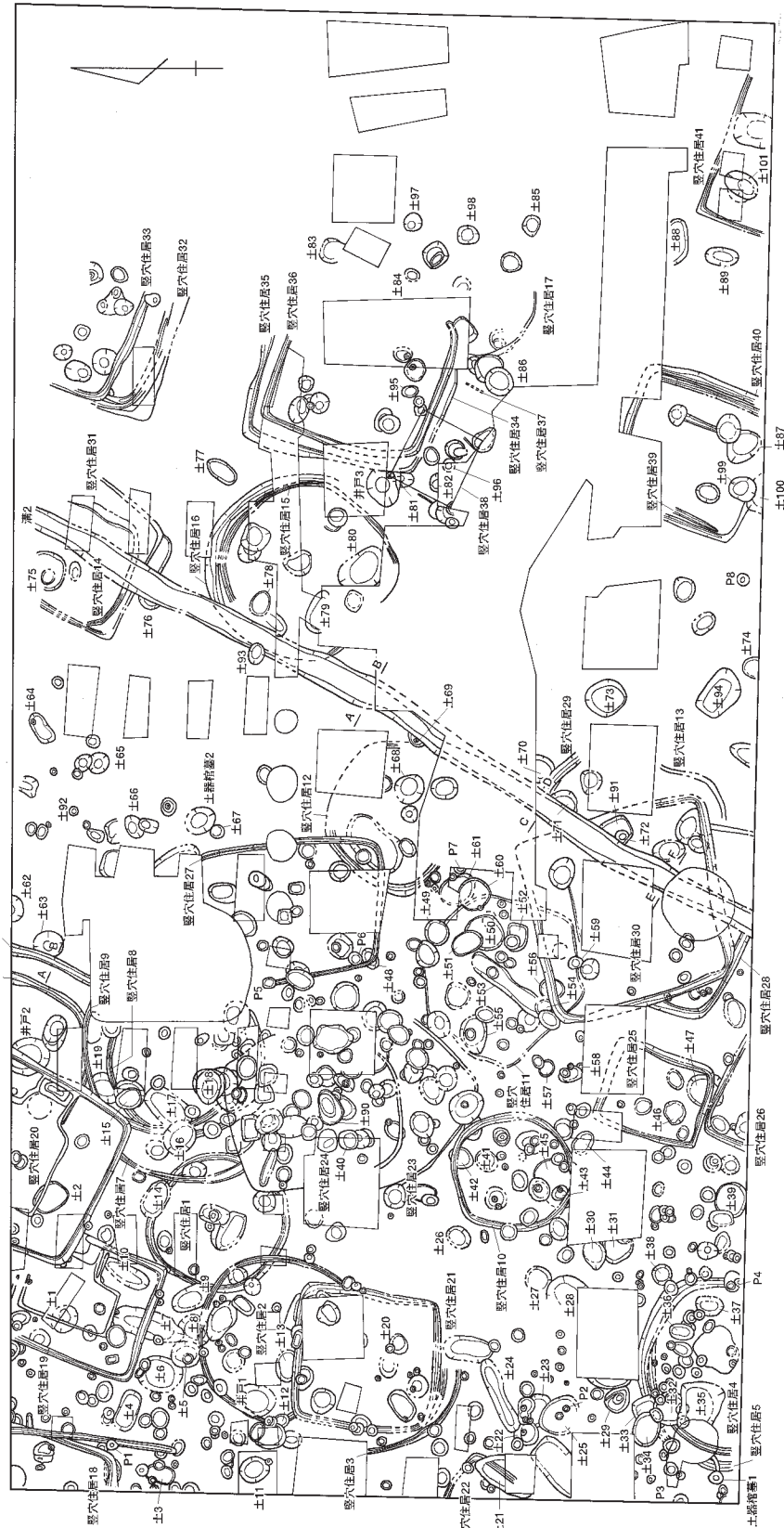
Y = -39550

Y = -39560

X = -147480

X = -147490

X = -147500



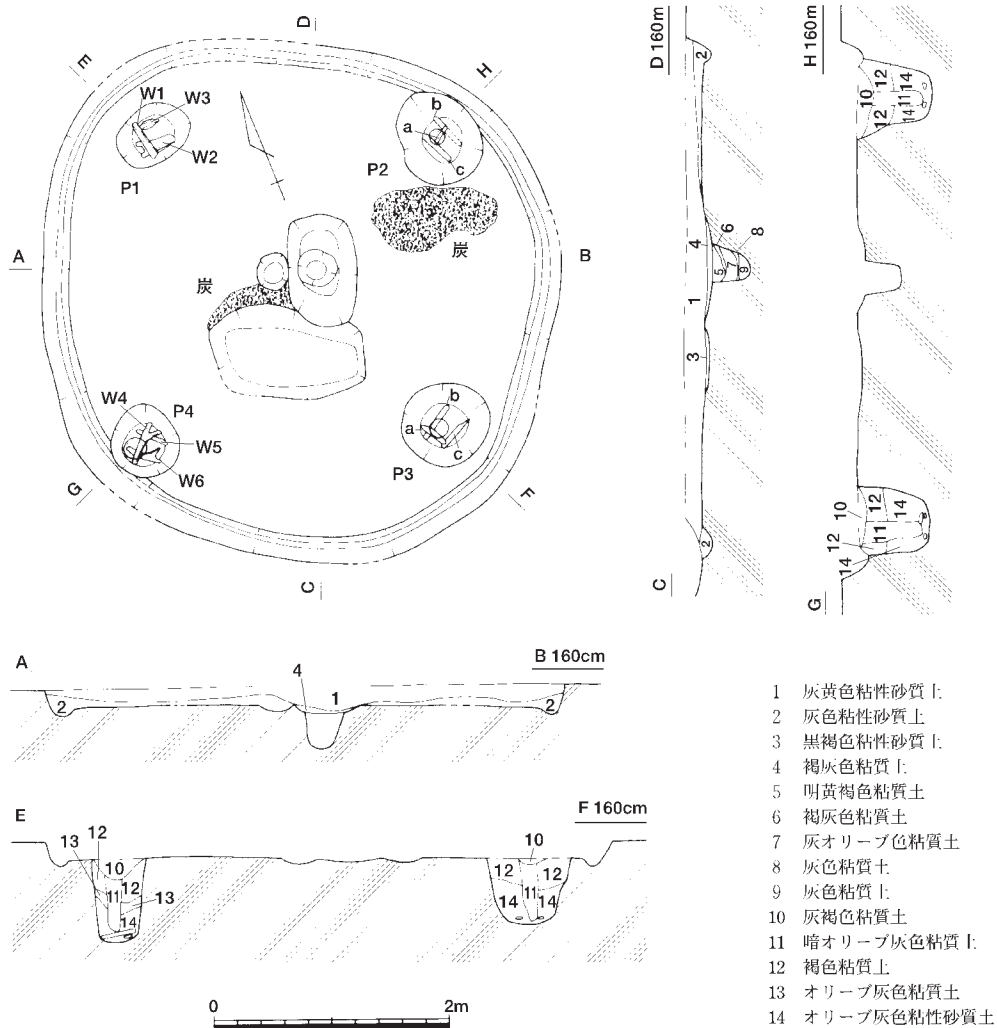
第9图 弥生時代後期・古墳時代前期遺構全体图 (1/150)

2 竪穴住居

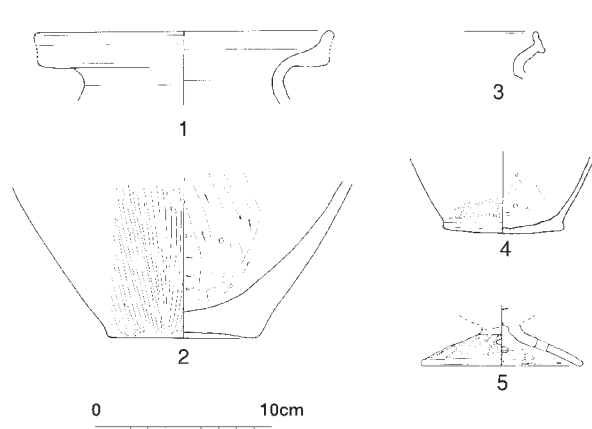
竪穴住居 1 (第10・11図、図版2・19・38)

17L区の北側中央で検出した住居で、東側を竪穴住居7、南東側を竪穴住居24、南西側を竪穴住居2に切られている。埋土は地山土と類似していて、後出する遺構の埋土とは一見して異なる。

竪穴は、長軸450cm、短軸425cm、深さ16cmの円形をなし、面積は14.2㎡を測る。海拔128cmにある床面の周囲には幅14cm、深さ10cmの壁体溝をめぐらせており、その中央には径34cm、深さ33cmを測る円形のピットと長さ123cm、幅88cmの長方形をなす土壌が検出された。ピット内は地山土で丁寧に埋められており、その上面は94×58cmの範囲で浅く窪んでいた。長方形の土壌は北辺が土堤状に盛り上がり、深さ3cmと浅い土壌内には炭が薄く堆積していた。4本ある支柱は壁体に近い位置にあり、250~260cmを測る柱間はわずかに南北方向が長くなっている。支柱の掘り方は径48~83cm、深さ54~68cmの円形を呈し、径12~17cmほどある柱痕の下部には木材を使用した基礎構造が確認された。これは長さ30cm、径4cmほどの丸木を「H」字形に組んだもので、砂質の軟弱な基盤に掘り据えられた柱の沈下を防ぐ工夫と考えられる。

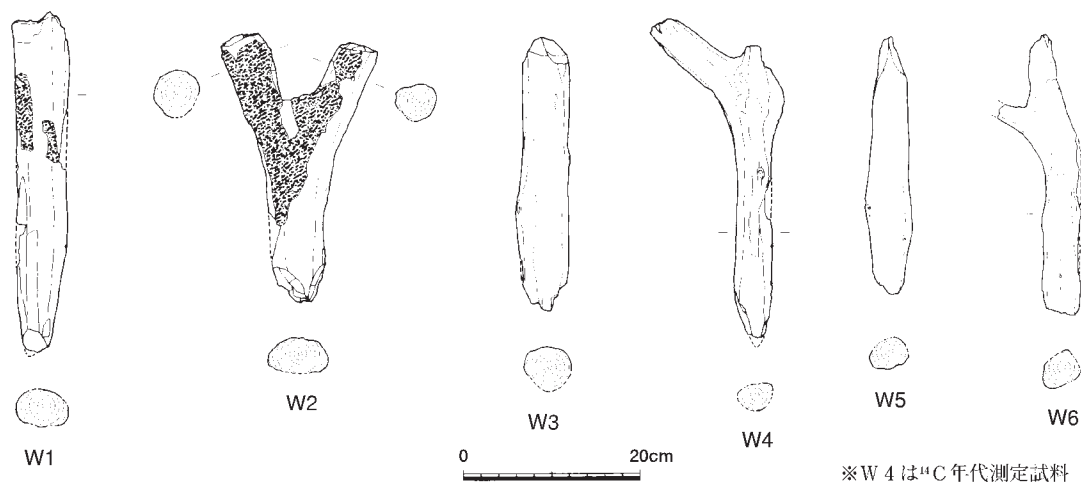


第10図 竪穴住居 1 (1/60)



出土遺物は弥生土器のみで、その量も少ない。1は口縁端部を上方に拡張する壺で、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリで調整する2の底面はわずかに凹む。3は上下に拡張した口縁端部に擬凹線をめぐらす甕で、平底の4は内面を薄くヘラケズリする。5は短い脚柱部をもつ高杯で、裾部に4つの透かし孔を穿つ。これらは伊福・弥・後Ⅲ期でも新相の特徴を備えている。

(亀山行雄)



第11図 竪穴住居1出土遺物 (1/4・1/8)

竪穴住居2 (第12図、図版2・19)

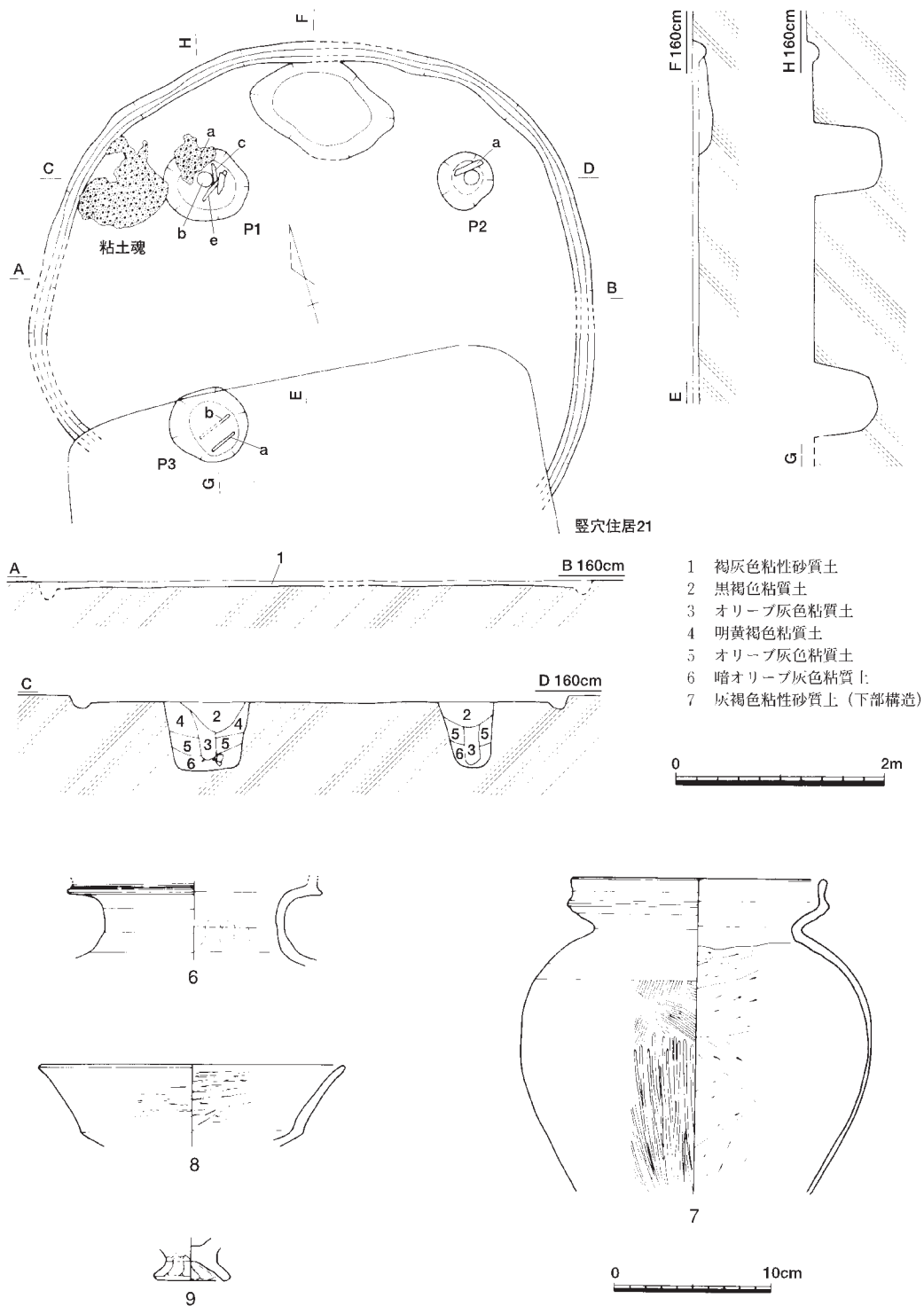
竪穴住居1の南西に重複して検出した住居で、16L区と17L区にまたがる位置にある。

南側を竪穴住居21や攪乱によって壊されているため正確を期し難いが、現状からして径508cmの円形をなすものと推定される。深さ6cmにある床面の海拔高は150cmで、今回確認された住居の中では竪穴住居3とともに最も高い。幅17cm、深さ7cmほどの壁体溝に囲まれた面積は20㎡あまりに還元され、中央穴等の施設は攪乱などにより確認できなかったものの、北西の壁際には88×85cmの範囲で灰白色をなす粘土塊が検出された。

主柱は4本と推定されるが、南東の1本については攪乱のため検出できなかった。壁体から75～85cmほど離れた位置に据えられた主柱間の距離は240～254cmで、その柱筋は竪穴住居1と近似する。径54～80cm、深さ62～66cmの円形をなす掘り方には径16cmほどの柱根が抜去された痕跡が認められた。また、その下部には竪穴住居1と同様に木材を組み合わせた基礎構造が検出された。木材の遺存が悪く詳細は明らかでないが、丸木を「H」字形に組んでいた可能性が高いP2・3に対し、P1では丸木が雑然と敷かれていた。

埋土からは土器が少量出土している。6は、屈曲する頸部から水平に開く口縁の端部を上方に長く拡張し多条の沈線を飾る丹塗りの壺で、備中南西部からの搬入品と見られる。7はヨコナデで調整し

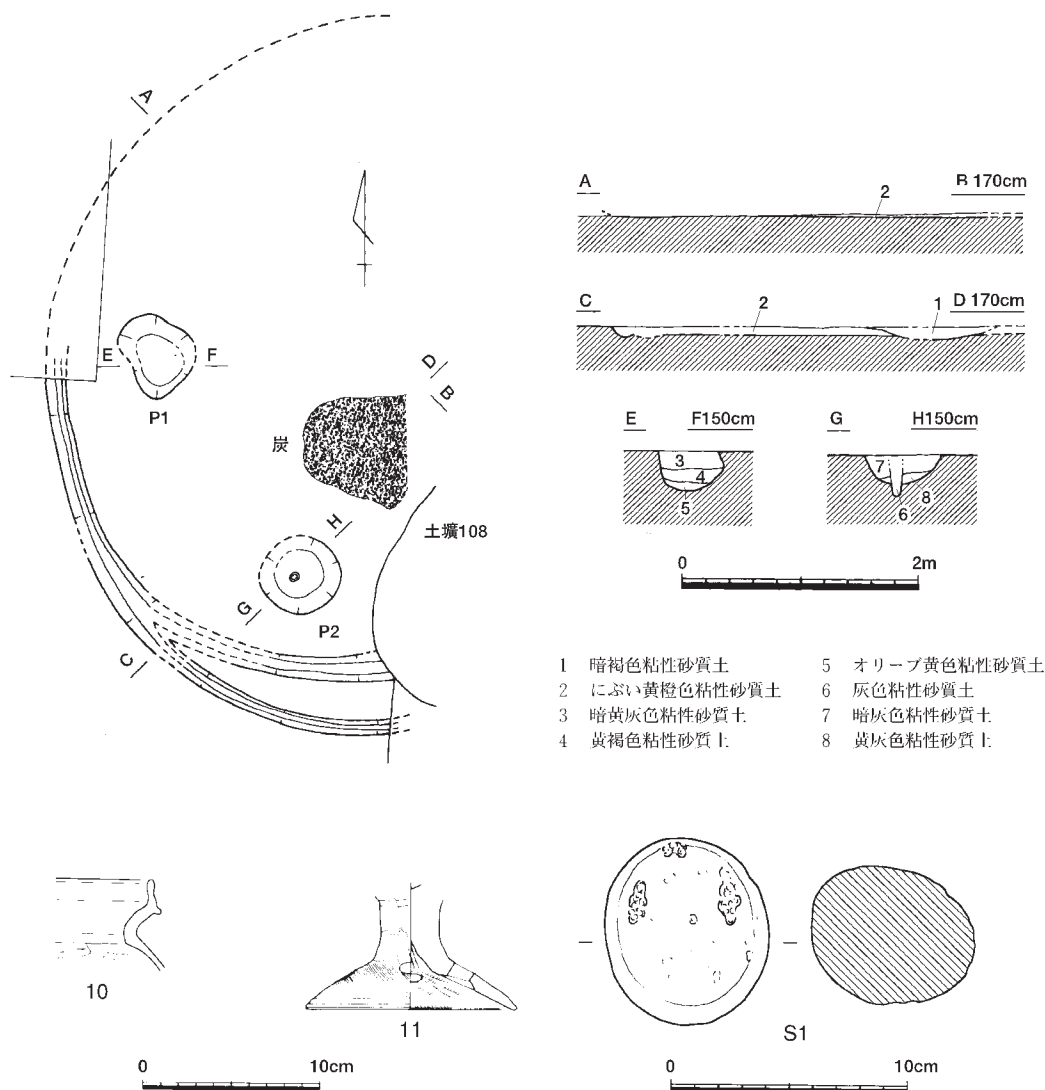
た短い複合口縁をもつ甕で、肩の張る体部は内面を右方向にヘラケズリする。高杯 8 は口径19.2cmを測る杯部で、伊福・古・前Ⅰ期まで下るものと思われる。このほか、径4.4cmを測る製塩土器の脚台部 9 が出土している。これらはやや新しい様相を示すものもあるが、住居の構造からして伊福・弥・後Ⅳ期の新段階と考えられる。 (亀山)



第12図 竪穴住居 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居 3 (第13図、図版 2)

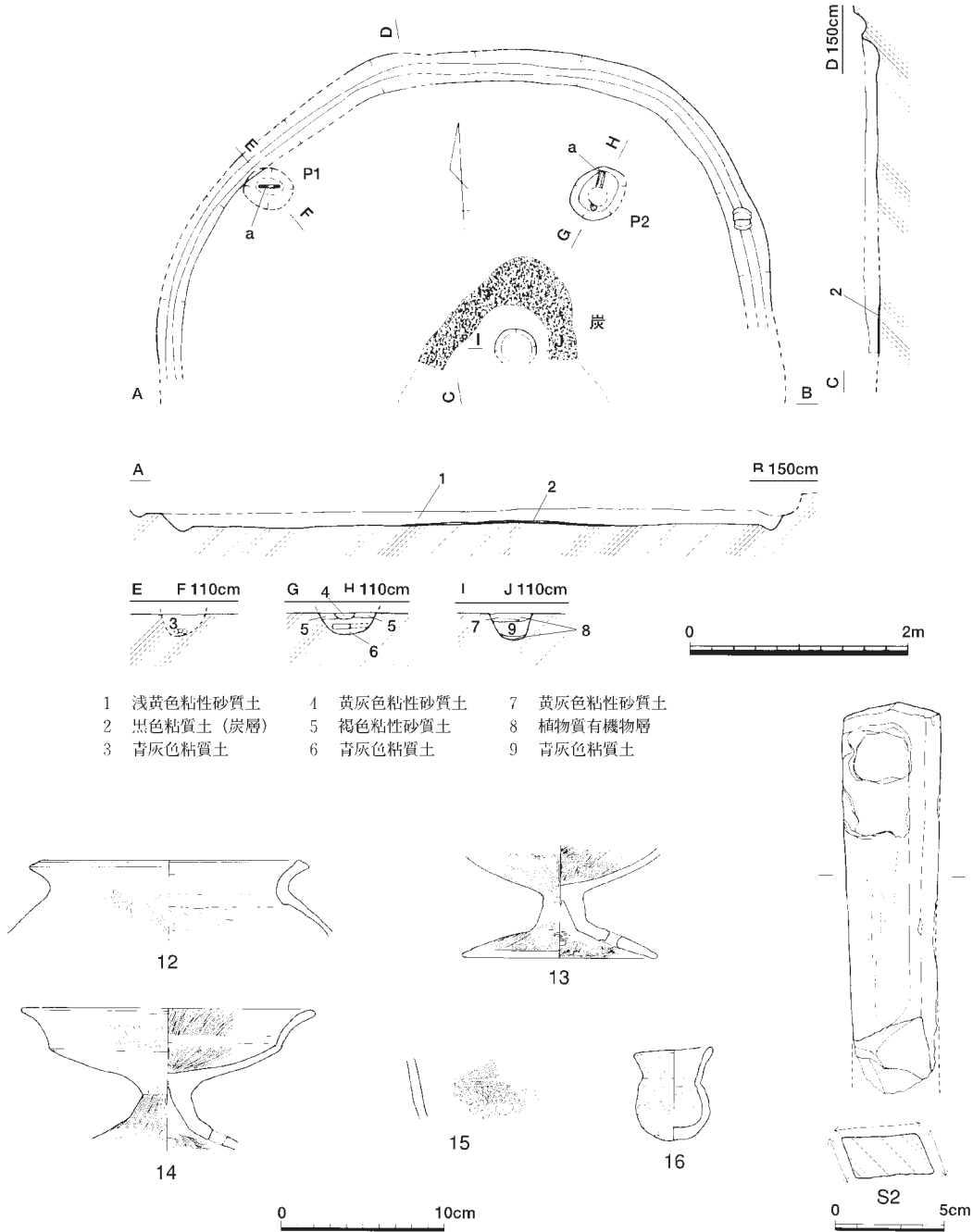
竪穴住居 3 は16L区に位置する。竪穴住居 2 および土壙108等の切り合いにより、四分の一程度しか残存していない。土層断面観察の結果、竪穴住居 3 は竪穴住居 2 および竪穴住居21より新しいと竪穴住居であると判断した。竪穴住居 3 は径約 6 m の規模をもつと推定される。残存している床面の周囲には壁体溝が巡っている。床面の中央付近にはおよそ長径 1 m の範囲で炭層が広がる。支柱穴は 2 基を確認したが、本来は 4 本柱であったものと推測できる。P 1 は長径68cm、短径60cmを測る不整形の柱穴である。P 2 は径66cmを測る円形の柱穴である。P 2 で柱痕がみられたものの、いわゆる礎板などの基礎構造は検出できなかった。竪穴住居 3 からは弥生土器等が出土したが、いずれも破片であった。10は甕である。11は高杯脚部であるが、やや粗雑なつくりであるが、精製した粘土を使用している。S 1 は叩き石である。角閃紛岩製で重さ428.37gを測る。これらの出土遺物から、竪穴住居 3 の時期は伊福・弥・後Ⅳ期と考えられるが、下層の竪穴住居21が伊福・古・前Ⅰ期に属する可能性があるため、ここでは伊福・古・前Ⅰ期にまで下げて考えることとしたい。(金田)



第13図 竪穴住居 3 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居 4 (第14図、図版3・19・24・37)

竪穴住居 4 は調査区南西隅の16M区に位置する。調査区南壁の調査中に炭層を 2 面検出したことから、周辺を精査したところ、2 軒の竪穴住居を検出した。下層のものを竪穴住居 4、上層のものを竪穴住居 5 として報告している。竪穴住居 4 の埋土は基盤層と非常によく似た浅黄色粘性砂質土で、住居の検出には困難をきわめた。特に住居の西側は、攪乱によるグライ化の影響もあり、不明瞭な点多かった。このような調査状況ではあったが、竪穴住居 4 は、径5.4mを測る円形の住居であることがわかった。周囲には壁体溝を巡らしていた。床面中央には南壁調査時に検出した炭層がひろがって

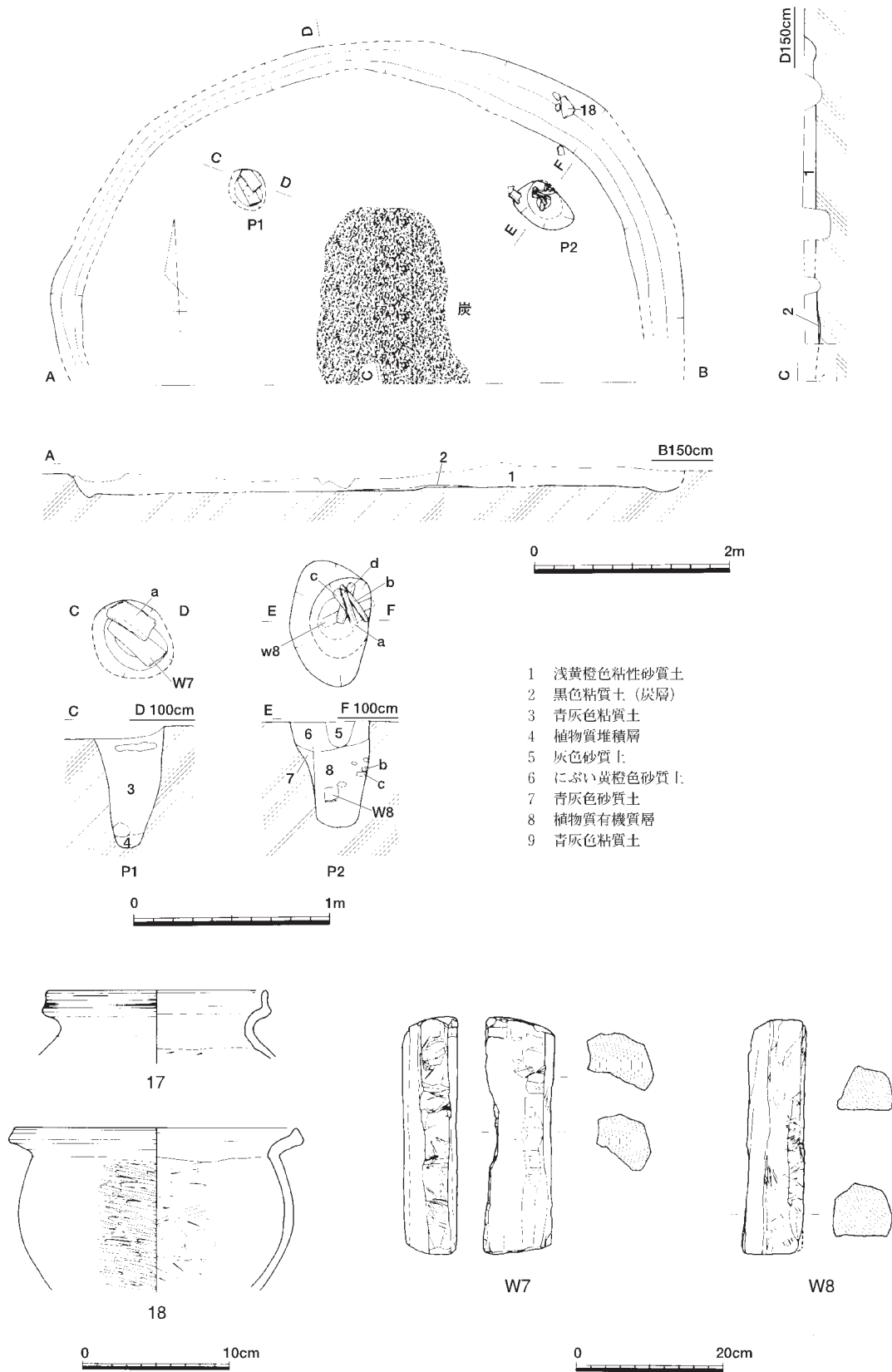


第14図 竪穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

いたが、炭層はちょうど中央穴付近では見られず、中央穴を中心とした環状に広がっていた。中央穴は径57cm、深さ23cmを測る円形の土壌であるが、埋土中と底面に植物質の有機物層が検出された。支柱穴は2本しか検出できなかったが、4本柱の住居と推定できる。これらの支柱穴は、ともに上層の竪穴住居5の建て替え時に、ほぼ同じ場所に柱穴が設けられたことから完全には残っていない。P1は長径46cmほどの柱穴であり、床面からの深さは30cmを測る。柱穴内には柱痕跡はみられなかったが、礎板（P1-a）が存在していた。礎板（P1-a）は、推定長約20cmを測る。残存状況はよくなかったが、その樹種はシイ属との報告を得ている。P2は長径53cm、床面からの深さ28cmを測る柱穴であり、柱痕が確認できた。底部付近に礎板が検出された。礎板（P2-a）は残存長35cmを測り、残存状況は必ずしもよくなく、木材の芯部分を残すのみであったが、クスノキ科の木材を利用したものであった。竪穴住居4からは弥生土器等の遺物が出土したが、出土量は多くない。12は甕である。13・14は高杯である。14は壁体溝付近で出土した。15は精良粘土を使用した土器片であるが、器種は不明である。上半部に鋸歯文、下半部に竹管文とその上下に線刻による模様が描かれている。16はミニチュアの手づくね土器である。S2は砥石である。頁岩製である。なお、竪穴住居4の時期であるが、上層の竪穴住居5が伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられること、また、竪穴住居4から出上した遺物が、伊福・弥・後Ⅲ期（後半）と考えられることから、当該期に属すると判断できよう。（金田）

竪穴住居5（第15図、図版3・20・38）

竪穴住居5は、竪穴住居4の上層で検出された復元径約6mの円形の住居である。竪穴住居5の南半分は調査区外のため未調査であるが、復元で床面積28.26㎡を測ることができる。竪穴住居5は竪穴住居4を改修するかたちでつくられた竪穴住居と考えることができ、そのため、平面プランおよび支柱穴の位置については、およそ下層の竪穴住居4のものを踏襲している。しかし、実際は、平面プランについては竪穴住居4より外側にひとまわり大きく拡張している。床面の中央付近では炭層が、およそ2.0×1.3mの範囲に広がっていたが、中央穴に相当するものは検出されていない。支柱穴は2基を検出しているが、4本柱の竪穴住居と推測できる。いずれの柱穴からも、いわゆる礎板と呼ばれる柱の基礎構造が検出されている。P1は径40cm、深さ90cmを測るもので、底に礎板（W7）が据え付けられている。W7は長さ32.1cmをはかる部材（ケヤキ）で全面に工具による加工痕跡がみられる。部材の片側中央付近をえぐっている。W7の下にはちょうどおがくずのような植物質有機物が検出され、分析を依頼したところ稲の籾殻であるとの同定結果を得た。柱穴の底に柱の沈下防止のための工夫として籾殻を入れたものと推測できる。また、P1の上面には板状の木材がみられた。木材の残存状況は極めて悪く、木取りなどは不明であるが、ツブラジイとの樹種同定結果を得ている。P2は長径66cm、短径41cmの柱穴である。柱穴には柱の基礎構造として使用されたと推測される少なくとも6本の木材が検出された。その中で、W8が最下部に設置されており、柱の基部を支えていたものと思われる。W8は芯去材を削り出した部材（ケヤキ）を利用している。その他の部材はW8よりやや上方に設置されており、柱を横から支えていた補助的な役割をもつ部材と思われる。その中で、残存状況のよかったP2-a・bについてはともに割材を利用した木材で、樹種はそれぞれヤブツバキ、散孔材であった。また、W8の下から、同定をおこなっていないが、P1の植物質有機物と同様のものが検出され、植物質有機物を礎板の下に敷いていたものと考えられる。竪穴住居5からは床面および埋土中から弥生土器が出土しているが、出土量は少ない。これらの出土遺物から竪穴住居5は伊福・弥・後Ⅳ期の時期に築造されたものと考えられる。（金田）



- 1 浅黄橙色粘性砂質土
- 2 黒色粘質土 (炭層)
- 3 青灰色粘質土
- 4 植物質堆積層
- 5 灰色砂質土
- 6 にぶい黄橙色砂質土
- 7 青灰色砂質土
- 8 植物質有機質層
- 9 青灰色粘質土

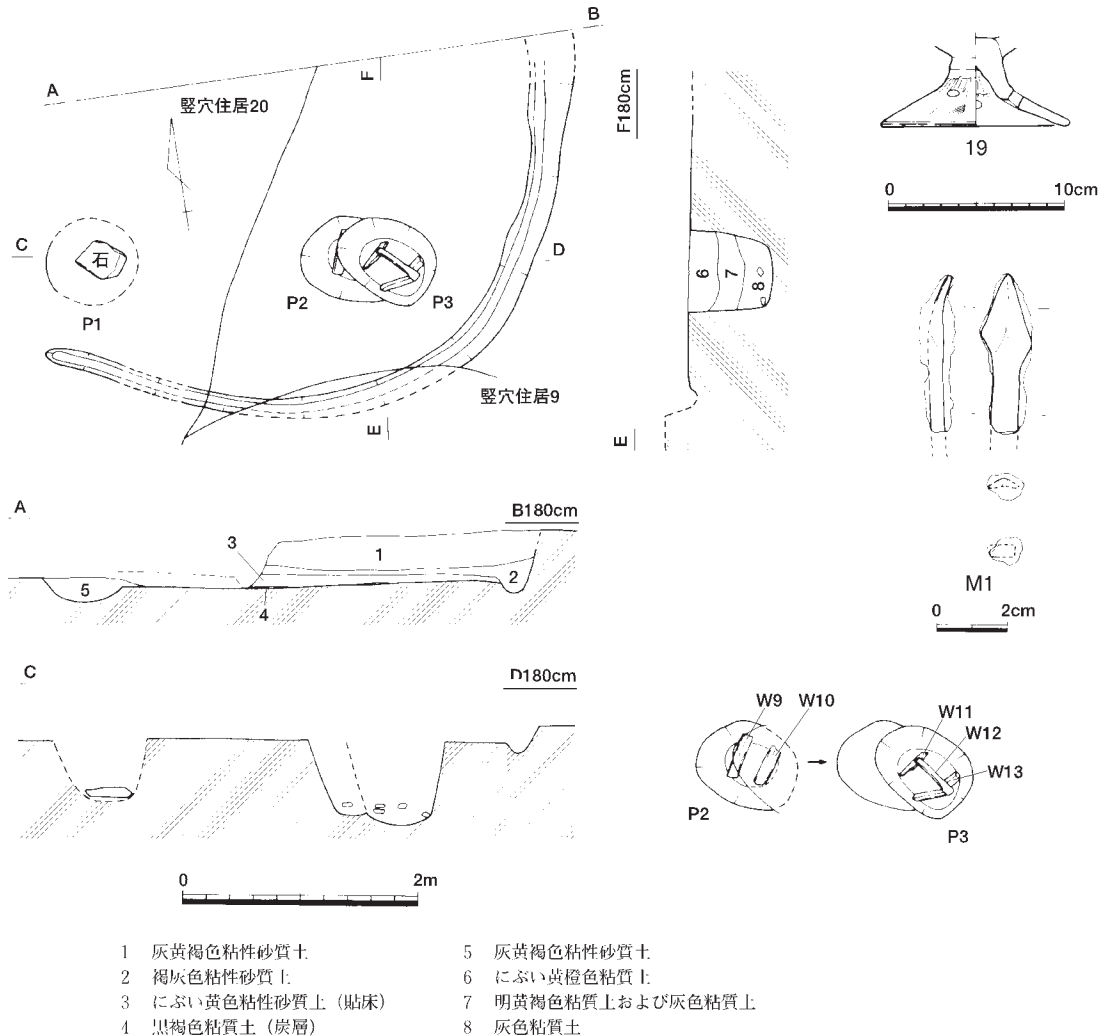
第15図 竪穴住居5 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4・1/8)

竖穴住居 6 (第16・17図、図版3・19・37・38)

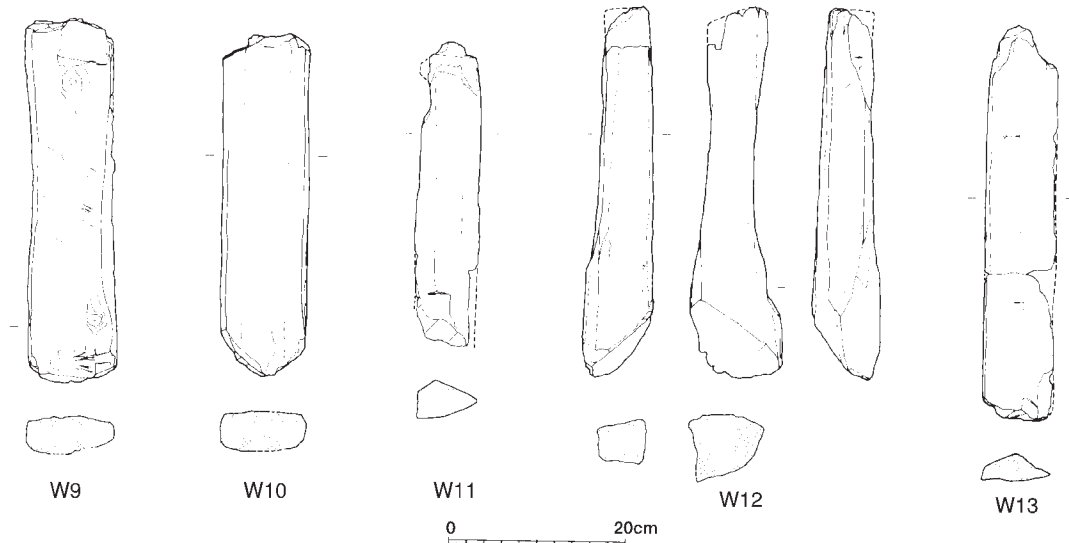
18K区の南西で検出した竖穴住居で、竖穴住居1の北東4mに位置する。調査区の北にかかって検出したもので、西側を竖穴住居20、南側を竖穴住居9に切られている。このため、全形を知る手掛かりに乏しいが、残存部分から推して径480cm、面積18㎡ほどの円形になるものと思われる。

周囲に幅27cm、深さ13cmの壁体溝をめぐる床面は、上下2面を確認した。海拔122cmを測る下層の床面は中央に向かってわずかに窪み、炭層が薄く分布していた。これに伴う主柱は2本を確認したが本来は4本で構成されたものと思われる。径65~87cm、深さ40~58cmを測る掘り方の底には他の住居と同様に柱根を支える構造が認められた。P2では長さ19~21cm、幅10cmほどの木材W9・10が平行に置かれていたが、P1では長さ34cm、厚さ8cmの板石が水平に据えられていた。P1・2の距離は216cmを測り、その方向は竖穴住居4・5と近似する。上層の床面は下層の床面に厚さ10cmほどの地山土を貼ったもので、これに伴うP3はP2の東側を壊すように掘りこまれている。その底面にはやはり「H」字形に配された木材W11~13が検出されたが、加工度はW9・10に比べて低い。

出土遺物は少なく、3つの透かし孔を飾る高杯の脚部19と鉈の刃部M1を図示した。これらの遺



第16図 竖穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)



第17図 竪穴住居6出土遺物(1/8)

物から時期を判断するのは難しいが、埋土の上層から出土した凹線をめぐらす複合口縁の甕や、重複する井戸2や竪穴住居9との切り合いから伊福・弥・後Ⅳ期でも古い段階を想定したい。(亀山)

竪穴住居7～9(第18・19図、図版4・20・24)

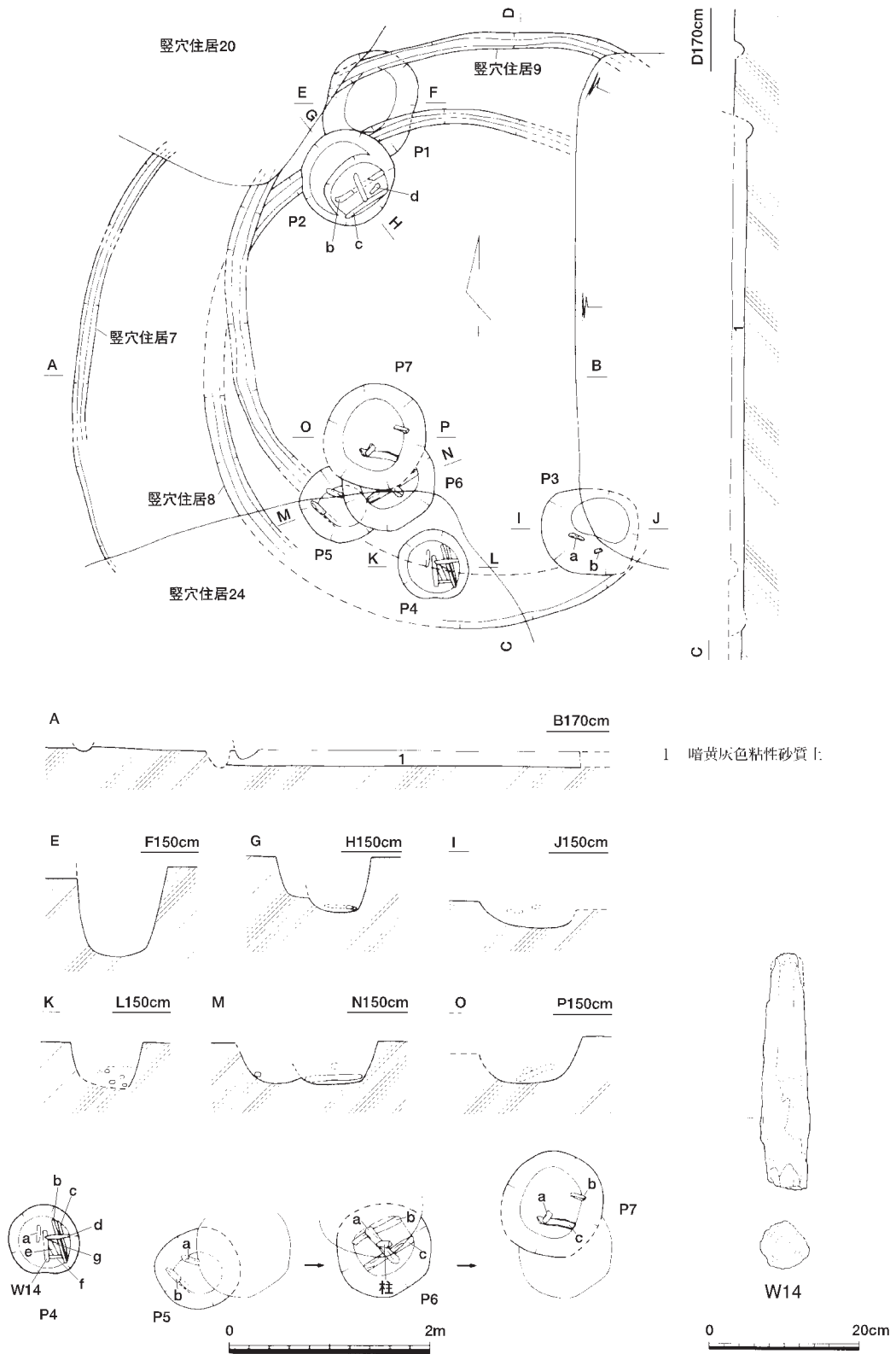
竪穴住居6の南に重複する住居で、17L区の北東から18L区の北西にかけて検出した。

竪穴住居7は竪穴住居1の上層につくられており、その北側は竪穴住居20、東側は竪穴住居9、南側は竪穴住居24に切られていて、床面の周囲をめぐる幅17cm、深さ5cmの壁体溝を長さ402cmにわたって確認したに過ぎない。このため、全形については不明な点が多いが竪穴住居9のP2と重複して検出したP1はこの住居に伴う可能性が高い。P1は長径110cmの楕円形で、深さは90cmを測るが、他の住居で見られたような柱の基礎構造は確認できなかった。

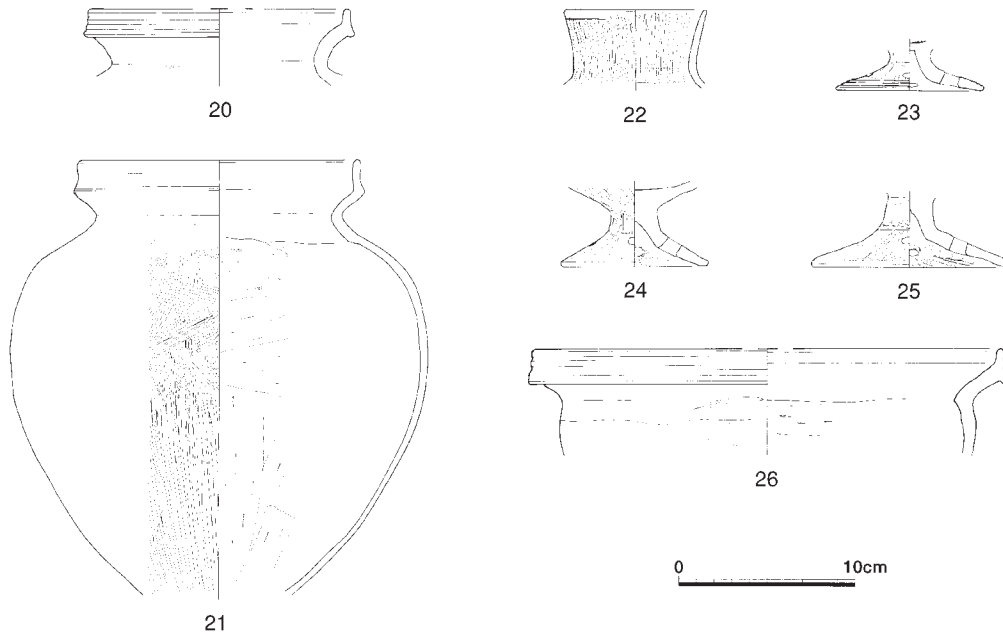
竪穴住居8は竪穴住居7の東側を壊してつくられており、現状では径500cmの円形を呈する。床面は海拔132cmと竪穴住居7より20cmほど低く、周囲をめぐる壁体溝は幅23cm、深さ5cmを測る。19㎡あまりと想定される床面の中央には薄い炭層が広がり、方形をなすものと思われる浅い窪みも認められたが、その規模については明らかにできなかった。この住居に伴う主柱はP2・3・5の3本を検出したが、本来は4本で構成されるものと思われる。掘り方は径78～95cmの円形を呈し、深さ45～55cmの底面には複数の木材が認められたが、概して保存が悪く詳細については明らかでない。柱間は南北310cm、東西260cmで、その方向はN-3°-Eを測る。

竪穴住居8の上に重複して検出した竪穴住居9は、径530cmの円形に復元される。幅21cm、深さ5cmの壁体溝で囲まれた面積は21㎡ほどあり、その海拔高は144cmを測る。中央施設については確認できなかったものの炭層の広がり確認された。この住居の主柱は、推定される4本のうちP2・7の2本で、P2は竪穴住居8と重複している可能性がある。これらの掘り方は径95～105cm、深さ45～54cmを測り、柱間は260cmある。

出土遺物は竪穴住居8の20・22～26、竪穴住居9の21があるが、竪穴住居7には図示できるようなものがない。竪穴住居8では短い頸部をもつ壺20や直口壺22、脚柱部の短い高杯23～25、複合口縁をも



第18図 竪穴住居 7～9 (1/60)・出土遺物 (1/8)



第19図 竪穴住居7～9出土遺物(1/4)

つ鉢26などがあり、伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。竪穴住居9の21は肩の張る体部をもつ甕で、短い複合口縁には櫛描き沈線をめぐらしており、伊福・弥・後Ⅳ期の新段階に比定される。(亀山)

竪穴住居10(第20図、図版4)

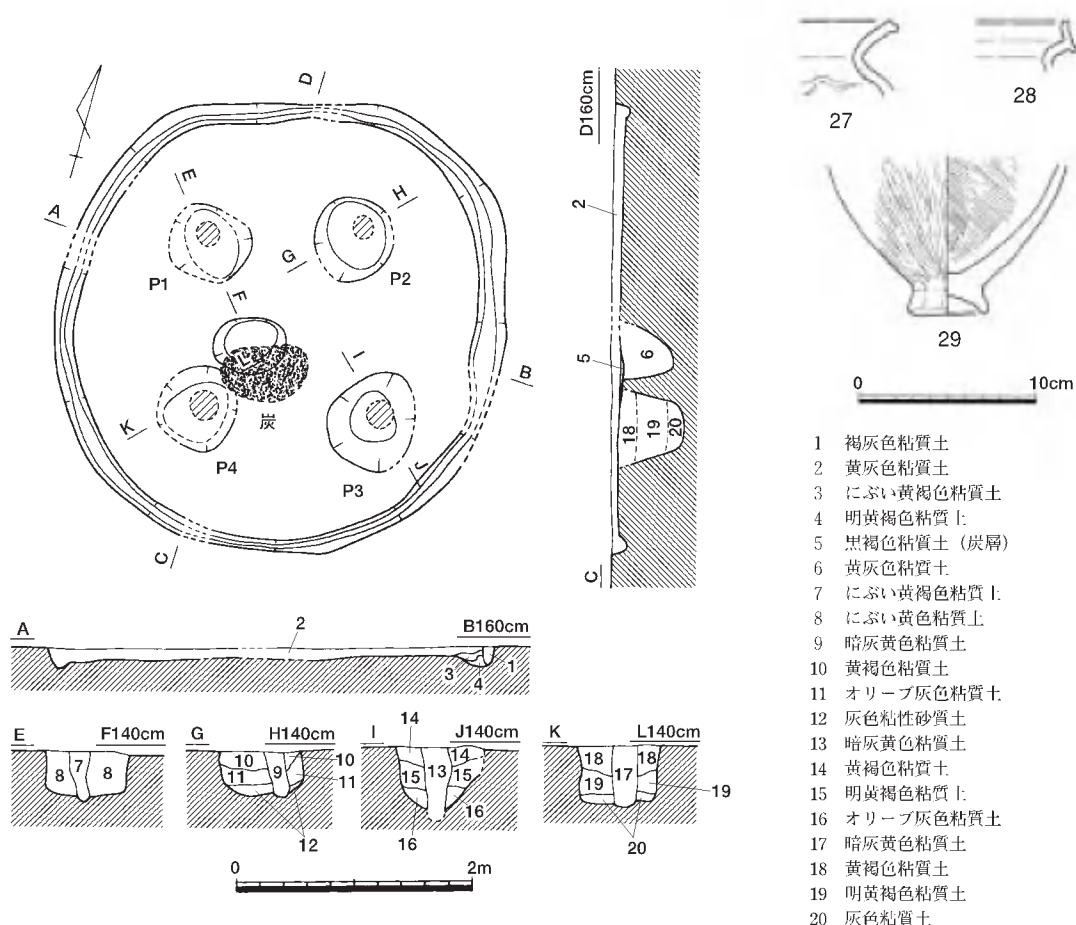
17M区の北側に位置する竪穴住居である。平面形は円形を呈する。規模は長軸367cm、短軸355cmを測る。検出面から床面までの深さは約10cmであり、残存状況は良くない。壁面には幅15cmの壁体溝が全周する。床面中央では、平面形が楕円形を呈する中央穴を確認し、規模は長軸61cm、短軸49cm、深さ43cmである。その南側では炭面が70×50cmの範囲で認められた。

主柱穴は4本であり、いずれも柱痕が確認された。柱痕の径は約25cmであり、柱穴の掘り方は径70～80cmを測る。柱穴内の埋土は基盤層と大差なく、その検出・掘り下げは困難であったが、P2～3の各柱穴では3つの層が水平に堆積していることを確認した。また柱穴底面を精査した結果、礎板は一切認められず、基礎構造を有していないと考えられる。

遺物は概して少なく、覆土から弥生土器の甕27～29が出土したに過ぎない。甕27は口縁部が「く」の字状を呈し、端部に擬凹線文を1条のみ配している。甕28は上方に拡張する口縁部を持ち、口縁端部に3条の擬凹線文を施している。29は台付鉢で、内面はハケメ、外面はヘラミガキで調整している。遺構の埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。(米田克彦)

竪穴住居11(第21図、図版4・20・21・24)

18M区の北西部に位置し、竪穴住居30に切られる。本竪穴住居は時期の新しい他の遺構によって切られており、残存状況は極めて良くない。そのため、平面プランの把握は困難を極めたが、断続ながら各壁面を確認し、一部で隅角部が約120～140°に開くことから、平面形は不整な六角形を呈すると考えられる。規模は長軸522cm、短軸480cmを測り、深さは23cmを測る。壁体溝は確認していない。床面のほぼ中央では径36cm、深さ10cmの中央穴を確認したほか、西半中央部では炭面が約300cm×150cmの広範囲で認められた。

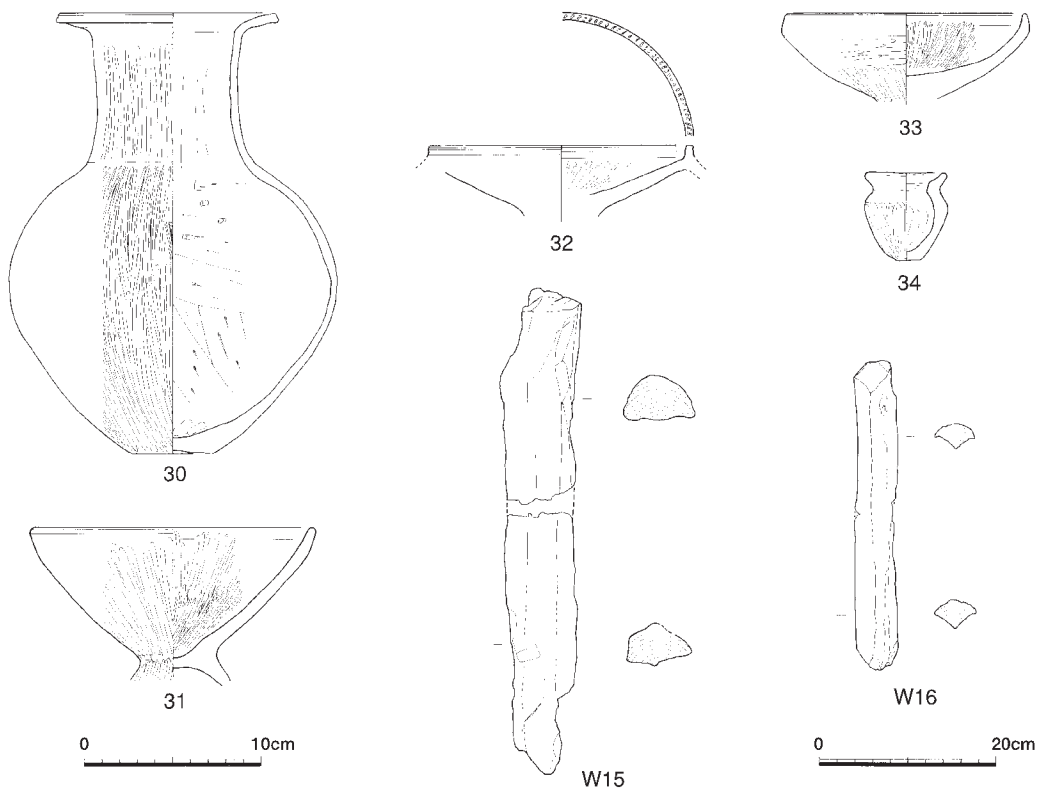
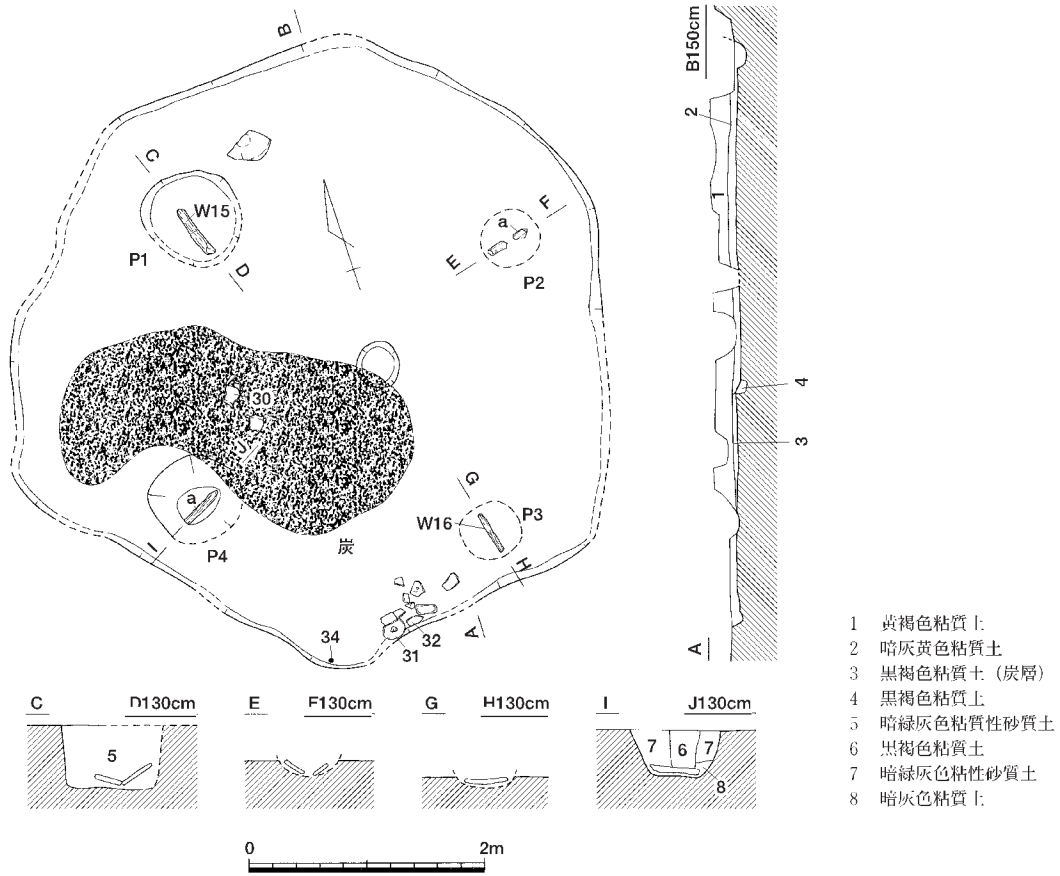


第20図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4)

支柱穴は4本を配している。各支柱穴の埋土は基盤層と同質・同色のものであり、その検出・掘削は困難を極めた。しかしながら、各柱穴の底面では礎板を1本ずつ確認することができた。P2・P3の掘り方の平面形・規模については把握することが困難であったものの、礎板の存在から、その地点が支柱穴であることはほぼ間違いない。礎板はいずれも長さ約40~50cm、径約10cmの丸太材を使用しており、礎板の主軸は壁面に対して直交する。礎板は、W15がタブノキの半裁材、W16はコナラ属コナラ節の割材を使用している。またP1・2内の礎板は、柱穴の重圧に耐えかねて折れたものと考えられる。P4の断面では礎板上方に柱痕があることを確認することができた。

遺物は床面北側で大形の壺底部 (非掲載)、中央部西寄りで壺30、南壁で鉢31、器台32、ミニチュア土器34がまとまって出土した。30~34はいずれも弥生土器である。30は長頸壺で、口縁端部が屈曲して直線的にのびる。外面の頸部以下は縦方向のヘラミガキ、頸部内面はシボリ、体部内面はヘラケズリで調整している。台付鉢31で、口縁部が直線的に伸び、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施している。器台32は受け部上面に突帯を巡らし、その上端に列点文を配している。高杯33は碗形の受け部を有し、口縁端部がわずかに上方に延びる。脚部は欠損している。受け部の外面は二方向のヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキによって調整されている。34はミニチュア土器であり、外面はヘラミガキ、内面はユビオサエの痕跡が残る。

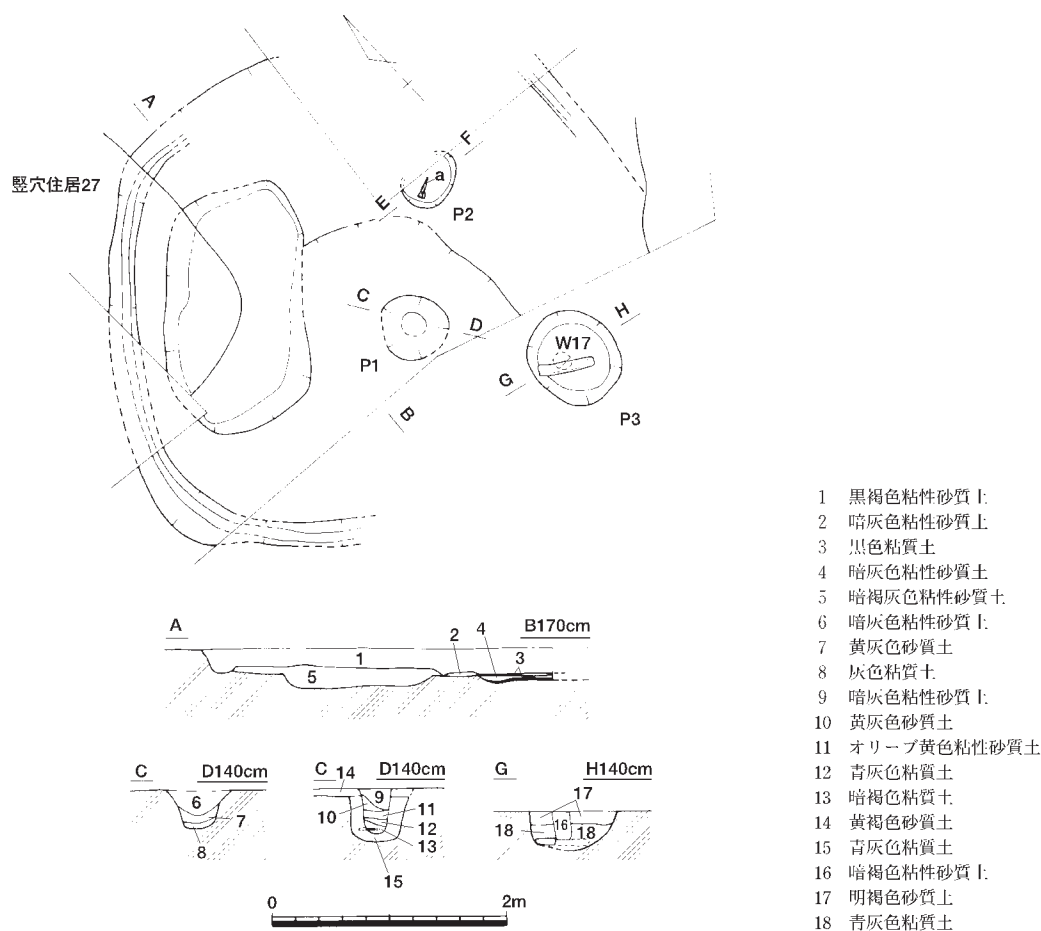
これらの遺物から、本竪穴住居の機能していた時期は伊福・弥・後Ⅲ期と捉えられる。(米田)



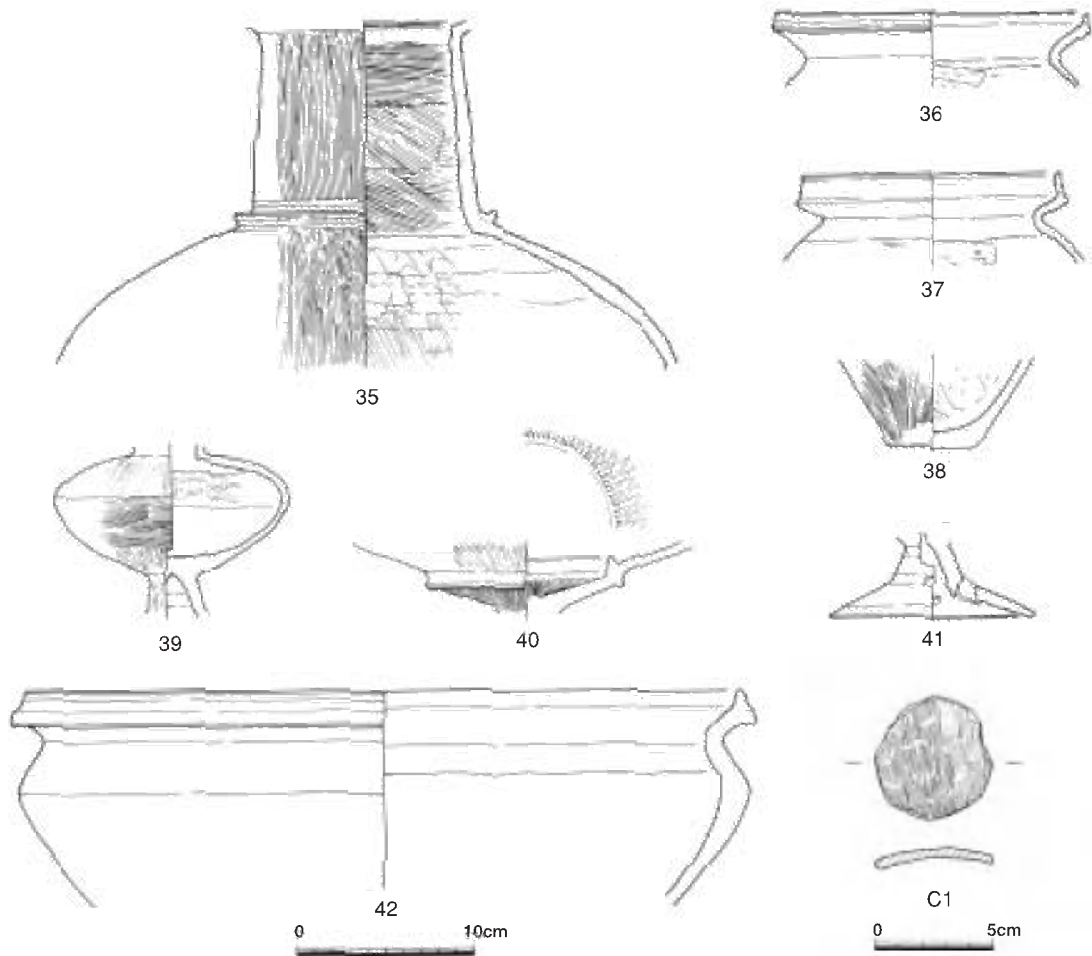
第21図 竪穴住居11 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/8)

竪穴住居12 (第22・23図、図版21・37)

竪穴住居12は18L区に位置する。竪穴住居12は攪乱により大半を破壊されている上に、西端を竪穴住居27に、東端を溝2により切られている。そのため、住居の平面形態には不明な点が多いものの、やや隅丸方形気味の円形で長軸約3.8mに復元できる。床面周囲には壁体溝がめぐらされている。床面中央には炭層の広がりが見られ、径約55cm、深さ約32cmの円形の中央穴が存在する。住居の東半部の床面は、この中央穴のある床面よりやや高くなっており、いわゆるベット状遺構が存在していることが確認できる。西側の床面下で長径2.2mの楕円形の土壌が検出され、住居に伴う下部構造であると推測される。支柱穴は2基検出した。住居内における支柱穴の配置については、4本柱と推測されるが、疑問の余地がある。P2は径約54cm、深さ46cmを測る。底部付近で礎板を検出した。礎板(P2-a)は割材で長さ約17cmを測る。樹種はシイ属である。P3は長径84cmを測る。内部からほぼ完形の礎板が検出された。礎板(W17)は丸太材を四分割したみかん割材で、長さ51cmを測る。W17の中央左端には加工痕跡が残っており、樹種はクリである。なお、竪穴住居12からは弥生土器、鉄器等の遺物が出土した。35は長頸壺であり、頸部と体部の境に突帯がある。36～38は甕である。39は台付直口壺である。40は装飾高杯である。杯部内面には線刻により楕円文、綾杉文が施されている。41は高杯脚部である。39・40・41とも精製した胎土を使用している。42は大形鉢である。C1は、紡錘車の未製品と思われる円板である。甕の胴部片を利用しているが、穿孔はない。M2は鉄鏃であ



第22図 竪穴住居12 (1/60)

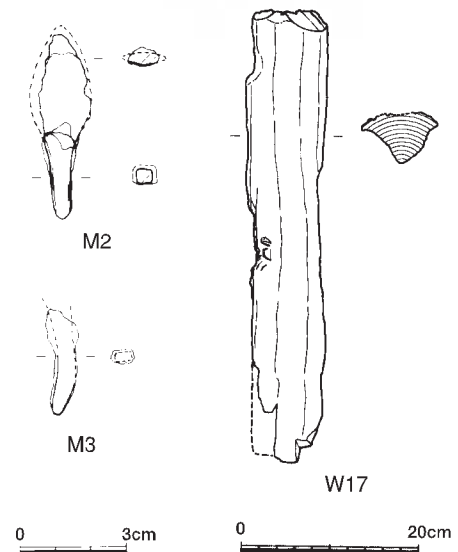


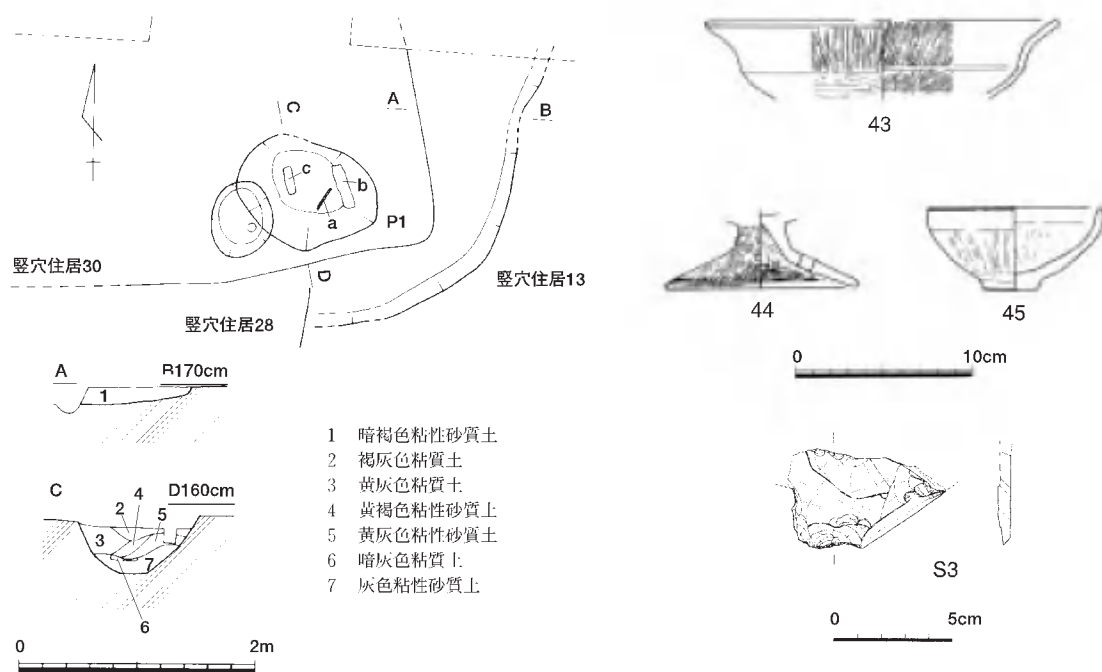
第23図 竪穴住居12出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/8)

る。M3は茎と思われるが、詳細は不明である。竪穴住居12の時期は、西端の竪穴住居27が伊福・弥・後Ⅳ期に属すると考えられることから、これよりも古いものと考えられる。また、竪穴住居12の出土遺物は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期に属する。これらの様相から竪穴住居12は伊福・弥・後Ⅲ後半～Ⅳ期を中心とする時期に営まれたものと考えられる。(金田)

竪穴住居13 (第24図、図版24・37)

18M区の南東部に位置し、大半が竪穴住居28・30に切られており、全貌は明らかでない。平面形は、壁面の形状から円形に近いことが想定される。埋土の深さは約15cmを測る。壁面では壁体溝は認められなかった。柱穴は重複するように2個を確認したが、P1が支柱穴の1個であると想定する。P1は長軸約120cm、短軸約90cm、深さ約40cmを測り、底面から約10cm上位において礎板痕(第6層)を確認した。礎板痕は2本が並列しており、その主軸は壁面に直交すると考えられる。またP1内からは木片aが出土し、礎板片の可能性はある。



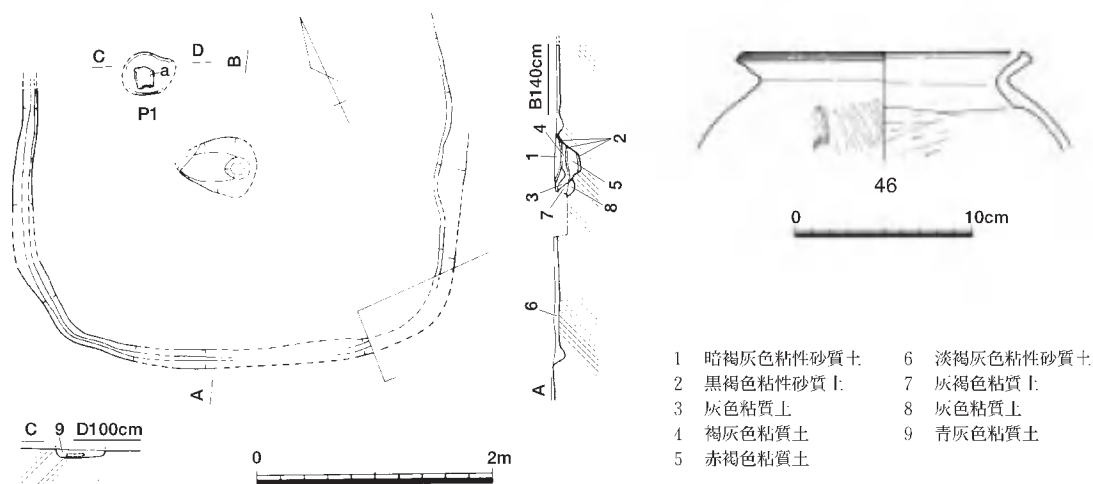


第24図 竪穴住居13 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

遺物は、弥生土器の高杯43・44、鉢45、サヌカイト製スクレイパーS3があり、いずれも覆土から出土した。遺構の埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。(米田)

竪穴住居14 (第25図)

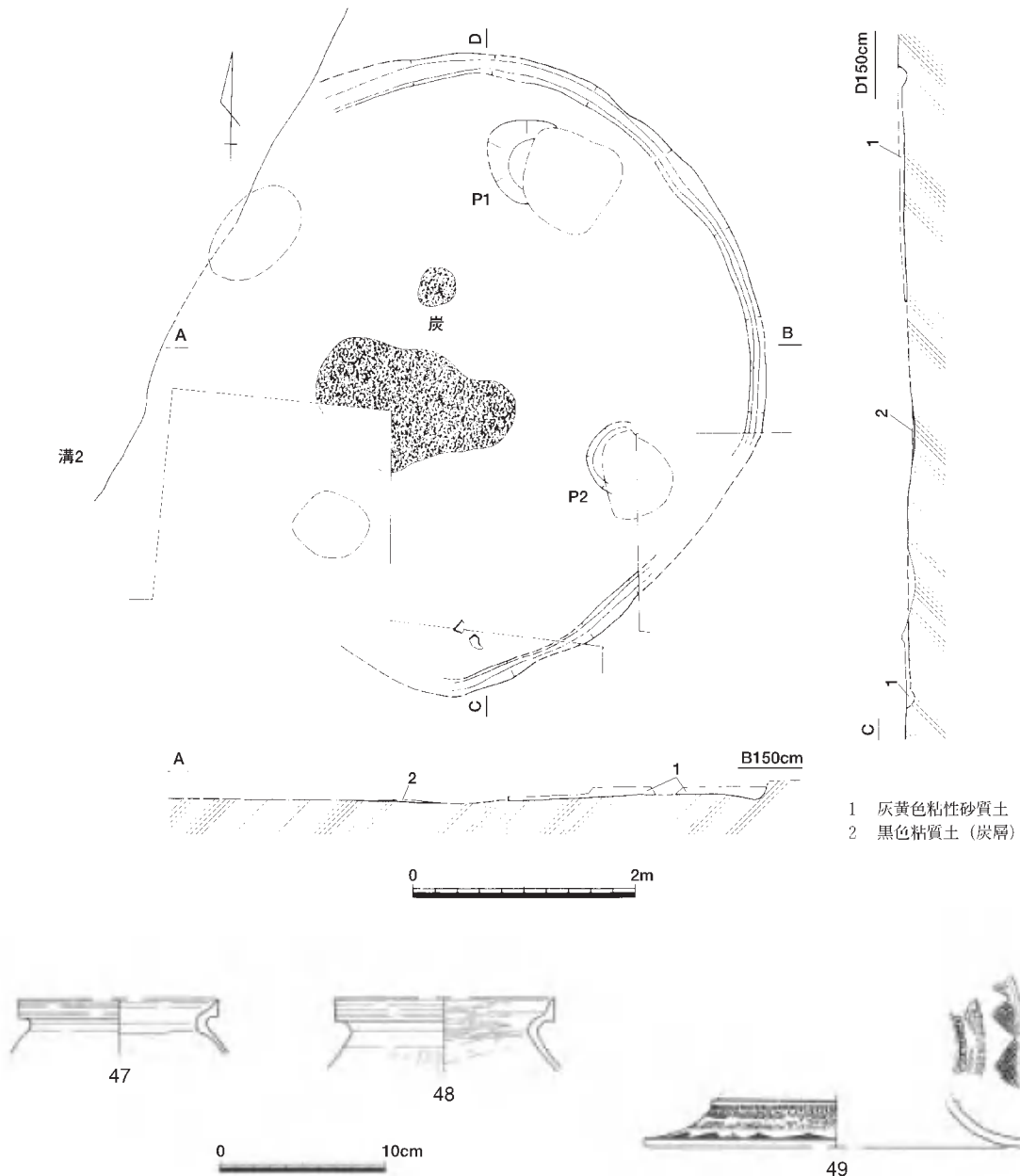
竪穴住居14は調査区19K区に位置する。竪穴住居31の下層で検出された隅丸方形の平面形をもつ竪穴住居である。南辺で約3.4mを測る。床面周辺には壁体溝がめぐらされていた。中央穴には炭層が幾層にわたって堆積していた。主柱穴は精査を試みたが、1基のみの検出にとどまった。中央穴との位置関係から本来は、4本柱の竪穴住居であったと思われる。検出した柱穴の底部付近で1枚の礎板(P1-a)を検出した。残存状況は極めて悪いが、約20×16cmの板状の木材が使用されていた可能性がある。竪穴住居14の時期は、出土した土器等から伊福・弥・後Ⅲ期と推測できる。(金田)



第25図 竪穴住居14 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居15 (第26図、図版5)

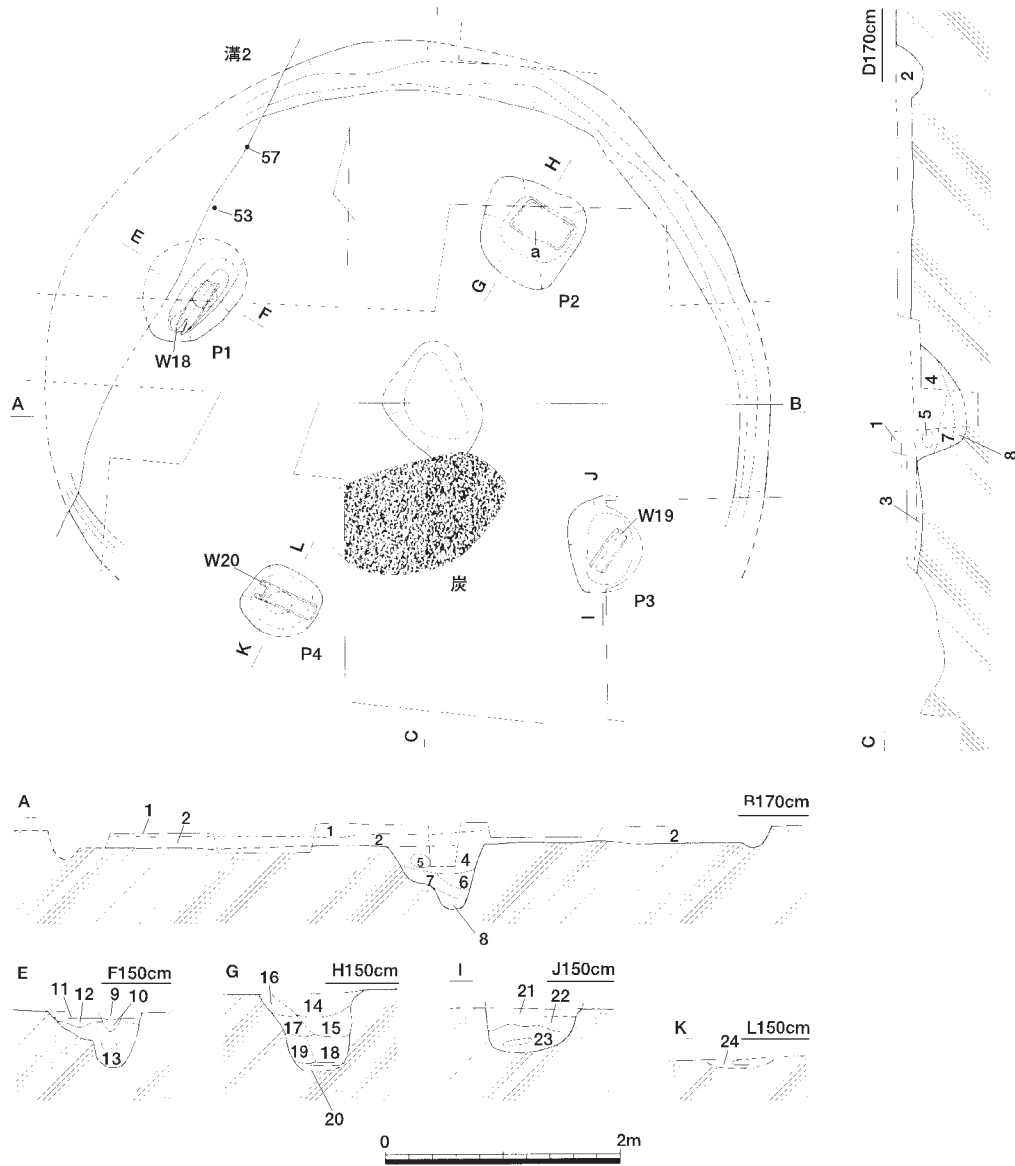
竪穴住居15は19L区に位置する。竪穴住居16の下層で検出された住居で、竪穴住居16のトレンチの調査で、竪穴住居16の床面の下に薄い炭層が広がっているのが確認されており、竪穴住居の存在が想定されていた。しかしながら、住居埋土はいわゆる基盤層とその色調や性質がよく似ている灰黄色粘性砂質土であったため、その検出には時間を要した。その結果、竪穴住居15は竪穴住居16よりやや小さい長径5.58mを測る円形の住居であることが判明した。床面にはすでに存在が確認されていた炭層がおよそ1.8×1.2mの範囲に広がっていた。また、床面周辺にはやや浅めの壁体溝がめぐっていることも判明した。主柱穴は4基存在すると思われるが、その大部分は上層の住居16の柱穴に破壊されており、詳細は不明であった。わずかに、住居の北と東で竪穴住居15に伴うと思われる柱穴 (P1・P



第26図 竪穴住居15 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

2) の輪郭を検出したのみである。住居埋土からは弥生土器が出土したが、すべて破片である。47・48はともに甕の口縁部である。49は装飾高杯であるが、あまり精良な胎土ではない。脚裾部の破片であるが、突帯から下に波状文、列点文、鋸歯文がほどこされている。なお、竪穴住居15の時期であるが、上層の竪穴住居16が伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期と考えられること、さらに出土した遺物から判断すると、伊福・弥・後Ⅲ期に比定できよう。(金田)

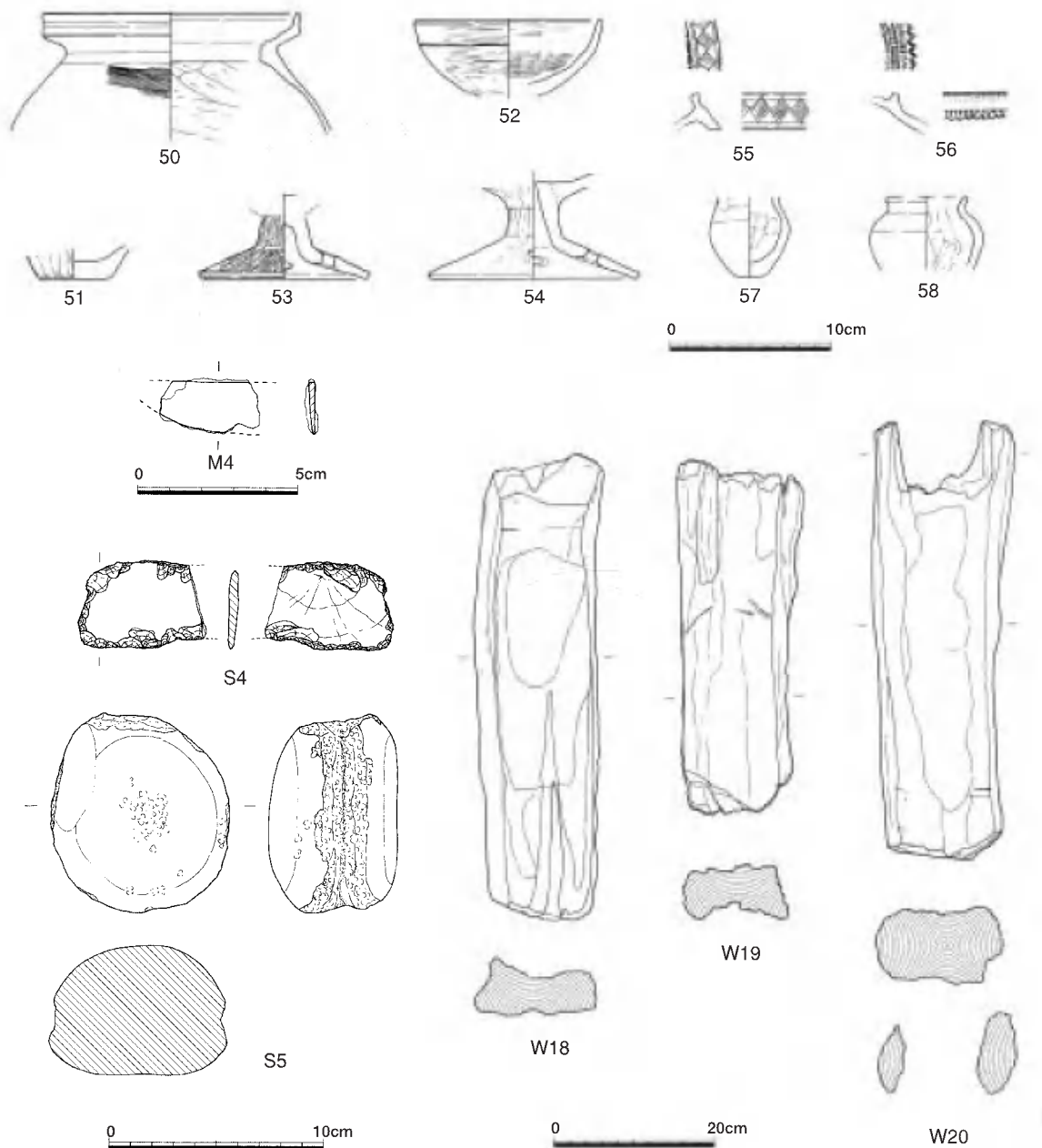


- | | | |
|--------------------|----------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色粘性砂質土 | 9 明褐色砂質土 | 17 青灰色粘性砂質土 |
| 2 灰黄褐色粘性砂質土 | 10 灰色砂質土 | 18 青灰色粘質土 |
| 3 黒色粘性砂質土 (炭層) | 11 明褐色砂質土 | 19 青灰色粘質土 |
| 4 暗灰黄色粘性砂質土 | 12 オリーブ黄色砂質土 | 20 青灰色粘質土 (植物質有機物を含む) |
| 5 浅黄橙色粘質土 (粘土ブロック) | 13 灰色粘性砂質土 | 21 明褐色砂質土 |
| 6 暗褐色粘性砂質土 | 14 にぶい褐色砂質土 | 22 オリーブ黄色砂質土 |
| 7 灰黄色粘性砂質土 | 15 灰オリーブ色粘性砂質土 | 23 灰色粘質土 |
| 8 灰色粘質土 | 16 暗赤褐色粘性砂質土 | 24 青灰色粘質土 |

第27図 竪穴住居16 (1/60)

竪穴住居16 (第27・28図、図版5・21・24・37・39)

竪穴住居16は19L区に位置する、径約5.58mを測る円形の竪穴住居である。竪穴住居16は西端部を溝2に、また住居内も攪乱によって破壊されているが、その他の部分は比較的良好な状態で検出された。竪穴住居16の復元床面積は26.86㎡を測る。住居床面の周囲には壁体溝が巡っていた。床面中央付近にはおよそ1.5×0.9mの範囲にわたって薄い炭層の広がりがみられた。また、平面形が不整形円形を呈する中央穴が存在し、長径74cm、短径50cmを測る。埋土中からは炭層等は検出されなかったが、粘土ブロック(第5層)が検出された。支柱穴は4基検出され、いずれも残存状態は良好であり、中から礎板あるいは礎板の痕跡がみられた。P1は長径100cm、短径約75cmを測り、内部から礎板(W



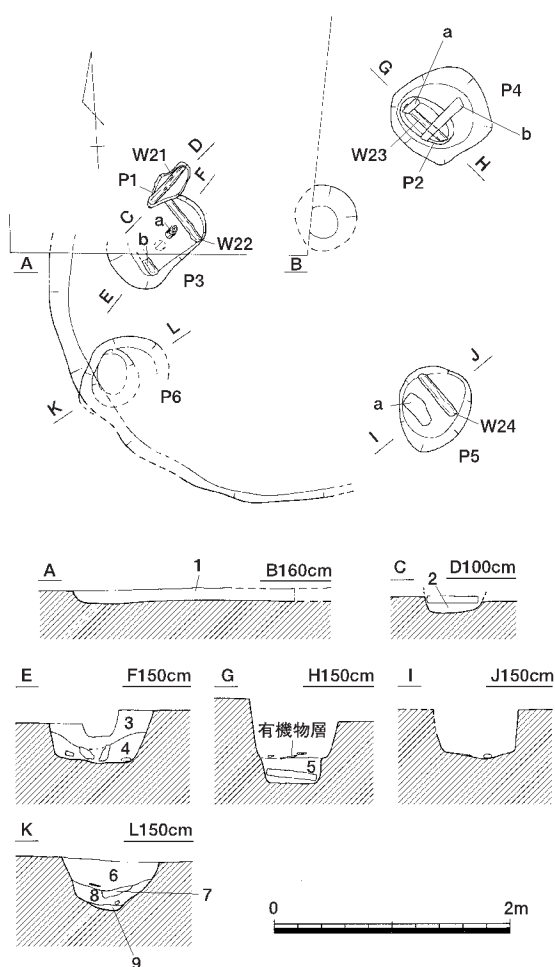
第28図 竪穴住居16出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8)

18) が1点出土した。P2は長径100cm×短径91cmをはかる不整形の柱穴である。床面から約64cmの深さで、有機物層を検出したが礎板自体は検出されなかった。しかしながら、有機物層の平面形がちょうど長方形を呈していることから、元来はここに他の柱穴と同様の礎板が設置されていたものと推測できる。竪穴住居が廃絶する過程で、礎板が抜き取られ、礎板下の有機物のみが残存したものと考えられる。P3は径約85cmを測る柱穴である。中から礎板が1点(W19)出土した。P4は長径70cmのほぼ円形を呈する柱穴である。内部から礎板が1点(W20)出土した。このように、竪穴住居16内の4本の支柱穴内にいずれも礎板が設置されていた。礎板は長軸をいずれも円形住居の接線方向に向けて据え付けられていた。竪穴住居16埋土および床面から弥生土器、鉄器、石器が出土している。50・51は甕である。52～54は短脚の高杯である。いずれもいわゆる水こし粘土を使用している。55～56は装飾高杯の破片である。55は口縁端部で、56は脚裾部と考えられる。いずれも線刻等により文様が施されている。57・58はミニチュアの壺である。57は住居床面西側で出土した。M4は刀子の先端と考えられる鉄器である。S4は石包丁の破片であると考えられ、サヌカイト製である。S5は石錘である。閃緑岩製の完形品で、重さ739.25gを測る。W18～W20は礎板である。W18は全長57.4cm、幅15.2cm、高さ7.2cmを測る。コナラ属コナラ節を用いた部材を半裁して削りだしている。表面の中央部はやや窪んでいる。W19もコナラ属コナラ節を用いた礎板である。全長43.9cm、幅15.7cm、高さ6.9cmを測る。W20は全長54.2cm、幅17.2cm、高さ10.2cmを測るコナラ属コナラ節に属する部材を用いた礎板である。部材の一方に削り込みがみられることから、建築材の転用品と考えることもできる。これらの遺物は伊福・弥・後Ⅲ(後半)～Ⅳ(前半)期に位置づけられることから、竪穴住居16も当該期に位置づけることが可能であろう。(金田)

竪穴住居17(第29・30図、図版36)

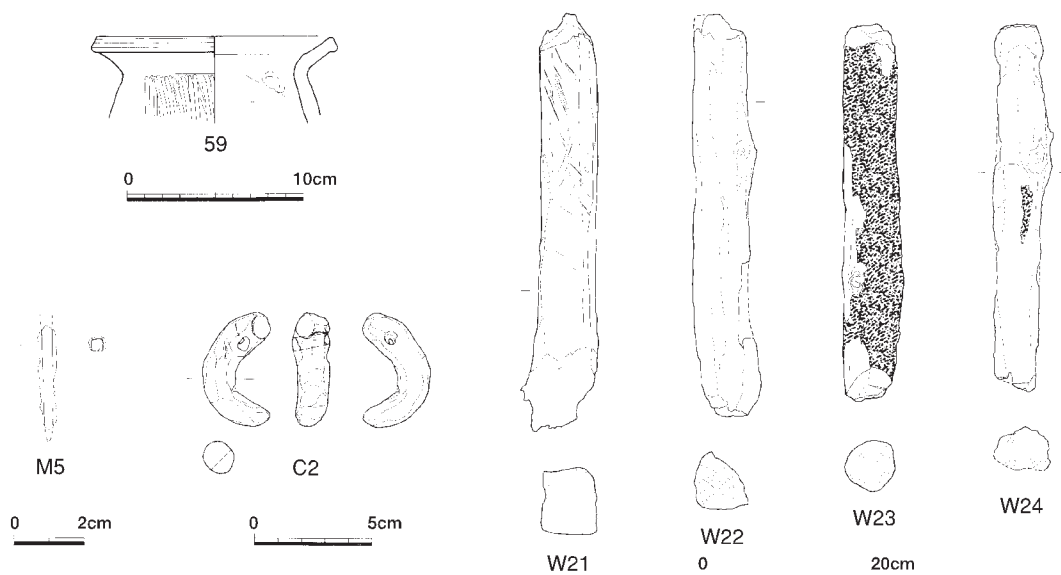
竪穴住居17(第29・30図、図版36)

20M区の北西側において検出した竪穴住居である。竪穴住居の北半は攪乱を受けていたほか、東半は河道2によって削平もしくはその影響で土質が変化し、精査が困難であったため、全体像を明らかにすることができなかった。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は小さく径360cm前後と復元される。深さは約10cmを測る。壁体溝は確認していない。床面中央では中央穴を確認し、その周辺には炭が散在していた。



- | | |
|-------------|-------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 6 黄灰色粘質土 |
| 2 暗青灰色粘性砂質土 | 7 オリーブ灰色粘質土 |
| 3 黄褐色粘性砂質土 | 8 灰色粘性砂質土 |
| 4 青灰色粘質土 | 9 有機物層 |
| 5 青灰色粘質土 | |

第29図 竪穴住居17(1/60)



第30図 竪穴住居17出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8)

主柱穴は4本と想定され、重複も含めて計6本を確認した。P1はP3とほぼ同一地点で重複しており、P1が古い。P1は現状では掘り方はなく、礎板W21のみが認められ、おそらく礎板が柱穴の重圧に耐えかねて基盤層にめり込んだ状況を確認したと判断される。P3は底面に礎板2本W22・bが並列しており、主軸は壁面に対して直交する。またP3の掘り方中央では柱痕が確認でき、その下部には腐食が著しい柱根aがわずかに残存していた。P4では底面に並列する2本の礎板を確認し、主軸は壁面に直交する。また両礎板の直下には木質有機物が敷かれていた。さらにP4の底面では別の柱穴であるP2を確認し、P4構築前に礎板W23をもつ柱穴が存在したと考える。P5は底面で並列する礎板を確認し、2本のうちW24は丸太材であるが、もう一方は腐食が著しく痕跡を確認したに過ぎない。P6は、底面から約10cm上位において礎板痕(第7層)を確認し、1本の礎板が壁面に直交するように配されている。主柱穴の配置・基礎構造は、壁面に平行するように各柱穴に1本の礎板をもつもの(P1・2)、壁面に直交するように2本の礎板が並列するもの(P3~6)が対応し、切り合い関係から前者の柱穴配置が古く、後者が新しいとみる。遺物は覆土から弥生土器甕59、錐状鉄器M5、土製勾玉C2が出土した。また礎板は、W21がマツ属複維管束亜属の割材削出し材、W22はヤマグワの割材、W23・24はコナラ属アカガシ亜属の丸太材を利用している。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。(米田)

竪穴住居18 (第31図、図版5・24)

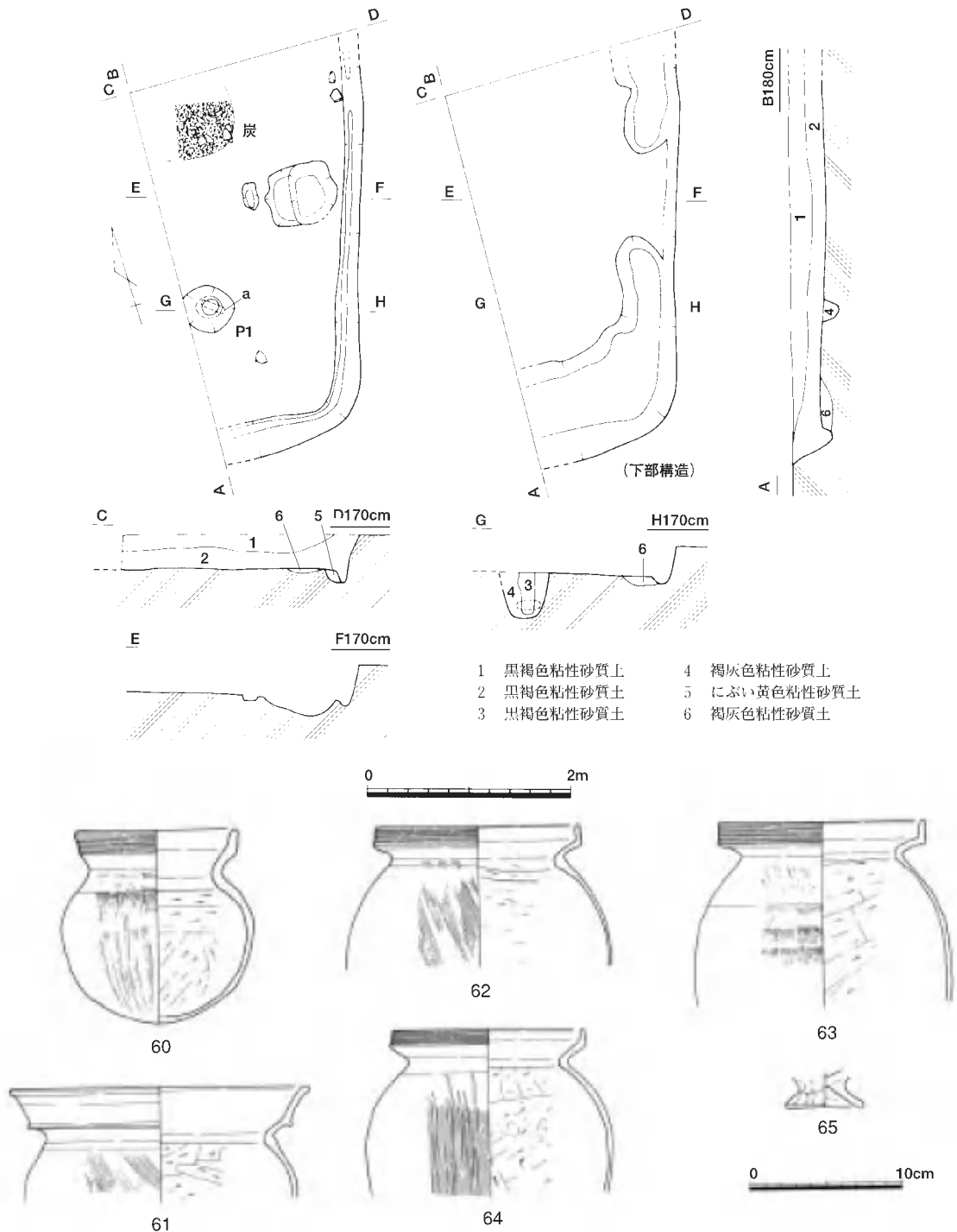
16K区に位置する竪穴住居であり、東壁上端の一部は南北方向に走る古墳時代前期の溝に切られている。調査区内では竪穴住居の南東隅角部を検出したのみで、大半は調査区外へ続く。

竪穴住居は平面形が方形を呈し、南東隅では柱穴が1本検出できたことから、4本柱構造と推測できる。その柱穴の底面中央には、長さ12cm、径8cmほどの粘土化した礎材1本が東西方向に設置されている痕跡があり、基礎構造をもつ柱穴を確認できた。また住居東辺中央に接して二段に掘りこまれた方形の土塊を検出した。その西側で検出した小ピットは、東方へ傾斜するように掘りこまれており、はしごを据えた痕跡とも考えられる。住居床面の下では、壁体に沿って巡るように幅約50cm、深さ約

第3章 発掘調査の概要

5～10cmを測る溝を確認した。この溝は下部構造と考えられ、竪穴の粗掘り痕跡もしくは防湿のための工夫と示唆される。この下部構造は、土壌や小ピットを避けるように掘りこまれていることから察すると、竪穴を掘削する時点で出入口が意識されていた可能性がある。

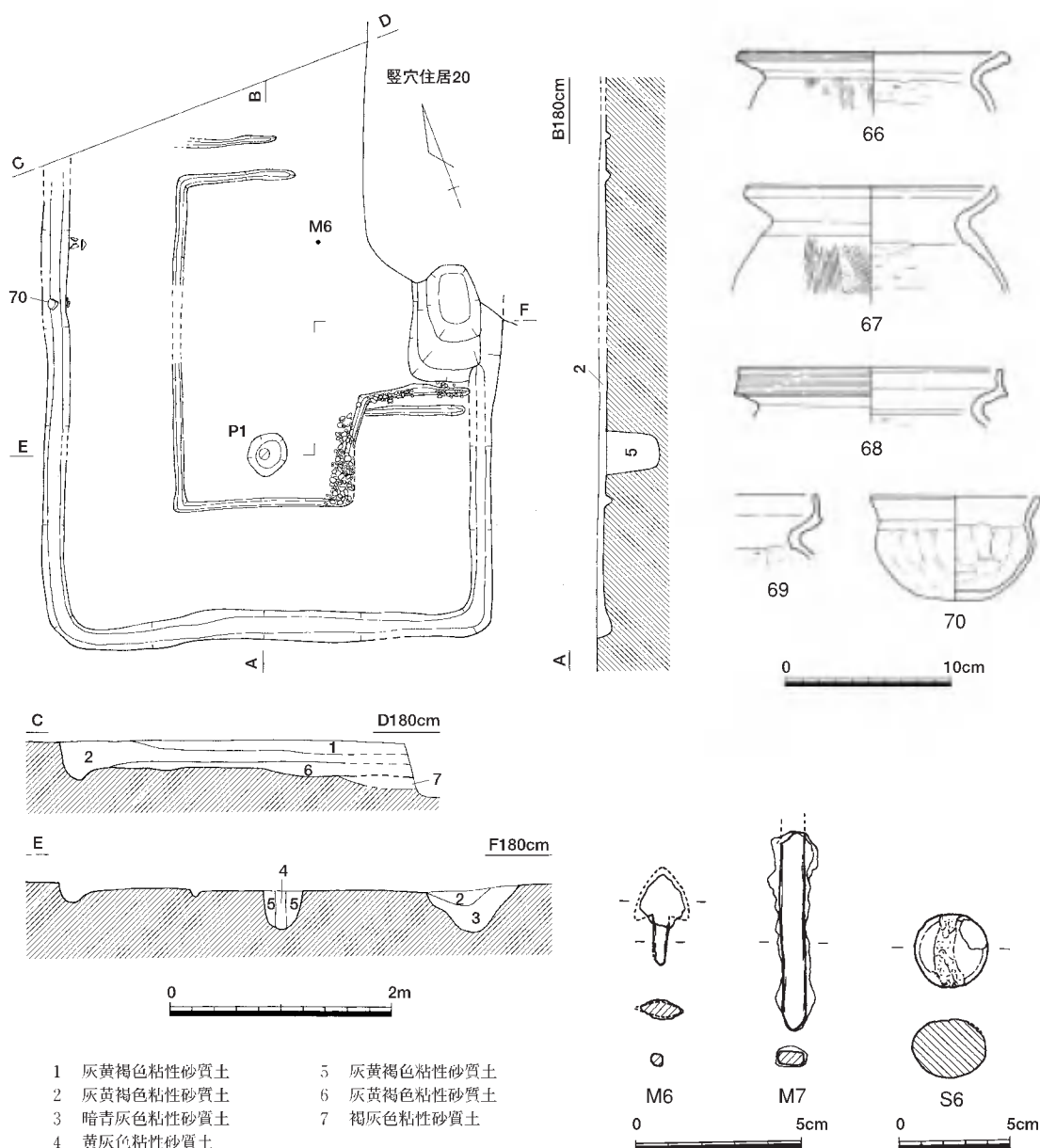
出土遺物は壺60、甕61～64、製塩土器65があり、竪穴住居の中央東寄りと東壁付近に偏在していた。甕61は山陰系の土師器に顕著な複合口縁をもち、色調が黄灰色を呈することから搬入土器の可能性が高い。これらから本竪穴住居の時期は伊福・古・前Ⅱ期と考えられる。 (安永周平)



第31図 竪穴住居18 (1/60)・出土遺物 (1/4)

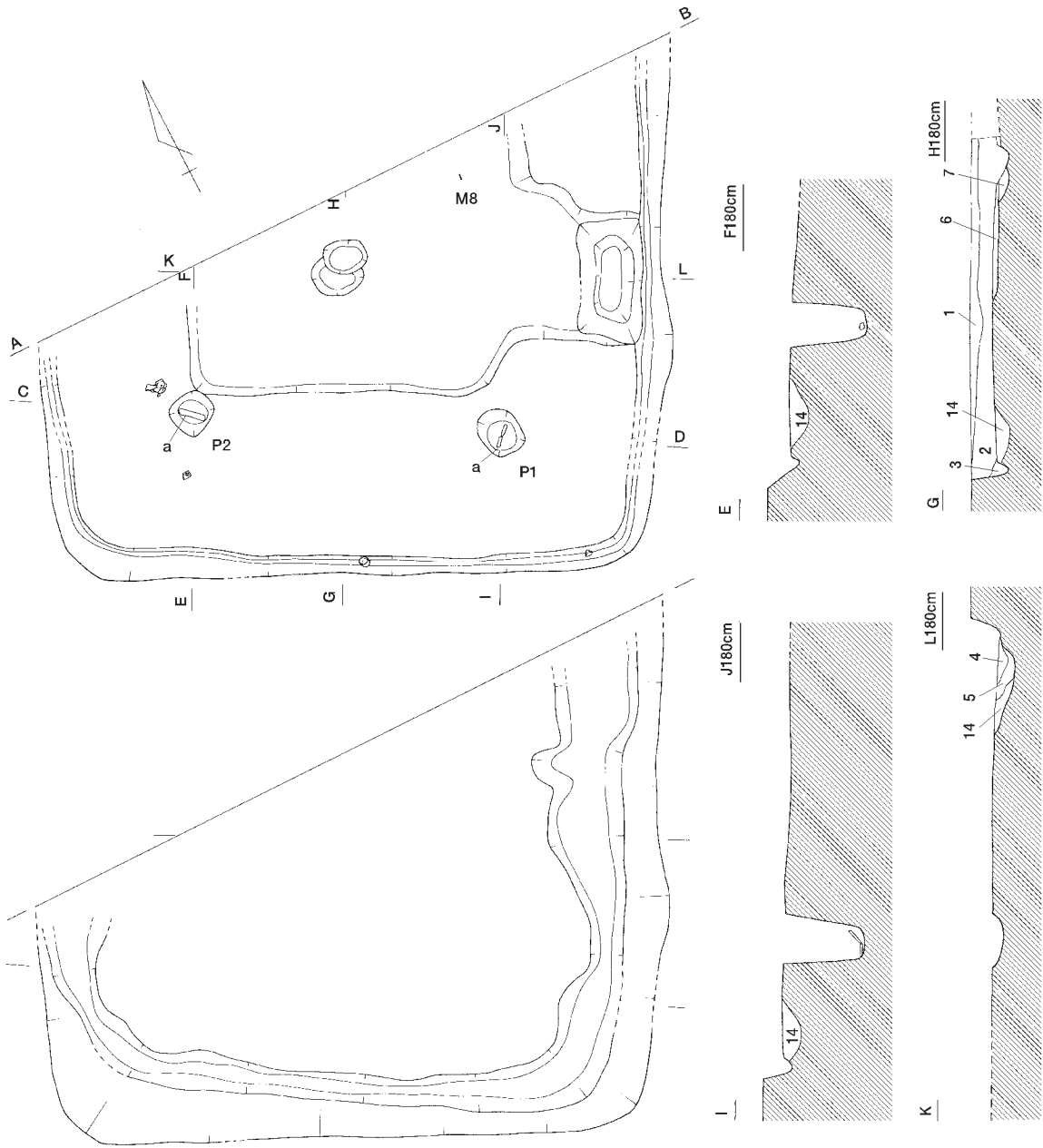
竪穴住居19 (第32図、巻頭図版1、図版6・24・37)

17K区の南西で検出した住居で、竪穴住居18の東2.4mに位置し、その北東部は竪穴住居20に切られている。灰黄褐色をなす埋土は竪穴住居18・20と共通し、これらに切られる竪穴住居と容易に識別された。調査区の北辺にかかって検出したため全体の規模は明らかでないが、現状からするとN-21°-Eに主軸をおく長軸515cm、短軸385cmの長方形に復元される。また、深さ32cmにある床面の海拔高は144cmで、その面積は19㎡あまりと推定される。床面の周囲には幅23cm、深さ9cmほどの壁体溝に沿って、幅1m、高さ7cmの高床部が設けられており、これが途切れる東辺中央には方形土壇が穿たれている。高床部の内縁には幅9cm、深さ5cmほどの溝がめぐり、方形土壇に近い南東側では砂利の散布が認められた。長さ106cm以上、幅82cmある方形土壇は、長方形をなす上段と楕円形を呈す

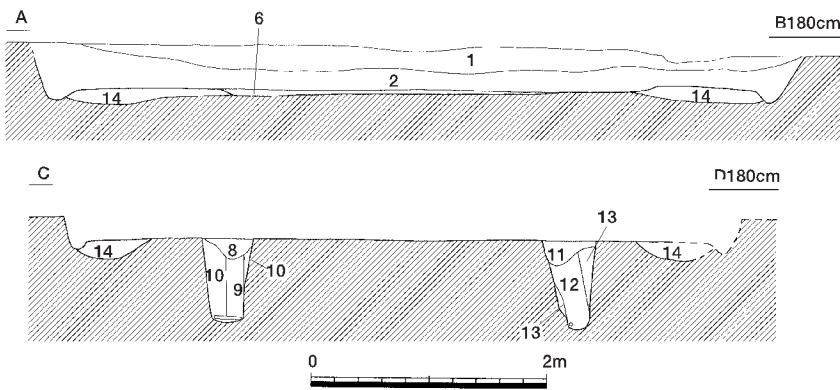


- | | |
|-------------|-------------|
| 1 灰黄褐色粘性砂質土 | 5 灰黄褐色粘性砂質土 |
| 2 灰黄褐色粘性砂質土 | 6 灰黄褐色粘性砂質土 |
| 3 暗青灰色粘性砂質土 | 7 褐色粘性砂質土 |
| 4 黄灰色粘性砂質土 | |

第32図 竪穴住居19 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

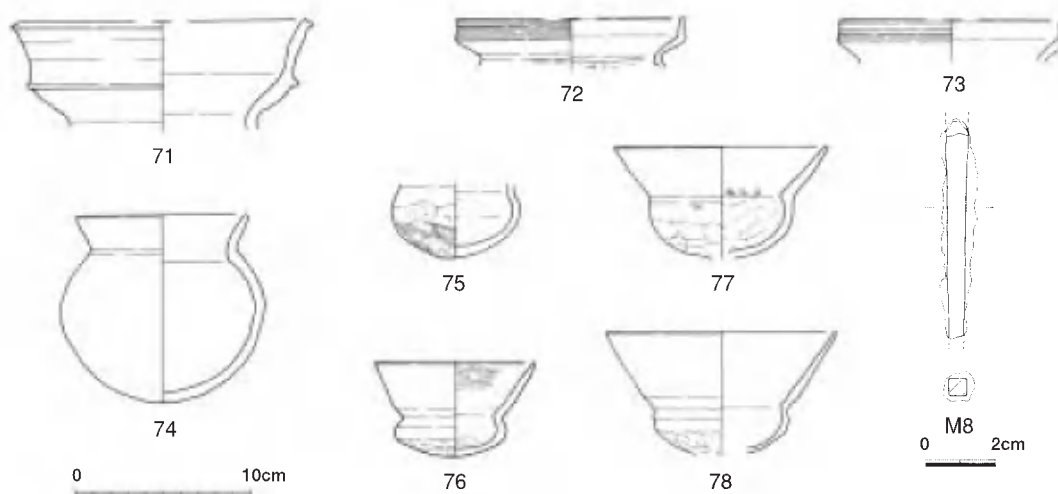


(下部構造)



- 1 灰黄褐色粘性砂質土
- 2 黄灰色粘性砂質土
- 3 灰色粘性砂質土
- 4 黒褐色粘性砂質土
- 5 暗褐色粘性砂質土
- 6 明黄褐色粘性砂質土
と黄灰色粘性砂質土 (貼床)
- 7 灰色粘性砂質土
- 8 灰色粘性砂質土
- 9 黄灰色粘質土
- 10 褐灰色粘性砂質土
- 11 褐灰色粘性砂質土
- 12 灰色粘質土
- 13 明黄褐色粘性砂質土
- 14 黄褐色粘性砂質土

第33図 竪穴住居20 (1/60)



第34図 竪穴住居20出土遺物 (1/4・1/2)

る下段の2段に掘りこまれており、深さは38cmを測る。中央穴は攪乱のためか確認できなかった。主柱は2本で構成されていたものと思われるが、検出できたのは南側の1本のみである。掘り方は径38cm、深さ35cmと小規模で、内部から径10cmの柱痕が確認された。

出土遺物には上師器66～70のほか、銅鏃M 6、石錘S 6がある。甕には「く」字形の口縁部をもつ66・67と、短い複合口縁に櫛描き沈線を飾る68・69とがある。また、小形鉢70は西側の壁体溝から出土した。これらは伊福・古・前I期でも古い様相を示している。(亀山)

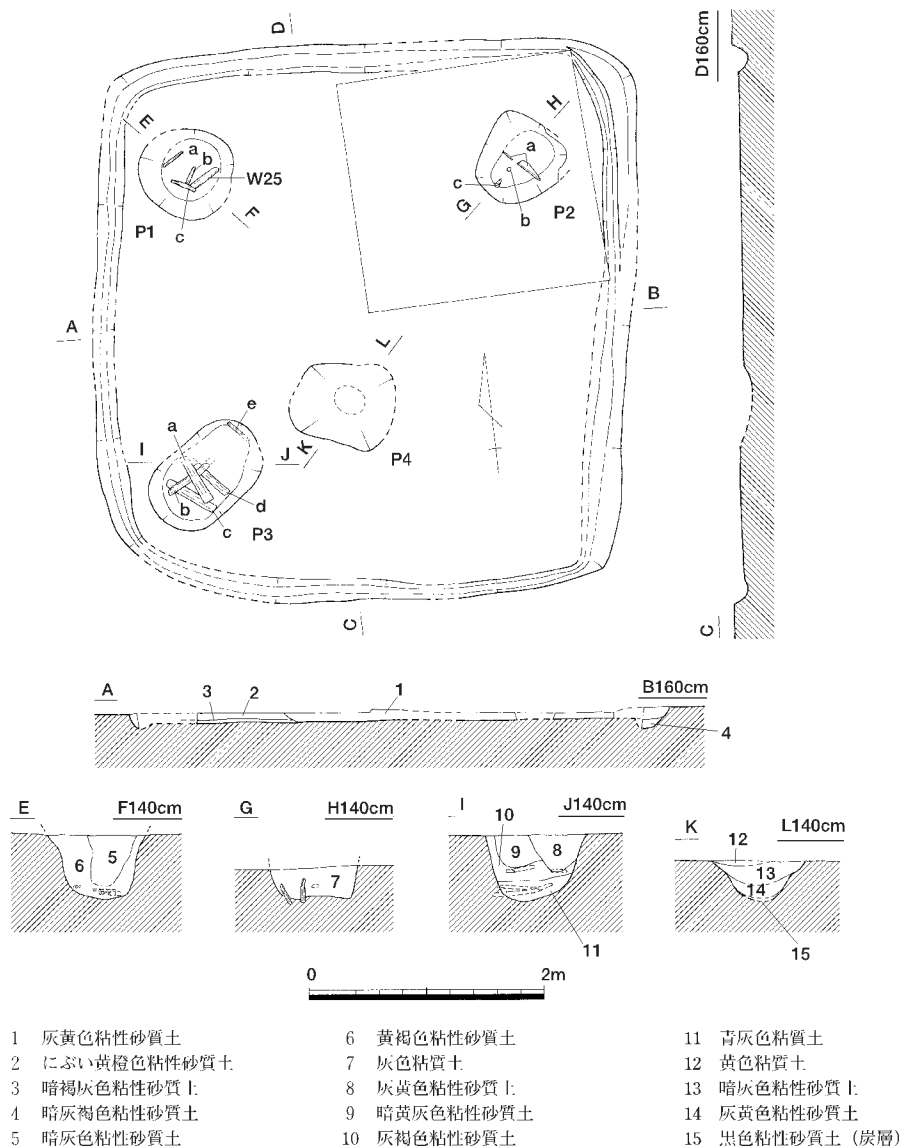
竪穴住居20 (第33・34図、図版6・21・24)

竪穴住居19の東に重複して検出された方形住居で、17K区の南東に位置する。調査区の北辺にかかって検出したため南半を確認したにすぎないが、一辺560cmほどの方形に復元され、その面積は30㎡あまりと推定される。周囲に幅17cm、深さ10cmの壁体溝をめぐる床面は2面確認した。海拔130cmにある下面は、長さ118cm、幅60cm、深さ16cmの方形土壌が掘りこまれた南東辺中央を除いて、幅125～164cm、高さ5cmあまりの高床部を設けている。また、床面の中央には長さ48cm、幅35cmの楕円形をなす中央穴が設けられており、深さ8cmの底面には被熱痕跡が認められた。上層の床面は高床部の上面に揃えて貼り床を施しており、その海拔高は136cmを測る。中央穴は位置をわずかに北東へずらして掘りこまれており、その規模は長さ41cm、幅32cm、深さ12cmを測る。このほか、床面の下を壁体に沿うようにめぐる幅64～140cm、深さ13～16cmの溝を検出したが、排湿のための下部構造と見られる。主柱は推定される4本のうち2本を検出したが、いずれも壁体から120～130cmほど離れた位置に据えられている。P 1・2の柱間は287cmあり、その方向はN-29°-Eと竪穴住居31・37に類似する。柱穴は径が42～48cmと小さい割りに深さが66～70cmと深く、径15～18cmある柱痕の下には細い丸木を横たえていた。

出土遺物には複合口縁の壺71や櫛描き沈線を飾る甕72・73、口頸部が大きく開く丸底鉢75～78のほか、用途不明の鉄器M 8などがある。いずれも伊福・古・前II期に位置づけられる。(亀山)

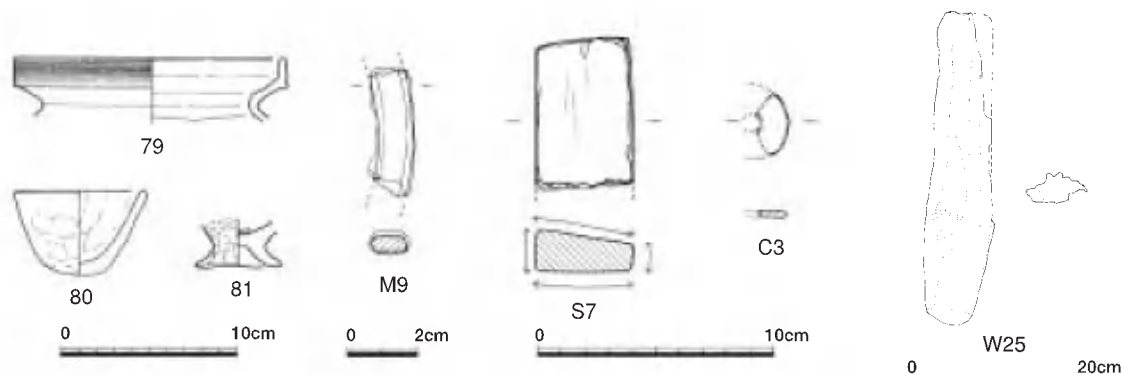
竪穴住居21 (第35・36図、図版6・22・25・37)

竪穴住居21は16L区に位置する。一辺が約4.48×4.25mを測る方形の竪穴住居で、復元床面積は19.04㎡を測る。竪穴住居21の上層には竪穴住居3が存在する。床面周辺には壁体溝がめぐっている。



第35図 竪穴住居21 (1/60)

床面には86×67cmの不整形の中央穴が存在し、埋土最下層には炭層がみられる。主柱穴は3基検出している。元来は4本柱であったと思われるが、1本は残存していない。いずれの柱穴からも礎板痕跡がみられた。P1は径約80cmの円形の柱穴である。底部付近で4本の礎板を検出した。いずれも細木を利用している。第5層を柱痕跡とすれば、W25とP1-bが2本で柱を支えていたと思われる。W25はコナラ属コナラ節の割材を、P1-bはコナラ属クヌギ節の部材を利用している。P2はやや不整形の柱穴であり、長径85cm、短径76cmを測る。3～4本の礎板が検出された。P2-aが中央に位置することから、P2-aが柱を支えていたと考えられる。薄い割材を利用しており、コナラ属コナラ節に属する部材を使用している。P2-b・cは柱穴底部に差し込んだような状態で出土している。P3は長径106cm、短径66cmを測る柱穴である。内部からほとんど粘土化している5本の礎板を検出した。礎板は、礎板のレベル差からP3-a・eとP3-b・c・dの2つのグループに分け

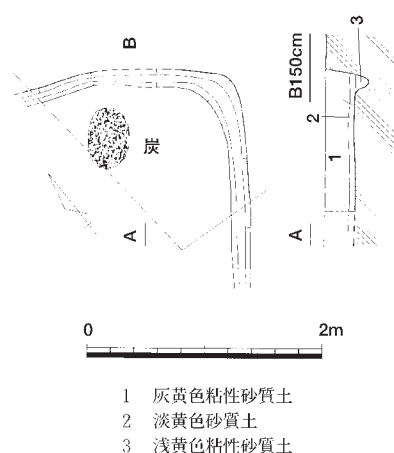


第36図 竪穴住居21出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/8)

られる。前者は2本が平行しているが、本来、2本をつなぐように3本目の礎板があり、「H」字状に配列されていたものと推測される。P3-aは半裁したコナラ属コナラ節の部材を利用している。後者は3本が「H」字状に配置されている。P3-bは粘土化して不明であるが、P3-c・dはいずれもコナラ属コナラ節に属する部材を使用している。このことから、P3では少なくとも2回にわたる礎板の設置が行われていることがわかる。竪穴住居21から土器、鉄器、石器が出土している。土器はいずれも破片である。79は甕の口縁部である。P3から出土しており、口縁部に櫛描沈線を施す。80は鉢、81は製塩土器の脚部である。M9は鉄製品であるが、折れ曲がっており、用途は不明である。S7は流紋岩製の砥石である。C3は紡錘車であるが、半分以上を欠損している。なお、竪穴住居21の時期であるが、P3から出土した甕片から、伊福・古・前I期に属するものと考えられる。(金田)

竪穴住居22 (第37図)

竪穴住居22は調査区西端の16M区に位置する。方形の竪穴住居の北東部のみを検出している。主軸はおよそN-38°-Wである。周辺には壁体溝がみられた。また、床面からは約50×35cmの範囲で炭層のひろがりが見られた。住居からは土器片が若干出土したが、いずれも破片である。82は壺である。83は甕の底部である。他に高杯や鉢の小片も出土している。これらの遺物から、竪穴住居22は伊福・弥・後IV期に属するものと考えられる。(金田)

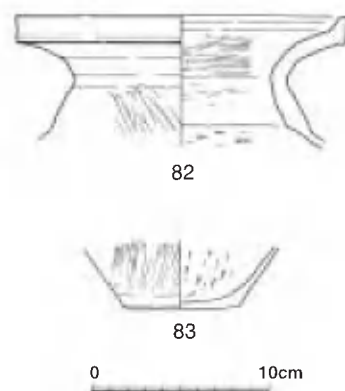


- 1 灰黄色粘性砂質土
- 2 淡黄色砂質土
- 3 浅黄色粘性砂質土

竪穴住居23・24

(第38図、巻頭図版2、図版7・22・23・25・37・39)

17M区に位置し、竪穴住居24は竪穴住居1・7～9を切る。少なくとも2軒の竪穴住居が重複しているが、礎板をもつ柱穴の確認数の多さから、この近辺に竪穴住居が数軒存在したことは疑いなく、中央穴の数からみて少なくとも4軒以上は存在したと考えられる。ただ、遺構の残存状況が良好でないことや、異なる遺構でも同色同質の埋土によ



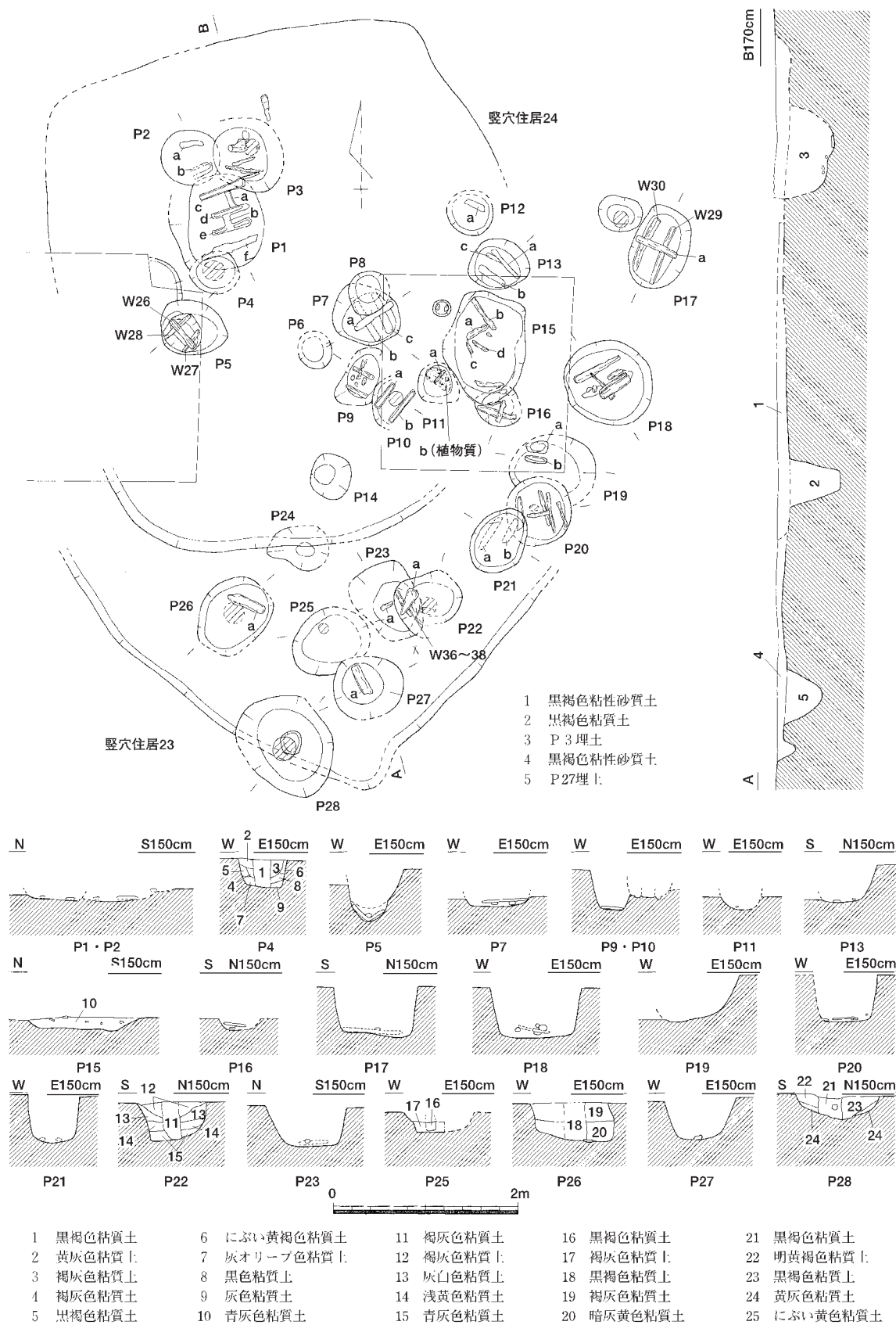
第37図 竪穴住居22 (1/60)
・出土遺物 (1/4)

って覆われていることなどから、各竪穴住居の平面プランの把握は容易ではなかった。ここでは調査時において確実に竪穴住居として確認できた竪穴住居23・24を各説する。

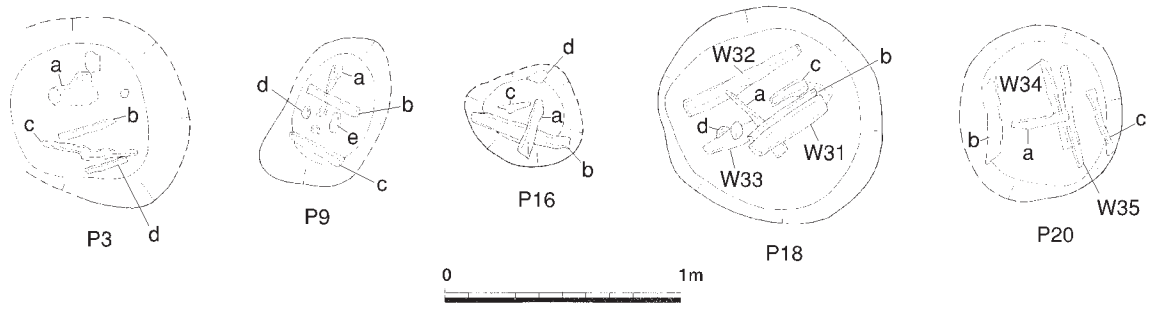
竪穴住居23は竪穴住居24の南側に重複する。竪穴住居23・24の埋土は区別がつきにくく、土層断面によって切り合い関係を明確にすることはできなかったが、調査時は竪穴住居23より竪穴住居24の方が平面プランを先に確定できたため、竪穴住居24は竪穴住居23を切っていると判断した。竪穴住居23の平面形は、直交する二辺の壁面を確認したことから、方形を呈すると考えられるが、北半が竪穴住居24や攪乱によって切られており、規模などの全貌は明らかでない。主軸はN-42°-Eを指す。壁体溝は確認していない。深さは約10cmを測る。中央穴は配置地点・層位からP14・24のいずれかが該当する。P14は径約50cmの円形を呈し、深さは52cmで、埋土の底面と中位に炭層が弧状に堆積していた。P24は平面形が不整楕円形を呈し、深さは33cmを測り、検出面から底面まで炭化物が充填されており、ピット内で炭化物が燃焼・生成されたことが想定される。なお、炭化物を水洗してフルイで選別した結果、米粒状の結晶体が検出され、成分分析を行ったところ、藍鉄鉱の一種であることが明らかにされた（木戸一博報告）。支柱穴については2本ないし4本と推定されるが判然とせず、礎板をもつ柱穴の多さから特定することはできない。

竪穴住居24は竪穴住居23を切る。平面形は隅丸方形を呈し、東西壁面の一部は攪乱を受けている。規模は長軸550cm・短軸495cmと復元でき、深さは12cmを測る。主軸はN-13°-Wである。中央穴はP6・8のいずれかが伴う可能性がある。P6は径約40cm、深さ23cmを測り、底面に厚さ2cm程度の炭層が密着している。またP8は径45cmの円形を呈し、深さは33cmであり、炭化物が充填されていた。支柱穴は竪穴住居23と同様に判然としないが、P1～5・7～10・11・12・14・15のなかで収まると考えられる。ただ、現状の柱穴配置は、壁面の掘り方に対して4本柱穴にはなり得そうになく、2本の支柱穴を持つ可能性が高い。ただ、仮に2本柱穴であるならば、P5・7が該当すると考えられるが、礎板の主軸を考慮すると必ずしも該当するとは言い切れない。

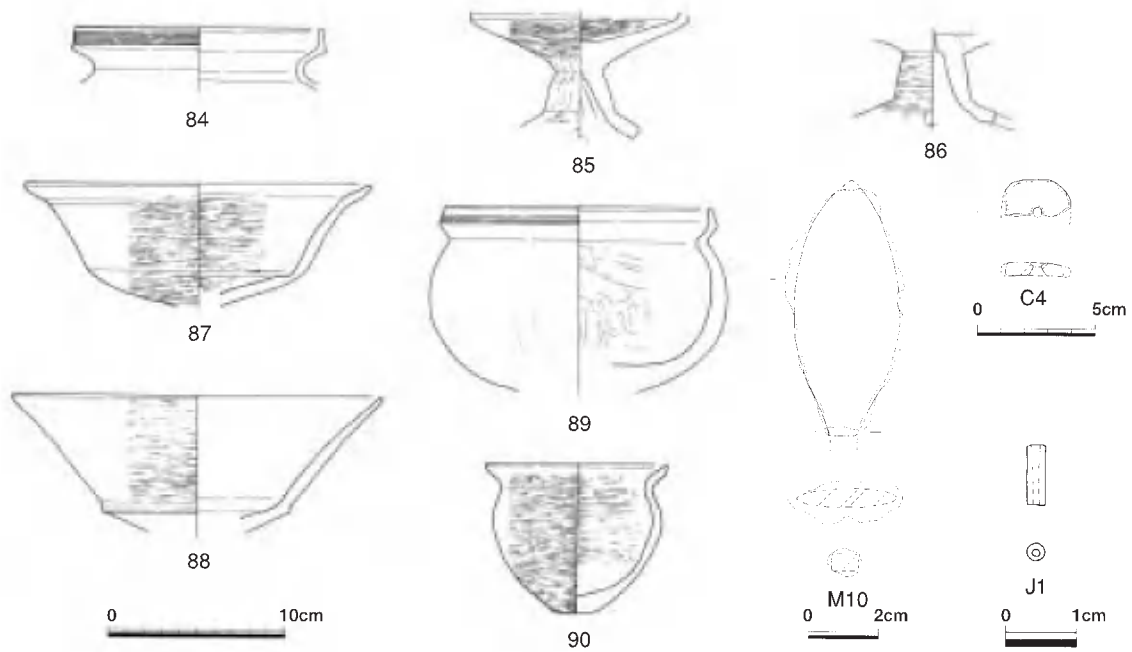
次に、竪穴住居23・24内で確認した柱穴を各説する。P1の掘り方は現状では楕円形を呈し、底面において粘土化した礎板痕跡4本が平行しているのを確認した。確認面はいずれも同一レベルであるが、周辺の礎板は補助材が2本組であることや、P1では礎材の一部も確認していることから、P1内の並列する4本の礎板痕跡は一連のものではなく、2個の柱穴が重複し、2本対の補助材が重複している可能性がある。P2の底面では並行する2本の礎板痕を確認し、粘土化していた。P3では柱痕を確認し、底面には細い材を利用して基礎構造が設けられている。P4は柱痕がある。P5は底面で並列する2本の補助材W27・W28、その上に1本の礎材W26を設置し、「H」状の基礎構造をなす。注目されるのは、柱の重圧に耐えかねて補助材W27・W28が礎材W26との接点で折れ曲がっている点であり、礎板が本来の掘り方底面より約15cm下方まで基盤層にめり込んでいる。ちなみにW27は約55°、W28は約35°ほど折れて曲がっている。P7の底面では粘土化した礎板痕を確認し、並列する補助材の直上に礎材が置かれ、「H」状を呈する。P9は並列する2本の補助材の上に1本の礎材が直交するように配置され、中央には柱根が残る。ちなみに北側の補助材は礎材との接点で折れている。P10は粘土化した礎板痕が並列しており、それらに挟まれるように柱痕を確認した。P11は大半が攪乱を受けているが、1本の礎板を確認し、底面には植物質がシート状に広がる（トーン部分）。P12は粘土化した礎板痕を1本確認した。P13は粘土化した礎板痕を確認し、現状では3本が並列する。P15は攪乱内で検出し、現状では長軸約120cm、短軸約76cmを測る。底面では5本の礎板を確認した



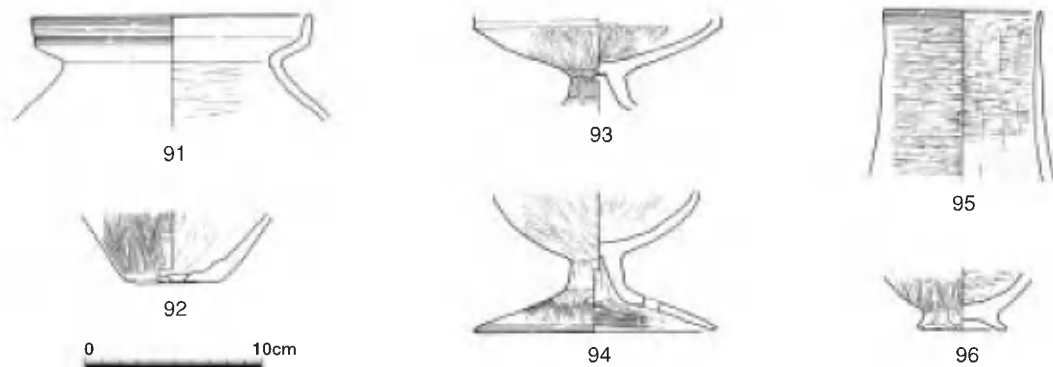
第38図 竪穴住居23・24 (1/60)



第39図 竪穴住居23・24柱穴 (1/30)



第40図 竪穴住居23・24出土遺物 (1/4・1/2・1/3・1/1)

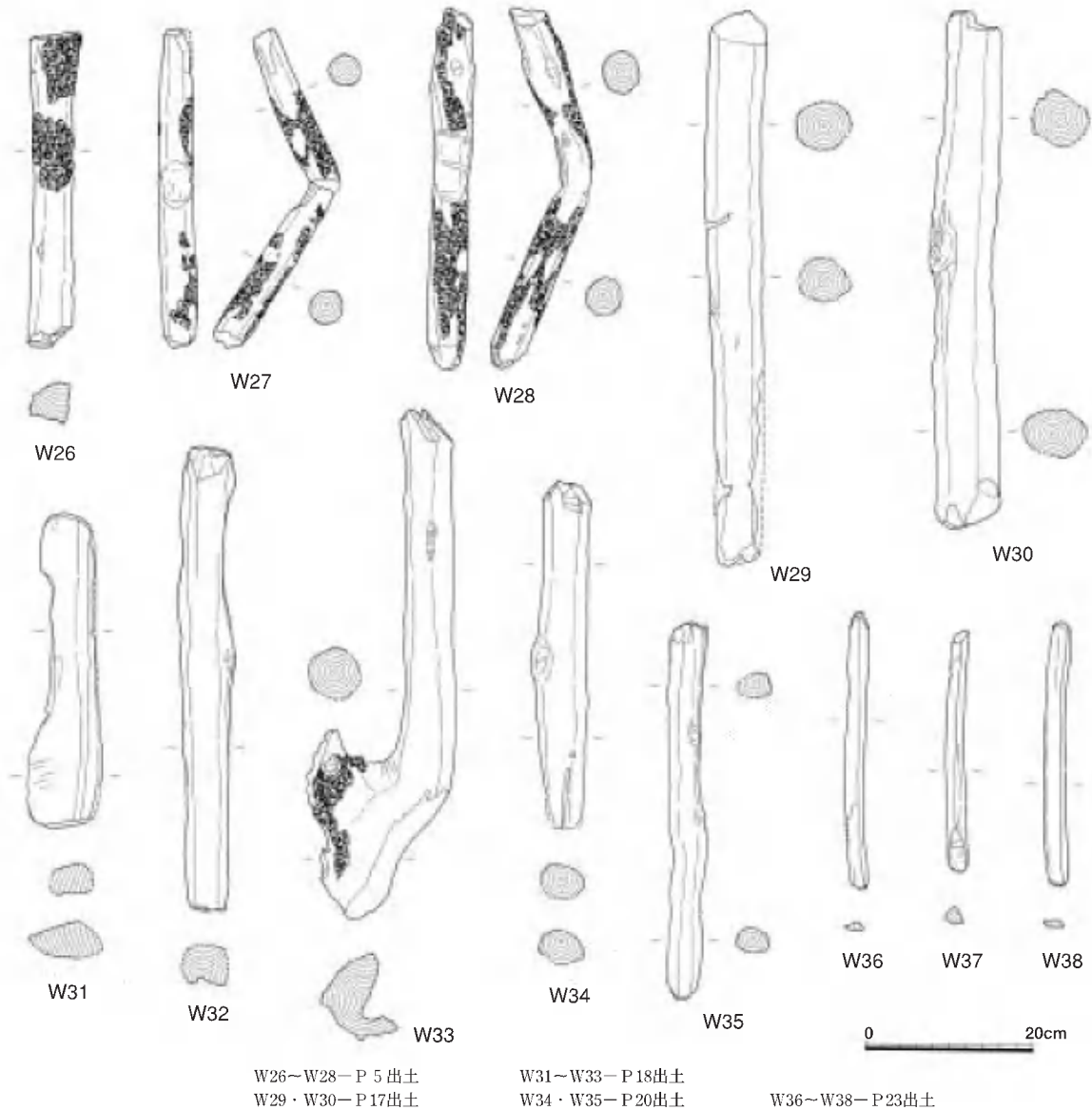


91・92-P26出土

93-P9出土

94-96-P13出土

第41図 竪穴住居23・24周辺柱穴・ピット出土遺物① (1/4)



第42図 竪穴住居23・24周辺柱穴・ピット出土遺物② (1/8)

が、その配置は判然としない。P 16は北半が攪乱を受けているが、直交する補助材と礎材を確認し、本来は「H」状に礎板が配置されていたと考えられる。P 17は長軸90cm、短軸62cmの楕円形を呈し、深さは53cmも残存する。底面では並行する補助材W29・W30の上に礎材 a が設置され、「H」状の基礎構造を持つ。礎板はいずれも残存状況が良好であり、W29は長さ66cm、径7cmの丸太材を使用している。P 18は円形の掘り方を持ち、底面に並列する2本の補助材を置いた後、それらに直交するように礎材を配し、南側の補助材にのみ礎材の直上に2本の付属材を並行させ、また捨石を置く。P 19は底面で並列する礎板痕を確認した。P 20は4本の補助材が並列し、それらの直上で1本の礎材が直交する。底部中央には柱痕が残る。P 21では並列する礎板痕を確認し、粘土化している。P 22は柱痕が残るが、礎板は未確認である。P 23は粘土化した礎板痕を確認し、「H」状に基礎構造が設けられていたと考えられる。P 25では礎板を確認できず、柱痕を確認するに留まった。P 26では柱痕とともに

第3章 発掘調査の概要

底面北東寄りで礎板を1本確認した。P27では底面中央において礎板を確認し、その配置状況から礎材に相当する。P28では柱痕を確認したが、竪穴住居23の南西壁面と重複しているため、本竪穴住居には伴わないと考える。以上の柱穴をまとめると、「H」状に礎板を配置するもの（P1・3・5・7・9・10・13・16～21・23）、1本の礎材のみを配するもの（P11・12・26・27）、礎板を持たないもの（P4・25・28）の3類型に大別できる。柱穴の底面は総じて海拔高90～100cmのものが多い。

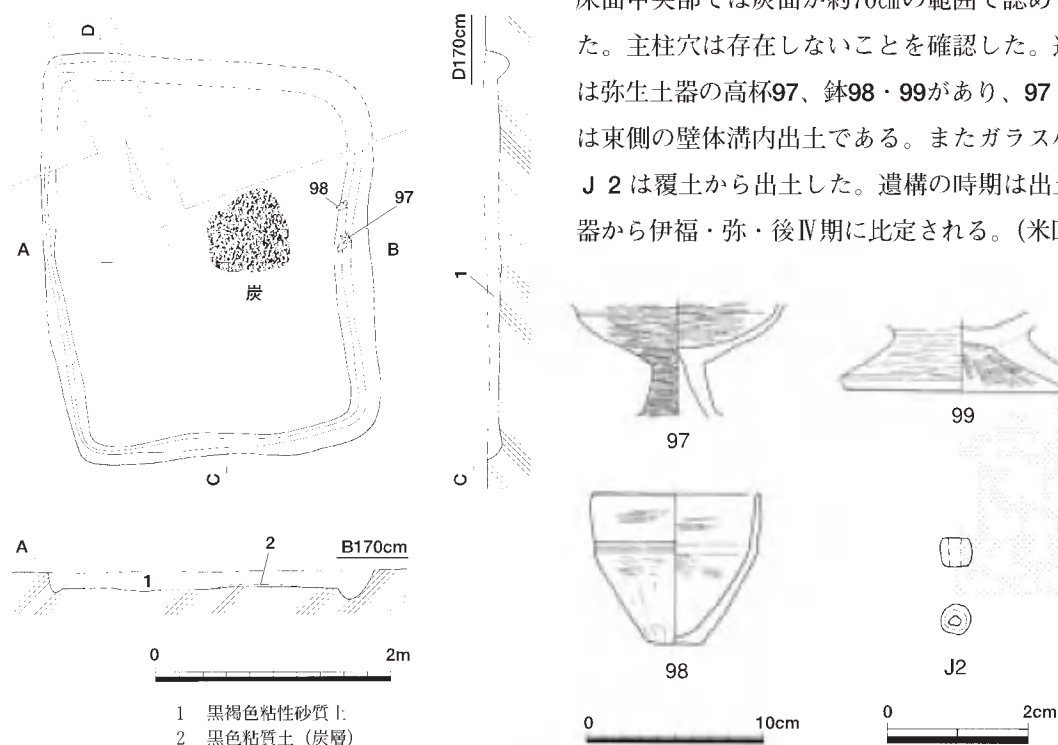
遺物は、弥生土器・土師器84～96、鉄鏃M9、土器円盤C4、管玉J1などがある。87・90は竪穴住居24の覆土、91・92はP26、93はP9、94～96はP13、他は全て竪穴住居23からの出土である。器種は甕84・91・92、高杯85～88・93・94、鉢89・90・96、台付直口壺95があり、85・86・90・92～94は伊福・弥・後Ⅳ期、84・89・91は伊福・古・前Ⅰ期に比定される。M10は鉄鏃であり、茎部を欠く。J1は碧玉製管玉であり、両面穿孔である。W26～38は礎板として使用された木製品であり、W26～28はP5、W29～30はP17、W31～33はP18、W34・35はP20、W36～38はP23から出土した。このうち、W26は割材、W31・36～38は割材削出し、W27～30・32～35は丸太材である。樹種はW26・30～34がコナラ属クヌギ節、W27・28がマツ属複雑管束亜属、W29・36がコナラ属コナラ節、W37～39がコナラ属アカガシ亜属と鑑定されている。このほか、ツブラジイ（P18-b）、マキ属（P18-d）などの樹種もある。

遺構の時期は、出土土器に若干の時期幅があるが、竪穴住居23は伊福・弥・後Ⅳ期～伊福・古・前Ⅰ期、竪穴住居24は伊福・古・前Ⅰ期と捉えられる。（米田）

竪穴住居25（第43図、巻頭図版2、図版7・25）

17M区に位置し、北半は攪乱を受けている。平面形は長方形を呈し、規模は長軸380cm、短軸250cmを測る。深さは約15cm残存する。主軸はN-22°-Eを示す。壁面には幅15～30cmの壁体溝が全周する。

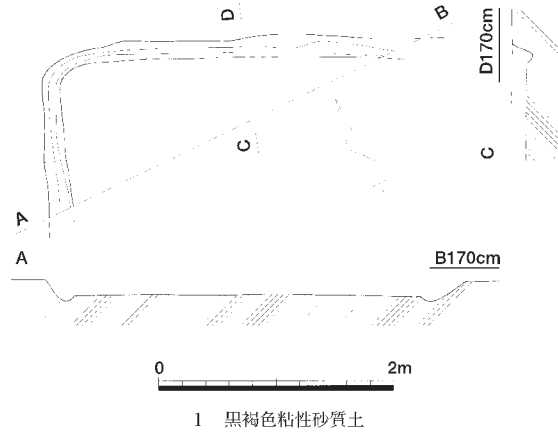
床面中央部では炭面が約70cmの範囲で認められた。主柱穴は存在しないことを確認した。遺物は弥生土器の高杯97、鉢98・99があり、97・98は東側の壁体溝内出土である。またガラス小玉J2は覆土から出土した。遺構の時期は出土土器から伊福・弥・後Ⅳ期に比定される。（米田）



第43図 竪穴住居25（1/60）・出土遺物（1/4・1/1）

竪穴住居26 (第44図、図版7)

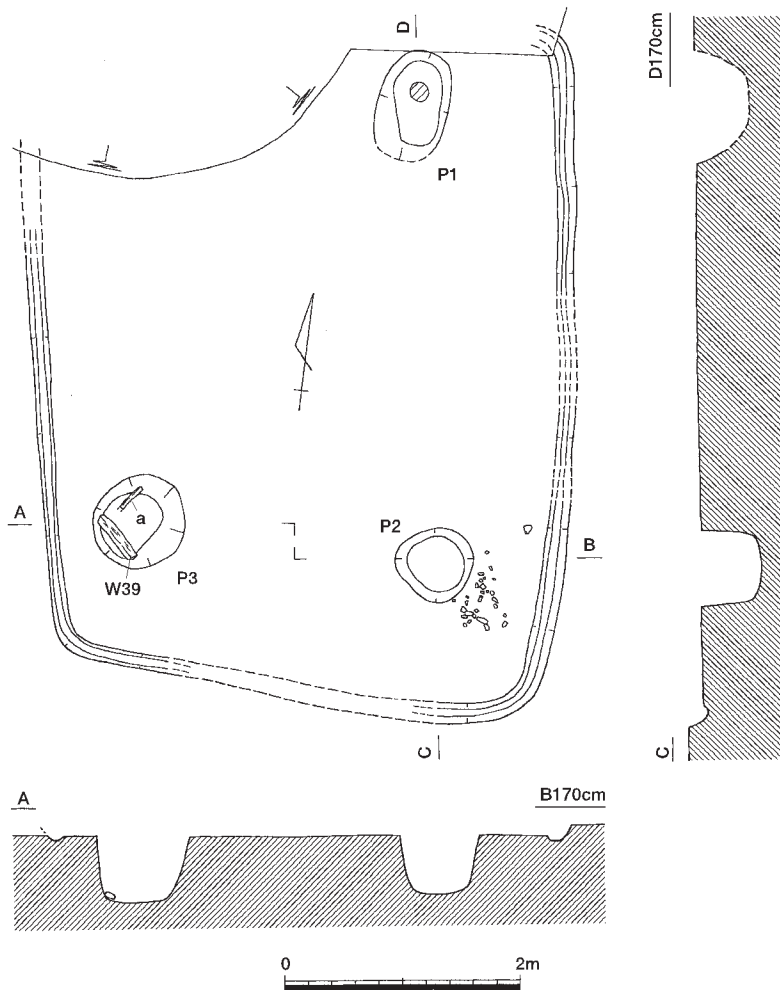
17M区に位置し、竪穴住居25に南接する。調査区内では竪穴住居の北西隅角部を調査したに過ぎず、大半は調査区外に続く。平面形は方形と考えられ、規模は不明である。深さは13cm残存する。主軸はN-25°-Eを指す。壁面では壁体溝を確認し、全周する。支柱穴は調査区内では確認していないが、4本ないし2本支柱穴を有することが想定される。出土した弥生土器片が伊福・弥・後Ⅳ期の古相の特徴を持ち、遺構の時期も当該期に属する。(米田)



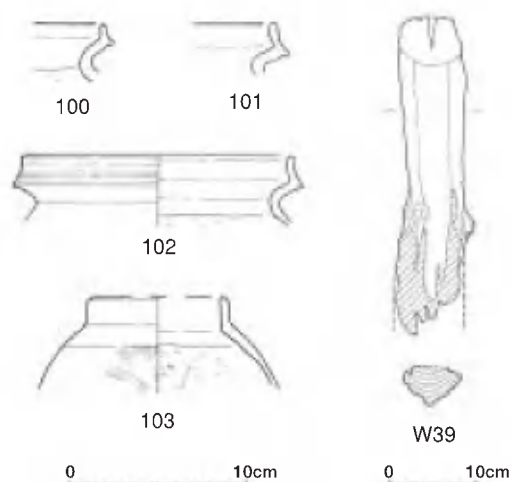
第44図 竪穴住居26 (1/60)

竪穴住居27 (第45・46図、図版8)

竪穴住居27は18L区に位置する。長方形を呈する竪穴住居で、北端部を撓乱により破壊されているが、長辺5.78m、短辺4.43mを測り、復元床面積は25.61㎡を測る。主軸はN-9°-Wである。床面か



第45図 竪穴住居27 (1/60)



第46図 竪穴住居27出土遺物 (1/4・1/8)

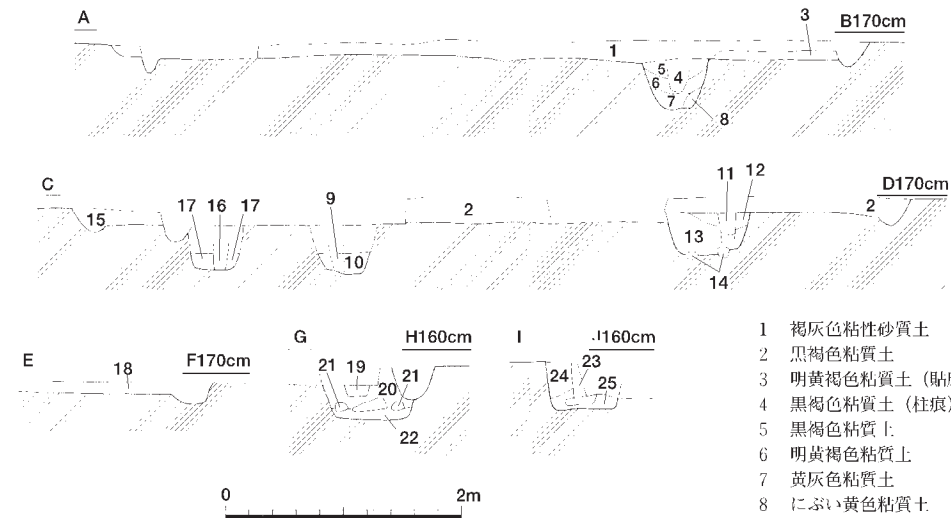
らの土器は少なかったが、床面の南東隅で、およそ70×50cmの範囲で径3～10cm程度の小石が散乱していた。類似した小石は竪穴住居19等からも出土しているが、その形状から敷石など竪穴住居27の内部施設を構成するような性格はないのではないかと考えている。主柱穴は3基検出しているが、本来は4基あったものと考えられる。P1は長楕円形をしており柱痕がある。P3は長径93cmを測る円形の土壇であり、中から礎板2点が検出されている。P3-aは粘土化しており、詳細は不明である。W39は欠損部があるが、残存長35.9cmを測るコナラ属アカガシ垂属の割材を使用している。P3-aの木材がW39より上にあることから、P3-aが柱の基部を支え、それをW39が間接的に受けていたものと考えられる。なお、竪穴住居27からは弥生土器が出土しているが、いずれも小片である。100～102は甕口縁部である。103は短頸壺である。これらの遺物から、竪穴住居27は伊福・弥・後Ⅳ期の時期に比定することができる。(金田)

竪穴住居28・29・30 (第47～50図、巻頭図版2、図版8・23・37)

18M区に位置し、現状では竪穴住居28・29・30の3軒が重複する。このうち、層位的には竪穴住居30が最も新しいが、竪穴住居28・29の層位的な切り合い関係については明らかでない。また、いずれの竪穴住居も溝2に切られている。ちなみに竪穴住居28～30は、攪乱を多分に受けて残存状況が良くないうえ、調査上の理由で東西を二分してそれぞれ調査せざるを得なかったため、平面形、重複関係の把握には苦慮した。

竪穴住居28は18M区南側で確認した。竪穴住居の北半は竪穴住居30に切られ、南側中央部は溝2、攪乱に切られる。また南東隅角部は調査区外に続く。したがって、調査区内に残存する床面積はわずかであった。平面形は方形を呈し、規模は一辺が610cmと推定される。深さは12cm残存する。主軸はN-25°-Eである。床面海拔高は148cmで竪穴住居30より約4cm低いものの、北壁を特定することはできなかった。壁体溝は西・南壁で確認したが、東壁では認められなかった。主柱穴は4本と考えられるが判然とせず、そのうちの2本はP1・2が想定される。いずれの柱穴も柱痕は確認できたが、基礎構造は持たない。遺物は覆土から土師器壺の口縁部104、東側床面直上から碧玉製管玉J3が出土した。遺構の廃絶した時期は伊福・古・前Ⅰ期と捉えられる。

竪穴住居29は18M区東側に位置する。南北は攪乱、西側は竪穴住居30に切られていたため、北東壁面の一部を検出したに過ぎず、残存していた床面もわずかであった。壁面は直線的であることから、平面形は方形と理解できる。主軸はN-32°-Wを指す。なお、壁面には壁体溝が巡る。底面海拔高は152cmであり、竪穴住居30よりも約8cmほど高い。また床面では炭面が確認できた。主柱穴は検出状況からP3が該当すると考えられ、その配置状況からP3付近は竪穴住居の北東隅角部にあたることが想定される。P3では柱痕が確認でき、底面には花崗岩の板石を水平に配し、基礎構造の役割を果たしていたと考えられる。遺物は覆土から土師器の甕105・106、小型丸底壺107、製塩土器108、鉄鏃M11、石錘S8が出土している。時期は伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ期で、出土土器をみると、竪穴住居

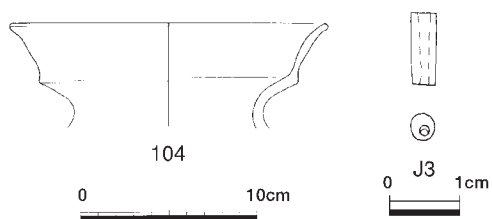


- 1 褐灰色粘性砂質土
- 2 黒褐色粘質土
- 3 明黄褐色粘質土 (貼床?)
- 4 黒褐色粘質土 (柱痕)
- 5 黒褐色粘質土
- 6 明黄褐色粘質土
- 7 黄灰色粘質土
- 8 にぶい黄色粘質土
- 9 黒褐色粘質土 (柱痕)
- 10 明黄褐色粘質土
- 11 黒褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土 (柱痕)
- 13 灰黄色粘性砂質土
- 14 暗褐色粘質土 (礎板痕跡)
- 15 灰色粘性砂質土
- 16 黒褐色粘質土 (柱痕)
- 17 明黄褐色粘質土
- 18 黒褐色粘性砂質土
- 19 褐色粘質土 (柱痕)
- 20 黄灰色粘質土
- 21 褐灰色粘性砂質土 (礎板痕跡)
- 22 黄褐色粘質土
- 23 褐色粘質土 (柱痕)
- 24 灰色粘質土
- 25 灰色粘質土

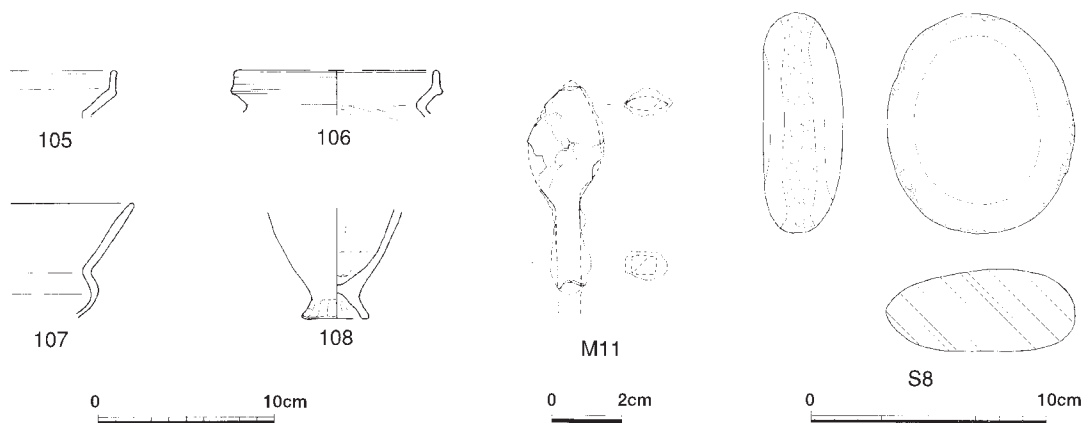
第47図 竪穴住居28~30 (1/60)

28よりは古いと考えられる。

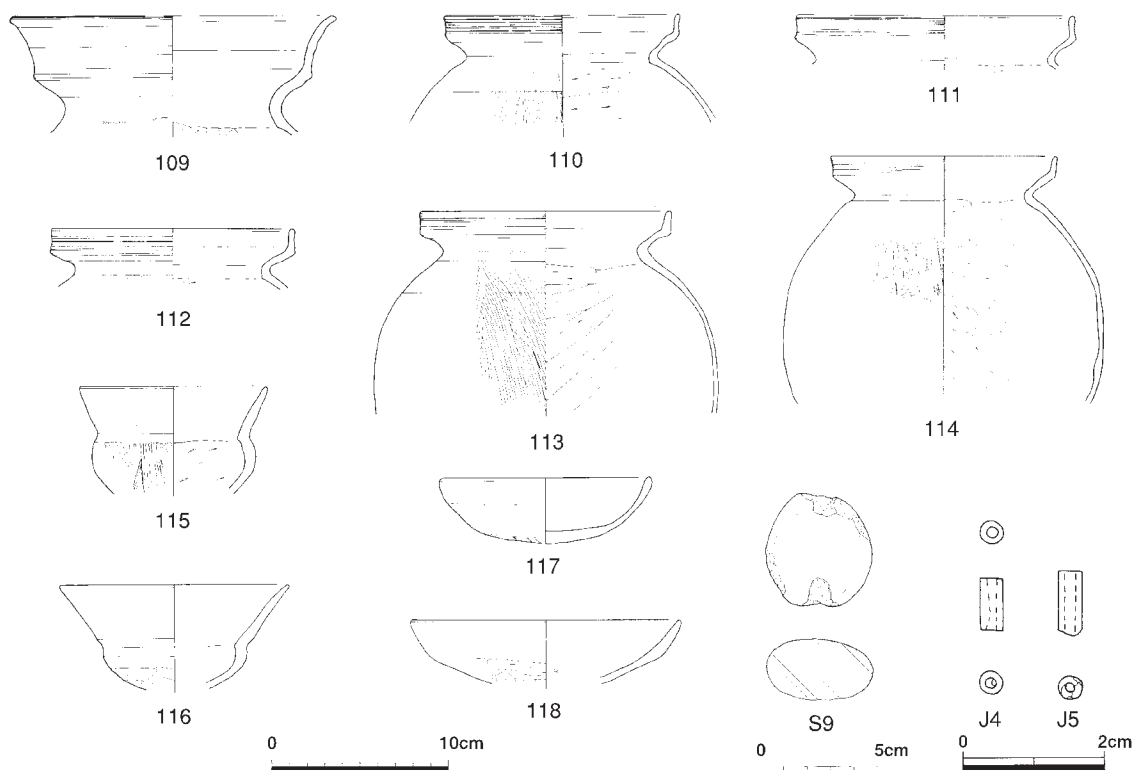
竪穴住居30は18M区中央に位置し、竪穴住居28・29を切る。中央部は攪乱を受け、また溝2によって床面が東西に分断されているような検出状態であったため、残存していた床面は極めて狭い。平面形は方形で、規模は長軸610cm、短軸590cmを測る。深さは約20cm残存する。主軸はN-12°-Wを示す。壁体溝は現状では断続しているが、本来は全周していたと考えられる。



第48図 竪穴住居28出土遺物 (1/4・1/1)



第49図 竪穴住居29出土遺物 (1/4・1/2・1/3)



第50図 竪穴住居30出土遺物 (1/4・1/3・1/1)

支柱穴は4本で、P4・5・6・7が相当する。P5は柱痕があり、底面には2本の礎板を並列させ、その直上に花崗岩の板石を置いて基礎構造をなしていた。P6では柱痕と粘土化した礎板痕を確認し、礎板は2本が並列するように配されていた。P4・7では柱痕が認められ、また底面に礎板が設けられていないことを確認した。P4・5の柱間より北側には高床部が存在しており、中央の床面と約5cmの段差を有していた。出土遺物は、土師器の壺109、甕110～114、小型丸底壺115・116、鉢117・118、石錘S9、碧玉製管玉J4・J5があり、いずれも覆土からの出土である。遺構の埋没時期は伊福・古・前Ⅱ期で、甕114からその新相に比定される。(米田)

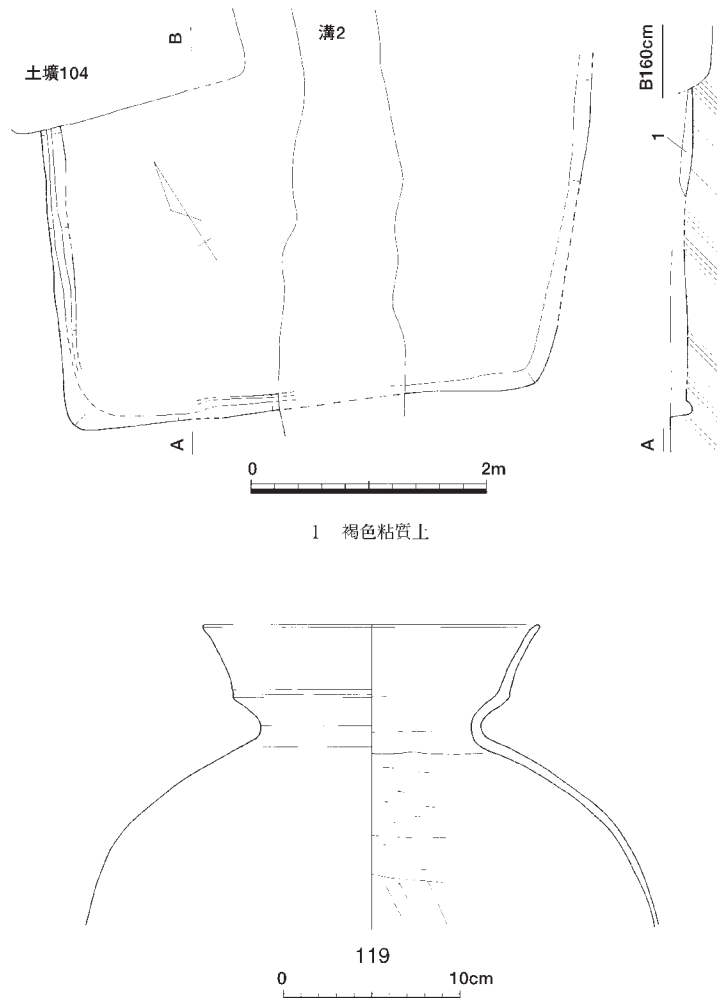
竪穴住居31 (第51図、図版9)

19K区に位置する竪穴住居であり、平面形は方形を呈する。調査区内では南辺を確認できたが、北辺は調査区外に続く。北東隅角部は河道2、北西隅角部は土壌104によって削平されていたために確認できなかった。また竪穴住居の中央部は溝2によって削平されている。本竪穴住居の床面では、河道2の水の浸食による影響のため、柱穴を確認することができなかった。

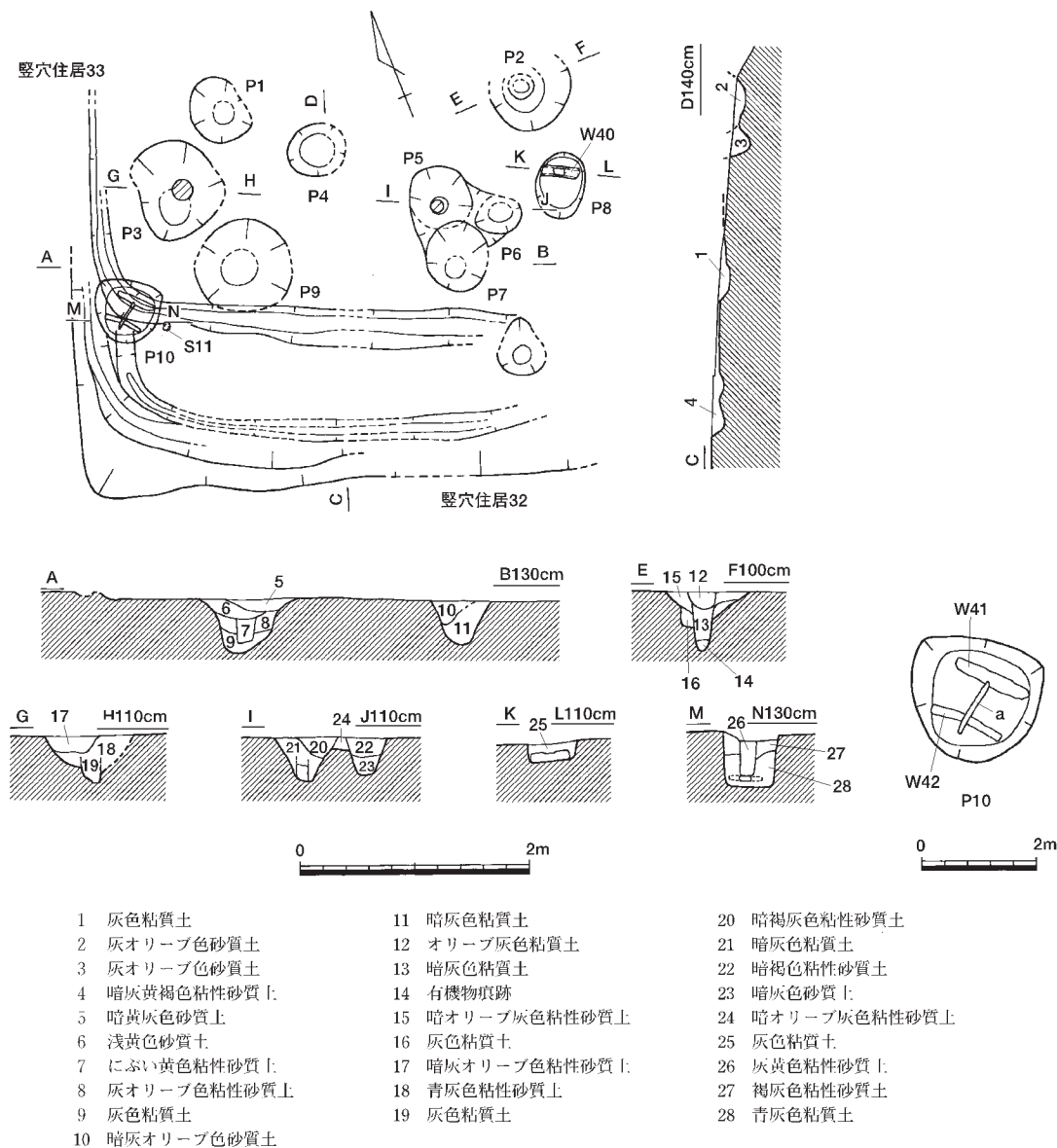
遺物は土師器壺119が出土しており、住居の時期は伊福・古・前Ⅱ期と判断できる。(安永)

竪穴住居32・33 (第52・53図、巻頭図版2、図版9・23・36・37・40)

竪穴住居32・33は20K・20L区に位置する。両住居は河道2によって上面が失われており、かろうじて床面と壁体溝の一部を検出することができた。2条の壁体溝から竪穴住居2軒が想定され、南側を竪穴住居32、北側を竪穴住居33とする。これらの竪穴住居は土層断面観察から、竪穴住居32が古く、竪穴住居33が新しいものと考えられる。竪穴住居32ではかろうじて床面が残存していたが、竪穴住居33では床面はほとんど残存していなかった。両住居内からは灰穴や柱穴と考えられるおよそ10基にもおよぶピットが検出された。しかし、これらの柱穴と竪穴住居の対応関係については確証がなく、不明といわざるを得ない。P4は底部付近で炭層がみられ、炉であった可能性がある。P2は

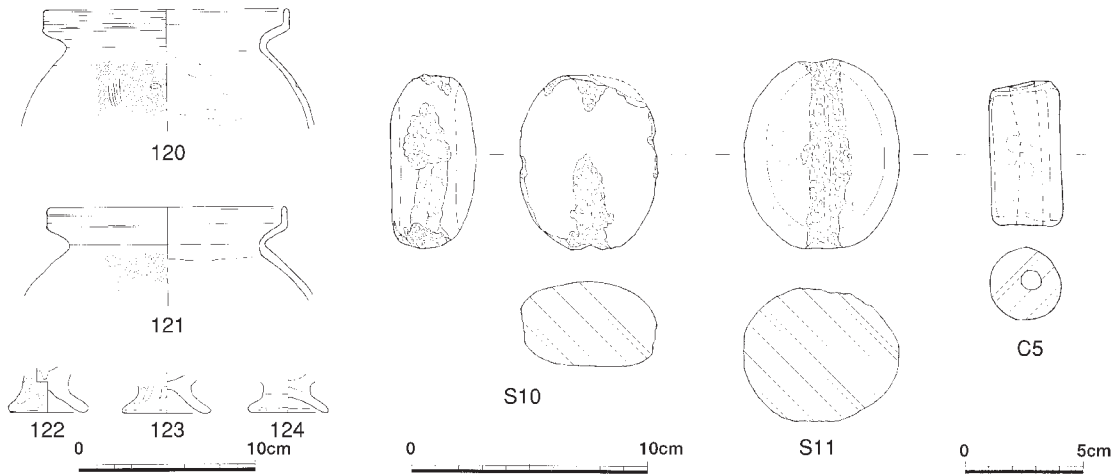


第51図 竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第52図 竪穴住居32・33 (1/60・1/30)

径約73cmを測る柱穴であるが、柱痕の下部より有機物が検出され（第14層）、分析の結果、籾殻であることが判明した。柱を据え付ける前に籾殻を敷いたものと考えられる。P5・P6・P7はいずれも円形の土壇である。P5で柱痕がみられた。またP6・P7の調査過程において埋土から木質片を検出している。調査当時は、あまり礎板が存在するといった意識がなく、また、木質もきわめて微量であったこともあり、柱根の残片ととらえ、とくに注意を払っていなかったが、その後、他の竪穴住居でも多くの礎板が検出されはじめ、その状況から判断すると、これらの柱穴にも礎板が存在していた可能性があった。P8では円形の土壇の底部で礎板（W40）を検出した。クリの丸太材を使用し、中央部分を浅く削っている。P10は径約60cm、深さ52cmを測る柱穴で、底からちょうど「H」字状に配置された礎板を検出した。柱を受けるP10-aは残存状況がよくなかったが、コナラ属クヌギ節の木材を使用している。W41・W42はともにコナラ属コナラ節の丸太材を使用している。竪穴住居



32・33から出土した遺物は多くはない。120・121は甕であり、口縁部に櫛描沈線が施されている。122～124は製塩土器の脚部である。S10は敲石、S11は石錘である。ともに紛岩製である。C5は上錘である。これらの遺物から竪穴住居32は伊福・古・前Ⅱ期に比定することができる。(金田)

竪穴住居34～36

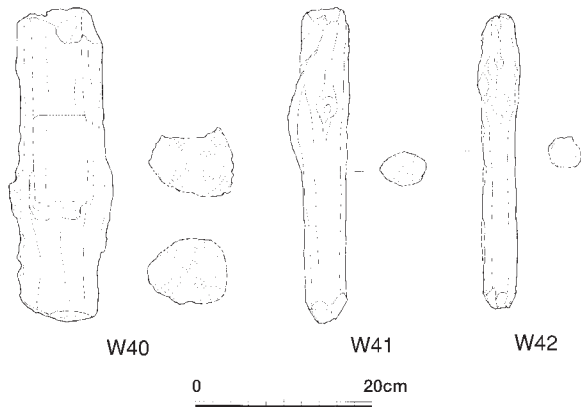
(第54～56図、巻頭図版2、図版9・23・36・37・40)

20L区南西に位置する。竪穴住居34～36が重複し、層位的に竪穴住居36が最も新しい。

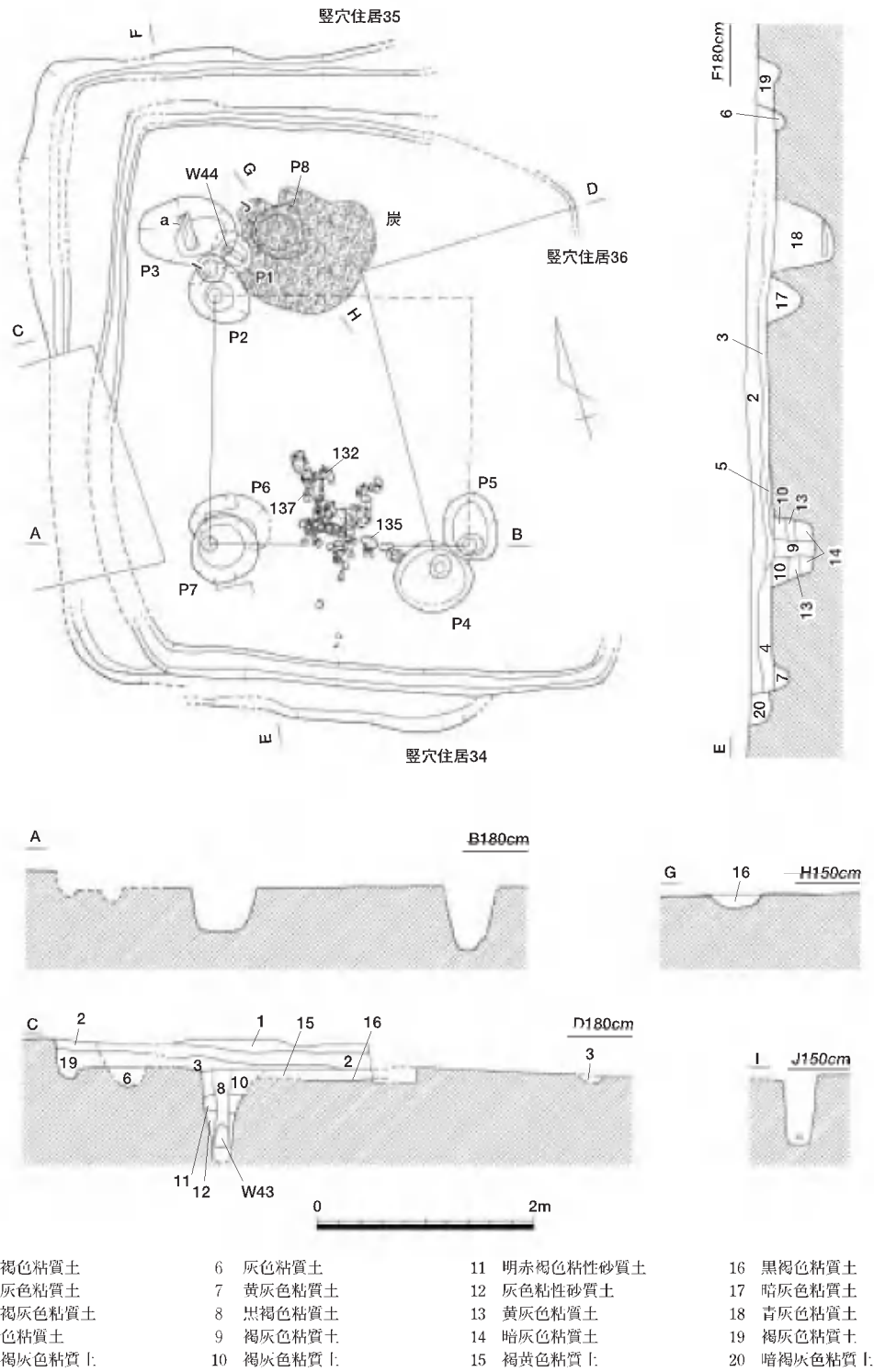
竪穴住居34は大半を竪穴住居36に切られており、南壁の一部を検出したに過ぎない。また本竪穴住居は後述する竪穴住居37・38を切っている。平面形は方形と考えられ、規模は定かでない。主軸はN-22°-Eである。遺物は図化し得なかったが、弥生土器の壺・高杯、土師器甕の小片が出土しており、時期は伊福・古・前Ⅰ期と考えられる。

竪穴住居35は北・西壁を確認するにとどまり、大半を竪穴住居36に切られる。床面海拔高は竪穴住居36より4cm低い。平面形は方形を呈し、規模は一辺が542cmを測る。主軸はN-15°-Eを指す。確認した壁面では壁体溝が巡っている。主柱穴は4本と想定され、柱穴の切り合い関係、配置状況からP3・4・6が該当すると考える。P3の底面には、1本の礎板aが設けられており、主軸は竪穴住居の中心に向かって平行する。樹種はコナラ属コナラ節で、割材を使用している。なお、礎板aは付着炭化物の¹⁴C年代測定を行っている(小林謙一ほか報告)。P4・6の礎板については、痕跡すら確認できなかった。出土遺物は北西隅角部の床面直上から土師器鉢144、覆土から砥石S13が出土している。時期は切り合い関係から伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

竪穴住居36は竪穴住居34・35を切る。東・西壁の一部は攪乱を受けているが、各隅角部を特定することができた。平面形は方形で、長辺505cm、短辺約440cmを測る。主軸はN-17°-Eを示す。壁面

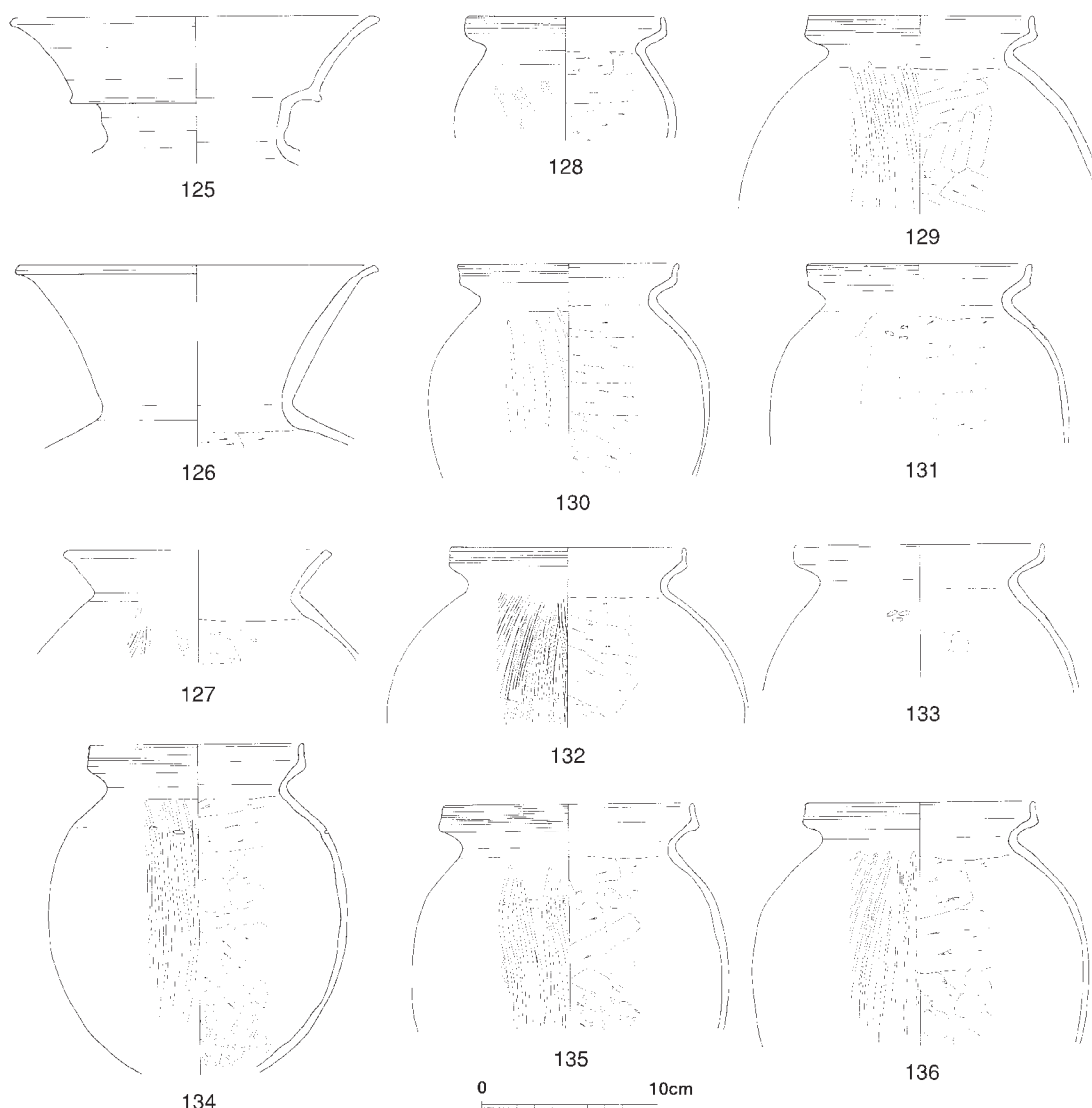


第53図 竪穴住居32・33出土遺物(1/4・1/3・1/8)



第54図 竪穴住居34~36 (1/60)

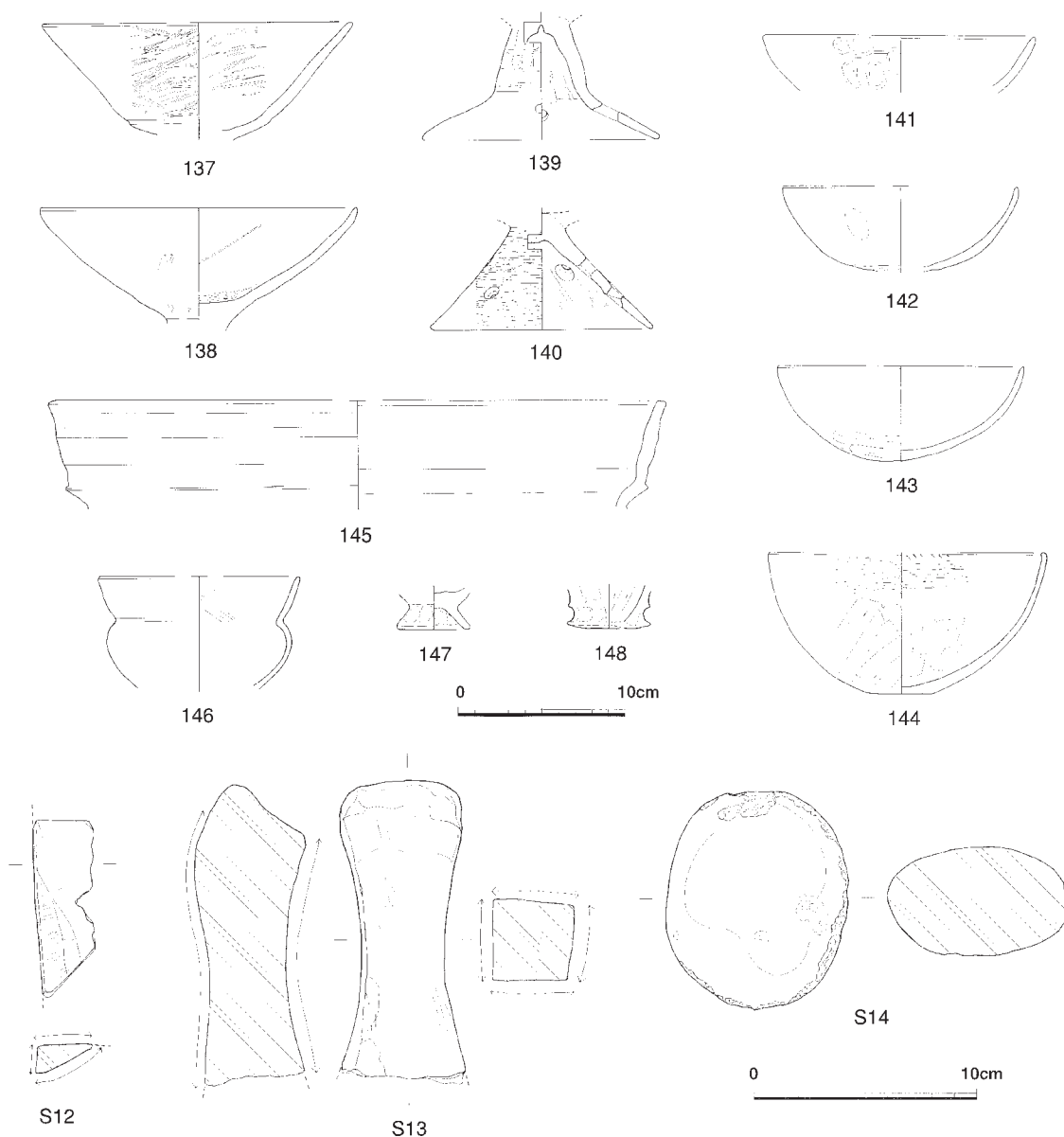
には壁体溝が全周していると考えられる。主柱穴は4本であり、そのうちP2・5・7を確認した。いずれも礎板は持たないが、P2では柱根、P5では柱痕を確認している。またP1は礎板W44を持つ柱穴であり、配置地点から竪穴住居34~36のいずれかに伴う可能性が高いが、調査時には竪穴住居



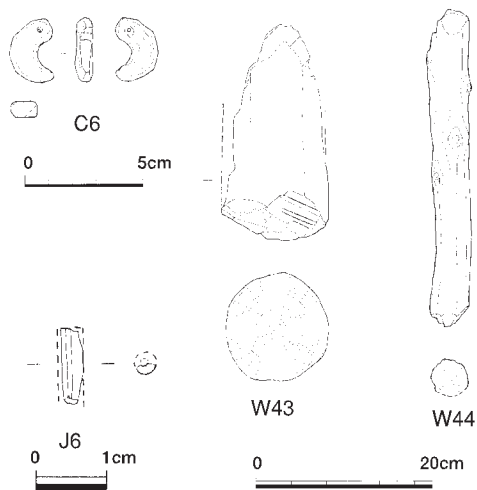
第55図 竪穴住居36出土遺物 (1/4)

35より古い竪穴住居に伴うものと判断した。床面北側中央部では炉と想定されるP8を確認し、竪穴住居36に伴うと考えられる。P8の平面形は径約50cmの不整円形を呈し、深さは12cmを測る。埋土は炭化物で充填された状態であり、P8の壁・底面は、強い被熱を受けて硬化していた。被熱部分の色調は黄褐色であるが、この部分は鉄分沈着層とも相成っていたため、この色調は被熱の状態を表すものではない。P8の周辺はわずかな傾斜を有しており、P8を中心に約120cmの範囲に埋土と同質の炭化物が面的に広がり、炭面はP8に近くなるほど厚く堆積していた。竪穴住居の南半中央部では上層において土器溜まり状に土器が集中しており、これらの多くは破損していた。ここから出土した土器は、甕128・130～132・134・136、高杯139、鉢141・143である。甕の比率が圧倒的に高く、甕131・134は肩部に米粒状の刺突を持つ。これらは意図的に破損して廃棄された可能性があるが、出土位置が竪穴住居35の上層であることから、住居廃絶との直接的な関連性は低いとみる。

また上記以外の土器は、壺125・126、甕127・129・133・135、高杯137・138、器台の脚部140、鉢142、小型丸底壺146、製塩土器147・148などがあり、これらは砥石S12、叩き石S14、碧玉製管



第56図 竪穴住居35・36出土遺物
(1/4・1/3・1/1・1/8)



玉 J 6 とともに覆土から出土した。また土製勾玉 C 6 は床面直上で認められた。さらに偶蹄目（イノシシ類か）の肩甲骨、シカの角、ニホンジカの臼歯（下顎）などの骨角類も比較的多く出土しているほか、ガラス滓小片 0.24 g が覆土から出土している。

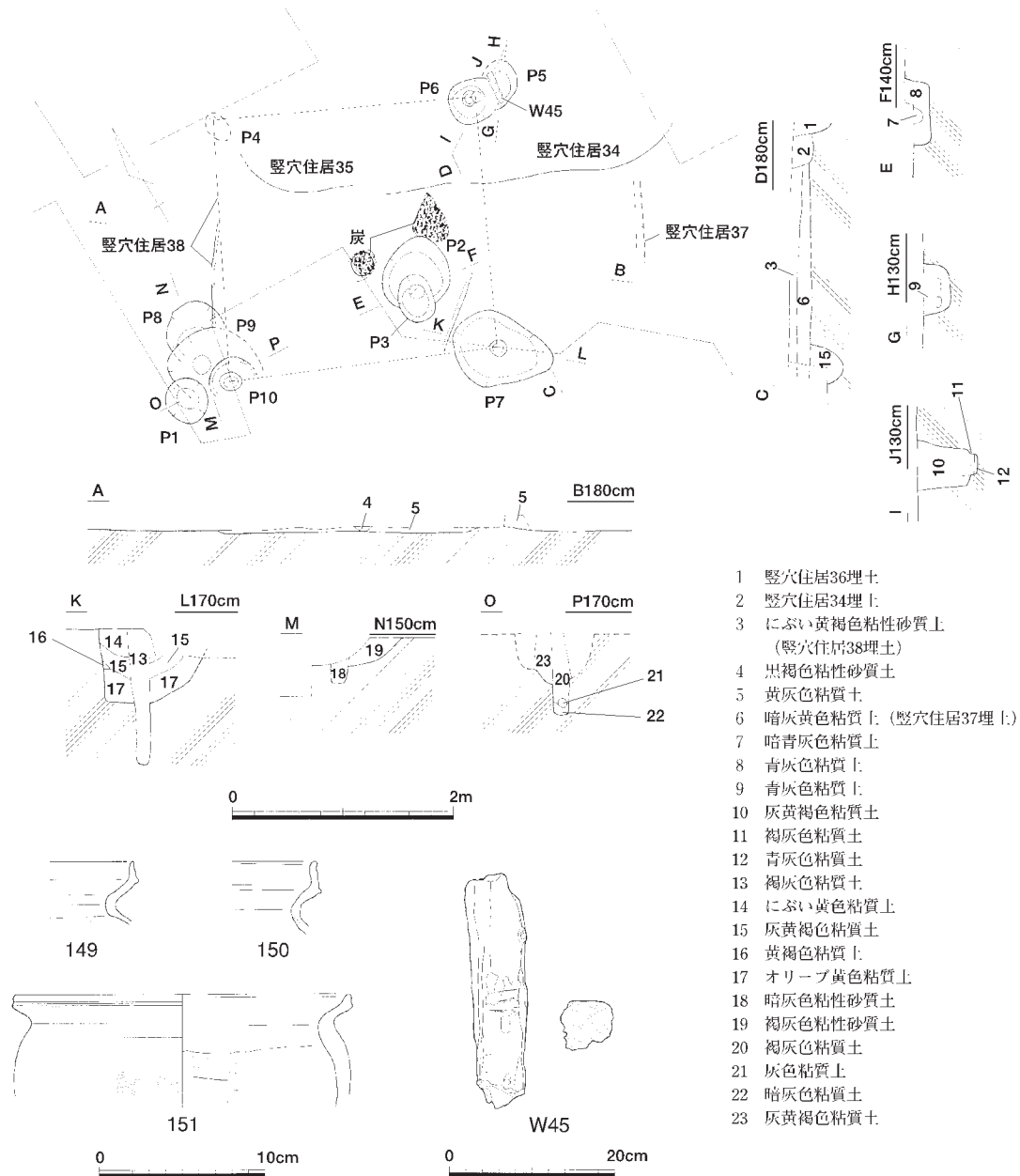
本竪穴住居が埋没した時期は、出土遺物から伊福・古・前Ⅱ期と捉えて差し支えないと考える。
(米田)

竪穴住居37・38 (第57図、図版10)

19・20LM区の交点に位置する。2軒の竪穴住居が重複し、竪穴住居37は竪穴住居38より層位的に古い。ともに北側は竪穴住居34～36に切られ、東西・南側は攪乱を受ける。

竪穴住居37は床面と柱穴の一部と炭面を確認したに過ぎない。床面海拔高は136cmであり、床面の一部では炭面が約40×30cmの範囲で認められた。礎板W45を有しているP5や炭面に接しているP2が本竪穴住居に伴う主柱穴の可能性はあるが、積極的な根拠はない。遺物は覆土から出土した弥生土器の甕150、鉢151があり、時期は伊福・弥・後Ⅳ期である。

竪穴住居38は床面と柱穴を確認したのみで、規模は不明である。床面の一部では高床部が確認でき、平面形は方形と想定される。主軸はN-23°-Eである。主柱穴は4本でP4・6・7・10が該当し、



第57図 竪穴住居37・38 (1/60)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

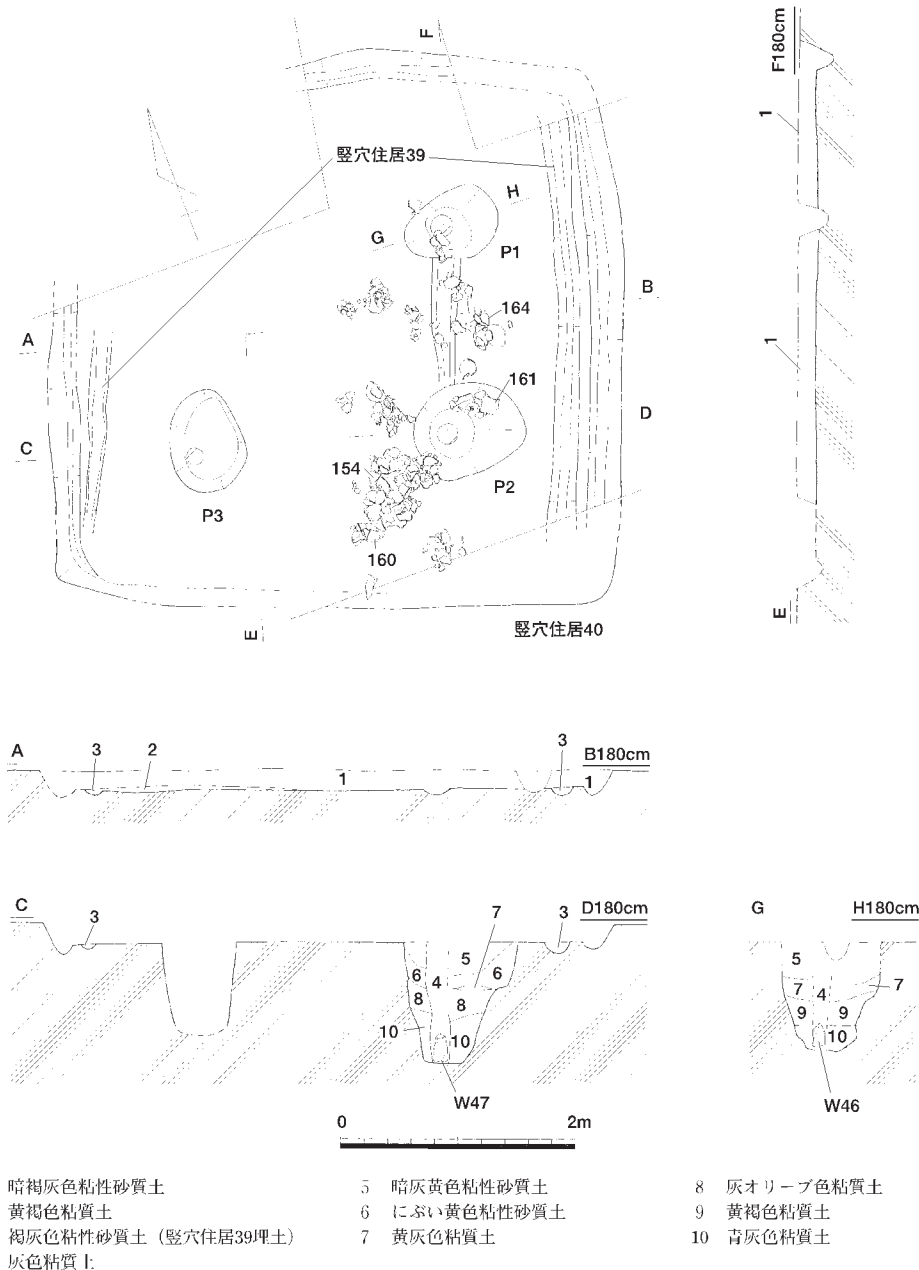
いずれも柱痕が認められた。各柱穴は基礎構造を持たず、P7では約55cm、P10では約30cmも柱痕が掘り方底面から沈下していることを確認した。遺物のうち図化できたのは弥生土器甕149のみであり、覆土から出土した。埋没時期は伊福・弥・後Ⅳ期で、層位的に井戸3、竪穴住居37よりも新しく、竪穴住居34よりも古い。

(米田)

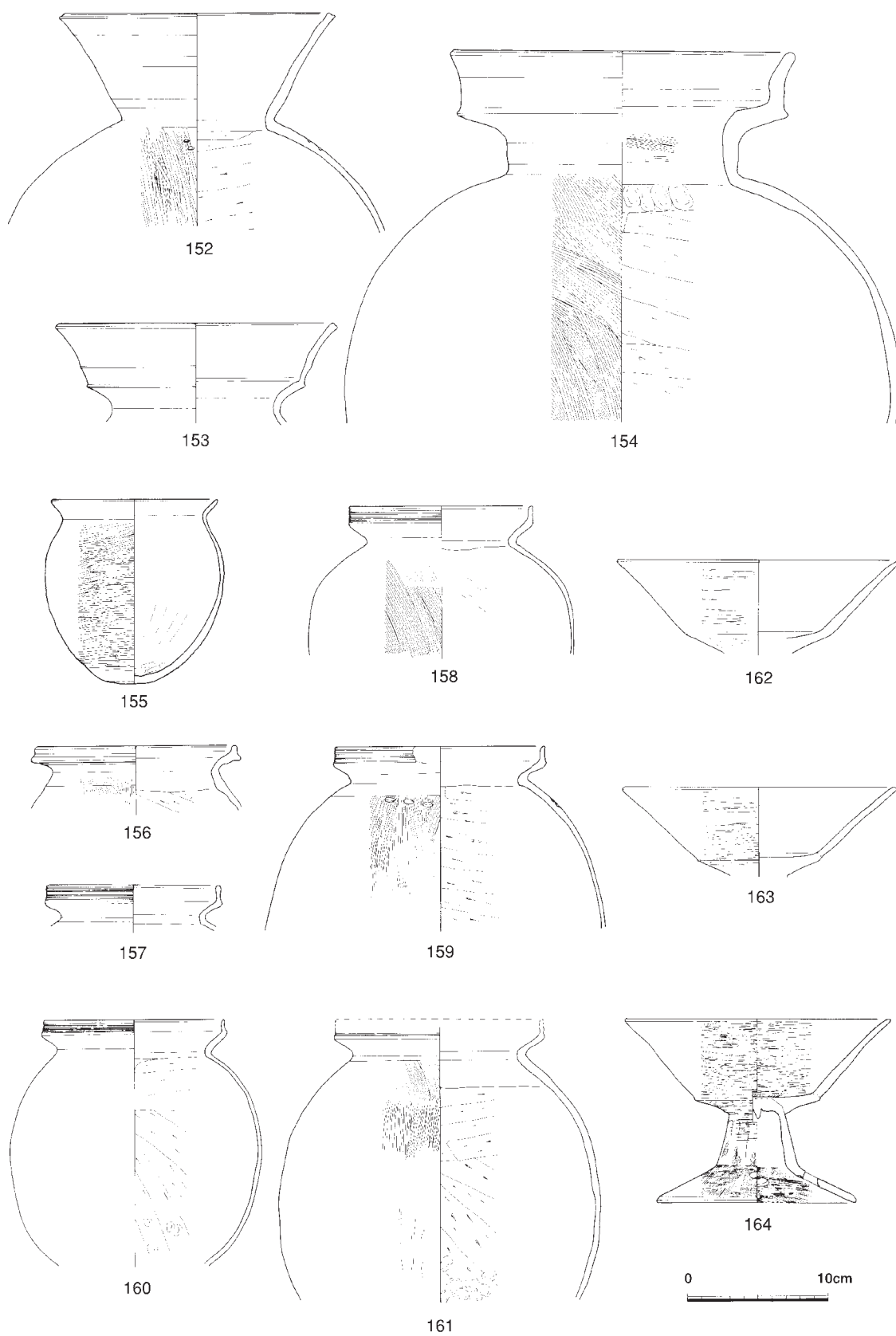
竪穴住居39・40 (第58～60図、図版10・25・37・40)

19M区に位置し、竪穴住居39・40の2軒が重複しており、層位的な切り合い関係では竪穴住居39の方が古い。ともに竪穴住居の北東・南東隅部は攪乱を受けている。

竪穴住居39は東西の壁体溝のみを確認した。平面形は方形を呈し、一辺395cmを測る。主軸はN—



第58図 竪穴住居39・40 (1/60)

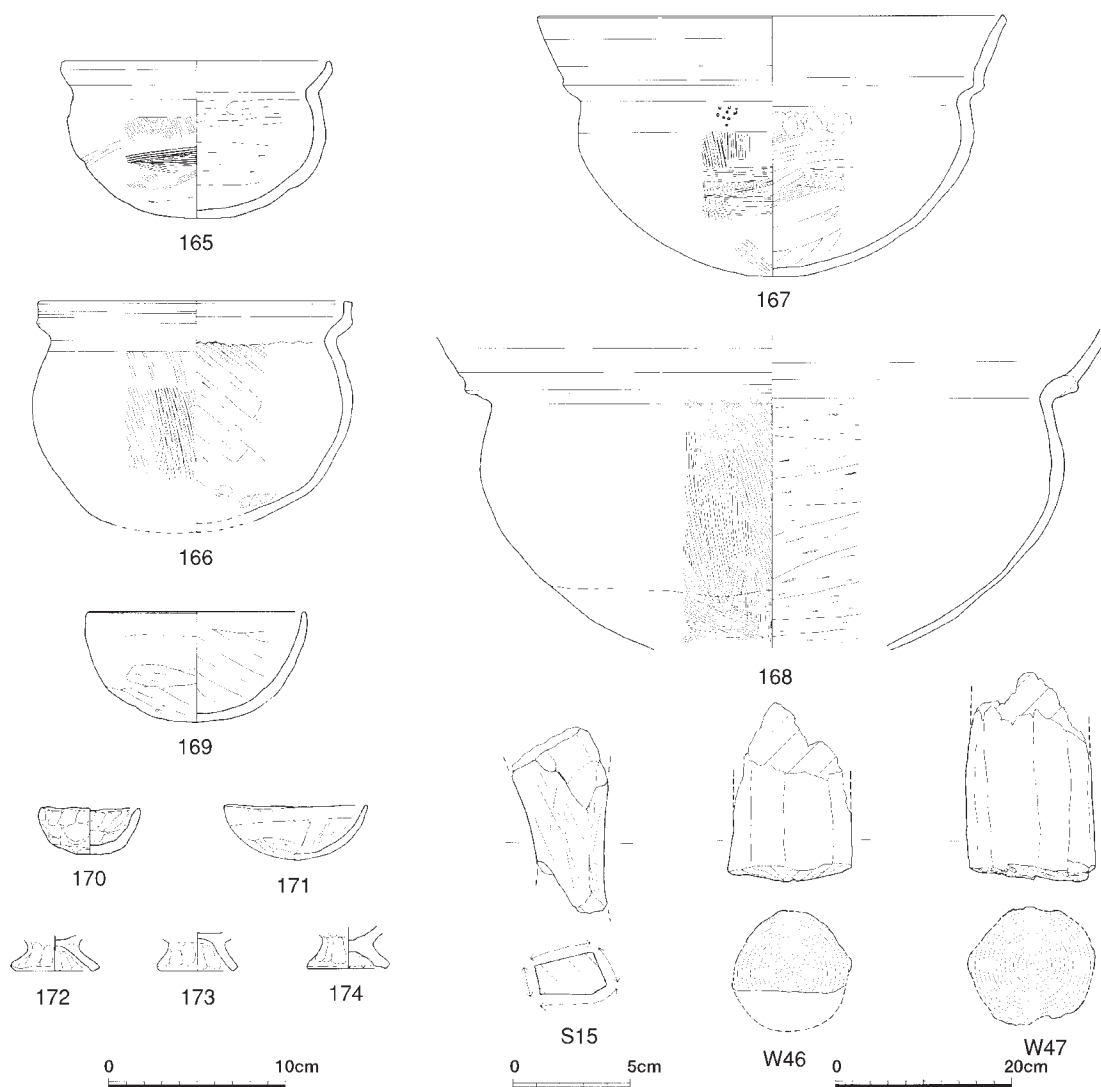


第59図 竪穴住居40出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

18°-Eを指す。床面は竪穴住居40に切られている。主柱穴は竪穴住居39に踏襲されていると考えられる。遺物は製塩土器174のほか、弥生土器の壺・高杯・鉢、土師器の甕などの小片が出土している。時期は伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ期で、竪穴住居40よりも古い。

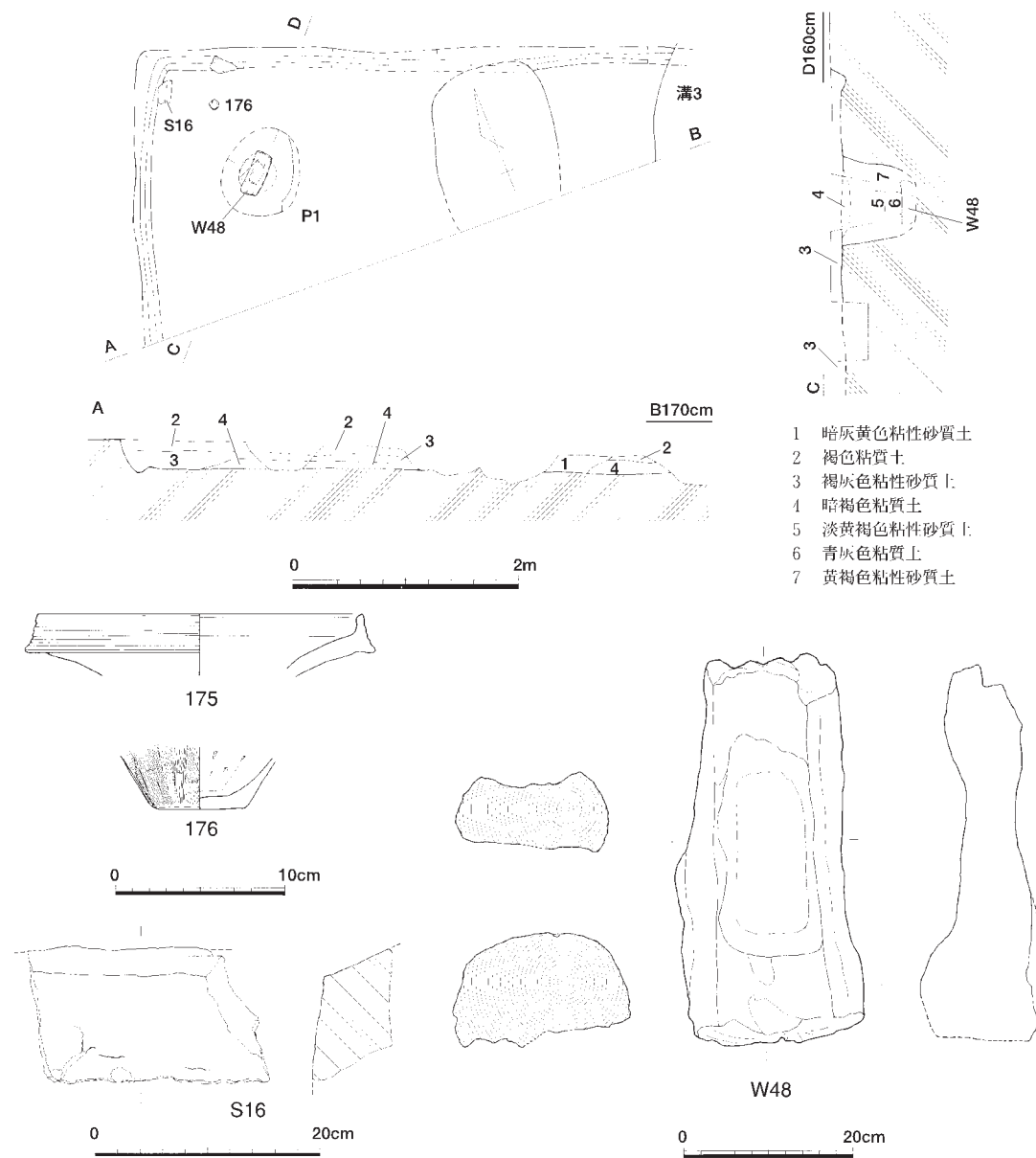
竪穴住居40は平面形が方形を呈し、規模は長辺455cmを測る。主軸は竪穴住居39と同じで、竪穴住居39が拡張されたと考えられる。壁面には壁体溝が巡っているが、南壁では確認できない。主柱穴は4本のうち3本を確認し、P1・2間は幅約20cmの溝で連結されていた。P1・2では柱根、P3では柱痕を確認し、径15cm前後の柱を持つ。柱根の樹種はW46がシイ属、W47がコナラ属コナラ節である。柱穴底面では礎板等の基礎構造は設けていない。出土遺物の多くは竪穴住居39内の東半に集中していたが、いずれも床面からは浮いており、埋没過程で投棄されたものとする。遺物は弥生土器の甕156、鉢165・169、土師器の壺152～154、甕155・157～161、高杯162～164、鉢166～168、ミニチュア土器170・171、製塩土器172～173、砥石S15があり、170・172は床面付近、他は東半上層の土器群から出土した。甕159、鉢167の肩部には刺突文がある。埋没時期は伊福・古・前Ⅱ期と考えられる。(米田)



第60図 竪穴住居39・40出土遺物 (1/4・1/3・1/8)

竪穴住居41 (第61図、巻頭図版2、図版10・23・40)

竪穴住居41は20M区に位置する。平面形が方形を呈し、北西隅を検出したのみである。一辺5 m以上を測る竪穴住居で、床面の周辺に壁体溝が巡る。主軸はN-20°-Eである。支柱穴は1本のみの検出であるが、その位置から4本柱の竪穴住居が想定される。P1は長径80cm、短径推定70cm、床面からの深さ65cmを測る楕円形の柱穴である。柱痕がみられ、その下から礎板(W48)が出土した。礎板(W48)は全長45.8cm、幅22.9cm、厚さ13.3cmを測り、コナラ属コナラ節に属する丸太材を削りだして使用している。中央付近が長方形にややくぼんでおり、ここで柱を受けたものと推定できる。竪穴住居の埋土や床面から弥生土器等の遺物が出土した。175は壺の口縁部、176は甕の底部である。S16は花崗斑岩製の石で、表面がやや平滑であることから人為的に使用されたものと考えているが、他に明瞭な加工痕跡や使用痕跡はない。これらの遺物から竪穴住居41は伊福・弥・後Ⅳ期に比定できる。(金田)

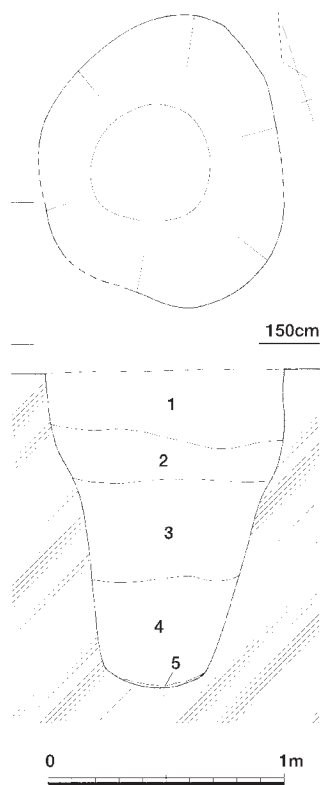


第61図 竪穴住居41 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/6・1/8)

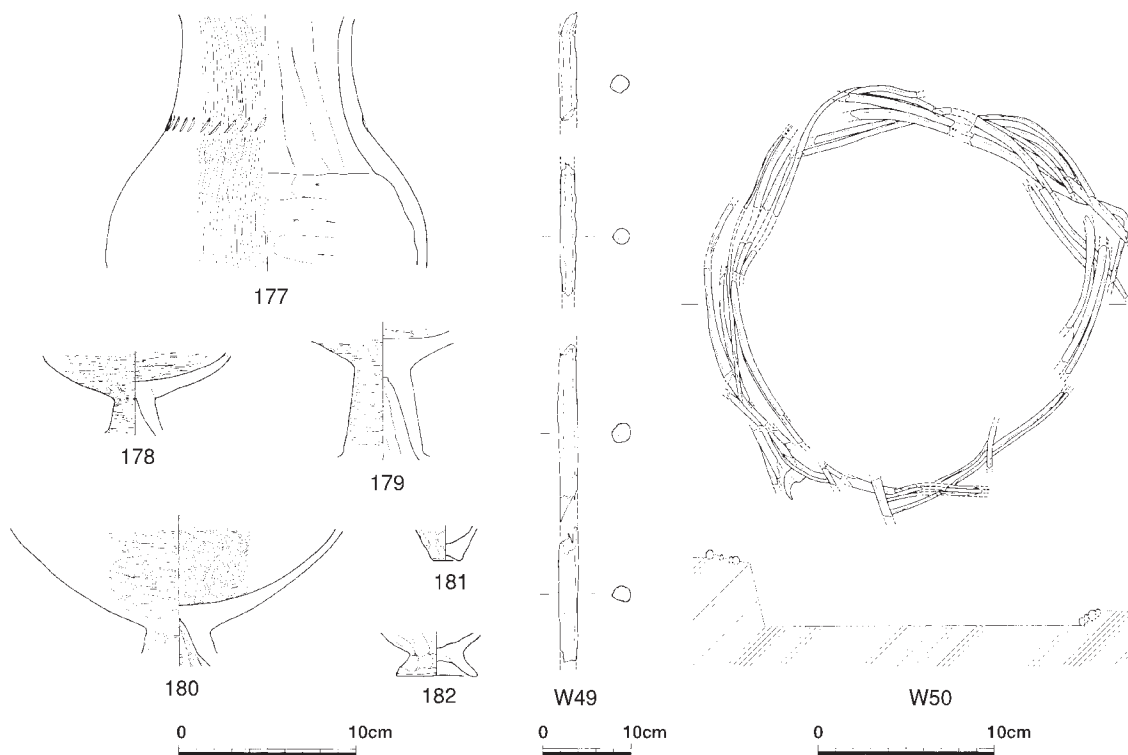
3 井戸

井戸 1 (第62図、図版11・40)

井戸 1 は16L区に位置する。竪穴住居 2 の床面下層から出土した。長径124cm、短径104cmのやや楕円形に近い平面形をもち、住居床面からの深さは134cm、底面の標高は 5 cm である。その形状から素掘りの井戸と判断した。井戸 1 の埋土は第 1・2 層が粘性砂質土であるのに対し、第 3・4 層は粘質土であった。井戸の最下層では植物質の有機物が層状に薄く堆積していた。井戸 1 の内部からは弥生土器や木製品等が出土したが、いずれも破片である。177は長頸壺である。肩部に刺突文が施されている。178~180は高杯である。いずれも脚注部を中心とする部位である。178・179はいわゆる水こし粘土を使用する典型的な胎土であるが、180は178・179ほど精良な胎土ではない。181は手づくね土



- | | |
|-------------|-----------|
| 1 暗黄灰色粘性砂質土 | 4 暗灰色粘質土 |
| 2 黄灰色粘性砂質土 | 5 植物質有機物層 |
| 3 青灰色粘質土 | |



第62図 井戸 1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/8)

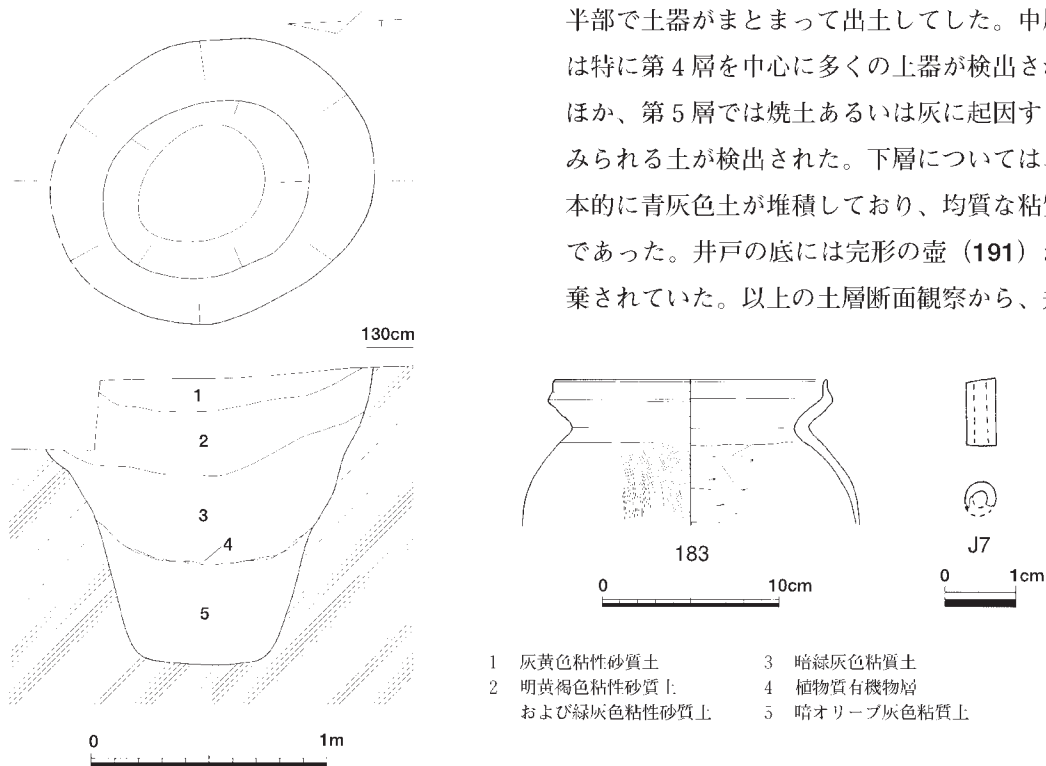
器の底部である。**182**は製塩土器である。**W49**はいずれも破片であるが、木取りが同一であることがら、同一個体と推測した。柄の一部と考えられる。残存している部分で長さ約62.1cmを測る。同定は行っていないが、針葉樹である可能性が高いと考えている。**W50**は環である。ところどころで破損しているが、直径はおよそ24cmを測る。蔓を使用している。井戸1の中程に位置する第2層で検出された。また、環の清掃中に、図面で示した位置から、動物の歯牙が出土した。同定を依頼したところ哺乳綱に属する小動物の下顎の牙であるとの報告を得た。

なお井戸1の時期であるが、これらの出土遺物から伊福・弥・後Ⅲ期の時期に比定できる。(金田)
井戸2 (第63図、巻頭図版2、図版11)

井戸2は17K区に位置する。竪穴住居20の東端下層で検出された。井戸2は楕円形に近い平面形態をもち、長径137cm、短径115cm、床面からの深さは120cmを測る。井戸底面の標高はマイナス3cmである。井戸内には粘性砂質土や粘質土が堆積していた。第3層下部の標高約1.4m付近で植物質有機物層がみられた。井戸2から弥生土器などが出土したが、その量はあまり多くない。**183**は甕である。口縁部だけの破片であり、口径15.4cmを測る。**J7**は碧玉製の管玉であり、片側が欠けているが、全長9.8mmを測る。井戸2の下層から出土した。その他に高杯の小片も出土している。

これらの出土遺物から、井戸2は伊福・弥・後Ⅲ期の時期に比定することが可能であろう。(金田)
井戸3 (第64～66図、巻頭図版2、図版11・26・40)

井戸3は19L区に位置する。楕円形のプランをもち、長径約153cm、短径105cmを測る。井戸の深さは検出面から219cmを測る。底面は標高マイナス32cmを測る。井戸は半裁して土層断面の観察を行ったのち、大きく上層(第1～3層)、中層(第4～8層)、下層(第9～11層)に区分して、遺物等の取り上げをおこなった。上層では、第2層の下半部で土器がまとまって出土してした。中層では特に第4層を中心に多くの土器が検出されたほか、第5層では焼土あるいは灰に起因するとみられる土が検出された。下層については、基本的に青灰色土が堆積しており、均質な粘質土であった。井戸の底には完形の壺(**191**)が廃棄されていた。以上の土層断面観察から、井戸



第63図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/1)

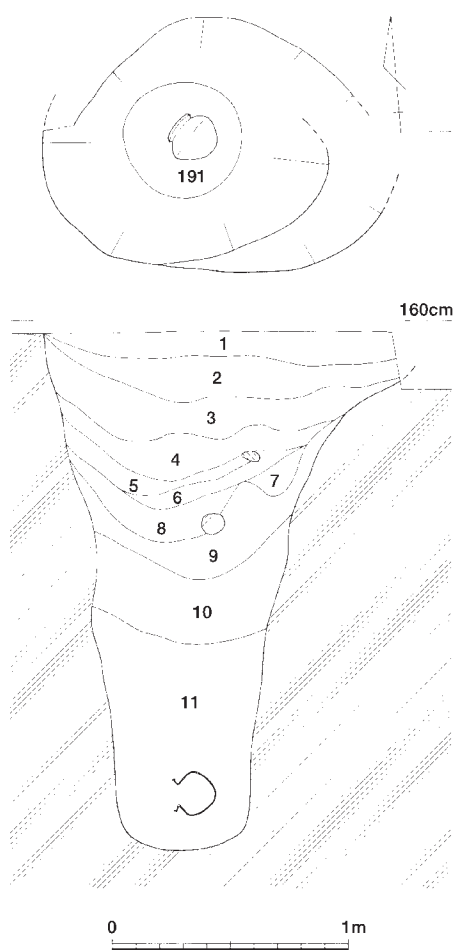
第3章 発掘調査の概要

3は掘削後、下層の9層が堆積するまで機能していたと考えられ、井戸の廃棄にあたって上層や中層に相当する土砂が投げ入れられたと考えられる。また、井戸3廃絶後に、竪穴住居38の北西の柱穴が井戸3上面から掘削されており、土層断面図では、柱穴の断面が明瞭に示されていないが、第7層がこれに相当すると考えられる。

井戸3からは弥生土器を中心とする多くの遺物が出土した。以下にその概要を出土した層ごとに述べる。上層からは**184**の壺、**198**の高杯等が出土した。他にも多数の破片が出土しているが、中層や下層に比べると、上層では破片も含めて甕の割合が少なく、**184・198**のように装飾性のある器種や壺等の破片がめだつ。これらは、いずれも口縁部外面に鋸歯文や竹管文を施し、装飾性に富んだものである。中層からは**185・186・188・192・194・196・199・200・202・203・205・209・211**等が出土した。中層は土層断面の観察から井戸3の廃棄直後に捨てられた土器群と推定され、器種としては甕の破片がめだつ。そのうち、**192**は口径14cm、器高21.4cmを測り、口縁部が上方につまみ出されている。**194**は底部が一部欠損しているが、器高24.7cmを測る。口縁部が大きく上方に拡張している。また、肩部に米粒状の圧痕を観察することができる。高杯は短脚のもので、**199**のように浅い皿状の杯部をもつものと、**202・203**のように口縁端部が大きく拡張するものがある。なかでも**203**は全体的に丁寧な作りで胎土も精良なものであった。下層からは**189・190・191・193・195・206・210・W**

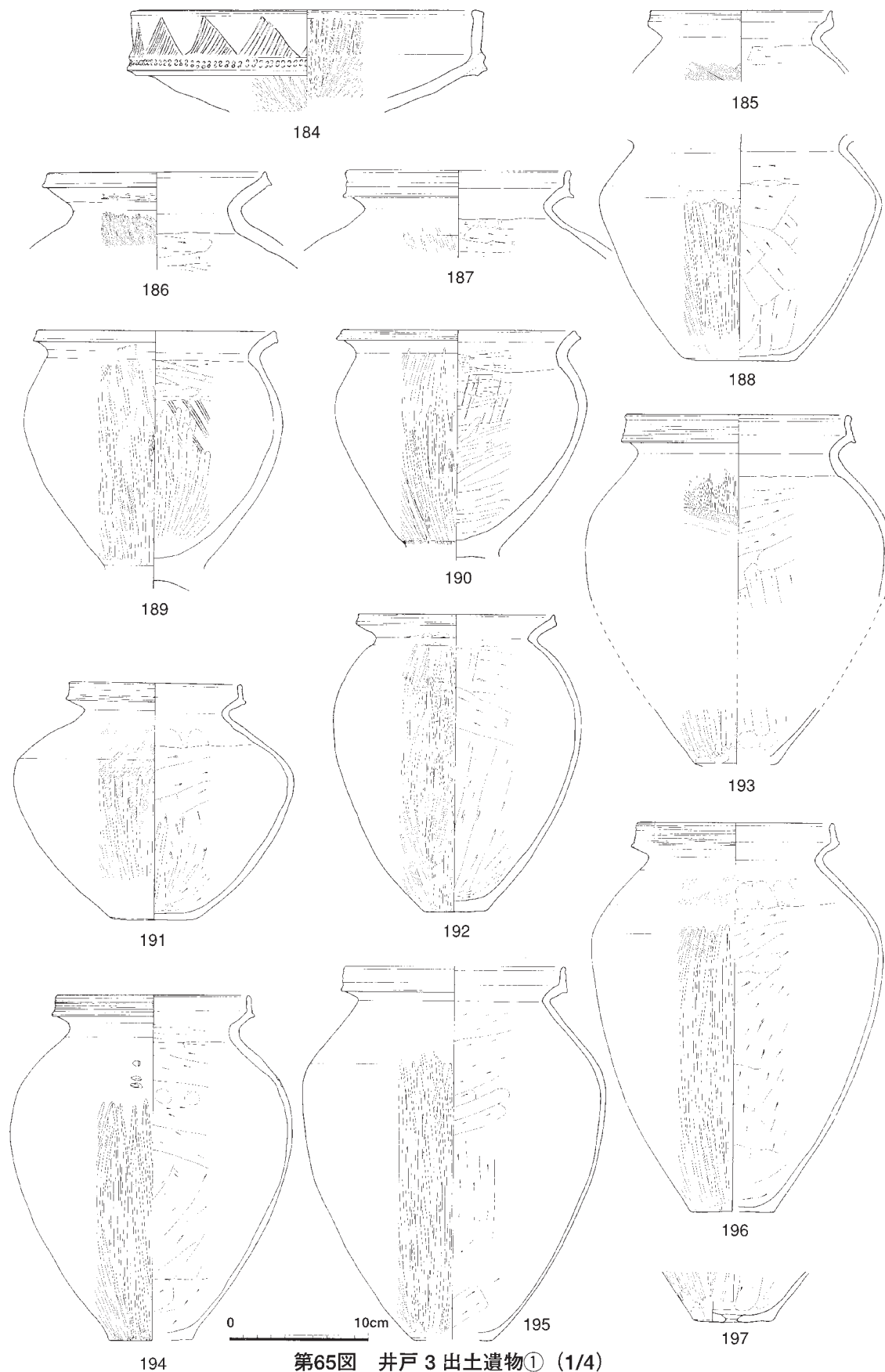
51等が出土している。これらの土器は井戸を使用している時に廃棄されたものと考えられる。土器**191**は井戸の底面付近で検出された甕である。完形であり、口径12.3cm、器高17.1cmを測る。**206**は小形の甕である。外面を細かいヘラミガキで調整している。口径8.3cm、器高8.75cmを測り、いわゆる精製粘土を使用している。**210**は内面に赤色顔料（朱）が付着していた。口径43.2cm、器高21.8cmを測る大形鉢である。また、漆が塗布されている可能性もあり、その詳細な内容については自然科学的分析・鑑定（志賀智史報告）に述べている。**W51**は柱と考えられる木製品である。下部を二股状に加工している。コナラ属コナラ節の丸太材を使用している。

その他、井戸3からは貝や魚骨が出土している。これらについても自然科学的分析・鑑定（富岡直人報告）で報告している。また、少量で



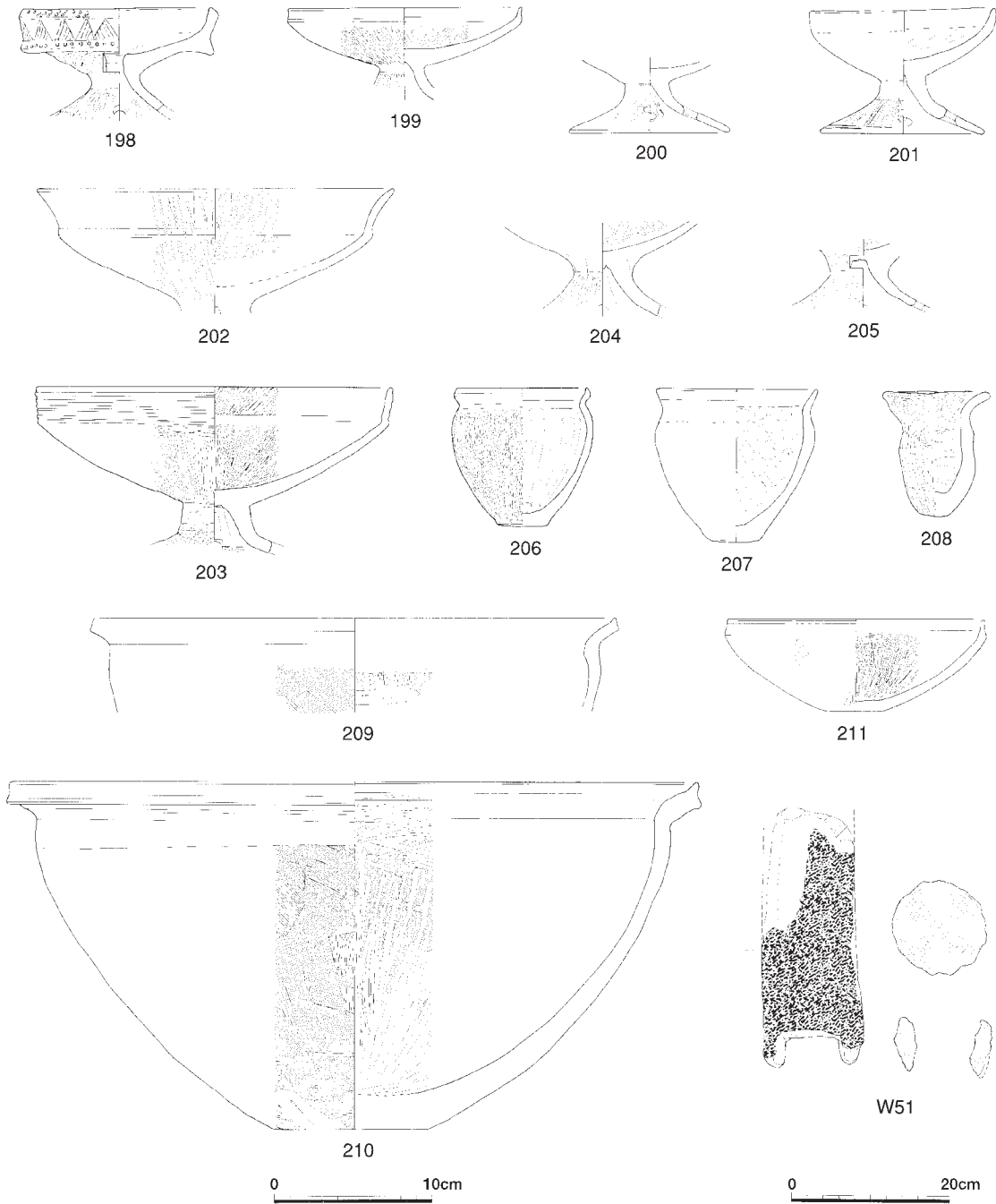
- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 褐灰色粘性砂質土 | 7 灰色粘質土（竪穴住居38柱痕？） |
| 2 暗灰オリブ色粘性砂質土 | 8 青灰色粘質土 |
| 3 浅黄色粘性砂質土 | 9 青灰色粘質土 |
| 4 暗青灰色砂質土 | 10 青灰色粘質土 |
| 5 赤褐色粘質土 | 11 青灰色粘質土 |
| 6 暗灰色粘質土 | |

第64図 井戸3 (1/30)



第65図 井戸3出土遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要



第66図 井戸3出土遺物② (1/4・1/8)

あるが、ガラス滓を思わせる滓も出土したが、鑑定の結果、ガラス滓とは成分の異なる藍鉄鉱であるとの報告（木戸一博報告）を得た。

これらの出土遺物から井戸3は伊福・弥・後Ⅲ期を中心とする時期に使用、廃棄されたものと推定することができる。(金田)

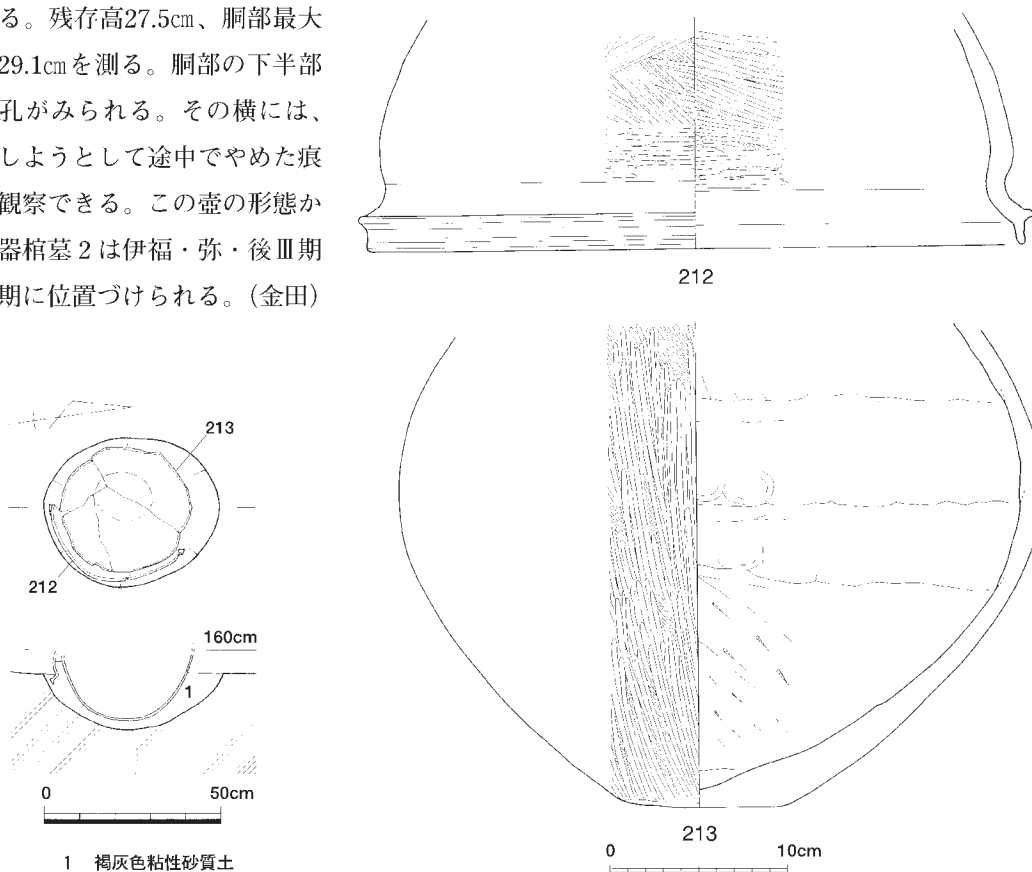
4 土器棺墓

土器棺墓 1 (第67図、図版12・27)

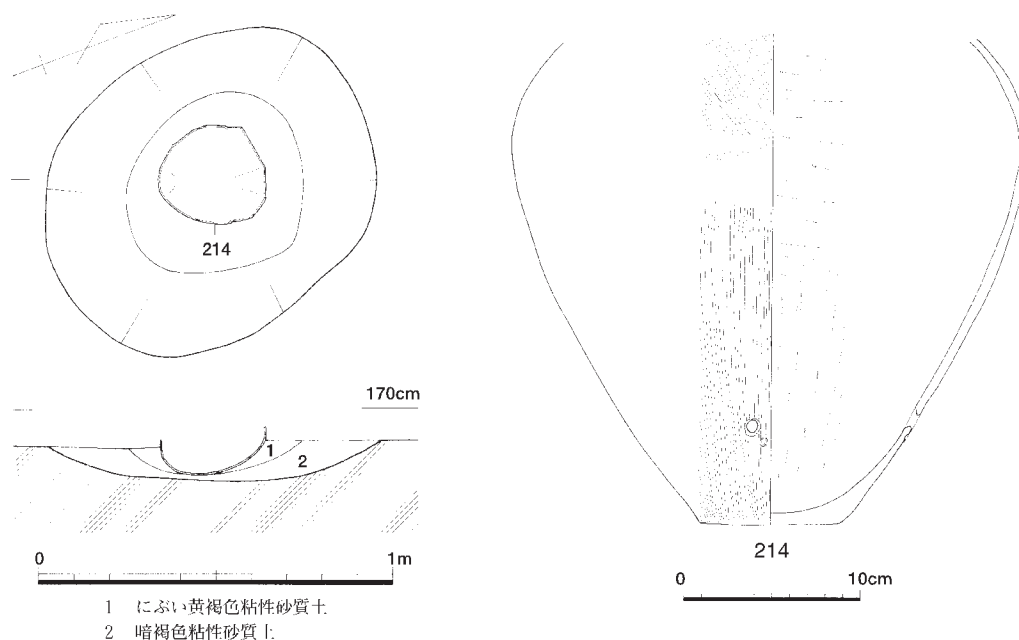
土器棺墓 1 は16M区に属する径約50cmの円形の土壇であり、内部から弥生土器の壺と鉢が組み合わさった状態で検出された。土器棺墓 1 は上面を削平されており、壺棺の下半分のみを検出したにすぎない。したがって、壺棺の傾きなどの詳細については不明である。棺身には壺が使用されている。壺(213)は口頸部と肩部を失っており、胴部から底部にかけての約27cmが残存している。胴部最大径は36.2cmを測る。棺蓋には鉢(212)が使用され、口縁部を下にむけて出土した。鉢は最大で高さ約13cmが残存し、鉢の口径は復元で36.7cmを測る。なお、壺内部に堆積していた土を精査したが、歯牙などを含む遺体の一部は検出されなかった。その他、土器棺以外の遺物は発見されていない。土器棺に使用された壺と鉢から、土器棺墓 1 は伊福・弥・後Ⅳ期に営まれたと考えられる。(金田)

土器棺墓 2 (第68図、図版12)

土器棺墓 2 は18L区に位置する。長径100cm、短径80cmの土壇の掘りかたをもち、検出面からの深さは約15cmを測る。壺(214)が主軸を傾けて設置されており、その設置角度は水平面から上方に約37度であり、北に開口している。壺の内部の土を洗浄して、歯牙等の抽出をこころみたが、検出することはできなかった。壺は口頸部が欠損しており、肩部から底部まで残存していた。外面はハケで、内面はヘラケズリにより調整されている。残存高27.5cm、胴部最大径は29.1cmを測る。胴部の下半部に穿孔がみられる。その横には、穿孔しようとして途中でやめた痕跡が観察できる。この壺の形態から土器棺墓 2 は伊福・弥・後Ⅲ期の時期に位置づけられる。(金田)



第67図 土器棺墓 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)



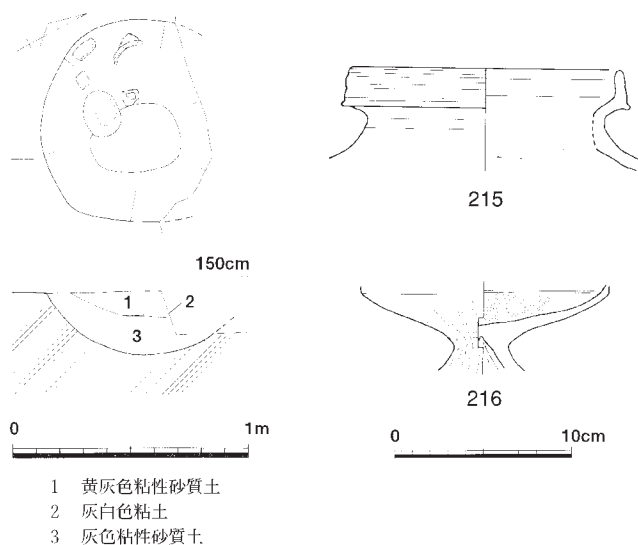
第68図 土器棺墓 2 (1/20)・出土遺物 (1/4)

5 土壌・ピット

土壌 1 (第69図)

17K区の西側に位置し、竪穴住居 1 に切られる。平面形は不整円形で、長軸85cmを測る。断面形は碗形を呈し、深さは26cmほど残存する。埋土は3層に分かれ、第2層の灰白色粘土が間層として認められる。出土遺物は弥生土器の壺215、高杯216、円礫などがある。215は壺の口縁部で、端部に4条の擬凹線文が施されている。216の高杯は短脚である。時期は出土土器から伊福・弥・後Ⅲ期に埋没したと考えられる。

(米田)



第69図 土壌 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

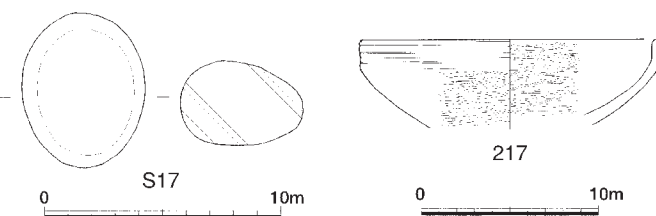
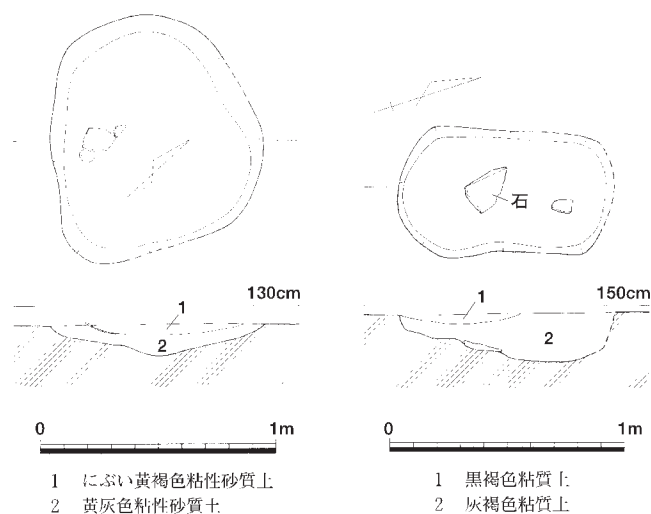
土壌 2 (第70図)

17K区の中央部に位置し、竪穴住居 20 に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸100cm、短軸85cm、深さ13cmを測る。遺物は、底面からやや浮いた第2層中から花崗閃緑岩製の磨石 S17、第2層上面から弥生土器の壺底部が出土した。このほか、弥生土器は甕・高杯・鉢があるが、図化し得なかった。時期は、切り合い関係・出土土器から伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。

(米田)

土壙 3 (第71図)

16L区の北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸は復元で92cm、短軸は50cmを測る。断面形は碗形である。底面は一定でなく、最深部で深さ30cmを測る。底面直上では弥生土器の高杯217のほか、底面中央部で花崗岩の角礫が出土した。217の高杯は口縁端部が直立するもので、4条の擬凹線文を施している。内外面は横方向のヘラミガキが丁寧になされている。本土壙が機能していた時期は伊福・弥・後Ⅳ期と捉えて差し支えない。(米田)

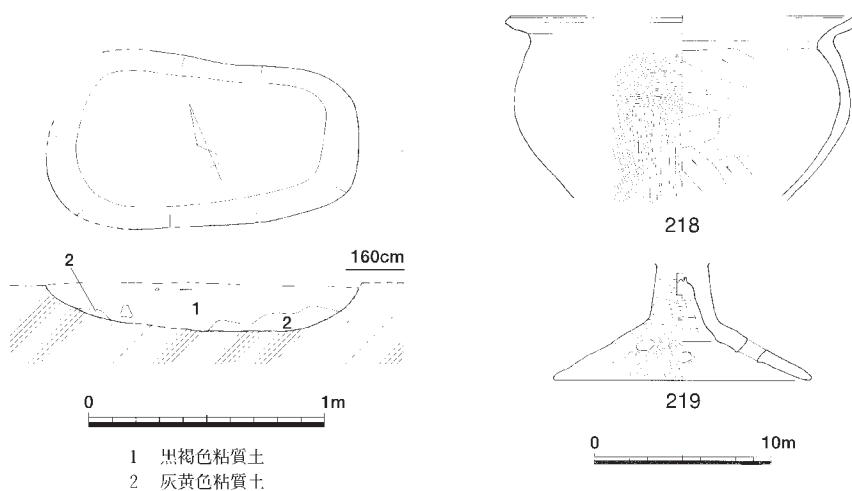


第70図 土壙 2 (1/30)
・出土遺物 (1/3)

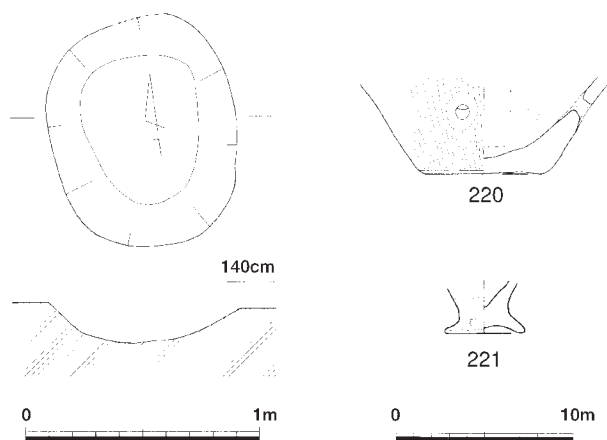
第71図 土壙 3 (1/30)
・出土遺物 (1/3)

土壙 4 (第72図)

16LM区の境界に位置する。平面形は長軸133cm、短軸70cmの楕円形を呈する。断面形は碗形を呈し、深さは検出面から20cmを測る。埋上は2層に分層できるが、大半は第1層によって埋没している。遺物は覆土から弥生土器の壺・甕・高杯・鉢などが出土しているが、図化できたのは鉢218、高杯219のみである。218は口縁部が「く」の字に外反し、口唇部に2条の擬凹線文を施している。内面はヘラケズリ、外面はハケメの後、胴部下半にヘラミガキを行っている。219は高杯の脚部で、脚柱部がやや短く、裾部には4方向の円孔を穿つ。外面は丁寧なヘラミガキが施され、脚柱部の内面には絞り目が認められる。時期は伊福・弥・後Ⅲ区でも古相の特徴を持つ。(米田)



第72図 土壙 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第73図 土壙 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

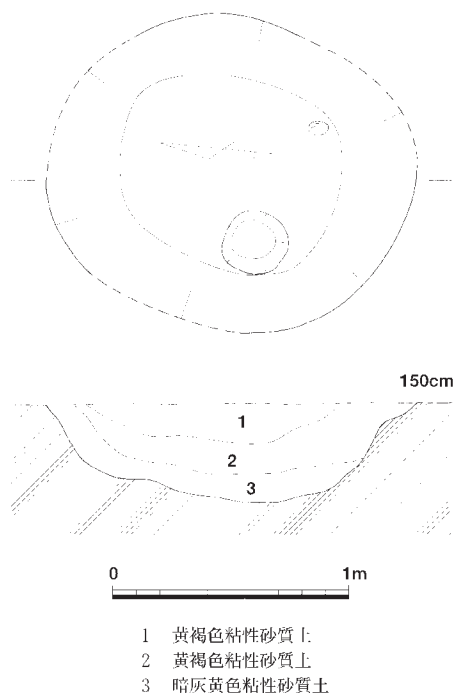
土壙 5 (第73図)

17L区の北西に位置し、土壙 6・8を切る。平面形は楕円形を呈し、長軸100cm、短軸82cmを測る。断面形は碗形で、深さは15cmである。遺物は覆土から弥生土器の壺底部220、製塩土器の脚部221がある。壺220の底部付近には焼成後穿孔が認められ、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリの痕跡が残る。時期は出土土器、切り合い関係から、伊福・弥・後Ⅳ期に比定され、土壙 6より新しい。(米田)

土壙 6 (第74・75図、図版27・37)

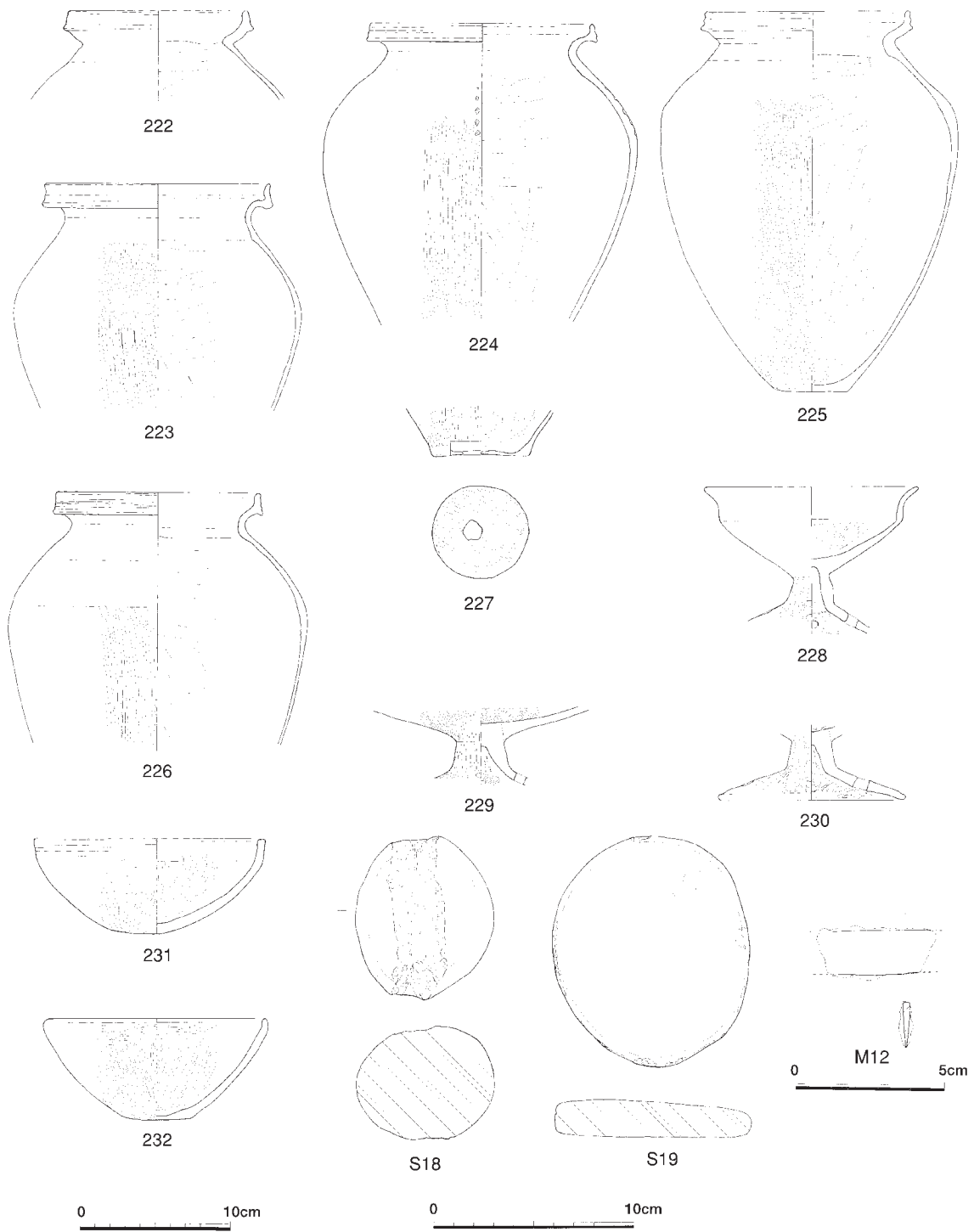
16・17Lの境界に位置し、土壙 5に切られる。平面形は長軸157cm、短軸134cmの楕円形を呈する。断面形は碗形を呈し、埋土は3層に分かれ、いずれの土層もレンズ状の堆積を示す。底面は一定でなく、最深部で41cmを測る。底面西側には径28cmの小ピットが伴い、深さは10cmにも満たない。

出土遺物は、弥生土器の甕222～227、高杯228～230、鉢231・232などの弥生土器のほか、石錘S17、磨石S19などの石製品、刀子の破片M12がある。このうち石錘S18は底面直上からの出土である。弥生土器は各層から出土しているが、第3層上面からの出土が最も顕著であった。222は甕であるが、頸部の径が小さい。223～226は口縁部を上方に拡張し、数条の擬凹線文を施している。形態的には肩部が屈曲するように張り、底部にかけて大きくすぼまる。底部は平底を留める。外面はハケ



第74図 土壙 6 (1/30)

メの後に丁寧な縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリによって調整している。224の肩部には、5つの米粒状の刺突が施されており、縦方向に直列している。227の底部外面はヘラミガキされ、中央部に焼成後穿孔が認められる。高杯228～230は短脚で、脚裾部には4方向に円孔を穿つ。228は口縁端部が内湾して大きく外反する。228の受け部は放射状にヘラミガキ、脚部の外面はヘラミガキ、内面は指オサエ、ハケメによって調整されている。229・230の外面はヘラミガキ、脚柱部内面は絞目、脚裾部内面はハケメが残る。231・232は小形の鉢で、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。231は口縁部を上方に拡張して2～3条の擬凹線文を施す。232は口縁端部を内側にわずかに摘み寄せている。S18は閃緑岩製の有溝石錘であり、長軸に平行するように敲打によって溝を整形している。S19は閃緑岩の扁平な円礫を利用した磨石で、表・



第75図 土壙6出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

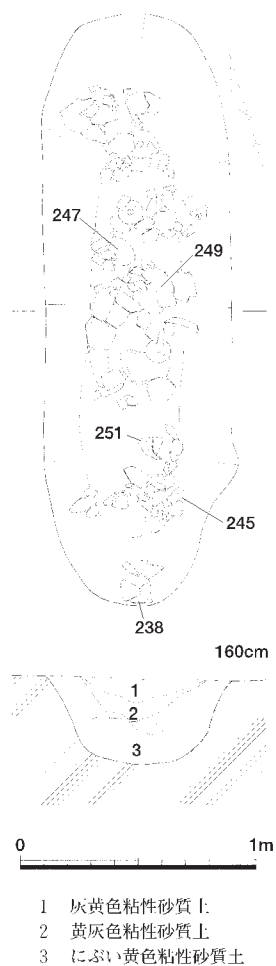
裏面の一部には滑らかな面を持つ擦痕が確認できる。刀子M12は刃部の一部のみが残存し、先端部・基部は欠落している。

時期は出土土器から伊福・弥・後Ⅳ期の古相と捉えられ、層位的に土壙5よりも古い。(米田)

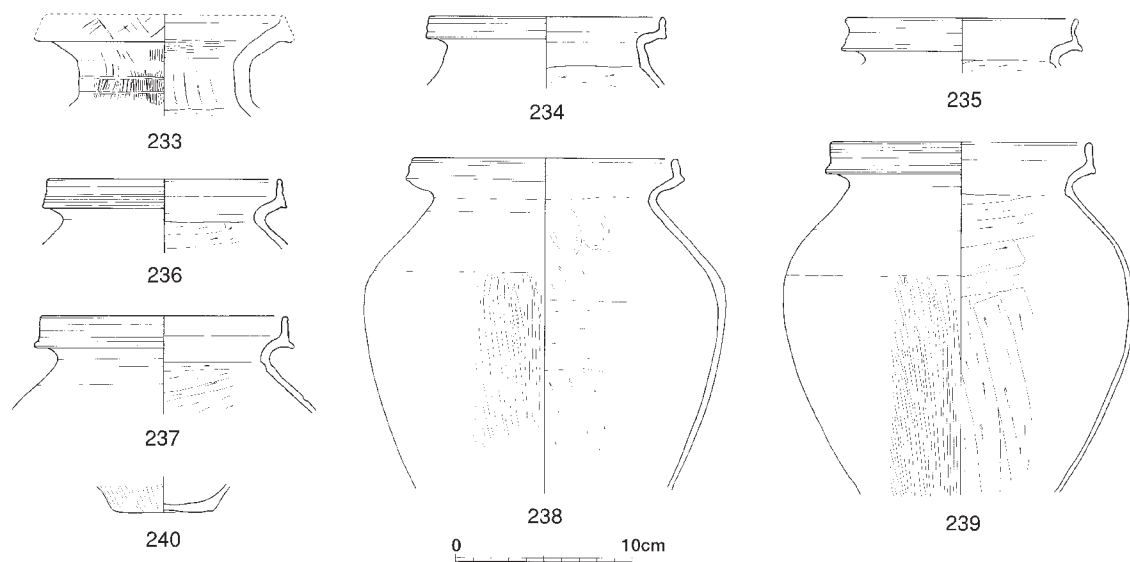
土壙 7 (第76・77図、図版12・27)

17L区の北西に位置する。層位的な切り合い関係では、竪穴住居19に切られ、土壙8を切る。平面形は長軸260cm、短軸78cmの長楕円形を呈する。断面形は「U」字形で、深さは36cmを測る。埋土は3層に分かれ、いずれもレンズ状の堆積を示す。

出土遺物は弥生土器であり、平面的には掘り方全体で認められたが、出土位置は底面から浮いているものが大半を占め、第3層上位での出土が顕著であった。出土土器の多くは破損しており、土壙の埋没過程において土器が廃棄されたものと考えられる。ちなみに次に報告する土器はいずれも完形に復元できるものは皆無であった。弥生土器の器種は、壺233、甕234～240、高杯241～246、台付直口壺247、台付甕か鉢248、器台249～251、鉢252がある。241～246は短脚を有し、脚裾部に4方向の円孔を穿つ。245・246の受け部は、内湾して短く外反する口縁部を持ち、口径は大きく保ち、器高もまだ深みを増していない。直口壺247は口縁部がやや外へ開き、口縁端部に2条の細い擬凹線文を施す。また脚部は欠損している。248は甕か鉢で、「ハ」の字状に開く脚台を持つ。この土器の注目される点として、壺体部は1～3mmの石英・長石を含む粗い胎土であるのに対し、脚部は水こしされた精良の胎土であり、同一個体でありながら部位によって異なる胎土を用いていることがあげられる。器種は甕か鉢であるので、本来ならば脚部も粗い胎土を使用するのが一般的であると思われる。249の器台は口縁端部に沈線文によって区画した



- 1 灰黄色粘性砂質土
- 2 黄灰色粘性砂質土
- 3 にぶい黄色粘性砂質土

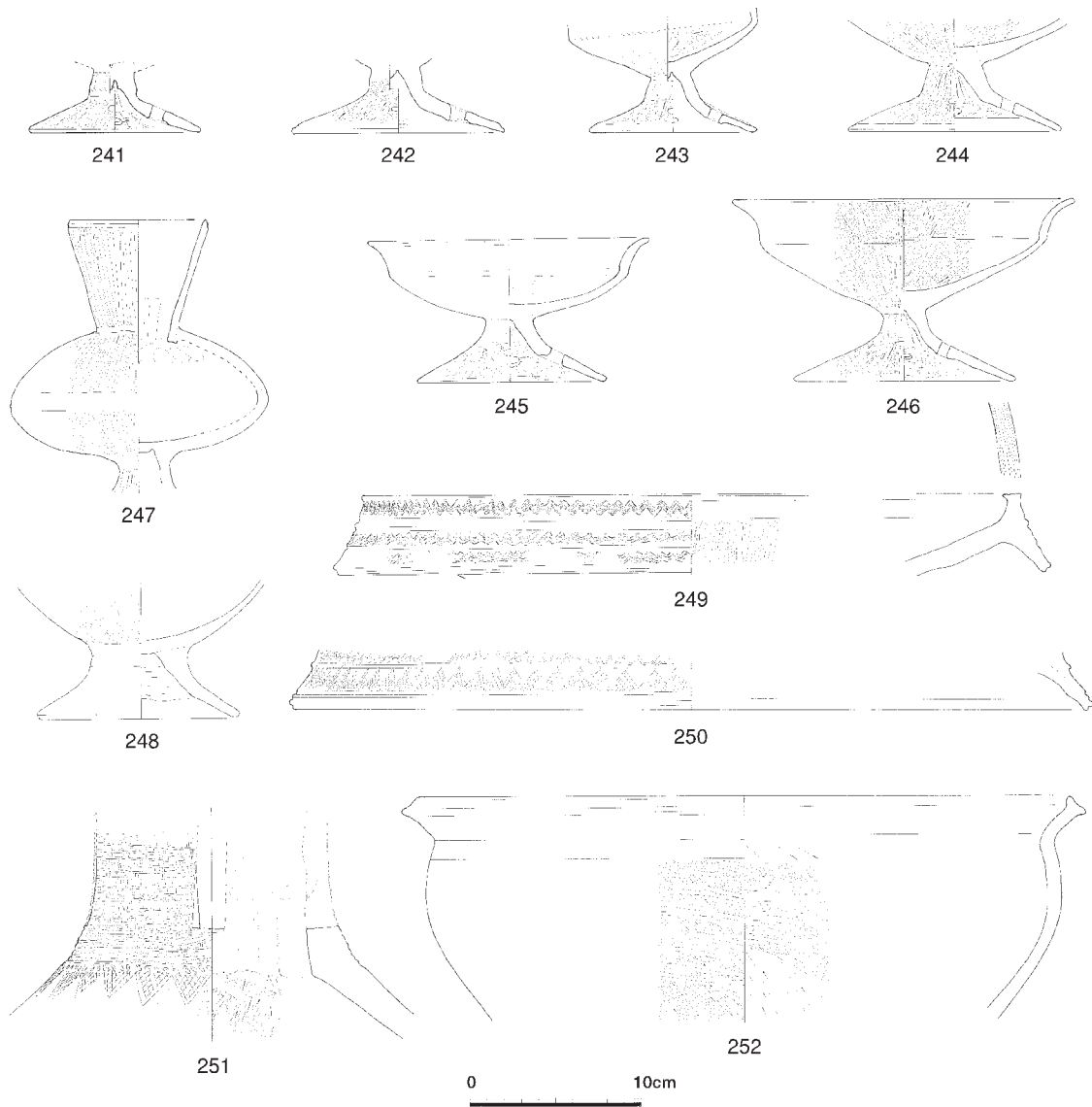


第76図 土壙 7 (1/30)・出土遺物① (1/4)

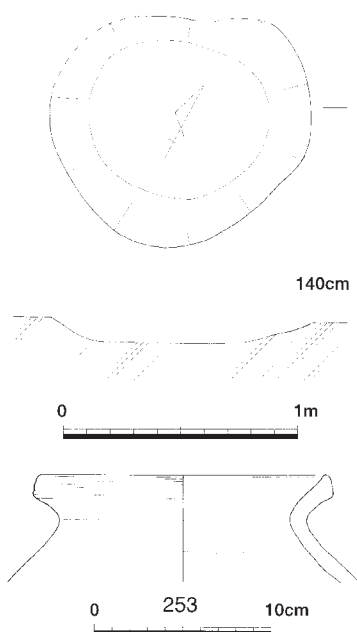
間に櫛描き波状文を配している。器台250の口縁部には2条一对の沈線によって突線を表現し、上側の区画には櫛描き波状文、下側には鋭い工具による鋸歯文が施されている。251は器台の長方形の透かし孔を4方向に配し、外面はハケメの後に沈線文を19条以上、その直下に列点文と鋸歯文を施している。埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。(米田)

土壌 8 (第78図)

17L区の北西に位置し、竪穴住居2、土壌5・7に切られる。平面形は長軸110cm、短軸98cmの不整形を呈する。断面形は逆台形で、深さは9cmと残存状況は良くない。遺物は覆土から弥生土器の甕253が出土した。253は「く」の字に外反する口縁部を持ち、口縁端部に4条の擬凹線文を施している。時期は伊福・弥・後Ⅲ期で、切り合い関係から土壌7より古い。(米田)



第77図 土壌 7 出土遺物② (1/4)



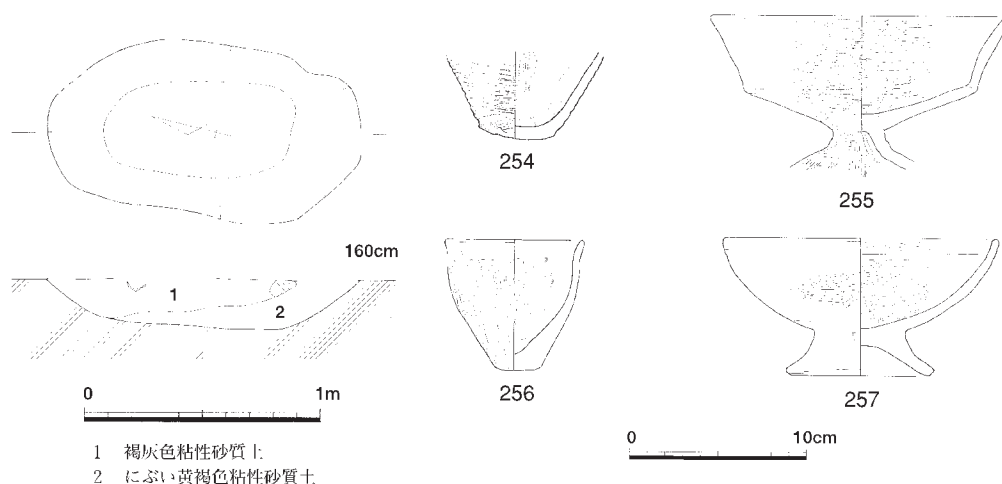
第78図 土壌8 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

土壌9 (第79図、図版27)

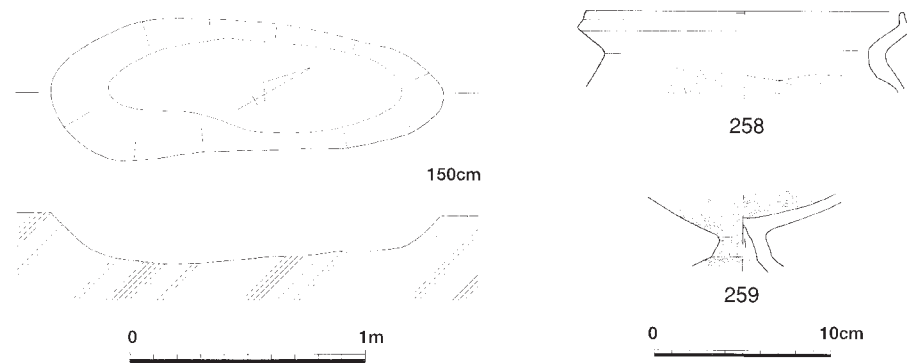
17L区の北西に位置し、竪穴住居1を切り、竪穴住居2に切られる。平面形は楕円形で、規模は長軸134cm・短軸72cmを測る。深さは21cmで、断面形は椀形を呈する。覆土からは弥生土器の甕254、高杯255、鉢256、台付鉢257が出土した。254の外面はタタキ後ハケメによって調整されている。埋没時期は伊福・弥・後Ⅳ期と捉えられ、竪穴住居1より新しく、竪穴住居2より古い。(米田)

土壌10 (第80図)

17K L区の境に位置し、竪穴住居19に切られる。平面形は長軸92cm、短軸80cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。断面形は椀形を呈し、南側壁面は傾斜が緩やかである。遺物は弥生土器の甕258、高杯259があり、いずれも覆土から出土した。時期は出上土器から伊福・弥・後Ⅲ期に属する。(米田)



第79図 土壌9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

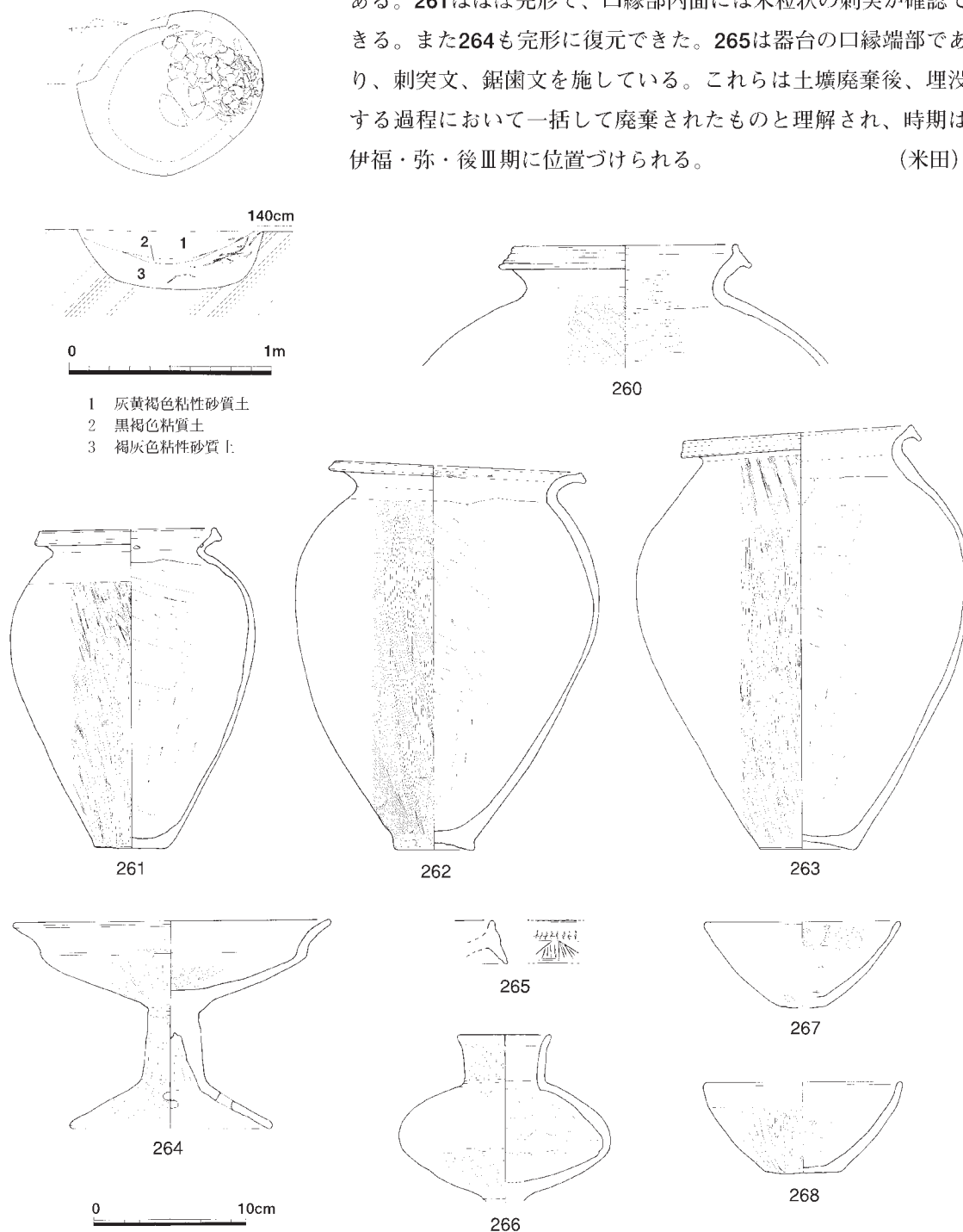


第80図 土壌10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

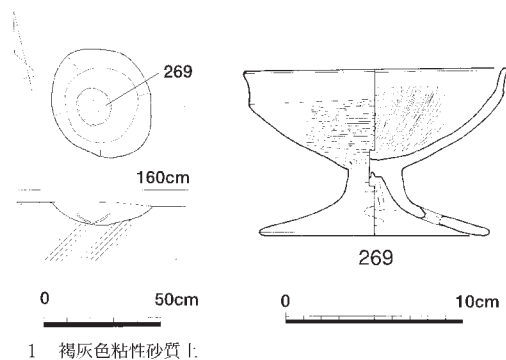
土壌11 (第81図、図版28)

16L区の中央に位置し、調査区の西端にあたる。平面形は楕円形を呈し、長軸90cmを測る。現状で深さは27cmを測るが、攪乱内で確認したため、上面は削平されている。断面形は逆台形である。埋土は3層に分けることができる。遺物の出土状況は、第3層の上位に集中し、また平面的に北半部に偏っていた。遺物は弥生土器の壺260、甕261~263、高杯264、器台265、台付壺266、鉢267・268がある。

261はほぼ完形で、口縁部内面には米粒状の刺突が確認できる。また264も完形に復元できた。265は器台の口縁端部であり、刺突文、鋸歯文を施している。これらは土壙廃棄後、埋没する過程において一括して廃棄されたものと理解され、時期は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。(米田)



第81図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第82図 土壌12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

である可能性が高い。なお、この土壌の時期であるが、高杯の形状から伊福・弥・後Ⅳ期に比定できる。

(金田)

土壌13 (第83・84図、図版13・29)

土壌13は16L区で検出した。竪穴住居2の下層で検出された。土壌13は長径98cm、短径85cm、検出面からの深さは21cmを測る円形に近い土壌である。土壌内から径5cm前後の小石が多数出土した。これらの小石に混ざって土器も検出されたが、その量は小石のほうが主であった。このように、小石が利用された遺構は、他に竪穴住居19や竪穴住居27があげられる。土壌13の底面からは柱痕がみられた。ところが、この柱痕は土壌上面を検出している段階では確認することができず、土壌13を底まで掘り下げた後にはじめて検出されたものである。したがって、この柱痕と土壌13の関係はあまり明確とはいえないが、この柱痕が存在する部分だけ、小石が存在しないことを考えると、柱を設置したのちに小石が入れられた可能性もあり、柱の根固めの可能性もあるが確証はない。また、土壌13が埋没したのちに設けられたピットの可能性も否定できない。土壌13からは弥生土器が出土している。270・271は甕である。272・273は高杯である。いずれも外内面ともにタテ方向のミガキが施されており、いわゆる水こし粘土が使用されている。274～277は鉢である。274は精良な胎土をもつ。277は大型の鉢であり、胴部が「く」の字状に屈曲する。なお、土壌13の時期であるが、前述したように、土壌

は竪穴住居2の下層で検出されていることから、これらの住居よりは古いものと考えられる。このような切り合い関係と出土した土器から得られる年代を考慮すれば、この土壌13は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけることが可能である。

(金田)

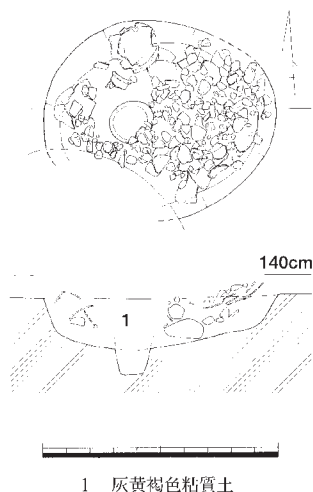
土壌14 (第85図)

17L区の北側中央に位置し、竪穴住居1を切る。平面形は長軸131cm、短軸76cmの楕円形を呈する。断面形は腕形で16cm残存する。遺物は、弥生土器の甕278、高杯279、台付鉢280があり、いずれも覆土から出土した。時期は伊福・弥・後Ⅳ期と捉えて差し支えなく、竪穴住居1より新しい。

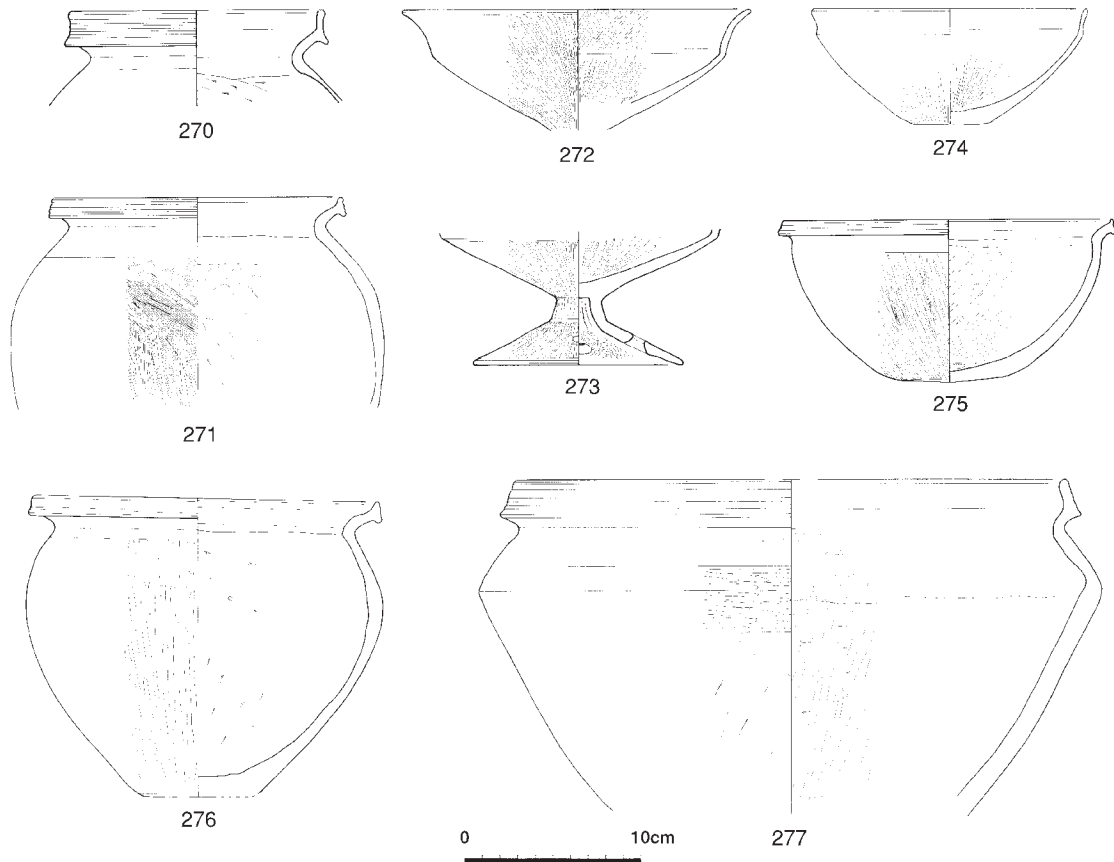
(米田)

土壌15 (第86図)

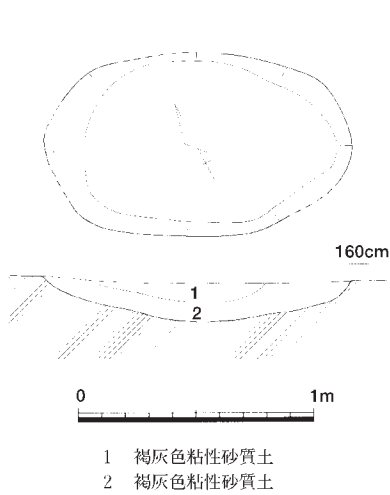
17L区の北東側に位置し、竪穴住居8を切る。平面形は不整形円形を呈し、長軸79cm、短軸65cmを測る。断面形は逆台形



第83図 土壌13 (1/30)

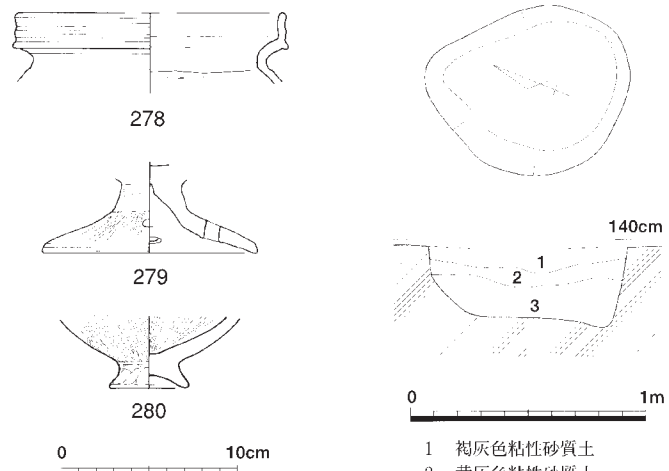


第84図 土壙13出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色粘性砂質土
- 2 褐灰色粘性砂質土

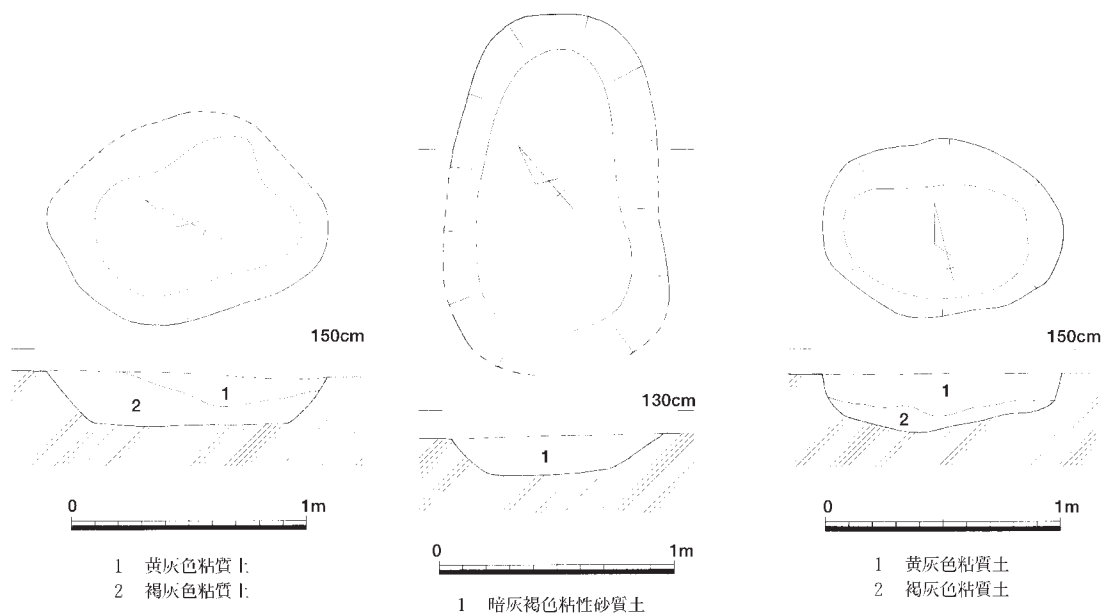
第85図 土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色粘性砂質土
- 2 黄灰色粘性砂質土
- 3 にぶい黄色粘性砂質土

第86図 土壙15 (1/30)

で、深さは29cmである。埋土は3層に分層でき、いずれも水平堆積を示す。遺物は図に耐えるものは皆無であるが、弥生土器の甕・高杯の小片が出土している。時期は出土遺物、切り合い関係から、伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の範疇であり、竪穴住居8より新しい。(米田)



第87図 土壇16 (1/30)

第88図 土壇17 (1/30)

第89図 土壇18 (1/30)

土壇16 (第87図)

17L区の北東側に位置し、竪穴住居8・9、土壇17を切る。また掘り方の東半の上端は後世のピットなどで削られている。平面形は不整形で、長軸120cm、短軸88cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは29cmである。遺物は図示し得なかったが、弥生上器の甕、鉢、高杯片が少量出土しており、出土土器は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の範疇で捉えられるが、土壇17を切ることから伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられる。(米田)

土壇17 (第88図)

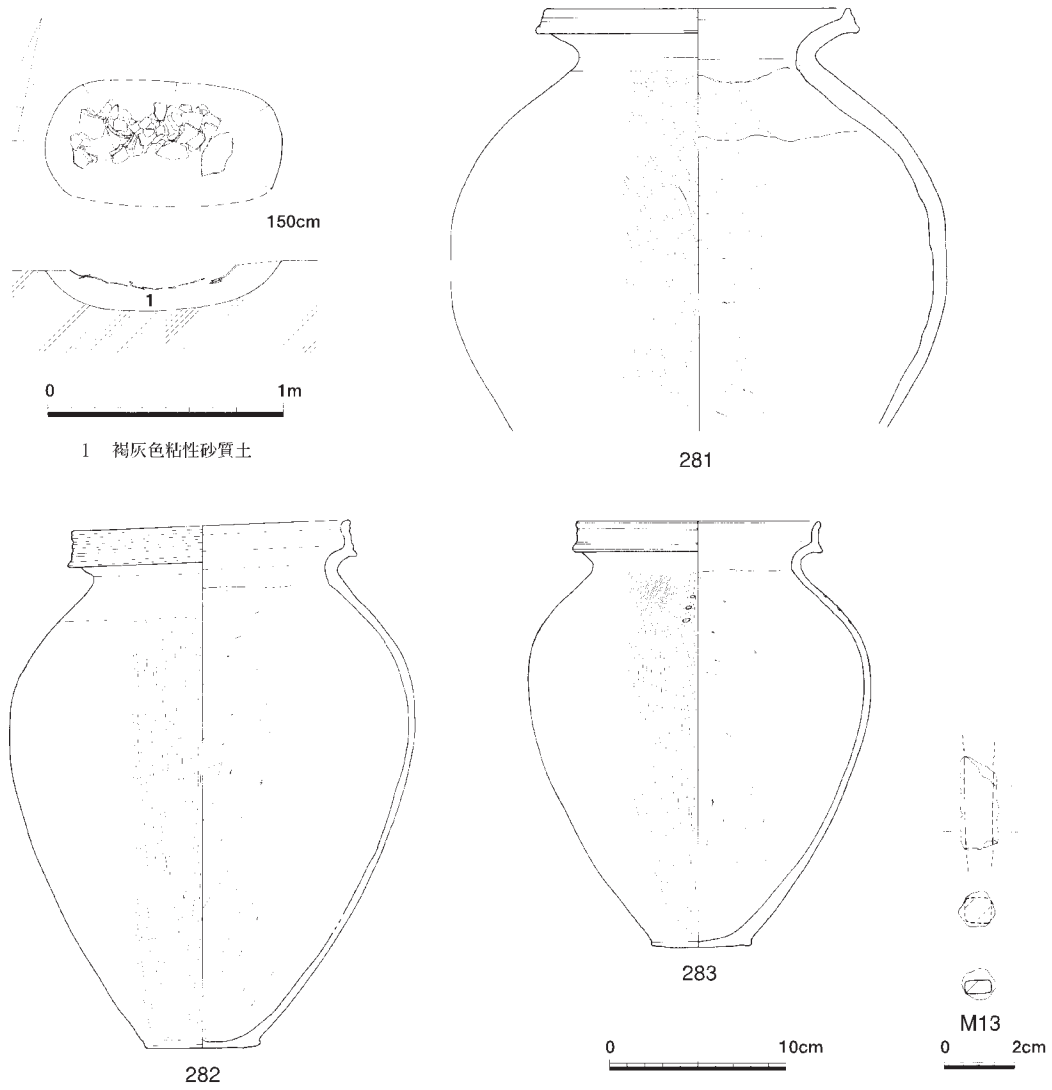
17L区の北東側に位置し、竪穴住居9を切り、南西部は土壇16に切られる。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸152cm、短軸95cmと復元され、深さは16cmほど残る。遺物は弥生土器の壺、甕、高杯が出土しているが、小片のため図化することができなかった。時期は伊福・弥・後Ⅳ期であり、土壇16よりも古い。(米田)

土壇18 (第89図)

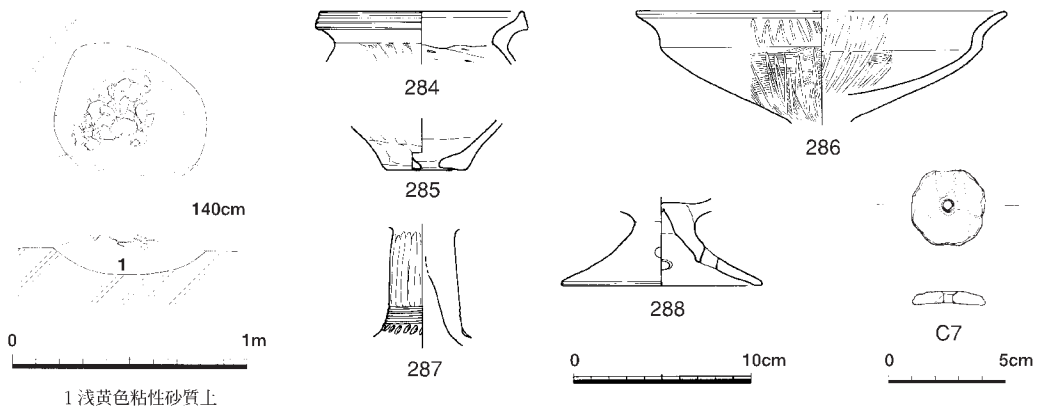
17L区の東側に位置し、竪穴住居8・9を切る。平面形は、長軸103cm、短軸75cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。断面形は椀形で、埋土は2層に分かれる。遺物は弥生土器の高杯、鉢が出土しているが、図示し得なかった。時期は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の範疇であり、切り合い関係から竪穴住居8・9よりも新しい。(米田)

土壇19 (第90図、図版29)

18K区の南西に位置し、竪穴住居9に切られる。平面形は楕円形であり、規模は長軸100cm、短軸52cmと復元される。断面形は椀形を呈し、深さは17cmほど残存する。遺物は埋土上位において中央部に固まり、一括廃棄されている。遺物は弥生土器の壺281、甕282・283、鉄製品M13がある。甕283の肩部外面には米粒状の刺突が3点認められる。M13は器種不明の鉄製品であり、棒状を呈するが、上下端部は欠損している。埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定され、竪穴住居9よりも古い。(米田)



第90図 土壇19 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



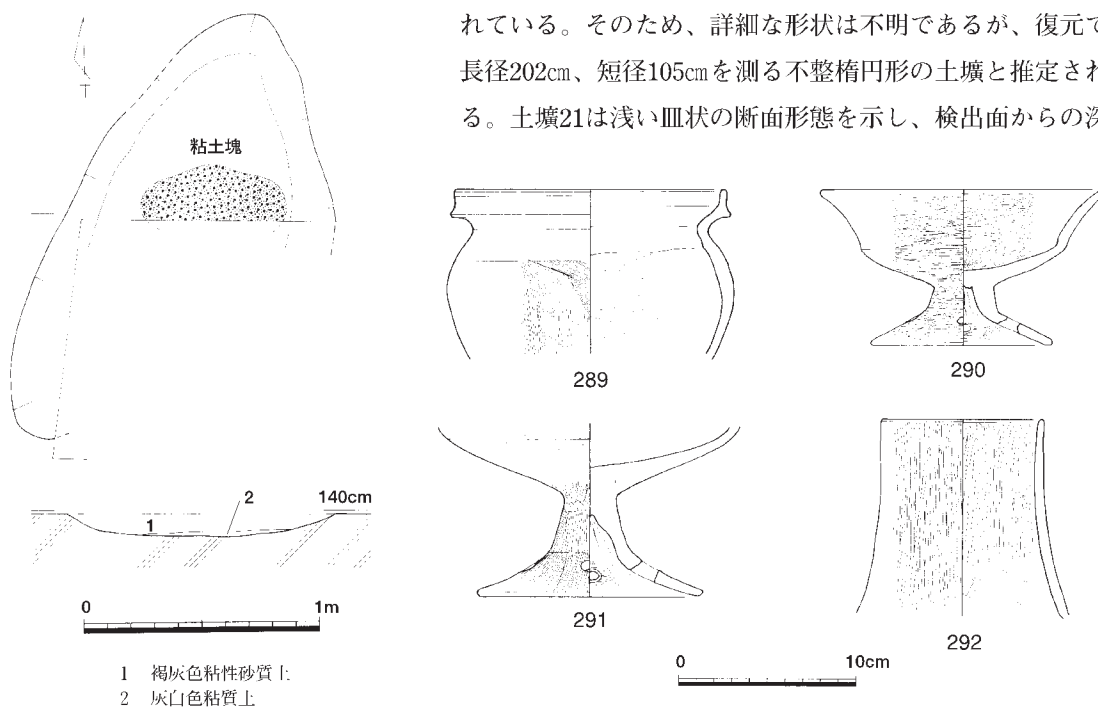
第91図 土壇20 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壙20 (第91図、図版36)

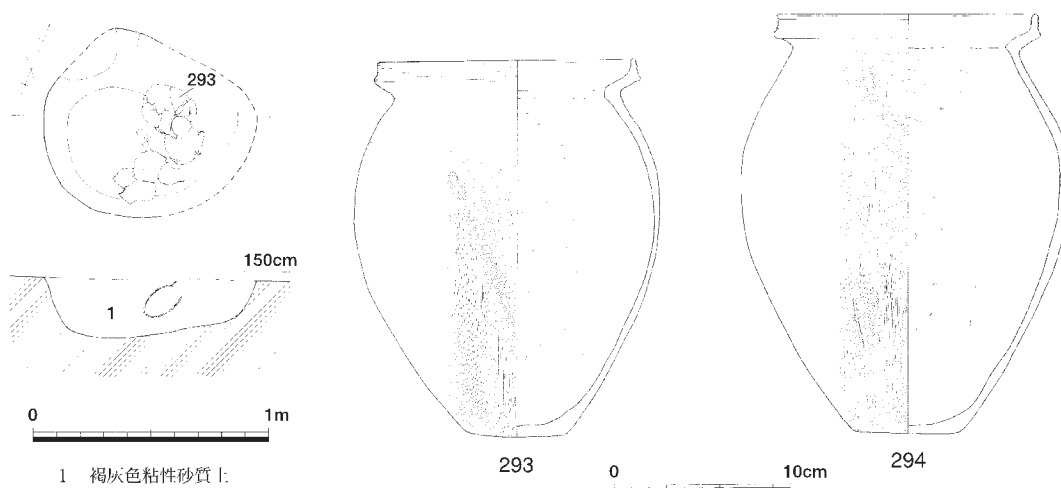
土壙20は17L区に位置し、竪穴住居21の床面下で検出された。長径70cmをはかる楕円形の平面形を呈する。埋土から弥生土器や土製品が出土した。284は甕の口縁部である。285は甕底部で穿孔がみられる。286~288は高杯である。C 7は甕の体部の破片を転用した紡錘車である。これらの出土遺物から土壙20は伊福・弥・後Ⅲ期に属すると考えられる。(金田)

土壙21 (第92図、図版30)

土壙21は16M区に位置する。南半分を撓乱により破壊されている。そのため、詳細な形状は不明であるが、復元で長径202cm、短径105cmを測る不整楕円形の土壙と推定される。土壙21は浅い皿状の断面形態を示し、検出面からの深



第92図 土壙21 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第93図 土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

さは約10cmを測る。褐灰色粘性砂質土が堆積しているが、底部で灰白色を呈する粘土がみられた。粘土は厚さ2~3cmで、土壇の北半部で長径約60cmの範囲で確認された。土壇21からは弥生土器が出土している。289は甕である。290~291は高杯である。292は台付直口壺の口縁部である。290は胎土がやや粗いが、他のものはいずれも精製された粘土を使用している。これらの出土遺物から土壇21は伊福・弥・後Ⅲ~Ⅳ期の時期に比定することが可能である。(金田)

土壇22 (第93図、図版29)

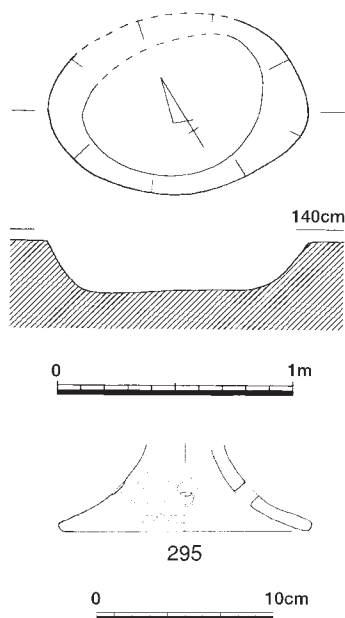
土壇22は16M区に位置する。復元長径86cm、短径80cmを測り、不整円形を呈する。土壇22は東隣に位置する土壇23に切られている。埋土から甕(293・294)が出土した。293はほぼ完形で、中央付近で出土したが、294は293より南側で壊れた状態で発見された。土壇22ではその他の土器はいずれも小片であるため、土壇22はこの2つの甕を埋めることを目的とした土壇と考えられる。土壇22は伊福・弥・後Ⅲ~Ⅳ期に比定できる。(金田)

土壇23 (第94図)

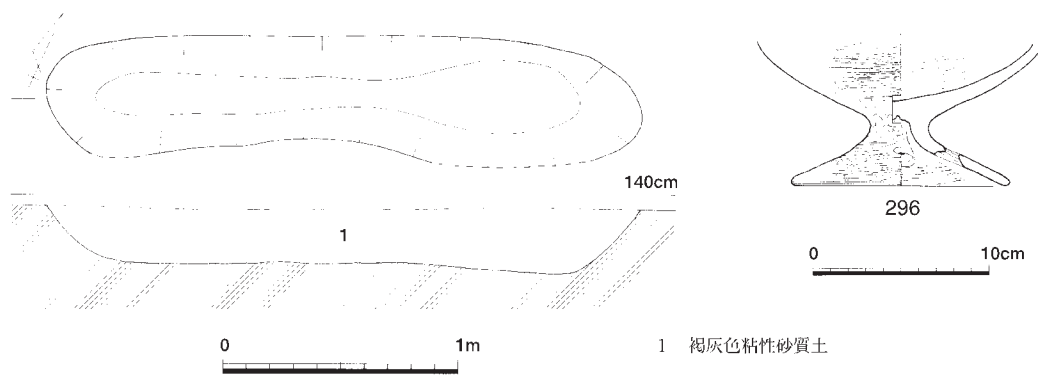
土壇23は16M区で検出されている。土壇22の東隣りで検出されており、切り合い関係から、土壇22よりも新しく位置づけられる。土壇23は長径110cm、短径78cmを測る楕円形の平面形を呈している。埋土から弥生土器が出土しているが、その量は少ない。295は高杯の脚部である。そのほか、甕片等も出土しているが小破片であり、図示していない。これらの出土遺物と土壇22との切り合いから、土壇23は伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられる。(金田)

土壇24 (第95図)

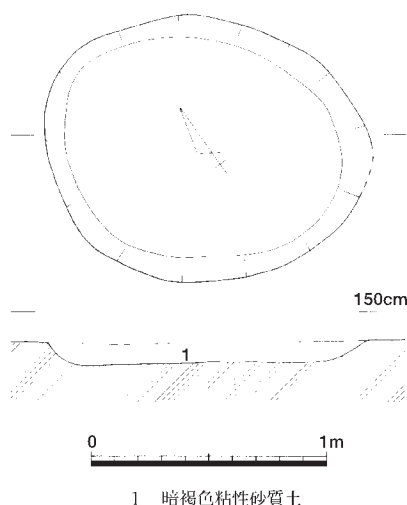
土壇24は16M区で検出されている。細長い溝状の平面形を呈する土壇であり、全長252cm、幅52cm、検出面からの深さ28cmを測る。埋土は褐灰色粘性砂質土が堆積しており、中から弥生土器片が出土している。出土量は少なく、土器片が20~30片ほどであった。そのうち、高杯(296)は残存高8cmを測る、いわゆる精製された粘土を使用して製作されたものである。切り合いから土壇22より新しく位



第94図 土壇23 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



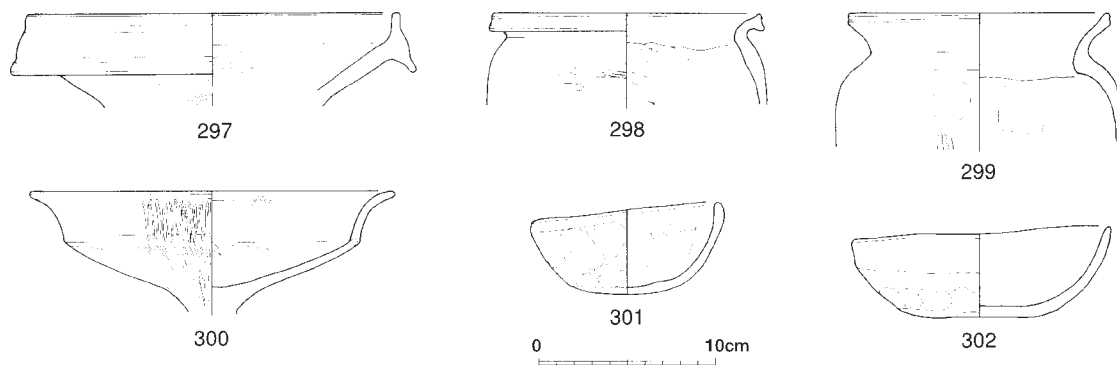
第95図 土壇24 (1/30)・出土遺物 (1/4)



置づけられ、これに近い時期（伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期）に比定できる。（金田）

土壌25（第96図）

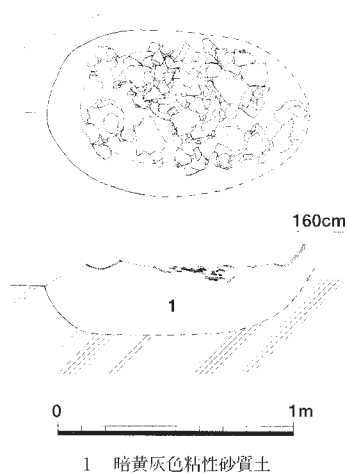
土壌25は16M区に位置する土壌である。円形の平面形を持ち、長径140cm、短径114cm、検出面からの深さ9cmを測る。北端部で土壌23を切っており、土壌23よりも新しい土壌である。土壌内には暗褐色粘性砂質土が堆積しており、中から弥生土器が出土した。297は壺の口縁部である。298・299はともに甕である。300は高杯である。いわゆる精製された粘土で製作されており、外面にはタテ方向にヘラミガキがほどこされている。301と302は鉢である。これらの出土遺物や切り合い関係から、土壌25は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の時期に比定することができる。（金田）



第96図 土壌25（1/30）・出土遺物（1/4）

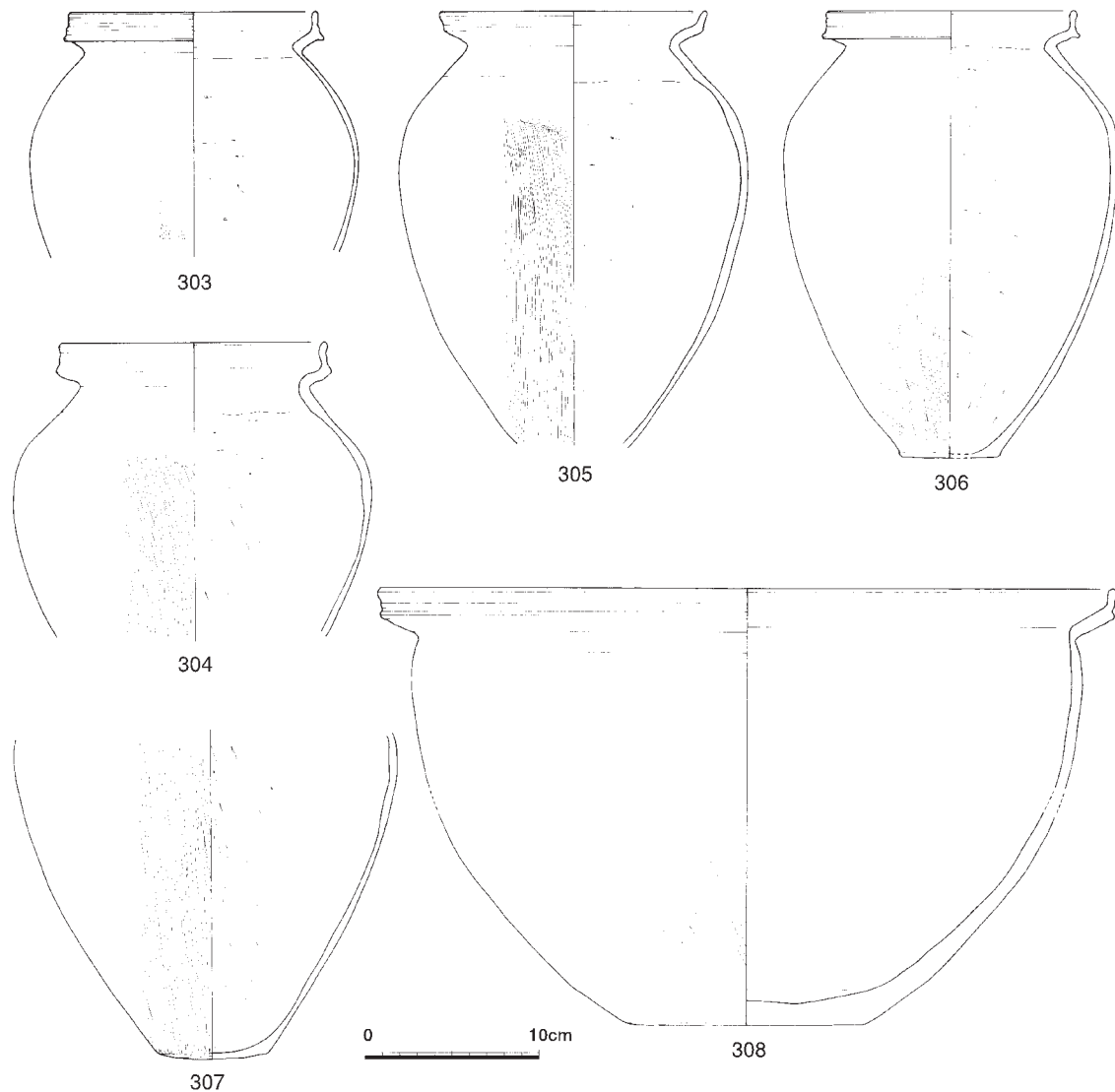
土壌26（第97～98図、図版13）

土壌26は17M区に位置する。包含屑掘下げ時、弥生土器がまとまって出土したことから、遺構の存在がうかがわれ、精査したところ、平面形が楕円形を呈する土壌を検出した。土壌26は、長径約112cm、短径約69cm、検出面からの深さ約30cmを測る。埋土は暗黄灰色粘性砂質土であり、特に上面から多くの土器を検出した。土器はおよそコンテナ箱1箱ほど出土しており、土壌の規模に比べて、その出土量は多いといえる。303～307は甕である。いずれも口縁端部が上方にのびるタイプのものである。口径は14cm～15.2cmを測る。口縁端部には擬凹線のみられるものもある。器高は完存している306で25.5cmを測る。いずれも器形は、胴部最大径が器高の中心よりも上位に位置し、倒卵形を呈するが、底部には明瞭に平底を残すものが多い。外面にはハケおよびヘラミガキの痕跡が観察でき、内面にはヘラケズリが見られる。308は大形の鉢である。およそ口径42cm、器高25cmを測るが、



第97図 土壌26（1/30）

308は大形の鉢である。およそ口径42cm、器高25cmを測るが、

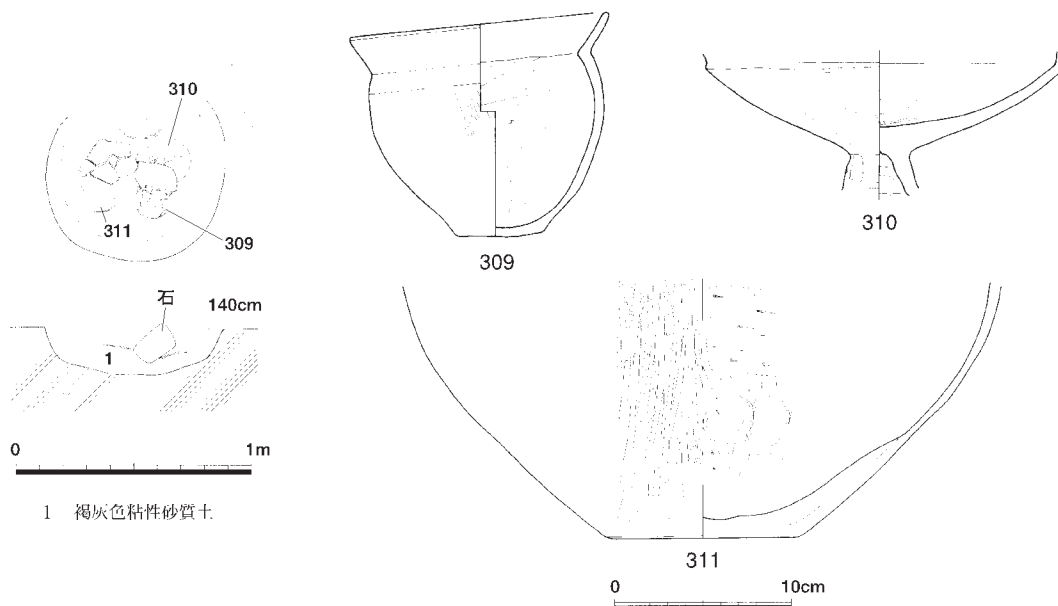


第98図 土壙26出土遺物 (1/4)

全体的に歪んでいる。また、外面も二次焼成による熱影響のためか、剝落が激しく、残存状況は良くない。その他に図示していないが、土壙26では高杯や鉢の破片も出土している。しかしながら、その量はわずかで、土壙26は図示した土器も含めてみると甕の比率が高いことが指摘できる。なお、土壙26の時期であるが、これらの出土遺物から、伊福・弥・後Ⅳ期に比定することが可能であろう。(金田)

土壙27 (第99図、図版30)

土壙27は17M区に属する。ほぼ円形の平面形をもち、径約75cmを測る。検出面からの深さは20cmで、褐灰色粘性砂質土が堆積していた。土壙内部には中央付近におよそ20cmの大きさの石が検出されたほかに、図示したような弥生土器が出土した。**309**は甕である。右の南側で検出された。ほぼ完形の「く」の字状の口縁をもつ粗製の甕で、全体的にやや歪んでいるが、口径約14.6cm、器高約12.6cmを測る。外面は剝落が激しく、器面調整には不明な部分が多い。**310**は高杯である。石の北側で出土した。口縁部と脚裾部を欠くが、いわゆる水こし粘土を使用した高杯である。表面が剝落しており、残存状況はよくない。**311**は壺の底部である。土壙の西半部で検出した。胴部下半部のみの出土であるが、

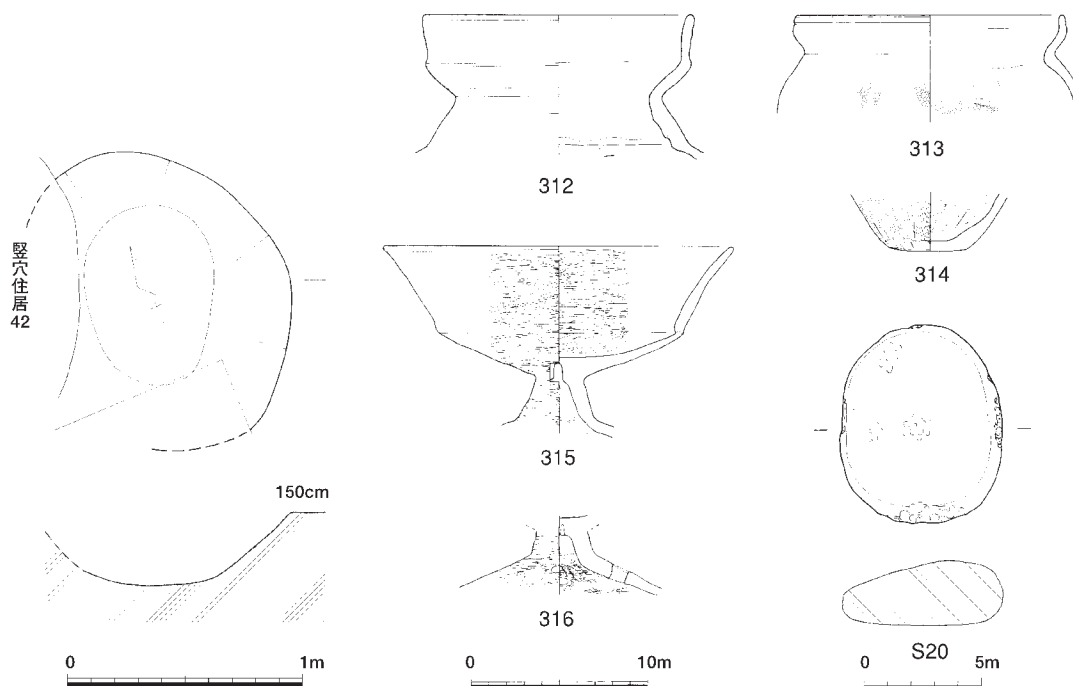


第99図 土壙27 (1/30)・出土遺物 (1/4)

残存で器高10.4cm、底径10.8cmを測る。外面はハケののちヘラミガキが施され、内面はヘラケズリが施されている。その他に、鉢片などがあるが、小片のため図示していない。これらの出土遺物から、土壙27は伊福・弥・後Ⅲ期の時期に比定することができよう。(金田)

土壙28 (第100図、図版37)

土壙28は17M区で検出された。竪穴住居42に一部削平されているが、平面形がやや円形に近い、長



第100図 土壙28 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

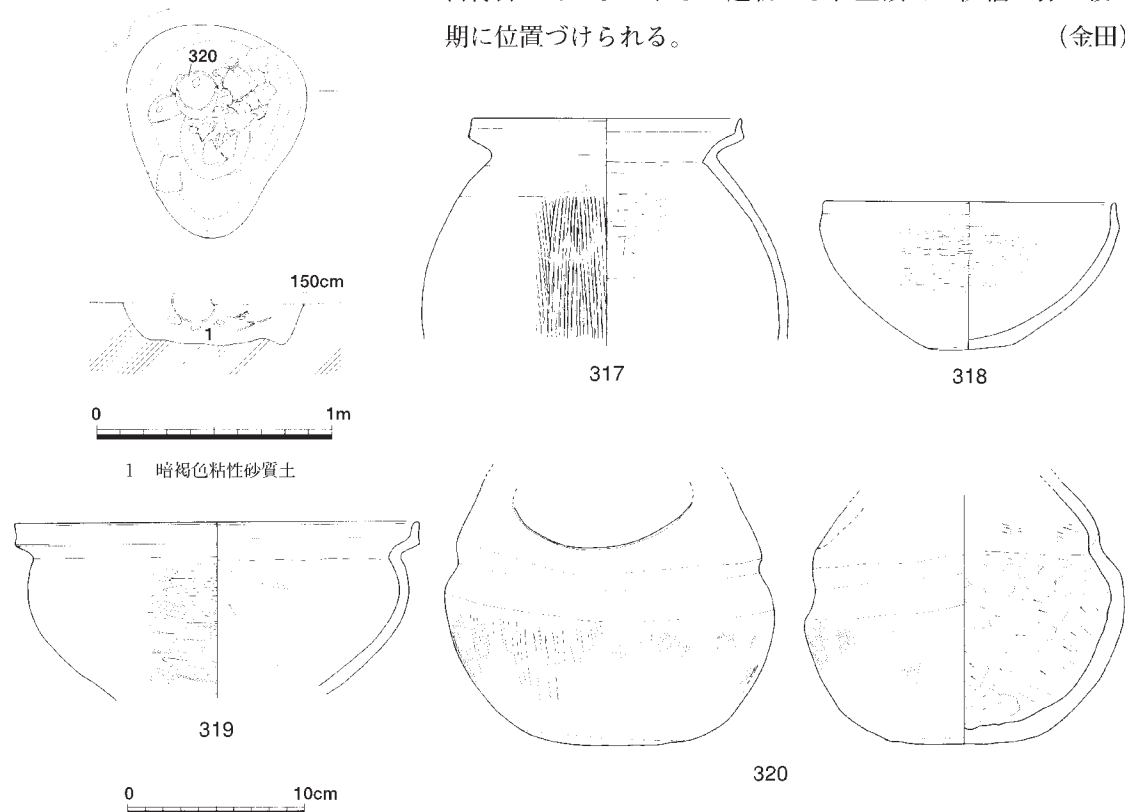
径約134cm、検出面からの深さ30cmの土壌である。内部から多くの弥生土器が出土した。**312**は二重口縁の壺であり、口径15cmを測る。**313**は甕の口縁部、**314**は甕の底部である。**315・316**は高杯である。いずれも精製された粘土が使用されている。**315**は脚裾部が欠損しているが、杯部外内面ともに細かいヘラミガキがみられる。**S20**は叩き石である。全長8.4cm、重さ229.67gを測り、紛岩製である。これらの遺物から土壌28は伊福・弥・後Ⅳ期に比定できる。(金田)

土壌29 (第101図、図版13・30)

土壌29は16M区で検出された土壌である。平面形態は楕円形を呈し、長径90cm、短径65cm、検出面からの深さは16cmを測る。土壌の中央には手焙形土器(**320**)が配置されていた。手焙形土器は覆部が欠損しているが、本来は完形であった可能性もある。残存高14.3cm、胴部最大径18.7cmを測る。手焙形土器の底部付近には大きさが5cm程度の小石群がみられ、周辺の土器片とともにあたかも手焙形土器を支えているかのようなようであった。手焙形土器の周辺には、弥生土器が破片の状態出土している。**317**は甕である。**318・319**は鉢である。**318**は精良な胎土をもつ鉢で完形である。これらの遺物から土壌29は伊福・弥・後Ⅳ期の時期につくられたものと考えられる。(金田)

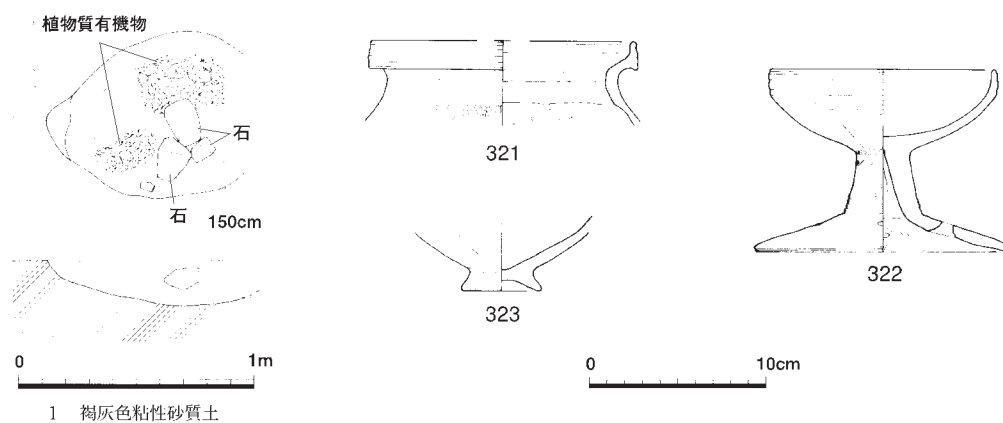
土壌30 (第102図)

土壌30は17M区に位置する。東半分が攪乱により失われているが、長径は復元で約95cm、短径68cmを測る楕円形の土壌である。検出面からの深さは20cmである。土壌内部の中央付近には20cmほどの大きさの石が3～4個置かれていた。また、土壌の底部には植物質有機物が敷かれていた。**321**は甕である。**322**は高杯である。いわゆる水こし粘土による胎土に比べると少し粗い印象を受ける。**323**は台付鉢である。これらの遺物から、土壌30は伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられる。(金田)



第101図 土壌29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

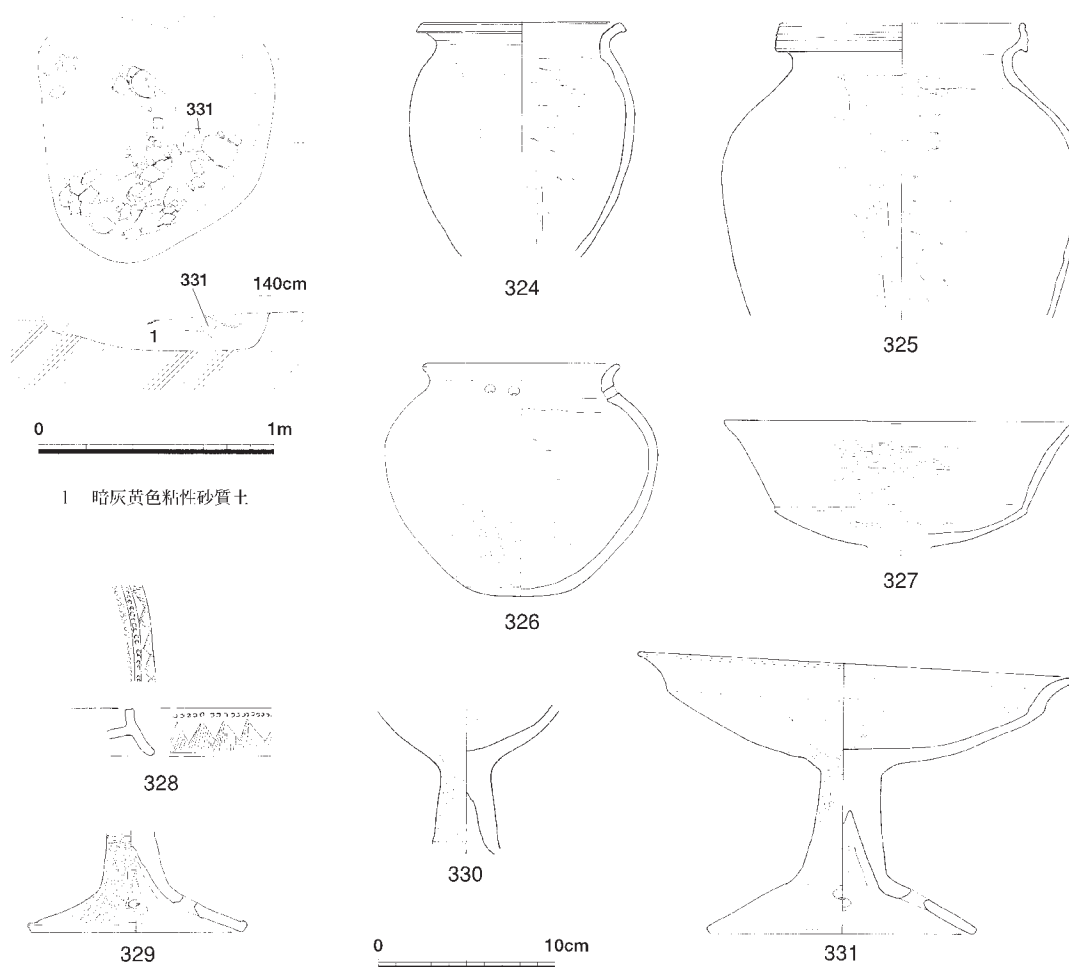
第3章 発掘調査の概要



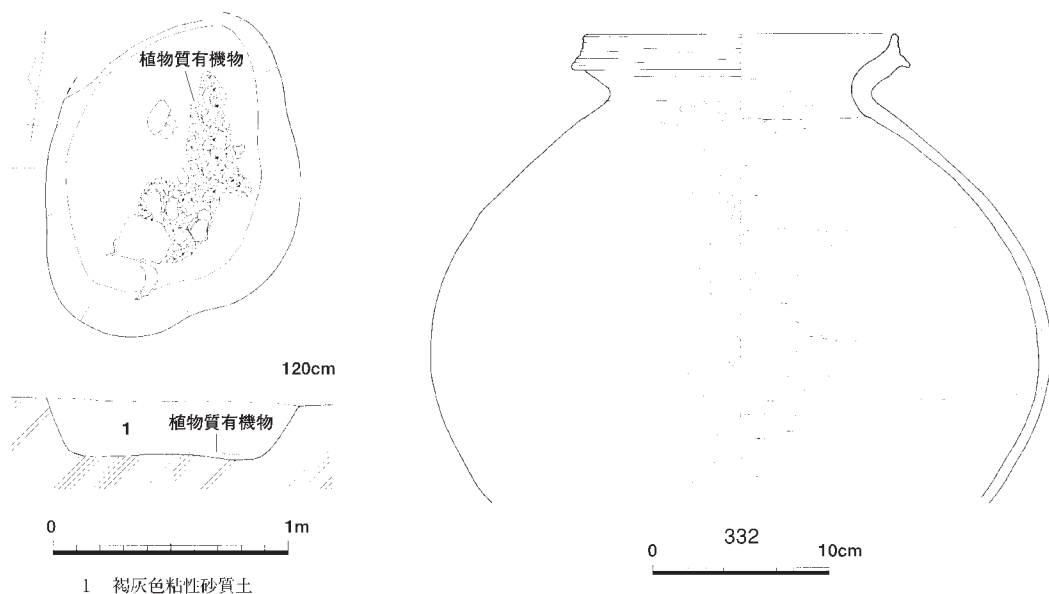
第102図 土壙30 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙31 (第103図、図版30)

土壙31は17M区に位置する。楕円形に近い平面形態をもち、短径で約95cm、検出面からの深さは15cmを測る。土壙からは比較的多くの上器が出上した。324・325・326は甕である。326は頸部に二



第103図 土壙31 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第104図 土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

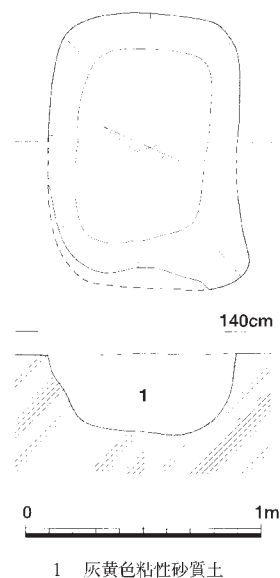
孔一対の円形の穿孔をもつ。327～331は高杯である。328は装飾高杯の口縁部であり、外面に鋸歯文等が施されている。327のみいわゆる精良粘土が使用されているが、その他の高杯には使用されていない。この土壙31は、おおむね伊福・弥・後Ⅲ後半～Ⅳ期を中心とする時期に比定することが考えられよう。(金田)

土壙32 (第104図)

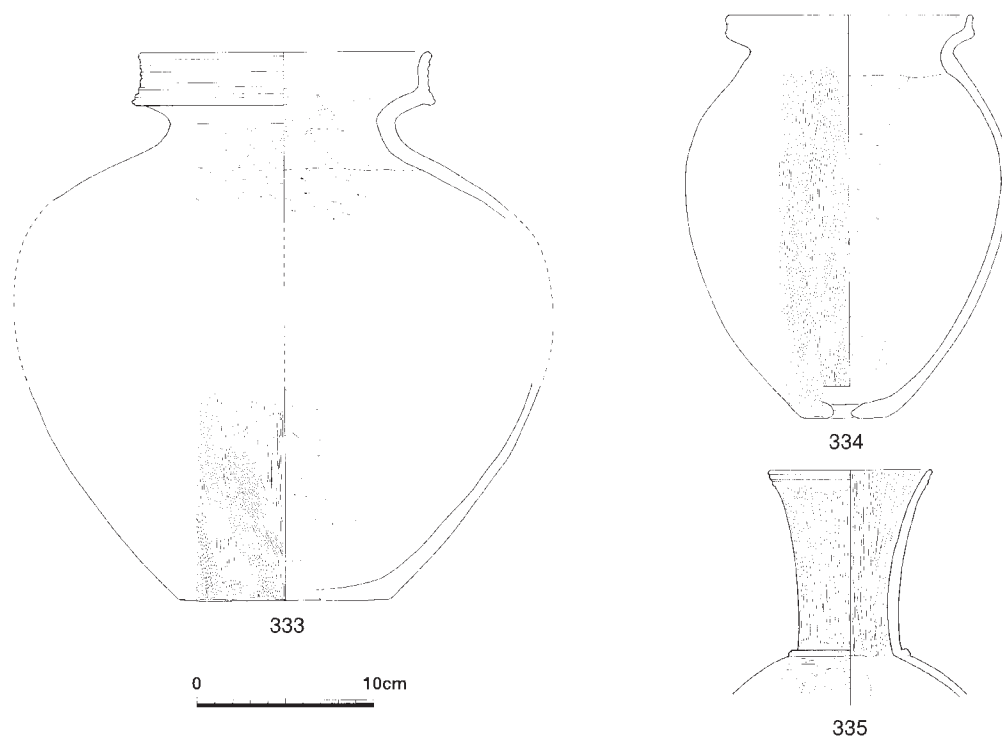
土壙32は16M区に位置する。北端は土壙33により切られている。平面形は不整楕円形を呈し、長径はおおよそ135cm、短径110cmを測る。検出面からの深さは22cmを測る。底面の東半部には植物質有機物が敷かれていた。その上面から土器片が出土したが、その大半は332の壺片である。332は口径17.4cm、残存高26.5cmを測る。胴部内面ではヘラケズリもみられたが、粘土紐接合痕跡も観察できた。他に、甕や、高杯や鉢片も出土しているが、図示していない。これらの出土遺物から、土壙32は伊福・弥・後・Ⅳ期に属するものと考えられる。(金田)

土壙33 (第105・106図)

土壙33は16M区に位置する。土壙32の北で検出された。土壙33は隅丸方形に近い平面プランを呈しており、長軸116cm、短軸80cmを測る。埋土からは土器とともに、赤い色調を呈する土が検出されたが、分析の結果、焼土と判明した。しかし、この土壙では焼土面は検出されておらず、この土は二次的な混入であった可能性が高い。土壙埋土からは弥生土器が出土している。333は壺である。同一固体と思われる口頸部と底部が出土している。334は甕である。底部に穿孔をもつ。完形に復元することが可能で、口径13.6cm、器高22.8cmに復元することが可能である。335は直口壺の口縁部である。頸部に突帯が貼付けられており、いわゆる水こし粘土が使用されている。これらの出土遺物から、土壙33は伊



第105図 土壙33 (1/30)



第106図 土壙33出土遺物 (1/4)

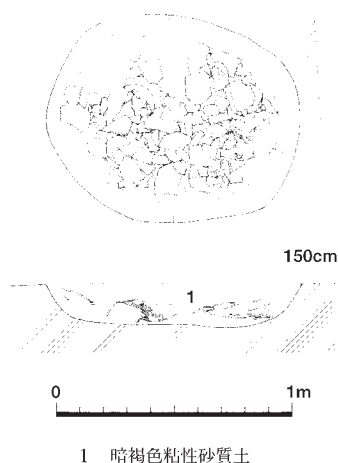
福・弥・後Ⅲ期を中心とする時期に比定できる。

(金田)

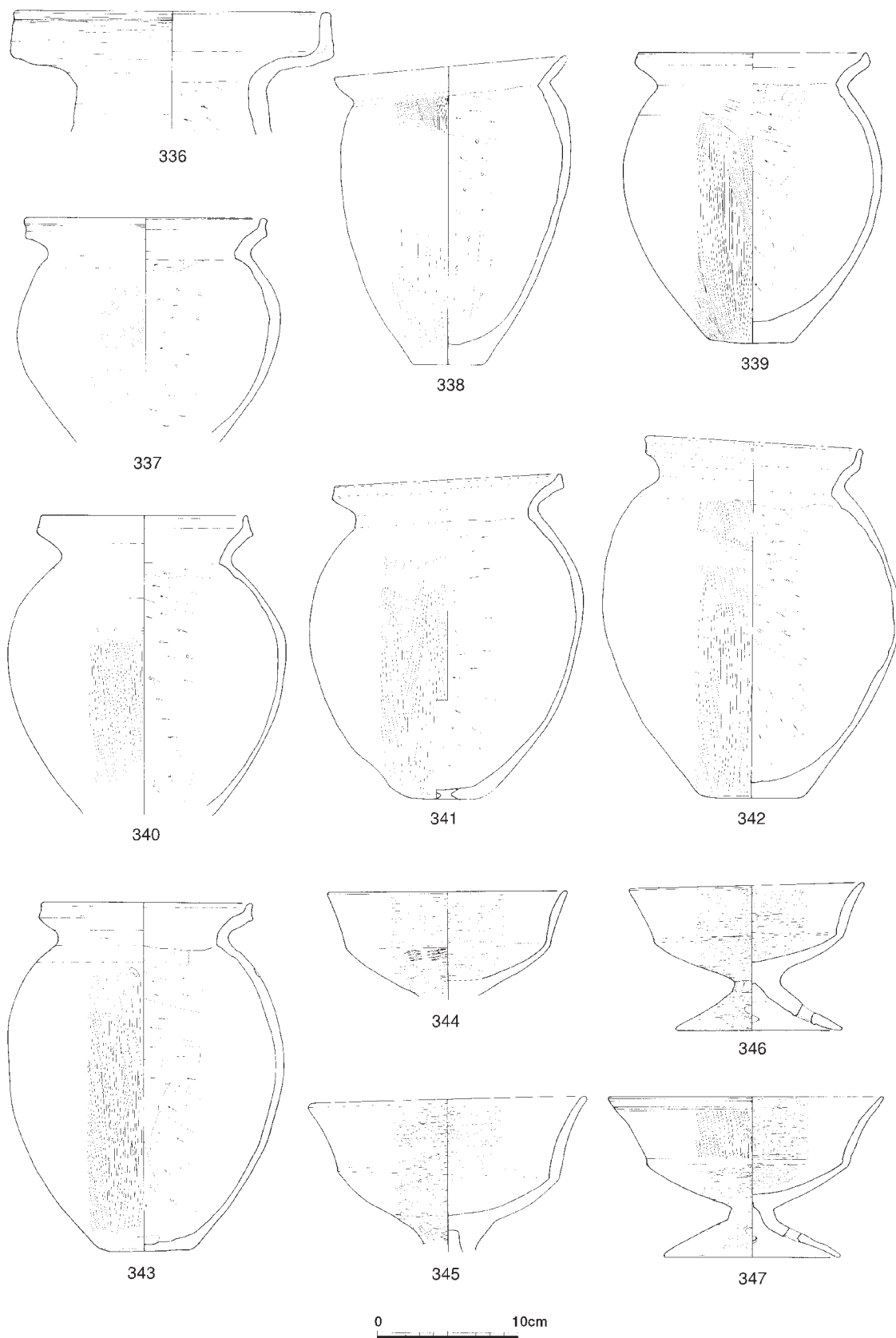
土壙34 (第107・108図、図版14・30・31)

土壙34は16M区に所在し、土壙33の上層に位置する。やや平面形は円形に近い楕円形を呈しており、残存状態は良好である。長径105cm、短径80cm、検出面からの深さは17cmを測る。土壙内部には暗褐色土が堆積しており、内部から弥生土器が多く出土したが、いずれも破片の状態で見出されている。336は長頸壺である。口径21.6cmに復元できる。337～343は甕である。甕は口縁を「く」の字状に折り曲げるもの(338)、口縁端部をつまみあげるもの(339～341・343)、口縁端部を上方にやや拡張するもの(342)に大きく分けることができる。338は全体的に歪んでいる。341は底部に穿孔が施されている。343は肩部に米粒状の刺突文がみられる。344～347は高杯である。いずれの高杯も、いわゆる水こし粘土を使用している。347の高杯の口縁部外面にタテ方向のヘラミガキがみられるほかは、基本的に内外面ともヨコ方向のヘラミガキが施されている。全体の復元できる346で口径16.5cm、器高10.5cm、底径11.6cm、347で口径19.3cm、器高11.4cm、底径12.2cmを測る。その他に図示していないが、壺、甕、高杯、鉢の小片が見出されている。これらの土器も含めて考えると、器種の大部分は甕と高杯がしめており、壺片や鉢の占める割合は少ない傾向がある。伊福・弥・後Ⅲ後半～Ⅳ期に属する土器がみられることから、土壙34は伊福・弥・後Ⅳ期頃に営まれたものと考えられる。

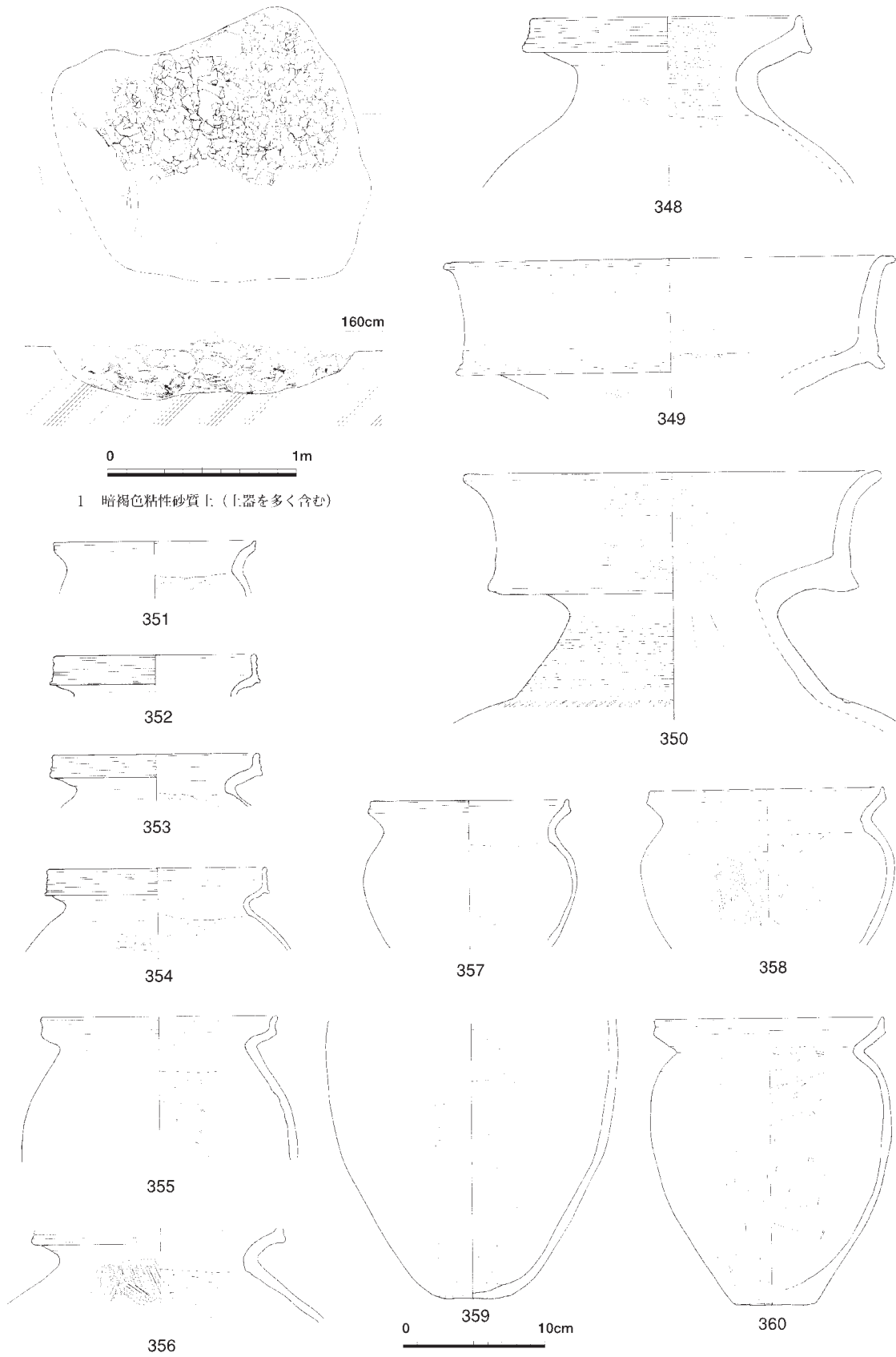
(金田)



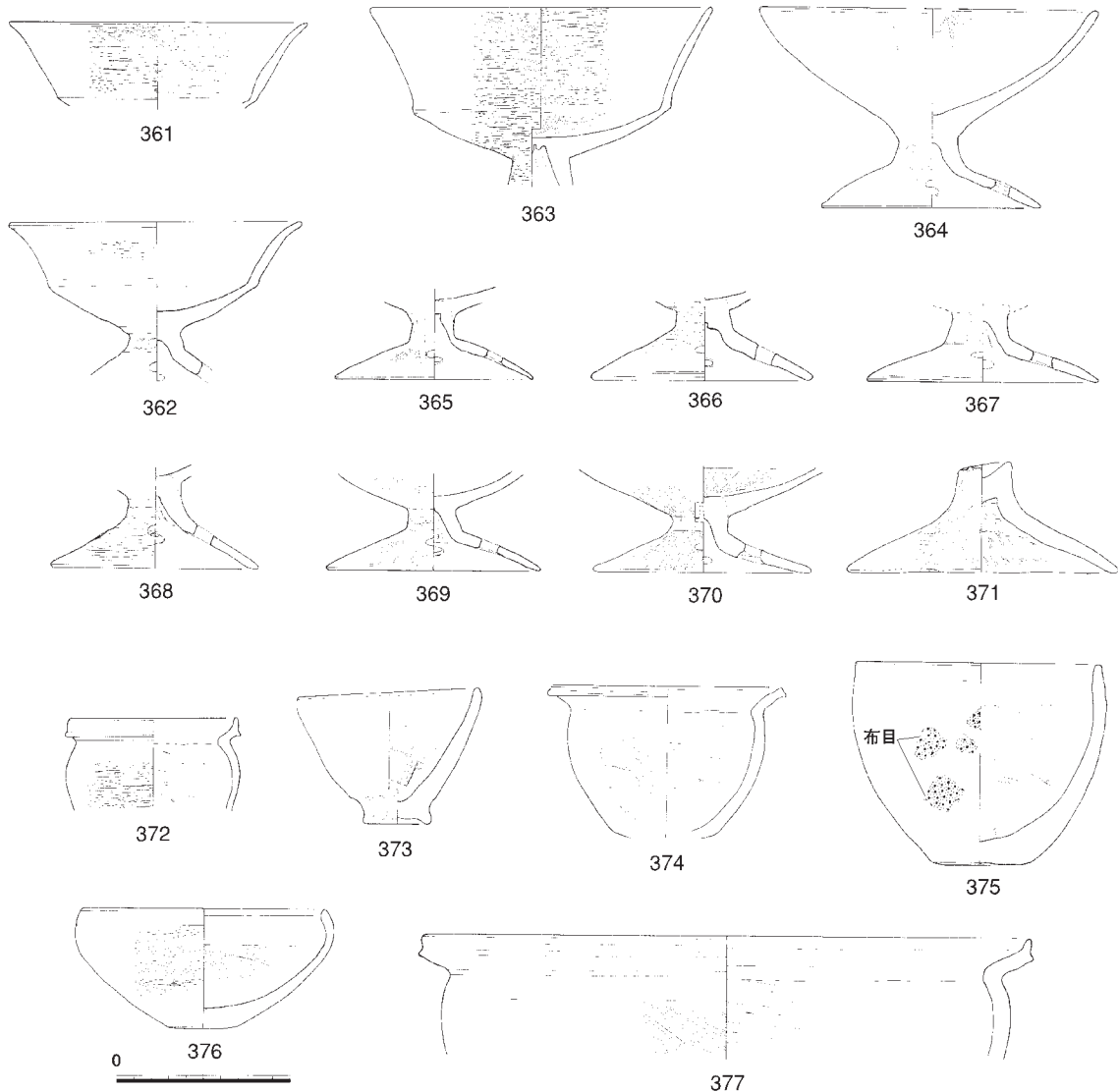
第107図 土壙34 (1/30)



第108図 土壙34出土遺物 (1/4)



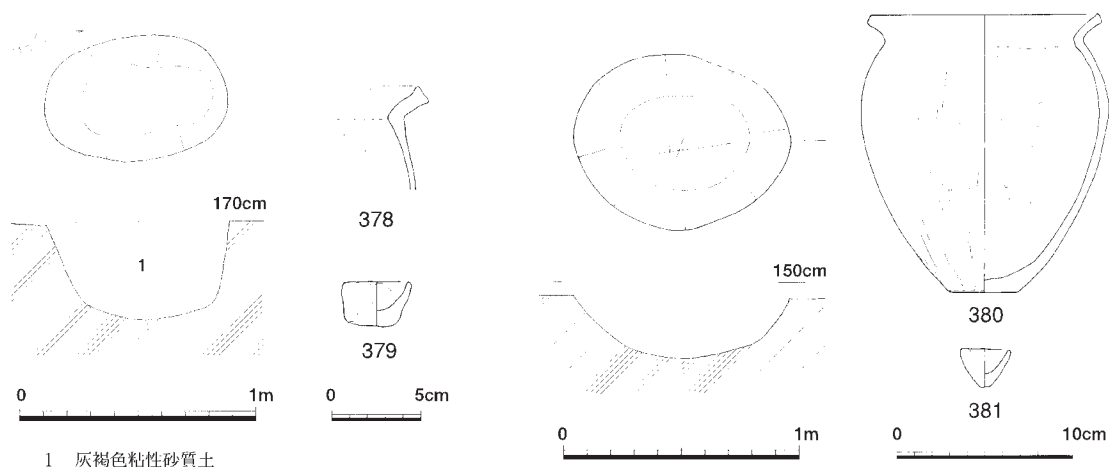
第109図 土壌35 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第110図 土壙35出土遺物② (1/4)

土壙35 (第109・110図、図版14・32)

土壙35は16M区に属する。いびつな平面形態をしており、残存長径167cm、短径130cm、検出面の深さは30cmを測る。土壙の西端は攪乱により破壊されていたが、土壙内から多量の土器を検出した。土器は石とともに、土壙内のおもに北半部から出土しており、密集して廃棄されていた。土器はほとんど破片の状態で出土している。出土した遺物はコンテナ箱で、およそ4～5箱出土している。348～350は壺である。349と350は大きく立ち上がる複合口縁をもつ壺である。350の壺の頸部にはヘラ描平行沈線が施されており、また、肩部との境目に刺突文が施されている。口径28.6cm、残存高17.6cmを測る。351～360は甕である。甕は口縁端部をつまみあげるもの(351・357・358)や、口縁端部を上方に拡張するもの(352・353・354・355・360)などがある。口縁端部には擬凹線をほどこすもの(352～354)もある。完形に復元できる360で口径16cm、器高20.2cmを測る。361～371は高杯であり、いずれもいわゆる水こし粘土を使用している。361～364は杯部が残存しており、361と363は



第111図 土壙36 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第112図 土壙37 (1/30)・出土遺物 (1/4)

外内面ともにヨコ方向のヘラミガキが施されているが、362と364は表面の残存状態が良くなく、詳細な調整は不明である。365～370はいずれも脚部である。外面調整はヨコ方向のヘラミガキを持つもの、タテ方向のハケメがみられるものがある。371は蓋と考えられるもので、高さ6.4cm、底径15cmを測る。外面はヘラケズリにより調整されたのち、ヘラミガキあるいはナデにより調整が施されている。内面にはハケによる調整等がみられる。粗砂や細砂を含むやや砂っぽい胎土である。372～376は鉢である。373はほぼ完形であり、口径10.1cm、器高7.9cmを測る。375は口径13.9cm、器高12.3cmを測る。胴部外面に布目を思わせる圧痕が観察できる。376は口径13.8cm、器高6.9cmを測る。粗砂や細砂を含む砂っぽい胎土であり、精良ではない。377は大形の鉢であり、口径34.8cmを測る。土壙35からはこのように多くの土器が出上したが、器種は図示していないものも含めると甕が多い傾向がうかがえる。これらの土器の特徴から、土壙35は伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられる。(金田)

土壙36 (第111図)

土壙36は17M区の竪穴住居5の上面に位置する、長径78cm、短径53cm、深さ31cmの楕円形の土壙である。土壙内から若干の弥生土器が出土した。378は甕の口縁部である。379は手づくね土器である。

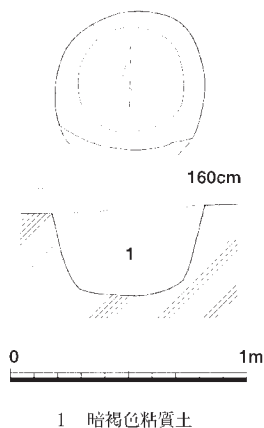
口径3.5cm、器高2.8cmを測る。遺物が少ないため、詳細な時期は不明であるが、伊福・弥・後Ⅳ期の時期に比定できる。(金田)

土壙37 (第112図、図版32)

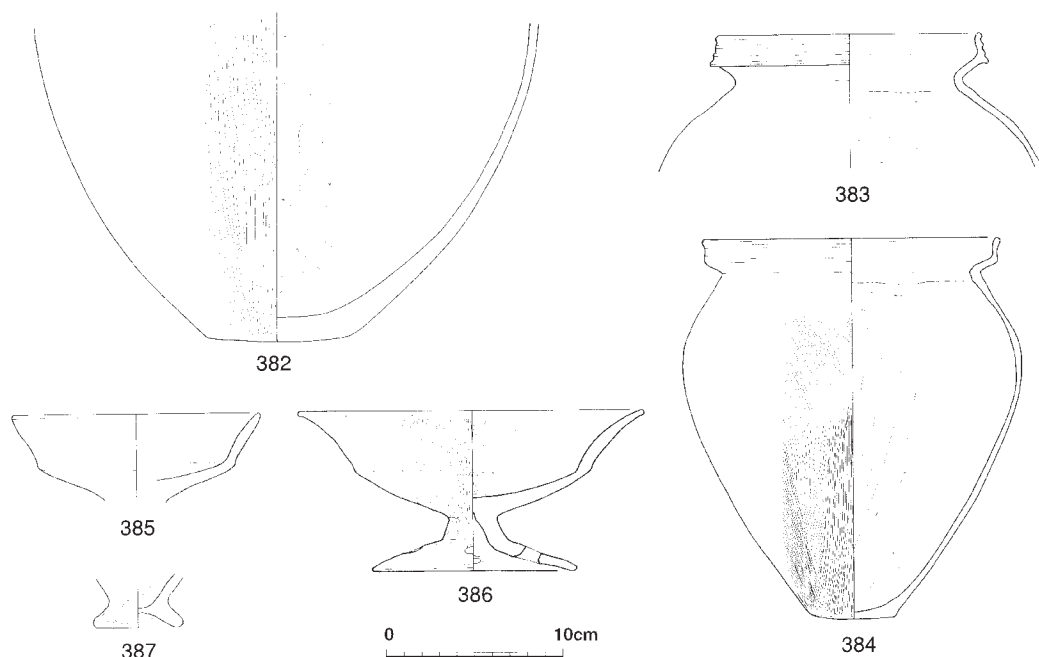
土壙37は17M区の竪穴住居5の上面に位置する。長径92cm、短径74cm、深さ26cmを測る楕円形の土壙である。土壙内から弥生土器片が出土した。380は甕である。完形に復元することが可能であり、口径12.8cm、器高15.6cmを測る。381は鉢のミニチュア品である。口径2.7cm、器高2.1cmの小さいものである。これらの遺物から土壙37は伊福・弥・後Ⅲ期の後半に位置づけることができよう。(金田)

土壙38 (第113・114図、図版32)

土壙38は17M区に位置する。欠損している箇所もあるが、径65cm、深さ38cmを測る円形の土壙である。土壙内には暗褐色土が堆積してお



第113図 土壙38 (1/30)

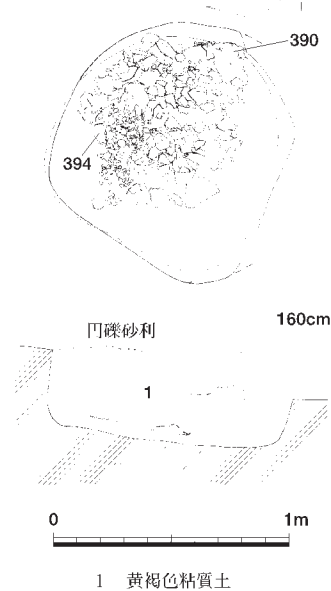


第114図 土壙38出土遺物 (1/4)

り、中から土壙の規模にしては多くの土器が出土した。382は壺である。胴部中央付近から底部にかけて残存しており、残存高18.0cmを測る。383・384は甕である。いずれも口縁端部を上方に拡張するタイプのものである。全体が復元できる384で、口径16.5cm、器高21.4cmを測り、平底を残す。外面にハケメ、内面にヘラケズリがみられる。385・386は高杯である。いずれも精良な胎土である。386はタテ方向にヘラミガキがみられ、口径19.4cm、器高9.0cmを測る。387は製塩土器である。これらから、土壙38は伊福・弥・後Ⅳ期を中心とする時期に営まれたものと考えられる。(金田)

土壙39 (第115～117図、巻頭図版2、図版14・32～34)

17M区の南端中央に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸110cm、短軸105cmを測る。断面形は方形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは39cm残存する。検出面では、中央北側において、径1cm以下の円礫・砂利が集中して水平堆積しており、埋没過程において自然に流れ込んだというよりは意図的に廃棄された印象を受ける。また検出面では中央西寄り碧玉製管玉J8が出土した。弥生土器は、埋土中位から底面付近にかけて一括廃棄されており、平面的には中央部から東半にかけて集中的に認められ、東壁に近いほど土器の出土位置が高く、中央部は底面に密着していた。弥生土器の甕390は埋土中位において、ほぼ一個体がつぶれた状態で出土した。大半の土器は破損した状態であった。出土した弥生土器の器種は、甕388～395、鉢396、高杯397～404であり、甕・高杯に偏りがある。このうち388・389は完形である。388・389・391の甕は「く」の字

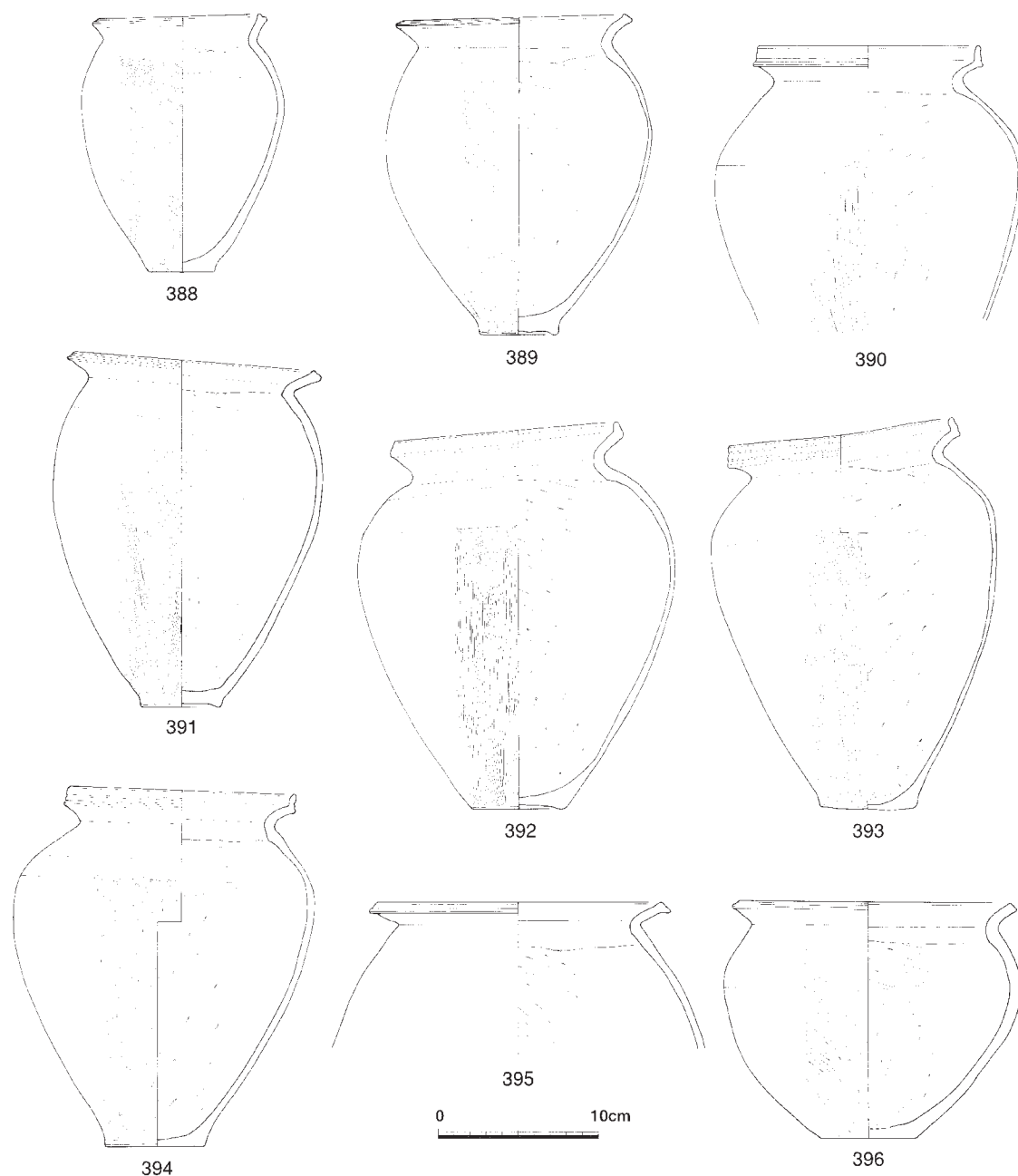


第115図 土壙39 (1/30)

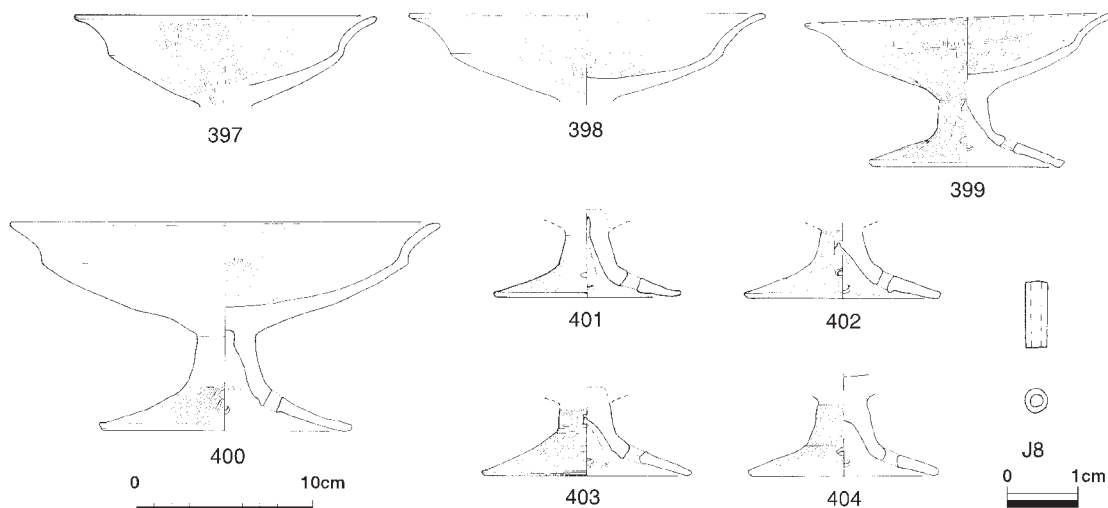
第3章 発掘調査の概要

状の口縁部を持ち、端部を内側へわずかに摘み寄せている。端部には1条の擬凹線文を施す。甕390・392～394は口縁端部を上方へ拡張し、このうち390・393・394の口縁端部には2条の擬凹線文が入る。甕は全体的に肩が張り、底部は平底である。390・393・394の外面はハケメ後に縦方向のヘラケズリによって調整している。高杯の397～400は浅い受け部を持ち、口縁部が短く外反する。高杯400～404の脚部はいずれも短脚で、裾部には円形の透かし孔が4方向に配置されている。J 8の碧玉製管玉は両面穿孔である。

本土壌が機能していた時期は出土土器から伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。 (米田)



第116図 土壌39出土遺物① (1/4)



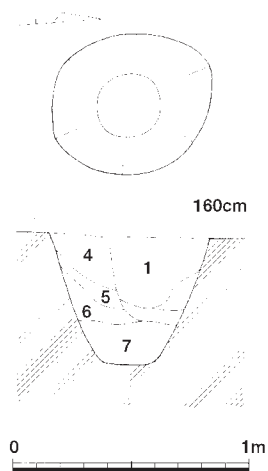
第117図 土壙39出土遺物② (1/4・1/1)

土壙40 (第118図)

17L区の南東側に位置し、竪穴住居24を切る。また土壙西半は攪乱を受けている。土層断面の第1～3層は別の遺構である可能性もある。現状の平面形は長軸78cm、短軸60cmの円形を呈する。遺物は、弥生土器片が出土しており、時期は伊福・弥・後Ⅳ期に属する。(米田)

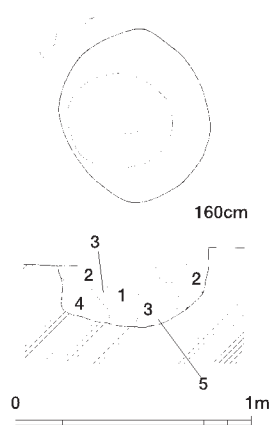
土壙41 (第119図)

17M区の北東に位置する。平面形は径74cmの円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。第1層は柱痕の可能性はある。出土遺物は、弥生土器の壺・甕・高杯の小片があり、弥生時代後期後半に比定される。



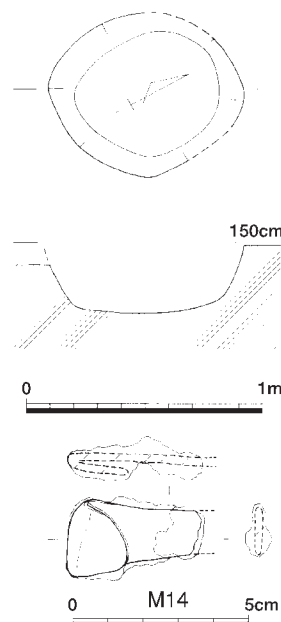
- 1 黒褐色粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 褐灰色粘質土
- 5 暗灰色粘質土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 暗褐色粘質土

第118図 土壙40 (1/30)

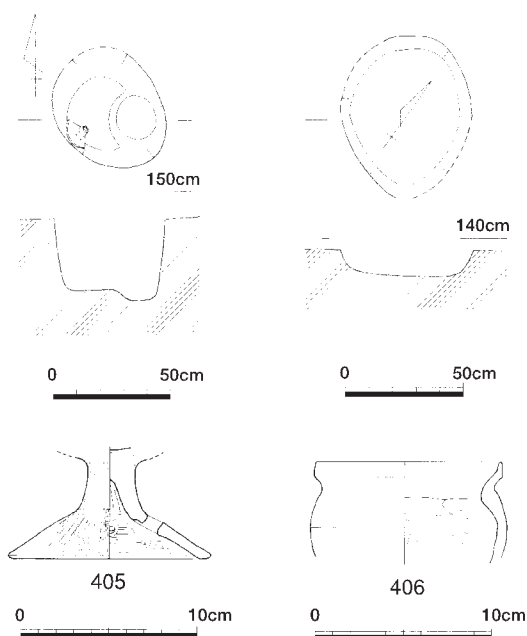


- 1 褐灰色粘質土
- 2 灰黄褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黒褐色粘質土
- 5 暗灰黄色粘質土

第119図 土壙41 (1/30)



第120図 土壙42 (1/30)
・出土遺物 (1/2)



第121図 土壇43 (1/30) 第122図 土壇44 (1/30)
・出土遺物 (1/4) ・出土遺物 (1/4)

現状では、対応する他の柱穴を特定することはできなかったが、竪穴住居23・24で報告した柱穴群とともに、本来は竪穴住居を構成していた柱穴である可能性は十分に考えられる。(米田)

土壇42 (第120図、図版37)

17M区の北端中央に位置し、竪穴住居10に切られる。平面形は不整形円形、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸82cm、短軸70cm、深さ28cmを測る。遺物は、弥生土器片、鉄製の手鎌M14が出土した。時期は切り合い関係から伊福・弥・後Ⅲ期以前に比定される。(米田)

土壇43 (第121図)

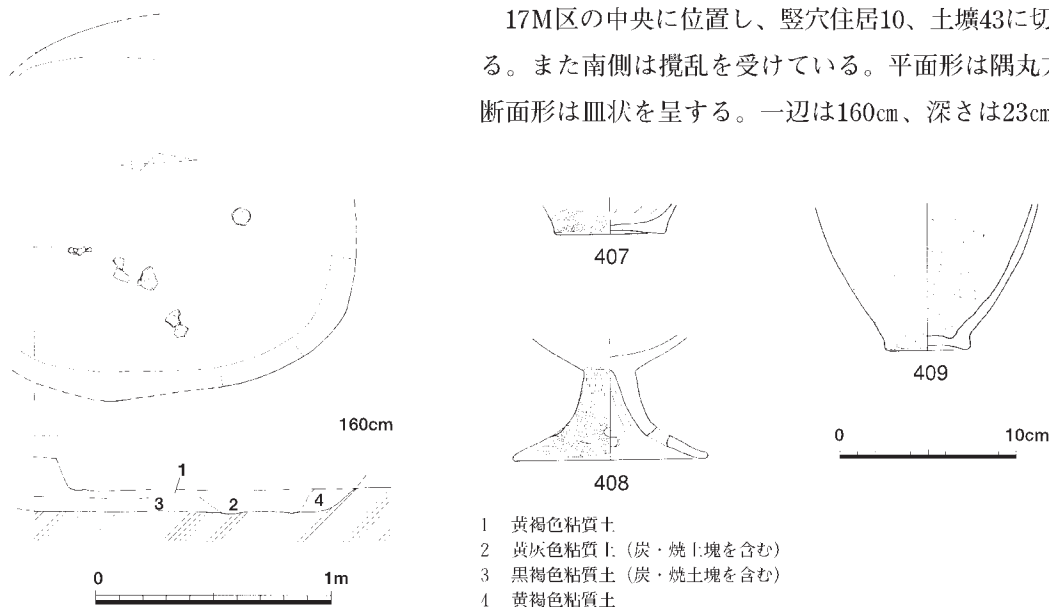
17M区の中央に位置し、竪穴住居10に切られる。平面形は長軸52cm、短軸44cmの楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直である。南西壁面から弥生土器の高杯405が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期で、竪穴住居10より古い。(米田)

土壇44 (第122図)

17M区の中央部東寄りに位置し、竪穴住居10・25に挟まれる。また土壇の東西端は攪乱を受けている。平面形は不整形円形を呈し、長軸70cm、短軸55cmを測る。断面形は皿形を呈し、深さは11cmと浅い。遺物は弥生土器の鉢406のほか、高杯の小片、拳大の礫が出土している。時期は出土土器から伊福・弥・後Ⅳ期と考えられる。(米田)

土壇45 (第123図)

17M区の中央に位置し、竪穴住居10、土壇43に切られる。また南側は攪乱を受けている。平面形は隅丸方形、断面形は皿状を呈する。一辺は160cm、深さは23cmを測



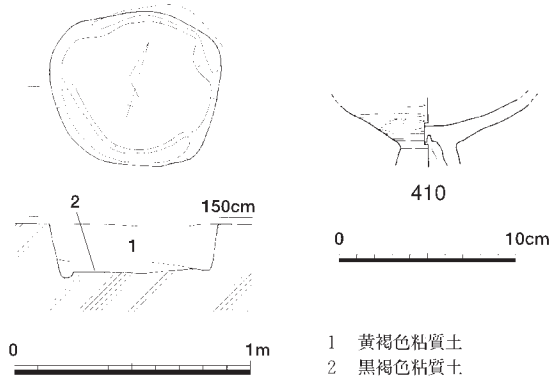
第123図 土壇45 (1/30)・出土遺物 (1/4)

る。遺物は底面直上から弥生土器の甕底部407、高杯408、覆土から甕409が出土した。さらに底面では炭・焼土粒が中央部に散在していた。時期は伊福・弥・後Ⅲ期の範疇で捉えられる。

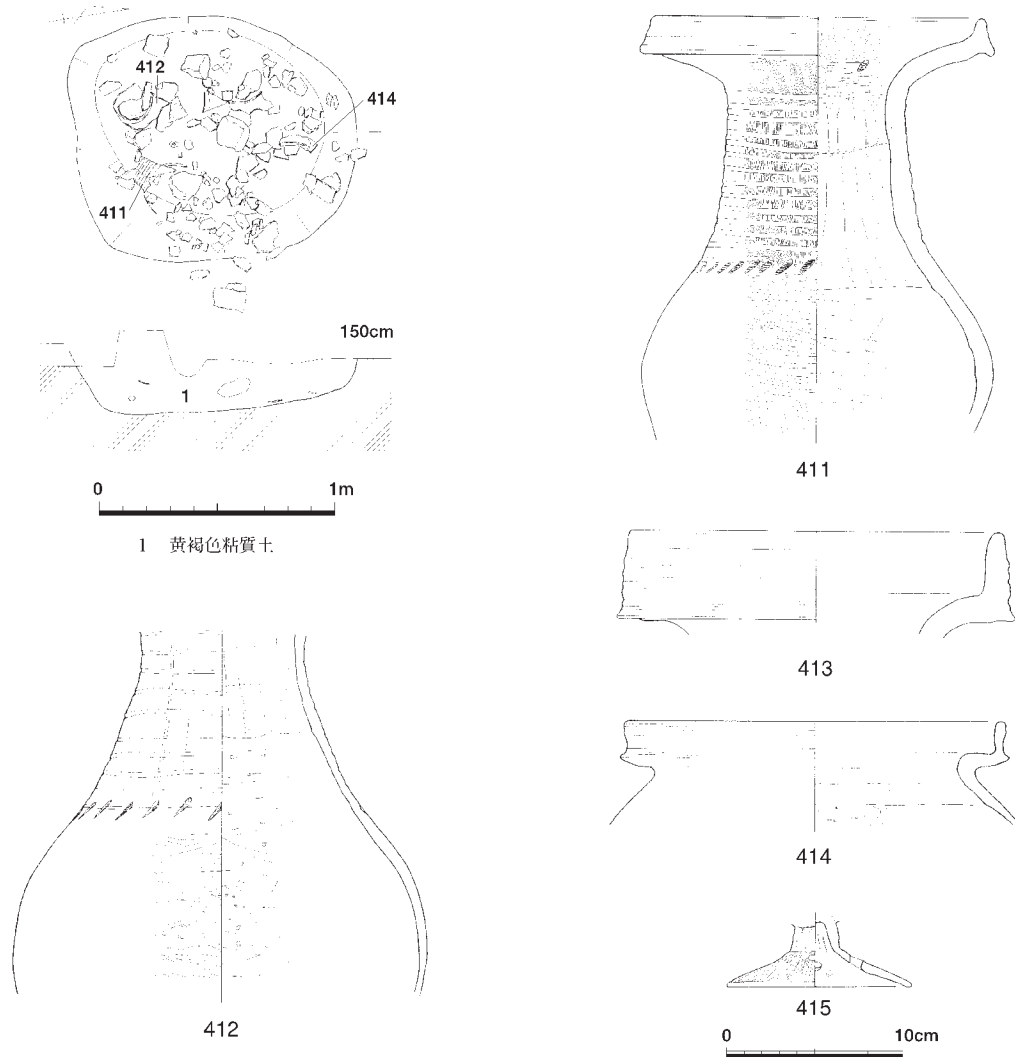
(米田)

土壙46 (第124図)

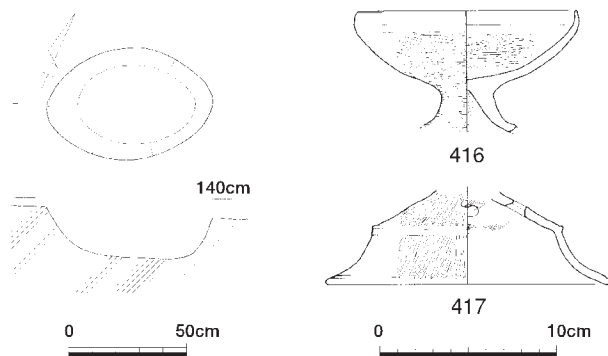
17M区の南東に位置する。平面的には竪穴住居25の中央南西寄りにあたり、層位的に竪穴住居25に切られる。平面形は長軸70cm、短軸67cmの不整円形である。壁面は垂直に近く、北壁はやや袋状を呈する。底面には北半と南半にそれぞれ浅い溝が巡り、貯蔵穴としての



第124図 土壙46 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第125図 土壙47 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第126図 土壌48 (1/30)・出土遺物 (1/4)

機能が示唆される。覆土から弥生土器の高杯410が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅳ期に比定され、竪穴住居25より古い。(米田)

cmほど残存する。遺物は、弥生土器の壺411～413、甕414、高杯415のほか、鉢なども認められた。これらの土器はいずれも破損品で、411などの大形品は底部直上、土器片の多くは底面からやや浮いた状態で出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期の範疇で捉えられる。(米田)

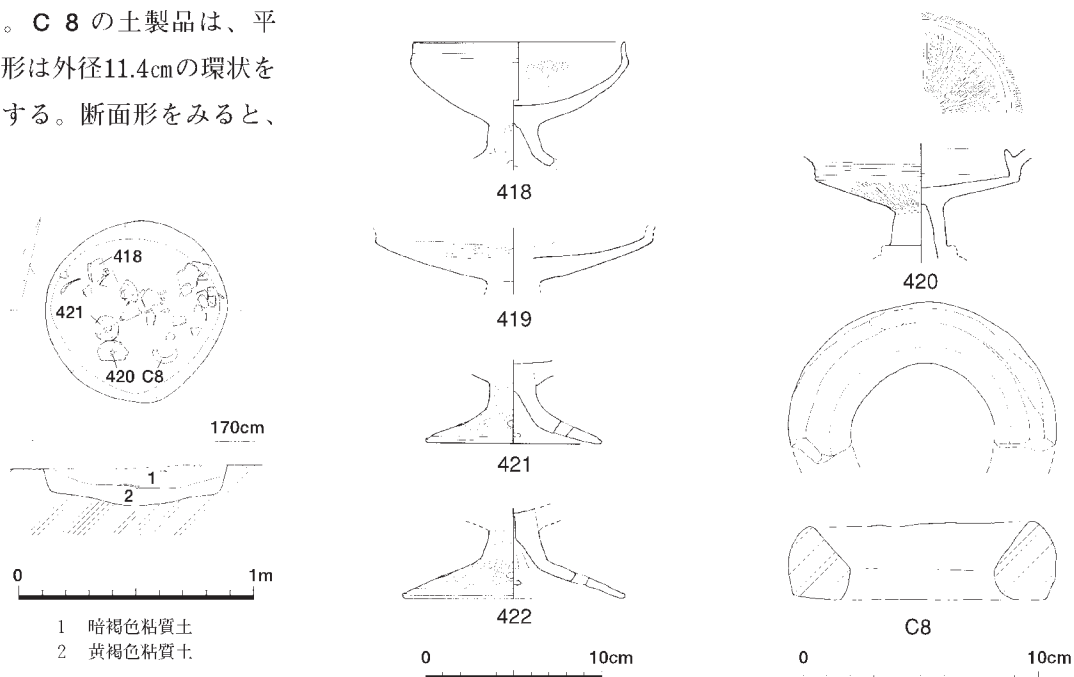
土壌48 (第126図)

17M区の南東に位置し、竪穴住居25・26に切られる。平面形は不整形円形を呈し、現状の規模は長軸118cm、短軸98cmを測るが、検出時に確認した規模は図示したものよりもやや大きい。断面形は椀形を呈し、深さは最大で35

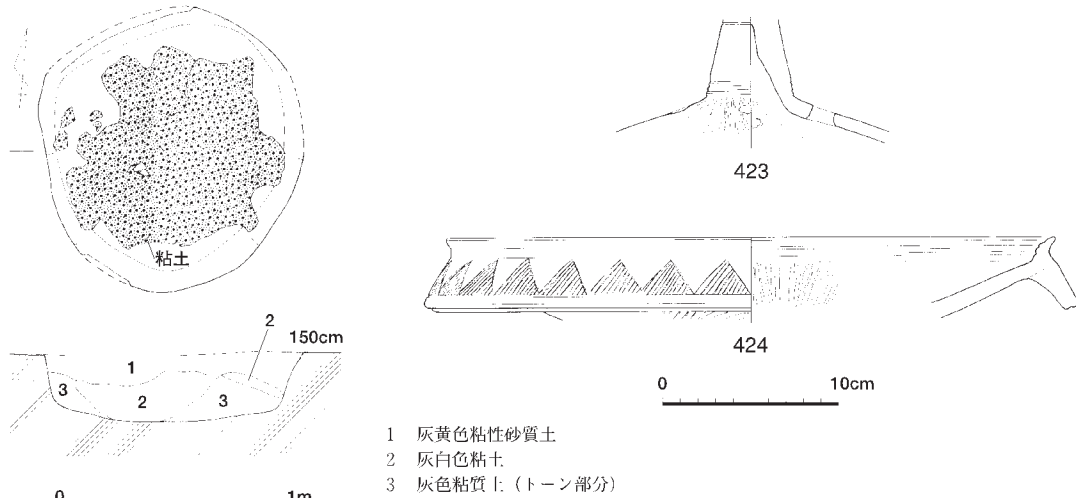
18L区の南側中央西寄りに位置し、竪穴住居27の南西隅角部に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸70cm、短軸48cmを測る。遺物は覆土から弥生土器の高杯416・417が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅳ期に比定され、層位的には竪穴住居27よりも古い。(米田)

土壌49 (第127図、図版15・36)

18LM区の境に位置し、竪穴住居11を切る。平面形は径78cmの円形を呈する。大半の遺物は第1層から出土した。遺物は、弥生土器の高杯418～422、環状の土製品C8のほか、壺・甕片が認められ、特に高杯の出土数が目立つ。C8の土製品は、平面形は外径11.4cmの環状を呈する。断面形をみると、



第127図 土壌49 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第128図 土壙50 (1/30)・出土遺物 (1/4)

平坦な面が底面であると考えられ、上面は尖り、内面は屈曲し、外面は湾曲している。これは土器の台として製作・利用されたことが想定される。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に属する。(米田)

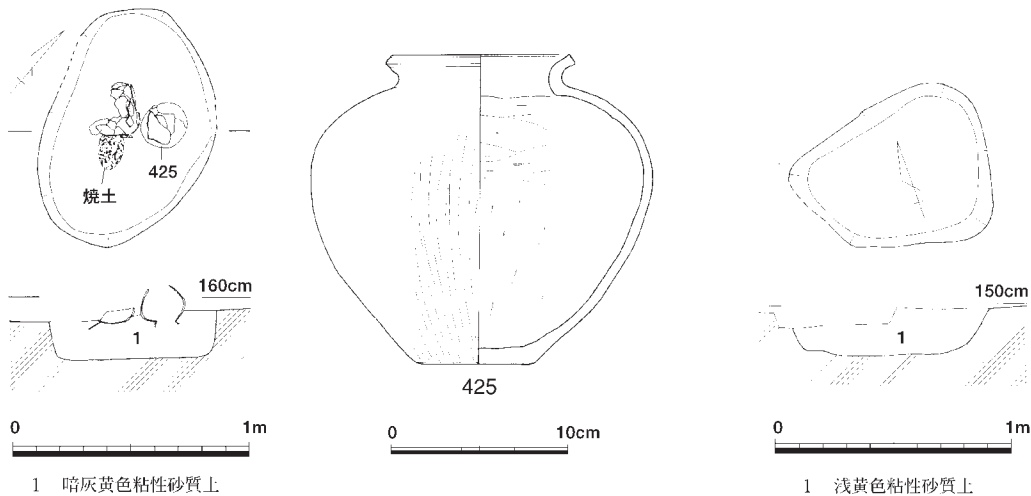
土壙50 (第128図、図版15)

18M区の北側中央に位置し、竪穴住居11を切り、土壙51に切られる。平面形は長軸123cm、短軸110の円形である。第2層の灰白色粘土は人為的に埋積した可能性が高い。底面から弥生土器の高杯423、覆上から器台424が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期である。(米田)

土壙51 (第129図)

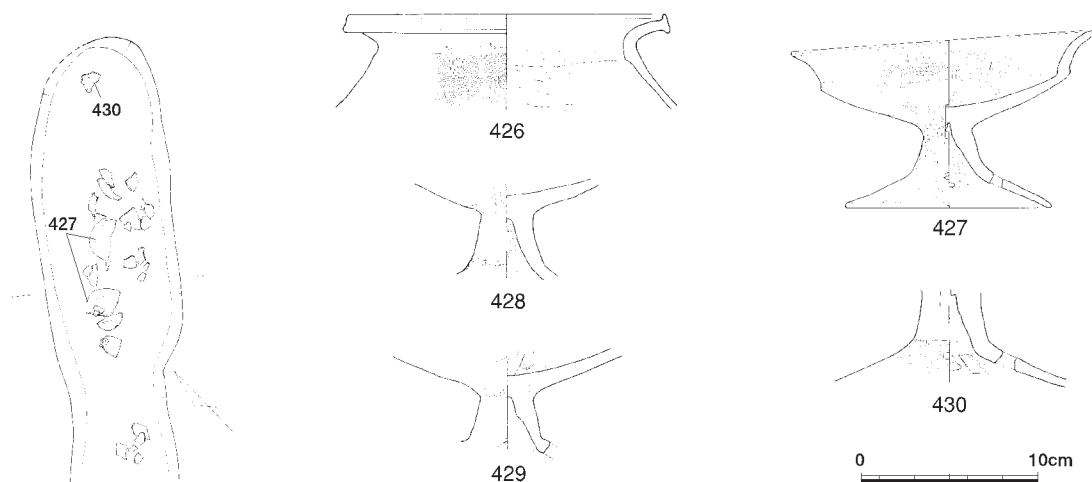
18M区の北側中央に位置し、竪穴住居11、土壙50を切る。平面形は不整楕円形を呈する。壁面は垂直に近い。土壙の中央部では弥生土器の短頸壺425が倒立、隣接して大形の壺底部(非掲載)が傾倒した状態を確認した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。(米田)

土壙52 (第130図)



第129図 土壙51 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第130図 土壙52 (1/30)



第131図 土壌53 (1/30)・出土遺物 (1/4)

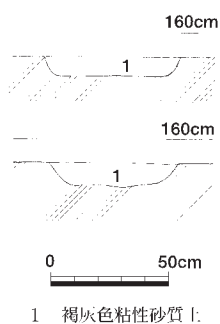
18M区の中央部北寄りに位置し、竪穴住居11を切る。平面形は不整形を呈し、長軸86cm、短軸66cmを測る。断面形は楕形で、深さは22cmである。遺物は図示し得なかったが、弥生土器の甕・高杯の小片が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期の範疇に収まる。(米田)

土壌53 (第131図)

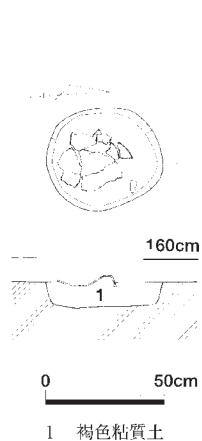
18M区の北西に位置し、竪穴住居11を切る。平面形は、長軸294cm、短軸59cmの長楕円形の溝状を呈する。深さは9cmと浅い。遺物は弥生土器の甕426、高杯427～430があり、いずれも底面直上において破碎された状態で投棄されていた。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。(米田)

土壌54 (第132図)

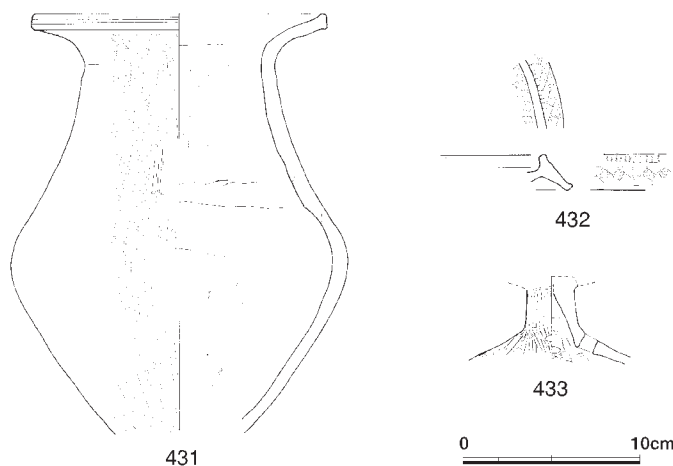
18M区の北西に位置し、竪穴住居11、土壌53を切る。平面形は円形を呈し、規模は長軸50cm、短軸45cmを測る。壁面は垂直に近く、深さは12cmほど残存する。遺物は弥生土器の壺431が底面から8cm上方において横



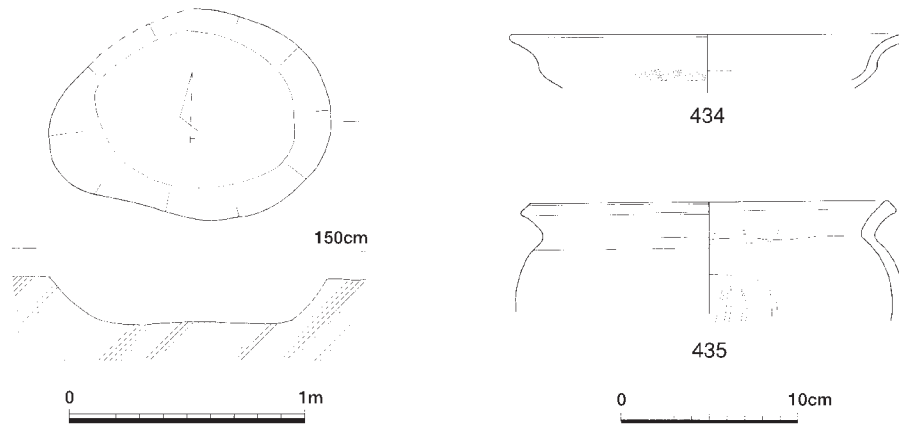
1 褐灰色粘性砂質土



1 褐色粘質土



第132図 土壌54 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第133図 土壌55 (1/30)・出土遺物 (1/4)

に倒れた状態で出土した。また器台432、高杯433も壺431の付近からの破片の状態で出土した。埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。(米田)

土壌55 (第133図)

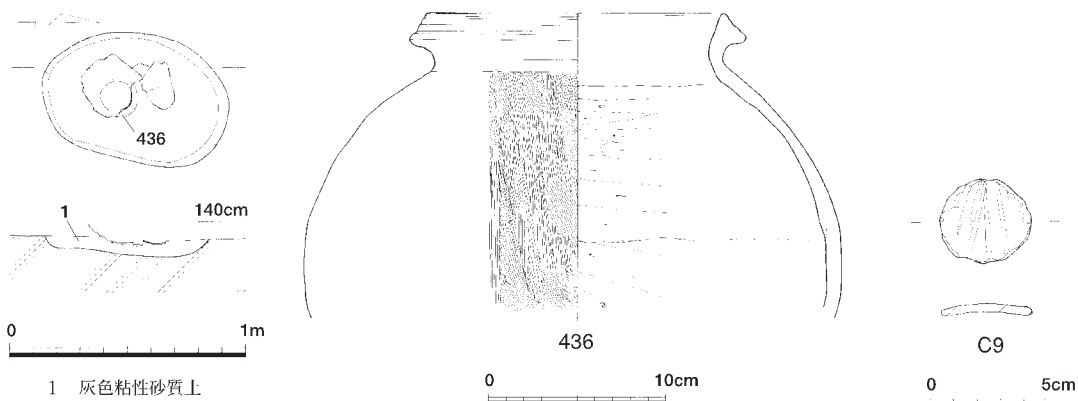
18M区の北西に位置し、竪穴住居11を切る。平面形は不整楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸118cm、短軸90cm、深さ18cmを測る。遺物は覆上から弥生土器の高杯434、鉢435が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期の範疇と捉えて差し支えない。(米田)

土壌56 (第134図、図版36)

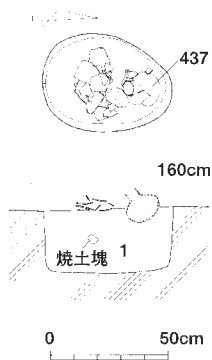
18M区の中央西寄りに位置し、竪穴住居11を切り、竪穴住居30に切られる。平面形は長軸80cm、短軸54cmの楕円形を呈する。深さは8cmと浅く、残存状況は良くない。弥生土器の壺436は底面から5cmほど浮き、口縁部を下に向けた状態で出土した。また土器円盤C9は円形に整形されているが、未穿孔である。時期は伊福・弥・後Ⅲ期と考えられる。(米田)

土壌57 (第135図、図版34)

17M区の西端中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸54cm、短軸40cmを測る。壁面は垂直に立ち上がる。深さは30cm以上である。遺物は検出面において弥生土器の直口壺437、甕・高杯・鉢の破片が認められた。また埋土中位では焼土塊を確認した。本土壌が埋没した時期は、出土遺

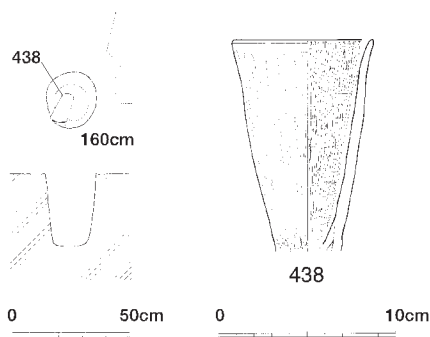
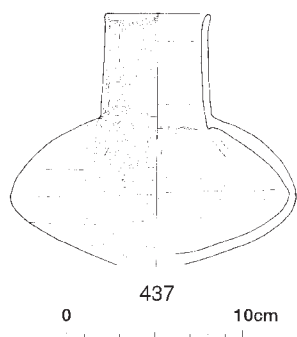


第134図 土壌56 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



1 にぶい黄褐色粘性砂質土

第135図 土壌57 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第136図 土壌58 (1/30)・出土遺物 (1/4)

物から伊福・弥・後Ⅲ期と捉えられる。

(米田)

土壌58 (第136図、図版34)

17M区の西端中央に位置し、土壌57の南隣にあたる。平面形が径22cmの円形を呈するピットである。深さは31cmが残存する。底面では弥生土器の台付直口壺の口縁部438のみが出土し、意図的な廃棄が見てとれる。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に位置づけられる。

(米田)

土壌59 (第137図)

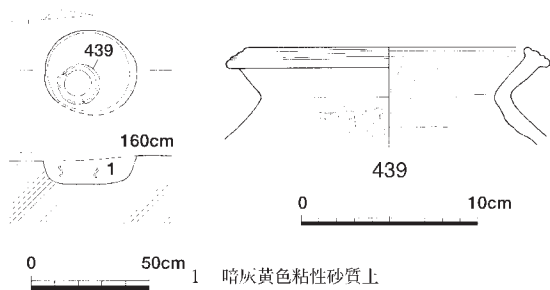
18M区の中央に位置し、竪穴住居11を切り、竪穴住居30に切られる。平面形は径39cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。底面付近では、弥生土器の壺の口縁部439のみが口縁部を上にして放置した状態で出土した。439は肩部を打ちかいており、意図的に口縁部のみを残して破損させているように見受けられる。また、打ちかいた欠損面は歪みながらもほぼ同一の高さで揃えているうえ、口縁部内面が部分的に摩滅していることから、口縁部のみ状態で器台として転用されたことが想定される。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。

(米田)

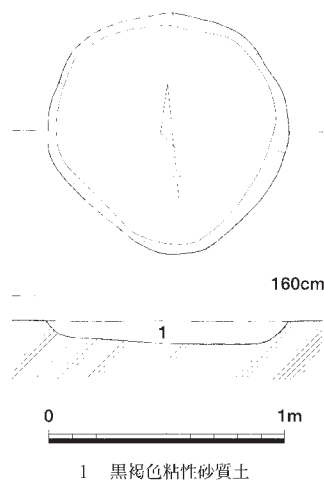
土壌60 (第138図)

18M区の北側中央に位置し、竪穴住居11、土壌61を切る。平面形は円形を呈し、長軸102cm、短軸95cmを測る。断面形は皿状を呈する。深さは10cmと浅い。遺物は図示し得なかったが、弥生土器の小片が出土している。時期は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の範疇で、竪穴住居11、土壌61より新しい。

(米田)



第137図 土壌59 (1/30)・出土遺物 (1/4)



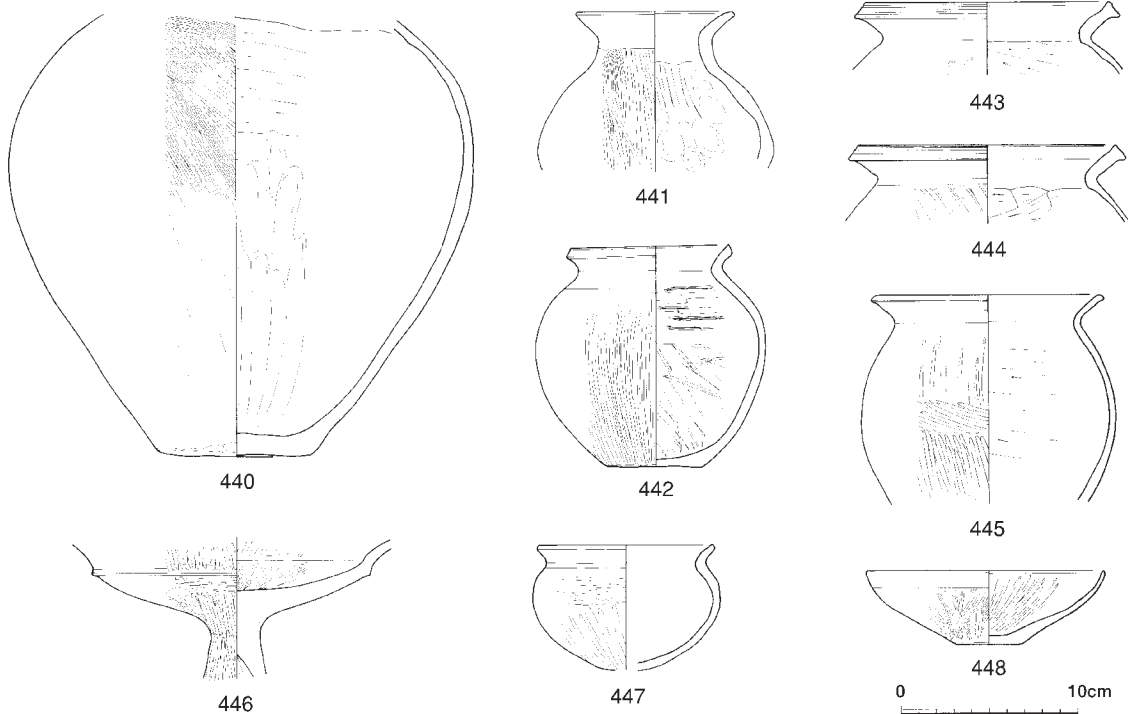
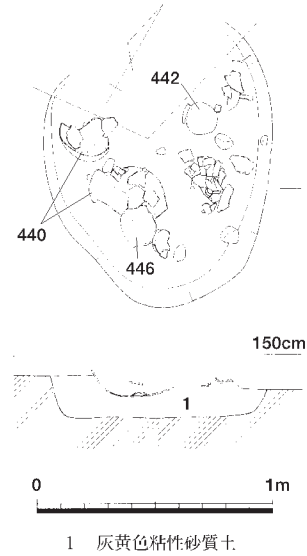
第138図 土壌60 (1/30)

土壌61 (第139図、図版34)

18M区の北端中央に位置し、土壌60に切られる。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は短軸97cm、深さ17cmを測る。覆土からは、弥生土器の壺440~442、甕443~445、高杯446、鉢447・448が出土し、いずれも床面から8cmほど浮いた状態であった。440の壺は体部のみの出土であり、口縁部を意図的に欠いた可能性が高い。441は内面に指オサエの痕跡を多く残し、稚拙な印象を受ける。また442は精製された胎土であり、完形で出土した。本土壌の埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に属する。
(米田)

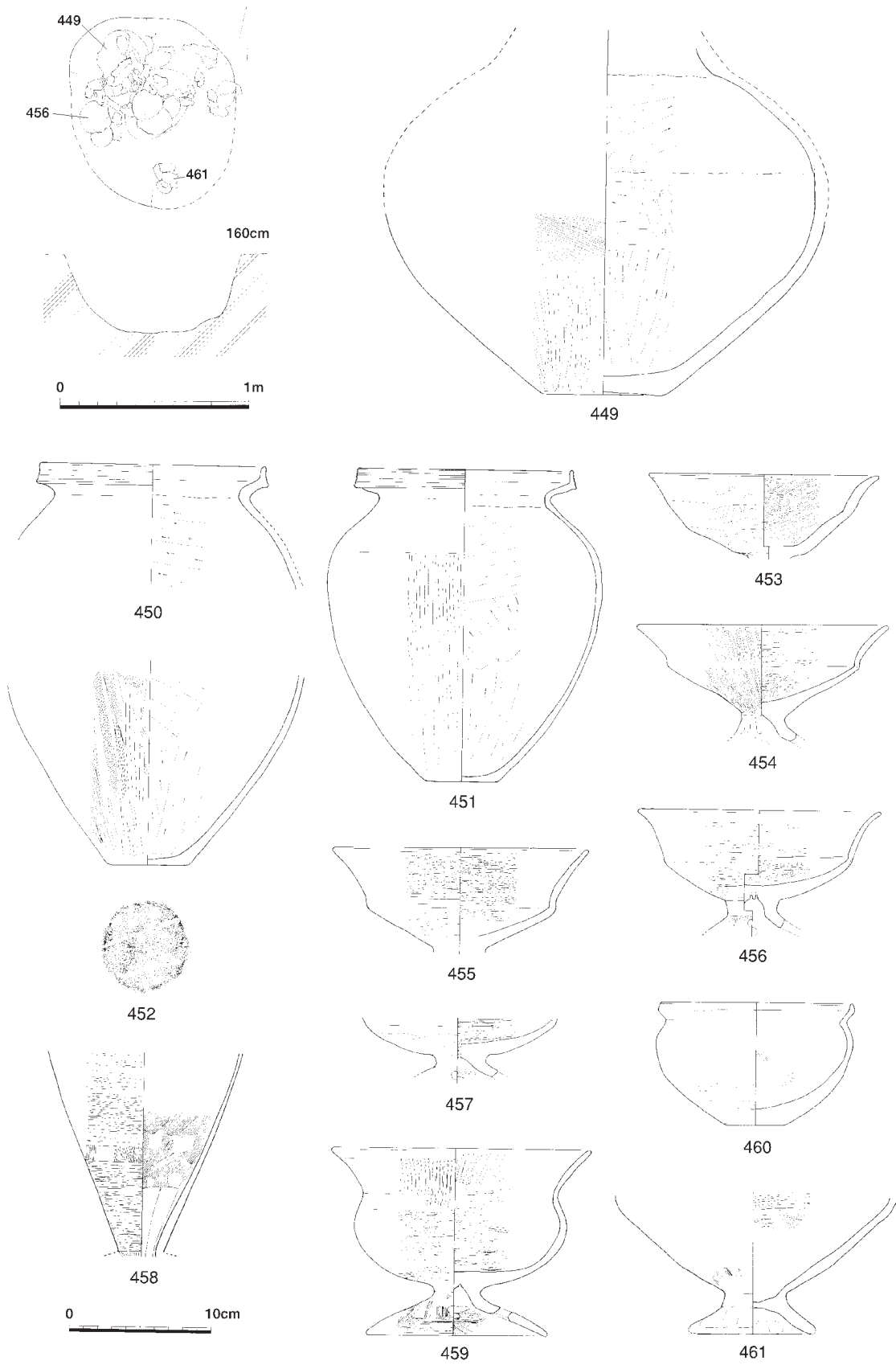
土壌62 (第140図、図版34)

18K区の中央に位置し、調査区の北端にあたる。平面形は長軸は100cm、短軸90cmの楕円形を呈する。断面形は「U」字形で、深さは約40cmを測る。埋土の上位では、破損した弥生土器がまとまって出土した。土器群は現状では北半に偏っているように見えるが、これは本土壌の中央南寄りに側溝が設定されていたために土器の出上状況を把握することができなかったためであり、本来は土壌全体に土器が廃棄されていたものと理解される。甕451は横に倒れた状態で、半個体分が出土した。高杯454・456は両者ともに受け部を上方に向けた状態で重なっていた。次に報告する出土土器はいずれも完形に復元できたものは皆無であった。



第139図 土壌61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

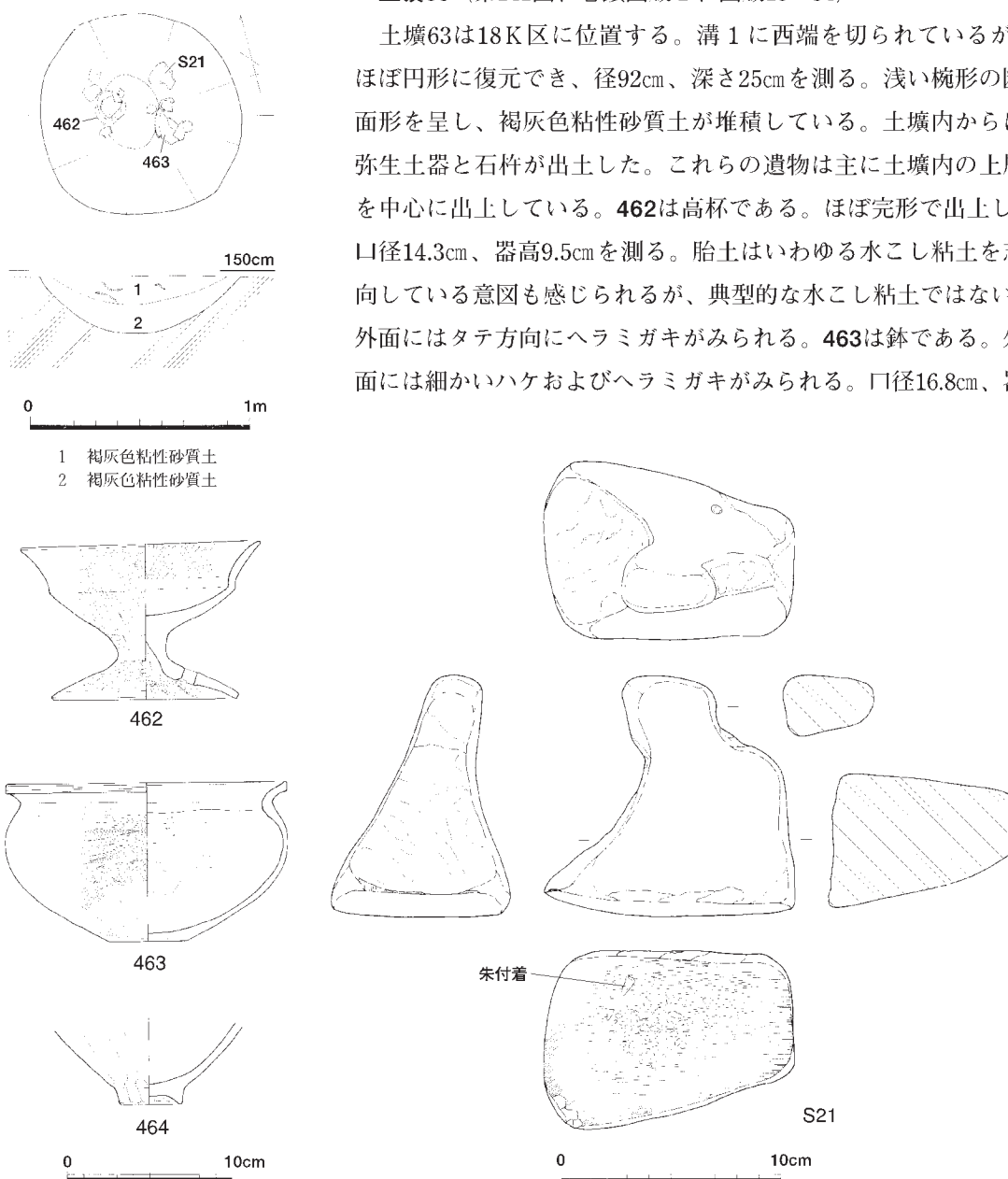


第140図 土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4)

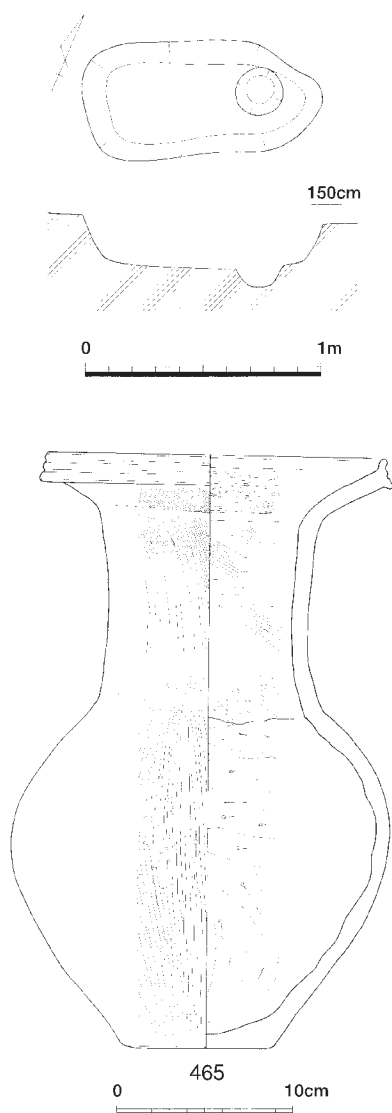
弥生土器の器種は、壺449、甕450～452、高杯453～457、壺458、台付鉢459・461、鉢460がある。甕の450の外表面の一部が剥落している。甕452の底部外表面には、葉脈の圧痕が確認でき、土器製作時に葉を敷いていたことが窺える。壺458は口縁部が大きく外へ開き、頸部はすぼまる。頸部と体部との接合痕には刻み目が確認できる。体部を欠くが、横長の楕円形を呈する体部を持つと考えられる。胎土は精製されており、外面調整はハケメ後に細かいヘラミガキ、内面はハケメ後に指オサエを行っている。高杯は、口縁端部が内湾するように屈曲して短く外反する。受け部の外面調整はヘラミガキであるが、453・455～457は横方向、454は縦方向を基調としている。これらの弥生土器はいずれも一括廃棄されたものと考えられ、時期は伊福・弥・後Ⅳ期に比定される。(米田)

土壙63 (第141図、巻頭図版2、図版15・34)

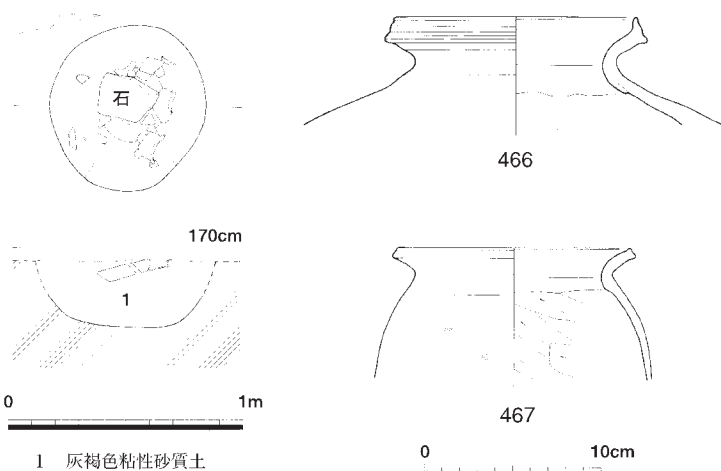
土壙63は18K区に位置する。溝1に西端を切られているが、ほぼ円形に復元でき、径92cm、深さ25cmを測る。浅い碗形の断面形を呈し、褐灰色粘性砂質土が堆積している。土壙内からは弥生土器と石杵が出土した。これらの遺物は主に土壙内の上層を中心に出上している。462は高杯である。ほぼ完形で出上し、口径14.3cm、器高9.5cmを測る。胎土はいわゆる水こし粘土を志向している意図も感じられるが、典型的な水こし粘土ではない。外面にはタテ方向にヘラミガキがみられる。463は鉢である。外面には細かいハケおよびヘラミガキがみられる。口径16.8cm、器



第141図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第142図 土壌64 (1/30)・出土遺物(1/4)



第143図 土壌65 (1/30)・出土遺物 (1/4)

高9.5cmを測る。464は台付鉢である。S 21は石杵である。土壌の北側でやや傾いた状態で出土した。上面に把手をもち、ちょうど右手でもつのに適した形状になっている。石杵の底面以外は、手ズレ等の影響も若干あるものの、基本的に加工された痕跡はなく、把手も含めて、自然の河原石を利用した石杵と考えることができる。石杵は形状としてL字形のものに属すると想定される。石杵は完形で、法量は全長10.9cm、最大幅11.4cm、重さ854.75gを測る。流紋岩製である。底面は平滑で、敲打痕跡のほか、長軸方向に細かな擦痕と、先端部分ではやや斜め方向に向く擦痕が若干認められる。底部の一部で赤色顔料が観察され、分析の結果、朱との結果を得た。土壌63の時期であるが、出土した土器等から伊福・弥・後Ⅲ期の時期に属するものと考えられる。(金田)

土壌64 (第142図、図版34)

19K区西端に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸102cm、短軸50cmを有する。また底面では径20cmのピットを確認した。覆土から遺物はほとんど出土していないが、現状の掘り方の北西隅部外側において、検出面より上位から壺465や高杯の脚裾部などが破損してまともであった。したがって465は厳密には本土壌に伴う確証はないが、本土壌に重複する遺構が他に認められないことや、465などの遺物の出土地点が現状の掘り方に接して上位から出土していることから、本土壌に伴う遺物である可能性があると

考える。465などの遺物は伊福・弥・後Ⅲ期に比定され、遺構の埋没時期も当該期に収まる。(米田)

土壌65 (第144図)

18K区の南東部に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長軸70cm、短軸66cm、深さ27cmを測る。覆土上位では中央に板石があり、その付近では土器片が比較的まともに出土した。このうち図化できたものは弥生土器の短頸壺466、甕467である。本土

墳の埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期と捉えて差し支えない。

(米田)

土壌66 (第144図)

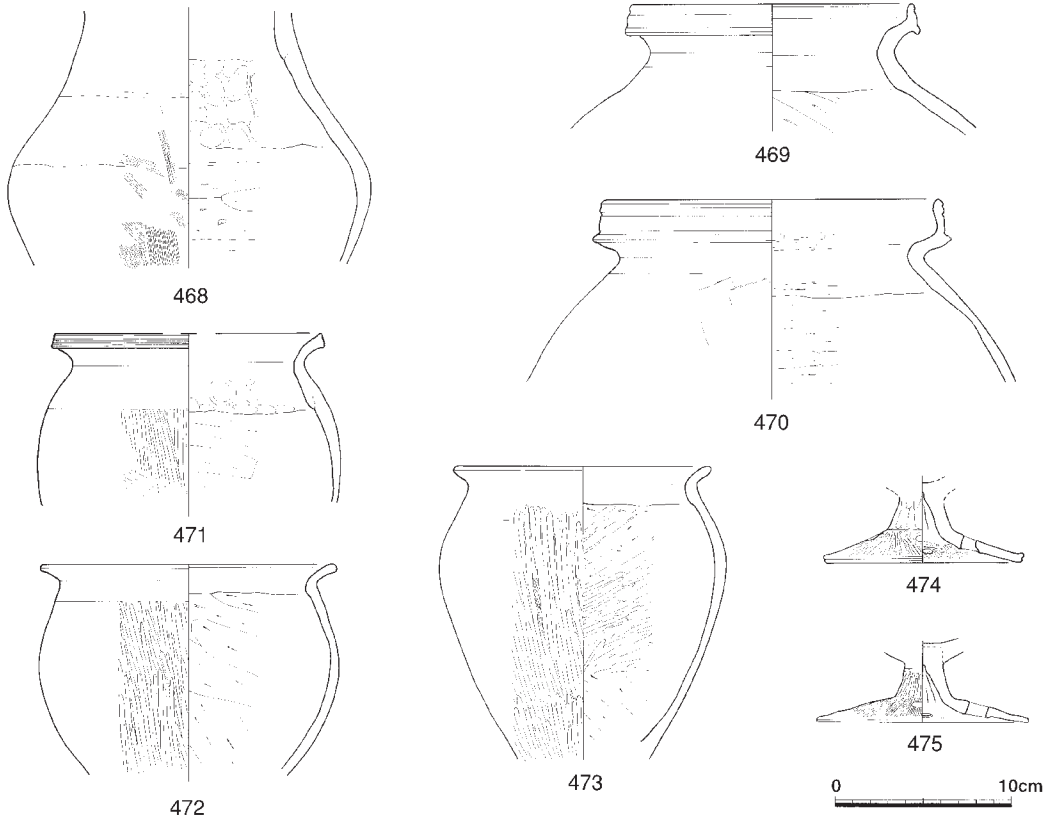
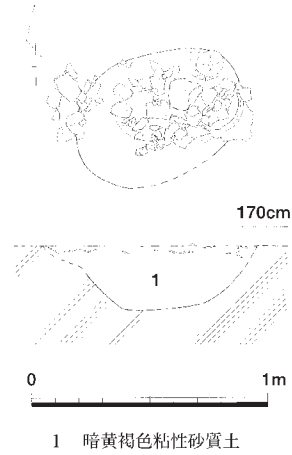
18L区の北端中央東寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、現状では長軸75cm、短軸53cmを測るが、遺物の出土状況から本来はこれよりもやや大きな掘り方を持つと考えられる。断面形は碗形を呈する。深さは約26cmと復元できる。埋土の上位では、破損した弥生土器が掘り方の北半に集中して認められ、埋没過程においてこれらの土器が一括廃棄されたものと考えられる。弥生土器の器種は、長頸壺の胴部468、甕469～473、高杯474・475がある。埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期に比定される。

(米田)

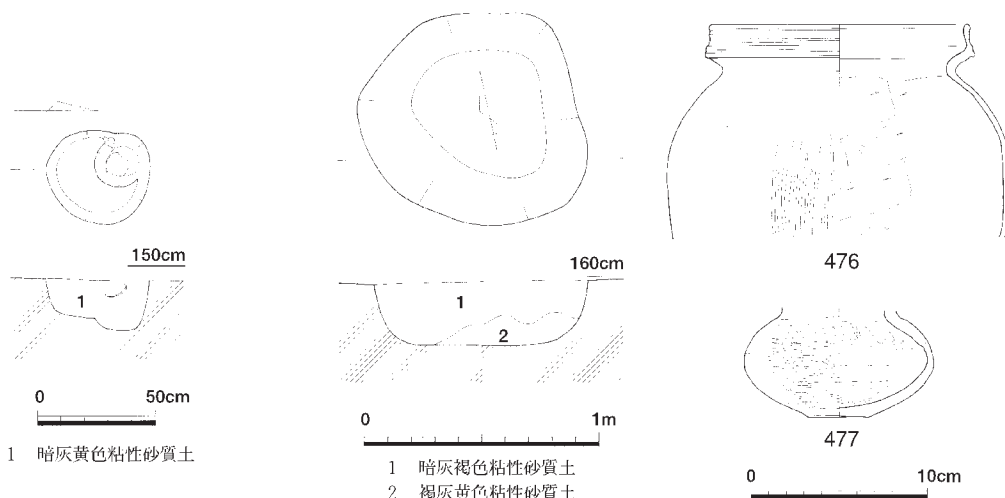
土壌67 (第145図)

18L区の中央北東寄りに位置し、土器棺墓2に南接する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、規模は長軸49cm、短軸39cm、深さ16cmを測る。底面では、掘り方の北西において径24cmのピットを確認し、本土壌と重複している別の遺構である可能性があるものの、新旧関係は明らかでない。覆上からは弥生土器片が出土しており、図化できなかったが、高杯の脚部などがある。出土土器から時期は伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。

(米田)



第144図 土壌66 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第145図 土壙67 (1/30)

第146図 土壙68 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙68 (第146図)

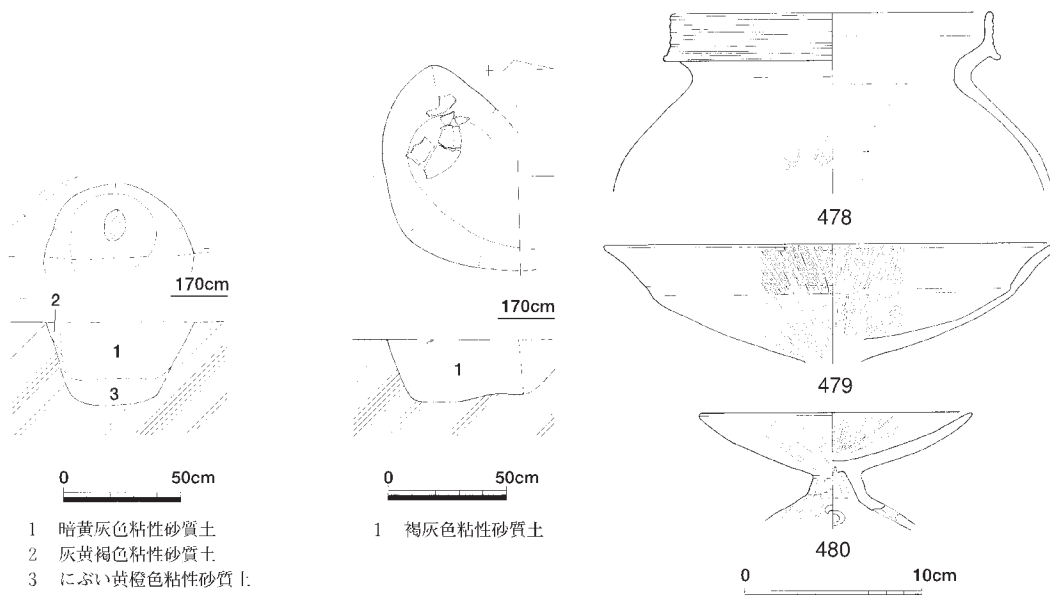
土壙68は18L区に位置する。不整円形を呈し、長径95cm、短径87cmを測る。竪穴住居12の埋土を切っている。土壙内からは弥生土器が出土している。476は甕、477は小形壺の胴部である。これらの出土遺物から、土壙68は伊福・弥・後Ⅳ期に比定できる。(金田)

土壙69 (第147図)

土壙69は19L区に位置する。東半分が溝3により切られているが、およそ63cmの径をもつ。若干の弥生土器片が出土しており、これらから伊福・弥・後Ⅳ期頃のものと考えられる。(金田)

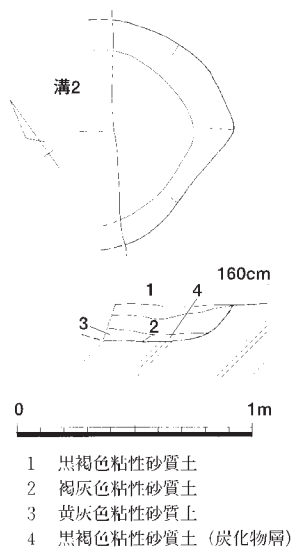
土壙70 (第148図)

18M区の西端中央に位置し、竪穴住居29に切られる。平面形は不整楕円形で、底面西端では弥生土器の甕478、高杯479・480が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅲ期に属する。(米田)



第147図 土壙69 (1/30)

第148図 土壙70 (1/30)・出土遺物 (1/4)



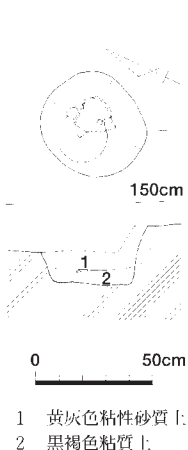
第149図 土壙71 (1/30)

土壙71 (第149図)

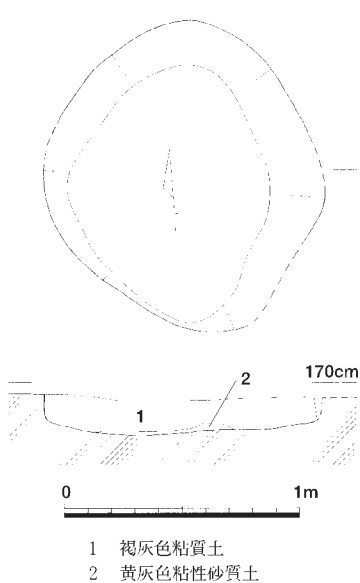
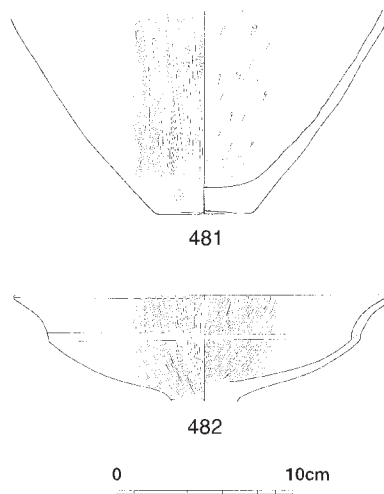
18M区の西端中央に位置し、竪穴住居29、溝2に切られる。平面形は不整円形を呈する。残存状況が良くないため、規模は不明である。底面では炭化物層(第4層)が認められた。覆土から弥生土器の甕・高杯片が出土しており、時期は伊福・弥・後Ⅲ期と捉えられる。(米田)

土壙72 (第150図)

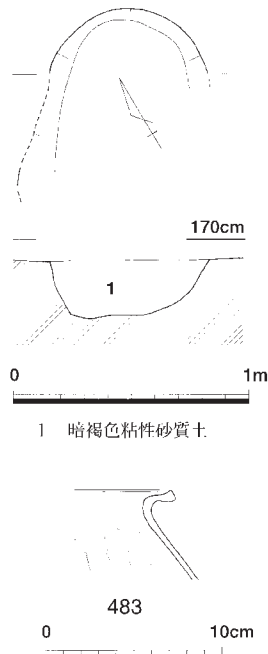
18M区の中央東寄りに位置し、竪穴住居30、土壙91、溝2に切られる。平面形は円形を呈し、長軸45cm、短軸40cmを測る。覆土の中位では弥生土器の壺底部481、高杯482が出土した。時期は伊福・



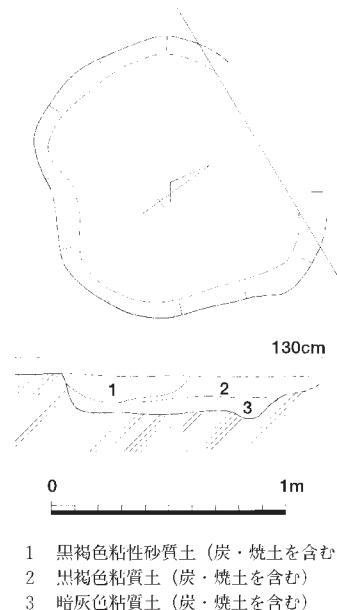
第150図 土壙72 (1/30)・出土遺物 (1/4)



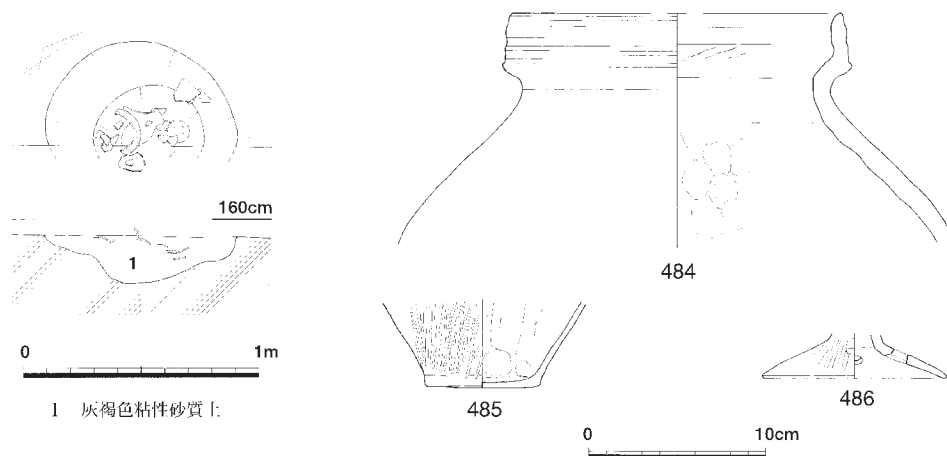
第151図 土壙73 (1/30)



第152図 土壙74 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第153図 土壙75 (1/30)



第154図 土壌76 (1/30)・出土遺物 (1/4)

弥・後Ⅲ期に比定される。

(米田)

土壌73 (第151図)

19M区の中央西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸132cm、短軸120cmを測る。深さは14cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は弥生土器の壺・甕・高杯片がわずがに出土した程度であった。埋没時期は伊福・弥・後Ⅲ期と考えられる。

(米田)

土壌74 (第152図)

18・19MN区の交点に位置し、南半は調査区外へ続く。平面形は楕円形を呈し、規模は不明である。讃岐系の可能性がある弥生土器甕483が覆上から出上し、時期は伊福・弥・後Ⅳ期に属する。

(米田)

土壌75 (第153図)

土壌75は19K区に位置し、竪穴住居14の下層で検出された。不整円形に近い平面形を呈し、長径129cm、短径116cmを測る。内部から炭や焼土を含んだ土が検出された。出土した土器は弥生土器の小片のみである。竪穴住居14下層ということで、伊福・弥・後Ⅲ期の時期に比定できる。

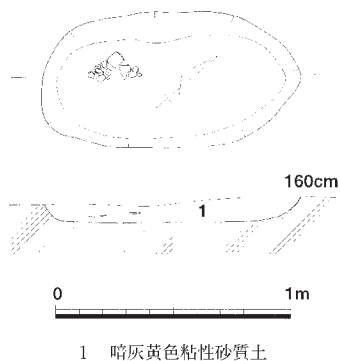
(金田)

土壌76 (第154図)

土壌76は19L区に位置する。一部が溝2によって切られている。円形に近い平面形をなし、径約81cmを測り、深さは21cmである。埋土中から弥生土器が出土している。

484は壺である。口縁が垂直気味に上方に立ち上がる。口径18.6cmを測る。485は甕の底部である。486は高杯の脚部であり、いわゆる水こし粘土が使用されている。これらの出土遺物から、土壌76は伊福・弥・後Ⅳ期に位置づけられる。

(金田)



第155図 土壌77 (1/30)

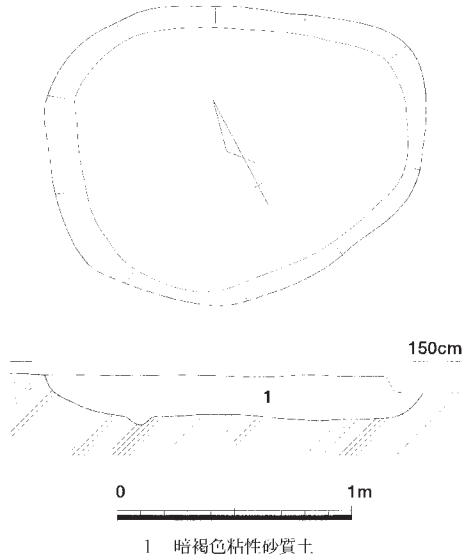
土壌77 (第155図)

土壌77は19L区に位置する、楕円形を呈する土壌である。長径111cm、短径57cmを測る。深さは9cmであり、浅い土壌である。埋土から弥生土器片が出土したが、いずれも小片で図示していない。器種としては甕や高杯がみられる。これらの出土遺物から時期を判断するのは難しいが、伊福・弥・後Ⅳ期に属するものと考えられる。

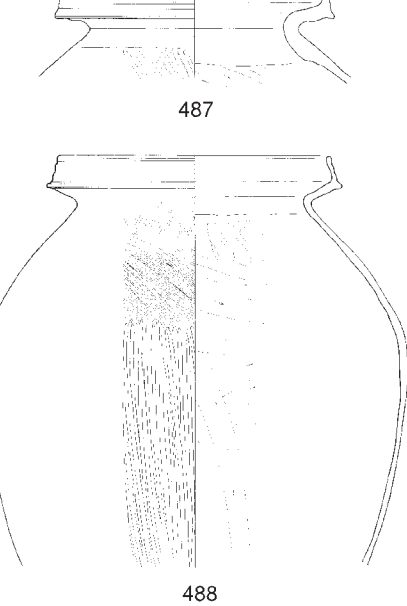
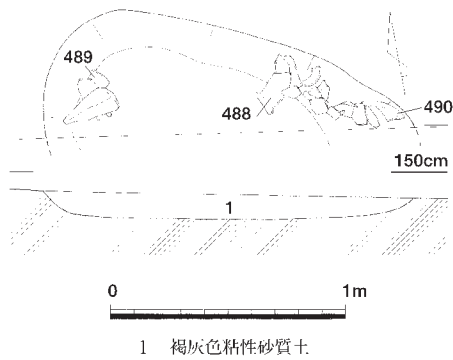
(金田)

土壙78 (第156図)

土壙78は19L区に位置する。楕円形に近い平面形を呈し、長径144cm、短径123cmを測る。出土遺物はいずれも小片で図示していないが、壺、甕、高杯の破片がある。これらの遺物から伊福・弥・後Ⅳ期頃に営まれた土壙である可能性が高い。(金田)



第156図 土壙78 (1/30)



第157図 土壙79 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙79 (第157図)

土壙79は19L区に位置する。竪穴住居16の西半部上面で検出された。南半分は攪乱により失われているが、楕円形を呈するものと考えられ、長径は復元で約149cm、検出面からの深さは10cmを測る。浅い皿状の断面形を呈し、土壙内からは図示したような状態で弥生土器が出土している。土壙の半分が失われていることもあり、完形で復元できる上器はない。487・488は甕である。488は口縁部が上方に拡張し、その部分に擬凹線が施されている。口径15.2cm、残存高23.3cmを測る。489・490は高杯である。490はいわゆる水こし粘土を利用した胎土をもつ。これらの遺物は、489が土壙西端で、それ以外は東半分で出土している。これらの出土遺物から、土壙79は伊福・弥・後Ⅳ期の時期に比定できる。(金田)

土壙80 (第158図)

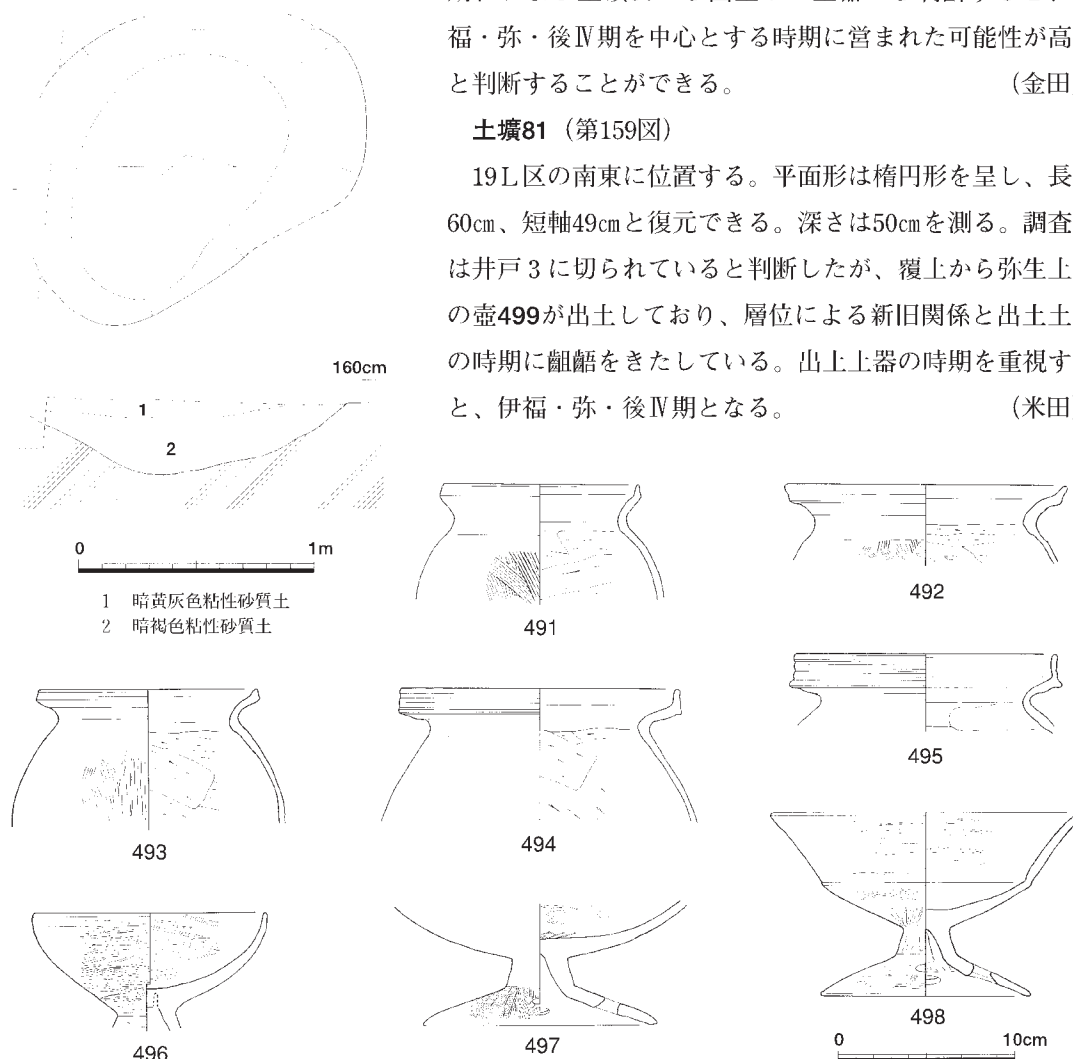
土壙80は19L区に位置する。竪穴住居16の埋土を上面から切るかたちで検出されている。一部が攪乱などにより破壊されているが、不整楕円形を呈する土壙であり、復元で長径160cm、短径113cmを測り、検出面からの深さは32cmを測ることができる。土壙内には暗黄灰色土あるいは暗褐色土が堆積しており、多くの土器を包含している。およそコンテナ箱1箱ほどの弥生土器を検出している。491～495は甕である。いずれも破片である。甕は491～493のように口縁端部を上方につまみあげるタイプのもので、494・495のように口縁端部が上方に大きく拡張するタイプがある。前者のもので口径が11～15.8cmを測る。後者のものは口径14.6～15.5cmを測り、口縁端部に擬凹線を施すものもみられる。496～498は高杯である。いずれも短脚のもので、土器の胎土にはいわゆる水こし粘土が使用されている。496・498のものは外内面ともヘラミガキにより最終調整がなされているが、497は表面の残存状況がよくなく、器面調整には不明瞭な点が多い。完形に復元できる498の高杯で口径17.4cm、器高10.2cm、底径11.8cmを測る。そのほか、図示はしていないが壺、甕、高杯、鉢などの器種がみられるが、内容的には甕と高杯の量が多い傾向がみられる。なお、土壙80の時期であるが、竪穴住居16の時期、および土壙80から出土した土器から判断すると、伊福・弥・後Ⅳ期を中心とする時期に営まれた可能性が高いと判断することができる。

(金田)

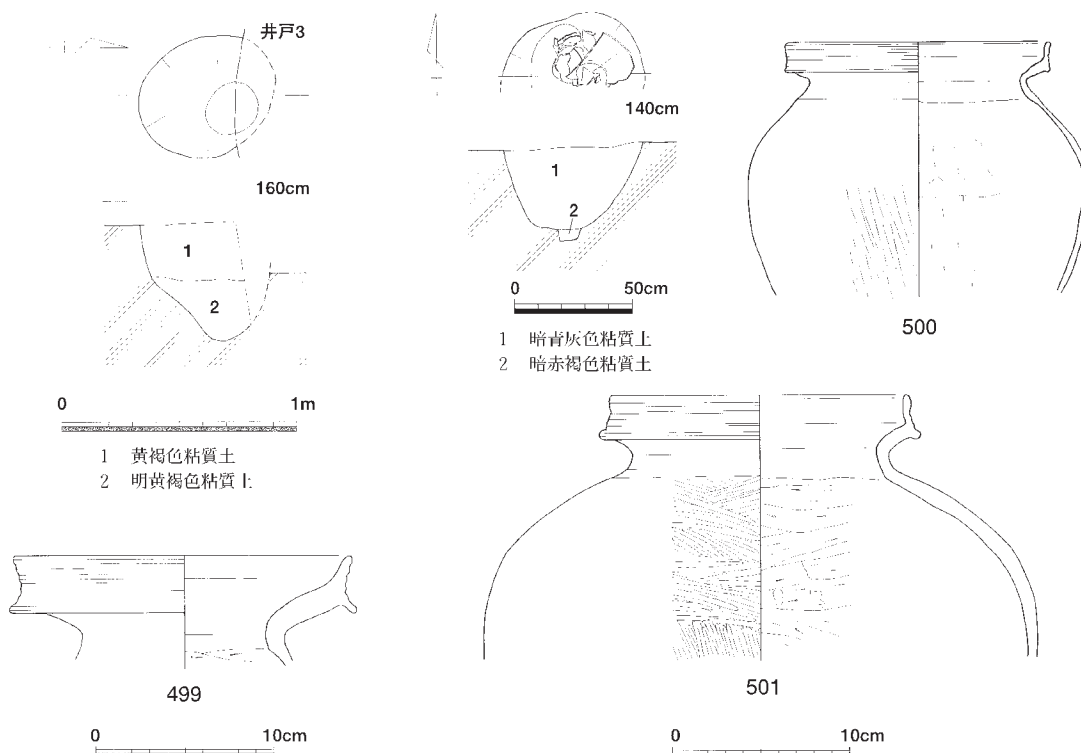
土壙81 (第159図)

19L区の南東に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸60cm、短軸49cmと復元できる。深さは50cmを測る。調査時は井戸3に切られていると判断したが、覆上から弥生土器の壺499が出土しており、層位による新旧関係と出土土器の時期に齟齬をきたしている。出土土器の時期を重視すると、伊福・弥・後Ⅳ期となる。

(米田)



第158図 土壙80 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第159図 土壌81 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第160図 土壌82 (1/30)・出土遺物 (1/4)

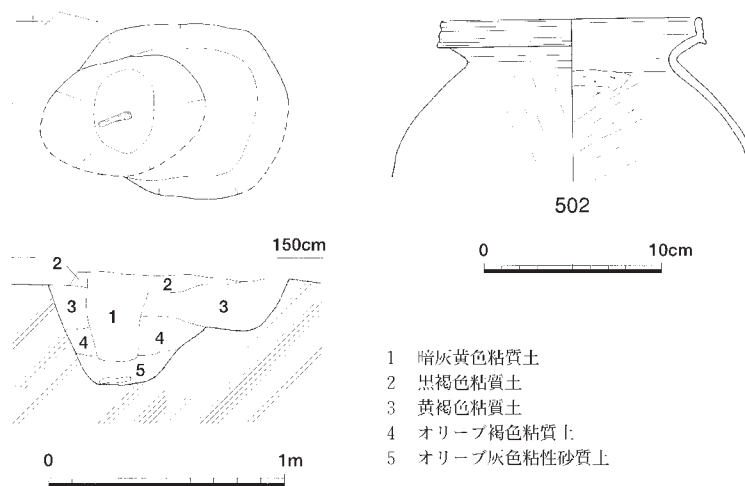
土壌82 (第160図)

19LM区の境界東側に位置し、竪穴住居37・38に切られる。平面形は長軸は60cmの不整円形を呈する。上層の底面中央部では、弥生土器の甕500、壺501の破片がまとまっていた。時期は伊福・弥・後Ⅳ期の範疇であるが、竪穴住居37・38より層位的に古い。(米田)

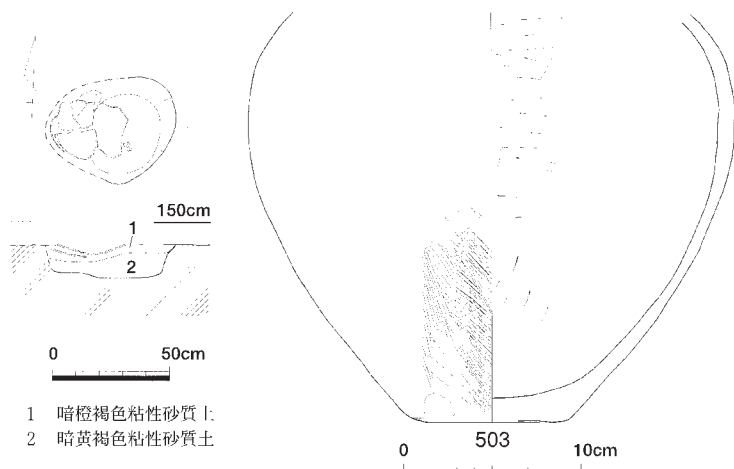
土壌83 (第161図)

20L区の中央南寄りに位置し、上面は河道2に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、長軸102cm、短軸73cmを測る。最深部までは47cmを測る。第1層は柱痕の可能性が高い。最深部の底面中央部では粘土化した1本の礎板痕跡を確認し、本来は竪穴住居を構成していた柱穴と考えられる。しかしながら、周辺は河道2に削平されているため、対応する竪穴住居の掘り方や柱穴を確認することはできなかった。覆土から弥生土器の甕502が出土しており、時期は伊福・弥・後Ⅳ期に属する。

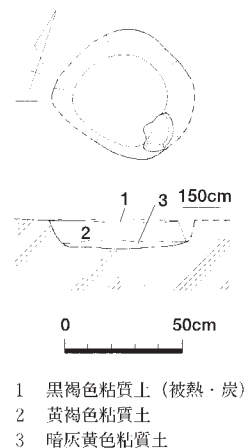
(米田)



第161図 土壌83 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第162図 土壌84 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第163図 土壌85 (1/30)

土壌84 (第162図)

20L区の南端中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸55cm、短軸46cmを測る。第1層中では同一個体の壺体部503の破片がいずれも内面を上に向けた状態で重なり合っていたため、土器棺の可能性は低い。時期は伊福・弥・後Ⅳ期の範疇である。(米田)

土壌85 (第163図)

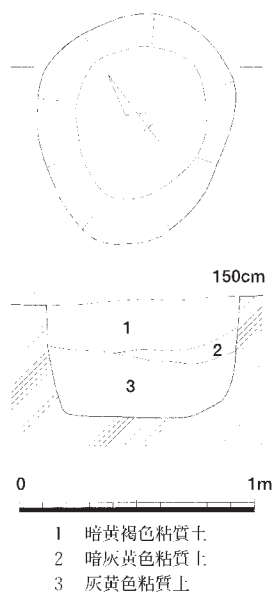
20M区の中央北東寄りに位置する。平面形は不整形を呈する。遺物はほとんどないが、検出状況、埋上から時期は伊福・弥・後期後半の範疇に収まると考えられる。(米田)

土壌86 (第164図)

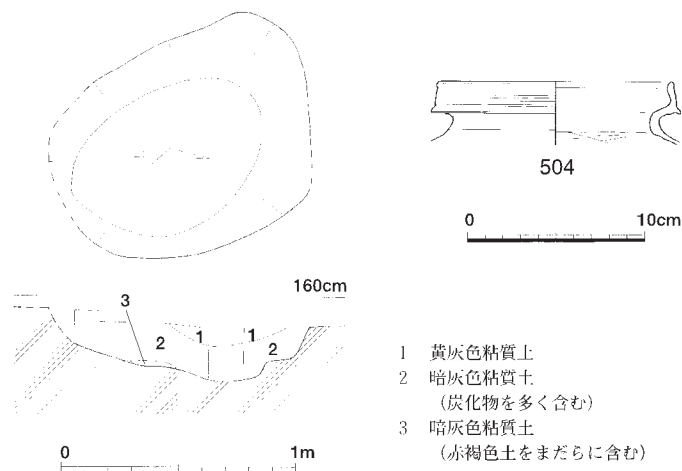
20M区の北西に位置し、南西端は攪乱を受ける。平面形は長軸約100cm、短軸82cmの楕円形を呈する。遺物は図示し得なかったが、時期は伊福・弥・後Ⅳ期と捉えられる。(米田)

土壌87 (第165図)

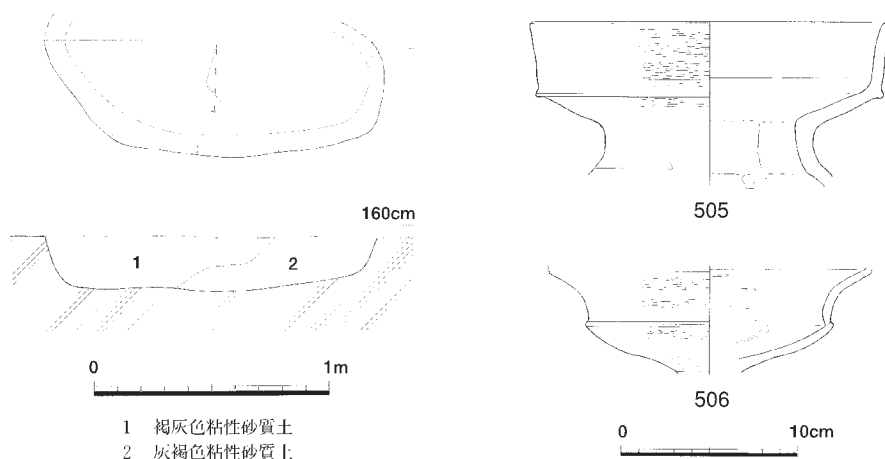
19・20MN区の交点に位置し、竪穴住居40に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸120cm、短軸90cmを測る。底



第164図 土壌86 (1/30)



第165図 土壌87 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第166図 土壙88 (1/30)・出土遺物 (1/4)

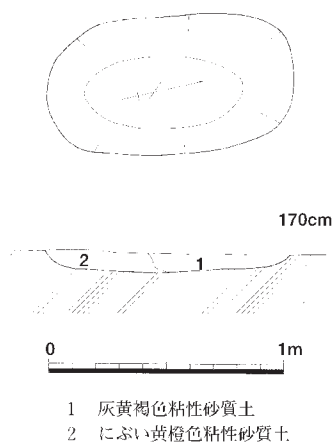
面は起伏が著しい。覆上からは弥生土器の甕504のほか、壺、高杯の破片が出土した。時期は伊福・弥・後Ⅳ期に比定される。(米田)

土壙88 (第166図)

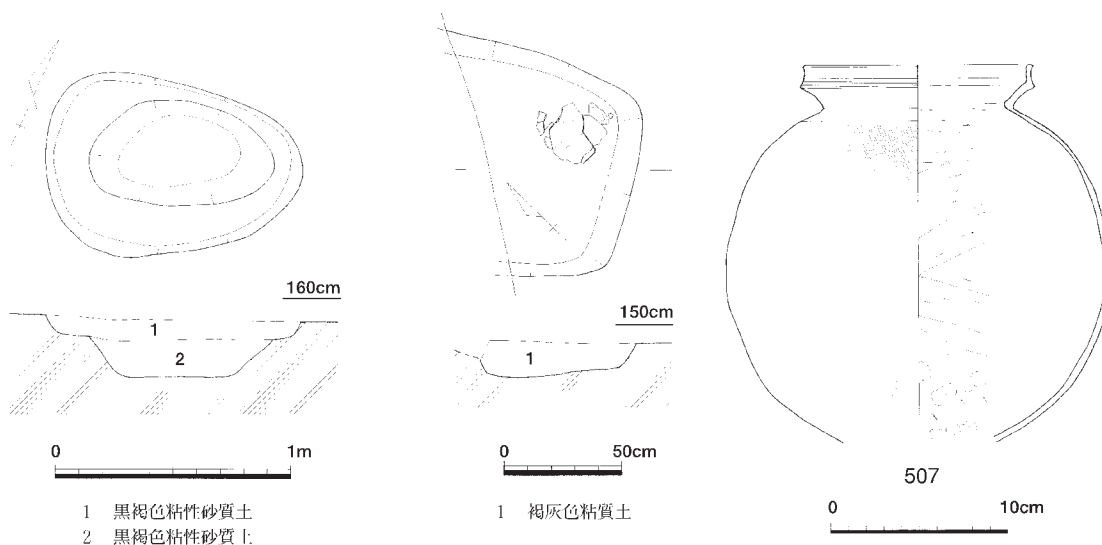
土壙88は20M区に位置する。土壙の北部は破壊されているが、復元で長径147cmを測る楕円形の土壙である。埋土から弥生土器が出土した。505は壺、506は高杯である。これらの出土土器から、土壙88は伊福・弥・後Ⅳ期頃に比定できる。(金田)

土壙89 (第167図)

土壙89は20M区に位置する。楕円形の平面形をもち、長径105cmを測る。弥生土器の小片が出土したのみであり、詳細な時期は不明であるが、伊福・弥・後Ⅳ期頃のものと考えられる。(金田)

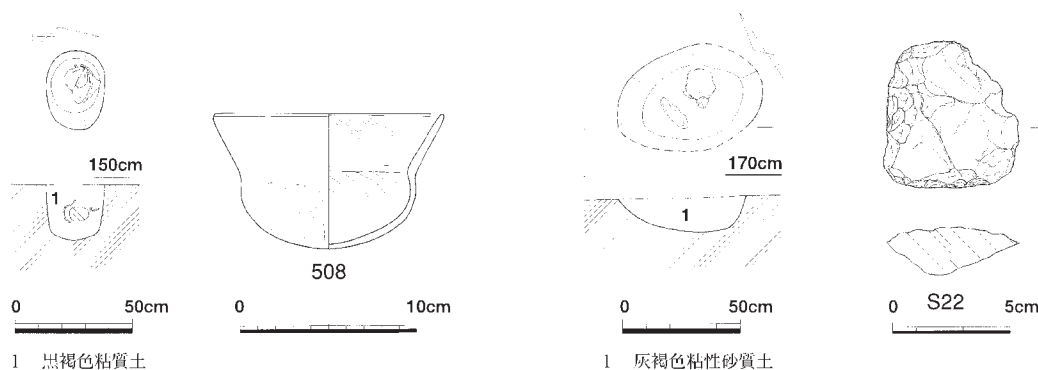


第167図 土壙89 (1/30)



第168図 土壙90 (1/30)

第169図 土壙91 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第170図 土壌92 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第171図 土壌93 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌90 (第168図)

17L区の東側に位置し、竪穴住居23・24を切る。平面形は楕円形を呈する。底面は二段掘りになっている。覆上から土師器の甕片が出上し、時期は伊福・古・前I期である。(米田)

土壌91 (第169図)

18M区の中央東寄りに位置し、竪穴住居30を切り、溝2に切られる。平面形は長方形を呈する。底面直上から土師器の甕507が出上し、時期は伊福・古・前II期と考える。(米田)

土壌92 (第170図)

18K区の南東に位置する。平面形は長軸33cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。埋土中位では、完形に近い小型丸底壺508が傾倒して出上した。また508の内面には拳大の石が認められ、内包されていた可能性がある。時期は伊福・古・前II期に属する。(米田)

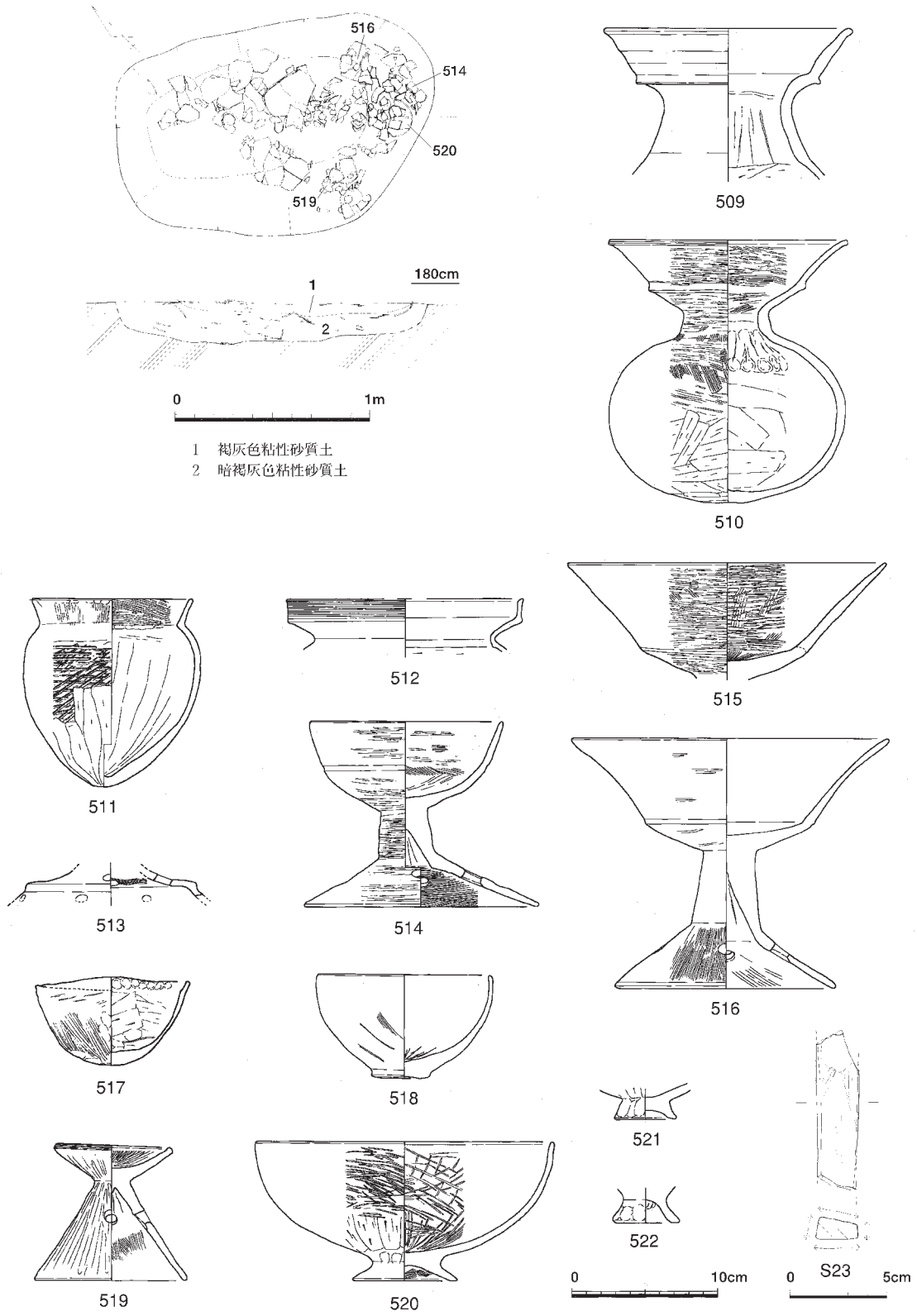
土壌93 (第171図)

土壌93は19L区に位置する。復元で長径64cmを測る土壌である。埋土から弥生土器片および石器(S22)が出土している。溝3を切ることから、伊福・古・前II期頃と考えたい。(金田)

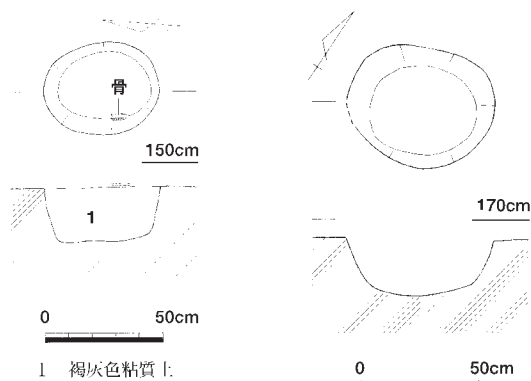
土壌94 (第172図、図版16・35・37)

19M区の南西に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸170cm、短軸113cm、深さ22cmを測る。遺物は各層から出土しているものの、第2層からの出土が目立つ。平面的には掘り方の東半を中心に土器が集中しており、なかでも北側は壺胴部や大きな破片、南側は高坏や細かい破片が顕著であった。全体的に破碎したものが大半を占めるが、519はほぼ完形に近い状態で出土した。次の土器群は一括して廃棄されたものと考えられる。

出土遺物は、土師器の壺509・510、甕511～512、高杯513～516、鉢517・518、器台519、台付鉢520、製塩土器521、砥石S23のほか、図化できなかった大形壺の体部、ニホンジカの下顎骨がある。510は複合口縁壺で、底部外面には大きく黒斑が付く。511の甕は外面にタタキ、ヘラケズリを残し、島嶼部から出土する甕と理解する。519の小型器台は受け部と脚部が貫通しない。520の台付鉢は、やや深い碗形の体部に「ハ」の字状の低脚が付く、山陰系の低脚杯を変容したものとする。510・519は畿内系、520は山陰系土器の影響を受けており、いずれも黄褐色の色調・胎土を使用し、形態を変容していることから、在地で模倣されたものと理解され、土器のあり方が注目される。なお、時期は伊福・古・前I期に比定される。(米田)



第172図 土壌94 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第173図 土壌95 (1/30) 第174図 土壌96 (1/30)

土壌95 (第173図)

20L区の南西に位置し、竪穴住居36の床面において検出した。平面形は長軸49cm、短軸38cmの楕円形を呈する。壁面は垂直に近く、深さは23cmを測る。検出面ではニホンジカの下顎骨が水平に置かれているのを確認した。覆土からは弥生土器片が出土したが、小片で図化することができなかった。時期は土器片から伊福・弥・後期後半に比定され、伊福・古・前Ⅱ期の竪穴住居36より古い。(米田)

土壌96 (第174図)

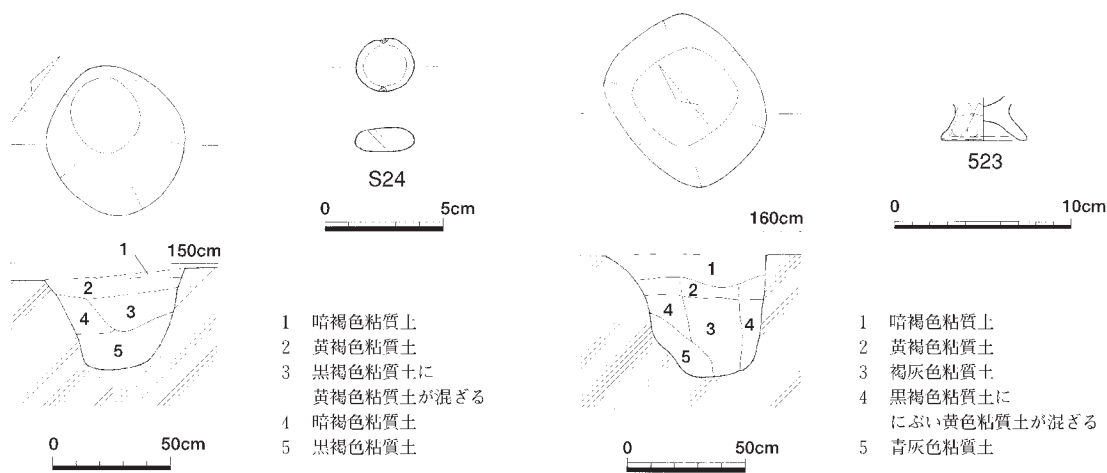
19M区の北東に位置し、竪穴住居37・38を切る。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸62cm、短軸52cm、深さ24cmを測る。遺物はほとんど出土しておらず、時期は切り合い関係から古墳時代前期の範疇で捉えられる。(米田)

土壌97 (第175図)

20L区の南側中央東寄りに位置し、河道2に上面を切られる。平面形は円形を呈し、長軸63cm、短軸58cm、深さ40cmを測る。覆土からは石錘S24のほか、櫛描き沈線文をもつ土師器の甕片が出土している。時期は伊福・古・前Ⅰ期と考えられる。(米田)

土壌98 (第176図)

20M区の北側に位置する。平面形は方形に近く、長軸70cm、短軸58cmを測る。本土壌の周辺は河道2によって上色・上質が観察しづらかったが、第3層は柱痕の可能性が高く、竪穴住居17の柱穴、もしくは土壌83と対応して竪穴住居を構成していた支柱穴であったことが想定される。しかしながら、それを裏付ける根拠は十分でない。ちなみに本土壌では礎板の痕跡は確認していない。覆土からは製塩土器の脚部523が出土しており、時期は伊福・古・前Ⅰ期の可能性がある。(米田)



第175図 土壌97 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第176図 土壌98 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙99 (第177図)

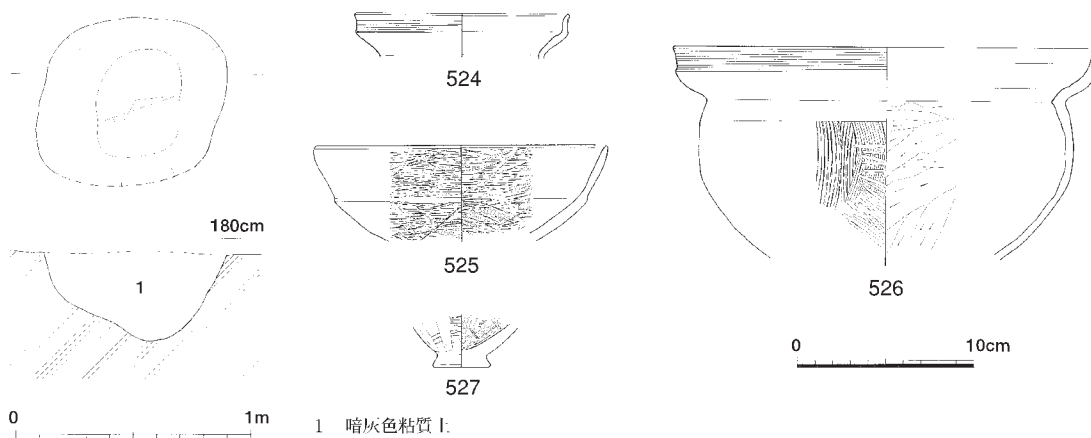
19M区の南端西寄りに位置し、竪穴住居40、土壙100を切る。平面形は長軸76cm、短軸約74cmの不整形を呈する。断面形は椀形を呈し、最深部までの深さは38cmを測る。覆土から土師器の甕524、高杯525、鉢526、台付鉢527、甲骨魚の椎骨が出土している。時期は伊福・古・前Ⅱ期に属し、竪穴住居40、土壙100より新しい。(米田)

土壙100 (第178図)

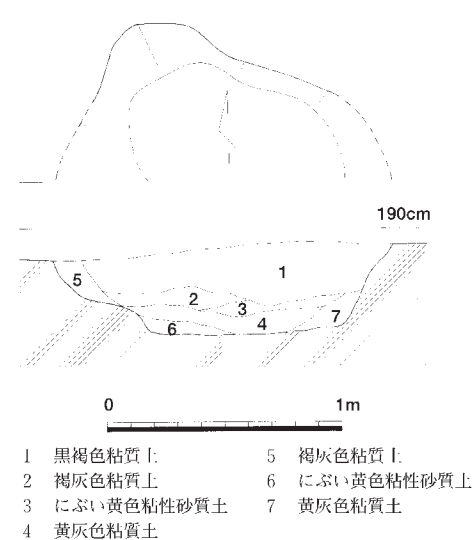
19M区の南端東側に位置し、南半は調査区外へ続く。切り合い関係は、竪穴住居40を切り、土壙99に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸は142cm以上である。深さは38cmを測る。埋土は7層に分かれ、第2層は焼土粒を多く含む。覆土からは伊福・弥・後Ⅲ期の土器片が出土し、特に第1層に多く認められた。小片が多く、図化し得なかった。本土壙の時期は、層位的に伊福・古・前Ⅱ期で、竪穴住居40より新しく、土壙99より古い。(米田)

土壙101 (第179図)

20M区の南端東側に位置し、竪穴住居41を切る。また東西端はそれぞれ攪乱を受けている。平面形

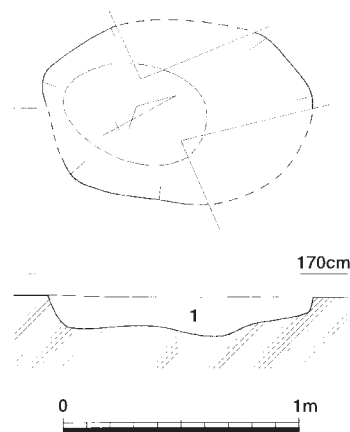


第177図 土壙99 (1/30)・出土遺物 (1/4)



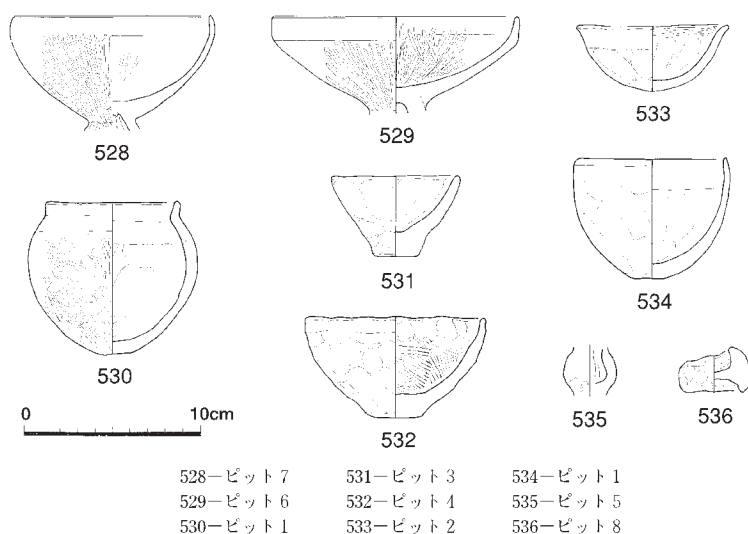
- 1 黒褐色粘質土
- 2 褐灰色粘質土
- 3 にぶい黄色粘性砂質土
- 4 黄灰色粘質土
- 5 褐灰色粘質土
- 6 にぶい黄色粘性砂質土
- 7 黄灰色粘質土

第178図 土壙100 (1/30)



- 1 暗褐色粘性砂質土

第179図 土壙101 (1/30)



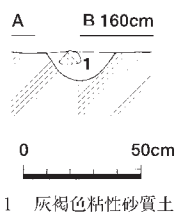
第180図 ピット1～8出土遺物(1/4)

は楕円形を呈する。規模は長軸115cm、短軸77cmと復元できる。深さは検出面から15cmと浅く、残存状況は良くない。遺物は皆無に近く、弥生土器の器台片、土師器の櫛描き沈線文をもつ甕の破片がわずかに出土した程度であった。時期の決定にはいささか資料が乏しいが、竪穴住居41より新しいことから伊福・古・前Ⅰ期の可能性がある。(米田)

ピット1～8 (第180図)

調査区内では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのピットがおよそ650個検出されている。その中から出土した遺物の大半は弥生土器あるいは土師器の破片である。しかし、中には完形に近い土器や完形に復元できる土器が出土したものがあり、ここではそのうちのいくつかを紹介しておく。528・529は高杯杯部である。脚部は欠損している。タテ方向のヘラミガキをほどこす。530は小形の甕で、口径7.5cm、器高8.6cmを測る。531～534は鉢である。535・536はミニチュアの上器である。536は完形で、口径2.7cm、器高2.0cmを測る。これらのピットは出土した土器や他の遺構との関係から、ピット3・4・6・7・8は弥生時代後期後半に、ピット1・2・5は古墳時代前期に属するものと推測される。(金田)

6 溝



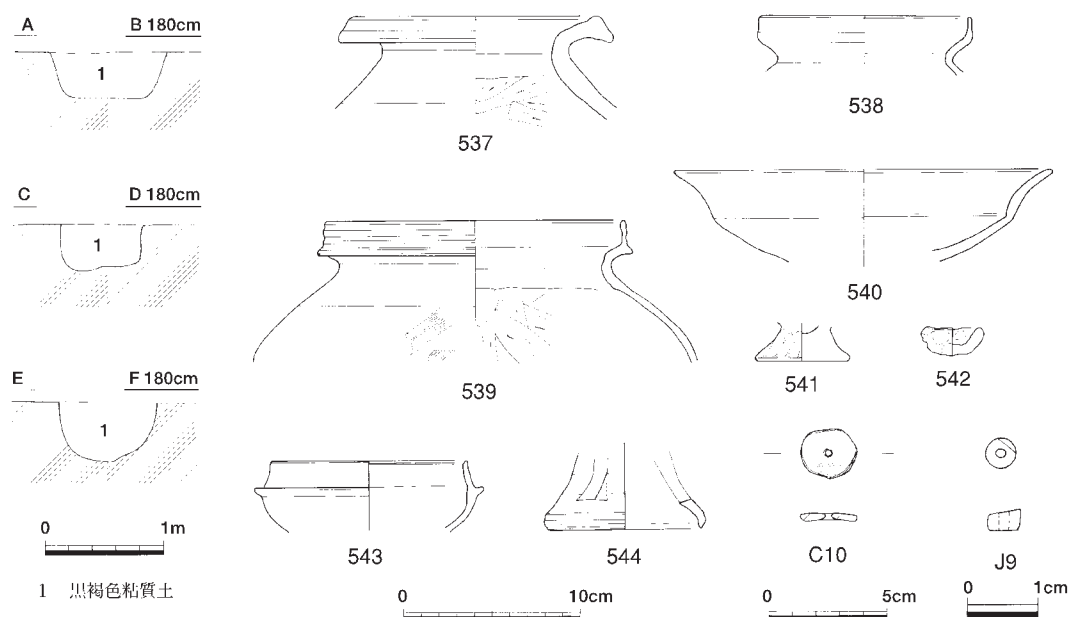
第181図 溝1土層断面図(1/30)

溝1 (第9・181図)

溝1は18Kに位置する上端幅約30cm、深さ約12cmを測る。およその主軸はN-23°-Eを測り、北北東から南南西に流走している。その方向から当時の地割りの一部を反映しているものと考えられる。出土遺物は少ないが、時期は伊福・弥・後Ⅳ期に比定できる。(金田)

溝2 (第9・182図、巻頭図版2、図版16・36)

18M・19L・K区に位置し、直線的に延びる溝である。溝の南北ともに調査区外に続く。溝2は竪穴住居14・15・16・28・29・30・31、土壇69・71・72・76・91を切り、逆に土壇93や中世の河道2に削平されている。規模は、調査区内で全長約26.5m、幅約70～100cm、深さは約38～50cmを測る。断面形は逆台形や「U」字形を呈し、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。底面海拔高はA-B断面で128cm、C-D断面で125cm、E-F断面で120cmを測り、現状ではわずかながら南西側が高く、北東へ向かって下がっているが、旭川下流域の右岸側は北東から南西方向に流れていることや、遺跡周辺の微高地



第182図 溝2土層断面図(1/60)・出土遺物(1/4・1/3・1/1)

が旭川の流れに沿って北東から南東方向に延びるように形成されていることから、溝2も同様の流水方向であった可能性が高い。溝の主軸はN-30°-Eで、溝2と同時期の竪穴住居19・31-33・35・36・39・40の主軸がN-15~21°-Eであり、両者の主軸が極めて近い。このことから溝2は竪穴住居の主軸、配置に多大な影響を与えており、集落形成において重要な役割を担っていたと考えられる。

出土遺物は、弥生土器の壺537、甕539、高杯540、製塩土器541、鉢形のミニチュア土器542、土師器の甕538、須恵器の杯身543、高杯544、紡錘車C10、滑石製白玉J9がある。なかでも須恵器543・544や滑石製白玉J9は古墳時代中期末に比定される。ただ、溝2南側の竪穴住居29・30付近に限って、遺構検出の際に古墳時代中期末の遺物が少なからず出土していることから、当該期の明確な遺構は本調査では確認できなかったものの、543・544やJ9が本来伴うべき遺構が存在していた可能性があり、これらは溝2には伴わない可能性が高いと理解している。ここでは、溝2が伊福・古・前Ⅱ期の竪穴住居30・31を切り、土壌93に切られるという層位的な新旧関係に加え、伊福・古・前Ⅱ期の竪穴住居の大半が溝2と主軸をほぼ同じくするという調査成果を重視し、溝2の時期を伊福・古・前Ⅱ期の範疇で捉えることとする。(安永)

7 遺構に伴わない遺物

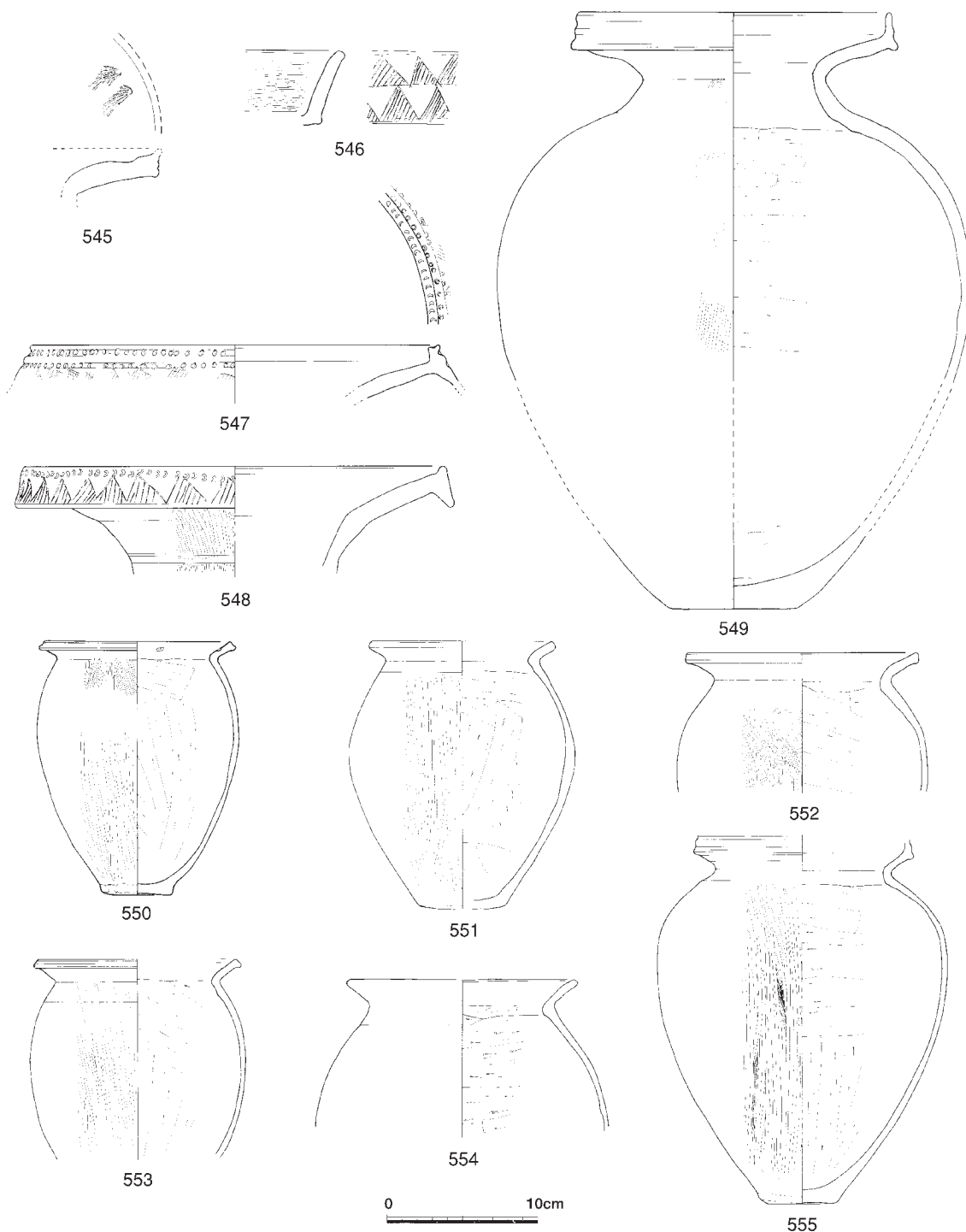
遺構に伴わない遺物(第183~186図、図版36)

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した土器を取り上げる。このようにして出土した土器の大半は弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺物であり、本遺跡の消長を反映している。ここでは当該期の遺物の中から、残存状況のよいもの、特徴的な要素がみられるもの、また、出土した地点から関連する遺構が想定できるものを中心に取り上げている。

545は壺の口縁部であり、竪穴住居16の北側で出土した。破片であるが、口縁内面に貝殻による圧痕が観察できる。546は複合口縁壺の口縁部であり、外面に上下二段の鋸歯文が施されている。547

第3章 発掘調査の概要

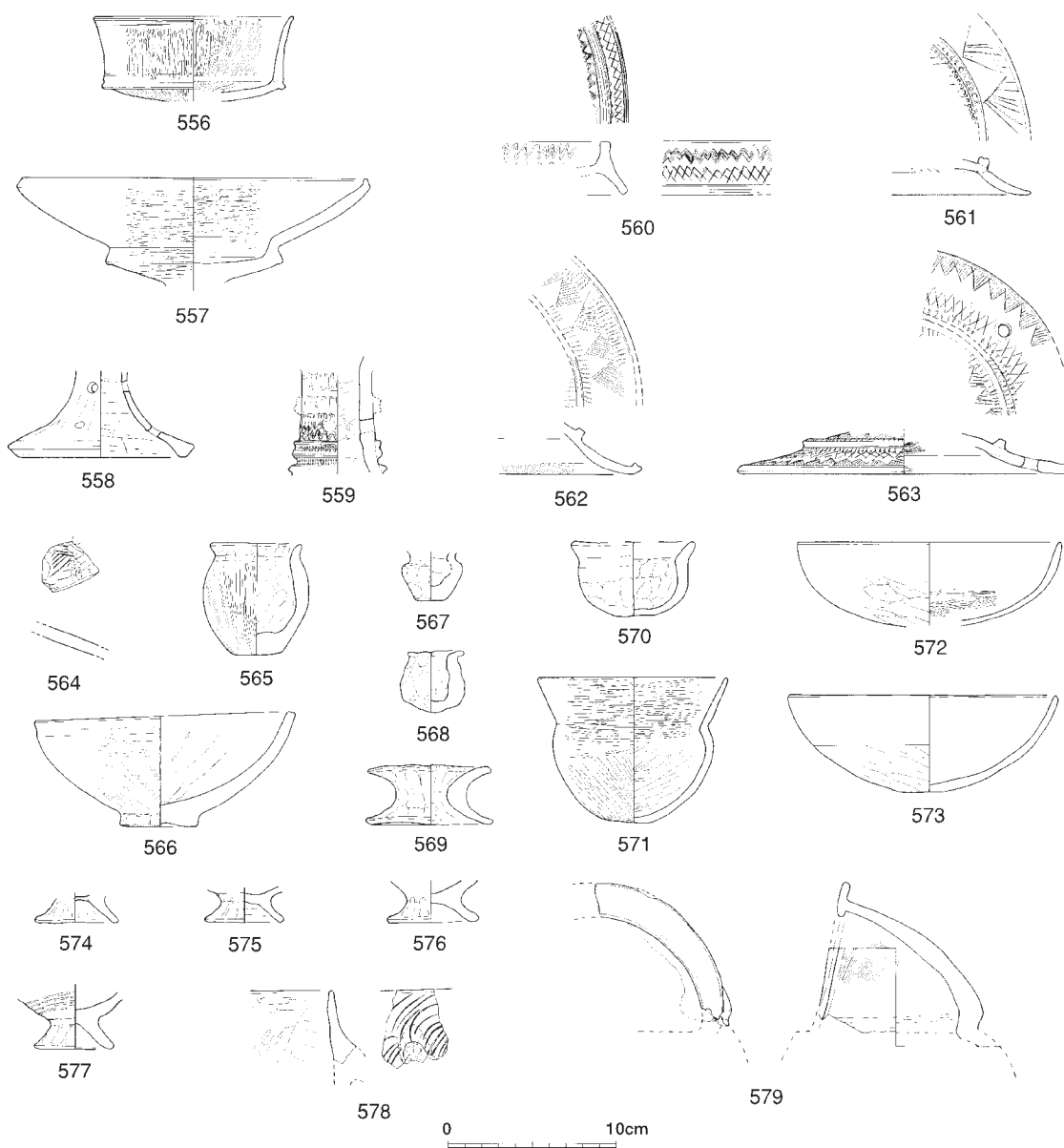
は壺あるいは器台の口縁部と考えられる。口縁端部外面には上下に二段の竹管文、その下に鋸歯文が、また口唇端部に竹管文がみられる。**548**は壺の口縁部である。口縁部外面に竹管文や鋸歯文が見られる。口径27.8cmを測る。**549**はほぼ完形に復元できる壺である。18L区の北半部で出土した。出土した周辺を精査したものの土壌等の存在を確認できなかった。口径は20.5cm、器高は復元で39.5cmを測る。**550**～**555**は甕である。**550**・**551**は19L区の西半部で、同一地点で検出された。この地点では鉢



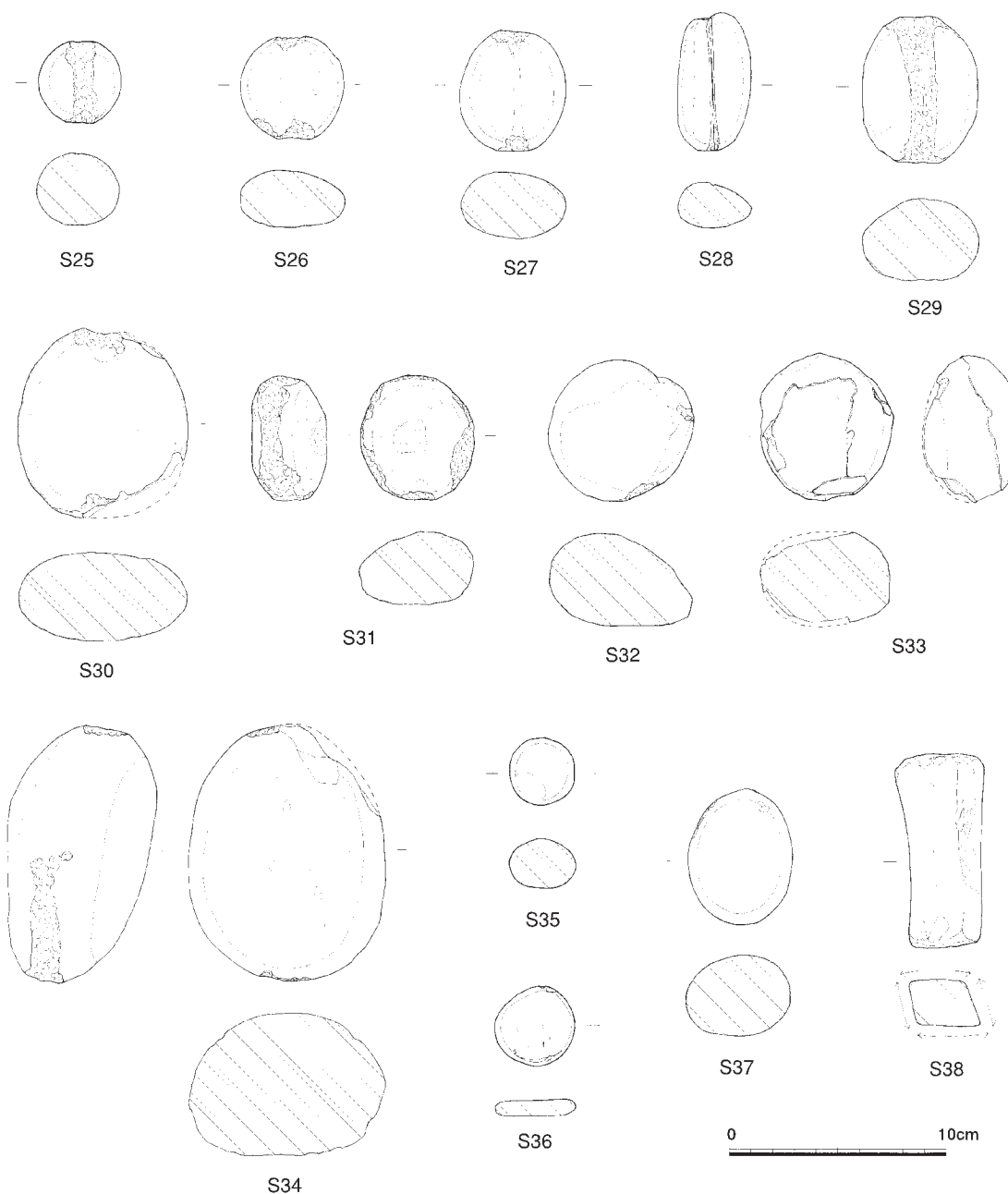
第183図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

(556) も共に出土している。周辺を精査したが、これらに伴う遺構は検出できなかった。550の口縁部内面には木の圧痕が残る。553は18K区で出土した。554は竪穴住居34～38の周辺で出土し、これらの竪穴住居に伴う遺物である可能性もある。555は19L区で出土した。

556～564は高杯である。558は高杯脚部である。円孔をもち、内面にはヘラケズリがみられる。後期前半期の土器と考えられ、今回の調査で出土した遺物の中で最も古い時期に属するものと考えられるが、河道2の埋土から出土したため、周辺から流入したものと考えられる。559～563は装飾高杯である。559は脚柱部で少なくとも3条の突帯がみられる。外面には波状文や刺突文による装飾がみられ、精製された粘土を使用している。560は口縁部である。外内面に波状文や斜格子文がみられる。561～563は脚裾部である。561では突帯に竹管文が、その他の部分には鋸歯文が施されている。562は脚裾部に鋸歯文および貝殻により圧痕が施されている。563は線刻や刺突により装飾が施されてお

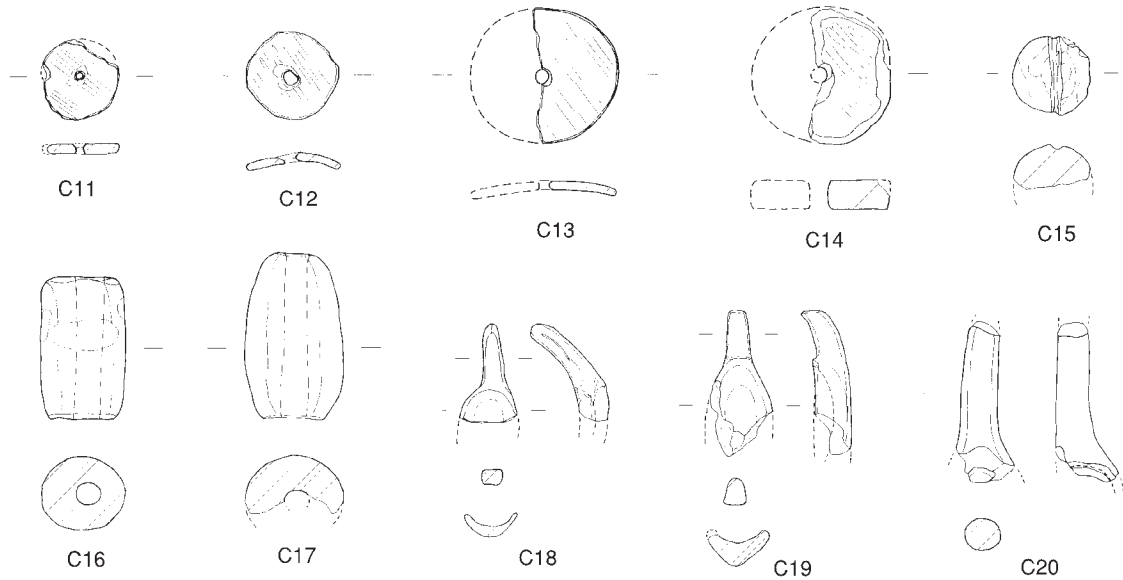


第184図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第185図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)

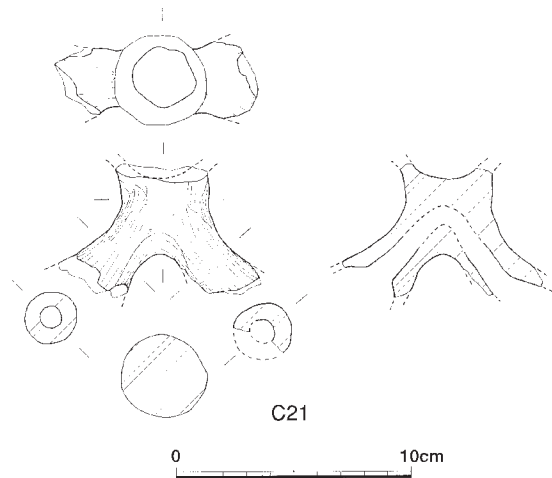
り、鋸歯文や斜格子文がみられる。561以外の高杯には、いわゆる水こし粘土が使用されている。563は高杯の脚裾部と考えられる。鋸歯文と弧状の線刻がみられるが、小片のため模様の形状は不明である。565は調査区南西隅の16M区で出土した。566は鉢であり、550・551とともに出土した。567と568はミニチュアの壺である。568で口径7.3cm、器高3.5cmを測る。569は小型の器台である。完形で口径6.8cm、器高3.6cm、底径7cmを測る。570～573は竪穴住居34～38の周辺で出土し、これらの竪穴住居に伴う遺物である可能性もある。571は精製された粘土を使用した小型丸底壺で、口径11.1cm、器高8.6cmを測る。574～577は製塩土器の脚部である。底径は4.3～4.8cmを測る。578は器種不明の土器である。土器側面に支脚のようなものの痕跡がみられ、土器外面には線刻が施されている。



579は手焙形土器であり、覆部のみである。

S 25～S 30は石錘である。上下端部に敲打による加工痕跡がみられるものが多い。S 31・S 34は外周に敲打痕跡がみられる。S 32・S 33・S 35～S 37は若干の加工痕跡もみられるものの、基本的に自然の円礫である。当遺跡地は沖積平野であり、このような石は自然には存在しないと推定されるため、なんらかの目的で持ち込まれたものと考えられる。S 38は流紋岩製の砥石で、122.09 gを測る。

C 11～C 14は紡錘車である。直径は復元でおよそ3.4～6.2cmを測る。甕の胴部を転用するものが大部分であるが、C 14のように壺片を転用するものもある。C 15は有溝の土錘である。C 16・C 17は管状の土錘である。C 18～C 20は匙を模倣したミニチュア品と考えている。ただし、C 19については匙の把手に相当する部分に面取りなどがなされており、丁寧に作られている印象を受ける。また、腕部の形状の詳細が不明であることもあって、船の模造品で、その舳先である可能性も否定できない。また、C 20についてもその形状を匙のみに限定する理由はない。C 21は用途不明の土製品である。残存長5.2cm、残存幅8.5cmを測る。胎土はいわゆる水こし粘土を使用しており、ちょうど短脚高杯の脚部が二股状に製作されたような印象をもつ。脚部は筒状になっており、つながっている。また、上部には杯底部と考えられる面が残存している。20M区北半で出土している。



第186図 遺構に伴わない遺物④ (1/3)

(金田)

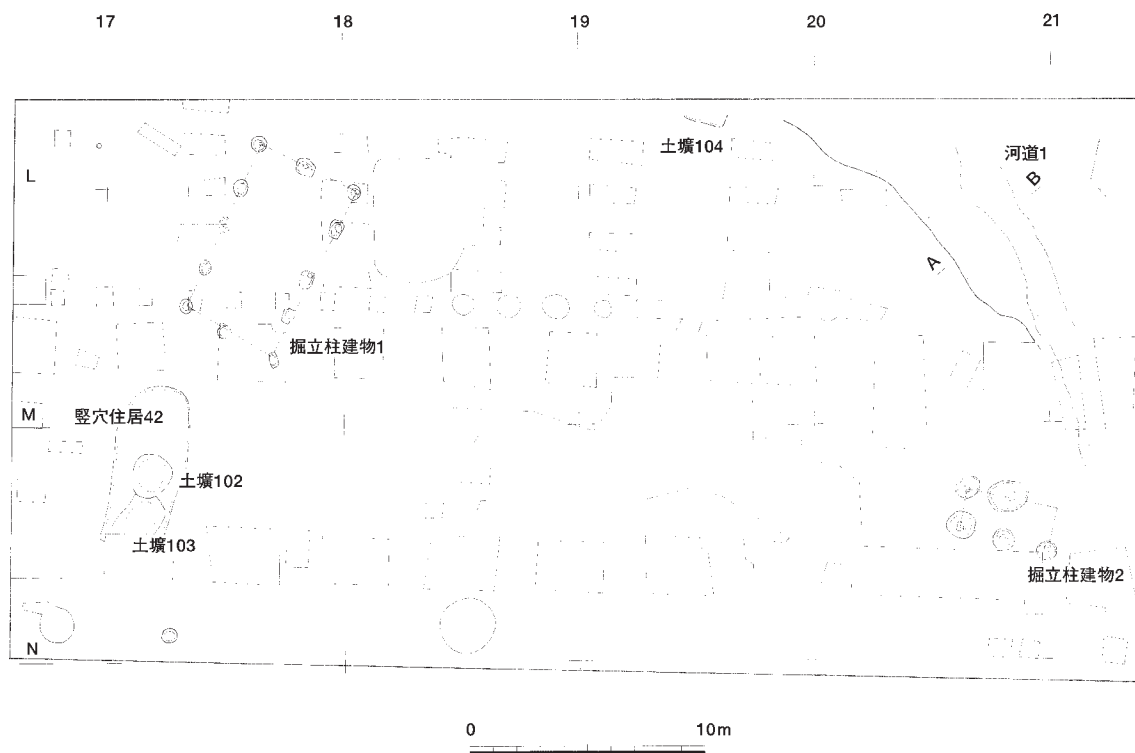
第3節 古墳時代後期・古代の遺構・遺物

1 古墳時代後期・古代の概要

伊福定国前遺跡において、古墳時代後期・古代に属する遺構・遺物は少ない。当遺跡では、古墳時代中期における集落の痕跡はほとんど見られないことから、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて盛行した集落は、その後、姿を消したものと考えられる。この時期に属する遺構として、竪穴住居1軒、掘立柱建物2棟、土壙3基、河道1条を掲載している。そのうち、古墳時代後期の竪穴住居42は、須恵器や土師器など比較的まとまった遺物が出土した。掘立柱建物は、古墳時代後期から古代に属する遺構である。そのうち、掘立柱建物1は、古代の建物と推測することができるが、掘立柱建物2はその構造自体にまだ不明確な点が認められ、議論が必要である。土壙は、その大部分が竪穴住居42に付随するものである。また、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構で見られなかったものとして、河道1があげられる。河道1は調査区の北東部で検出されたもので、古代の遺物が出上している。掘立柱建物で構成された集落が廃絶した後に出現した自然河道と評価できる。

伊福定国前遺跡では、前回の調査においても古墳時代後期および古代に属する遺構・遺物は少ない。これらの状況から、当該期における伊福定国前遺跡は、継続して集落の一部として利用されていたものの、その利用頻度は小さいものであったと推測できる。そして、これ以後も集落としての性格はしだいに薄れ、中・近世においては集落の縁辺部かあるいは田畑として利用されたものと考えられる。

(金田)



第187図 古墳時代後期・古代遺構全体図 (1/300)

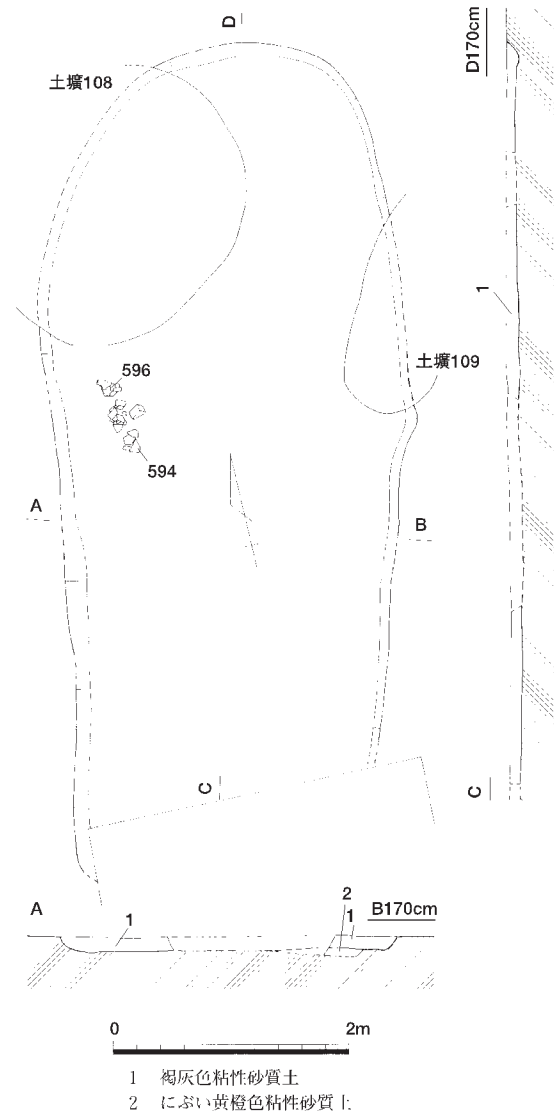
2 竪穴住居

竪穴住居42 (第188～191図、図版17・35)

17M区で検出した竪穴状の遺構である。平面形態は長楕円形を呈し、長径は残存で約7.0m、短径は2.86mを測る。調査段階で、ここに遺構埋土を示す褐灰色土がひろがっており、大形の遺構が存在することが推定された。当初は周辺に存在した弥生時代から古墳時代前期に属する竪穴住居等の遺構と考えたが、掘り下げ中に、埋土中から須恵器や土師器など、弥生時代や古墳時代前期とは異なる遺物が出土したことから、この遺構が古墳時代後期以降のものであることが判明した。しかしながら、この遺構の平面形態の検出作業は、一部が土壌108・土壌109および攪乱等で破壊されていたこともあり、全体像がつかめず時間を労した。プランの検出および掘り下げにおいては、この遺構の長軸と短軸方向に複数の上層断面観察用の畦を残し、また、複数の住居や土壌が切り合っている可能性も考慮しながら、慎重におこなった。その結果、この遺構は先述したような規模をもつ長楕円形の竪穴住居状の遺構であることがわかった。竪穴住居の主軸はN-15°-Eであり、復元面積は約17.95㎡を測る。埋土は褐灰色粘性砂質土を中心とするものであり、住居床面は標高137cmを測る。床面には須恵器や土師器

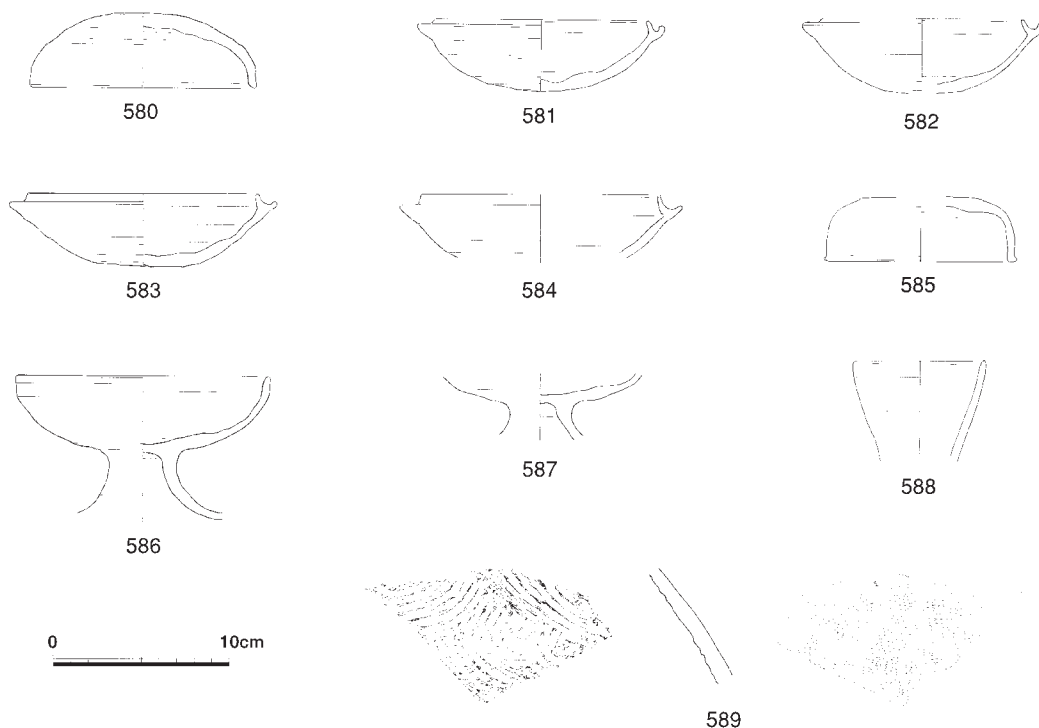
(594・596)などの遺物が散乱していた。床面の周縁部ではいわゆる溝状の壁体溝等の痕跡は検出されなかった。また、床面上で炉の存在をしめすような被熱痕跡は検出されず、焼土や炭などのひろがりも見られなかった。竪穴住居41は一部失われている部分があるが、残存している箇所を精査したにもかかわらず、カマドの痕跡は認められなかった。また、支柱穴も、床面を深く削り込むなどの方法で精査したものの、支柱穴に相当するものは見つからなかった。したがって、竪穴住居41は支柱をもたない上屋構造をもっていたものと推測することができよう。竪穴住居41の床下および周辺には土壌102や土壌103が存在している。詳細については後述するものの、その営まれた時期も竪穴住居41に近いことから、この住居に関連した遺構と考えられる。

竪穴住居41では埋土から須恵器、土師器等、多くの遺物が出土した。580～589は須恵器で、杯蓋、杯身、高杯、壺蓋、平瓶、甕等の破片である。580は杯蓋で口径10.8cm、器高4.2cmを測る。581～584

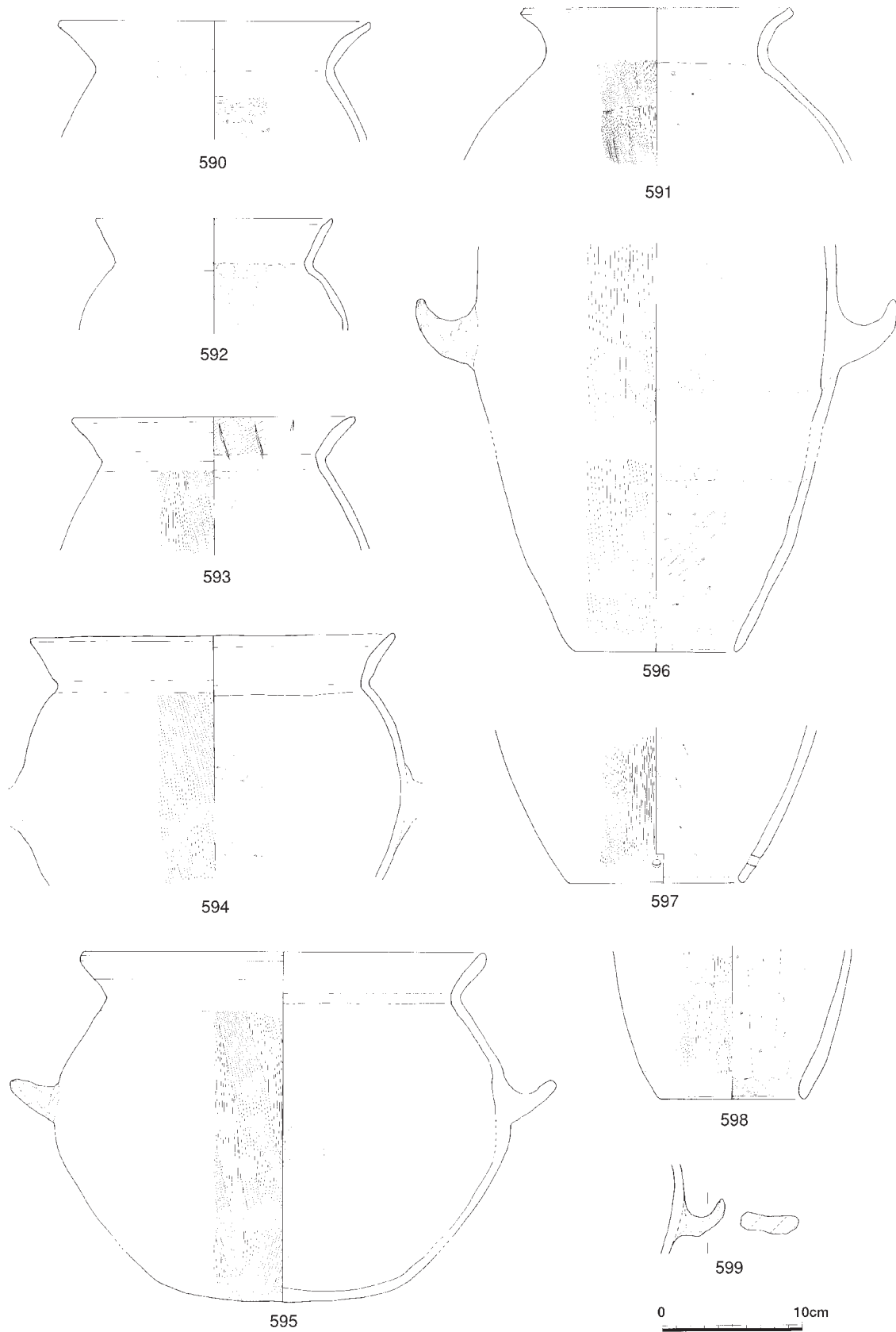


第188図 竪穴住居42 (1/60)

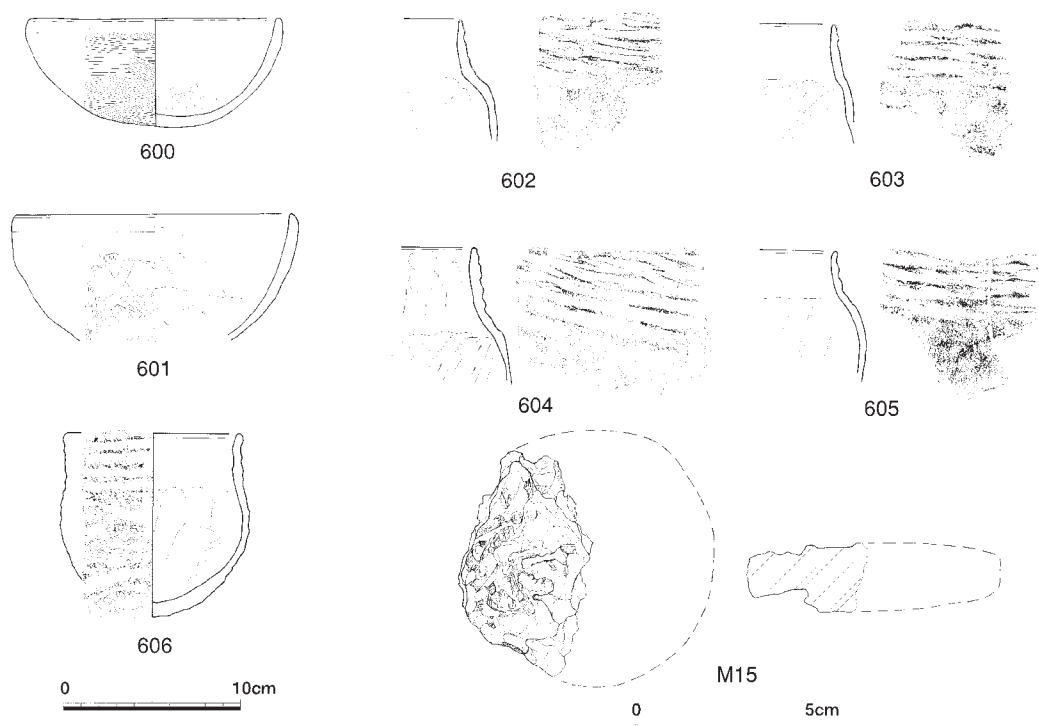
は杯身で、いずれも身から立ち上がりを有するタイプである。口径11.4～13.4cm、器高約4.1cmを測る。**585**は壺の蓋と考えられる。全体的に丁寧な作りである。この壺蓋はこの竪穴住居41の他に土壌103でその破片が採集された。**586**は無蓋高杯である。口径14.2cmを測るが、脚裾部が一部かけている。竪穴住居41の中央西側の床面付近で出土した。**587**も高杯である。**588**は平瓶の破片である。**589**は甕の胴部片である。**590～606**は土師器である。土師器は、主に甕、甑、製塩土器が出土している。**590～595**はいわゆる「く」の字形の口縁をもつ甕である。多くの甕の外面には粗いハケメが施されている。**593**では口縁部内面にヘラ記号を思わせる線刻が3本施されている。**594～595**は体部に把手をもつ甕である。ほぼ全体像が復元できるもの（**595**）で、口径28.4cm、器高24.7cm、胴部最大径32.5cmを測る。**594**は住居のほぼ中央西側の床面から出土した。**596～599**は甑である。**596**は住居の中央西側床面で出土した把手付の甑である。**597**も甑の底部である。底径12.5cmを測り、底部付近に穿孔が施されている。**600**と**601**は椀である。**601**は粗製の土器である。**602～606**は製塩土器である。いずれも砂粒を含む粗い胎土で、外面にタタキが施されている。**606**はほぼ完形に復元できる製塩土器で、口径9.6cm、器高10.4cmを測る。**M15**は鉄滓であり、半分は欠損している。復元で径7cmを測る鍛冶滓と考えられるが、この竪穴住居内には鍛冶炉と考えられる痕跡は見つかっていないことから、混入品である可能性が高い。なお、この竪穴住居42では、その検出段階において、この付近から須恵器や土師器が出土している。竪穴住居42の範囲がまだ確定できていなかったため、本報告書では遺構に伴わない遺物として取り扱っているが、第199図の**617・622**、第200図の**632**の須恵器や土師器は、その出土した位置から、この竪穴住居42に伴う遺物である可能性が高い。なお、この竪穴住居42の時期であるが、出土した土器の大半が古墳時代後期後半頃のものと考えられるため、この竪穴住居42の時期も当該期に比定することが可能であろう。（金田）



第189図 竪穴住居42出土遺物① (1/4)



第190図 竪穴住居42出土遺物② (1/4)



第191図 竪穴住居42出土遺物③ (1/4・1/2)

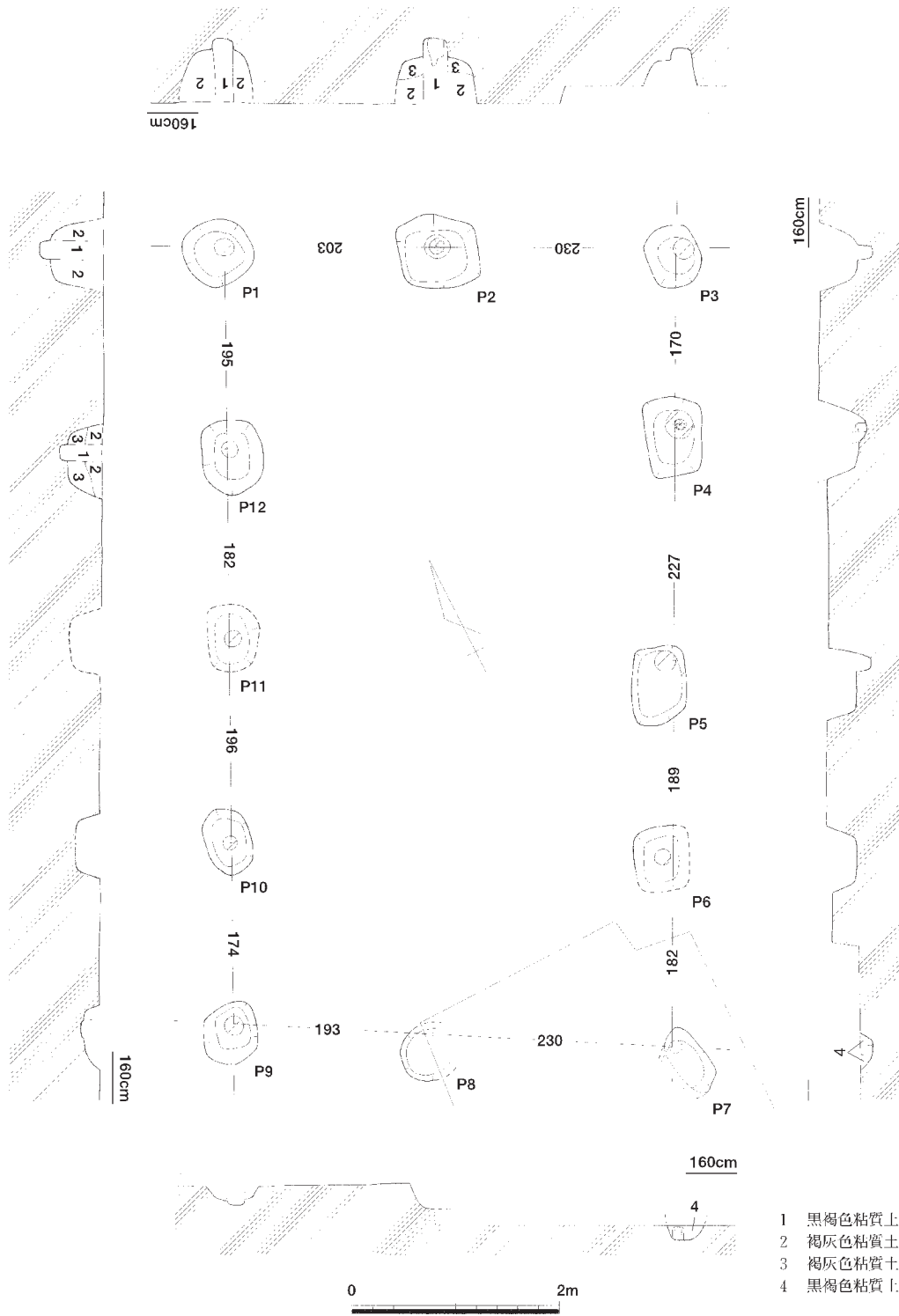
3 掘立柱建物

掘立柱建物 1 (第192・193図、図版17)

掘立柱建物 1 は17L区に位置する、桁行 4 間、梁行 2 間の側柱建物である。掘立柱建物の主軸は $N-27^{\circ}-E$ である。柱穴はいずれも黒褐色土あるいは褐灰色土が堆積していた。柱穴は周辺に存在する竪穴住居の埋土と酷似していたため、その検出には困難を極めたが、柱穴に残存していた柱痕跡等を手がかりに調査をすすめた結果、この 4×2 間分の建物に相当する12基の柱穴を検出するにいった。柱穴の平面形態は円形や方形あるいは長方形に近いものなどがあり、その柱穴掘りかたは長径 $60 \sim 80 \text{cm}$ を測る。柱穴の底面の高さは標高 $90 \sim 130 \text{cm}$ である。柱穴にはその埋土の違いから、柱痕跡を想定させるものがみられたが、中でも $P 2 \cdot P 4 \cdot P 7$ では柱自体が残存していた。柱材はいずれも底を平坦に加丁してある芯持ちの丸太材である。いずれも基底部分のみが残存していた。柱の大きさは $W 53$ や $W 54$ からおよそ径約 15cm 前後の木材が使用されていたと想定できる。使用された木材は樹種同定の結果、タブノキ ($W 52 \cdot W 54$)、ノグルミ ($W 53$) であると判明した。なお、これらの柱穴から出土した遺物は少ない。特に、この建物の時期を示す遺物は $P 3$ から出土した須恵器杯蓋の扁平化したつまみ (607) のみである。この遺物から、掘立柱建物 1 は古代の建物であると考えられる。 (金田)

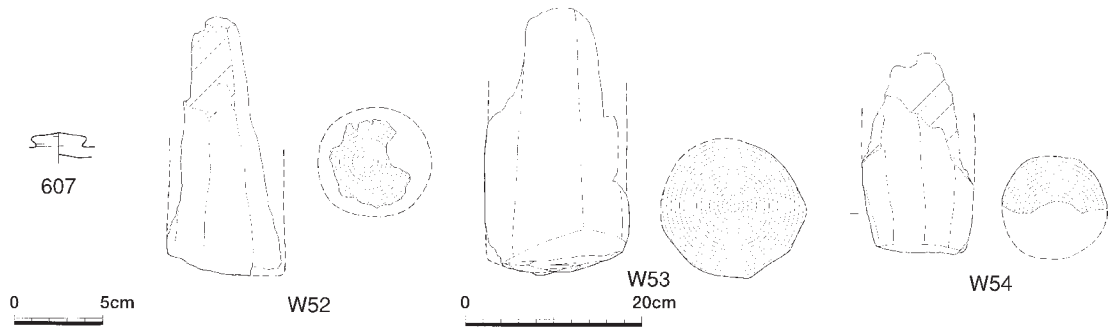
掘立柱建物 2 (第194図、図版40)

掘立柱建物 2 は20M区に位置する桁行 2 間、梁行 1 間の建物として取り上げている。この建物は、柱穴が平面的にひとつの建物を想定する位置に存在していることと、それぞれの柱穴で柱や柱痕跡がみられるものがあることから、これらの柱穴を一連の掘立柱建物として掲載した。しかし、これらの柱穴にはそれぞれ特徴があり、同一の建物の柱穴とするには多様であることも十分に認識しておく必



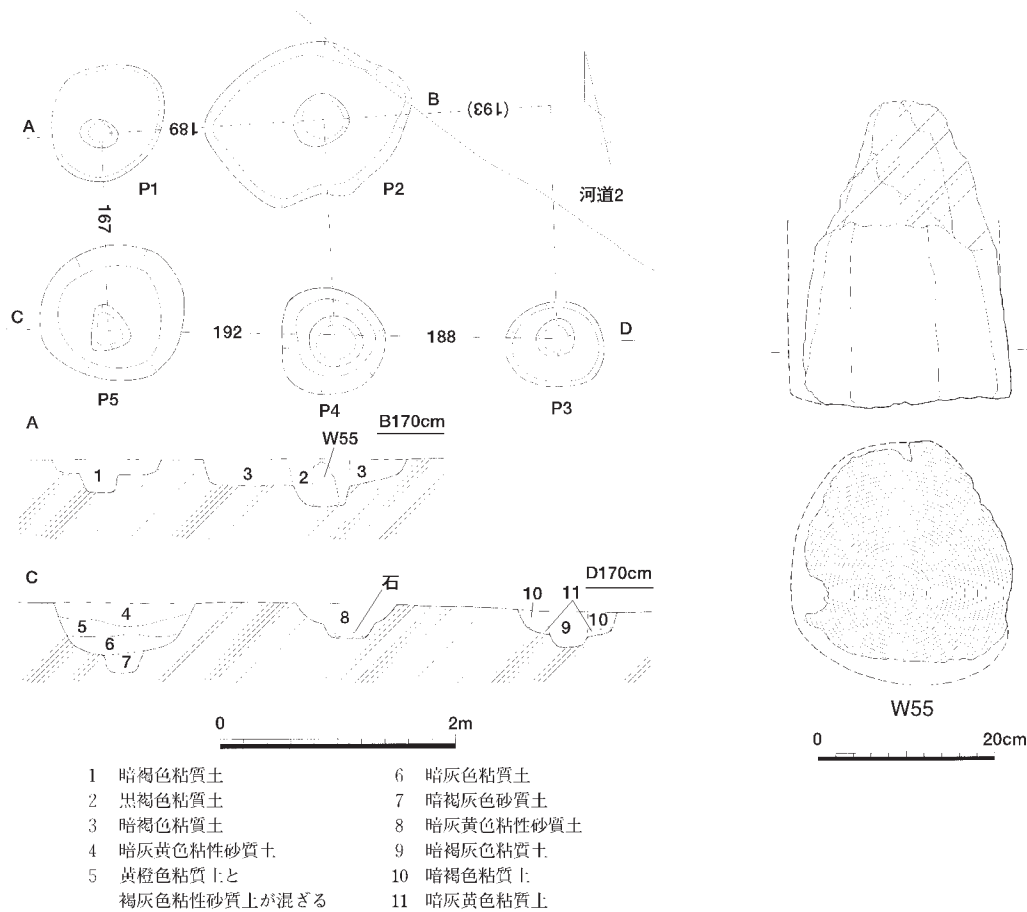
第192図 掘立柱建物 1 (1/60)

要もある。ここでは、このような問題点もみられることをふまえて、これらをひとつの掘立柱建物とみなし、以下の記述を行う。柱穴は5基を検出している。大きさは長径85cm~179cmを測る。P2以外の柱穴は平面形が円形で大きさもよく似ている点があるが、P2のみが大きさおよび平面形とも他



第193図 掘立柱建物1 出土遺物 (1/4・1/8)

の柱穴と異なっている。柱穴には柱痕跡を思わせるように底部中央が一段深くくぼんでいる。その中でP2では残存径25.2cmの柱材(W55)が残存している。柱材の底面は平坦に加工されており、樹種はカヤである。P4では底面に石を敷いている。P5では径10cm以下の石が根石を思わせるかのように残存していた。なお、この掘立柱建物2の時期であるが、それを示す遺物は少ない。柱穴から出土した土器のほとんどは弥生土器であるが、P5から1点だけ、須恵器杯部の小破片が出土しており、その形状から古墳時代後期後半頃の須恵器杯蓋あるいは杯身の一部と推定できた。このことから、この掘立柱建物2は少なくとも古墳時代後期後半以降のものであると推定せざるを得ない。(金田)



- | | |
|--------------------------|-------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 6 暗灰色粘質土 |
| 2 黒褐色粘質土 | 7 暗褐色砂質土 |
| 3 暗褐色粘質土 | 8 暗灰黄色粘性砂質土 |
| 4 暗灰黄色粘性砂質土 | 9 暗褐色粘質土 |
| 5 黄橙色粘質土と
褐色粘性砂質土が混ざる | 10 暗褐色粘質土 |
| | 11 暗灰黄色粘質土 |

第194図 掘立柱建物2 (1/60)・出土遺物 (1/8)

4 土壙

土壙102 (第195図)

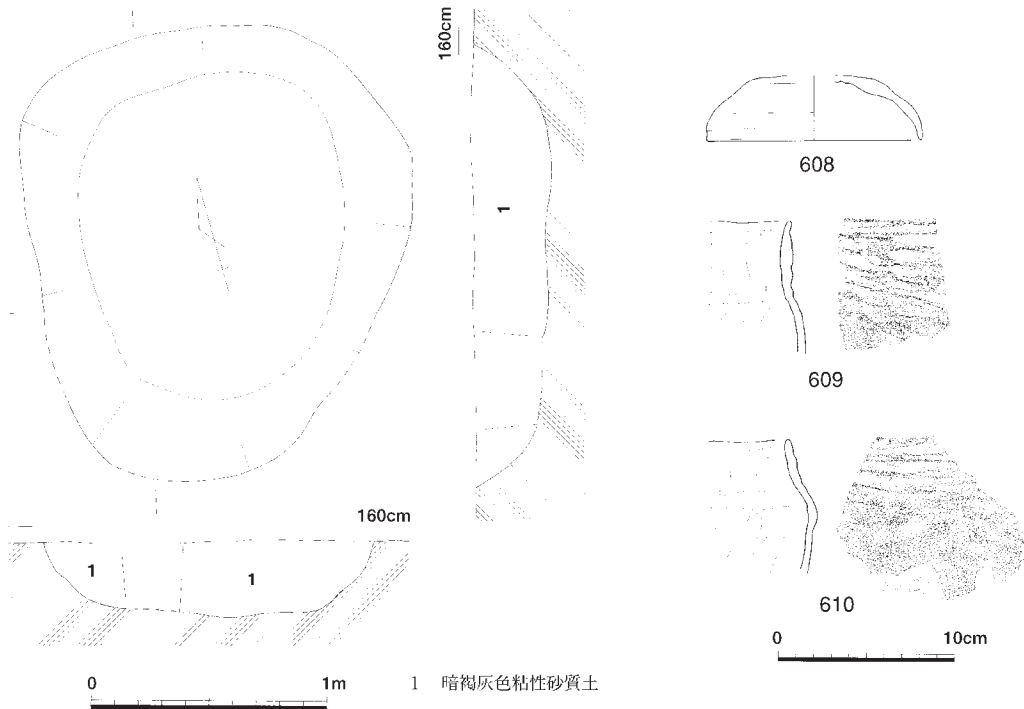
17M区に位置する土壙である。竪穴住居42床面の下より検出された。不整楕円形を呈しており、長径193cm、短径157cmを測る。竪穴住居42床面からの深さは33cmを測る。埋土は暗褐灰色粘性砂質土であり、竪穴住居42とよく似ている。土壙から須恵器および土師器が出土した。608は口径12cm、器高3.7cmの杯身である。609・610は製塩土器の破片である。これらの遺物から、土壙102は古墳時代後期後半期に営まれたもので、竪穴住居42と同時期のものであるといえる。(金田)

土壙103 (第196図)

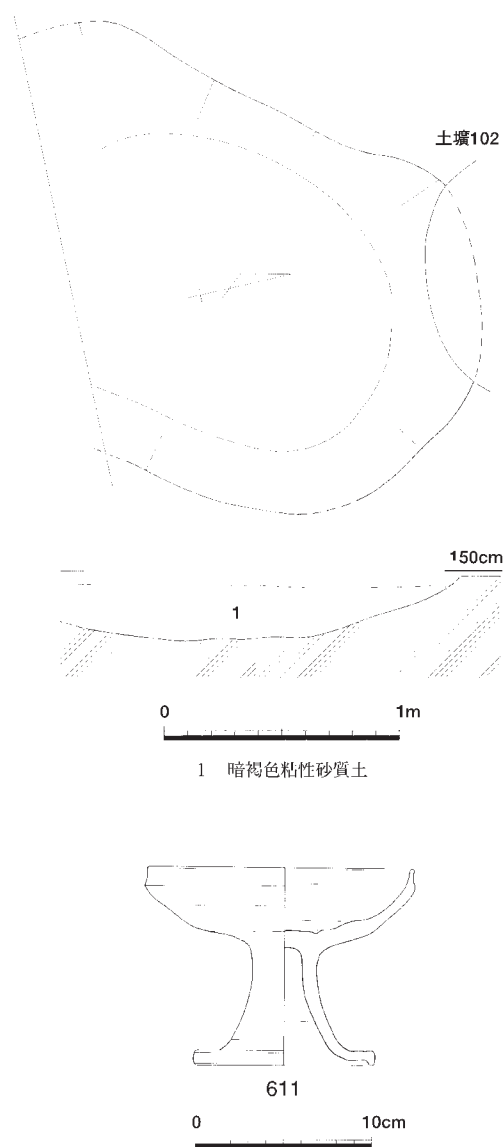
土壙103は土壙102の南側に隣接する土壙である。不整形を呈する。南半分を攪乱により破壊されているが、短径で約1.6mを測る。土壙102と同様に竪穴住居42の床下に位置している。土壙からは須恵器、土師器が出土している。611は須恵器高杯である。完形に復元することが可能で、口径14cm、器高11.2cmを測る。図示していないが、その他に杯蓋、土師器甕片が出土している。竪穴住居42とほぼ同時期の古墳時代後期後半頃に比定できる。(金田)

土壙104 (第197図)

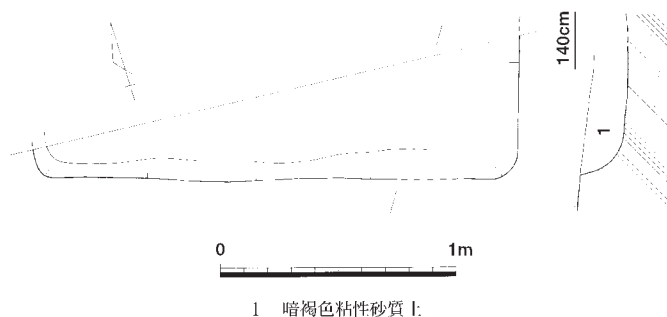
平面形が長方形を呈する土壙である。19K区に位置する。調査区上の制約で、土壙の一部しか調査されていない。土壙104は南辺で約2mを測り、深さは約16cmを測る。土壙104の上面は河道2が存在しており、土壙104自体は竪穴住居31の上面に営まれていることから、この住居以後の遺構である。土壙内には暗褐色粘性砂質土が堆積しており、ビニール袋半分ほどの遺物が出上している。大部分は弥生土器であったが、1点のみ須恵器が検出されている。須恵器は小片のため図示していないが、外



第195図 土壙102 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第196図 土壌103 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第197図 土壌104 (1/30)

面にヘラケズリ等がほどこされており、杯蓋あるいは杯身の可能性がある。詳細な時期については言及できないが、古墳時代後期頃のものと考えられることから、これをもって土壌104の時期と推測することができよう。(金田)

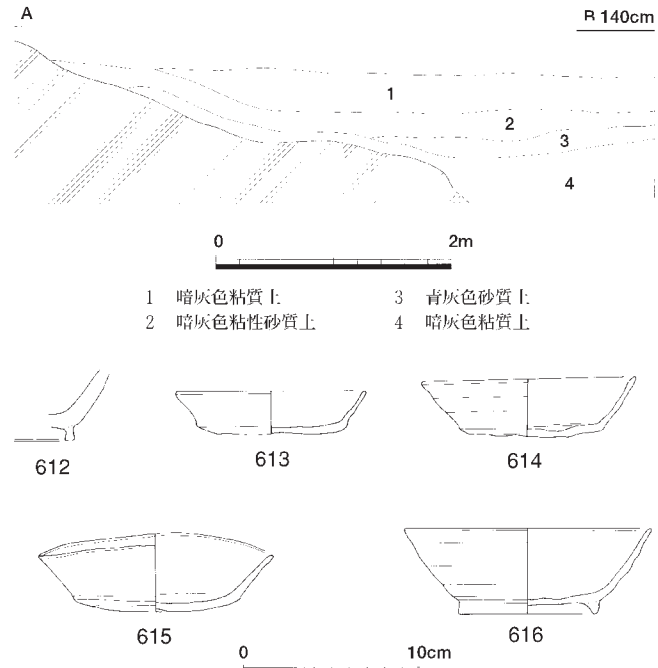
5 河道

河道1 (第187・198図、図版39)

河道1は20・21KLM区に位置する。中・近世の河道2の下層で検出されている。河道2とほぼ同じ流路をもつが、河道2よりも古い遺物がみられたことから、河道2と別のものと判断し、ここに報告するものである。河道1は調査区北西隅で、北西から南東に検出されたが、流路の方向については、一部分の調査であったため結論を得るにいたっていない。周辺の地形から判断すると、河道1の北西方向には京山が存在することから、北西方向から流れ込む流路を推測することが可能である。しかしながら、当遺跡では旭川からの支流の影響を考慮しておく必要があるため、河川の蛇行により先述した方向とは逆の流路をとることも十分想定される。ここでは河道1の流路の方向については保留したい。河道1埋土は基本的には粘質土を中心とする土である。しかし、河道1底部付近では薄い砂層もみられることから、河道1は一時期に流速の速い時期もあったが、基本的には流れの遅い、滞水した環境で埋没していったものと考えられる。調査区の制約で全体を把握することは

はできないが、少なくとも河幅5.15m以上、深さ約1m以上を測る。河道1からは弥生土器、須恵器、土師器などが出土した。出土遺物の大部分は弥生土器であるが、いずれも周辺からの混入である。須恵器と土師器は、そのほとんどが小破片を中心とするもので出土量はそれほど多くない。612は須恵器の破片である。その形状から長頸壺の底部と考えられ、

高台が貼り付けられている。須恵器については、その他に図示していないが、杯や甕の破片も出土している。**613**～**616**は土師質の杯である。**613**は口径10.4cm、器高2.4cmを測る。**614**は口径12.4cm、器高3.8cmを測り、内外面に赤色顔料が塗布されている。**615**はいびつに変形している。口径約13.1cm、器高約4.3cmを測る。**616**は高台付碗である。口径13.2cm、器高4.8cm、底径8.0cmを測る。内外面に赤色顔料が付着している。これらの土器類はおおむね10世紀頃の特徴をもつことから、河道1は10世紀頃には存在しており、以後、近世まで、河道2として継続して存在したものと考えられる。(金田)

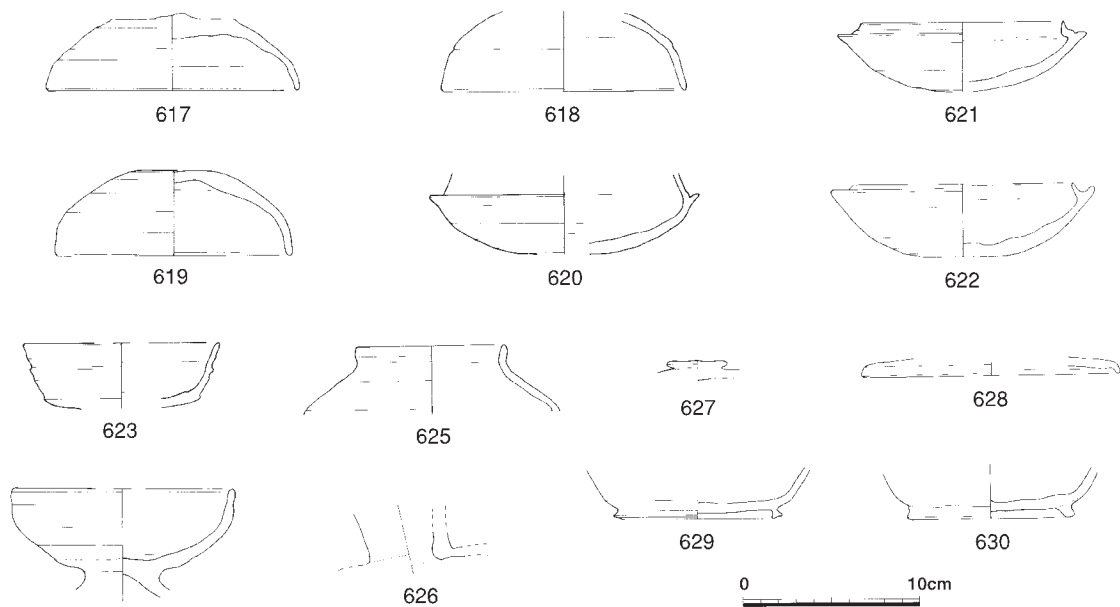


第198図 河道1土層断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

6 遺構に伴わない遺物

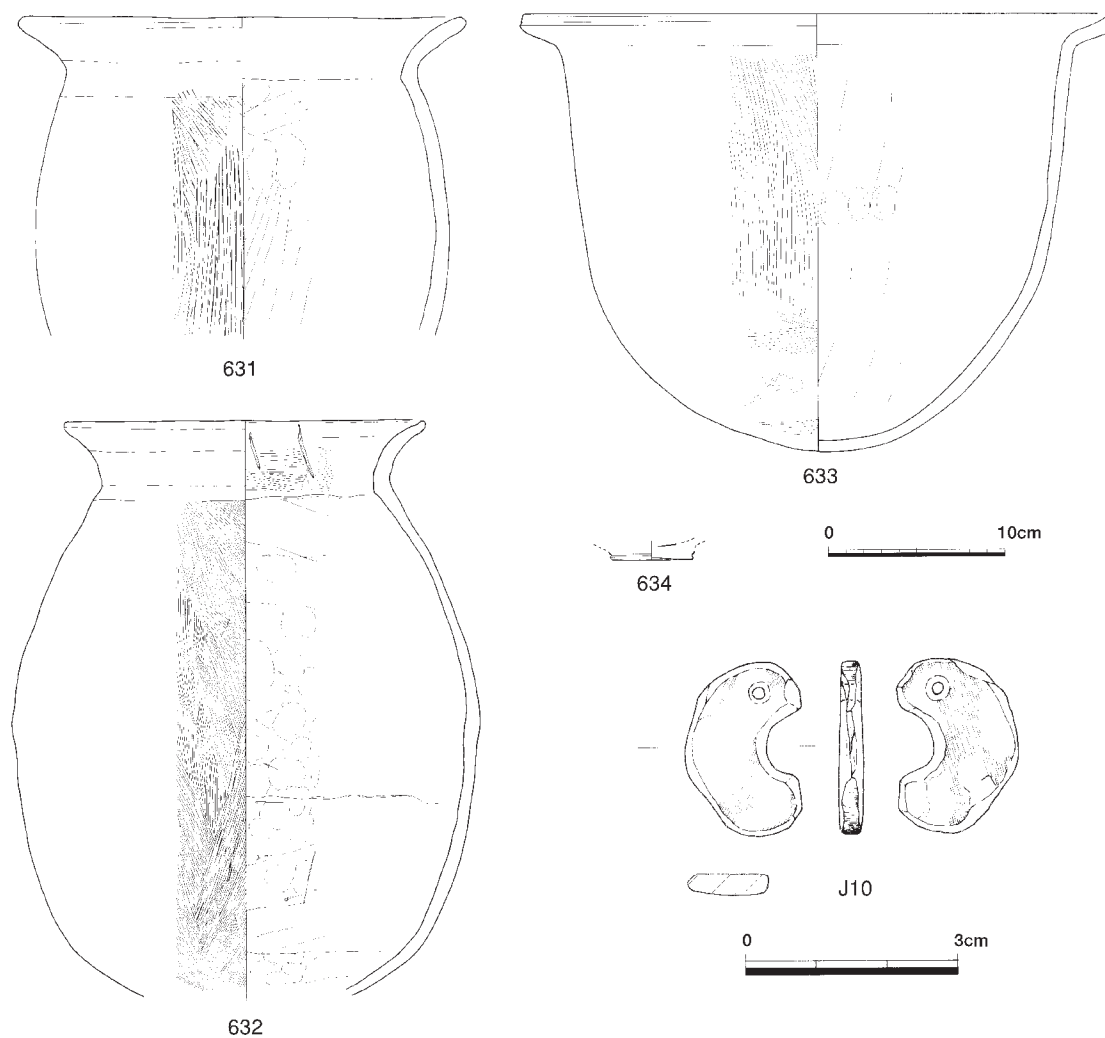
遺構に伴わない遺物(第199・200図、巻頭図版2)

ここでは、古墳時代後期から古代にかけて、特に遺構に伴って出土していない遺物の一部を紹介する。**617**～**630**は須恵器である。**617**～**619**は杯蓋である。**617**は竪穴住居42周辺で検出されたもので、竪穴住居42周辺の当該期に属する土壌の遺物であった可能性も否定できない。**620**～**622**は杯身であ



第199図 遺構に伴わない遺物①(1/4)

る。そのうち、620は他の須恵器にくらべて、やや古い形態を呈する。622は617と同様に、竪穴住居42付近で検出されたものである。623～624は高杯である。624は短脚あるいは低脚の高杯と考えられ、竪穴住居42周辺から出土している。625は短頸壺である。口径8.2cmを測る。626は半瓶である。これらの須恵器は620で古墳時代後期前半の様相を呈するが、ほとんどは古墳時代後期後半から7世紀にかけての特徴をもっている。627～628は杯蓋である。627は扁平なつまみをもつ。628は口縁端部の破片である。やや歪んでいる可能性がある。629は杯底部であり、高台をもつ。630は長頸壺の底部で、貼り付け高台をもつ。これらの須恵器は8世紀の土器様相をしめす。631～633は土師器甕である。633は掘立柱建物2の付近で出土している。また632は竪穴住居42付近で出土している。口縁部内面にはヘラ記号を思わせる線刻があり、同様の土器が竪穴住居42でも出土している。631については、竪穴住居29付近で出土している。634は緑釉陶器である。削り出しの円盤状高台をもち、施釉がみられる。J10は滑石製勾玉である。重さは2.14gを量る。両面ともに研磨痕が観察できる。(金田)



第200図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/1)

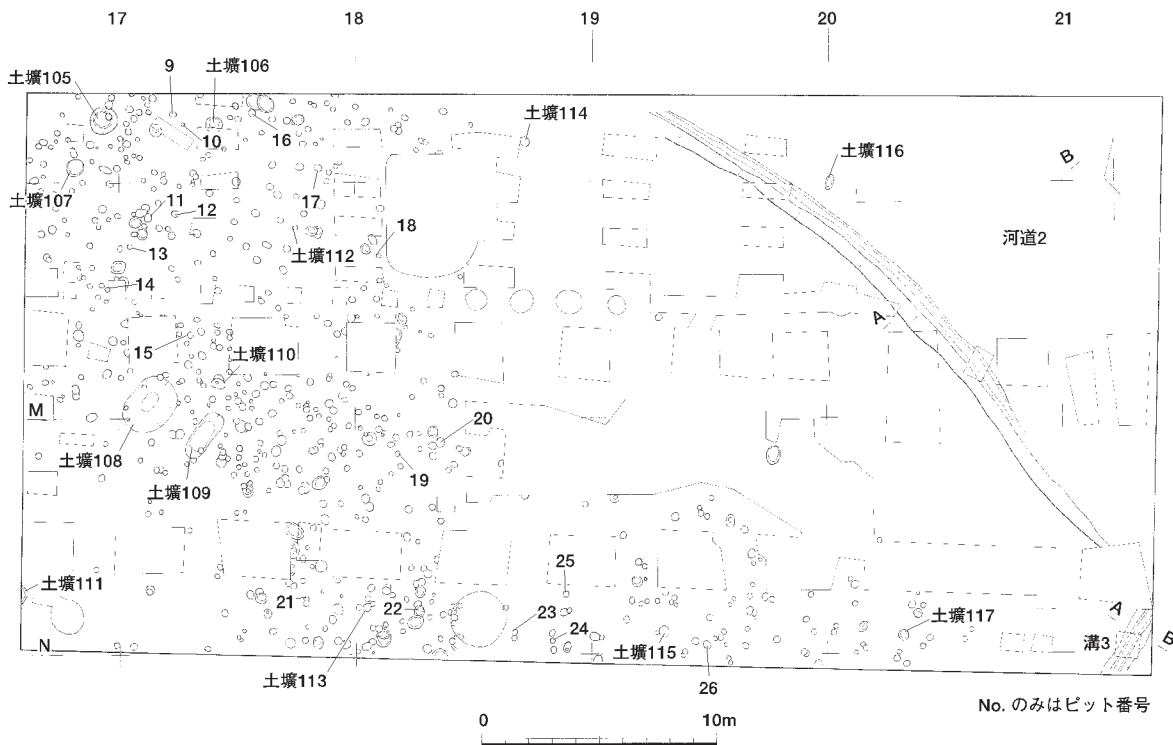
第4節 中・近世の遺構・遺物

1 中・近世の概要

中世から近世の時期に該当する遺構として、土塋、ピット、河道があげられる。土塋・ピットは出土遺物および遺構検出時の埋土の状況、あるいは遺構との切り合い関係を考慮して時期決定を行っている。その結果、土塋14基、ピット約650個が確認できた。そのうち、本書では土塋13基、ピット18個、溝・河道2条を記載している。以下、中世・近世の遺構についての概要をのべる。

中世に属する遺構として土塋12基、ピット約650個が確認できた。土塋・ピットからは特に目立って出土する土器は、いわゆる早島式土器といわれる土師質土器碗の破片である。その多くは13世紀後半から14世紀前半頃を中心とするものであり、これが中世における当遺跡の主要時期を反映している。その中で土塋107では土師質土器13個体がまとまって出土している。ピットの中には、柱根が残存しているものもあったが、建物の特定にまではいたっていない。また、河道2は古代から継続する河道1の流路を基本的に継承するものである。河道2から出土した遺物は、13世紀後半以後の遺物がみられる。

近世に属する遺構は少ない。土塋1基と中世からつづく河道2が主な遺構である。河道2の流路は基本的に変化していないが、河道2に並行して横に溝や護岸施設が設けられるなどして利用されている。なお、近世以後当地は造成され、戦時中においては、海軍の衣糧工廠^{いりょうこうしょう}として利用されている。攪乱部からの出上であるが、当時の遺物が出上している。(金田)



第201図 中・近世遺構全体図 (1/300)

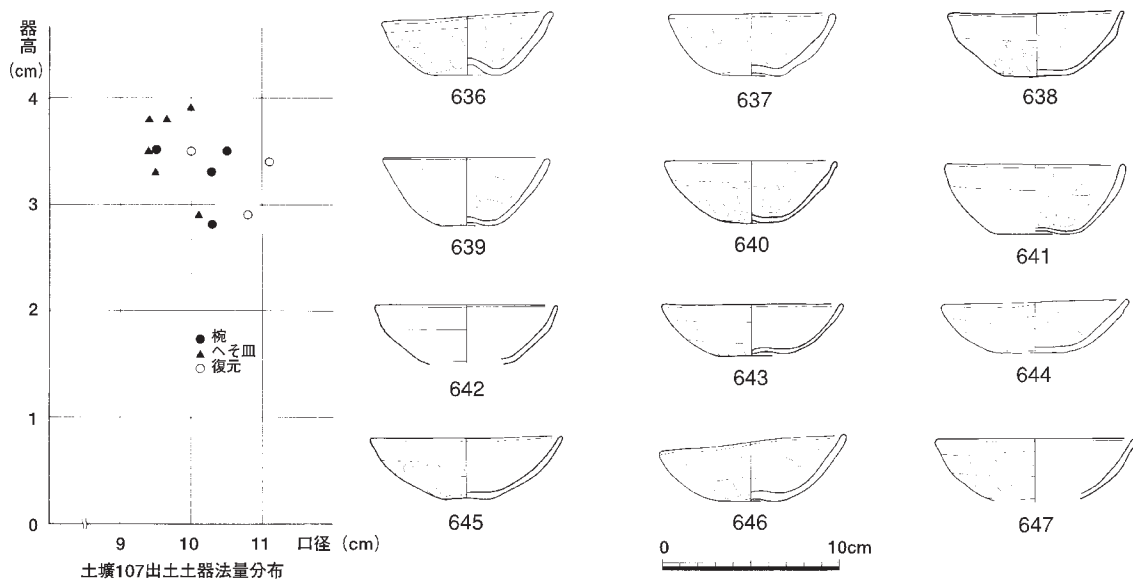
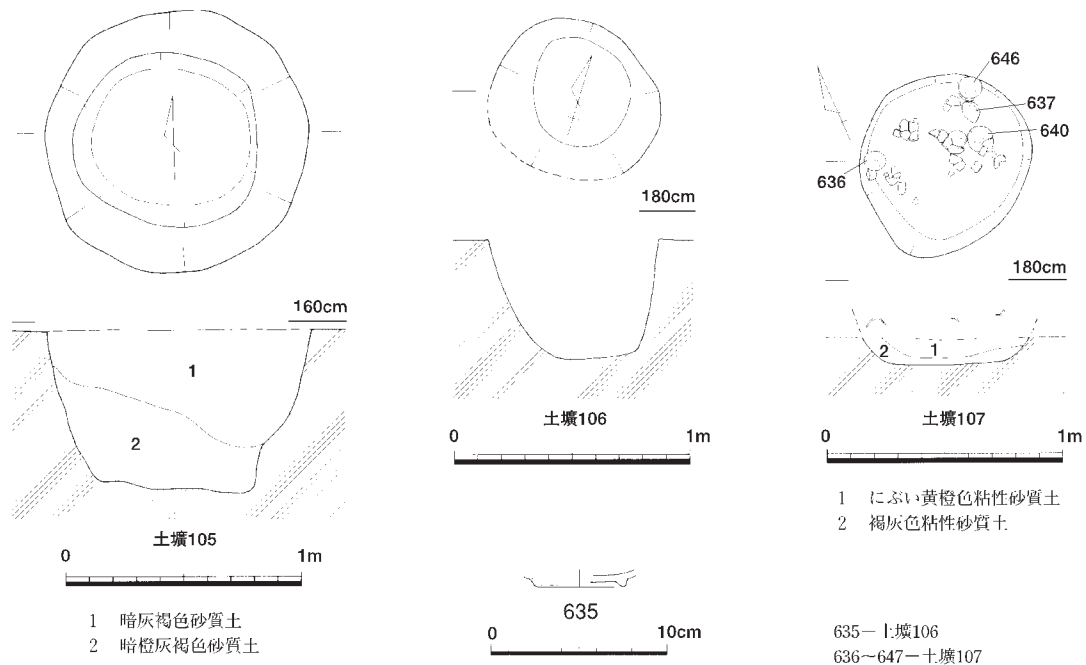
2 土壙・ピット

土壙105 (第202図)

土壙105は16K区に位置する。円形の土壙で、径約110cmを測る。深さは67cmを測り、井戸の可能性も考えられる。埋土中から中世土器片が数片出土している。 (金田)

土壙106 (第202図)

土壙106は17K区に位置する。南部を一部欠損しているが、およそ径70cmを測る。埋土から土師質碗片 (635) が出土している。13世紀後半頃に比定できる。 (金田)



第202図 土壙105～107 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙107 (第202図、図版18・36)

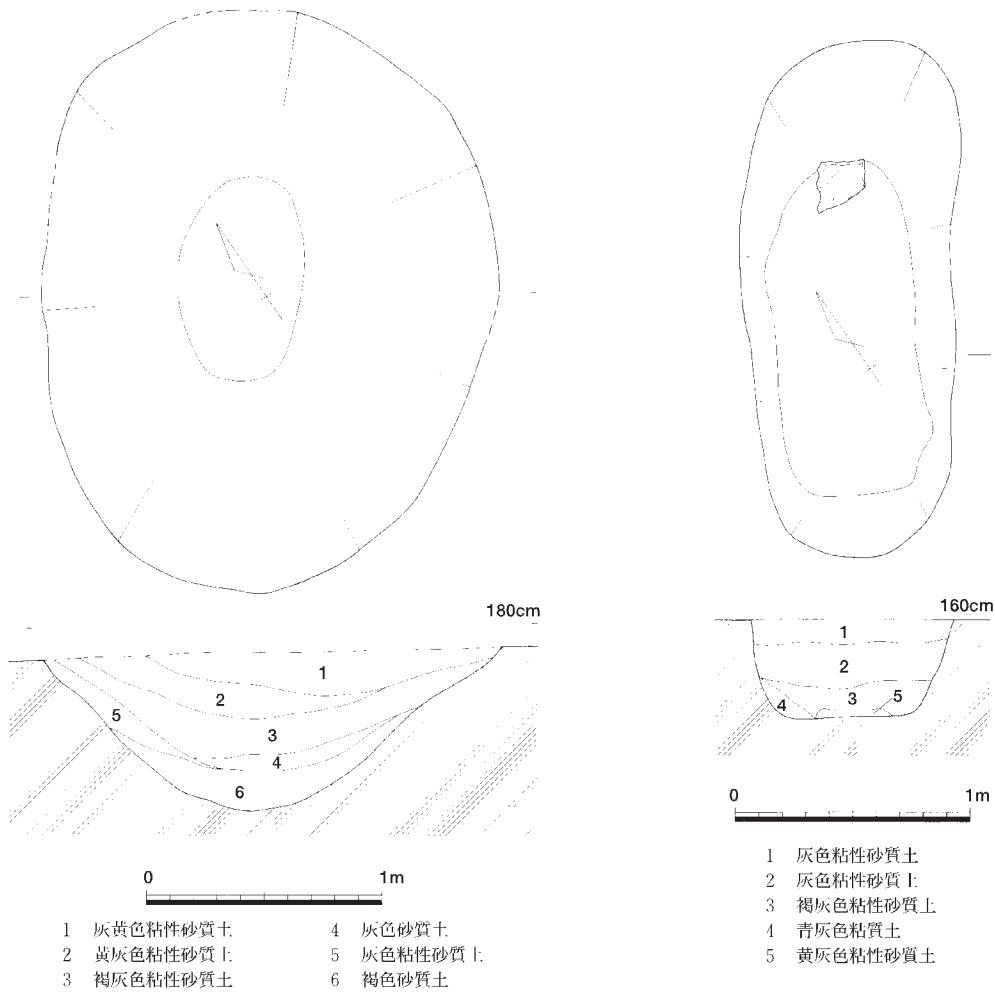
土壙107は16K区に位置する。長径76cmを測る円形に近い土壙である。埋土から土師質碗が最低13個体出土した。出土した碗はすべて高台をもたないもので、中には「へそ皿」と呼ばれる底部を窪ませたものがある。口径は9～11cmの範囲に分布するが、器高は後者のものがやや高い傾向を示す。碗の形態や法量分布から14世紀中頃の資料とみることが可能であろう。その他に小皿の破片も1点出土しているが、小片のため図示していない。(金田)

土壙108 (第203図)

土壙108は17L区に位置する。平面は楕円形を呈し、長径249cm、短径192cm、検出面からの深さは68cmを測る。埋土中から備前焼片、陶磁器片、瓦片などの中近世遺物が出土している。近世に営まれたと考えられるが用途等は不明である。(金田)

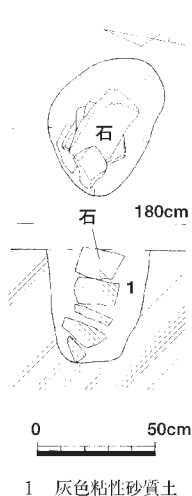
土壙109 (第204図)

土壙109は17M区に位置する。長径209cmの長楕円形を呈する。底面には黄灰色土は敷かれており、北端に石が置かれていた。土壙墓の可能性が考えられるが、詳細は不明である。埋土から中世土師質土器が出上しており、13世紀後半前後の上壙と考えられる。(金田)

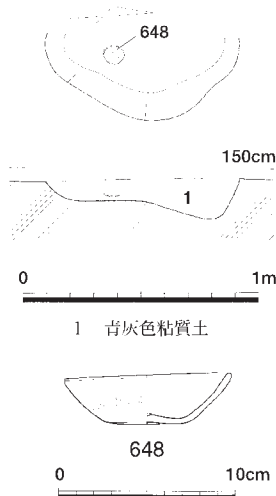


第203図 土壙108 (1/30)

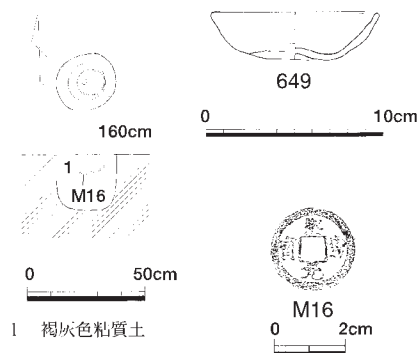
第204図 土壙109 (1/30)



第205図 土壙110 (1/30)



第206図 土壙111 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第207図 土壙112 (1/30)
・出土遺物 (1/4・1/2)

土壙110 (第205図)

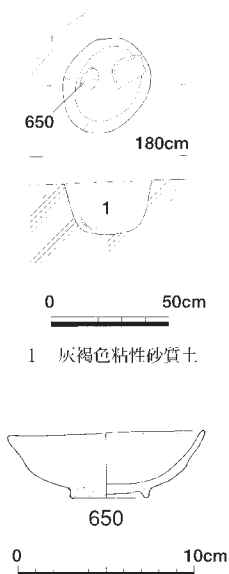
土壙110は17L区に位置する。長径47cm、短径42cm、検出面からの深さ47cmを測る。土壙底部から石材6点が上方に向けて重ねて積み上げられていた。出土遺物は少ないが、中世土師質碗の小片が出土していることから、中世に属する土壙と考えられる。建物の基礎構造とも考えられるが、詳細な用途等については不明といわざるを得ない。(金田)

土壙111 (第206図)

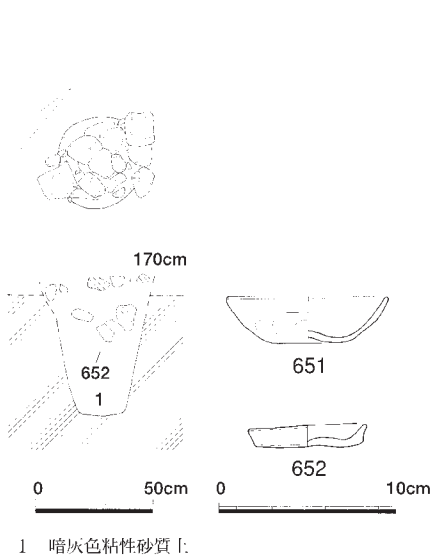
土壙111は16M区に位置する。調査区の制約により西半分が失われている。土壙は不整楕円形を呈し、長径82cmを測る。底から土師質碗(648)が完形で出土したが、その他の遺物は検出されていない。出土した土器から、土壙111は14世紀前半頃に比定できる。(金田)

土壙112 (第207図、図版37)

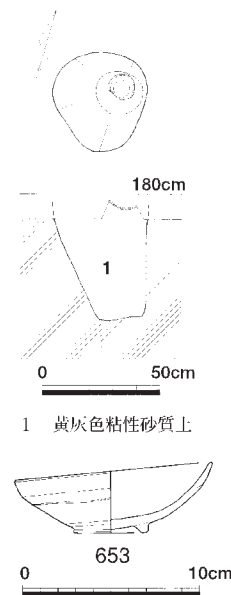
土壙112は17L区に位置する。径25cm、深さ24cmの円形の土壙である。内部から土師質碗(649)とそ



第208図 土壙113 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第209図 土壙114 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第210図 土壙115 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

の土器底部に接するような状態で銭貨（M16）が出土した。649は口径9.2cm、器高2.7cmを測るいわゆる「へそ皿」である。M16は「熙寧元寶」である。ほかに中世遺物はない。祭祀的な用途をうかがわせる。これらの出土遺物から、14世紀前半頃に比定することができよう。（金田）

土壙113（第208図）

土壙113は18M区に位置する。長径51cm、深さ22cmを測るやや楕円形を呈する土壙である。内部からは土師質碗（650）が出土した。また、650とほぼ同レベルで石が出土している。650は口径11cm、器高3.7cmを測り、13世紀後半頃に比定できることから、同時期の土壙と考えられる。（金田）

土壙114（第209図）

土壙114は18K区に位置する。径38cm、検出面からの深さ58cmを測る円形の土壙である。土壙の上面では多数の礫がみられた。礫群の下層から土師皿（652）が完形で出土した。埋土中からは土師質碗（651）も出土しているが、これは破片での出土であった。これらの出土遺物から、土壙114は14世紀前半頃のものと考えられる。（金田）

土壙115（第210図）

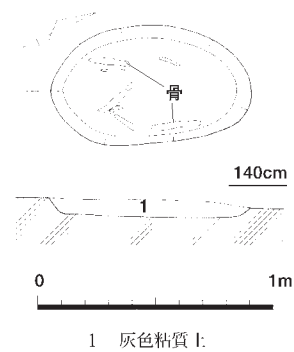
土壙115は19M区に位置する。不整円形を呈するが、およそ40cmの径をもつ。土壙上面において土師質碗（653）を検出している。その他に、破片であるが亀山焼と思われる甕片も出土している。これらの遺物から1300年前後の土壙と推測できる。（金田）

土壙116（第211図）

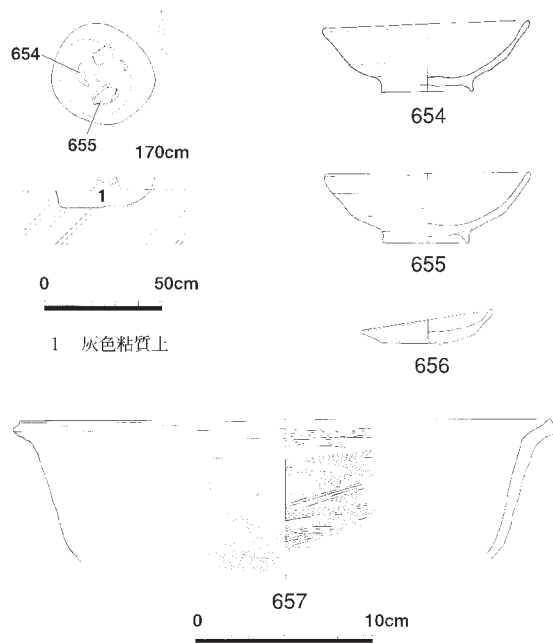
土壙116は19L区に位置する。中近世の河道2の下層から検出された、長径85cm、短径50cmを測る楕円形の土壙である。埋土中から骨片が検出された。骨片の残存状況は極めて悪かったが、そのうちのいくつかを同定したところ、哺乳類のものと思われるが、詳細は不明であるとの報告を得た。大きさなどから土壙116は土壙墓である可能性が考えられる。時期は、埋土から中世土師器片が出土していることから、中世に属するものである。（金田）

土壙117（第212図、図版18）

土壙117は20M区に位置する。径43cmの円形の土壙であり、深さは残存で12cmを測る。埋土中から中世土師器が出土した。654と655は碗である。656は皿であり、657は鍋である。そのうち、657の鍋以外はほぼ完形であった。他に碗片も出土していることから、土壙117では少なくとも碗3点、皿1点の埋納が確認できる。13世紀後葉頃の土壙と推定できる。（金田）



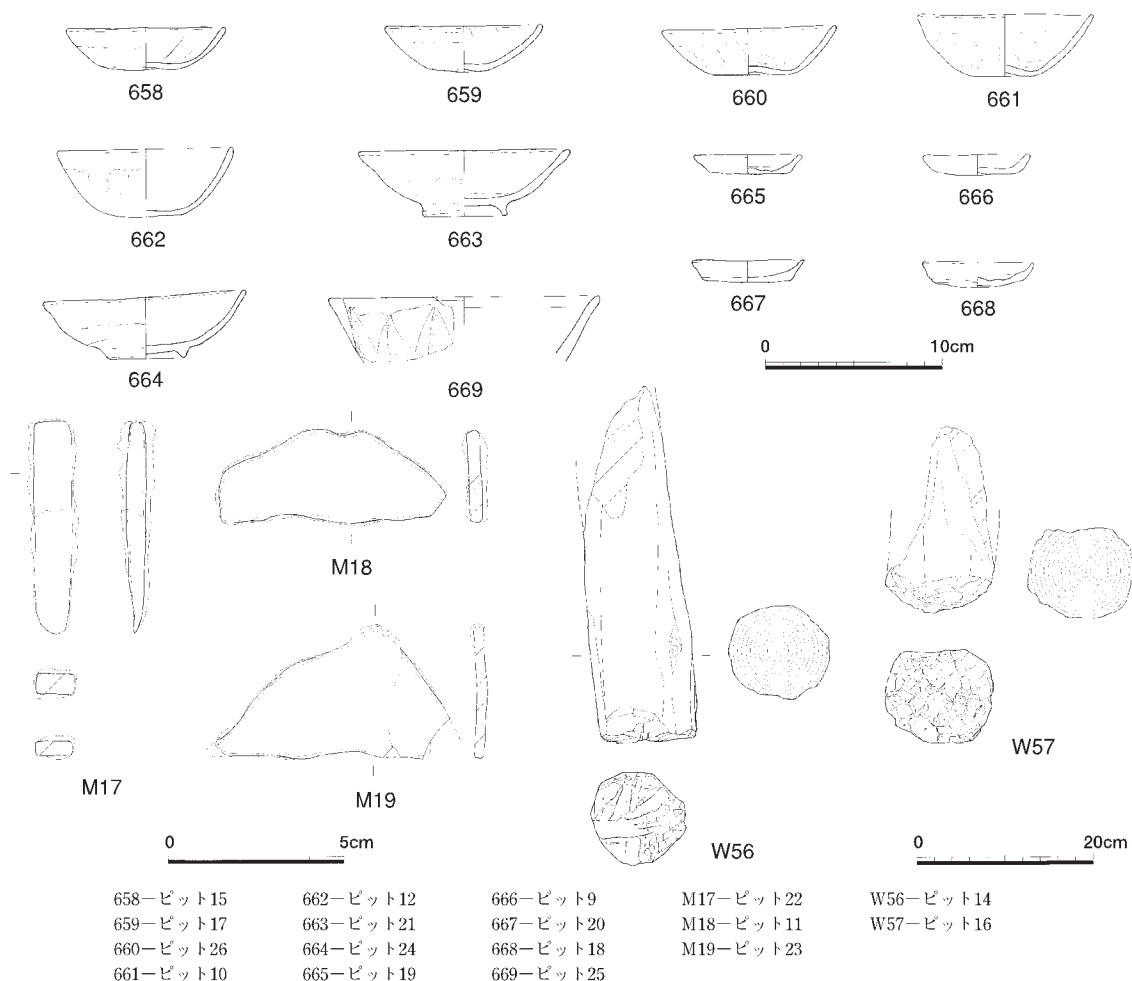
第211図 土壙116 (1/30)



第212図 土壙117 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ピット9～26（第213図、図版37）

中・近世に属するピットは時代が判明しているもので、およそ650個を数える。これらのピットの時期比定は、主に埋土からの出土遺物、検出時の埋土の状況、遺構の切り合い関係をもとに行っている。ピットの中には柱根や柱痕がみられ、掘立柱建物等を構成するものも含まれている可能性もあるが、まとめて建物と推測できるものはない。柱穴からは土師質土器、須恵器、鉄器、木器などが出土している。658～664は土師質碗である。658～661は底部が平坦か、あるいは窪んである、いわゆる「へそ皿」と呼ばれるものである。658～660はやや小形で口径8.9～9.7cm、器高2.4～2.6cmを測る。661～662はやや大形で口径9.8cm、器高3.5～3.8cmを測る。663～664は高台付の碗である。口径11.3～11.8cm、器高3.7～4.7cmを測る。663の内面には重ね焼きの痕跡がみられる。665～668は小皿である。口径5.8～6.2cm、器高1.1～1.5cmを測る。669は青磁碗である。体部外面には鎬蓮弁の文様を有する。M17は鑿である。全長6.1cm、幅1.4cmを測り、残存状況はよい。ピット22で出土した。ピット22は埋土から弥生土器の小片のみが出土しており、出土遺物で判断すると弥生時代にまでさかのぼる可能性がある。しかし、ピットの埋土が他の中世ピットと似ているため、中世の遺構と判断している。M18・M19は火打ち金である。W56・W57は柱である。いずれも基部のみ残存している。丸太材を利用しており、径約11cmを測る。底部にはいずれも加工痕跡を明瞭に残す。（金田）

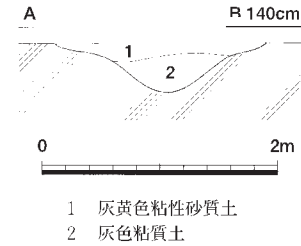


第213図 ピット9～26出土遺物（1/4・1/2・1/8）

3 溝・河道

溝3 (第201・214図)

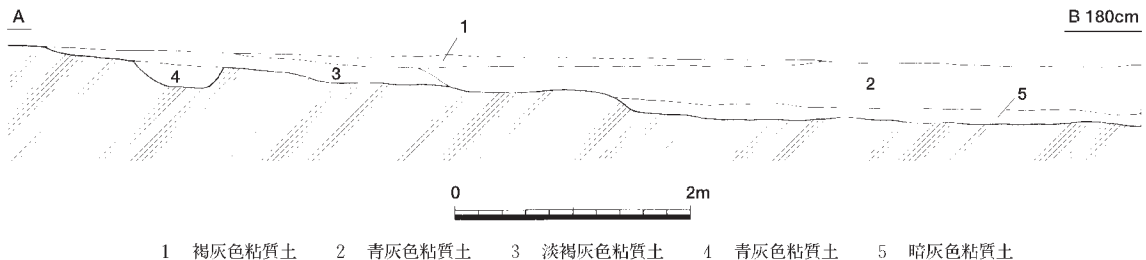
溝3は21M区に属する。北東から南西方向に流れており、主軸はおよそN-33°-Eであり、溝2などの周辺の遺構と主軸が近似している。上端幅約174cm、深さは約34cmである。若干の出土遺物があり、図示できるものはないが、中世の土器が出土していることから、溝3もこの時期のものとして推測することが可能である。



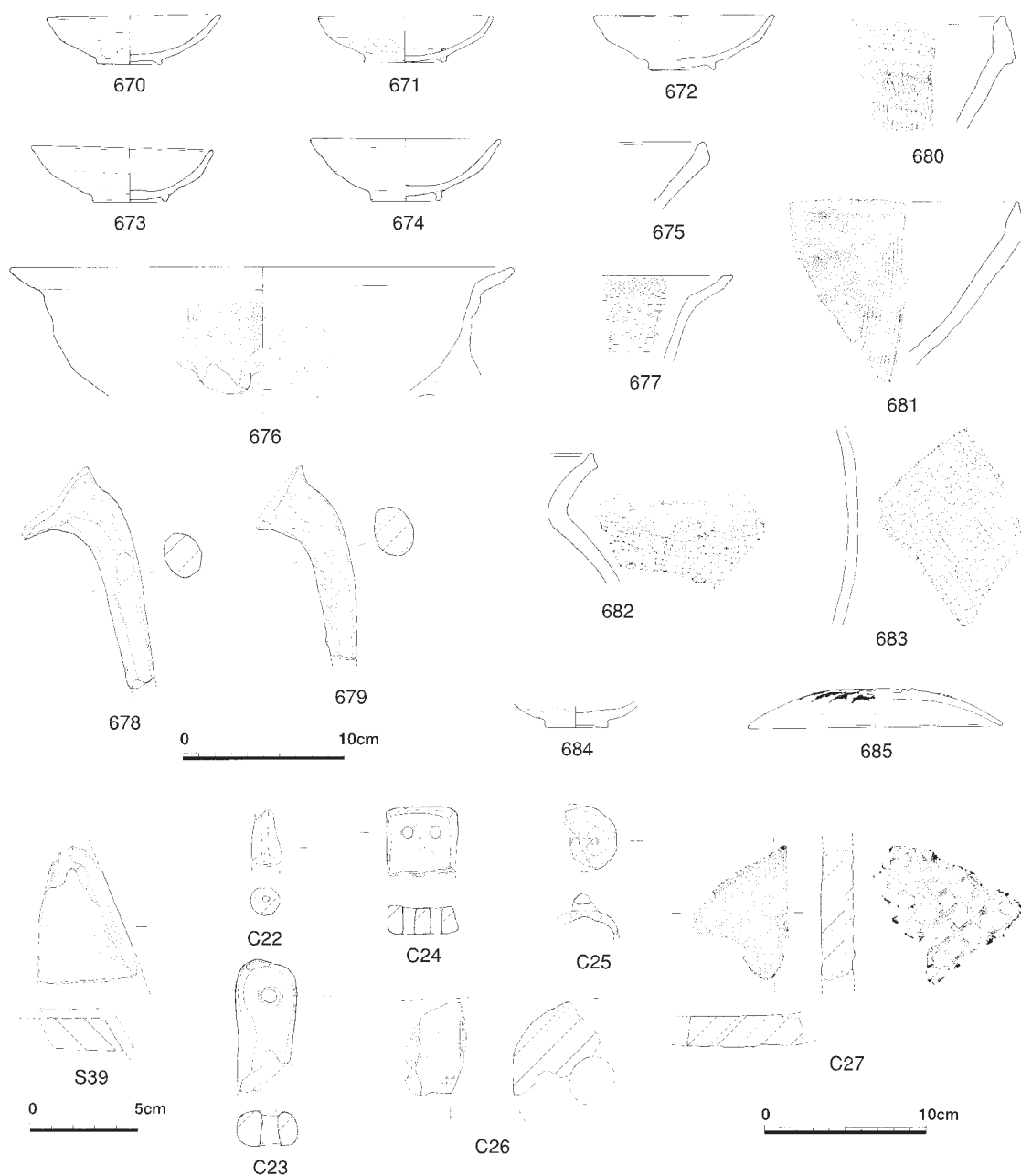
(金田) 第214図 溝3土層断面図 (1/60)

河道2 (第201・215・216図、図版18)

河道2は調査区北東部に位置する。古代の河道1を基本的に引き継ぐものである。河道2は南岸のみを検出している。古代の河道1よりも南岸の斜面の傾斜は緩やかになっていることから、河道1にくらべて河道2の河幅は広がっていることが想定でき、そのため、河道2の河幅は少なくとも10.5m以上を測る。なお、検出面からの深さはもっとも深いところで約0.5mを測る。埋土は粘質土を中心とするものであった。なお、河道2の南岸に沿って、杭列がみられたことから簡易な護岸施設があったものと考えられる。また、この杭列にそって、幅約75cm、深さ15~20cmの溝が掘削されていた(第4層)。河道2からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、土製品など多くの遺物が出土している。そのうち、中・近世に属する遺物を以下に述べる。670~674は土師質碗である。口径10.6~11.7cm、器高2.9~4.0cmを測る。671の内面には重ね焼きの痕跡がみられる。大きさなどから1300年前後のものと考えられる。675は東播系の鉢である。口縁部が肥厚しており、この部分が黒く発色している。676~677は土鍋である。676は支脚をもち、口径30.8cmを測る。677は破片であるが、外内面ともにハケメがみられる。678・679は支脚である。680・681は備前焼の播鉢である。内面にスリメがみられる。15世紀後半から16世紀初頭頃と判断できる。682・683は亀山焼の甕片である。682は「く」の字状ではあるが、屈曲は弱い。外面には格子目タタキが施される。13世紀代のものと考えられる。684は肥前系の碗である。底部のみであるが、16世紀末から17世紀初頭のものである。685は関西系の国産陶器の蓋と推測しているものである。19世紀前半頃と考えられる。S39は砥石であり、最低2面使用している。C22~C24は土錘である。C25は土鈴である。C26は鞆の羽口である。C27は瓦である。凹面には布目痕跡が、凸面には格子目タタキがみられる。出土した遺物は、13~14世紀のものが多いが、15世紀以降のものもわずかではあるが出土している。なお、河道2は河道1から継続して営まれており、当地が造成される近代頃まで存続していたものと思われる。



第215図 河道2土層断面図 (1/60)

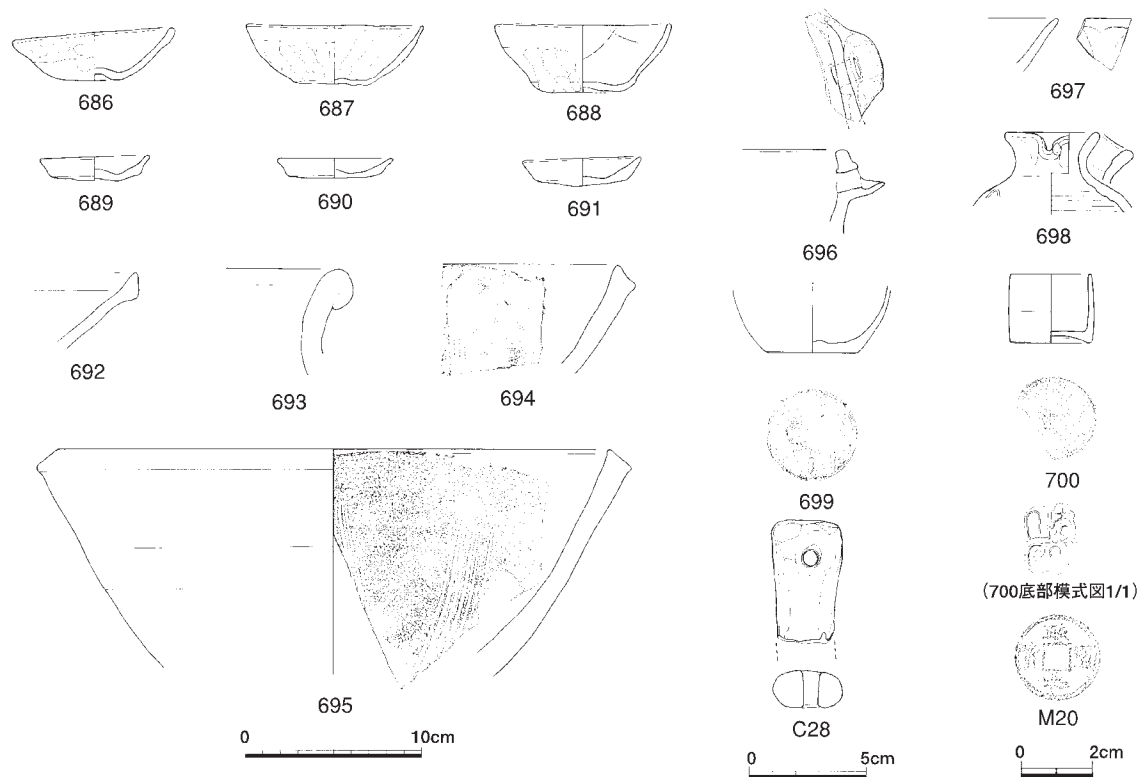


第216図 河道2出土遺物 (1/4・1/3)

4 遺構に伴わない遺物 (第217図、図版36・37)

遺構に伴わない遺物

中・近世の遺物として、明確な遺構に伴うものではないが、以下のような遺物が出土した。686～668は土師質碗である。いずれも高台がみられず、底部がやや窪んでいる、いわゆる「へそ皿」と称される碗である。686で口径9.0cm、器高3.0cmを測る。外面に重ね焼きの痕跡がある。689～691は小皿である。口径6.0～6.6cm、器高1.1～1.7cmを測る。692は東播系鉢である。口縁部が肥厚しており、黒く発色している。693は備前焼の玉縁状の壺口縁である。694・695は備前焼の搦鉢である。695は



第217図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3)

口径31cmを測り、内面は使用により摩滅している。696は瓦質の鍋である。697は青磁の碗片である。連弁がわずかに観察できる。698・699は備前焼の小形壺である。698は雀口をもつ。699は底部で糸切りの痕跡がみられる。700は造成土攪乱から出土した。口径4.6cm、器高3.9cm、底径4.6cmの白色の磁器である。底面に刻印がみられ、「岐」という漢字とその下に2桁の数字がみられる。数字は判読が困難であるが、あえて解読すれば、2桁目は「0」か「6」か「8」に、1桁目は「8」か「9」に読める。統制陶器と呼ばれ、太平洋戦争時に岐阜県で生産された。経済統制により生産から販売までを管理する目的でつけられた生産者番号である。M20は「政和通寶」である。C28は土錘である。

(金田)

第4章 まとめ

第1節 発掘調査の成果

1 概要

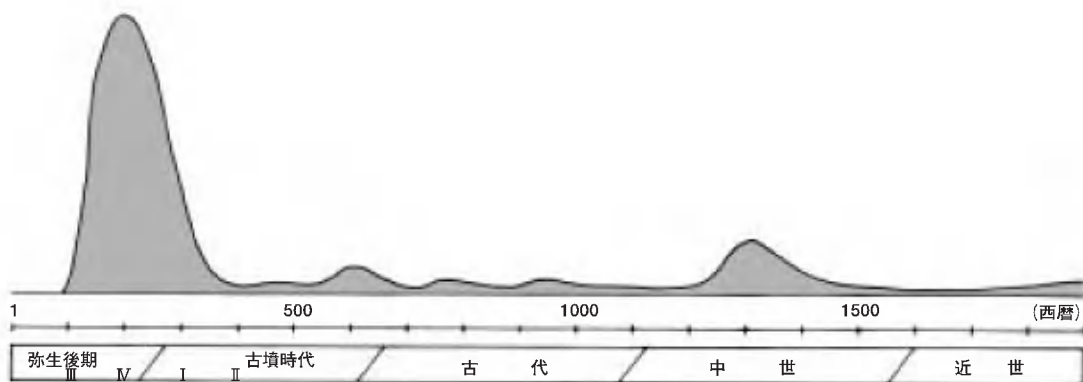
伊福定国前遺跡は、旭川下流の南西端に位置する沖積平野に立地する集落跡である。この遺跡では、今回報告の平成14年度の発掘調査（以下、H14調査）と平成6年度の発掘調査（H6調査⁽¹⁾）の2回の大きな発掘調査が行われ、ともに弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落跡、古代から中世にいたる集落跡が検出されている（第219図）。これらの集落の時期別の盛衰を模式的に示したものが第218図であるが、伊福定国前遺跡では、特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が多く検出されており、この時期に最盛期を迎えていることがわかる。ところが、古墳時代中期になると、集落は一端途絶え、その後は、以前のような大規模な集落は営まれなくなるものの、古墳時代後期・古代では小規模ながら集落が継続して営まれつつけている。中世では、H6調査で建物が検出されていることから、集落域の一部として利用されていたものと考えられる。

以下、伊福定国前遺跡の変遷を、時期ごとに検討したい。

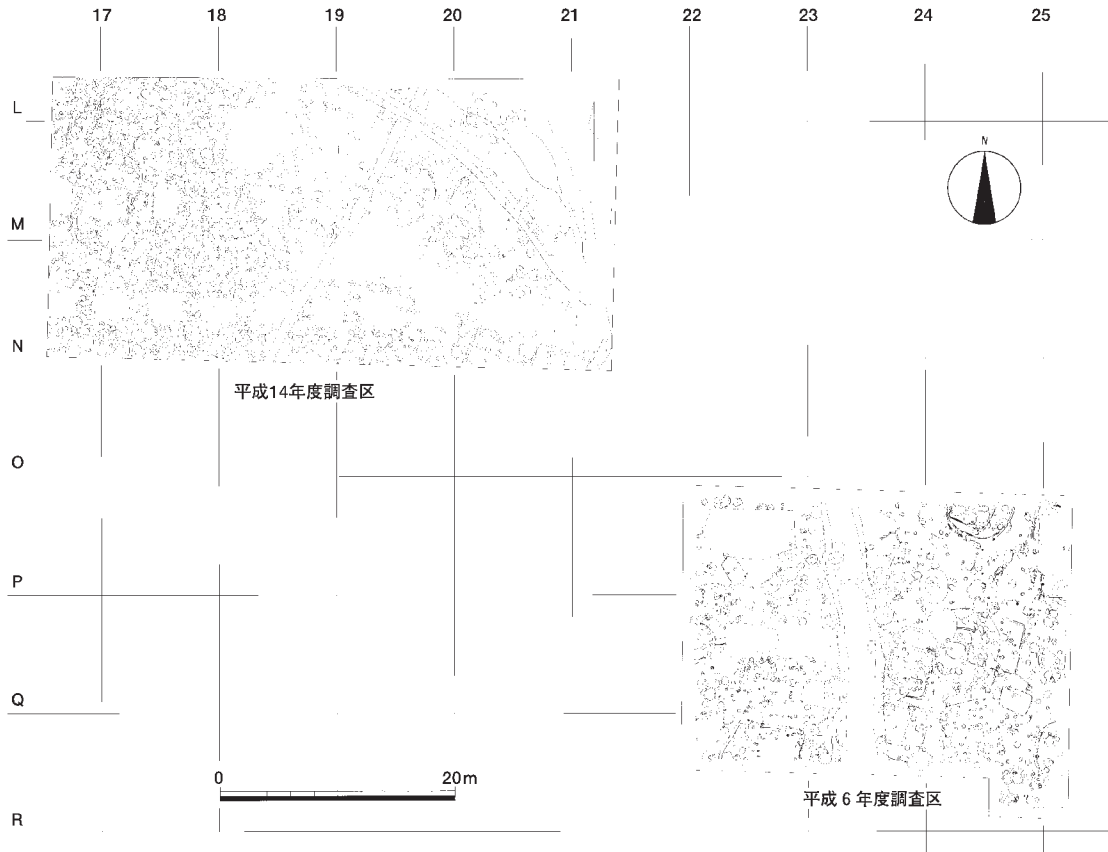
2 集落の変遷

集落の出現以前

伊福定国前遺跡において、遺構が出現する時期は伊福・弥・後Ⅰ期である。しかし、その数はわずかである。H6調査区では、土壙が1基検出されている。H14調査区では遺構はみられないものの、この時期に属すると考えられる高杯の破片（558）が出土している。伊福・弥・後Ⅱ期になると、H14調査区で出土した遺構はないが、H6調査区では土壙が数基検出されている。しかし、竪穴住居等の居住施設は見られないことから、人の定住はすすんでいなかったと考えられる。以上から、弥生時代後期前半段階の伊福定国前遺跡では、まだ人が定住できるだけの安定した微高地が形成されてい



第218図 遺構変遷模式図



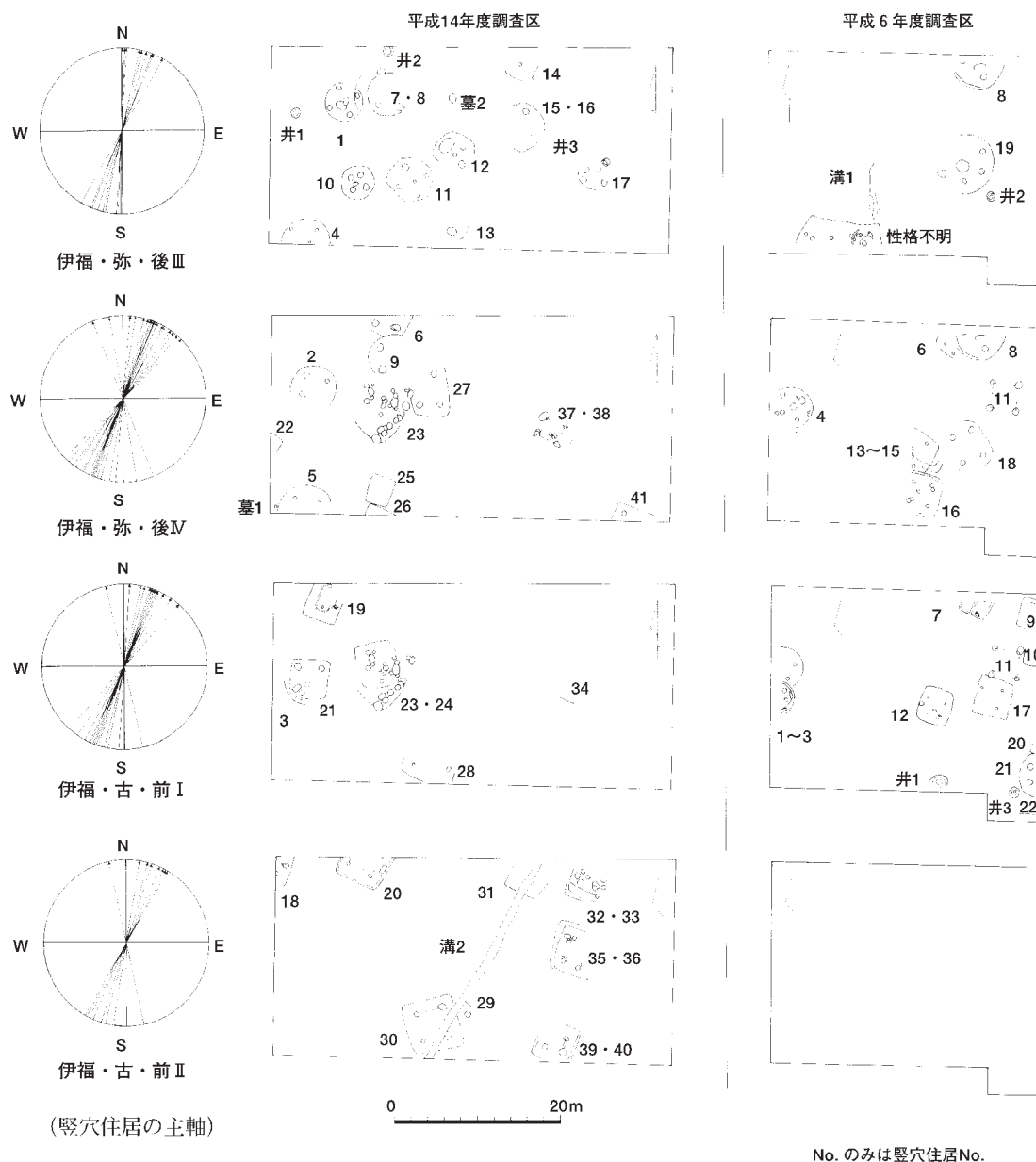
第219図 伊福定国前遺跡遺構全体図 (1/600)

かった可能性が高い。

伊福定国前遺跡の立地する微高地の形成過程については、土壌サンプルを採取し、珪藻分析や花粉分析等の自然科学分析を行っている。詳細は分析報告（パリノ・サーヴェイ株式会社「伊福定国前遺跡における古環境解析」）を参照されたいが、当遺跡の微高地の形成については、標高80～90cmに位置する117層付近を境にして、海浜干潟のような環境から、河川の影響をうける氾濫原あるいは後背湿地のような環境に変化していることが指摘されている。この117層とつづく118層については、放射性炭素による年代測定をおこなっており、2940±40、2760±60B.P.という年代を得ている。この年代は、当遺跡の北西に位置する津島遺跡の弥生前期水田層の放射性炭素年代に近く、117・118層の相対年代を弥生時代前期頃と推測することが可能である。このことから、当遺跡は弥生時代前期より以前の段階では、海浜に近い立地環境であったのが、弥生時代前期頃になると、旭川の支流の河口にひろがる、氾濫原のような地形に変化したと推測できる。その後、しばらくは不安定な環境だったものが、弥生時代後期後半期になって、ようやく、人が居住できるような安定した微高地になったものと理解できる。

伊福・弥・後Ⅲ期（第220図）

伊福定国前遺跡で、居住施設がみられるのは、伊福・弥・後Ⅲ期に入ってからである。この時期に属する遺構は、H6調査区とH14調査区を含めて竪穴住居14軒、井戸4基、土器棺墓1基等がある。



第220図 時期別遺構変遷図① (1/800)

竪穴住居の平面形は大部分が円形で、床面積はおよそ11~25㎡の範囲に属する。円形の竪穴住居ではあるが、住居に設置された主柱の位置から住居の主軸を計測すると、N-13°-Eを中心とした範囲に集中する。竪穴住居の残存状況は全体的に良好であり、特に柱穴に設置された柱基礎構造については詳細に観察できるものが多かった。柱の基礎構造については次節で分析する。井戸は4基検出された。いずれも素掘りの井戸である。そのうち、井戸3 (H14調査)は長径約150cm、深さ約220cmを測るが、内部から多くの遺物が出土した。中でも鉢210には赤色顔料が付着しており、水銀朱であるとの分析結果を得た。これに関して、土壌63から完形の石杵S21が検出され、底面に水銀朱が付着していた(志賀智史「伊福定国前遺跡出土の赤色顔料報告」参照)。出土した弥生土器は多く、特に土壌7、11、39、47では多くの土器が一括で出土した。

伊福・弥・後Ⅳ期（第220図）

伊福・弥・後Ⅳ期も、前段階に引き続いて多くの遺構、遺物が検出されている。この時期の遺構は、竪穴住居23軒、土器棺1基等がある。竪穴住居は、平面形が円形のものと同方形（隅丸方形）のものがみられ、ちょうどこの時期から、竪穴住居の平面形が円形から方形に変化しはじめる。竪穴住居の残存状況は、必ずしも良くはないが、柱穴の基礎構造については良好であった。特に伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の時期にかけての円形の竪穴住居の柱基礎構造の中には、人形の部材を敷設するものがあり、古墳時代にはあまり見られない特徴的な様相を呈していた。この時期の竪穴住居の主軸は、円形と方形の竪穴住居ともに、N-20°-Eを中心に分布するものが多い。

なお、伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期の弥生時代後期後半期に属する遺物は、他の時期に比べ非常に多く、この遺跡の隆盛を物語っている。伊福定国前遺跡では、伊福・弥・後Ⅲ期に集落が出現して、その直後から、非常に多くの人々が集住したものと考えられる。

伊福・古・前Ⅰ期（第220図）

伊福・古・前Ⅰ期に属する遺構は、竪穴住居18.5軒、井戸2基等がある。竪穴住居の大部分は平面形が方形のもので、竪穴住居3（H14調査区）や竪穴住居1～3・21（H6調査区）など、円形のものも若干見られる。方形を呈する竪穴住居には、竪穴住居19のように2本柱で構成され、高床部、方形土壇、敷石等の内部施設が観察できる残存状況の良いものがあった。しかし、大多数の竪穴住居は、4本柱である。この時期に属する竪穴住居の主軸はN-22°-E付近を中心に分布している。

また、土壇94では、一つの土壇内に壺、甕、高杯、器台、鉢と豊富な土器群が検出されたが、それらの中には、いわゆる搬入土器が多くみられた。他の遺構から出土した土器の中には搬入土器はあまりみられず、この土壇94の土器群はやや特異な様相を示している。

伊福・古・前Ⅱ期（第220図）

伊福・古・前Ⅱ期に属する遺構は、竪穴住居9.5軒等があるが、H6調査区では、この時期の竪穴住居は検出されていない。竪穴住居はいずれも方形のもので、床面積は約20～35㎡を測る。この時期の竪穴住居は全体的に残存状況が良好であり、竪穴住居20ではいわゆるベッド状遺構、方形土壇、中央穴などの施設が検出された。柱穴には、柱基礎構造をもたないものもみられ、基礎構造の簡略化がみられる。これらの竪穴住居の主軸はN-16°-Eを中心に分布する。これらの竪穴住居の中には、竪穴住居36、竪穴住居40など、多くの土器が一括して出土している。また、溝2は、H14調査区を北東から南西に流れる、ほぼ直線状に掘削された人工的な溝であり、主軸はN-30°-Eを測る。

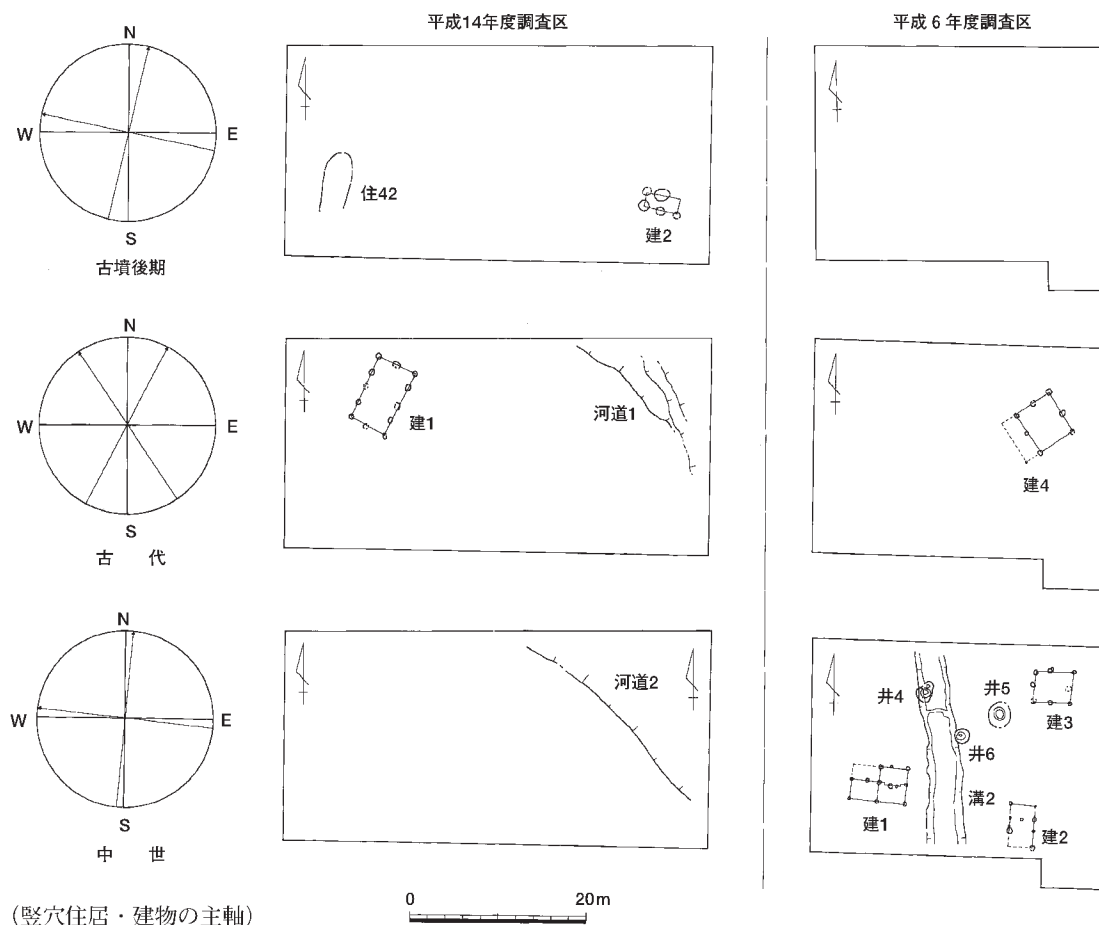
なお、この時代以降、古墳時代中期から後期前半期にかけては竪穴住居等の明確な遺構は検出していない。弥生時代後期後半からつづいてきた集落も、この段階をもって廃絶したものと推定できる。

古墳時代中期

古墳時代中期の遺構はみられない。しかし、中期後半期の須恵器片等が若干みられることから、周辺に小規模ながら、集落が存続していた可能性がある⁽⁴⁾。

古墳時代後期（第221図）

古墳時代後期の遺構は少なく、明確なものとして、竪穴住居42があるのみである。竪穴住居42は6世紀後半から7世紀前半にいたる竪穴住居で、埋土から多くの須恵器、土師器、製塩土器等が出土している。この竪穴住居42では、柱穴が検出されておらず、その建物構造は不明である。竪穴住居42の主軸はN-15°-Eである。他に掘立柱建物2があるが、判然としない。



第221図 時期別遺構変遷図② (1/800)

古代 (第221図)

古代に属する遺構は、掘立柱建物2棟を数える。掘立柱建物1 (H14調査区)は2間×4間を測る建物である。主軸はN-27°-Eを測る。この他に、H6調査区で、掘立柱建物4が報告されているが、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。なお、この時期から、調査区の北東部に河道1が出現する。河道1の流路の方向については不明な点も多いが、自然河道と考えられる。

中世 (第221図)

中世に属する遺構として、H14調査区では河道2と多数のピットがあげられる。河道2は古代の河道1につづくものである。H6調査区では掘立柱建物3棟と溝1条がある。掘立柱建物3棟は、その主軸がそれぞれ、N-84°-W、N-4°-E、N-88°-Wと主軸が東西南北に極めて近い方向を向いている。また、溝2の主軸もN-4°-Wで南北を指向している。遺物等の分析から、特に13世紀後半から14世紀にかけての遺物が多く、集落の存続時期を反映しているものと考えられる。

3 まとめ

ここまで、伊福定国前遺跡における遺構の変遷の概略を述べた。伊福定国前遺跡は、海岸線に近い沖積地に位置し、弥生時代後期に人々が居住を開始した遺跡である。そして、弥生時代後期後半期か

ら古墳時代前期にかけての遺構が集中して検出されたのが特徴である。その後、古墳時代後期・古代・中世では、遺構が検出されてはいるものの、その数は少ない。

なお、この伊福定国前遺跡の土地利用を理解するにあたって、遺構の主軸が興味深いデータを示している。弥生時代後期から古代まで、この遺跡の主要な遺構の主軸は真北から東に10～30度振った軸を中心に分布している。これは、当地に、N-10～30°-Eを主軸にすえるという、一定の規制があったものと思われる。溝2（H14調査区）などもこの方向に沿って掘削されていることから、この付近を流れる河道の流路等の自然地形に起因する地割とも考えられる。

ところが、中世になると、掘立柱建物や溝の主軸が南北あるいは東西の方位を指向しており、古代までのN-10～30°-Eを主軸とする土地利用形態に変化が見られる。この土地利用の変化は、岡山平野における条里制地割の成立の影響を受けている可能性が考えられ、当平野の土地利用の変遷を考える上で興味深いデータである。(金田)

註

- (1) 杉山一雄他 『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125 岡山県教育委員会 1998
- (2) 株式会社古環境研究所「津島遺跡における放射性炭素年代測定」『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173 岡山県教育委員会 2003 547～548頁
 津島遺跡では、水田1と水田3から検出された試料から放射性炭素年代測定がおこなわれ、2900年B.P前後の年代が報告されている。なお、水田1と水田3は層位等から弥生時代前期に比定されている。
- (3) 竪穴住居等の数について、二時期にわたっていたと考えられるものについては、一時期を0.5軒として数えている。例えば、伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期にかけての住居が1軒あった場合、伊福・弥・後Ⅲ期を0.5軒、伊福・弥・後Ⅳ期を0.5軒として数えている。
- (4) 伊福定国前遺跡の北東に位置する尾針神社南遺跡では、古墳時代中期後半期の須恵器を用いた祭祀跡が検出されている。
 岡山市教育委員会『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1995（平成7）年度』1997 32～33頁

第2節 「礎板」について

1 はじめに

今回の調査で、伊福定国前遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居の柱穴を中心に、いわゆる「礎板」と称される柱の沈下を防ぐための基礎構造が77基ほど検出された。県内でこれほど多くの「礎板」がひとつの遺跡で検出された報告事例はなく、伊福定国前遺跡の調査で、特筆すべき成果といえる。この遺跡において「礎板」の残存状況が良好であった理由として、まず、伊福定国前遺跡が、他の集落遺跡と比べて低い場所に立地していたことが上げられよう⁽¹⁾。このため、柱穴の底付近は、木製品等の有機物が比較的残存しやすい湿潤な環境におかれていたことが推測できる。しかし、中には保存状態が悪く、腐敗し、木質自体が消失しているものもあった。これらについては、柱穴を慎重に掘り下げ、木材から変化した粘質土の痕跡を検出することで、おおよその概要を把握することができた。

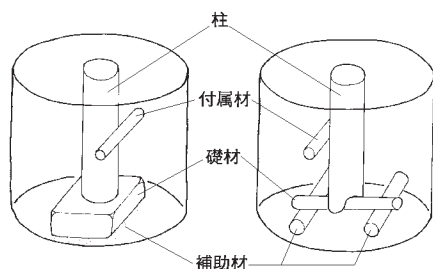
ここでは、伊福定国前遺跡で検出されたいわゆる「礎板」の発掘調査成果から、その分類と変遷について検討を行い、その背景について考察を加えたい。

2 用語の整理

ここまで、筆者は「礎板」という用語を使用してきたが、ここでいう「礎板」とは、「主に柱の沈下を防ぐため、柱穴内に設けられた柱の上台部分のことで、木製のものを」を指している。「礎板」については、様々な機能や形態があることが知られている。この柱の下に設ける基礎構造については、木島慎治⁽²⁾、石橋茂登⁽³⁾、山中敏史⁽⁴⁾らの研究があげられ、その形態や機能について検討がなされている。しかし、「礎板」の研究は、現在のところ、地域や時代に偏りがあり、通時的な調査研究が行われているとはいいがたく、また名称や呼称についても様々である。このような現状のなか、本来ならば、全国的な「礎板」の状況や建築学上での名称等を考慮しながら、本論の分析を始めるべきではあるが、著者の力量不足から、ここでは主に伊福定国前遺跡の「礎板」の形状をもとに、その用語を次のように定義したうえで、分析を行うこととしたい（第222図）。

[基礎構造]

石や木材等を用いて柱の沈下を防ぐ目的等で、柱穴内部に設けられた構造物。そのうち、木材を利用した柱の基礎構造を礎板、礎材として石材を利用した基礎構造を礎盤石とする。



[各部名称]

礎材：柱の重量を直接うける部材。

補助材：礎材の下に敷設し、柱の重量を間接的にうける部材。

付属材：柱の重量を直接うけるものではないが、柱の転倒防止等の目的で、柱穴内に設置される部材。

第222図 柱の基礎構造の各部名称

3 柱の基礎構造の分類

次に、伊福定国前遺跡で検出した柱の基礎構造の分類を行う。ここでは、基礎構造を分類する基準として、基礎構造に利用された部材の材質に着目する。

まず、基礎構造の礎材として、当遺跡では木材、石材、有機物が上げられ

る。そこで、次のようにアルファベットの大字を用いてA、B、C、O類と分類する（第2表）。

A類) 礎材に木材を使用しているもの。

A類の礎材については、使用されている木材の形状から次のように細分する。

A I) 角材や大形の木製部材を使用しているもの。

A II) 丸太材や割材のような細長い棒状の部材を使用しているもの。

B類) 礎材に石材を使用しているもの。

C類) 礎材に植物などの有機物を使用しているもの。

O類) 礎材に何も使用していないもの。

次に、補助材であるが、当遺跡では、木材、石材、有機物を利用している。そこで、a、b、c、o類とアルファベットの小文字を用いて次のように分類する。

a類) 木材を使用しているもの。

b類) 石材を使用しているもの。

c類) 植物などの有機物を利用しているもの。

o類) 何も使用していないもの。

なお、補助材に複数の部材が使用されている場合、その材質にあわせて小文字を並べて使用する（例えば、A I a aと表記した場合、大形の部材を使用する礎材（A I）の下に、木材の補助材（a）を使用し、さらにその下も木材の補助材（a）を使用している基礎構造を意味する。）

以上の分類をもとに、伊福定国前遺跡で検出された基礎構造を模式的に示したものが第223図である。次にこれについて説明する。

A類) 礎材に木材を使用するもの。

A I o：礎材として大形の木製部材や角材を使用し、補助材を使用しないものである。例として竪穴住居16のP3・P4があげられる。

A I c：礎材として大形の木製部材や角材を使用し、その下に補助材として、植物質有機物を敷設するものである。例として竪穴住居5のP1・P2があげられる。そのうち、P1の植物質有機物については分析を行い、糊殻との同定結果がでている。

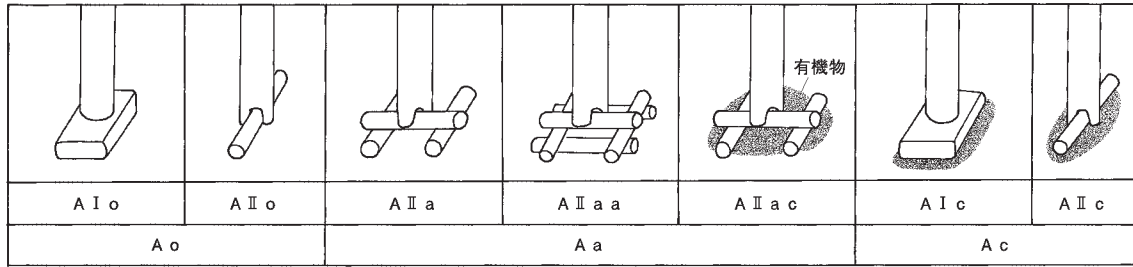
A II o：礎材として棒状の木材を使用し、補助材をもたないもの。礎材の本数は1本が多い。例として竪穴住居11のP1～P4などがある。一番多くみられるタイプの基礎構造である。

A II a：礎材として棒状の木材を使用し、補助材として、その下に木材を敷設するものである。その配置は、礎材の両端に補助材が置かれることから「H」字形をなすものが多い。例とし

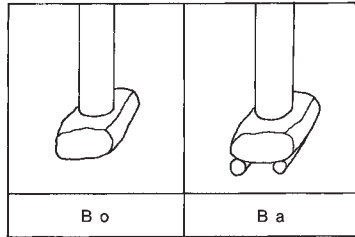
第2表 柱の基礎構造の分類

礎材 \ 補助材	なし (o)	木材 (a)	有機物 (c)
木材 (A)	A o	A a · A a a	A c
石材 (B)	B o	B a	—
有機物 (C)	C o	—	—
なし (O)	O o	—	—

A類：礎材に木材を使用するもの



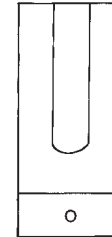
B類：礎材に石材を使用するもの



C類：礎材に有機物を使用するもの



O類：何もしないもの



第223図 伊福定国前遺跡の柱の基礎構造分類模式図

て豎穴住居1のP1～P4などがあり、A II oについて多いタイプである。

A II a a：A II aの下に、さらに木製の補助材を設けるものである。豎穴住居7～9のP4で検出されているが、詳細な構造は不明である。

A II a c：A II aの下に、補助材として植物質有機物を敷設するもの。豎穴住居17のP3がこれに該当する。

A II c：礎材として棒状の木材を使用し、さらにその下に、補助材として、植物質有機物を敷設するものである。例として豎穴住居23・24のP11がある。

B o：礎材として礎盤石を置くものである。例として豎穴住居29のP3等がある。

B a：礎盤石の下に棒状の木材を敷設するものである。豎穴住居28のP2が相当する。P2では礎盤石の下に2本の木製の棒状補助材を使用している。

C o：柱の下に、礎材として有機物を敷くものである。例として豎穴住居32・33のP2がある。この植物質有機物については分析を行い、粉殻との分析結果を得ている。

O o：柱のみで、基礎構造を設けないもの。例として豎穴住居40のP1・P2がある。これらの柱穴の中には木製の柱の基底部が残存していたが、その下からは構造物は何も発見されていない。

4 伊福定国前遺跡における柱の基礎構造の変遷

以上の分類をもとに、伊福定国前遺跡における柱の基礎構造の変遷について考察する。伊福定国前遺跡では、H14年調査区で合計77基、H6年調査区で合計約10基の基礎構造を持つ柱穴が検出されている。⁽⁵⁾ 今回の分析は、表にあるように、H14年調査区で出土した豎穴住居に付随する合計96基の柱穴（礎板の形状が不明なものはのぞく。）をもとに分析を行う。

第3表は、柱の基礎構造表をもとに、柱穴を時期ごとに分類して集計したものである。これをもと

に、以下、各時期の概要を述べる。

伊福・弥・後Ⅲ期に属する柱穴は計25基を数える。柱穴全体の約8割をしめる20.5基の柱穴に何らかの基礎構造がみられる。もっとも多いのはAⅡoとAⅡaであり、いずれも柱の下に棒状の礎材を置くものである。AⅡoの使用例としては、竪穴住居11があげられる。竪穴住居11は、床面積がおよそ20㎡の住居で、四基の柱穴の底面に割材や丸太材を1本ずつ敷いている。中にはP1、P2のように「く」の字状に折れ曲がった礎材があり、相当の重量が礎材にかかっていたことを想像させる。AⅡaの使用例としては、竪穴住居1がある。竪穴住居1は床面積が約15㎡のやや小形の住居であるが、4本の柱穴の底面すべてで、丸太材等を「H」字形に配置した基礎構造が検出されている。

伊福・弥・後Ⅳ期に属する柱穴は29基を数える。そのうち、全体の72%に相当する柱穴21基で基礎構造が確認されている。基礎構造の中でもっとも多いのはAⅡaで、棒状の部材を柱穴底に「H」字形に配置するものである。しかしながら、礎材の加工の度合あるいは配置の状況は、前段階に比べると、やや乱雑な感が否めない。

この時期の礎板の特徴として、まず、当遺跡で発見されたAⅠoとAⅠcタイプの基礎構造の約3分の2がこの時期に属しており、特徴的な様相を見せている。AⅠoとAⅠcタイプはともに、角材などの大形の木材を礎材として使用するものであり、竪穴住居5（伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ期）、竪穴住

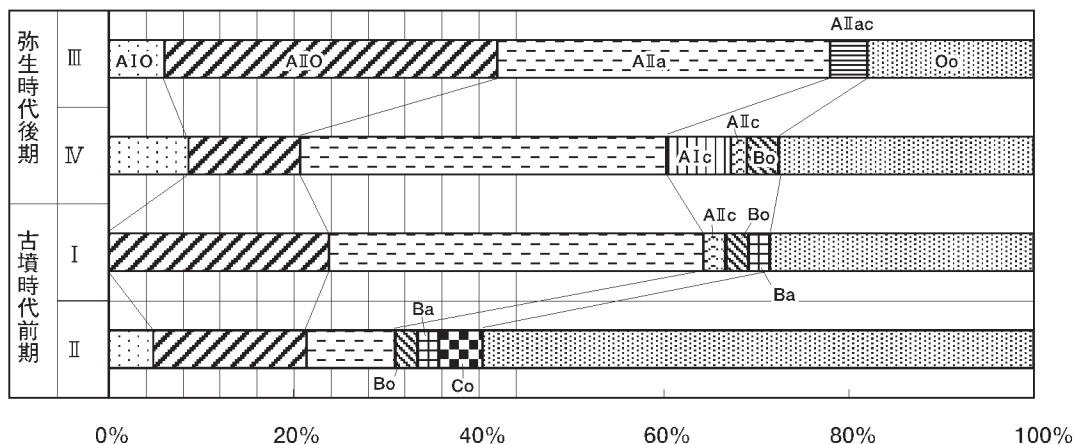
第3表 柱の基礎構造の変遷

	弥生時代後期				古墳時代前期			
	Ⅲ		Ⅳ		Ⅰ		Ⅱ	
	検出数	%	検出数	%	検出数	%	検出数	%
AⅠo	1.5	6%	2.5	9%	0	0%	1	5%
AⅡo	9	36%	3.5	12%	5	24%	3.5	17%
AⅡa	9	36%	11.5	40%	8.5	40%	2	10%
AⅡaa	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
AⅡac	1	4%	0	0%	0	0%	0	0%
AⅠc	0	0%	2	7%	0	0%	0	0%
AⅡc	0	0%	0.5	2%	0.5	2%	0	0%
B o	0	0%	1	3%	0.5	2%	0.5	2%
B a	0	0%	0	0%	0.5	2%	0.5	2%
C o	0	0%	0	0%	0	0%	1	5%
O o	4.5	18%	8	28%	6	29%	12.5	60%
合計	25	100%	29	100%	21	100%	21	100%

注
伊福定国前遺跡の平成14年度調査区のみを対象としている。

礎板の形態で、詳細が不明なものは対象としていない。

2時期にまたがるものは検出数/2で計算している。



居16（伊福・弥・後Ⅳ期）、竪穴住居41（伊福・弥・後Ⅳ期）にみられる。中でも竪穴住居16では4本柱中3本で、長さ43.9～57.2cm、厚さ6.9～10.2cmの重厚な礎材が使用されている。また、竪穴住居5は比較的丁寧に加工作したケヤキ（W7・W8）を礎材として使用し、さらにその下に初殻を敷き詰めているなど、手のこんだ様子がみられる。

伊福・古・前Ⅰ期に属する柱穴は21基を数える。そのうち、約7割の柱穴の15基で基礎構造がみられる。これらの基礎構造の中でもっとも高い割合を占めるのがAⅡaで、いわゆる「H」字形の配置をとるものである。しかしながら、この時期になると、竪穴住居19（復元床面積約20㎡）のように、礎板をもたない方形の竪穴住居も出現する。

伊福・古・前Ⅱ期に属する柱穴は21基を数える。そのうち、基礎構造をもたないものが12.5基で、全体の6割を占めるようになる。基礎構造をもたない柱穴の割合は、伊福・弥・後Ⅲ期から伊福・古・前Ⅰ期までは全体の3割以下にとどまっていたことを考えると、これは大きな変化である。基礎構造をもつ柱穴ではAⅠoやAⅡaタイプなどの基礎構造がみられる。しかし、使用された木材の大きさなどをみると、この段階の柱の基礎構造は、前段階までの基礎構造と比較すると、その構造ははっきりとしたものとはなっていない。

5 竪穴住居における基礎構造の配置

竪穴住居の柱穴内における基礎構造の配置方法であるが、それは、礎材の主軸の方向で2つに分類することが可能である。第1は、礎材の主軸方向が竪穴住居の中心方向に向くもの（求心配置）で、第2は礎材の主軸の方向が、竪穴住居の中心から放射状にのびる線に直交するように配置するもの（直交配置）である（第224図）。前者の求心配置をなすものとして、竪穴住居1や竪穴住居11がある。また、後者の直交配置をなすものとして、竪穴住居16がある。

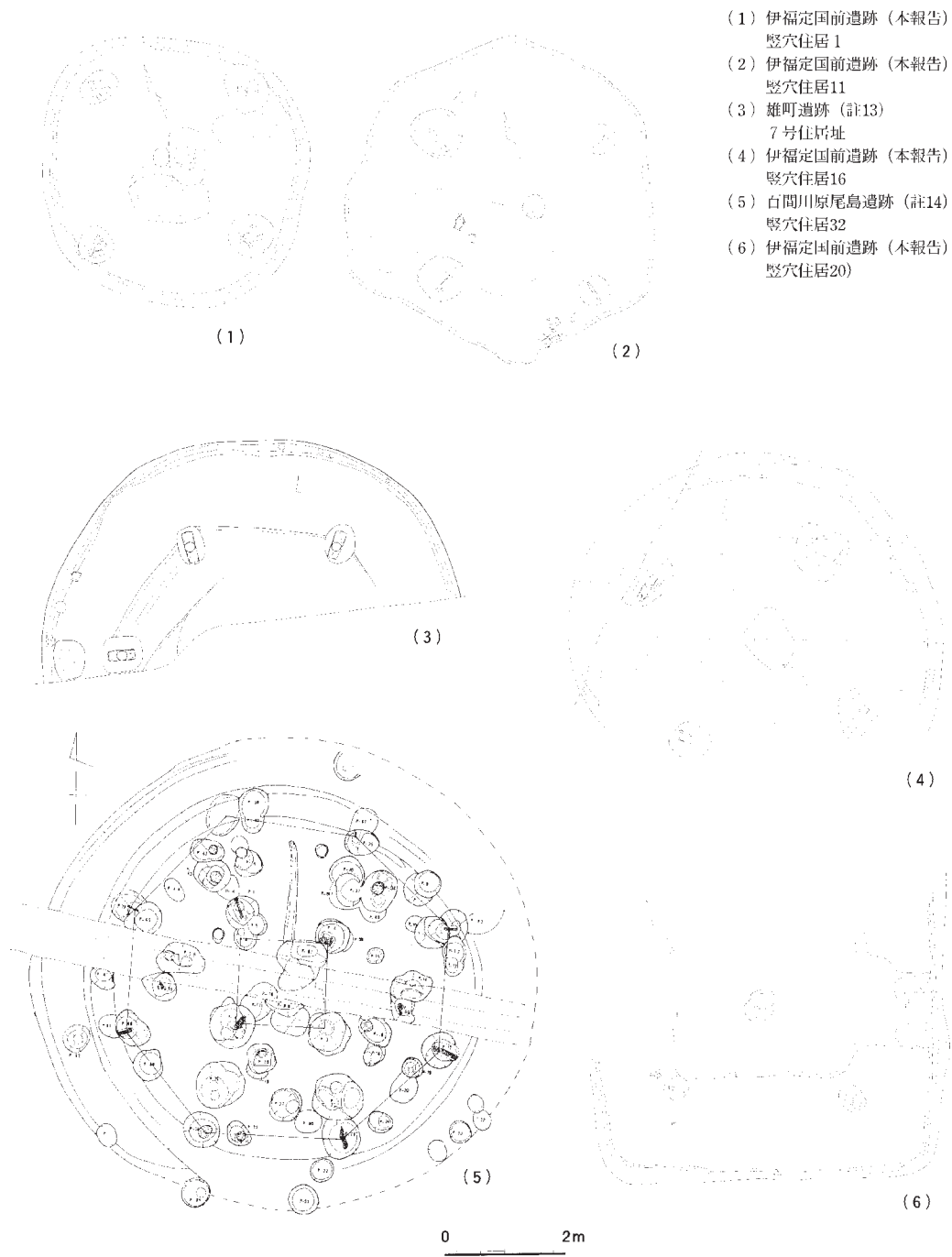
これらの配置形態は主に円形の竪穴住居を中心としたものである。その多くは求心配置であり、直交配置は少ない。他方、方形の竪穴住居の配置については判然としない部分が多いが、竪穴住居20の礎材の主軸から壁方向に規制されるような要素もみられる。

6 柱の基礎構造の変遷

以上の分析から、伊福定国前遺跡にみられる弥生時代後期から古墳時代前期の柱基礎構造の変遷について、その特徴をまとめると次のようになる。

まず、弥生時代後期から古墳時代前期にいたるにつれて、基礎構造をもつ柱穴の割合が減少する傾向があることである。弥生時代後期後半期では、柱穴のうち、およそ7～8割のものが基礎構造をもっていたのに対し、伊福・古・前Ⅱ期の段階では、それは4割程度にまで減少している。

次に、弥生時代後期後半期から古墳時代前期にいたるにつれて、基礎構造自体が簡略化していく様相が見てとれる。弥生時代後期（特にⅣ期を中心とする時期）では、大形の木材を礎材として使用したAⅠタイプの基礎構造がしばしばみられる。それに対し、古墳時代になると同様のAⅠタイプの基礎構造はあまりみられない。また、棒状の木材を使用するAⅡタイプについても、弥生時代後期の礎材の中には、比較的大きいものが存在するのに対し、古墳時代前期では細くて短いものが多くなる。このことから、弥生時代後期から古墳時代前期にいたるにつれて、柱の基礎構造は、全体として、その数量および質とともに簡略化していることがわかる。



第224図 竪穴住居にみる礎板の検出状況 (1/100)

7 柱の基礎構造の簡略化の背景

それでは、この基礎構造の簡略化には、どのような背景があったのであろうか。

まず考えられるのは、建物の上屋構造（小屋組）の軽量化である。実際、竪穴住居の柱にかなりの重量がかかっていたことは、礎材に使用された木材が重量に耐えられず、破損している例からもうかがえる。前述した竪穴住居11（伊福・弥・後Ⅲ期）では、4本がすべてAⅡ○タイプで、そのうち、2本の礎材が折れていた。この竪穴住居11は床面積が約20㎡を測る円形の住居であるが、同様の規模をもつ方形の竪穴住居40（伊福・古・前Ⅱ期）では、柱の基礎構造自体が検出されていない。また、この竪穴住居11より規模の大きい伊福・古・前Ⅱ期に属する竪穴住居20（復元床面積約30㎡）は、竪穴住居11と同様のAⅡ○タイプの基礎構造をもつが、礎材の長さは約20cmで、竪穴住居11の約40cmに比べると半分ほどの大きさしかない。このことは、柱の基礎構造は必ずしも、竪穴住居の床面積によってのみ決まるものでもなく、竪穴住居の上屋構造等を中心とする、さまざまな諸条件によって決定されることを意味している。このように考えると、柱基礎構造の簡略化の背景には、竪穴住居の上屋構造（小屋組）が以前に比べて軽くなったといった構造上の要因があったといえ、特に伊福・古・前Ⅱ期に、その傾向が一層顕著になったものと理解することが可能であろう。

このような竪穴住居における上屋構造（小屋組）の軽量化については、様々な要因が考えられる。まずは、この弥生時代後期から古墳時代前期という時期は、ちょうど竪穴住居の平面形が円形から方形へと変化する時期にあたる。これは単に平面形の変化というのみならず、これに付随して上屋構造についても変化があったと想定することは何ら難しいことではない。

次に考えられるのは、屋根の葺き方の問題である。竪穴住居の屋根に上を用いる上葺きの例については、県下でも吉野口遺跡の竪穴住居⁽⁶⁾12や立田遺跡の竪穴住居⁽⁷⁾3などで報告がなされている。また、弥生時代中期の門前池遺跡の25号住居⁽⁸⁾や小中遺跡の2区10号住居址⁽⁹⁾では、床面に垂木が放射状に間隔をあけずに密に配列していることから、宮本長二郎は、これらの竪穴住居には土葺きが採用されていたとの可能性を言及している。このように竪穴住居の屋根を土で葺くためには、その重量に耐えうる小屋組をもたねばならず、おのずと上屋構造は重くなると想定される。そのことを示すかのように、高塚遺跡では弥生時代の竪穴住居の柱穴底に、柱の沈下した痕跡がみられ、調査担当者はその上屋構造が重かったことを推測している⁽¹⁰⁾。一方、草葺きの痕跡については、材質が残存しにくいといった性質上、詳細なことは不明な部分が多い。この点について、亀山行雄は、県内で検出された焼失住居の垂木の間隔が、古墳時代中期以降の竪穴住居では広くなることから、土葺きから草葺きへの移行を推測している⁽¹¹⁾。もしそうであれば、竪穴住居の上屋構造は飛躍的に軽量化が図られたと考えられ、それは、当然、柱の基礎構造にも影響を与えたものと推測できる。

以上の研究や報告事例から推測するならば、伊福定国前遺跡における柱の基礎構造の簡略化の背景には、このような上屋構造の変化が関係していると結論づけることが可能であろう。

8 最後に

発掘調査において、住居や建物の復元は重要な課題である。しかし、実際、発掘調査ではその上屋構造が残存していない例が多いため、その復元は困難と言わざるを得ない。ここで扱った柱穴の基礎構造は、地下構造ではあるものの、建物の上屋構造を反映しており、その分析は、住居や建物の復元

を考える上で重要な作業と考える。今後、残存状況のよい基礎構造のデータの蓄積がすすみ、全国的な分析が進展すれば、弥生時代から古墳時代にかけての住居形態の地域差などが明らかになってくる可能性がある。今後の研究の進展が期待される分野である。(金田)

註

- (1) 比較のため、伊福定国前遺跡と津島遺跡の竪穴住居床面海拔高を比較すると、津島遺跡がおよそ220～260cm前後であるのに対し、伊福定国前遺跡は標高120～160cmであり、両者にはおよそ1mの標高差がある。
- (2) 木島慎治「弥生時代の掘立柱建物における立柱技法—佐賀平野における検出例を中心に—」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 1994 109～125頁
- (3) 石橋茂登「掘立柱の根固めについて—平城京を中心として—」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所 2002 305～320頁
- (4) 山中敏史「掘立柱の基礎固め」『古代の官衙遺跡』I 遺構編 奈良文化財研究所 2003 56～57頁、211～225頁
- (5) 杉山一雄他『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125 岡山県教育委員会 1998
- (6) 草原孝典『吉野口遺跡』岡山市教育委員会 1997
- (7) 松本和男他『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県教育委員会 1999
- (8) 池畑耕一他『門前池遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9 岡山県教育委員会 1975
- (9) 栗野克己「小中遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財調査報告7 岡山県教育委員会 1975
- (10) 宮本長二郎「住居」『岩波講座 日本考古学4』岩波書店 1986 175～216頁
- (11) 江見正己他『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会 2000
- (12) 亀山行雄「古墳時代の竪穴住居」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財調査報告書104 岡山県教育委員会 1996
- (13) 正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1973
- (14) 高畑知功他『百間川原尾島遺跡』2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県教育委員会 1984

第4表 柱基礎構造観察表

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴番号	柱穴 ・柱穴形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎構造の有無	基礎構造					
					分類	概略	礎材(掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値(cm)	補助材(掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値(cm)	付属材(掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値(cm)	時期
竪穴住居1	・円形 ・4.5 ・14.2	P1	・楕円形 ・65×48 ・60 ・68	有	AⅡ a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字に配置 ・柱痕跡	礎材(W1) ・丸太材 ・コナラ属アカガシ亜属 ・37×6.2×4.3	補助材(W2) ・丸太材(二股) ・コナラ属アカガシ亜属 ・30.2×17.6×4.3 補助材(W3) ・丸太材 ・コナラ属クヌギ節 ・30.7×6×5.1	なし	伊福・弥・後Ⅲ
		P2	・円形 ・83×70 ・68 ・60	有	AⅡ a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字に配置 ・柱痕跡	礎材(P2-a) ・不明 ・コナラ属コナラ節 ・推定約20	補助材(P2-b) ・不明 ・コナラ属コナラ節 ・残存約15 補助材(P2-c) ・半裁 ・コナラ属クヌギ節 ・残存33	なし	伊福・弥・後Ⅲ
		P3	・円形 ・72×70 ・74 ・54	有	AⅡ a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字に配置 ・柱痕跡	礎材(P3-a) ・不明・木鑑定 ・推定約25	補助材(P3-b) ・不明・木鑑定 ・推定約35 補助材(P3-c) ・不明・木鑑定 ・推定約30	なし	伊福・弥・後Ⅲ
		P4	・円形 ・62×58 ・71 ・57	有	AⅡ a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字に配置 ・柱痕跡	礎材(W4) ・丸太材(二股材) ・コナラ属コナラ節 ・残存35.9×15.1×3.8	補助材(W5) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・28.9×5.2×3.7 補助材(W6) ・丸太材(二股材) ・コナラ属コナラ節 ・31.4×残存9.3×4.8	なし	伊福・弥・後Ⅲ
竪穴住居2	・円形 ・5.08 ・20.26	P1	・円形 ・80×72 ・84 ・66	有	不明	・礎材2点 ・補助材1点 ・付属材2点 ・柱痕跡	礎材(P1-b) ・不明 ・マツ属複雑管束亜属 ・不明 礎材(P1-c) ・割材 ・マツ属複雑管束亜属 ・推定約20	補助材(P1-e) ・割材 ・マツ属複雑管束亜属 ・推定約35	付属材(P1-a) ・割材 ・マツ属複雑管束亜属 ・不明 付属材(P1-d) ・割材 ・マツ属複雑管束亜属 ・残存19	伊福・弥・後Ⅳ
		P2	・円形 ・56×54 ・88 ・62	有	AⅡ a?	・補助材1点 ・柱痕跡	不明	補助材(P2-a) ・不明・木鑑定 ・推定約30	なし	伊福・弥・後Ⅳ
		P3	・円形 ・75×70 ・87 ・63	有	AⅡ a	・補助材2点	不明	補助材(P3-a) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定長約40 補助材(P3-b) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・残存約30	なし	伊福・弥・後Ⅳ
竪穴住居3	・円形 ・5.9 ・27.33	P1	・不整形 ・68×60 ・99 ・51	無	O o	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅰ
		P2	・円形 ・66×65 ・94 ・56	無	O o	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅰ
竪穴住居4	・円形 ・5.45 ・21.93	P1	・円形 ・46×37 ・78・30	有	AⅡ o	・礎材1点 ・掘り直し	礎材(P1-a) ・割材・シイ属 ・推定約20	なし	なし	伊福・弥・後Ⅲ
		P2	・楕円形 ・53×44 ・80・28	有	AⅡ o	・礎材1点 ・柱痕跡 ・掘り直し	礎材(P2-a) ・割材・クスノキ科 ・残存35×残存4.4 ×残存3.5	なし	なし	伊福・弥・後Ⅲ
竪穴住居5	・円形 ・6 ・28.26	P1	・円形 ・推定44×38 ・30 ・90	有	AⅠ c	・礎材1点 ・補助材は有機物 ・付属材1点	礎材(W7) ・割材掘出し ・ケヤキ ・32.1×9.3×7.6	補助材 ・有機物・樹殻	付属材(P1-a) ・不明 ・ツブラジイ ・推定長25	伊福・弥・後Ⅳ

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基 礎 造 の 有 無	基 礎 構 造						
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	時期	
竪穴 住居5	・円形 ・6 ・28.26	P2	・楕円形 ・66×41 ・44 ・76	有	A I c	・礎材1点 ・補助材は 有機物 ・付属材 5点以上 ・柱痕跡	礎材 (W8) ・割材割出し ・ケヤキ ・31.7×8.5×7.7	補助材 ・有機物 未鑑定	付属材 (P2-a) ・割材 ・ヤブツバキ ・推定約20 付属材 (P2-b) ・不明 ・未鑑定 ・推定約23 付属材 (P2-c) ・不明 ・未鑑定 ・推定約20 付属材 (P2-d) ・割材 ・散孔材 ・25.7×8.2×2.9	伊福・ 弥・後IV	
竪穴 住居6	・円形 ・不明 ・不明	P1	・円形 ・推88×推72 ・82 ・40	有	B o	・石材使用	礎材 ・石材	なし	なし	伊福・ 弥・後IV	
		P2	・円形 ・推87×72 ・70 ・52	有	A II a	・補助材2点が 並行して残存	不明	補助材 (W9) ・芯持割出し ・コナラ属コナラ節 ・41×10.1×4.6 補助材 (W10) ・芯持割出し ・コナラ属コナラ節 ・38×9.6×4.5	なし	伊福・ 弥・後IV	
		P3	・楕円形 ・87×65 ・64 ・58	有	A II a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字に配置	礎材 (W12) ・割材割出し ・ツブラジイ ・41.6×10.1×7	補助材 (W11) ・割材 ・ツブラジイ ・残存34.2×7.3×4.3 補助材 (W13) ・割材 ・ツブラジイ ・残存44.5×8.1×3.1	なし	伊福・ 弥・後IV	
竪穴住居 7～9	・円形 ・約5 ・約20	P1	・楕円形 ・推110×90 ・45 ・90	無	O o	—	—	—	—	伊福・弥・ 後III～IV	
		P2	・円形 ・95×93 ・90 ・45	有	A II a	・礎材1点 ・補助材2点 ・付属材? 1点 ・H字に配置	礎材 (P2-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約30	補助材 (P2-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約55 補助材 (P2-c) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約50	付属材 (P2-d) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約13	伊福・弥・ 後III～IV	
		P3	・円形 ・推100×推85 ・75 ・60	有	不明	・形状不明 ・付属材2点か?				付属材? (P3-a) ・羊糞 ・タブノキ ・推定約20 付属材 (P3-b) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約8	伊福・弥・ 後III～IV
		P4	・円形 ・70×70 ・74 ・61	有	A II a?	・本材7本以上 ・礎材1点? ・補助材6点? ・付属材1点?	礎材 (P4-d) ・丸太材 ・コナラ属クヌギ節 ・残存約24	補助材 (P4-b) ・不明 ・未鑑定 ・推定約45 補助材 (P4-c) ・割材 ・コナラ属クヌギ節 ・推定約40 補助材 (W14) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・31.1×6.6×6.4 補助材 (P4-e) ・割材 ・コナラ属クヌギ節 ・推定約20 補助材 (P4-f) ・割材 ・コナラ属クヌギ節 ・残存約20 補助材 (P4-g) ・割材 ・コナラ属クヌギ節 ・残存約42	補助材 (P4-a) ・割材 ・コナラ属クヌギ節 ・推定約20	伊福・弥・ 後III～IV	
		P5	・円形 ・推80×78 ・80 ・55	有	A II a	・補助材2点が 並行して残存 ・H字配置か? ・P6に切られる	不明	補助材 (P5-a) ・不明 ・未鑑定 ・推定約20 補助材 (P5-b) ・不明 ・未鑑定 ・推定約20	なし	伊福・弥・ 後III～IV	

第4章 まとめ

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・直径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎 構造 の有無	基 礎 構 造					
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	時期
竪穴住居 7～9	・円形 ・約5 ・約20	P6	・円形 ・97×91 ・80 ・55	有	AⅡa	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字配置か? ・P7にきられる ・柱根	礎材 (P6-a) ・不明 ・未鑑定 ・推定約95	補助材 (P6-b) ・丸太材 ・シイ属 ・推定約55 補助材 (P6-c) ・丸太材 ・シイ属 ・推定約55	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
		P7	・円形 ・105×100 ・81 ・54	有	AⅡa	・礎材1点? ・補助材2点 ・H字配置か?	礎材? (P7-a) ・不明 ・未鑑定 ・推定約13	補助材 (P7-b) ・不明 ・未鑑定 ・推定約15 補助材 (P7-c) ・不明 ・未鑑定 ・推定約40	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
竪穴 住居10	・円形 ・3.67 ・10.98	P1	・円形 ・72×71 ・92 ・48	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P2	・円形 ・72×70 ・95 ・45	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P3	・円形 ・85×75 ・75 ・65	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P4	・円形 ・72×71 ・85 ・55	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居11	・円形 ・5.22 ・19.5	P1	・円形 ・推87×80 ・66 ・56	有	AⅡo	・礎材1点 ・屈曲	礎材 (W15) ・半裁 ・タブノキ ・残存53.8×8.5×5.1	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P2	・円形 ・推52×推48 ・76 ・47	有	AⅡo	・礎材1点 ・屈曲	礎材 (P2-a) ・割材 ・タブノキ ・推定約40	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P3	・円形 ・推50×推48 ・67 ・56	有	AⅡo	・礎材1点	礎材 (W16) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・34.8×4.7×3	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P4	・円形 ・推75×75 ・75 ・48	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕	礎材 (P4-a) ・丸太材 ・タブノキ ・推定約40	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居12	・円形 ・3.8 ・11.36	P2	・円形 ・54×推45 ・88 ・46	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (P2-a) ・割材 ・シイ属 ・残存約17	なし	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
		P3	・円形 ・84×73 ・80 ・54	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕	礎材 (W17) ・割材 ・クリ ・51×8.5×5.8	なし	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
竪穴 住居13	・隅丸方形? ・不明 ・不明	P1	・不整楕円形 ・122×90 ・100 ・52	有	AⅡa	・礎材2点以上? ・補助材2点 ・H字配置か?	礎材 (P1-a1) ・不明 ・サクラ属 ・不明 礎材 (P1-a2) ・不明 ・コナラ属アカガシ朝属 ・不明	補助材 (P1-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約38 補助材 (P1-c) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約25	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居14	・隅丸方形 ・3.4 ・10.38	P1	・円形 ・推44×36 ・86 ・44	有	AⅡo?	・礎材1点	礎材 (P1-a) ・板状? ・同定不可 ・推定約20×推定約15	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居15	・円形 ・5.58 ・24.44	P1	・円形 ・76×推70 ・52 ・68	不明	不明	・竪穴住居16P2 による掘り直し	不明	不明	不明	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P2	・円形 ・不明	不明	不明	・竪穴住居16P3 による掘り直し	不明	不明	不明	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居16	・円形 ・5.85 ・26.86	P1	・楕円形 ・100×推75 ・79 ・65	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (W18) ・半裁掘出し ・コナラ属コナラ節 ・57.4×15.2×7.2	なし	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
		P2	・不整円形 ・100×91 ・74 ・70	有	AⅡc?	・有機物層のみ 残存	不明	補助材 (P2-a) ・有機物 ・未鑑定	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
		P3	・円形 ・85×不明 ・90 ・54	有	AⅡo	・礎材1点	礎材 (W19) ・半裁掘出し ・コナラ属コナラ節 ・43.9×15.7×6.9	なし	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ
		P4	・円形 ・70×58 ・76 ・68	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (W20) ・芯持掘出し ・コナラ属コナラ節 ・54.2×17.2×10.2	なし	なし	伊福・弥・ 後Ⅲ～Ⅳ

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎 構造 の有無	基礎構造					
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	時期
竪穴 住居17	・円形 ・不明 ・不明	P1	・楕円形 ・50×24 ・72 ・68	有	AⅡo	・礎材1点	礎材 (W21) ・割材割出し ・マツ属杣根菅束亜属 ・46.9×8.8×7.5	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P2	・円形 ・88×84 ・69 ・71	有	AⅡo	・P3 (旧) ・礎材1点	礎材 (W23) ・丸太材 ・コナラ属アカガシ亜属 ・42.5×7×6.2	なし	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P3	・楕円形 ・90×不明 ・85 ・55	有	AⅡa	・礎材? ・補助材2点 ・H字配置か? ・柱痕	礎材 (P3-a) ・不明・未鑑定 ・不明	補助材 (W22) ・割材 ・ヤマグワ ・45.2×7.7×6.9 補助材 (P2-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・残存約15	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P4	・円形 ・88×84 ・69 ・71	有	AⅡac	・P4 (新) ・礎材は不明 ・補助材2点 ・底に有機物層	不明	補助材 (P4-a) ・不明・未鑑定 ・推定約15 補助材 (P4-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約47	付属材 ・有機物?・不明	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P5	・円形 ・70×54 ・89 ・51	有	AⅡa	・礎材は不明 ・補助材2点 ・H字配置か?	不明	補助材 (W24) ・丸太材 ・コナラ属アカガシ亜属 ・41.3×6.4×5.3 補助材 (P5-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約30	なし	伊福・ 弥・後Ⅲ
		P6	・円形 ・84×不明 ・92・48	有	AⅡac?	・形状不明 ・底に有機物層?	礎材? ・不明・未鑑定 ・不明	補助材? ・有機物 ・未鑑定 補助材 ・不明 (粘土化)・未鑑定 ・不明 補助材 ・不明 (粘土化)・未鑑定 ・不明	不明	伊福・ 弥・後Ⅲ
竪穴 住居18	・方形 ・不明 ・不明	P1	・円形 ・50×44 ・82・52	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (P1-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・不明	なし	なし	伊福・ 古・前Ⅱ
竪穴 住居19	・長方形 ・5.15 ・19.7	P1	・円形 ・40×34 ・112・35	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 古・前Ⅰ
竪穴 住居20	・方形 ・5.6 ・30.24	P1	・円形 ・48×44 ・60 ・70	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (P1-a) ・丸太材 ・コナラ属クスギ節 ・残存約18	なし	なし	伊福・ 古・前Ⅱ
		P2	・円形 ・43×42 ・64 ・66	有	AⅡo	・礎材1点 ・柱痕跡	礎材 (P2-a) ・割材 ・コナラ属クスギ節 ・残存約18	なし	なし	伊福・ 古・前Ⅱ
竪穴 住居21	・方形 ・4.48 ・19.04	P1	・円形 ・81×80 ・81 ・59	有	AⅡo	・礎材?2点 ・付属材2点?	礎材? (W25) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・35.3×7.9×4.5 礎材 (P1-b) ・割材 ・コナラ属クスギ節 ・推定約20	不明	付属材 (P1-a) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約20 付属材 (P1-c) ・割材 ・コナラ属クスギ節 ・推定約25	伊福・ 古・前Ⅰ
		P2	・不整形円形 ・85×76 ・81 ・59	有	AⅡo	・礎材1点? ・付属材?2点	礎材 (P2-a) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約35	なし	付属材 (P2-b) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約20 付属材 (P2-c) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約20	伊福・ 古・前Ⅰ
		P3	・楕円形 ・106×66 ・78・62	有	AⅡa	基礎構造 (古) ・礎材1点 ・補助材2点 ・H字配置	礎材 (P3-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約50	補助材 (P3-c) ・半扱 ・コナラ属コナラ節 ・残存約41×約5.5 補助材 (P3-d) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・残存約40	なし	伊福・ 古・前Ⅰ

第4章 まとめ

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・柱穴形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基 礎 造 の 有 無	基 礎 構 造						
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状 ・樹種 ・測定値 (cm)	時期	
住居21	・ 方形 ・ 4.48 ・ 19.04	P3	・ 楕円形 ・ 106×66 ・ 78 ・ 62	有	AⅡa	基礎構造 (新) ・ 礎材不明 ・ 補助材2点 ・ H字配置	不明	補助材 (P3-a) ・ 半裁 ・ コナラ属コナラ節 ・ 推定約35 補助材 (P3-e) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 残存約15	なし	伊福・ 古・前Ⅰ	
彫穴 住居23・24	・ 方形 ・ 不明 ・ 不明	P1	・ 楕円形 ・ 推110×推100 ・ 98 ・ 42	有	AⅡa	・ H字配置が 2回以上	礎材 (P1-a) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約20 礎材 (P1-b) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約15	補助材 (P1-c) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約50 補助材 (P1-d) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約40 補助材 (P1-e) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約45 補助材 (P1-f) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約65	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P2	・ 円形 ・ 63×62 ・ 98 ・ 42	有	AⅡa	・ 補助材が2点 並行して残存 ・ H字配置	不明	補助材 (P2-a) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約25 補助材 (P2-b) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 残存約20	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P3	・ 円形 ・ 推90×推80 ・ 95 ・ 45	有	不明	・ 補助材および 付属材4点以上 ・ H字配置? ・ 柱痕跡	不明	補助材 (P3-a) ・ 芯上材 ・ 未鑑定 ・ 残存約18 補助材 (P3-b) ・ 丸太材 ・ 未鑑定 ・ 推定約25 補助材 (P3-c) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 推定約40 補助材 (P1-d) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 推定約20	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P4	・ 円形 ・ 56×47 ・ 101 ・ 39	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P5	・ 楕円形 ・ 75×58 ・ 75 ・ 65	有	AⅡa	・ 礎材1点 ・ 補助材2点 ・ H字配置 ・ 屈曲	礎材 (W26) ・ 割材 ・ コナラ属クスギ節 ・ 37.3×6.1×4.9	補助材 (W27) ・ 丸太材 ・ マツ属複雑管束亜属 ・ 37.7×4.2×4.1 補助材 (W28) ・ 丸太材 ・ マツ属複雑管束亜属 ・ 42.7×5.4×5.2	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P7	・ 円形 ・ 75×60 ・ 91 ・ 49	有	AⅡa	・ 礎材1点 ・ 補助材2点 ・ H字配置	礎材 (P7-a) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約50	補助材 (P7-b) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約50 補助材 (P7-c) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約45	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P9	・ 楕円形 ・ 72×42 ・ 86 ・ 54	有	AⅡa	・ 礎材1点 ・ 補助材4点 ・ 柱痕跡	礎材 (P9-a) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 残存約25	補助材 (P9-b) ・ 丸太材 ・ シイ属? ・ 推定約25 補助材 (P9-c) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 推定約25	補助材 (P9-d) ・ 割材 ・ コナラ属クスギ節 ・ 残存約6 補助材 (P9-e) ・ 割材 ・ コナラ属クスギ節 ・ 残存約13	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P10	・ 円形 ・ 推50×推50 ・ 100 ・ 40	有	AⅡa	・ 礎材不明 ・ 補助材2点 ・ 柱痕跡あり	不明	補助材 (P10-a) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約33 補助材 (P10-b) ・ 不明 (粘土化) ・ 未鑑定 ・ 推定約45	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	
		P11	・ 円形 ・ 50×45 ・ 87 ・ 53	有	AⅡc	・ 礎材1点 ・ 補助材 (有機物)	礎材 (P11-a) ・ 不明 ・ 未鑑定 ・ 推定約15	補助材 (P11-b) ・ 有機物 ・ 未鑑定	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ	

第2節 「礎板」について

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 ・柱穴形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎 構造 の有無	基礎構造					
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	時期
竪穴 住居23・24	・方形 ・不明 ・不明	P12	・円形 ・26×25 ・109・31	有	AⅡo	・補助材1点?	不明	補助材 (P12-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約25	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P13	・円形 ・66×55 ・95 ・45	有	AⅡa	・補助材3点 ・並行して残存	不明	補助材 (P13-a) ・割材・未鑑定 ・推定約40 補助材 (P13-b) ・割材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約35 補助材 (P13-c) ・割材・未鑑定 ・残存約17	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P15	・楕円形 ・124×90 ・87 ・53	有	不明	・部材が6点以上 ・詳細不明	礎材? (P15-a) ・不明・未鑑定 ・残存約25	補助材 (P15-b) ・不明・未鑑定 ・残存約40 補助材 (P15-c) ・不明・未鑑定 ・推定約15 補助材 (P15-d) ・不明・未鑑定 ・推定約20	補助材 (P15-e) ・割材・未鑑定 ・推定約30	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P16	・円形 ・54×45 ・88・52	有	AⅡa?	・礎材1点 ・補助材2点 ・付属材1点 ・H字配置か	礎材 (P16-a) ・不明 ・コナラ属コナラ節 ・残存約29	補助材 (P16-b) ・割材・未鑑定 ・推定約45 補助材 (P16-c) ・不明・未鑑定 ・推定約15	付属材 (P16-d) ・不明 ・未鑑定 ・不明	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P17	・楕円形 ・90×62 ・80 ・60	有	AⅡa	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字配置	礎材 (P17-a) ・丸太材 ・マツ属複雑管束虫属 ・推定約50	補助材 (W29) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・残65.7×6.5×3.7 補助材 (W30) ・丸太材 ・コナラ属クスギ節 ・61.2×7.6×6.7	なし	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P18	・円形 ・98×95 ・80 ・60	有	AⅡa	・礎材1点 ・補助材2点 ・付属材2点以上 ・H字配置か	礎材 (P18-a) ・丸太材 ・コナラ属クスギ節 ・推定約45	補助材 (W32) ・芯持材 ・コナラ属クスギ節 ・54.8×6.5×6 補助材 (W33) ・丸太材 ・コナラ属クスギ節 ・60.3×17.2×9.8	付属材 (W31) ・割材削出し ・コナラ属クスギ節 ・37.3×8.9×4.7 付属材 (P18-b) ・不明・ツブラジイ ・推定約35 付属材 (P18-c) ・割材・コナラ属 コナラ虫属 ・残存約12 付属材 (P18-d) ・不明・マキ属 ・不明	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P19	・楕円形 ・95×推80 ・96 ・44	有	AⅡa	・H字配置か ・いずれも粘土化	不明	補助材 (P19-a) ・不明 (粘土化)・未鑑定 ・推定約25 補助材 (P19-b) ・不明 (粘土化)・未鑑定 ・推定約25		伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P20	・円形 ・74×推70 ・96 ・44	有	AⅡa	・礎材1点 ・補助材3点 ・付属材1点 ・H字配置	礎材 (P20-a) ・割材 ・コナラ属クスギ節 ・推定約25	補助材 (P20-b) ・不明・未鑑定 ・推定約35 補助材 (W34) ・丸太材 ・コナラ属クスギ節 ・41.2×6.7×5.4 補助材 (W35) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・44.7×4.4×3.0	付属材 (P20-c) ・不明・未鑑定 ・推定約30	伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ
		P21	・楕円形 ・78×58 ・96 ・44	有	AⅡa	・H字配置? ・補助材が並行し て残存	不明	補助材 (P21-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約40 補助材 (P21-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約30		伊福・ 弥・後Ⅳ ～古・前Ⅰ

第4章 まとめ

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎 構造 の有無	基 礎 構 造						
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	時期	
竪穴 住居23・24	・方形 不明 不明	P22	・円形 ・推74×推74 ・98 ・42	有	不明	・補助材1点? ・柱痕跡	不明	補助材 (P22-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約30		伊福・ 弥・後IV ～古・前I	
		P23	・不整形 ・88×65 ・93 ・47	有	AⅡa	・礎材?1点 ・補助材3点 ・H字形	礎材 (P23-a) ・割材 ・未鑑定 ・推定約15	補助材 (W36) ・割材削出し ・コナラ属アカガシ亜属 ・32.8×2.8×1.5 補助材 (W37) ・割材削出し ・コナラ属アカガシ亜属 ・28.6×2.8×1.9 補助材 (W38) ・割材削出し ・コナラ属アカガシ亜属 ・31.2×3.0×1.1	なし	伊福・ 弥・後IV ～古・前I	
		P25	・楕円形 ・86×70 ・108 ・32	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 弥・後IV ～古・前I
		P26	・楕円形 ・88×70 ・98 ・42	有	AⅡo	・礎材?1点 ・柱痕跡	礎材 (P26-a) ・不明 ・未鑑定 ・推定約40	なし	なし	なし	伊福・ 弥・後IV ～古・前I
		P27	・円形 ・78×74 ・100 ・40	有	AⅡo	・礎材1点	礎材 (P27-a) ・割材 ・コナラ属アカガシ亜属 ・推定約35	なし	なし	なし	伊福・ 弥・後IV ～古・前I
		P28	・楕円形 ・116×90 ・120 ・20	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 弥・後IV ～古・前I
竪穴 住居27	・長方形 ・5.78 ・25.61	P1	・楕円形 ・94×60 ・102 ・43	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後IV	
		P2	・円形 ・68×64 ・94 ・51	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 弥・後IV	
		P3	・円形 ・93×76 ・90 ・55	有	AⅡa?	・礎材1点 ・補助材1点 ・H字形か	礎材 (P3-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・残存約15	補助材 (W39) ・割材 ・コナラ属アカガシ亜属 ・残35.9×7.5×4.3	なし	伊福・ 弥・後IV	
竪穴 住居28	・方形 6.1 不明	P1	・円形 ・50×38 ・106 ・42	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 古・前I	
		P5	・円形 ・102×82 ・100 ・52	有	Ba	・礎材は石材1点 ・補助材2点 ・付属材2点 ・柱痕跡	礎材 ・石材1点	補助材 (P5-a) ・不明 ・未鑑定 ・推定約30 補助材 (P5-b) ・不明 ・未鑑定 ・推定約35	付属材2点 ・いずれも粘土化	伊福・古・ 前I～II	
竪穴 住居29	・方形 不明 不明	P3	・楕円形 ・80×60 ・110 ・42	有	Bo	・礎材は石材1点	礎材 ・石材1点	なし	なし	伊福・古・ 前I～II	
竪穴 住居30	・方形 6.1 ・35.99	P2	・楕円形 ・65×52 ・116 ・28	無	Oo	・柱痕跡	—	—	—	—	伊福・ 古・前II
		P4	・円形 ・66×610 ・104 ・40	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 古・前II
		P6	・楕円形 ・100×66 ・120 ・24	有	AⅡa	・礎材1点 ・付属材1点 ・柱痕跡	礎材 (P6-a) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約35	なし	補助材 (P6-b) ・不明 (粘土化) ・未鑑定 ・推定約40	伊福・ 古・前II	
		P7	・円形 ・50×40 ・103 ・41	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 古・前II
		P8	・円形 ・52×44 ・103 ・41	無	Oo	—	—	—	—	—	伊福・ 古・前II
竪穴 住居32・33	・方形 不明 不明	P1	・円形 ・60×55 ・52 ・73	無	Oo	—	—	—	—	伊福・ 古・前II	
		P2	・円形 ・73×不明 ・40 ・86	有	Co	・礎材 (有機物) ・柱痕跡	礎材 ・有機物 ・粉殻	なし	なし	伊福・ 古・前II	

第2節 「礎板」について

住居名	住居概要 ・形状 ・長軸m ・床面積㎡	柱穴 番号	柱穴 形状 ・長径・短径cm ・底標高cm ・深さ	基礎 の有無	基礎構造					
					分類	概略	礎材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	補助材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	付属材 (掲載番号) ・形状・樹種 ・測定値 (cm)	時期
竪穴 住居32・33	・方形 ・不明 ・不明	P3	不整形 ・88×85 ・62・64	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P5	・円形 ・60×55 ・62・64	不明	不明					伊福・古・前Ⅱ
		P6	・円形 ・42×35 ・66・60	不明	不明					伊福・古・前Ⅱ
		P7	・円形 ・56×53 ・78・48	不明	不明					伊福・古・前Ⅱ
		P8	・楕円形 ・58×42 ・77・49	有	A I o	・礎材1点	礎材 (W40) ・芯持削出し・クリ ・35.1×11.8×8.7	なし	なし	伊福・古・前Ⅱ
		P9	・円形 ・84×82 ・71・55	不明	不明	・柱痕跡				伊福・古・前Ⅱ
		P10	・円形 ・60×60 ・74・52	有	A II a	・礎材1点 ・補助材2点 ・H字配置 ・柱痕跡	礎材 (P10-a) ・不明 ・コナラ属クヌギ節 ・推定約25	補助材 (W41) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・35.2×6.8×5.2 補助材 (W42) ・丸太材 ・コナラ属コナラ節 ・33×5.7×4.7	なし	伊福・古・前Ⅱ
竪穴 住居34?	・方形 ・50.5 ・22.22	P1	・円形 ・42×32 ・79・67	有	A II o	・礎材1点	礎材 (W44) ・丸太材 ・コナラ属クヌギ節 ・35.4×4.6×3.4	なし	なし	伊福・古・前Ⅰ
竪穴 住居35	・方形 ・50.5 ・22.22	P3	・楕円形 ・92×64 ・95・51	有	A II o	・礎材1点	礎材 (P3-a) ・削材 ・コナラ属コナラ節 ・推定約35	なし	なし	伊福・古・前Ⅱ
		P4	・円形 ・72×66 ・97・49	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P6	・楕円形 ・75×不明 ・101・45	不明	不明					伊福・古・前Ⅱ
竪穴 住居36	・方形 ・50.5 ・22.22	P2	・円形 ・63×52 ・62・84	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P5	・楕円形 ・63×50 ・87・59	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P7	・円形 ・62×56 ・104・42	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
竪穴 住居37	・方形 ・不明 ・不明	P5	・円形 ・45×32 ・90・54	有	A II o	・礎材1点	礎材 (W45) ・芯持削出し ・未鑑定 ・28.0×6.9×5.2	なし	なし	伊福・弥・後Ⅳ
竪穴 住居38	・方形 ・不明 ・不明	P4	・不明 (井戸3内) ・推86・58	無	Oo	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅳ
		P6	・円形 ・推45×40 ・66・78	無	Oo	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅳ
		P7	・楕円形 ・94×70 ・32・112	無	Oo	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅳ
		P10	・円形 ・43×不明 ・76・68	無	Oo	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅳ
竪穴 住居40	・方形 ・4.55 ・20.48	P1	・楕円形 ・82×62 ・68・92	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P2	・楕円形 ・96×84 ・58・102	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
		P3	・楕円形 ・88×66 ・80・80	無	Oo	—	—	—	—	伊福・古・前Ⅱ
竪穴 住居41	・方形 ・不明 ・不明	P1	・楕円形 ・80×推70 ・77・65	有	A I o	・礎材1点	礎材 (W48) ・芯持削出し ・コナラ属コナラ節 ・45.8×22.9×13.3	なし	なし	伊福・弥・後Ⅳ

第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器について

(1) はじめに

伊福定国前遺跡における平成14年度調査では、調査区が1,080㎡と狭いながらもコンテナ約350箱にも及ぶ多量の遺物が出土し、特にその大半が弥生時代後期から古墳時代前期の土器であった。本遺跡の当該土器については、平成6年度の調査成果をもとに弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案が提示され、『岡山県埋蔵文化財調査報告125』（以下、『県125』）に収載されている。その編年案は、旭川右岸の津島遺跡・南方遺跡・上伊福九坪遺跡などの集落遺跡に隣接する伊福定国前遺跡において、限られた資料の中で一遺跡内の土器様相を明らかにすることを試みたという点では大いに評価できる。しかしながら、調査面積が狭いために指標とする当該期の遺構に時間的な偏りが認められること、それと同時に、確認した時期の遺構が少ない場合は資料が乏しく、器種に偏りが認められるために器種組成の実態が把握しにくいことなど、いくつかの課題が指摘できる。また伊福定国前遺跡における集落の主要な存続期間が伊福・弥・後Ⅱ期（以下、「伊福・～期」を省く）から古・前Ⅱまでの短期間であるため、時間幅に制約があることも土器編年が構築しづらい点でもある。ここでは『県125』で示された土器編年案を基軸としつつ、平成14年度の調査成果を補填するかたちで弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年を再検討し、改めて本遺跡における土器様相の一端を明らかにすることを目的とする。

(2) 器種組成

器種組成については、平成6・14年度調査において確認した竪穴住居・土壇・井戸に加え、『県125』の土器溜り1・性格不明遺構出土土器を対象とし、掲載資料を器種別に集計した。ちなみに複数時期の土器が混在する遺構は対象外とした。器種組成はまず各時期の遺構別（第5表）で求め、さらにそれを集計して各時期における器種組成を求めた（第6・7表）。

伊福・弥・後Ⅱ期 土壇8基：計34点を対象とし、壺5.9%・甕47.1%・高杯14.7%・鉢20.6%・台付壺2.9%・ミニチュア土器8.8%を占めるが、対象資料が少なく、比率に偏りがある可能性が高い。

伊福・弥・後Ⅲ期 竪穴住居9軒：43点、井戸1基：60点、土壇46基：233点、土器溜り1：27点、性格不明遺構1基：25点の計388点を対象とする。竪穴住居は甕（34.8%）・高杯（25.6%）と両者の比率が高い。井戸は甕が48.3%と主体的である。土壇は甕が30.9%を占めるが、他の遺構と比べて比率がやや低い。次いで壺（20.2%）・高杯（26.6%）の比率が高いうえ、器台・台付壺が約3%でありながらも他の遺構より出土が目立つ。土器溜りは甕（40.7%）・鉢（33.3%）、性格不明遺構は甕（48.0%）・壺（24.8%）の比率が高い。全体の比率は甕が35.8%と最も高く、次いで高杯（23.9%）、壺（17.8%）、鉢（12.9%）が主要器種となる。また器台や台付壺は全体の3%にも満たず、器台は当該期をもって衰退する。

伊福・弥・後Ⅳ期 竪穴住居15軒：70点、土壇39基：187点、土器溜り1：3点の総計260点を対象とした。竪穴住居は甕の比率が35.7%と高く、壺・高杯・鉢は各20%前後でほぼ同率である。土壇は甕が37.4%、高杯が29.4%と高く、壺（11.7%）・鉢（16.0%）は竪穴住居と比べてやや低い。全体で

第5表 伊福定国前遺跡における土器の遺構別掲載点数

時期	遺構名	壺	甕	高杯	鉢	器台	台付壺	小型丸底壺	製塩土器	ミニチュア	その他	総計
伊福・弥・後Ⅱ	土壌	2	16	5	7		1			3		34
伊福・弥・後Ⅲ	竪穴住居	5	15	11	4		1			6	1	43
	井戸	9	29	10	8	1			1	2		60
	土壌	47	72	62	28	8	7		1	8		233
	土器溜り	2	11	5	9							27
	性格不明遺構	6	12	5	1	1						25
伊福・弥・後Ⅳ	竪穴住居	12	25	15	16		1		1			70
	土壌	22	70	55	30		2		5	1	蓋1・手焙1	187
	土器溜り									3		3
伊福・古・前Ⅰ	竪穴住居	9	23	12	9				1			54
	井戸	10	9	8	11					4	手焙1	43
	土壌	2	4	4	5	1			3			19
伊福・古・前Ⅱ	竪穴住居	9	31	7	12			7	9	1		76
	土壌		2	1	2			1				6

第6表 伊福定国前遺跡における土器の遺構別掲載点数

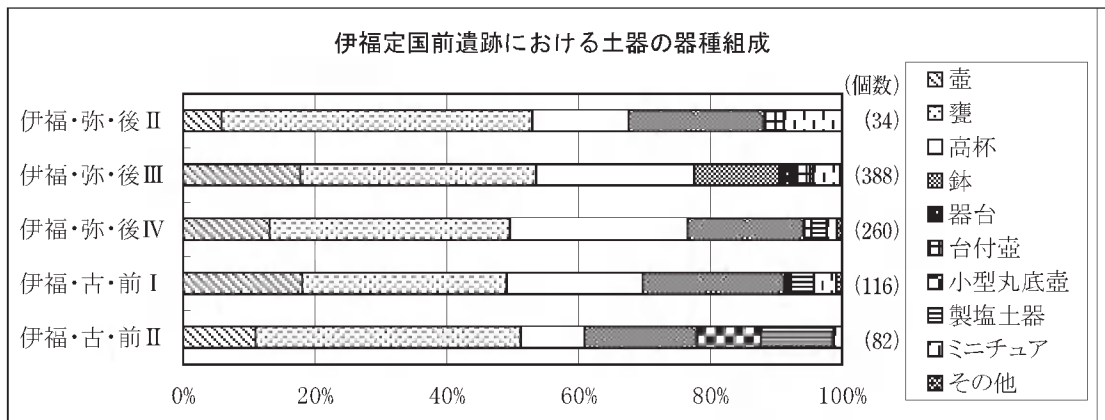
(複数時期にわたる土器の出土遺構を除く)

時期	壺	甕	高杯	鉢	器台	台付壺	小型丸底壺	製塩土器	ミニチュア	その他	総計
伊福・弥・後Ⅱ	2	16	5	7		1			3		34
伊福・弥・後Ⅲ	69	139	93	50	10	8		2	16	1	388
伊福・弥・後Ⅳ	34	95	70	46		3		6	4	2	260
伊福・古・前Ⅰ	21	36	24	25	1			4	4	1	116
伊福・古・前Ⅱ	9	33	8	14			8	9	1		82

第7表 伊福定国前遺跡における土器の器種構成

(%)

時期	壺	甕	高杯	鉢	器台	台付壺	小型丸底壺	製塩土器	ミニチュア	その他	総計
伊福・弥・後Ⅱ	5.9	47.1	14.7	20.6		2.9			8.8		100
伊福・弥・後Ⅲ	17.8	35.8	23.9	12.9	2.6	2.1		0.5	4.1	0.3	100
伊福・弥・後Ⅳ	13.1	36.5	26.9	17.7		1.2		2.4	1.5	0.7	100
伊福・古・前Ⅰ	18.1	31.0	20.7	21.6	0.8			3.5	3.5	0.8	100
伊福・古・前Ⅱ	11.0	40.2	9.8	17.1			9.8	11.0	1.1		100



は甕が36.5%と前段階とほぼ同率で高いものの、壺は13.1%とやや比率が低くなり、逆に高杯・鉢の比率がやや高くなる。特に高杯は26.9%と高く、弥・後Ⅱから古・前Ⅱの間で当期がピークとなる。

伊福・古・前Ⅰ期 竪穴住居11軒：54点、井戸2基：43点、土壙3基：19点の計116点を扱う。竪穴住居は甕の比率が42.5%と高く、次いで高杯が22.2%、壺・鉢は各16.6%と同率である。井戸は壺(23.2%)・鉢(25.5%)の比率が高い反面、甕が他の遺構と比べて20.9%と低い。土壙の出土土器の組成比は資料数が少ないために実態を反映していない可能性がある。全体としては甕が31.0%、高杯が20.7%とやや比率を落とすが、壺(18.1%)・鉢(21.6%)の比率はやや高い。

伊福・古・前Ⅱ期 竪穴住居7軒：76点、土壙3基：6点の計82点を対象とする。竪穴住居は甕の比率が40.7%と圧倒的に高く、壺(11.8%)・高杯(9.2%)・鉢(15.7%)の比率が前段階と比べて低くなる傾向にある。また小型丸底壺が9.8%と一定量の割合で存在する。製塩土器は古・前Ⅰまでは4%未満であったが、古・前Ⅱは11.0%と比率が高くなる。






(3) 各器種の分類

①甕

岡山県南部地域の甕については、中田宗伯氏が口縁部形態をⅠ～Ⅲの各3類型に分け、それをもとに調整や器種構成などを具体的に検討している⁽³⁾。しかしながら、本遺跡の甕は中田氏の分類に厳密にそぐわない資料が認められたため、今回は山本悦世氏が鹿田遺跡で弥生時代後期～古墳時代初頭の甕を大きく6類型に分類した基準⁽⁴⁾を参考にし、口縁部を次の5類型に分けた。a類は口縁部を単純に外反させるもの、b類は口縁端部を上下にわずかに肥厚させるもの、c類は口縁部を外反させて端部を上方にわずかに摘むもの、d類は口縁部を上方へ拡張するもの(「吉備型甕」を含む)、e類は口縁部が「く」の字を呈するものとする(第8表)。甕の属性分析は出土遺構に関わらず、口縁形態および時期の判断が可能な304点を対象とした。

まず口縁部の形態であるが、時期別に各類型数を表したのが第8表である。a類は弥・後Ⅱは約35%と比較的主体をなすが、弥・後Ⅲ以降は次第に少なくなる。b類は前段階から踏襲されている口縁形態であり、弥・後Ⅱに5割、弥・後Ⅲに約3割が存在し、弥・後Ⅳに激減・衰退する傾向にある。c類は弥・後Ⅱから古・前Ⅰにかけて約1～2割ほどの一定量が存在し、古・前Ⅱには衰退する。d類は弥・後Ⅲに出現し、古・前Ⅱまで主体を占めるようになる。e類は弥・後Ⅲに出現するが、極めて補助的な比率を示し、その後、古・前Ⅰには約22%と比率が高くなる。

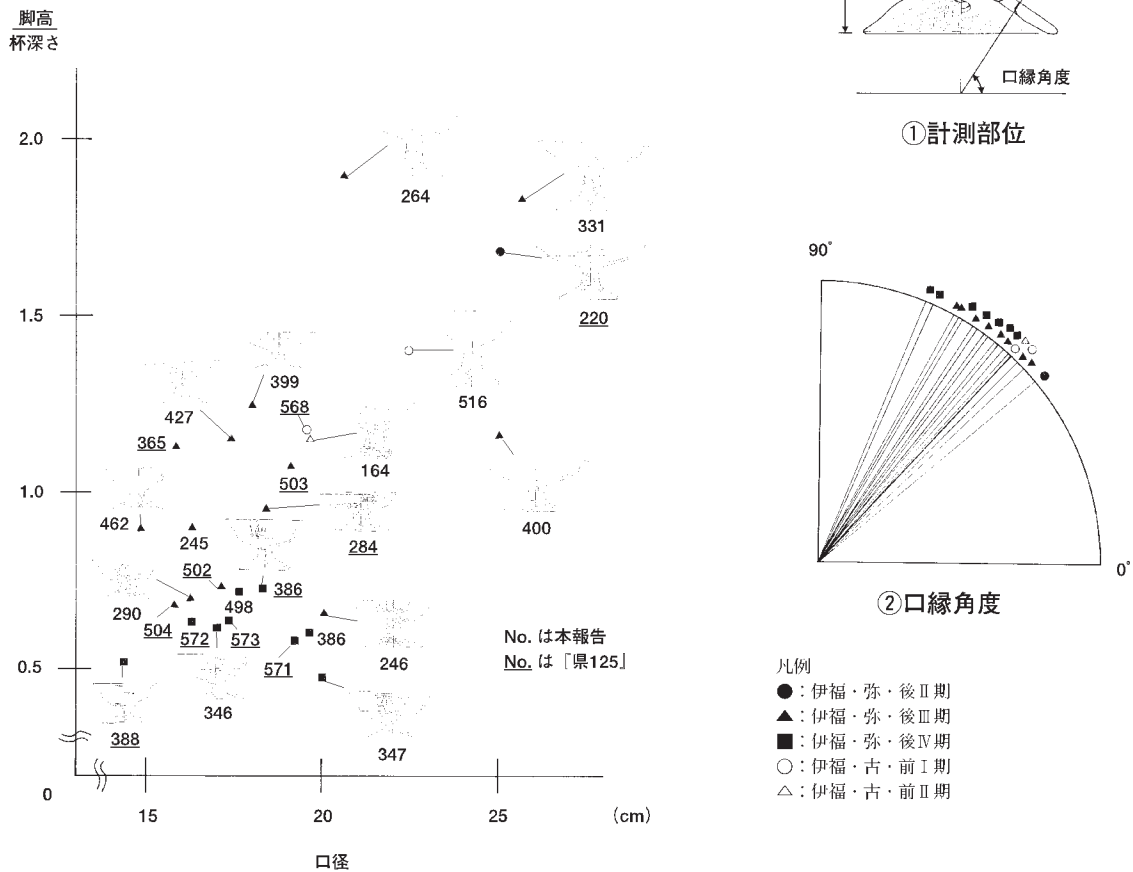
第8表 甕口縁部の各類型と掲載点数

時期	類型	a類	b類	c類	d類	e類	計
							
伊福・弥・後Ⅱ		5	7	2			14
伊福・弥・後Ⅲ		10	33	16	50	5	114
伊福・弥・後Ⅳ		3	8	23	64	2	100
伊福・古・前Ⅰ				4	30	10	44
伊福・古・前Ⅱ		1			30	1	32
計		19	48	45	174	18	304

次に口縁部の各類型ごとに内外面の調整をみる。弥・後Ⅱのb類は、外面をハケメ、内面上半部を左方向にヘラケズリするものが主体的であり、器面調整に規範が存在しているかのように見受けられる。d類は弥・後Ⅲから古・前Ⅱにかけて外面をハケメかヘラミガキを施すものに大別できる。外面にハケメを施すものは、内面上半部を左方向にヘラケズリするものが主体的であり、弥・後Ⅱの様相を継続させる。また外面にヘラミガキを施す甕は、弥・後Ⅲには内面上半部を左方向または右方向にヘラケズリするものが同率に混在し、弥・後Ⅳには内面上半部を左方向にヘラケズリするものが主体を占める。そして古・前Ⅱには内面上半部を右方向にヘラケズリするものに加え、底面にユビオサエするものが顕著に認められる。e類は外面にハケメを施すものが多いが、古・前Ⅰにはタタキを施すものもある。内面は基本的にヘラケズリだが、その方向に一貫性は見出しがたい。

②高杯

高杯については、上記の対象遺構のほか、遺構出土資料に関わらず、全体が良好に残存している高杯28点を対象とし、口径・杯深さ・器高・脚高の計測値、杯口縁部の角度をもとに次の属性分析を行う。岡山県南部地域における弥生時代後期の高杯は、口径が小さくなるとともに杯の深さが増し、脚柱部が次第に短くなる傾向にあり、このことは高橋護氏によって明らかにされた⁽⁶⁾。今回は高橋氏の指摘するこの時期的変化の特徴を視覚的に表現するため、口縁部が屈曲する高杯を対象に、



第225図 高杯の計量値分布と口縁角度

杯の深さに対する脚高の比率を割り出し、口径との相関関係を第225図のように示した。ちなみに脚高と杯深さが同じ計測値だと、この値は「1.0」になる。高杯は時期ごとにみると、基本的に計量値に大きなまとまりが認められ、過度的様相をもつものはそのまとまりから外れて図上で点在する傾向にある。弥・後Ⅱの該当資料は220（以下、下線を付している番号は『県125』掲載資料を示す）だけであり、口径が大きく、杯の深さに対して脚部が棒状で長いことから、弥・後Ⅱでも新相にあたる。また弥・後Ⅲの高杯のうち、264・331は口径が約20～26cmで、杯の深さが浅く、脚部が長いため、古相を示している。400は口径が25cmと大きいものの、脚部が短いことから、弥・後Ⅲのなかでも古相と新相との過度的様相を示す。また284・365・502・503・504・245・290・399・427等は口径が約16～20cmと小さく、脚部が短いため、弥・後Ⅲの新相と考えられる。なかでも502・504・246・290は弥・後Ⅳに近い様相を呈しているが、5cm以上の杯深さが大半を占める後Ⅳと比べて、502のそれは4.4cm、504・246は3.8cmと浅いため、後Ⅲの範疇と判断した。弥・後Ⅳの高杯は、弥・後Ⅲよりも杯深さが増すとともに短脚化が進むほか、口径が20cmを越えないことが指摘できる。古・前Ⅰになると、口径が20cm前後とやや大きくなり、脚部はやや肥厚で次第に長くなる傾向にある。古・前Ⅱは計測値的には古・前Ⅰと大差ないが、脚柱部の器壁が薄くなり、中空気味になる（164）。

次に口縁部が屈曲する高杯に限り、口縁部形態および角度をみる（第225図一②）。口縁端部が内湾気味に短く外反するものは弥・後Ⅱ～Ⅲに認められ、やや浅い杯部をもつ弥・後Ⅱに比べて、弥・後Ⅲは杯部の深さが増す。そのため口縁部角度は弥・後Ⅱは40°程度であったのが、弥・後Ⅲには45～60°まで次第に立ち上がる傾向にある。弥・後Ⅳになると杯部はさらに深くなるとともに、口縁端部は長く外反するようになり、口縁部角度は50～70°まで大きく屈曲するようになる。古・前Ⅰ～Ⅱには口縁端部が直線的に屈曲して長くのびようになり、その角度は48°前後に画一化する。







器面調整をみると、弥・後Ⅲまでは杯部の内外面を放射状にヘラミガキするものが多いが、弥・後Ⅳになると杯部内外面を横方向にヘラミガキするものが現れる。また弥・後Ⅳは口縁部外面を螺旋状にヘラミガキするものが顕著となる。古・前Ⅰ以降は横方向のヘラミガキを施すものが主流をなす。

また受け部が碗形を呈する高杯は、弥・後Ⅱに次第に認められ、弥・後Ⅲ～Ⅳに比率がやや高くなり、古・前Ⅱには衰退する。これは口縁部形態が後述する鉢c類と基本的に同様な変遷をたどる。

③鉢

今回は出土遺構に関係なく、口縁形態および時期の判断が可能である資料111点を対象にし、口縁部の形態、口径・器高による計量値、調整について分析した。口縁形態は第9表のようにa～e類の5類型に大別できる。a類は単純に外反する口縁部をもち、口径約8～12cm・器高約8～12cmを測る小形の鉢で、口径・胴部最大径と器高がほぼ等しい外形をあらわす。本遺跡では弥・後Ⅲに多く、古・前Ⅰまで認められる。b類は口縁部は屈曲して上・下方に拡張し、器高よりも口径・胴部最大径が大きいものであり、口径約14cm以下の小形品、口径約14～20cm・器高約8～16cmを測る中形品、口径約25cm以上・器高約15～25cmを測る大形品の3つ規格に大別できる。これは弥・後Ⅱ～Ⅳに盛行する。時期別に規格を見ると、弥・後Ⅲは小形品1点・中形品3点・大形品9点、後Ⅳは小形品3点・中形品2点・大形品7点であり、ともに大形品が占める比率が高い。ちなみに本遺跡で朱・漆が塗布された鉢210はb類の大形品に属する。c類は碗形を呈し、口径約8～17cm・器高約3～9cmを測る。弥・後Ⅲは口縁部がわずかに内側へ屈曲、弥・後Ⅳは内湾、古・前Ⅰ～Ⅱは口縁部が丸く収まって碗形を呈する。d類は口縁端部を上方へ拡張するものとするが、次のように細分する。d類のうち、小

第9表 鉢口縁部の各類型と掲載点数

時期 \ 類型	a類	b類	c類	d 1類	d 2類	e類	計
							
伊福・弥・後Ⅱ	1		3				4
伊福・弥・後Ⅲ	8	14	13	1	2		38
伊福・弥・後Ⅳ	5	12	8	4	8		37
伊福・古・前Ⅰ	5		10		1	2	18
伊福・古・前Ⅱ			8		3	3	14
計	19	26	42	5	14	5	111

形で口径と器高がほぼ等しく、口縁端部をわずかに摘み上げているものをd 1類とし、また器高に対して口径が大きく、口縁端部が逆「L」字状に上方へ拡張するものをd 2類とする。d 1類は弥・後Ⅲ～Ⅳに認められる。d 2類は本遺跡では弥・後Ⅲから古・前Ⅱまで認められ、特に弥・後Ⅳに多い。d 2類の口縁形態は甕d類と酷似しており、端部にヘラ描きによる擬凹線文や多条の櫛描沈線文を施すなど、甕と共通する点が多い。e類は複合口縁を呈するものであり、周辺の遺跡の状況から古・前Ⅰに出現すると考えられ、古・前Ⅱには衰退する。時期が下るにつれて口縁部の開きが次第に著しくなり、底部も丸底化する。b・e類は壺、d 2類は甕の口縁部と同様な変遷をたどる。

調整をみると、弥・後Ⅲのa類は外面ハケメ、内面ヘラケズリを基本とする。b類は、弥・後Ⅱは内外面ともにヘラミガキであるが、弥・後Ⅲ以降は内面ヘラケズリ、弥・後Ⅳは外面ハケメのものが多く認められ、次第にヘラケズリを簡略化する傾向にある。c類をみると、弥・後Ⅲの外面はヘラミガキ、内面はハケメ・ヘラミガキであるが、弥・後Ⅳは内外面にハケメをもち、古・前Ⅰ～Ⅱは内外面にヘラケズリ・ハケメ・ユビオサエ等を残す。d 1類は資料数が少なく、内外面の調整は判然としない。d 2類はb類と同様な調整がなされているが、古・前Ⅱは底部にユビオサエを残すものがある。e類は外面ハケメ、内面ヘラケズリを基本とし、内外面をヘラミガキで仕上げるものは少ない。

(4) 弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相

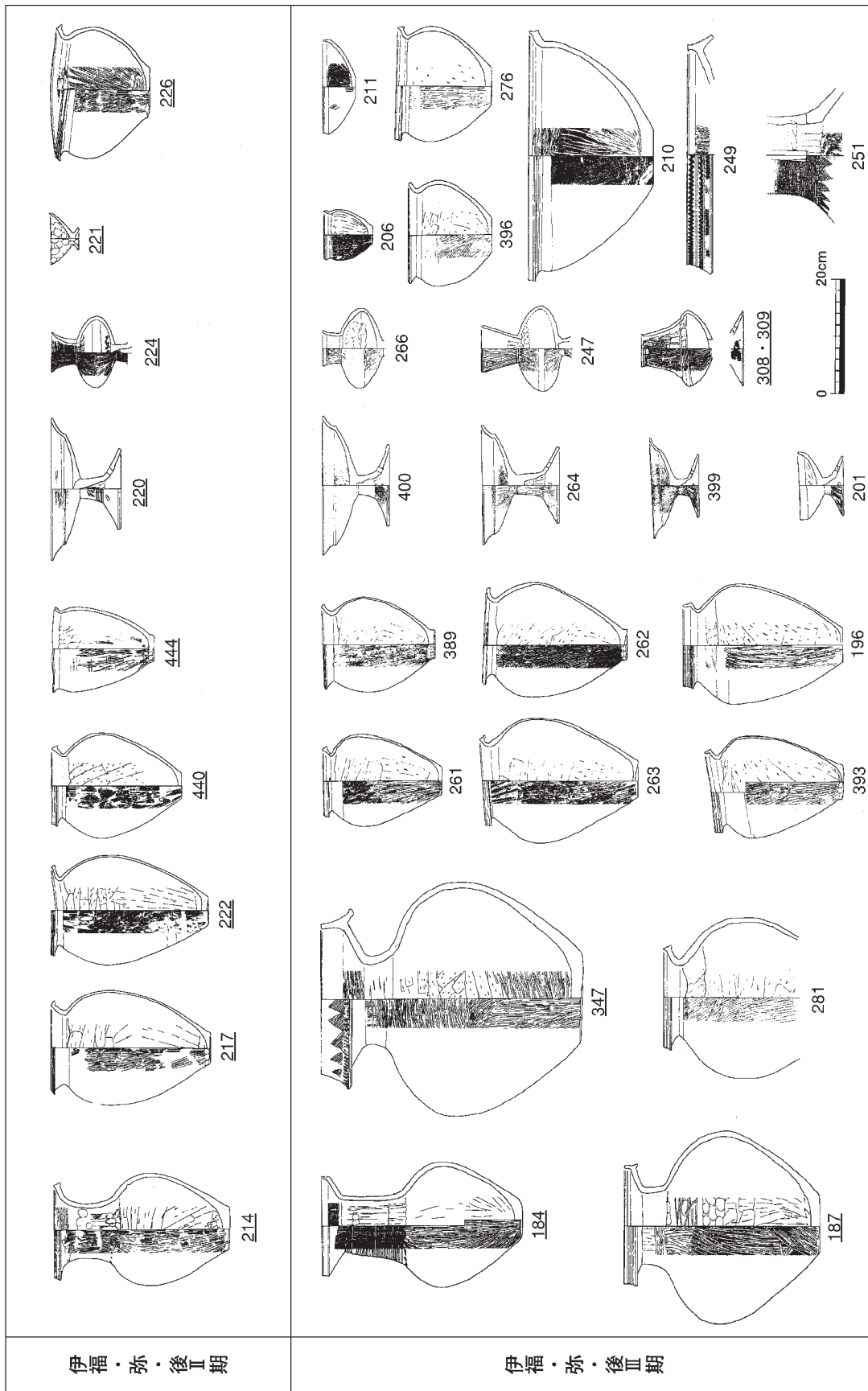
以上の器種組成、甕・高杯・鉢の属性分析の結果と本遺跡で確認した一括性の高い土器群をもとに、弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相を次にまとめる。具体的には平成6年度（『県125』）の竪穴住居3、土壙2～4・9・12～14・23・27・32、井戸1～3、平成14年度（本報告）の竪穴住居36・40、土壙7・11・13・19・26・29・31・34・35・39・62・66・94、井戸3出土資料を対象とした。

伊福・弥・後Ⅱ以前

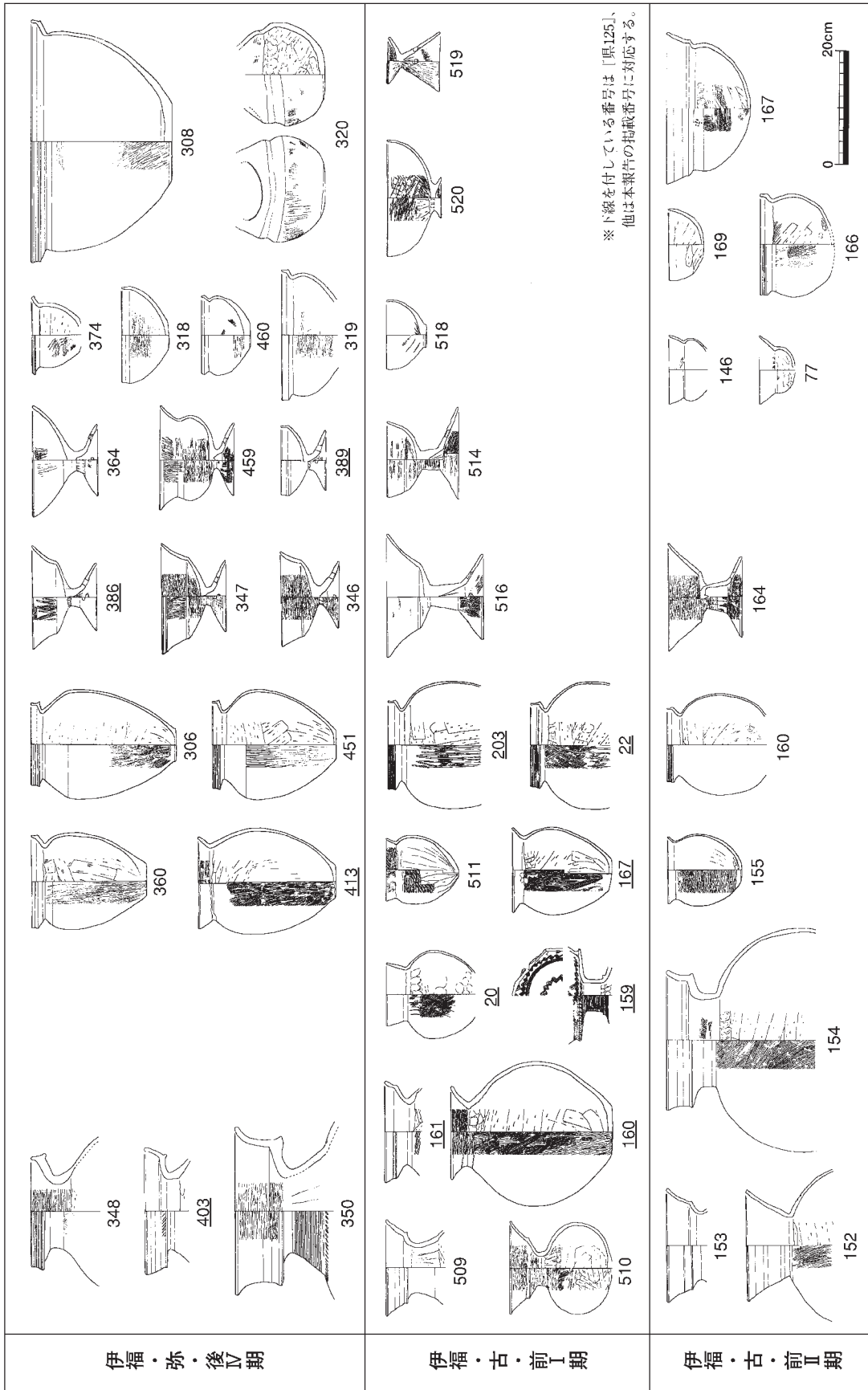
『県125』の土壙-23が該当し、弥・後Ⅰでも新相の特徴をもつ。

伊福・弥・後Ⅱ

『県125』の土壙-2～4・35・36出土土器を指標とする。長頸壺は頸部が内湾しながらのび、口縁部は大きく曲線を描きながら開く。口縁端部は上・下方に拡張する。甕はa類・b類が主体、b類は補助的に存在する。口縁部には数条の擬凹線文を施す。調整は外面をハケメ、内面上半部を左方向にヘラケズリを施す。肩部は張らず、底部はやや上げ底となる。高杯はやや浅い杯部をもち、口縁端部が内湾気味に約40°ほど短く外反する。また口径が大きく、杯深さに対して脚部が棒状で長い。鉢



第226図 弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年案① (1/10)



第227図 弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年案② (1/10)

はb類の中形品があり、内外面ともにヘラミガキで仕上げる。

伊福・弥・後Ⅲ

『県125』の井戸-2、土壙-9・12~14、本報告の井戸3、土壙7・11・13・19・39・66を標識とする。壺は長頸壺、短頸壺があり、変化に富む。全体的に壺の胴部は肩が張り、口縁部が直線的に開き、口縁端部は上方に拡張する。甕はa・b類の比率が下がり、新たにd類が出現して主体を占めるようになるほか、c類が弥・後Ⅱと同様に補助的に存在する。甕d類は肩部が張って屈曲するものが大半を占める。底部は平底が主体となる。甕d類の調整をみると、外面にハケメを施すものは内面上半部を左方向にヘラケズリするものが主流であるのに対し、外面にヘラミガキを施すものは内面上半部を左方向もしくは右方向にヘラケズリするものが同率に混在する。本報告の井戸3出土の甕193~196は口縁端部に多条の擬凹線文を配し、弥・後Ⅳに近い様相を呈しているが、出土状況と共存関係を見る限り、当該期の範疇に収まる可能性がある。高杯は、264・331のように口径が約20~26cmと大きく、杯の深さに対して脚柱部が長いものを古相、また284・245・399等のように口径が約16~20cmと小さく、脚部が短いものを新相とする。口縁部は約45~60°ほど立ち上がる。杯深さは次第に増し、脚は短くなる。杯部内外面の調整は放射状にヘラミガキするものが多い。鉢はb・c類が目立ち、b類の中形品に加え、大形品が出現する。

伊福・弥・後Ⅳ

『県125』の上壙-27・32、本報告の上壙26・29・31・34・35・62出土土器が該当する。壺は資料が乏しいが、長頸壺が衰退し、短頸の壺が主流をなす。口縁端部の上方への拡張は弥・後Ⅲよりもさらに著しくなる。甕は、口縁端部に擬凹線文を多条に施するd類が圧倒的に主体を占める一方、b類が急激に衰退する。c類は補助的に存在する。体部は肩部がややなで肩となり、重心がやや下がる。底部は上げ底のものが認められなくなり、平底が大半を占める。外面にヘラミガキを施す甕は、内面上半部を左方向にヘラケズリするものが主体となる。高杯は弥・後Ⅲよりもさらに短脚化が進み、また杯部はさらに深くなるとともに口縁端部は長く外反し、口縁部角度は50~70°まで大きく屈曲する。杯部の内外面は横方向にヘラミガキするものが出現するほか、口縁部外面を螺旋状にヘラミガキするものも認められる。鉢はa類、b類の小形品・中形品・大形品、c類、d1・d2類があり、特にb類のほか、c類・d2類の比率が高くなる。鉢c類の口縁部はわずかに内湾する。

伊福・古・前Ⅰ

『県125』の井戸-1・3、竪穴住居-3、本報告の土壙94があたる。壺では複合口縁壺、直口壺、「く」の字口縁壺などが認められる。胴部は球形に近いが、底部は完全に丸底化していない。甕はd類が主流をなし、口縁端部に櫛描きによる多条な沈線文を施して、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリによって調整することを基本とする。本遺跡では当該期の甕b類は資料的に乏しいが、体部は肩部が丸みを帯び、底部がわずかに平底をとどめ、いわゆる倒卵形を呈すると考えられる。また甕e類も約2割の比率で補助的に存在する。このほか、高杯は口径が大きくなり、脚部はやや肥厚で次第に長くなる傾向にある。口縁端部は古・前Ⅱにかけて直線的に長く延び、その角度は48°前後と画一的である。また器面調整は古・前Ⅰ以降、横方向のヘラミガキが主流となる。鉢はc類、d2類の大形・中形品が存在すると考えられるが、本遺跡では今のところ資料に乏しい。

伊福・古・前Ⅱ

本報告の竪穴住居18・20出土土器、竪穴住居36・40土器溜りが該当する。壺は複合口縁をもち、大

きく外方へ開く。甕はd類が他を圧倒し、口縁端部には縷描きによる多条な沈線文を施す。体部は球形化し、丸底となる。調整は外面にヘラミガキを施し、内面上半部を右方向にヘラケズリするものに加え、底面にユビオサエするものが顕著になる。高杯の口縁部形態は古・前Ⅰと同様であるが、脚柱部の器壁が薄くなり、中空気味になるという点で変化が見られる。鉢は、口縁部が丸く収まって碗形を呈するc類のほか、d2類の大形・中形品があり、底部は完全に丸底となる。

古・前Ⅱ以降の明確な遺構は調査区内では極めて少ないものの、『県125』の土器溜り-3において白・古・Ⅲ⁽⁷⁾、高橋11期⁽⁸⁾に相当する土器群が出土しており、微高地内には少なくとも古・前Ⅱ以降もわずかながら遺構が存在し、次第に集落が終息に向かうことが想定される。

(5) おわりに

本稿では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を対象に、器種構成、甕・高杯・鉢の属性分析、編年案について検討した。器種構成の分析では、時期によって廃棄される土器の器種構成が変化していることを言及した。また同時期でも遺構によって器種構成が異なっており、これは特に弥・後Ⅲに顕著で、土器の廃棄が意図的に行われていることを示す傍証の一つとして捉えることができよう。また甕・高杯・鉢の属性分析では、遺跡内における各型式の比率や文様・調整などの変遷を整理した。さらに本遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年案を再検討したが、『県125』で氏平氏が提示した土器編年案に平成14年度の調査成果を加えることで対象資料が充実し、各時期の土器様相がより具体的に把握することが可能になった。しかしながら、弥生土器・土師器の主要器種である壺については、未だ資料数が少なく、不十分な点が指摘できる。平成6・14年度の調査区は地点が隣接しているのにも関わらず、遺構の時期に偏りがあるため、遺跡内で時期によって遺構が偏在している可能性が高く、今後の調査次第では各時期の土器様相を改める必要があるだろう。本遺跡が位置する旭川下流域右岸には、津島遺跡、南方遺跡、上伊福九坪遺跡などの集落遺跡が密集しているが、今後はこれらの遺跡（微高地）間で土器様相を比較・検討することにより、小地域内における集落の変遷や動向を捉えることができ、弥生時代から古墳時代への大きな社会変動の一端を探ることができるのではないかと考える。

(米田)

註

- (1) 氏平昭則「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器」『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告125 岡山県教育委員会 1998
- (2) 報告書掲載資料に限って次の分析を行うにあたり、土器の残存状況が埋没過程や調査方法によって大きく左右されることや、土器が細片で図化し得なかった非掲載資料を全く考慮しないことは本来の土器様相の実態と齟齬をきたす恐れがあることは十分承知しているが、本報告では土器の分類・集計基準を統一しているため、掲載資料に限った分析でも土器様相の実態にある程度近づいた結果が導き出せるのではないかと考えている。
- (3) 中田宗伯「中部瀬戸内における変形土器の地域色」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 1992
- (4) 山本悦世「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の上器」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (5) 安英樹「漆町編年・その光と影と」『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼—秋山進午先生古稀記念—』六一

第4章 まとめ

書房 2003

- (6) 高橋護「入門講座・弥生土器―山陽2―」『考古学ジャーナル』175 ニューサイエンス社 1980
高橋護「入門講座・弥生土器―山陽3―」『考古学ジャーナル』179 ニューサイエンス社 1980
- (7) 江見正己「時期区分について」『百間川原尾島遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告39 岡山県教育委員会
1980
- (8) 高橋護「中国・四国」『古墳時代の研究 6 土師器・須恵器』雄山閣 1991

自然科学的分野における分析・鑑定

伊福定国前遺跡における樹種同定	環境考古研究会
伊福定国前遺跡における古環境解析	パリノ・サーヴェイ株式会社
伊福定国前遺跡出土の赤色顔料	志賀 智史 九州国立博物館（仮称）設立準備室 本田 光子
伊福定国前遺跡出土ガラス滓	株式会社ニコン 木戸 一博
伊福定国前遺跡出土の動物遺存体の分析	岡山理科大学 富岡 直人
伊福定国前遺跡出土試料の ¹⁴ C年代測定	国立歴史民俗博物館 小林 謙一 国立歴史民俗博物館 春成 秀爾 国立歴史民俗博物館 坂本 稔 国立歴史民俗博物館 尾寄 大真 国立歴史民俗博物館 新免 歳靖 総合研究大学院大学 村本 周三 東京大学原子力研究総合センター 松崎 浩之

伊福定国前遺跡における樹種同定

環境考古研究会

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2. 試料

試料は、伊福定国前遺跡より出土した、弥生時代後期から古墳時代の礎板100点、弥生時代後期から古代の柱ないし柱根8点などの建築部材108点である。

3. 方法

試料は、カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は表1・2に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し、2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

マキ属 *Podocarpus* マキ科

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、年輪界がやや不明瞭である。樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、腐朽性が強く、

耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

図版 3

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

ノグルミ *Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc クルミ科

図版 4

横断面：年輪のはじめに、やや大型の道管が1～3列配列する環孔材である。晩材部ではやや角張った小道管が、複合して斜線状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞が接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～5細胞幅である。

以上の形質よりノグルミに同定される。ノグルミは、本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径60cm程度である。現在では建築、器具、経木、薪炭、マッチ軸木などに用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版 5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～3列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて強い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

図版 6

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。

常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小
道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に
分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具な
どに用いられる。

なお、シイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本
試料は広範囲の観察が困難であったため、シイ属の同定にとどまる。

また、横断面、放射断面、接線断面共にシイ属の特徴を示すが、保存状態が悪く、細部までの観
察が困難であった試料は、シイ属?とした。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

図版7・8

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張
った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織で
ある。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガ
シワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐ
らいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

図版9・10

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い
小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織で
ある。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどが
あり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力
に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus subgen. Lepidobalanus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部には小道管が見
られるが不明瞭である。早材部から晩材部にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質より、コナラ属コナラ亜属に同定される。コナラ属コナラ亜属にはコナラ節とクヌギ節があり、小道管の形や配列などにより同定できるが、本試料は保存状態が悪く、細部までの観察が困難であったため、コナラ属コナラ亜属の同定にとどまる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版11

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく、放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

図版12

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科

図版13

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科 図版14

横断面：やや小型から中型で、やや角張った道管が、単独および2～数个放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

クスノキ科 Lauraceae

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数个放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがある。

なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ科の内のクスノキ以外のいずれかであるが、保存状態が悪く不明瞭な点が多いため、クスノキ科の同定にとどまる。

サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 図版15

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

散孔材 diffuse-porous wood

横断面：中型の道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。道管の径は年輪界にむけてやや減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅ぐらいである。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は、ムクノキに類似するが、保存状態が悪いため、不明瞭な点が多く、同定には至らなかった。

5. 所見

同定の結果、伊福定国前遺跡の木材は、カヤ1点、マキ属1点、マツ属複維管束亜属9点、ノグルミ1点、クリ2点、ツブラジイ5点、シイ属6点、シイ属?1点、コナラ属コナラ節32点、コナラ属クヌギ節24点、コナラ属コナラ亜属1点、コナラ属アカガシ亜属11点、ケヤキ2点、ヤマグワ1点、タブノキ6点、クスノキ科1点、サクラ属1点、ヤブツバキ1点、散孔材1点であった。コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節の割合が高く、木材全体の半数以上を占める。他に主要なものとしては、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイないしシイ属、マツ属複維管束亜属、タブノキとつづく。コナラ属コナラ節とコナラ属クヌギ節は落葉広葉樹で二次林要素であり、マツ属複維管束亜属も二次林要素である。コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイないしシイ属、タブノキは照葉樹林の主要高木である。本遺跡の木材は二次林要素が最も多く、照葉樹林要素がやや多く、周辺の植生を反映していると考えられ、コナラ属コナラ節、コナラ属クヌギ節、マツ属複維管束亜属の二次林とコナラ属アカガシ亜属、シイ属、タブノキの照葉樹林の分布が示唆される。

用途別にみると、礎板100点中、コナラ属コナラ節30点、コナラ属クヌギ節24点と多く、つづいてコナラ属アカガシ亜属11点とマツ属複維管束亜属9点である。以下、ツブラジイを含むシイ属が9点、タブノキ4点、クリ2点、ケヤキ2点、散孔材1点、シイ属?1点、クスノキ科1点、サクラ属1点、ヤブツバキ1点であった。コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属を主に使われる。柱ないし柱根においては、シイ属2点、コナラ属コナラ節2点、タブノキ2点、カヤ1点、ノグルミ1点が、多様に使われる。いずれも高木になる樹木が使われている。

(参考文献)

佐伯浩・原田浩1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 20～48頁

佐伯浩・原田浩1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 49～100頁

島地謙・伊東隆夫1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 296頁

山田昌久1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会 242頁

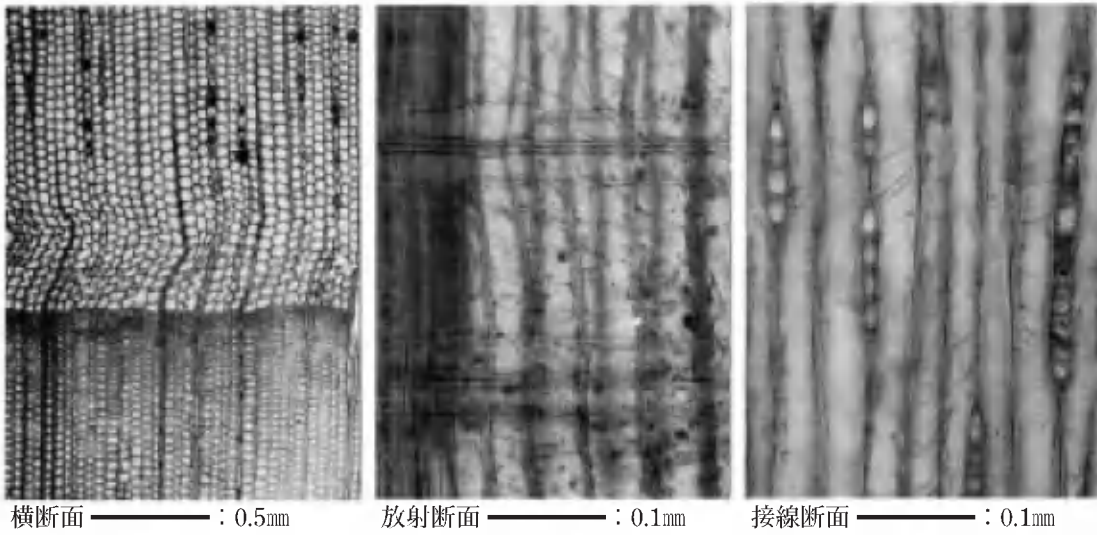
表 1 伊福定国前遺跡樹種同定結果

報告番号	鑑定番号	報告遺構名	出上箇所	出上箇所結果 (学名/和名)	
W1	1	竪穴住居 1	P1	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W2	3	竪穴住居 1	P1	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W3	2	竪穴住居 1	P1	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	64	竪穴住居1	P2-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	65	竪穴住居1	P2-b	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	107	竪穴住居1	P2-c	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W4	45	竪穴住居1	P4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W5	26	竪穴住居1	P4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W6	27	竪穴住居1	P4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	84	竪穴住居2	P1-a	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	85	竪穴住居2	P1-b	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	86	竪穴住居2	P1-c	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	87	竪穴住居2	P1-d	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	88	竪穴住居2	P1-e	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	62	竪穴住居2	P3-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	63	竪穴住居2	P3-b	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	100	竪穴住居4	P1-a	<i>Castanopsis</i>	シイ属
-	42	竪穴住居4	P2-a	Lauraceae	クスノキ科
W7	18	竪穴住居5	P1	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
-	97	竪穴住居5	P1-a	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
W8	11	竪穴住居5	P2	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
-	99	竪穴住居5	P2-a	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
-	15	竪穴住居5	P2-d	diffuse-porous wood	散孔材
W9	23	竪穴住居6	P2	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W10	17	竪穴住居6	P2	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W11	16	竪穴住居6	P3	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
W12	24	竪穴住居6	P3	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
W13	22	竪穴住居6	P3	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
-	92	竪穴住居7~9	P3-a	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ
-	93	竪穴住居7~9	P3-b	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W14	21	竪穴住居7~9	P4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	79	竪穴住居7~9	P4-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	80	竪穴住居7~9	P4-c	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	78	竪穴住居7~9	P4-d	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	82	竪穴住居7~9	P4-e	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	81	竪穴住居7~9	P4-f	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	83	竪穴住居7~9	P4-g	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	94	竪穴住居7~9	P6-b	<i>Castanopsis</i>	シイ属
-	95	竪穴住居7~9	P6-c	<i>Castanopsis</i>	シイ属
W15	28	竪穴住居11	P1	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ
-	77	竪穴住居11	P2-a	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ
W16	6	竪穴住居11	P3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	4	竪穴住居11	P4-a	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc.	タブノキ
-	74	竪穴住居12	P2-a	<i>Castanopsis</i>	シイ属
W17	35	竪穴住居12	P3	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
-	73-1	竪穴住居13	P1-a1	<i>Prunus</i>	サクラ属
-	73-2	竪穴住居13	P1-a2	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
-	72	竪穴住居14	P1-a	-	-
W18	36	竪穴住居16	P1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W19	7	竪穴住居16	P3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W20	54	竪穴住居16	P4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W21	5	竪穴住居17	P1	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
W22	38	竪穴住居17	P2	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ
W23	32	竪穴住居17	P3	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
-	110	竪穴住居20	P1-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節

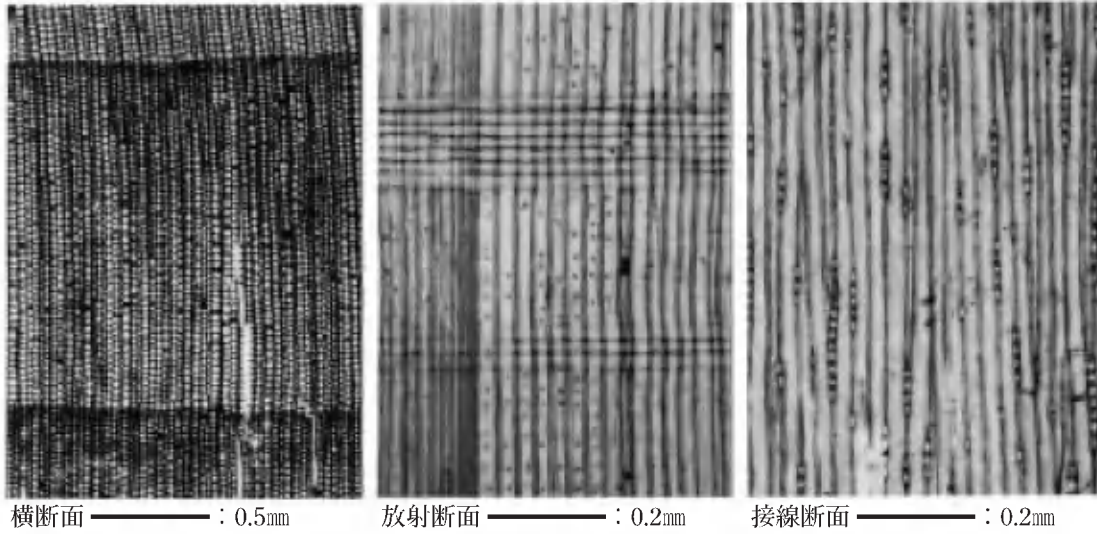
表 2 伊福定国前遺跡樹種同定結果

報告番号	鑑定番号	報告遺構名	出土箇所	出土箇所結果 (学名/和名)	
-	109	竪穴住居20	P2-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W24	33	竪穴住居17	P4	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W25	39	竪穴住居21	P1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	56	竪穴住居21	P1-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	58	竪穴住居21	P1-b	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	57	竪穴住居21	P1-c	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	61	竪穴住居21	P2-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	60	竪穴住居21	P2-b	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	59	竪穴住居21	P2-c	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	102	竪穴住居21	P3-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	104	竪穴住居21	P3-c	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	103	竪穴住居21	P3-d	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W26	41	竪穴住居23・24	P5	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W27	43	竪穴住居23・24	P5	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
W28	44	竪穴住居23・24	P5	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
-	予備 3	竪穴住居23・24	P9-b	<i>Castanopsis?</i>	シイ属?
-	予備 5	竪穴住居23・24	P9-d	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	予備 4	竪穴住居23・24	P9-e	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	予備 7	竪穴住居23・24	P13-b	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	予備 9	竪穴住居23・24	P16-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W29	52	竪穴住居23・24	P17	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W30	53	竪穴住居23・24	P17	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	76	竪穴住居23・24	P17-a	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	マツ属複維管束亜属
W31	49	竪穴住居23・24	P18	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W32	50	竪穴住居23・24	P18	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W33	51	竪穴住居23・24	P18	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	108	竪穴住居23・24	P18-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	91	竪穴住居23・24	P18-b	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
-	89	竪穴住居23・24	P18-c	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属
-	90	竪穴住居23・24	P18-d	<i>Podocarpus</i>	マキ属
W34	47	竪穴住居23・24	P20	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W35	48	竪穴住居23・24	P20	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	69	竪穴住居23・24	P20-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W36	29	竪穴住居23・24	P23	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W37	30	竪穴住居23・24	P23	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W38	31	竪穴住居23・24	P23	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
-	70	竪穴住居23・24	P27-a	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W39	40	竪穴住居27	P3	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W40	20	竪穴住居32・33	P8	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
W41	9	竪穴住居32・33	P10	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W42	10	竪穴住居32・33	P10	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
-	71	竪穴住居32・33	P10-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
W43	8	竪穴住居36	P2	<i>Castanopsis</i>	シイ属
W44	37	竪穴住居36	P1	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
-	75	竪穴住居36	P3-a	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W46	13	竪穴住居40	P1	<i>Castanopsis</i>	シイ属
W47	12	竪穴住居40	P2	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W48	25	竪穴住居41	P1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W51	34	井戸 3		<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W52	19	掘立柱建物 1	P2	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
W53	46	掘立柱建物 1	P4	<i>Platycarya strobilacea</i> Sieb. et Zucc	ノグルミ
W54	14	掘立柱建物 1	P7	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
W55	55	掘立柱建物 2	P2	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ

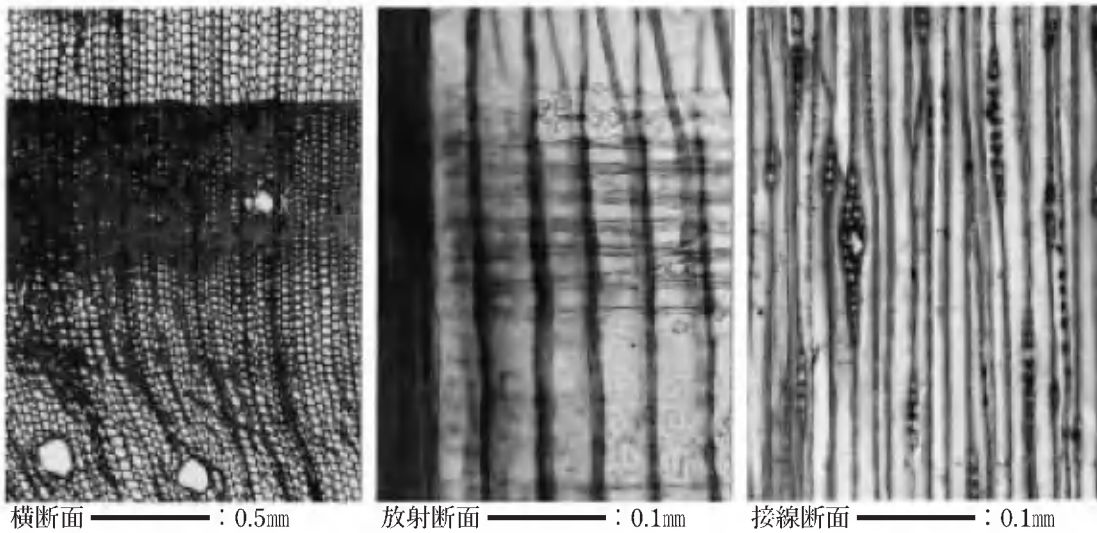
伊福定国前遺跡の木材 I



図版 1. 鑑定番号55 カヤ

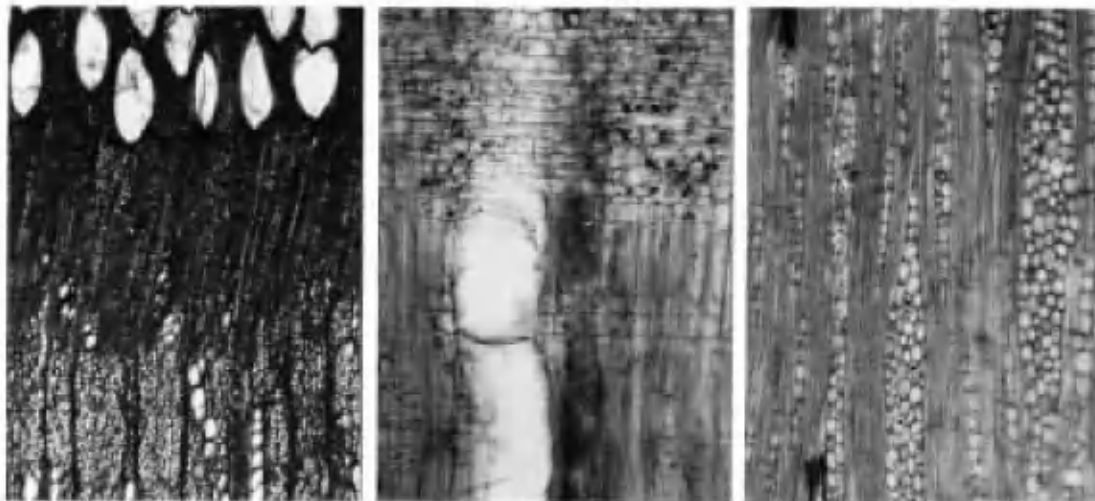


図版 2. 鑑定番号90 マキ属



図版 3. 鑑定番号88 マツ属複維管束亜属

伊福定国前遺跡の木材Ⅱ

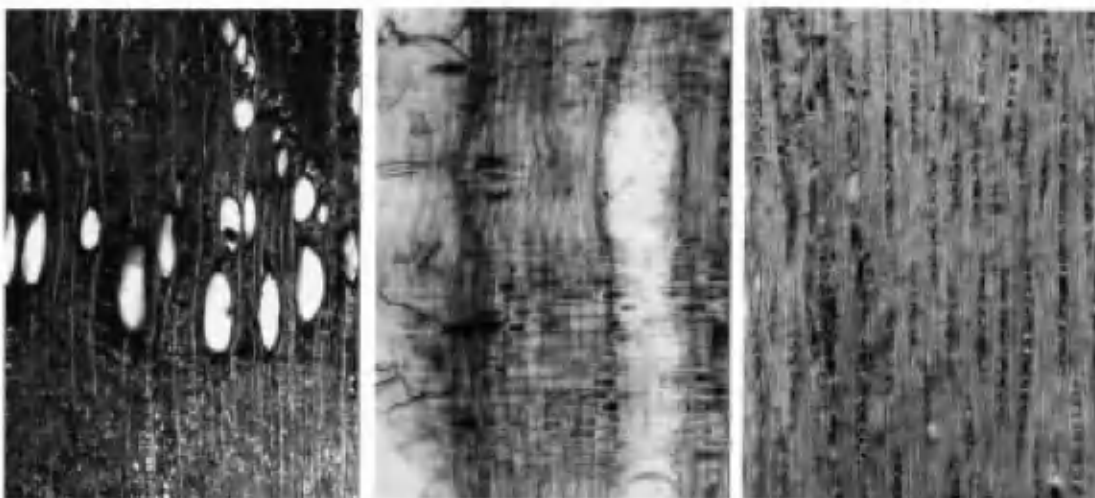


横断面 ————— : 0.5mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図版 4. 鑑定番号46 ノグルミ

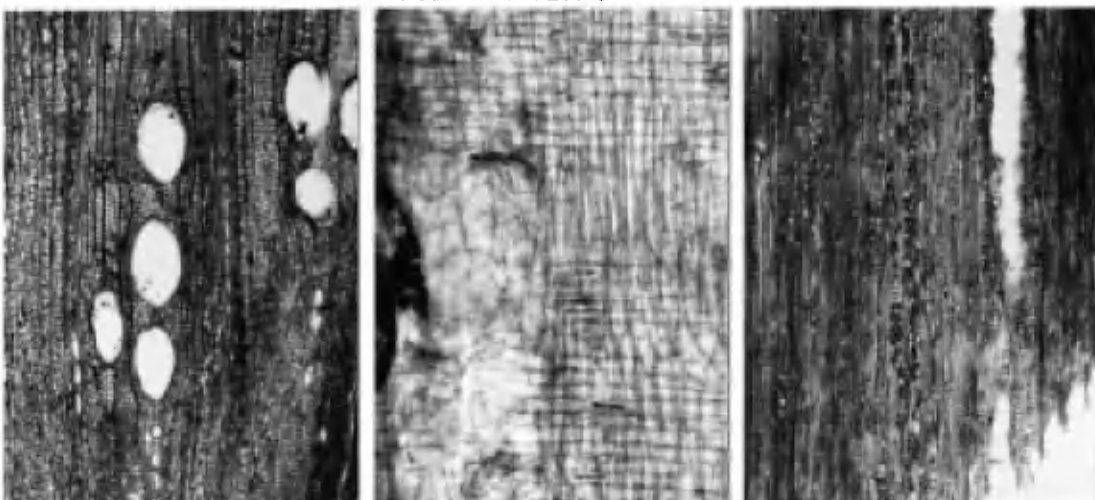


横断面 ————— : 0.5mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図版 5. 鑑定番号20 クリ



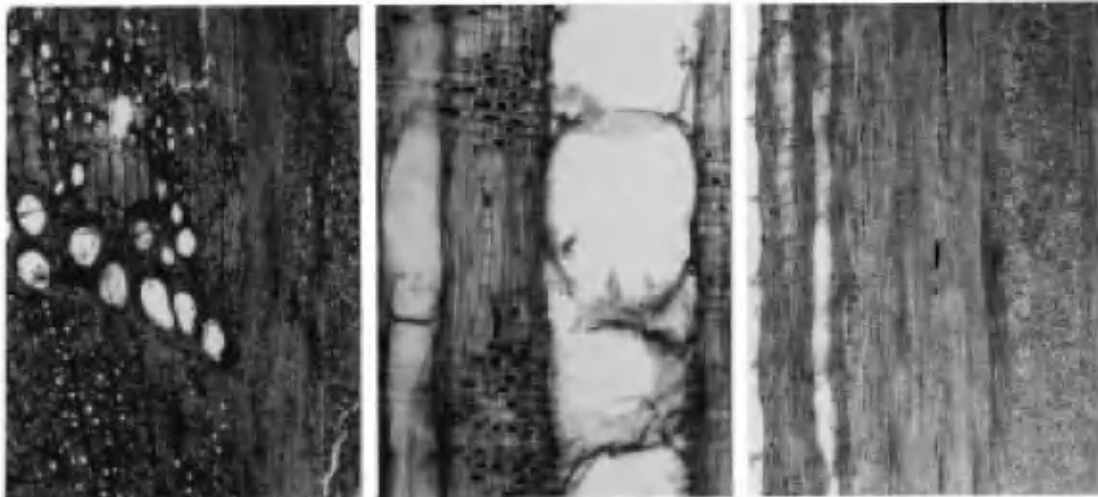
横断面 ————— : 0.5mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.5mm

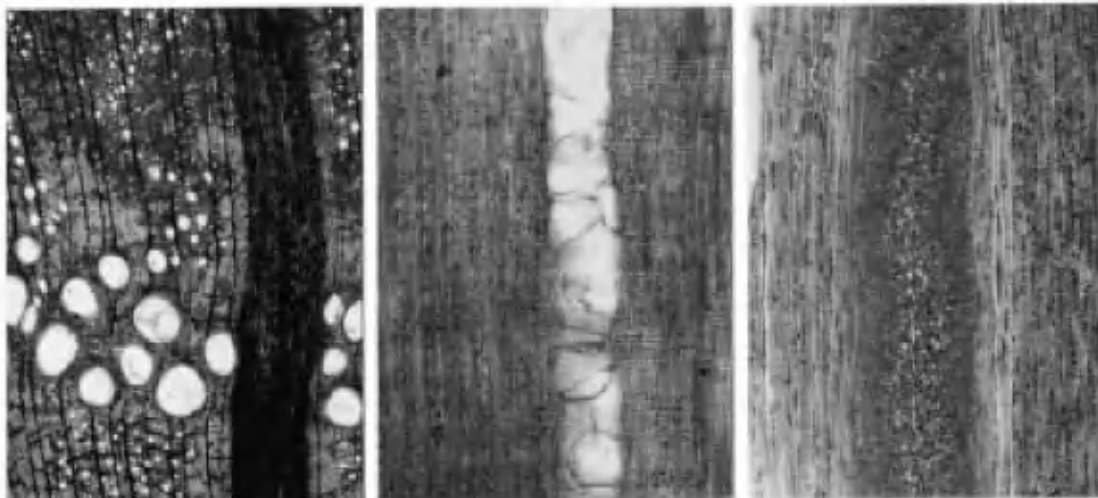
図版 6. 鑑定番号24 ツブラジイ

伊福定国前遺跡の木材Ⅲ



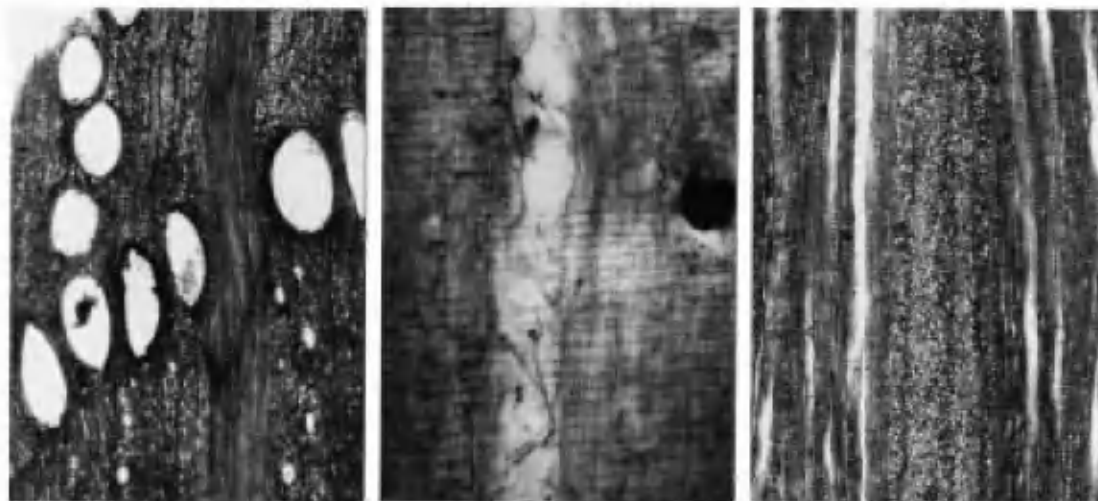
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.5mm

図版 7. 鑑定番号103 コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.5mm 接線断面 ————— : 0.5mm

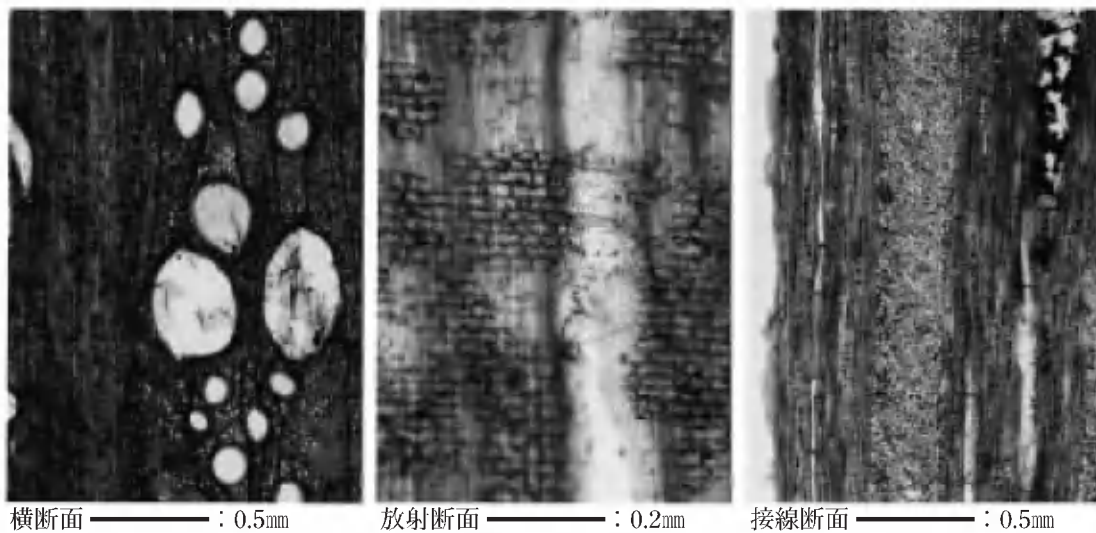
図版 8. 鑑定番号104 コナラ属コナラ節



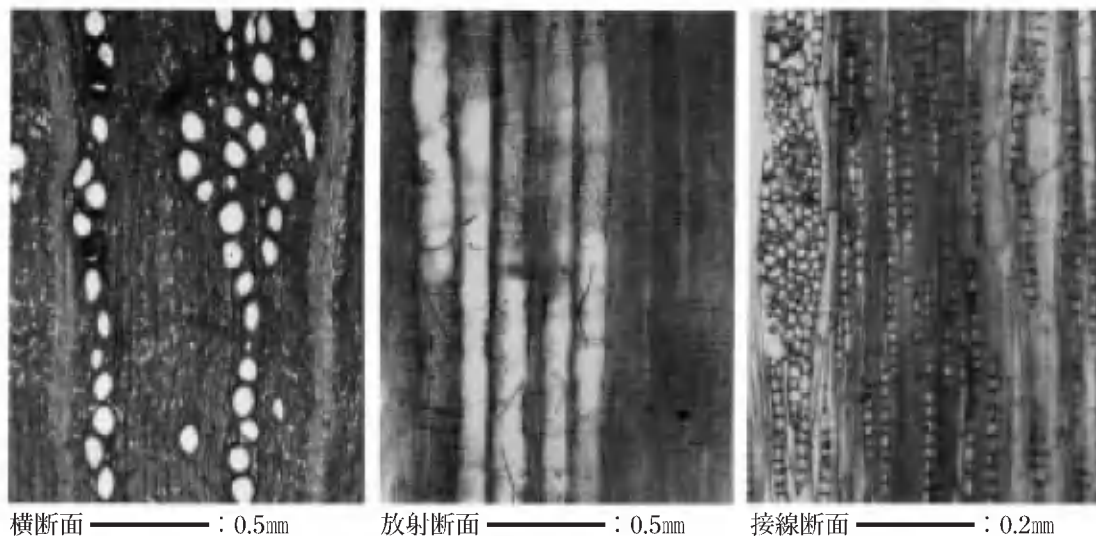
横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.5mm

図版 9. 鑑定番号81 コナラ属クヌギ節

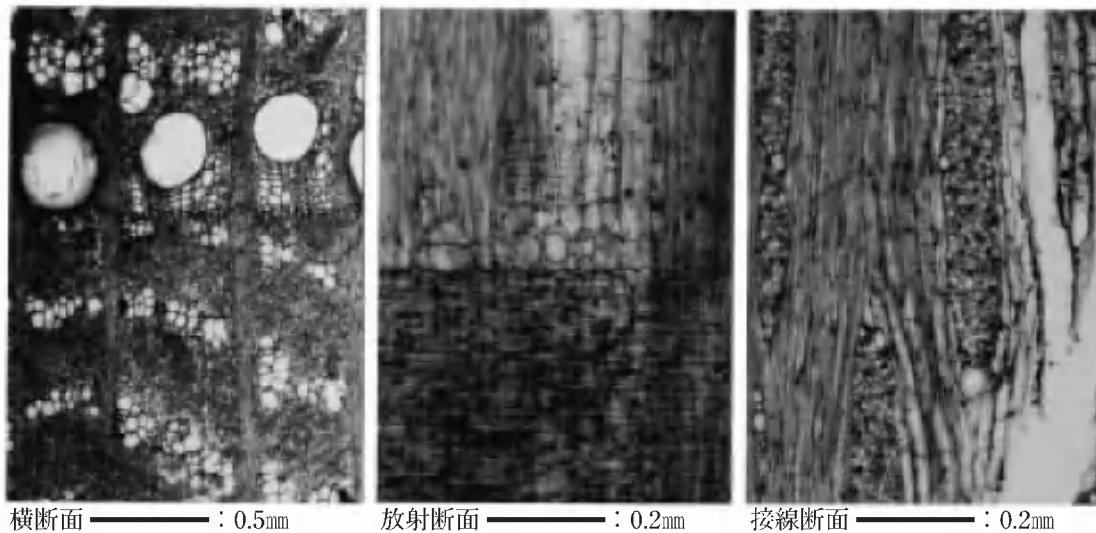
伊福定国前遺跡の木材IV



図版10. 鑑定番号予備4 コナラ属クヌギ節

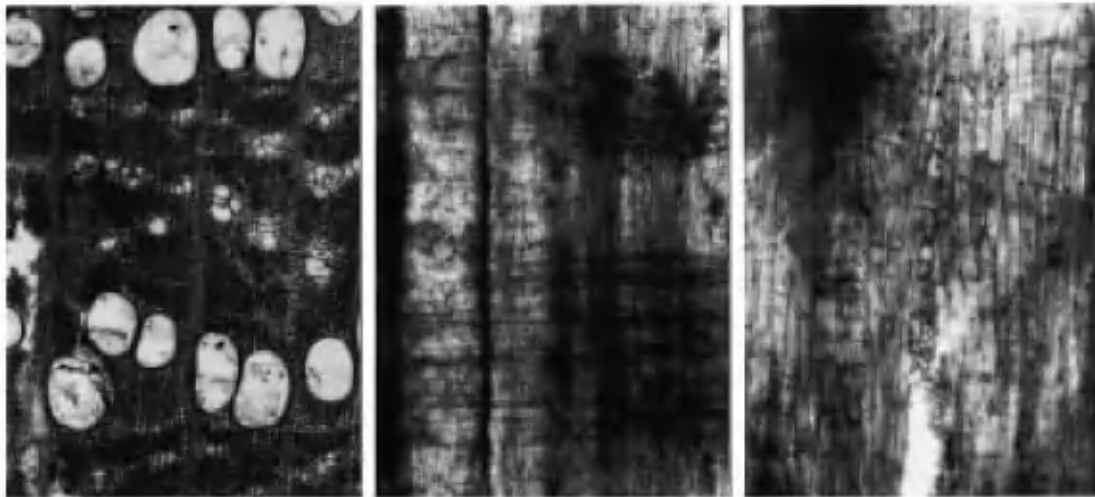


図版11. 鑑定番号73-2 コナラ属アカガシ亜属



図版12. 鑑定番号11 ケヤキ

伊福定国前遺跡の木材V

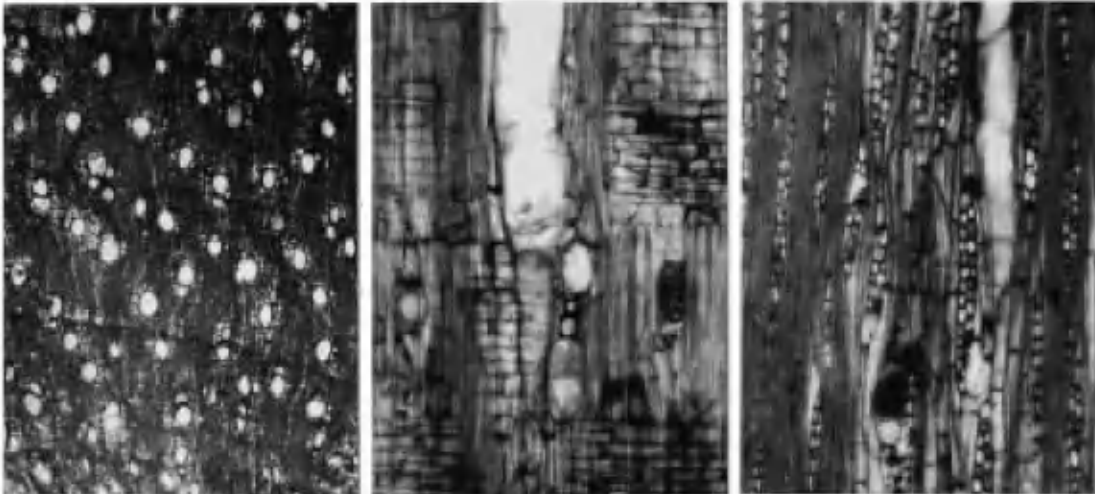


横断面 ————— : 0.5mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図版13. 鑑定番号38 ヤマガワ

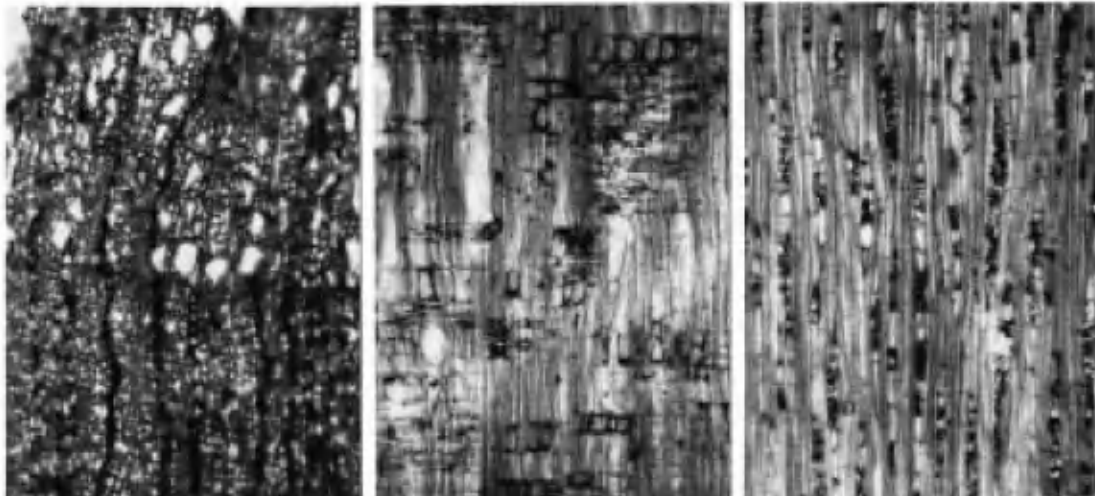


横断面 ————— : 0.5mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図版14. 鑑定番号14 タブノキ



横断面 ————— : 0.2mm

放射断面 ————— : 0.2mm

接線断面 ————— : 0.2mm

図版15. 鑑定番号90 ヤブツバキ

伊福定国前遺跡における古環境解析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

伊福定国前遺跡は岡山平野北部の沖積地に位置する。今回の発掘調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期（2世紀～4世紀頃）の竪穴住居跡が検出され、当該期に集落が営まれていたことが明らかとなってきている。本遺跡の東北方向側には弥生時代前期後半の水田が確認されている津島遺跡が隣接するが、伊福定国前遺跡では当該期の人間活動を示唆する遺物・遺構は確認されておらず、弥生時代前期頃の地理的環境が本遺跡と津島遺跡が位置する場所で異なっていたことが示唆される。そこで、今回の分析調査では、本遺跡における弥生時代後期後半以前の立地環境および古環境変遷に関する情報を得ることを目的として、自然科学分析調査を実施する。調査内容は、堆積層の年代に関する情報を得るために放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、堆積層中の珪藻化石や花粉化石・植物珪酸体の産状を調べ古環境変遷について検討する。一方、発掘調査時に検出された柱穴出土の植物遺体の同定や礎板の樹種について検討する。

1. 試料

試料は、遺跡の中でも基本的な層序が確認できる2区南壁で採取された（図1）。各層の層相変化は、調査時の所見に基づく、下位よりオリーブ黒色粗粒砂からなるxi層（試料10）、暗オリーブ色粘土混じり中粒砂のx層（試料9）、灰オリーブ色粘土混じり中粒砂のix層（試料8）、暗灰色砂混じり粘土のviii層（試料7）、暗灰黄色砂質粘土のvii層（試料6）、黒褐色シルト混じり砂のvi層（試料5）、黄褐色シルト質砂のv層（試料4）、黄褐色シルト質砂のiv層（試料3）、竪穴住居26埋土を挟んで中世包含層である暗灰黄色砂質シルトのii層（試料1）の順に堆積する。これらの試料の中から、放射性炭素年代測定用試料として2試料（試料8、9）、No.118住居覆土を除く各層から珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析用試料としてそれぞれ9試料（試料1、試料3～10）を選択し

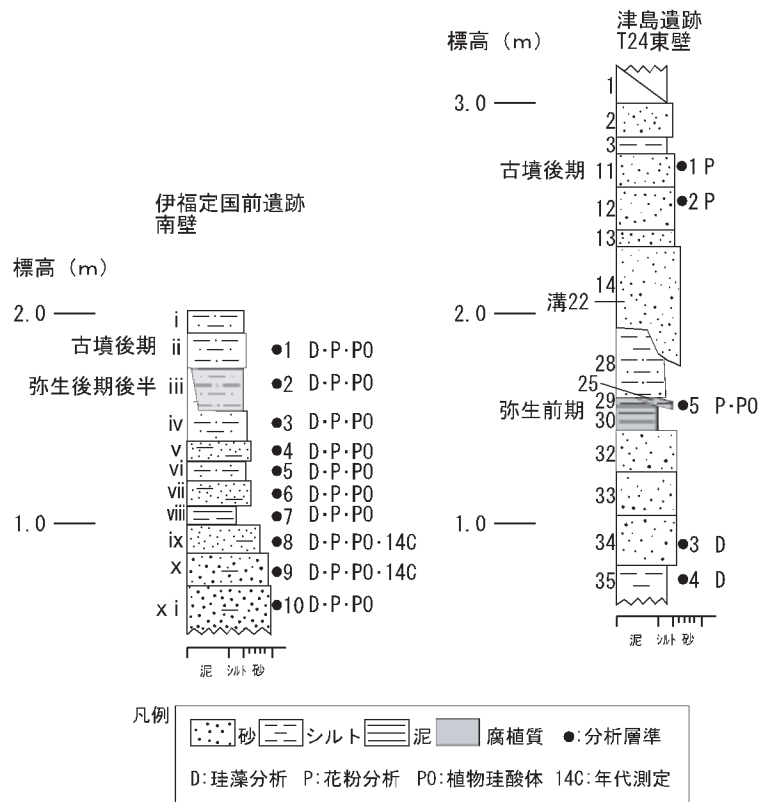


図1 調査地点および津島遺跡の層序
(津島遺跡の層序はパリノ・サーヴェイ2003による)

た。

また、これとは別に竪穴住居 5 の P 1 (第 4 層) から出土した植物遺体 1 点 (試料 1) と、竪穴住居 32・33 の P 2 から出土した植物遺体 1 点 (試料 2) の合計 2 点について植物遺体の同定を行う。試料を観察すると、試料 1 はスポンジ状で多数の微細な植物遺体片が集合しているように見える。試料 2 は、木材であるが、周囲には試料 1 に認められたような植物遺体片が付着している。よって、試料 1、2 のスポンジ状の植物遺体片については灰像分析、試料 2 の木片については樹種同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、Witkowski et al (2000) などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 3.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe (1995) の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料約 10 g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛: 比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9: 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の

区別が困難なものである。

(4) 植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(5) 灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社,1991）。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材などの種類が明らかになると考えられる。試料には、灰像の観察に障害となる有機物が含まれていた。そのため、試料を過酸化水素水と塩酸により有機物を除去し、灰化した。これを400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部（葉身と葉鞘）に由来した植物珪酸体を包含する珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて調べる。

(6) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、2に示す。試料の測定年代（補正年代）は試料番号8の2区南壁ix層が約2940年前、試料番号9の2区南壁x層が約2760年前の値を示す。

(2) 珪藻分析

結果を表3・図2に示す。試料9を除いて珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、下位の試料8～10が30%前後と化石の保存状態が悪かったが、これよりも上位の試料では60-70%と比較的良かった。産出分類群数は、37属197種類である。珪藻化石群集は、試料10-8、試料7-3、試料1で違いが認められる。

試料10～8は、試料9で珪藻化石の産出が少なかったものの、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種が混在する組成を示す。海水生種、海水～汽水生種、汽水生種の合計は、下位の試料10が約60%と高く、試料8で減少する。海水生種としては、塩分濃度35～26%の内

湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる内湾指標種群（小杉,1988）の *Paralia sulcata*、海水～汽水生種としては同じく内湾指標種群の *Cyclotella striata*-*C. stylonum*、汽水生種としては塩分濃度12～2%の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる汽水泥質干潟指標種群（小杉,1988）の *Pseudopodosira kosugii*、塩分濃度30～12%の泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる海水泥質干潟指標種群（小杉,1988）の *Nitzschia granulata*、淡水～汽水生種としては、*Amphora fontinalis*、*Navicula pusilla*、*Rhopalodia gibberula*、淡水生種としては *Cyclotella radiosa*、*Cocconeis placentula*、それに壊れていいたために同定不能の *Diploneis spp.* などが産出した。このうち *Pseudopodosira kosugii* は、完新世海進によって堆積した海成層の上限付近で特徴的に多産することから、海成層上限高度の認定に有効な種とされている（佐藤他,1996）。

試料 7-3 は、淡水域に生育する水生珪藻が80%前後と優占することで特徴付けられる。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真十好アルカリ性種（アルカリ性水域に最もよく生育する種）、真十好流水性種（流水域に最もよく生育する種）と流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占あるいは多産する。産出種の特徴は、好流水性の *Achnanthes convergens*、好流水性で中～下流性河川指標種群（安藤,1990）の *Achnanthes lanceolata*、*Cymbella sinuate*、*C. turgidula*、*Navicula viridula*、流水不定性の *Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、淡水浮遊性で湖沼浮遊性種群（安藤,1990）の *Cyclotella radiosa* 等が産出した。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができ、湖沼浮遊性種群とは、水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群のことである（安藤,1990）。

試料1になると、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻が約60%と多産することで特徴付けられる。その主なものは、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域

表 1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
8 (2区南壁 ix 層)	灰オリーブ色粘土混じり中粒砂	2940±40	-15.63	2939±39	IAAA-31216
9 (2区南壁 x 層)	暗オリーブ色粘土混じり中粒砂	2760±40	-14.50	2760±41	IAAA-31217

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表 2 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比
		cal BC	cal BC	cal BP	cal BP	
8 (2区南壁 ix 層)	2939±39	cal BC 1,255	— cal BC 1,244	cal BP 3,205	— 3,194	0.071
		cal BC 1,212	— cal BC 1,198	cal BP 3,162	— 3,148	0.106
		cal BC 1,193	— cal BC 1,138	cal BP 3,143	— 3,088	0.404
		cal BC 1,133	— cal BC 1,109	cal BP 3,083	— 3,059	0.168
		cal BC 1,101	— cal BC 1,072	cal BP 3,051	— 3,022	0.181
		cal BC 1,062	— cal BC 1,052	cal BP 3,012	— 3,002	0.069
9 (2区南壁 x 層)	2760±41	cal BC 968	— cal BC 962	cal BP 2,918	— 2,912	0.066
		cal BC 924	— cal BC 887	cal BP 2,874	— 2,837	0.409
		cal BC 883	— cal BC 834	cal BP 2,833	— 2,784	0.525

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表3 珪藻分析結果(1)

種 類	生態性			環境 指標種	2区南壁									
	塩分	pH	流水		1	3	4	5	6	7	8	9	10	
<i>Coscinodiscus granulatus</i> Grunow	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Coscinodiscus radiatus</i> Ehrenberg	Euh			A	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Coscinodiscus</i> spp.	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis nitescens</i> Schmidt	Euh				-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.)Cleve	Euh			B	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4
<i>Cyclotella striata</i> (Kuetz.)Grunow	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Cyclotella striata</i> -C. <i>stylorum</i>	Euh-Meh			B	-	-	1	-	-	-	2	3	12	-
<i>Diploneis smithii</i> (Breb.)Cleve	Euh-Meh			E1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis smithii</i> var. <i>rhombica</i> Mereschkowsky	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Diploneis</i> spp.	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Navicula marina</i> Ralfs	Euh-Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Euh-Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Achnanthes brevipes</i> Agardh	Meh			D1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
<i>Achnanthes brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
<i>Caloneis permagna</i> (Bailey)Cleve	Meh				-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Campylodiscus</i> sp.	Meh				-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Diploneis pseudovalis</i> Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Navicula</i> cf. <i>lacertosa</i> Hustedt	Meh				-	-	-	-	-	-	5	2	3	-
<i>Nitzschia cocconeiformis</i> Grunow	Meh			E1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow	Meh			E1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	5
<i>Nitzschia lorenziana</i> Grunow	Meh			E2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia vitrea</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	Meh				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Ophephora martyi</i> Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pseudopodosira kosugii</i> Tanimura et Sato	Meh			E2	-	2	2	-	1	3	6	2	18	-
<i>Rhopalodia musculus</i> (Kuetz.)O.Muller	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Thalassiosira lacustris</i> (Grun.)Hasle	Meh				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Amphora fontinalis</i> Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	1	1	5	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma nodiferum</i> (Grun.)Q.West	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula goeppertiana</i> (Bleisch)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	-	2	3	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pusilla</i> W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	1	9	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind		-	6	2	1	1	1	-	2	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	4	-	1	-	-	-	-	-	-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		4	1	-	-	3	7	2	4	4	-
<i>Achnanthes clevei</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	1	3	3	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes convergens</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	9	19	21	8	1	-	-	-	-
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	1	1	-	-	-	5	-	-	-
<i>Achnanthes japonica</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,T	-	-	2	6	2	1	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	6	2	9	5	5	-	-	-	-
<i>Achnanthes laterostrata</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Achnanthes linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	2	2	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-
<i>Achnanthes rostrata</i> Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes subhudsonis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	2	6	8	4	4	-	-	-	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	3	1	-	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	1	-	3	3	4	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	13	1	4	2	3	-	-	2	-	-
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	1	2	-	1	1	-	-	-	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	-	1	3	3	1	1	-	-	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Aulacoseira italica</i> var. <i>valida</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis angustivalva</i> Petit	Ogh-unk	unk	unk	Rl	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	2	1	1	-	-	-
<i>Ceratoneis arcus</i> var. <i>recta</i> (Cl.)Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	-	-	1	2	2	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis disculus</i> (Schumann)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	8	11	14	11	7	4	1	1	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	4	1	4	1	4	4	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis neothumensis</i> Krammer	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella radiosa</i> (Grun.)Lemm.	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	4	20	19	11	11	7	12	2	4	-
<i>Cyclotella rhomboideo-elliptica</i> Skuja	Ogh-hil	al-il	l-bi	M,S,U	-	4	1	2	3	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Cymbella cistula</i> (Ehr.)Kircchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	3	9	8	7	5	8	-	-	-	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	10	13	9	5	5	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	5	3	3	4	2	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> var. <i>gracilis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	8	6	5	7	1	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>ripponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	3	4	11	5	1	-	-	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	-	-	-	1	19	1	3	2	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	1	1	1	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	19	11	10	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		-	1	-	-	1	-	-	-	1	-
<i>Epithemia turgida</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	3	1	-	-
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	1	1	2	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	3	2	4	2	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>binodis</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	3	5	9	4	4	2	-	-	-	-

表 3 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	2区南壁									
	塩分	pH	流水		1	3	4	5	6	7	8	9	10	
Fragilaria exigua Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria pinnata var. lancetula (Schum.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	3	1	3	2	2	-	-	-	-
Fragilaria ulna var. arcus (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	4	5	3	2	3	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae var. capitellata (Grun.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Fragilaria virescens Ralfs	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Fragilaria virescens var. elliptica Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	1	3	1	-	-	-	-
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema acuminatum var. elongatum (W.Smith)Carruthers	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolok	Ogh-unk	unk	r-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		-	4	-	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	4	5	3	3	1	1	-	-	-
Gomphonema clevei var. inaequilongum H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	2	1	2	1	1	1	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	2	3	2	1	4	5	-	-	-	-
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing)Freguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	1	1	4	2	-	-	-	-	-
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	2	7	5	5	1	1	-	-	-
Gomphonema quadri-punctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema vibrio Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	29	5	1	1	-	8	2	1	1	
Hantzschia amphioxys var. capitata O.Müller	Ogh-ind	al-il	ind	RA	4	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula brekkaensis Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula capitatoradiata Germain	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula cohnii (Hilse)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	11	4	5	3	1	-	-	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	-	2	-	3	2	-	-	-	-
Navicula constans var. symmetrica Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RAT	6	3	1	-	-	1	-	-	-	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RAT	16	5	-	3	1	2	-	-	-	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	-	-	2	1	-	-	-	-	-
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula dismutica Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elegantoides Hustedt	Ogh-ind	al-il	unk		-	-	-	-	-	-	2	3	1	
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	1	-	2	1	1	-	-	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	-	1	1	3	2	-	-	-	-
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula hasta var. gracilis Skvortzov	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB,T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula menisculus Schumann	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	17	7	6	2	4	6	1	-	1	
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	7	1	-	-	-	-	-	-	-
Navicula pseudolanceolata Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula radiosa fo. nipponica Skvortzov	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula seminulum var. radiosa Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RLS	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula serjoensis H.Kobayasi	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
Navicula symmetrica Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	1	1	7	1	-	-	-
Navicula viridula var. linearis Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-
Navicula viridula var. rostrata Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium affine var. hankense (Skv.)Reim.	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	5	1	1	-	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		1	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Neidium dubium (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	10	1	1	-	1	-	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	-	1	-	1	4	-	-	1	
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	-	-	1	1	3	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	1	-	-	1	2	-	-
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	1	-	2	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Pinnularia graciloides Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Pinnularia hemiptera (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-	-	2	4	-	-	-	-
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-

表 3 珪藻分析結果(3)

種 類	生態性			環境 指標種	2区南壁									
	塩分	pH	流水		1	3	4	5	6	7	8	9	10	
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	3	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Pinnularia rivularis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderii Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	2	2	1	2	1	-	1	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia streptorapha Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	2	-	2	-	2	-	-	-	-	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia sudetica (Hilse)M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-	-	1	-	1	1	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	1	2	-	-	1	-	-	-
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Sellaphora laevisima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	1	4	-	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1	-	5	9	-	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	7	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus alpinus Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-bi		-	2	1	1	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus niagarae Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi	M	-	6	5	8	9	-	2	-	-	-
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Surirella bohemia Maly	Ogh-ind	ind	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Synedra inaequalis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,K,T	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Tetracyclus lacustris Ralfs	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	1	0	0	2	0	8	
海水～汽水生種					0	1	1	0	0	0	2	6	16	
汽水生種					1	3	4	0	2	4	17	4	35	
淡水～汽水生種					12	8	5	6	4	10	3	8	19	
淡水生種					189	191	196	206	204	189	79	31	26	
珪藻化石総数					202	203	206	213	210	203	103	49	104	

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Euh-Meh : 海水生種 - 汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH 不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh : 淡水 - 汽水生種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	unk : pH 不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk : 貧塩不明種		

環境指標種群

A:外洋指標種, B:内湾指標種, D1:海水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
 J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

に限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta fo. biceps*, *N. mutica* 等である。水生珪藻は、流水不定性の*Nitzschia amphibia* 等が産出した。

(3) 花粉分析

結果を表4・図3に示す。花粉化石の保存が全体的に悪く、試料1・3・4・5・9は花粉化石の検出数が非常に少なかった。他の試料についても保存状態が悪く、花粉や孢子化石の表面に風化の痕跡が認められる個体が多かった。

試料10は、草本花粉の割合が高く、その中でもヨモギ属の割合が高くなっている。木本花粉では、アカガシ亜属の割合が高く、モミ属、マツ属、コナラ亜属などが検出された。試料8-6は、シダ類孢子の割合が高く、花粉化石の保存状態も非常に悪い。木本花粉では、コウヤマキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、ブナ属などが検出された。草本花粉ではイネ科の割合が高くなっている。

(4) 植物珪酸体分析

結果を表5、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に

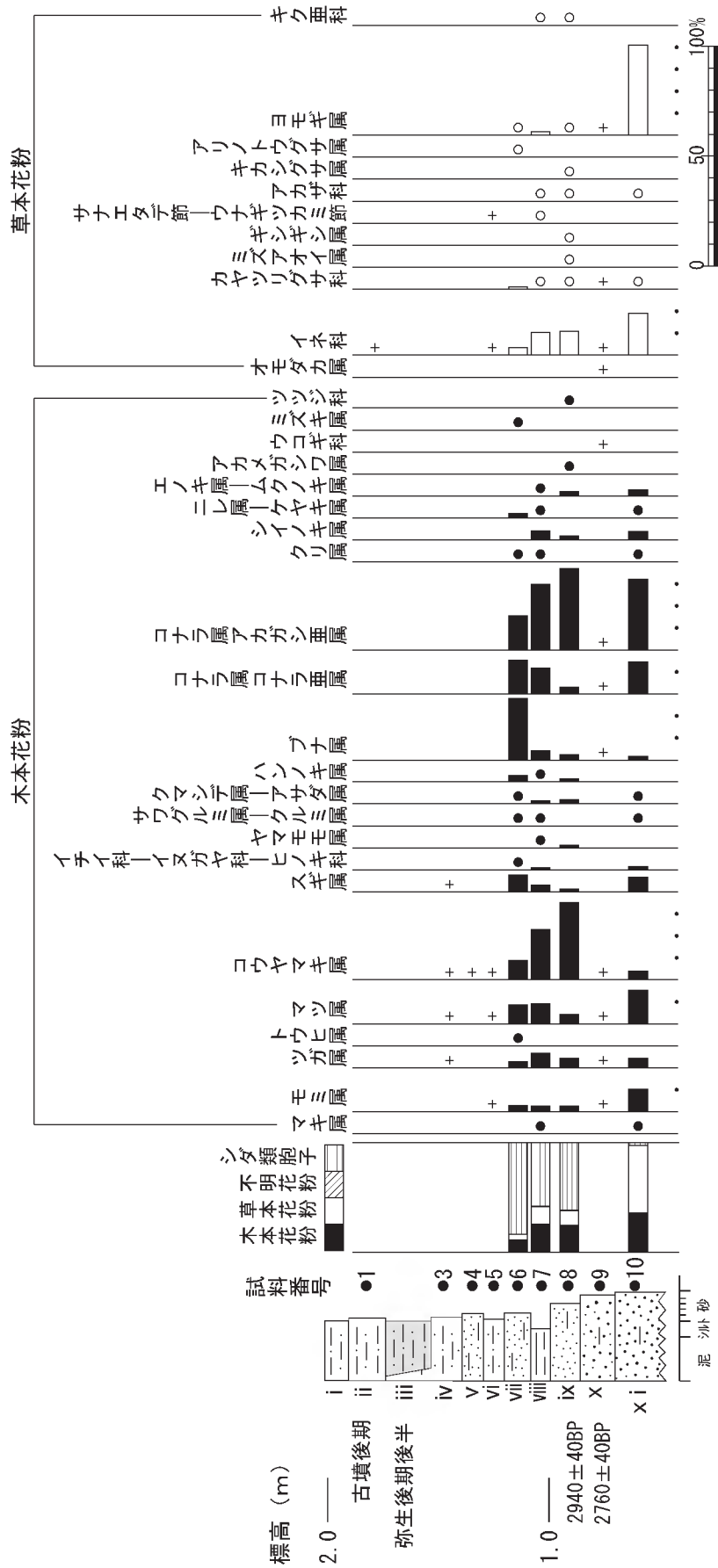


図3 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表4 花粉分析結果

種 類	試料番号	2区南壁									
		1	3	4	5	6	7	8	9	10	
木本花粉											
マキ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
モミ属		-	-	-	1	3	5	4	4	26	
ツガ属		-	1	-	-	3	13	7	8	11	
トウヒ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
マツ属複維管束亜属		-	1	-	-	-	3	1	1	12	
マツ属(亜属不明)		-	2	-	1	9	15	6	5	27	
コウヤマキ属		-	2	1	1	9	45	56	5	10	
スギ属		-	1	-	-	8	6	2	-	17	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	1	2	-	-	4	
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	1	2	-	-	
サワグルミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	
クルミ属		-	-	-	-	1	1	-	-	-	
クマシデ属-アサダ属		-	-	-	-	1	3	3	-	2	
ハンノキ属		-	-	-	-	3	1	2	-	-	
ブナ属		-	-	-	-	29	8	4	1	4	
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	16	23	5	3	37	
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	16	59	59	9	82	
クリ属		-	-	-	-	1	1	-	-	1	
シイノキ属		-	-	-	-	-	8	3	-	10	
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	2	1	-	-	2	
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	-	-	1	3	-	7	
ユズリハ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ツタ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ミズキ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ツツジ科		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
草本花粉											
オモダカ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イネ科		1	-	-	2	31	78	69	7	135	
カヤツリグサ科		-	-	-	-	10	6	4	2	7	
ミズアオイ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ギンギン属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	-	-	1	-	1	-	-	-	
アカザ科		-	-	-	-	-	2	2	-	1	
ナデシコ科		-	-	-	-	-	9	-	-	-	
アブラナ科		-	-	-	-	-	5	-	-	-	
マメ科		-	-	-	-	-	-	-	-	2	
キカシグサ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	
アリノトウグサ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ヨモギ属		-	-	-	-	2	13	4	1	291	
キク亜科		-	-	-	-	-	3	1	-	-	
タンポポ亜科		-	-	-	-	1	1	-	-	-	
不明花粉		-	-	-	-	1	5	4	-	-	
シダ類孢子											
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	1	8	4	19	4	1	
ゼンマイ属		-	-	-	-	9	4	4	-	1	
イノモトソウ属		-	6	-	3	27	21	35	6	-	
他のシダ類孢子		-	33	7	29	707	407	331	68	16	
合 計											
木本花粉		1	7	1	3	104	197	159	37	255	
草本花粉		1	0	0	3	45	118	83	11	436	
不明花粉		0	0	0	0	1	5	4	0	0	
シダ類孢子		0	39	7	33	751	436	389	78	18	
総計(不明を除く)		2	46	8	39	900	751	631	126	709	

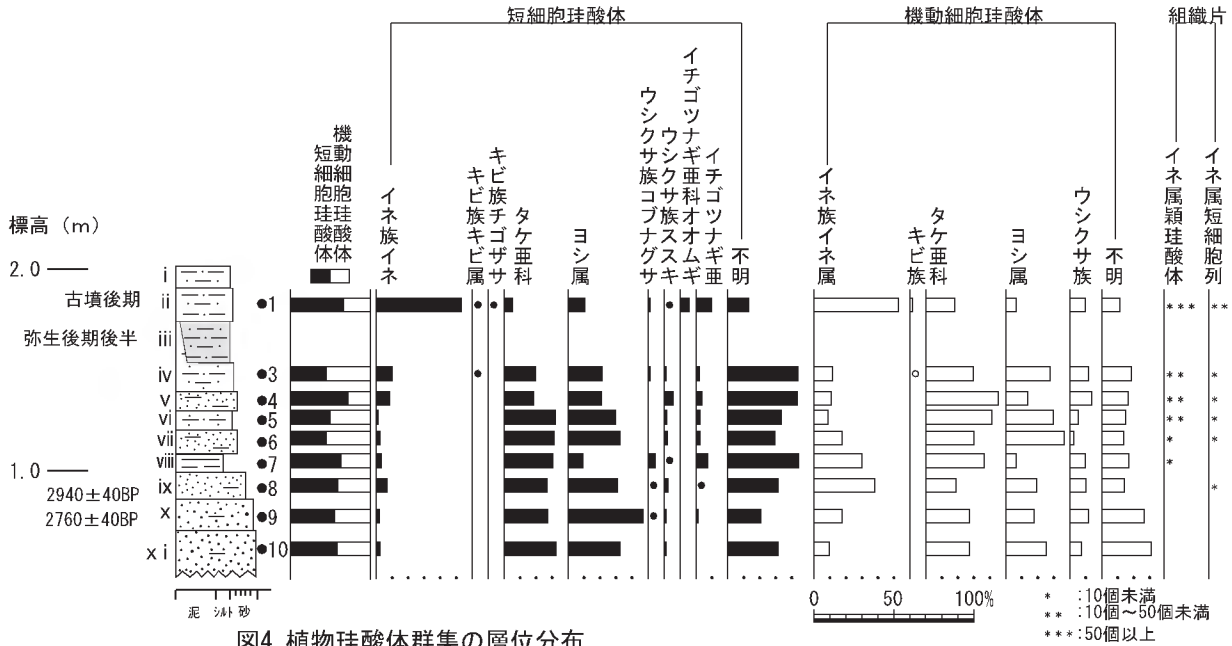


図4 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

表5 植物珪酸体分析結果

種 類	2区南壁									
	試料番号	1	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属		132	14	22	2	3	7	16	3	5
キビ族キビ属		2	1	-	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		13	28	49	56	41	65	65	41	64
ヨシ属		26	30	56	52	43	20	75	70	64
ウシクサ族コブナグサ属		3	2	-	-	-	10	2	1	-
ウシクサ族ススキ属		1	2	15	3	3	2	6	2	3
イチゴツナギ亜科オオムギ族		14	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科		24	3	10	4	3	16	2	2	-
不明キビ型		22	35	71	21	21	43	41	6	38
不明ヒゲシバ型		7	20	29	28	10	32	24	21	14
不明ダンテク型		3	7	16	10	8	20	11	4	10
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属		64	20	11	15	28	37	61	21	13
キビ族		2	1	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科		22	51	46	72	48	45	30	33	37
ヨシ属		8	48	14	52	59	8	31	21	34
ウシクサ族		12	20	14	9	4	12	16	14	10
不明		14	32	17	26	22	21	23	32	42
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体		248	142	268	176	132	215	242	150	198
イネ科葉身機動細胞珪酸体		122	172	102	174	161	123	161	121	136
総 計		370	314	370	350	293	338	403	271	334
珪化組織片										
イネ属穎珪酸体		158	16	40	25	3	2	-	-	-
イネ属短細胞列		40	4	5	1	1	-	1	-	-

多数の小孔（溶食痕）が認められる。各試料では検出する種類が共通するが、産状には層位的な変化が見られた。

試料10～9では、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。また、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体も検出され、試料番号9では機動細胞珪酸体の産出も目立つ。この他、コブナグサ属あるいはススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められた。

試料8ではイネ属の出現率が増加し、とくに機動細胞珪酸体は約38%である。また、タケ亜科やヨシ属の産出も目立つが、下位の試料よりも減少する傾向が見られた。

試料7では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が約30%と高いものの、下位よりも減少した。また、ヨシ属も減少し、タケ亜科、コブナグサ属やイチゴツナギ亜科の増加が見られた。

試料6・5は、下位から引き続きイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が減少するものの、稲粃殻に形成される穎珪酸体は検出個数が増加した。また、ヨシ属が増加し、タケ亜科とともに産出が目立つ。

試料4・3では、タケ亜科やヨシ属が減少するものの、他の種類と比較して産出が目立つ。イネ属は、やや増加した。

試料1では、イネ属の短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体、穎珪酸体の産出が顕著に目立つ。また、栽培種を含む分類群であるキビ属やオオムギ族も認められるが、検出された植物珪酸体の形態による栽培種か否かの判別が困難である。この他、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められた。

（5）灰像分析

竪穴住居5のP1（第4層）で認められたスポンジ状の植物遺体および竪穴住居32・33で検出されたP2の木材片周囲に認められたスポンジ状の植物遺体には、イネ属穎珪酸体が数多く認められることから、微細な植物遺体はイネの粃殻と考えられる。

（6）樹種同定

竪穴住居32・33で検出されたP2の木材片は、落葉広葉樹のクマノミズキ類に同定された。主な解剖学的特長を以下に記す。

・クマノミズキ類 (*Cornus*) ミズキ科ミズキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界付近でやや管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性で、1-6細胞幅、1-30細胞高。組織の特徴から、ミズキ属のクマノミズキまたはヤマボウシと考えられる。

4. 考察

4-1. 2区南壁の古環境

今回調査を行った2区南壁地点の堆積層ii層～ix層は、放射性炭素年代測定結果および出土遺物による相対年代から、約2900年前以降、古墳時代後期にかけて形成された堆積物であることが推定される。ここでは分析に供した不攪乱堆積物試料の層相、および珪藻化石・花粉化石・植物珪酸体の産状に基づいて、調査地点における堆積環境および古植生変遷について考察を行う。

（1）堆積環境

x i層：調査地点最下位のx i層はシルト・細粒砂がまじる粗粒～中粒砂からなる。生物擾乱の痕跡が認められる。珪藻化石群集は、海水～汽水生種が50%以上を占めることが特徴であり、各種群の

生態性をみると、汽水泥質干潟指標種、内湾指標種、海水泥質干潟指標種などが認められた。このほか淡水性種も認められた。これらのことと、上位層にかけて上方細粒化することから、本層準が形成された頃の調査地点は、感潮河川域もしくは河口干潟のような堆積環境であったことが推定される。なお、本層準で多産する*Pseudopodosira kosugii* は、完新世海進によって堆積した海成層の上限付近で特徴的に多産することから、海成層上限高度の認定に有効な種とされている（佐藤他,1996）。本種の多産は隣接する津島遺跡（T42）でも確認されている（図1 試料3層準で多産）。その産出層準の標高は、津島遺跡+0.8m前後、本遺跡では+0.7mであり、地点間で大きな比高差は認められない。

x層：シルト・粗粒砂が混じる細粒～中粒砂からなり、層相から河川堆積物と判断される。珪藻化石は少なく、わずかに検出された種群はx i層や上位のix層で産出する種群であった。堆積物中に取り込まれる珪藻化石が少なくなっていることから、堆積環境が変化している可能性が高いが、詳細は不明である。

ix層：シルト質中粒砂からなり、淘汰はあまりよくない。生物擾乱の痕跡が認められる。珪藻化石群集は下位のx i層と共通する種群が認められるが、淡水性種の割合が高くなる点で明瞭に区分される。淡水性種では流水性種・止水性種が認められるが、このうち止水性種の*Cyclotella radiosa* は、後述するように誘導化石である可能性が高い。これらのことから、本層は河成堆積物からなることが推定され、調査地点は河川氾濫の影響をうける氾濫原あるいは後背湿地のような堆積環境へ変化したことが推定される。これらx層・ix層の放射性炭素年代測定値は補正年代値で各々2760±60、2940±40B.P.を示した。この年代値は津島遺跡の弥生時代前期の水田を構成する堆積物から出土した炭化物の年代にほぼ一致している（古環境研究所,2003）。後述するように本層準からは栽培種のイネ属植物珪酸体も多産しており、本層準が津島遺跡における弥生時代前期の水田が確認されている層準に対比される可能性がある。そうだとすると、津島遺跡における弥生時代前期水田層の形成期は、本遺跡近辺では干潮河川域から河川の氾濫を頻繁に受ける堆積環境へ変化する時期ということになる。この点については、今後、調査地域の層序に関する堆積学的検討およびそれに基づく地形発達史の検討を行い、再評価していく必要がある課題である。

viii層～iv層：各層の層相は、viii層が細粒砂混じり粘土質シルト、vii層がシルト質細粒砂からなり、いずれも明瞭な生物擾乱の痕跡は認められない。vi層は炭化物が混じる細粒砂質シルト、v層がシルト質細粒砂、iv層が細粒砂質シルトからなり、いずれも生物擾乱を受ける。特にiv層は径2～3mm程度のシルトからなる集合体（粒団）が確認される。一方、珪藻化石群集は層位的に大きく変化せず、干潟種を含む海水性種はほとんど産出しなくなり、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産することが特徴である。淡水浮遊性種群の*Cyclotella radiosa*、*Stephanodiscus niagarae* 等も目立った産状を示すが、これらの種類は水深のある湖沼域にほぼ限定されて生育する種であり当時の調査区が湖沼に位置していたとは考え難いこと、旭川上流部に分布する中期更新統の蒜山原層内に挟在する珪藻土の優占種でもある（広田,1972）ことから、堆積物とともに上流域より再堆積した誘導化石であると判断される。このことから、viii層～iv層は河川の氾濫を頻繁に受ける不安定な後背湿地もしくは氾濫原の堆積環境で形成されたことが推定される。本地点が離水するのは土壤構造が確認されたiv層以降の時期といえる。

ii層：本層は細粒砂混じりシルトからなる。鉛直方向に伸びる幅1mm前後の植物根痕が密に観察され、酸化鉄・マンガンが沈着する。擾乱も著しい。珪藻化石群集は陸生珪藻の卓越で特徴づけられる。わず

かに流水性種なども認められることから河川の氾濫の影響も受けることがあったと考えられるが、基本的には土壌が発達する好気的な堆積環境であったことが推定される。本層準では、花粉化石がほとんど検出されなかったが、このような微細な植物遺体は分解消失してしまったと考えられる。なお、本層は中世の遺物包含層とされており、周囲には古代人が生活できる乾陸地が広がったと考えられる。

(2) 古植生変遷

花粉化石は x i 層～vii 層から比較的多産した。花粉化石の保存状態は全体的に悪く、ix～vii 層（試料 8～6）ではシダ類孢子や針葉樹花粉が多く、x i 層（試料 10）と比べて組成が大きく変化している。この変化は堆積物中での花粉化石の保存状態の違いに起因し、花粉化石は広葉樹花粉よりも針葉樹花粉やシダ類孢子の方が、風化に対する耐性が強いと考えられている（徳永・山内,1971；中村,1967など）ことから、ix～vii 層では風化に強い花粉化石が選択的に残存し相対的に割合が高くなっている可能性がある。すなわち、本変化は周辺植生が変化したためとは考え難い。

岡山平野で行われた花粉分析では、津島江道遺跡（三好・多田,1988）、津寺遺跡 2（パリノ・サーヴェイ株式会社,1995）、百間川沢田遺跡 3（パリノ・サーヴェイ 1993）などがある。この他当社では津島遺跡や津寺遺跡、原尾島・沢田遺跡などでも分析を実施している。これらの成果をみると、縄文時代末～古墳時代頃の古植生としては、木本花粉ではいずれもアカガシ亜属の割合が高く、シイやカシなどを主とする暖温帯林（いわゆる照葉樹林）であったことが推測されている。今回の木本花粉の結果をみても、弥生時代後期以前自然堆積層の x i 層（試料 10）～viii 層（試料 7）ではアカガシ亜属が多産することから、同様な古植生が推定される。ただし、この時期の花粉化石群集では、コナラ亜属やマツ属復維管束亜属といった二次林を構成する要素の産状が目立っており、二次林的な林分の存在も示唆される。vii 層ではブナ属の花粉化石が多くみられたが、保存状態が悪いことや流水の影響を受ける不安定な堆積場であったことを考慮すると、周辺植生が変化したとは考えにくい。おそらく、誘導化石や、保存状態の差異などが組成の変化に影響しているものと思われる。また、モミ属、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属などといった針葉樹花粉も多く検出されている。これは、先に挙げた岡山市内各地点の花粉分析結果でも検出されるが、今回ほど顕著ではない。おそらく、保存状態が悪いため、風化に強い針葉樹花粉が相対的に高くなったことに由来するとみられる。上記の各地点の花粉分析結果では、これらの針葉樹花粉は後背山地を中心に分布していた温帯性針葉樹林に由来すると考えられている。この時期近畿地方では、温帯性針葉樹の花粉化石が増加する傾向があり、その理由として、気候の多雨・冷涼化による影響が指摘されている（那須,1989など）。しかしながら、瀬戸内海沿岸地域では、温帯針葉樹の花粉化石は各地で検出されるものの、その増加は明瞭にみられないとの指摘もある（三好,1998）。今回の温帯針葉樹の多産は保存状態の差異の影響が主な原因と考えられるが、本時期の植生変化については、今後も情報の蓄積が必要である。また、コナラ亜属、ケヤキ属、エノキ属、ムクノキ属などは平地林を構成する要素でもあり、当時の平地林の存在についても今後の課題である。

低地の植生を構成していたとみられる草本植物に由来する植物化石は、弥生時代後期以前に形成された x i 層～iv 層では、花粉化石でイネ科やヨモギ属などの草本類、植物珪酸体でタケ亜科やヨシ属が多産し、コブナグサ属やススキ属などのウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されている。これらのうち、植物珪酸体において比較的多産したタケ亜科やヨシ属は互いに生育環境を異にする分類群である。おそらく、調査地点周辺や集水域の乾いた場所に生育したものや湿潤な場所に生育したものに由来する花粉・植物珪酸体が碎屑物とともに堆積層内に取り込まれたものと考えられる。すなわ

ち、弥生時代後期以前の x i 層～iv 層の時期には、調査地点後背の低地には、ヨシ属などが分布する湿地やタケ亜科などが分布する草地などが形成されていたことが推定される。また、層的变化をみると、ix 層・viii 層において栽培種のイネ属が増加し、タケ亜科・ヨシ属が減少しており、両層形成期の後背低地の植生が変化している可能性が考えられる。ix 層・viii 層は、先述したように津島遺跡の弥生時代前期後半の水田層に年代的に対比される可能性がある。津島遺跡の弥生時代水田層では、多産していたヨシ属が減少し、栽培種のイネ属が増加する植物珪酸体の層位変化が確認されている。今回の ix 層・viii 層で認められた変化と同調的な変化として注目される。

中世の遺物を包含する ii 層になると、上記したように堆積環境は大きく変化し、調査地点周辺には乾陸地が広がっていたことが推定される。本層準において花粉化石がほとんど検出されなかったのも、このような環境に起因し、花粉化石が分解消失してしまったためと考えられる。また、植物珪酸体組成において、湿潤な場所に多いヨシ属が低率になっていることも調和的な結果といえる。栽培種のイネ属が高率に出現することから、当時の低地の植生は人間活動の影響を強く受けたものであったことが示唆される。

(3) 水田稲作の検討

栽培植物のイネ属に由来する植物珪酸体は、今回分析を行った弥生時代後期後半以前の x i 層～iv 層の全層準から検出された。特に ix 層では短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体、viii 層では機動細胞珪酸体の出現率が高かった。現在の水田上壤中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は 9% であるが、稲藁を堆肥として与えている水田では 16% に上がるという結果が得られている (近藤, 1988)。この調査例を参考にすれば、ix 層と viii 層形成期に本地点や近傍で稲作が行われていた可能性が高いことになるが、上述の堆積環境から判断すると、上流域からの再堆積の可能性が高い。先述したように年代測定結果から、x・ix 層は津島遺跡の弥生時代前期水田層に相当する可能性があり、当時の上流側では稲作が行われていたことから、その可能性は充分考えられる。この点については、本遺跡から津島遺跡にかけての地形形成過程を明らかにした上で再評価を行う必要がある。

vii 層-iv 層ではイネ属の出現率が低いものの連続して検出され、イネ属類珪酸体の検出個数は増加傾向を示す。これらの堆積層は、上述したように氾濫堆積物の可能性が高い。上記した ix 層・viii 層のイネ属と同様に調査地点近辺での稲作の存在、あるいは再堆積したものである可能性が考えられる。隣接する津島遺跡において弥生時代前期以降の水田が確認されていることと調和する結果といえる。古墳時代の遺物を包含する ii 層ではイネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体・穎珪酸体が多産した。これらの産状から、ii 層中にはイネ属植物体に由来する稲藁や稲粃殻が混入していることが示唆される。また、本層準からは栽培種を含む分類群であるキビ属やオオムギ族も認められたが、上位の近世-近代の耕作土からの落ち込みの可能性もあり、当時利用されていたかは、今後の調査課題としたい。

4-2. 住居出土の植物遺体について

竪穴住居 5 の P1 (第 4 層) で認められた植物遺体および竪穴住居 32・33 で検出された P2 の木材片周囲に認められたスポンジ状の植物遺体は、いずれも稲粃殻に同定された。この粃殻は炭化しておらず、胚乳などは全く確認されなかったことから、脱穀後の粃殻と考えられる。粃殻の利用に関しては、各遺構の状況など考古学的成果と合わせた評価が必要である。

竪穴住居 32・33 で検出された P2 の木材片は、ミズキ属のクマノミズキまたはヤマボウシに同定された。クマノミズキ・ヤマボウシは山林中に見られる落葉高木であり、上述した花粉分析結果でもミ

ズキ属が確認されていることから、遺跡周辺に分布していたものを利用している可能性が高い。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and saproxenous taxa. Diatom,10,35-47.
- 原口 和夫・三友 清・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 広田 昌昭,1975,岡山県蒜山原層の化石珪藻について.地球科学,20, 6, 253-261.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27, 1-20.
- 近藤 鎌三・佐瀬 隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.
- 近藤 鎌三,1988,十二遺跡十壤の植物珪酸体分析.鑄師屋遺跡群十二遺跡一長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一,御代田町教育委員会,377-383.
- 株式会社古環境研究所,2003,津島遺跡における放射性炭素年代測定.一津島遺跡 4 一岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査(第2分冊),547-548,
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA,BAND 26,353p.,BERLIN・STUTTGART.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1986,Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae.Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1988,Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Suriellaceae.Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991a,Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991b,Bacillariophyceae,Teil 4,Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema.Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,248p., Gustav Fischer Verlag.
- 三好 教夫,1998,中国・四国地方の植生史.図説 日本列島植生史,安田 喜憲・三好 教夫編,朝倉書店,138-150.
- 三好 教夫・多田 由美子,1988,原遺跡(岡山県御津町)と津島江道遺跡(岡山市)の花粉分析.鎌木 義昌先生古稀記念論文集 考古学と関連科学,鎌木 義昌先生古稀記念論文集刊行会,437-444.前田 保夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷.宮脇 昭(編著),日本植生誌 近畿,至文堂,87-99.
- 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
- 那須 孝悌,1989,活動の舞台:概論.弥生文化の研究 1 弥生人とその環境,雄山閣,119-130.
- 佐藤 裕司・谷村 好洋・横山 祐典,1996, Melosira 属の珪藻の特徴的な種類:日本の完新世におけるマリーナリミットの指標. 第四紀研究,35, 2, 99-107.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1993)植物化石分析報告.岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡 3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査 VIII,岡山県文化財保護協会,405-426.
- パリオ・サーヴェイ株式会社(1995)津寺遺跡西川長作の土壌分析.岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 津寺遺跡2 山陽自動車建設に伴う発掘調査10 (その2),日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会,629-634.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,1991,自然科学分析.東京都新宿区戸山遺跡一厚生省戸山研究舎(仮称)建設に伴う緊急発掘調査報告書一本文編,戸山遺跡調査会,133-168.
- 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- Witkowski,A., H.Lange-Bertalot, and D.Metzeltin,2000,Diatom flora of Marine coast I Iconographia Diatomologica 7:881p.,Koeltz Sci. Koenigstein.

伊福定国前遺跡出土の赤色顔料

志賀 智史

九州国立博物館（仮称）設立準備室 本田 光子

1. はじめに

岡山市伊福定国前遺跡出土の赤色顔料について調査する機会を得たので、その結果を報告し若干の考察を行いたい。

現在までの知見によれば、墳墓出土赤色顔料は鉄（Fe）を主成分とするベンガラ〔酸化第二鉄： Fe_2O_3 等〕と水銀（Hg）を主成分とする朱〔赤色硫化水銀： HgS 〕の二種が用いられている。これら以外に古代の赤色顔料としては、鉛（Pb）を主成分とする鉛丹〔四酸化三鉛： Pb_3O_4 〕があるが、墳墓から検出された例はまだない。

これらの赤色顔料の材質を念頭におき調査を実施した。

2. 試料

土壌出土の赤色土壌（試料 1, 4）、井戸 3 出土の鉢付着赤色物（試料 2）、土壌63出土の石柁付着赤色物（試料 3）の合計 4 点である。資料の時期は全て弥生時代後期後半と考えられている。遺跡からの赤色物および赤色物付着遺物の取り上げは発掘調査担当者がおこない、その中から筆者等がサンプリングをおこなった。

3. 方法

赤色物が「赤色顔料（考古学的に意味のある赤色物）」であるか否かを判断するために以下の方法を用いた。基本的な方法は、各種顕微鏡を用いて拡大して「見る」だけであり、自然科学的な測定法を用いることは最小限にとどめている。現在まで考古資料として認識されている資料の多くは、土器や石器といった肉眼での形態把握が可能なものに限られている。粉体である赤色顔料をこれらと同じ考古資料として論じるためには、微小な資料を拡大して見ることによって全体の外観と粒子の形態を観察することが必要と考えるからである。

顕微鏡観察 実体顕微鏡（6～40倍）および生物顕微鏡（50～400倍）で赤色物を観察する。実体顕微鏡では赤色物を直接観察し、生物顕微鏡では一試料毎に複数枚作成したプレパラートを落射光および透過光で観察した。三者の赤色顔料はそれぞれ特徴を持った外観を有しているので、特に微粒のものが混在していなければ、この時点で試料の材質や状態などについてはほぼ経験的に見極めがつく。ベンガラ粒子を認めた場合は電子顕微鏡（SEM, 20～100000倍）を用い粒子形態を観察する。なお、試料評価にあたって断面情報が必要と判断した場合は、顔料とともに被付着物の小破片をサンプリングし、エポキシ樹脂に包埋・研磨後、各種顕微鏡で観察をおこなった。

主成分元素の同定 蛍光X線分析を行った。赤色の由来となる元素として、朱は水銀（Hg）、ベンガラは鉄（Fe）、鉛丹は鉛（Pb）が検出される。ただし、土壌や土器にはもともと元素としての鉄（Fe）が含まれているので、その由来を判断するために顔料粒子の有無を必ず検鏡している。測定機器は、試料を直接測定する場合は、堀場製作所製MESA500S（電圧:15Kv,電流:440 μ A,時間:50秒,大気、電圧:50Kv,電流:24 μ A,時間:50秒,大気）を用いた。試料が微量の場合は、実体顕微鏡下で赤色部分のみ

をサンプリングし、PHILIPS社製電子顕微鏡XL-20に付帯するEDAX社製DX-4（電圧：20Kv，電流：70 μ A，時間：100秒，真空）を用いた。

4. 結果と考察

分析結果を表1に表す。

試料1, 4の赤色物は微量であり、特徴的な粒子を含んでいない。木炭や灰とともに認められるため、焼土に由来すると考えた。

試料2, 3は朱。試料2の土器は、土器焼成時に内外面とも黒化している（写真5）。赤色顔料は、主に土器内面の口縁部に部分的に認められる。外面にも極微量が確認できるが顕著なものではない。表面観察から、内面への付着状況はほとんどが土器調整痕の窪み内（ハケ目）に認められる（写真6, 7）。土器の調整痕は全面にはっきり残っており、内面全体にあった赤色顔料がすり減って窪み内のみ残ったわけではない。実体顕微鏡下では顔料層自体に細かなクラックが認められ（写真8）、金属製の針で突いても粉状に拡散することなく、層状のブロックを保っている。赤色顔料の色調は黒ずんだピンク色に見え、一見ベンガラのような色に見える。断面試料の透過光下による観察から、朱と思われる赤色顔料の層の他、黄色の層を認めた（写真10）。この黄色の層は経験的に言って漆塗膜の可能性が非常に高いのではないかと考えた。想定される塗布工程は以下の通り。

- ①混和物のない漆の塗布。漆は微量で薄く塗られているため、窪み内に溜まる。溜まった漆は乾燥によって縮み、クラックが生じている。
- ②朱を混和した漆の塗布。漆層は①より薄く、窪み内や①でできたクラック内に溜まる。朱は大粒の粒子を含まず、径2 μ m以下の非常に細かな粒子で構成されている。一般的に、漆に朱を混和した場合は、朱特有の色調を発色させることは非常に難しいと言われている。したがって、本例のように表面から朱独特の色調が観察されなかったのは、漆に混和されていたためである可能性が非常に高いと考えた。
- ③混和物のない漆の塗布。漆層は②より薄く、窪み内でもより深い部分に溜まるのみ。

主に窪み内に赤色顔料が認められるのは、漆の量が微量であったことが影響しているものと思われる。微量ではあるが漆かと思われる層が三層認められることから、偶然にこのような層が形成されたとは考え難い。赤色顔料が口縁部内面に集中して認められることも、同様である。

弥生時代後期から古墳時代前期に認められる内面に朱が付着した土器は内面朱付着土器と呼ばれ、仙槌製造道具ではないかと考えられている（本田1994）。一般的な内面朱付着土器の特徴は、朱が土器内面のクラック中に染み込んだように残存し、特に口縁付近に顕著に認められること、鉢や高坏といった内面が見える土器をもちいること、二次的な受熱によって外面に煤が付着すること等である。朱とともに漆等の膠着剤が確認された例はいまのところ無い。重要な点は、内面に見える容器に朱の入った液を入れ煮沸する、という一連の行為の結果が内面朱付着土器となることである。

このような視点で試料2をあらためて見ると、

- 「土器上半部の窪み内に残るよう意図的に塗られた朱漆」→「口縁付近のクラック中の朱」、
- 「鉢」→「内面が見える土器」、
- 「土器焼成時の黒化」→「外面の煤」、

というように内面朱付着土器の典型例との見かけ上の類似性は認められるが、一連の行為は想定できない。

このことから試料 2 は、「結果としての内面朱付着土器」を意図的に作り出したものとの評価が可能かもしれない。このような例の出現が時間的なものであるのか地域的なものであるのかは現状では判断できないが、内面朱付着土器の一類型として今後注意する必要がある。

試料 3 の付着する石杵は磨面以外の加工が見られず、自然石をそのまま利用している。この自然石が石杵として選択された理由は、石材調達段階でハンドル部分と磨部が区分された石杵、おそらく L 字状石杵がイメージされていたためと考えられる。唯一作られた磨面が短軸方向に平坦で長軸方向に緩く湾曲し、なおかつ長軸方向に擦痕が認められる点は L 字状石杵の特徴でもある。顕著な磨面が認められるにもかかわらず石臼と共伴しないことも同様である。実体顕微鏡で観察する限り、朱は磨面の大きな窪み内と側面の一部に微量が認められるのみであり、その他の部分にはほとんど残っていない（写真 1～3）。顕著な磨面が認められるにもかかわらず、朱は凝視しない限り見えないことから、朱を磨り潰すことによって顕著な磨面が形成されたとは考え難い。

筆者等は L 字状石杵が一般的に言われるような朱精製の道具ではなく、石杵を赤くする行為（儀礼化した朱を磨り潰す行為？）に用いられた道具と考えるに至っており、定形化した磨面は、赤くなった石杵を元に戻す（再び利用する）ために朱を削りとった痕跡であると解釈している（本田・志賀2003）。

以上の考古学的な資料評価は今後さらなる検討が必要かと思われるが、畿内と北部九州、山陰地域の間地点に位置する吉備地域での朱関連用具を考える上で今後重要な意味を持つと考える。

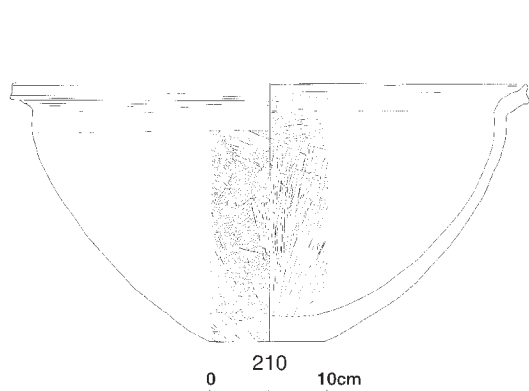
〈引用・参考文献〉

本田光子1994「内面朱付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ

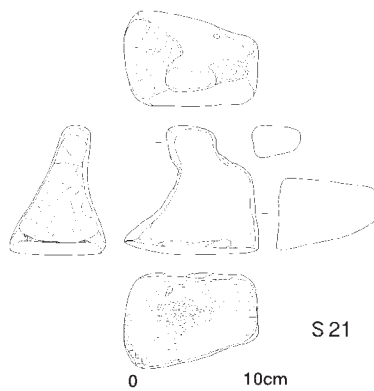
本田光子・志賀智史2003「二ツ石戎ノ前遺跡出土の赤色顔料とその関連遺物」『二ツ石戎ノ前遺跡』洲本市教育委員会・兵庫県教育委員会

表 1 分析試料一覧

試料No	出土地点/遺構/類別	時期	内/外面	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類	備 考
1	土壇87/土壇	弥生・後・Ⅳ	—	確認できず	Fe	なし	焼土の一部？
2	井戸3/鉢（完形）	弥生・後・Ⅲ	内面	朱	Hg,Fe	朱	漆→漆+朱→漆
			外面	朱？	—	朱？	現地での実体顕微鏡観察のみ、部分的で微量
3	土壇63/石杵	弥生・後・Ⅲ	—	朱	Hg	朱	現地で調査とサンプリング。
4	土壇33/土壇	弥生・後・Ⅲ	—	確認できず	—	なし	現地での実体顕微鏡観察のみ、焼土の一部？



試料 2 実測図 (1/6)



試料 3 実測図 (1/6)



写真1 試料3 磨面の状態

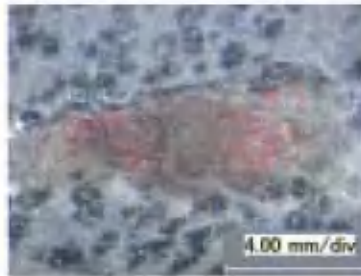


写真2 試料3 朱の付着状態

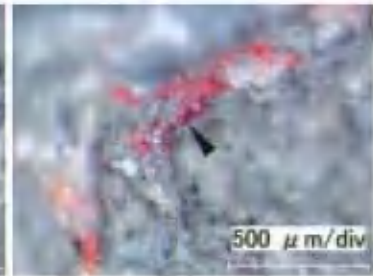


写真3 写真3 拡大(矢印部分は粒)

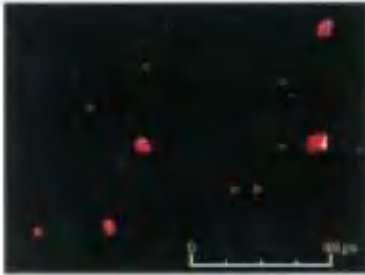


写真4 試料3 朱粒子



写真5 試料2 の土器



写真6 試料2 朱の付着状態



写真7 写真6 拡大



写真8 写真7 拡大



写真9 試料2 断面 (落射光)



写真10 試料2 断面 (透過光)

伊福定国前遺跡出土ガラス滓

(株) ニコン 木戸 一博

1 試料及び実体顕微鏡観察結果

試料は岡山県岡山市伊福定国前遺跡から出土したガラス滓である。

試料 1 は、調査区を南北にのびる溝の埋土から出土した。表面の多くが薄茶色多孔質焼結体で覆われているが、内部には緑色のガラス状部位が多く認められる。

試料 2～4、6～9 は、住居埋土から出土した。表面の一部は薄茶色多孔質焼結体で覆われているが、割断した内部は多くの気泡をもつガラス状であった。試料 1 と同様に、ガラスの部分は緑色である。

試料 5 は、井戸の中から出土した。表面は白色の繊維状の脆い物質で覆われているが、内部は光沢のある黒色物質であった。

試料 10 は、竪穴住居の炉に使用したと思われる穴から出土した。表面は、白色の灰状物質で覆われているが、内部は光沢のある黒色物質であった。

試料 5 及び 10 以外は全体に緑色のガラス部分が多く認められるが、百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土及び津島遺跡（W区、No.41井戸）及び津島遺跡（3区10Q土壌10）出土のガラス滓と同類と思われる^{1)~7)}。

2 分析結果

試料をエネルギー分散型 X 線分析装置（堀場製作所 EMAX-500）により分析した。分析は吉田裕氏及び岩谷博士氏（株式会社ニコン技術工房・分析センター）に依頼した。分析結果を表 1 に示す。本分析法では、資料表面下数 μm までの組成を半定量分析している。試料が埋蔵中に水と接触してアルカリ金属元素等の可溶成分が溶出し、表面組成が内部組成と異なっている可能性がある。そこで、必要に応じ、ガラス滓を破断して内部の組成分析も行った。また、ガラス滓は部位による組成差が大きいため、ガラス滓 1～9 は 4 部位、ガラス滓 10 は 2 部位を分析し、その平均値と標準偏差を示した。

また、観察において黒色光沢が確認された試料 10 について、走査型電子顕微鏡（日立製作所 S-3000N）を用いて黒色光沢部分を観察した。結果は、図 1 に示すように明確な結晶構造が確認された。そこで、試料 10 及び、同様に黒色光沢が確認された資料 5 について、高分解能 X 線回折装置（スペクトリス X'pert MRD）を用いて分析を行った。結果として、得られた回折ピーク全てが、 $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ラン鉄鉱と一致した。

3 考察

ガラス滓の平均組成（試料 5 と 10 を除く）と百間川原尾島遺跡出土、百間川今谷遺跡出土、鹿田遺跡出土、津寺遺跡出土、津島遺跡（W区、No.41井戸）及び津島遺跡（3区10Q土壌10）出土のガラス滓組成を比較し表 2 に示す。ガラス滓毎及び部位毎の組成バラツキを考慮すると、他の遺跡出土の

ガラス滓と顕著な差は認められない。各成分とも類似しており、出発物質は土と砂と植物灰を出発物質としている可能性が高い。

試料 5 と10は従来のいわゆるガラス滓とは異なり、組成分析結果及びX線回折装置による分析結果から、 $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ラン鉄鉱と考えられる。ラン鉄鉱は、過去の調査において、津島遺跡からも出土している⁹⁾。

表 1 伊福定国前遺跡出土ガラス滓の表面組成分析結果

試料	ガラス滓 1	ガラス滓 2	ガラス滓 3	ガラス滓 4	ガラス滓 5	ガラス滓 6	ガラス滓 7	ガラス滓 8	ガラス滓 9	ガラス滓 10	
重量 (g)	0.98	0.42	2.29	2.29	0.29	0.07	0.17	0.12	0.51	91.4	
組成 (重量%)	SiO_2	60.6±0.9	67.7±5.9	54.8±6.8	58.4±5.7	26.2±33.9	64.1±5.2	61.4±1.8	68.1±16.9	64.0±4.7	3.2±3.2
	Na_2O	6.0±3.1	8.4±5.4	11.4±8.0	5.6±5.2		6.3±5.4	8.7±6.1	0.4±0.5	5.9±4.8	
	K_2O	2.4±0.5	1.3±0.1	1.1±0.8	2.2±0.6	0.4±0.5	2.3±0.4	1.8±0.2	0.8±0.8	1.9±0.2	
	MgO	4.7±1.3	4.4±2.0	8.1±4.9	2.4±0.6	0.2±0.2	1.8±0.5	4.6±1.4	1.2±0.4	1.8±0.1	0.4±0.0
	CaO	4.7±2.1	1.8±0.6	2.5±2.2	2.0±0.7	0.4±0.4	2.4±1.0	3.6±0.7	1.1±0.5	1.1±0.5	
	Al_2O_3	13.8±3.9	10.1±2.9	9.7±3.6	15.8±6.0	2.8±3.2	13.3±9.9	13.4±7.3	19.0±12.5	19.1±2.8	1.9±2.2
	TiO_2	0.7±0.2	0.6±0.3	0.3±0.4	0.8±0.1		0.4±0.5	0.5±0.4	0.3±0.3	0.8±0.2	
	Fe_2O_3	6.0±1.3	4.2±0.7	7.6±6.0	10.5±5.8	46.0±23.1	8.0±2.3	4.5±1.0	7.7±3.3	5.3±1.1	60.3±0.0
	P_2O_5	0.6±0.7	1.2±0.2	3.0±5.5	1.8±1.0	23.4±14.7	0.8±0.2	0.9±0.8	1.5±1.0	0.2±0.2	32.4±4.8
	Cl	0.5±0.6	0.5±0.5	0.4±0.3	0.4±0.5		0.3±0.3	0.6±0.6			
MnO	0.1±0.3		1.1±0.5	0.3±0.6	0.8±0.4	0.3±0.3	0.3±0.3			1.9±0.6	

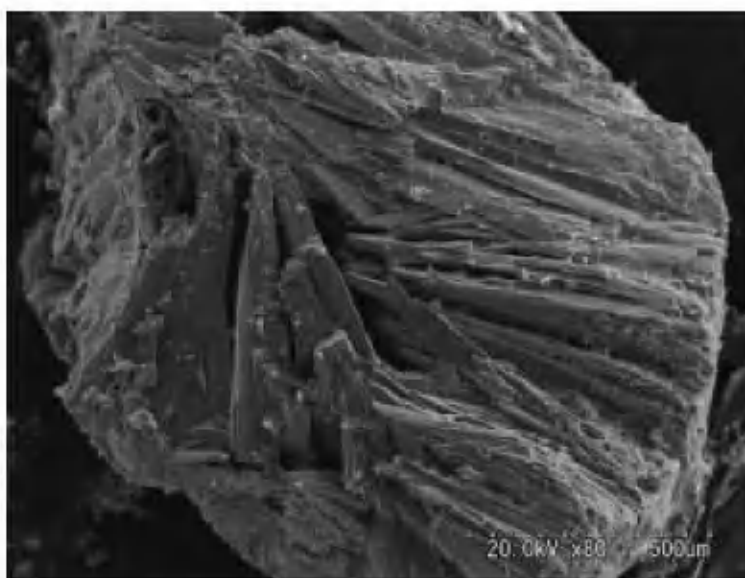



図 1 試料10の走査型電子顕微鏡観察結果

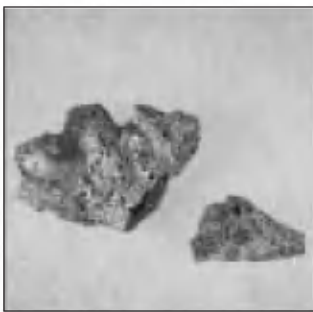
表 2 伊福定国前遺跡出土ガラス滓の表面組成分析結果と他の遺跡出土ガラス滓平均組成⁷⁾の比較

試料	ガラス滓 5 と10を除いた 平均組成	百間川 原尾島遺跡	鹿田遺跡	百間川 今谷遺跡	津寺遺跡	津島遺跡 (W区, No.41井戸)	津島遺跡 (3区10Q, 土壌10)	
組成 (重量%)	SiO ₂	62.4±4.5	50.6	60.7	62.6	54.1	60.0	58.3
	Na ₂ O	6.6±3.2	2.5	9.4	11.5	1.9	7.7	6.3
	K ₂ O	1.7±0.6	1.5	2.0	1.3	1.9	2.3	1.5
	MgO	3.6±2.3	3.3	5.7	4.9	5.2	3.9	3.3
	CaO	2.4±1.2	2.3	3.6	2.6	5.3	2.2	3.0
	Al ₂ O ₃	14.3±3.5	20.8	9.7	9.5	27.1	12.1	18.9
	TiO ₂	0.5±0.2					0.8	0.8
	Fe ₂ O ₃	6.7±2.1	14.7	5.1	4.2	5.9	9.7	7.8
	P ₂ O ₅	1.2±0.9					0.8	0.2
	S						0.5	
	Cl	0.3±0.2					1.3	
	MnO	0.3±0.4					0.5	

参考文献

- 1) 三浦定俊、苜谷道郎 岡山大学構内遺跡発掘報告第3冊 鹿田遺跡 I、p463 (1993)
- 2) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104 津寺遺跡 3、p301 (1996)
- 3) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 88 百間川原尾島遺跡 3、p316 (1994)
- 4) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 97 百間川原尾島遺跡 4、p283 (1995)
- 5) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 百間川原尾島遺跡 5、p238 (1996)
- 6) 苜谷道郎 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 145 津島遺跡、p19 (1999)
- 7) 木戸一博 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173 津島遺跡 4、p637 (2003)

1		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
溝 2								
伊福・古・前Ⅱ								
0.98g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	61.5	59.4	60.9	60.4	60.6	0.9
		Na ₂ O	9.2	8.1	2.7	4.1	6.0	3.1
		K ₂ O	2.7	2.9	2.0	2.0	2.4	0.5
		MgO	4.1	4.1	4.1	6.6	4.7	1.3
		CaO	2.8	3.4	5.0	7.4	4.7	2.1
		Al ₂ O ₃	10.5	11.6	19.2	13.9	13.8	3.9
		TiO ₂	0.7	0.4	0.8	0.7	0.7	0.2
		Fe ₂ O ₃	5.8	7.9	5.3	4.9	6.0	1.3
		P ₂ O ₅	1.1	1.3	0.0	0.0	0.6	0.7
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	1.1	0.9	0.0	0.0	0.5	0.6
		MnO	0.5	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3

2		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
竪穴住居36								
伊福・古・前Ⅱ								
0.42 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	61.1	64.3	72.4	73.0	67.7	5.9
		Na ₂ O	13.9	12.2	4.4	3.2	8.4	5.4
		K ₂ O	1.2	1.1	1.3	1.4	1.3	0.1
		MgO	5.8	6.3	3.3	2.2	4.4	2.0
		CaO	2.0	2.6	1.4	1.2	1.8	0.6
		Al ₂ O ₃	10.0	6.1	11.5	12.8	10.1	2.9
		TiO ₂	0.9	0.3	0.4	0.6	0.6	0.3
		Fe ₂ O ₃	3.2	4.8	4.0	4.6	4.2	0.7
		P ₂ O ₅	1.1	1.3	1.3	1.0	1.2	0.2
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.8	1.0	0.0	0.0	0.5	0.5
		MnO	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0


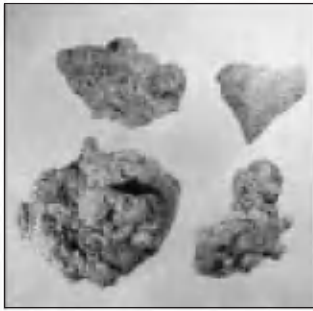
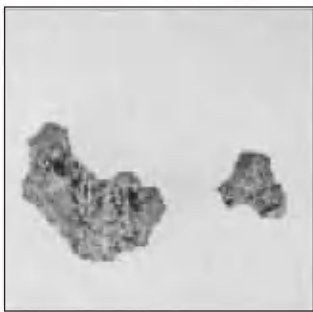
3		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
竪穴住居38								
伊福・弥・後Ⅳ								
2.29 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	59.0	58.7	56.8	44.8	54.8	6.8
		Na ₂ O	12.6	13.5	19.3	0.2	11.4	8.0
		K ₂ O	1.6	1.7	0.9	0.0	1.1	0.8
		MgO	4.4	3.6	10.6	13.8	8.1	4.9
		CaO	1.4	1.0	1.9	5.8	2.5	2.2
		Al ₂ O ₃	11.5	14.0	6.8	6.6	9.7	3.6
		TiO ₂	0.7	0.6	0.0	0.0	0.3	0.4
		Fe ₂ O ₃	7.1	5.7	1.7	15.9	7.6	6.0
		P ₂ O ₅	0.0	0.0	0.6	11.2	3.0	5.5
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.5	0.4	0.8	0.0	0.4	0.3
		MnO	1.2	0.8	0.6	1.7	1.1	0.5

図 2 伊福定国前遺跡 ガラス滓①

4		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
壺穴住居38 伊福・弥・後Ⅳ								
2.29 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	63.2	63.3	52.9	54.1	58.4	5.7
		Na ₂ O	7.5	12.0	0.9	2.0	5.6	5.2
		K ₂ O	3.0	1.6	2.3	1.9	2.2	0.6
		MgO	3.0	2.8	1.8	1.8	2.4	0.6
		CaO	2.4	1.1	1.7	2.6	2.0	0.7
		Al ₂ O ₃	8.2	13.8	21.4	19.8	15.8	6.0
		TiO ₂	0.9	0.7	0.7	0.7	0.8	0.1
		Fe ₂ O ₃	8.7	3.1	15.6	14.7	10.5	5.8
		P ₂ O ₅	1.0	0.8	2.7	2.5	1.8	1.0
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.9	0.8	0.0	0.0	0.4	0.5
		MnO	1.2	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6

5		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
井戸3 伊福・弥・後Ⅲ								
0.29 g		分析部位	黒色光沢部	黒色光沢部	繊維状部分	繊維状部分	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	1.6	1.6	27.9	73.5	26.2	33.9
		Na ₂ O	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		K ₂ O	0.0	0.0	0.3	1.1	0.4	0.5
		MgO	0.0	0.0	0.3	0.4	0.2	0.2
		CaO	0.0	0.0	0.7	0.7	0.4	0.4
		Al ₂ O ₃	0.3	0.1	3.7	6.9	2.8	3.2
		TiO ₂	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Fe ₂ O ₃	63.7	61.3	45.4	13.6	46.0	23.1
		P ₂ O ₅	33.4	35.8	20.8	3.6	23.4	14.7
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		MnO	1.0	1.2	0.9	0.2	0.8	0.4



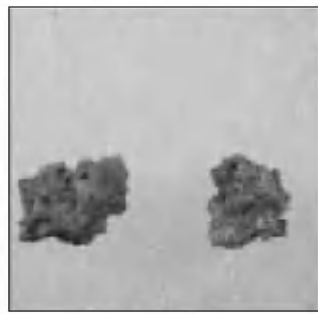
6		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
壺穴住居25 伊福・弥・後Ⅳ								
0.07 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	69.5	67.0	62.1	57.9	64.1	5.2
		Na ₂ O	10.8	11.1	2.3	1.0	6.3	5.4
		K ₂ O	2.4	2.5	2.6	1.7	2.3	0.4
		MgO	2.0	2.3	1.6	1.2	1.8	0.5
		CaO	3.4	3.1	1.2	2.0	2.4	1.0
		Al ₂ O ₃	3.9	5.7	20.6	23.1	13.3	9.9
		TiO ₂	0.0	0.0	0.8	0.9	0.4	0.5
		Fe ₂ O ₃	6.4	6.4	8.1	11.2	8.0	2.3
		P ₂ O ₅	0.5	0.9	0.7	1.0	0.8	0.2
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.5	0.5	0.0	0.0	0.3	0.3
		MnO	0.6	0.5	0.0	0.0	0.3	0.3

図3 伊福定国前遺跡 ガラス滓②

7		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
伊福・弥・後IV								
0.16 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	61.8	58.8	62.0	63.0	61.4	1.8
		Na ₂ O	13.5	14.5	3.4	3.4	8.7	6.1
		K ₂ O	1.6	1.6	1.8	2.1	1.8	0.2
		MgO	6.2	5.2	3.0	3.8	4.6	1.4
		CaO	4.5	3.7	3.0	3.0	3.6	0.7
		Al ₂ O ₃	5.7	8.8	20.6	18.5	13.4	7.3
		TiO ₂	0.0	0.5	0.8	0.8	0.5	0.4
		Fe ₂ O ₃	3.3	4.0	5.3	5.2	4.5	1.0
		P ₂ O ₅	1.7	1.4	0.1	0.2	0.9	0.8
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	1.2	1.0	0.0	0.0	0.6	0.6
		MnO	0.5	0.5	0.0	0.0	0.3	0.3

8		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
伊福・古・前 I								
0.12 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	53.7	53.5	85.9	79.2	68.1	16.9
		Na ₂ O	0.2	1.1	0.3	0.1	0.4	0.5
		K ₂ O	1.9	0.9	0.4	0.0	0.8	0.8
		MgO	1.6	1.4	0.6	1.1	1.2	0.4
		CaO	1.1	1.6	0.4	1.4	1.1	0.5
		Al ₂ O ₃	29.9	29.8	9.3	7.1	19.0	12.5
		TiO ₂	0.5	0.5	0.0	0.0	0.3	0.3
		Fe ₂ O ₃	10.1	9.0	2.8	8.8	7.7	3.3
		P ₂ O ₅	1.0	2.2	0.3	2.3	1.5	1.0
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		MnO	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

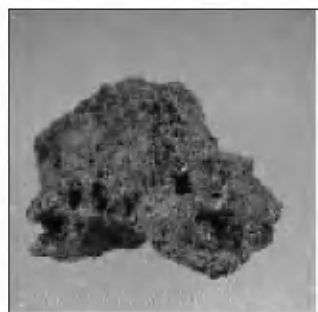

9		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)						
伊福・古・前 I								
0.51 g		分析部位	ガラス状	ガラス状	非ガラス状	非ガラス状	平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	60.1	62.0	63.1	70.7	64.0	4.7
		Na ₂ O	9.1	10.8	2.5	1.2	5.9	4.8
		K ₂ O	2.0	1.6	1.9	2.0	1.9	0.2
		MgO	1.9	1.8	1.6	1.8	1.8	0.1
		CaO	0.8	0.9	1.8	1.0	1.1	0.5
		Al ₂ O ₃	18.0	17.2	23.2	18.0	19.1	2.8
		TiO ₂	0.8	0.8	1.0	0.6	0.8	0.2
		Fe ₂ O ₃	6.9	4.5	4.9	4.7	5.3	1.1
		P ₂ O ₅	0.4	0.4	0.0	0.0	0.2	0.2
		S	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		Cl	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		MnO	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

図4 伊福定国前遺跡 ガラス滓③

10		エネルギー分散型X線分析装置 (EMAX-500) による組成分析結果 (カーボンペーストで固定し、カーボンコーティングを施した)					
91.4g		分析部位	黒色光沢部	黒色光沢部		平均	標準偏差
	成分 (重量%)	SiO ₂	0.9	5.4		3.2	3.2
		Na ₂ O	0.0	0.0		0.0	0.0
		K ₂ O	0.0	0.0		0.0	0.0
		MgO	0.4	0.4		0.4	0.0
		CaO	0.0	0.0		0.0	0.0
		Al ₂ O ₃	0.3	3.4		1.9	2.2
		TiO ₂	0.0	0.0		0.0	0.0
		Fe ₂ O ₃	60.3	60.3		60.3	0.0
		P ₂ O ₅	35.8	29.0		32.4	4.8
		S	0.0	0.0		0.0	0.0
		Cl	0.0	0.0		0.0	0.0
		MnO	2.3	1.5		1.9	0.6

		ガラス滓5と10を 除いた平均組成	標準偏差
組成 (重量%)	SiO ₂	62.4	4.5
	Na ₂ O	6.6	3.2
	K ₂ O	1.7	0.6
	MgO	3.6	2.3
	CaO	2.4	1.2
	Al ₂ O ₃	14.3	3.5
	TiO ₂	0.5	0.2
	Fe ₂ O ₃	6.7	2.1
	P ₂ O ₅	1.2	0.9
	S	0.0	0.0
	Cl	0.3	0.2
	MnO	0.3	0.4

図5 伊福定国前遺跡 ガラス滓④

伊福定国前遺跡の動物遺存体分析

岡山理科大学 富岡 直人

1 出土状況

伊福定国前遺跡は、岡山平野に拡散した旭川支流の氾濫原に位置する遺跡で、著名な津島遺跡の南西に存在する。平成14（2002）年度に県立岡山工業高等学校の建て替えに伴い、約1,000㎡ほどの調査区が発掘調査された。発掘によって弥生時代後期後半・古墳時代前期・古代・中世～近世に属する遺構・包含層が確認され、各時期に属する動物遺存体が18件検出された。この地点は標高約2 mの低湿地性の堆積環境で骨格は豊富な地下水に影響されて茶褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄鉱ViVianite： $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ）を析出し、脆弱化している。本報告はこの出土資料について実施した分析結果を記すものである。

2 出土動物遺存体の特徴

出土動物遺存体資料を分類・同定し、第1表と第2表に記載を行うとともに、常法によって計測、実体顕微鏡、生物顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施し、第2表に付記した。

検出された動物遺存体のうち綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

第1表 伊福定国前遺跡出土動物遺存体種名表

List of animal remains from Ifuku-sadakuinimae site, Okayama City, Okayama Prefecture

節足動物門	Arthropoda	ウマ目	Perissodactyla
軟体動物門	Mollusca	ウマ科	Equidae
斧足綱	Peleaypoda	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
脊椎動物門	Vertebrata	イノシシ科	Suidae
魚上綱	Pisces	イノシシ類?	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.?
硬骨魚綱	Osteichthyes	シカ科	Cervidae
スズキ目	Perciformes	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck
哺乳綱	Mammalia	ネコ目（食肉目）	Carnivora
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla	イヌ科	Canidae
ウシ科	Bovidae	イヌ	<i>Canis familiaris</i> Temminck
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin		

節足動物門 Arthropoda

弥生時代後期Ⅲに属する井戸3の第5～8層で採集した土壌サンプル中より、節足動物門甲殻綱の可能性のある硬組織の破片（No.19）が出土した。綱以下の同定は困難であった。

軟体動物門 Mollusca

No.18-1は井戸3の上層（弥生時代後期Ⅲに帰属）より出土した軟体動物門綱不明の複数個体と推定されるものの破片であった。風化によって貝殻の主成分である炭酸カルシウム溶脱が進んだため、殻皮のみが出土しており、綱の特定は困難であった。

斧足綱 Peleaypoda

No.18-2は上記の軟体動物門綱不明と同様に、井戸3上層（弥生時代後期Ⅲに帰属）より出土した斧足綱のヤマトシジミ右殻殻体であった。カルシウム溶脱しており、他の軟体動物と同様風化が進行し、殻皮のみが出土した。残存殻長は31.86mmで、標準的な大きさと言えよう。

脊椎動物門 Vertebrata

No.20-1は、井戸3の第5～8層（弥生時代後期Ⅲに帰属）より出土した硬骨魚綱目不明の骨幹部破片であった。火を受けていたため灰褐色に変色している。

魚上綱 Pisces

硬骨魚綱 Osteichthyes

No.12は、土壌99の覆土（古墳時代前期Ⅱに帰属）より出土した硬骨魚綱目不明の椎骨椎体であった。火を受けて白色に変色し、風化が進んでチョーク化している。

スズキ目 Perciformes

No.27は、ピット44覆土（古墳時代前期に帰属）より出土した硬骨魚綱スズキ目の右歯骨遠位端であった。骨格は、茶褐色に変色し、ピビアナイトを析出している。スズキの可能性はあるが、破損していたため特定が困難であった。

哺乳綱 Mammalia

No.15は、土壌116覆土（中世に帰属）より出土した硬骨魚綱目不明（中～大型）の骨格であるが、上腕骨にやや似るものの部位は特定できなかった。ヒトの可能性はあるが、特定できなかった。

ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla

No.1は、竪穴住居39の上層（古墳時代前期Ⅰ～Ⅱに帰属）より出土した哺乳綱偶蹄目の臼歯の歯冠部であった。萌出状況は未萌出で、茶褐色を呈し、ピビアナイトが析出している。

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

No.5は、河道2の覆土（中～近世に帰属）より出土した哺乳綱ウシの右下顎第3後臼歯歯冠部であった。萌出状況は未萌出であり、茶褐色を呈して、ピビアナイトを析出している。

ウマ目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

No.6は、河道2の覆土（中～近世に帰属）より出土した哺乳綱ウマの右上上腕遠位端と骨幹部であ

った。遠位端は化石化しており、Cornwall (1956) の研究を参照すると、1.5歳以上の個体と考えられる。遠位端前位に2条のD1 aタイプの切創が見られ、解体処理されたことが推定される。骨格は、茶褐色を呈し、ビビアナイトを析出している。Driesch (1976) による計測法としては、BT: 83.05mm という値が得られた。

No.4 は、河道2の覆土(中～近世に帰属)より出土した哺乳綱ウマの右中手骨骨幹部と近位端であった。近位端の骨端部は化石化していた。骨格は茶褐色を呈し、ビビアナイトを析出している。Driesch (1976) による計測法としては、Bp: 58.15mm、SD: 32.20(復元値) という値が得られた。

イノシシ科 Suidae

イノシシ類? *Sus scrofa* subsp.indet. ?

No.8 は、竪穴住居35覆土(古墳時代前期I～IIに帰属)より出土した哺乳綱偶蹄目の左肩甲骨遠位端と骨幹部で、イノシシ類の可能性があったが特定できなかった。遠位端は化石化していた。ランダムな切創が多数残されていた。骨格は黒～暗褐色を呈し、ビビアナイトを析出していた。

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

No.17は、土壙94覆土(古墳時代前期Iに帰属)より出土した哺乳綱ニホンジカの左下顎骨下顎体・臼歯部・第4前臼歯～第2後臼歯列を伴っている(第3前臼歯と第3後臼歯は失われている)。第1後臼歯は小窩連結を呈し、大泰司(1980)と比較すると1.5歳以上と推定される。D1 aタイプの切創が下顎体内側にみられ、解体処理された可能性が高いことが明らかである。骨格は茶褐色を呈し、ビビアナイトを析出している。歯冠の計測値は以下の通りである。M1L: 復元値15.25mm、B: 10.90mm、M2L: 17.90mm、B: 11.00mm。

No.11は、竪穴住居35覆土(古墳時代前期I～IIに帰属)より出土した哺乳綱ニホンジカの臼歯歯冠部破片で、LRをはじめとした帰属は不明であった。

ネコ目(食肉目) Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris* Temminck

No.28は、中世に属するピット503覆土より出土した哺乳綱イヌの右尺骨近位端と骨幹部である。近位端が化石化としており、Cornwall (1956) に照らし合わせると、9～10か月以上の個体と考えられる。火を受けて灰白色に変色している。

参考文献

大泰司紀之1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13: pp.51-74

Cornwall, I.W. 1956 "Bones for the Archaeologist" (J.M.Dent & Sons Ltd. London)

Driesch, A. von den 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites, Peabody Museum Bulletin 1" (Peabody Museum, Harvard)

第2表 伊福定国前遺跡出土動物遺存体属性表

整理番号	遺構名	層位	時代	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度	破損	色調	風化	計測値	備考
19	井戸3	第5~8層	弥・後Ⅲ	哺乳綱?	不明	不明	?	骨幹部	不明	不明	青灰色	viv		上サンブル
20-2	井戸3	第5~8層	弥・後Ⅲ	硬骨魚綱	日不明	椎骨	M	椎体	不明	不明	白	チョーク化		
20-1	井戸3	第5~8層	弥・後Ⅲ	脊椎動物門	細不明	不明	?	骨幹部	不明	不明	灰白色	なし		
18-1	井戸3	上層	弥・後Ⅲ	軟体動物門	細不明	不明	?	dia	不明	不明	ノーマル	カルシウム溶解	残存殻長: 31.86	
18-2	井戸3	上層	弥・後Ⅲ	斧足綱	ヤマトシジミ	殻体 殻皮	R	殻皮	不明	不明	ノーマル	カルシウム溶解	MIL: (15.25), B: 10.90, M2L: 17.90, B: 11.00	
17	土庫94	覆土	古・前I	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	L	下顎体+臼歯部 +臼歯P3×, 4 O, M1O, 2O,	M1小窩 連結	cm (D1a, 体の内側)	茶褐色	viv		
27	旧ビット44	覆土	古・前	硬骨魚綱	スズキ目	鱗骨	R	前位	不明	不明	茶褐色	viv		スズキ?
12	土庫99	覆土	古・前II	硬骨魚綱	日不明	椎骨	M	椎体	不明	不明	白	チョーク化		
1	竪穴住居39	上層	古・前I~II	哺乳綱	偶蹄目	臼歯	?	歯冠部	未萌出	不明	茶褐色	viv		破片
11	竪穴住居35	覆土	古・前I~II	哺乳綱	ニホンジカ	臼歯	?	歯冠部	不明	不明	黒~暗褐色	viv		
8	竪穴住居35	覆土	古・前I~II	哺乳綱	偶蹄目 (イノシシ類?)	肩甲骨	L	遠位端+骨幹部	def	同定なランダム な傷が多数		viv		
28	旧ビット503	覆土	中世	哺乳綱	イヌ	尺骨	R	近位端+骨幹部	pf	不明	灰白色	なし		
21	土庫106	覆土	中世	哺乳綱	ウシorウマ	上顎後臼歯	L	歯冠部	小窩連結	不明	茶褐色	viv		
15	土庫116	覆土	中世	哺乳綱	日不明 (中~大型)	上腕骨?	?	骨幹部	不明	不明	茶褐色	viv		ヒト?
5	河道2	覆土	中・近世	哺乳綱	ウシ	下顎M3	R	歯冠部	未萌出	なし?	茶褐色	viv		
6	河道2	覆土	中・近世	哺乳綱	ウマ	上腕骨	R	遠位端+骨幹部	def	cm (D1a, 前位 遠位端, 2条)	茶褐色	viv	BT: 83.05	その他破片有り
4	河道2	覆土	中・近世	哺乳綱	ウマ	中手骨	R	骨幹部+近位端	pf	なし?	茶褐色	viv	Bp: 58.15 SD: (32.20)	

破損cm (D1a): 滑らかな切断面を呈する1mm未満の深さの切創 (cut mark) を示す

風化 viv: ビビアナイト析出

時代 弥: 弥生時代, 古: 古墳時代

成長度 d: 遠位端, p: 近位端, f: 化石化

計測値 B4: 最位端最大幅, Bp: 近位端最大幅, SD: 骨幹部最小幅

MIL: 第1後臼歯冠部最大径, M1B: 同最大幅, BT: 滑車面最大幅

伊福定国前遺跡出土試料の¹⁴C年代測定

小林謙一¹⁾・春成秀爾¹⁾・坂本 稔¹⁾・尾寄大真¹⁾・新免歳靖¹⁾・村本周三²⁾・松崎浩之³⁾

1) 国立歴史民俗博物館

2) 総合研究大学院大学

3) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

岡山県伊福定国前遺跡出土木材の¹⁴C年代測定を試みた。試料番号はOKMBCとした。OKMBCは、岡山県古代吉備文化財センターの略である。

材2点の測定を行った。以下に、採取試料の状況、処理方法、測定及び暦年校正を報告する。

1 測定試料

OKMBC-4 弥生時代後期に属する竪穴住居1ーピット4内のW4（旧遺構名No142住居南西ピットA）で、長さ35.9cm、厚さ3.8cmを測る。半裁状に割れている芯持ち丸太材で、枝分かれする部分を持つ。枝材の外縁部から試料を切り取った。針葉樹と思われる。

OKMBC-5 古墳時代前期に属する竪穴住居35ーピット3（旧遺構名No5住居ピット1）の底部出上の礎盤aである。木端状の粗朶で、樹皮の可能性もある。年輪等は観察できなかったため、端を切り取り、試料とした。

2 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。（1）の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免・村本、炭化材の（2）（3）は、坂本・尾寄が行った。

（1）前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（1N-NaOH）でフミン酸等を除去する。3回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに2回酸処理（240分以上）を行い中和後、純水により洗浄した（4回）。

各試料は、採集した総重量（表1の採取量（mg）以下同じ）、AAA前処理を行った量（処理量）、前処理後回収した量（回収量）、ガス精製に供した量（精製）、二酸化炭素の炭素相当量（ガス）を、それぞれ表1に示す。量が少なく、すべて精製した。前処理のうち、最初のアルカリ溶液を保存してある。

（2）二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

（3）グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投げ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼さ

せた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに60kgfの圧力で充填した。

3 測定結果と暦年の較正

AMSによる¹⁴C測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設(MALT、機関番号MTC)で行った。

年代データの¹⁴C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では¹⁴C BPとする）。¹⁴Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹⁴C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹⁴C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比）偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル、‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる¹⁴C/¹²C比によって補正する。補正した¹⁴C/¹²C比から、¹⁴C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。

$\delta^{13}\text{C}$ 値については、加速器による測定を参考として付す。

〈暦年較正〉

測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）（Stuiver, M., et al. 1998）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦cal ADで示す。（ ）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

表1 試料の重量・炭素含有率

No	試料の重量 (mg)			含有 率 1%	状態	含有 率 2% 率 3%			
	採集	処理	回収			精製用	ガス*		
C 4	多量	16.9	9.46	55.9	良	5.38	2.92	54.2	30.3
C 5	多量	13.5	7.16	53.0	良	2.80	1.34	47.7	25.3

註) ガス*は、二酸化炭素ガス圧からの炭素換算量(mg)。

含有率1は回収量/処理量、含有率2は炭素換算量/精製用重量、含有率3は含有率1*含有率2。

表 2 測定結果と暦年較正年代

試料 番号	測定機関 番号	炭素年代 $\delta^{13}\text{C}\%$	^{14}C BP (補正值)	暦年較正 cal AD (2 σ) (%)は確率密度
OKMB C 4	MTC-05106	-27.3*	1865 \pm 35	AD80-240 94.8%
OKMB C 5	MTC-04901			AD90-260 92.1%
				AD310-320 2.9%

注 *)東京大学での $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器による測定である。

<結果>

C 4・C 5の較正年代は、C 4は紀元80年から240年、C 5は紀元90年から260年である可能性がもっとも高い。弥生後期から古墳前期にかけての年代である。

なお、粗朶状の材であるC 5については、樹種や材の中での位置については不明である。樹齢が大きい材の中心部分であった場合には、古木効果により古くなっている可能性も考えられる。また、坂本稔・今村峯雄による箱根・埋没林の年輪資料の測定より、AD100~300年頃は日本産樹木はINTCALに比べ、30年ほど古く測定される可能性も指摘されており、今後の検討が必要である。

この報告は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」(研究代表 西本豊弘)の成果の一部である。

参考文献

Stuiver, M., et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40(3), 1041-1083.

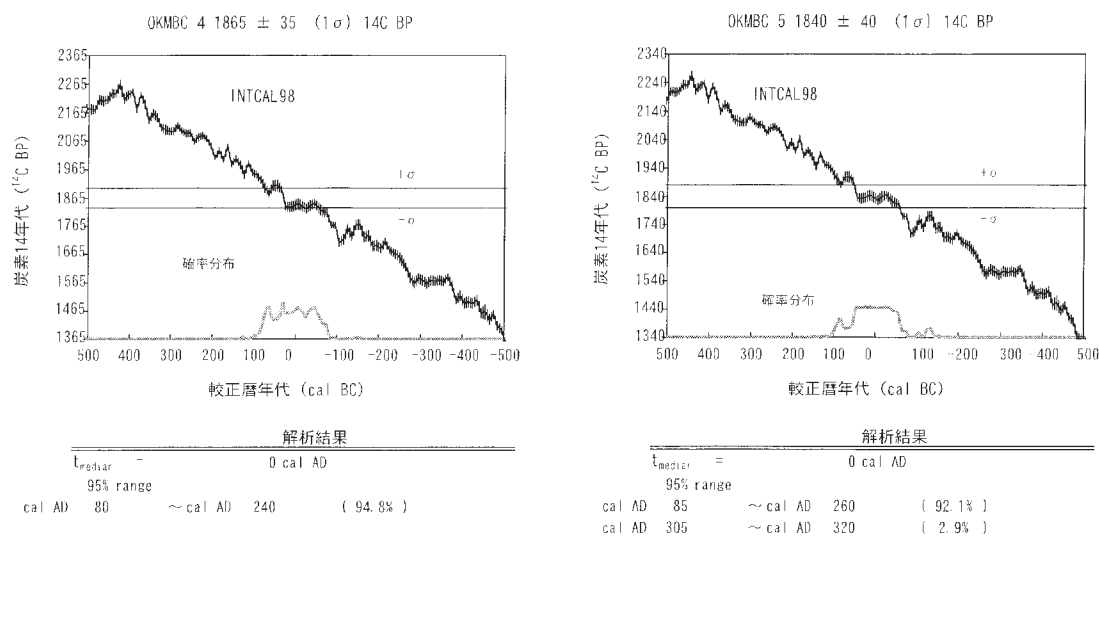


図 1 暦年較正年代確率密度分布



OKMBC-4 試料採取位置



OKMBC-5 年代測定試料

遺構一覽表
遺物觀察表
新旧遺構名称对照表

遺構一覧表

凡 例

竪穴住居

- ・地区は構内座標系による。
- ・平面形は床面の形状を表す。
- ・規模は、壁体溝芯心間による長軸・短軸を示す。
- ・残存床面積は、攪乱・竪穴住居などに切られている範囲を差し引いた床面積であり、実際に調査した床面積に近い値を示す。床面が柱穴・ピット・土壙・溝などに削平されて存在しない場合は基本的に差し引いていない。また、復元床面積は、欠損部分を復元し、床面積をもとめたものであり、本来に近い竪穴住居の床面積を示している。
- ・主柱穴数の項目は、検出した柱穴数／想定される主柱穴総数を表す。
- ・各項目の表記については次のように示している。
「○」：存在が確認できたもの、「×」：存在が確認できないもの。
「―」：確認が不可能なもの、「空欄」：現状では確認できず、存在の有無が不明確なもの。

掘立柱建物

- ・地区は構内座標系による。
- ・規模は、身舎の桁行と梁間の間数、桁行・梁間は総長を表す。
- ・柱間は、身舎の桁行と梁間における柱間距離の最大・最小を表す。
- ・面積は、建坪の面積を表す。
- ・棟方向は、身舎の主軸方向を表す。

井戸・土壙墓・土壙

- ・地区は構内座標系による。
- ・規模は、検出面での長さ・幅・深さを表す。
- ・底面海拔高は、底面最深部の海拔高を表す。
- ・平面形は、検出面での形状を表す。

遺物観察表

凡 例

土器・陶磁器

- ・計測値のうち、() は残存値を表す。また口径項目中の () は、その残存率が1/6以下であることを表す。
- ・色調は『新版標準土色帖 (2002年度版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人色彩研究所票監修) を使用した。
- ・胎土は、おおよその目安として、含まれる砂粒の大きさが0.2mm以下を細砂、2mm以下を粗砂、それより大きいものを礫とし、おおよその含有量が胎土中で3%以下を(少)、10%以下を(中)、それよりも多いものを(多)と表記している。

木製品

- ・計測値のうち、() は残存値を表し、実際に残存していた木製品から計測したものである。また、「推」とあるものは、実際には木質が残存していないか、あるいは一部しか残存していない木製品を、発掘調査時に検出した数値をもとに、本来の大きさを推定したことを示す。
- ・樹種は(株)古環境研究所、(株)パリオ・サーヴェイの同定による。

石器・石製品・土製品・金属製品

- ・計測値は、長さ・幅・厚さの最大値を表す。また() は残存値を表す。
- ・重量のうち、() は残存重量であることを表す。
- ・石器・石製品の石材鑑定は、倉敷芸術科学大学 妹尾護氏による。
- ・土製品の胎土・色調は土器に準ずる。

玉類

- ・計測値は、長さ(高さ)・幅(径)・厚さの最大値を表す。孔径は最大・最小値を表す。
- ・重量のうち、() は残存重量であることを表す。
- ・色調は『新版標準土色帖 (2002年度版)』のほか、『色の手帖』(永田泰弘監修 小学館 2002年) を使用した。

竪穴住居一覽表

竪穴住居 1

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17L	凹形	450		425		N-18°-E	14.20		14.20		128
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
4/4	楕円形	94×58	38	×	×	炭	○	×	○	柱痕	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居 2

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17L	凹形	508		—		N-15°-E	14.38		20.26		150
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	—	—	—	×	×	—	○	×	○	土壇・粘土	伊福・弥・後Ⅳ

竪穴住居 3

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16L	凹形	(590)		—		—	—		27.33		150
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
2/4	—	—	—	×	×	炭	○	×	×	—	伊福・古・前Ⅰ

竪穴住居 4

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16M	凹形	545		(512)		N-4°-E	12.28		21.93		108
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
2/4	凹形	57	23	×	×	炭	○	×	○	柱痕	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居 5

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16M	凹形	(600)		—		N-5°-E	14.57		28.26		120
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
2/4	—	—	—	×	×	炭	○	×	○	—	伊福・弥・後Ⅳ

竪穴住居 6

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18K	凹形	—		—		N-9°-E	6.09		—		122
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
2/4	—	—	—	×	×	—	○	×	○	根石	伊福・弥・後Ⅳ

竪穴住居 7

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17L	凹形	—		—		—	4.44		—		153
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	×	×	—	○	×	○	大形	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居 8

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17L	凹形	(500)		—		—	15.55		19.63		132
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	×	×	—	○	×	○	—	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居 9

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17L	凹形	(520)		—		—	14.43		21.23		150
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	×	×	—	○	×	○	—	伊福・弥・後Ⅳ

竪穴住居10

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17M	凹形	367		355		N-13°-E	10.98		10.98		140
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
4/4	楕円形	61×49	43	×	×	炭	○	×	×	柱痕	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居11

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18M	六角形	522		480		N-22°-E	19.50		19.50		123
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
4/4	凹形	36	10	×	×	炭	×	×	○		伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居12

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18L	凹形	(380)		-		N-4°-E	8.08		11.36		134
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
2/4	凹形	58×54	32	×	×	炭	○	○	○	土壇・柱痕	弥・後・Ⅲ～Ⅳ

竪穴住居13

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18M	隅丸方形?	-		-		-	1.70		-		152
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
-	-	-	-	×	×	-	×	×	○	柱痕	伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居14

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19K	隅丸方形	340		-		N-23°-E	8.73		10.38		124
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
1/4	不整凹形	(74)×50	20	×	×	-	○	×	○		伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居15

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19L	凹形	558		-		-	17.29		24.44		120
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
2/4	-	-	-	×	×	炭	○	×	×		伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居16

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19L	凹形	585		-		N-14°-E	13.35		26.86		144
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
4/4	不整凹形	80×(68)	70	×	×	炭	○	×	○	柱痕	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ

竪穴住居17

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20M	凹形	-		-		N-3°-E	-		-		140
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
4/4	凹形	(55)	-	×	×	-	×	×	○		伊福・弥・後Ⅲ

竪穴住居18

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16K	方形	-		-		N-9°-E	6.21		-		134
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
1/4	-	-	-	70×58	20	-	○	×	○	下部構造	伊福・古・前Ⅱ

竪穴住居19

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17K	長方形	(515)		385		N-21°-E	16.70		19.83		144
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
1/2	-	-	-	105×62	39	-	○	○	×	砂利敷・柱痕	伊福・古・前Ⅰ

竪穴住居20

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17K	方形	(560)		540		N-29°-E	18.84		30.24		130
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
	形状	長×短	深さ	長×短	深さ						
2/4	楕円形	40×30	12	110×57	16	-	○	○	○	下部構造	伊福・古・前Ⅱ

竪穴住居21

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16L	方形	448		425		N-4°-E	13.98		19.04		140
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	不整形	86×67	33		○	○	×	○		伊福・古・前I	

竪穴住居22

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16M	方形	—		—		N-38°-E	1.52		—		113
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—					炭	○	×	×		伊福・弥・後IV	

竪穴住居23

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16L	方形	—		—		N-42°-E	8.47		—		140
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—					炭	×	×	○	灰穴	伊福・弥・後IV～ 伊福・古・前I	

竪穴住居24

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
16L	隅丸方形	(550)		(495)		N-13°-W	17.45		27.23		140
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—							×	×	○	灰穴	伊福・古・前I

竪穴住居25

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17M	長方形	380		250		N-22°-E	6.18		9.5		143
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	×	×	×	×	炭	○	×	×		伊福・弥・後IV	

竪穴住居26

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17M	方形	—		—		N-25°-E	2.03		—		148
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—					炭	○	×			伊福・弥・後IV占	

竪穴住居27

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
8L	長方形	578		443		N-9°-W	21.24		25.61		145
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	×	×	×	—	—	○	×	○	柱痕	伊福・弥・後IV	

竪穴住居28

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18M	方形	610		—		N-25°-E	4.50		—		148
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4						○	×	×	柱痕	伊福・古・前I	

竪穴住居29

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18M	(方形)	—		—		—	3.22		—		152
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
1/4						炭	○	×	根石	伊福・古・前I～II	

竪穴住居30

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
18M	方形	610		590		N-12°-W	34.32		35.99		144
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
4/4						○		○	柱痕	伊福・古・前II	

竪穴住居31

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19K	方形	395		—		N-27°-E	10.67		—		134
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	—	—	○	×	—	—	伊福・古・前Ⅱ	

竪穴住居32

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20L	方形	420		—		N-24°-E	—		—		126
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	—	—	○	×	○	—	伊福・古・前Ⅱ	

竪穴住居33

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20K	方形	350		—		N-22°-E	—		—		122
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	—	○	○	×	○	—	伊福・古・前Ⅱ	

竪穴住居34

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20M	(方形)	—		—		N-22°-E	0.48		—		144
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	×	×	×	—	—	×	—	(○)	—	伊福・古・前Ⅰ	

竪穴住居35

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20L	方形	542		—		N-15°-E	2.79		—		142
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	×	×	×	—	炭	○	×	○	—	伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ	

竪穴住居36

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20L	方形	505		440		N-17°-E	14.57		22.22		146
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	×	×	×	—	炭	○	×	×	柱痕・炉	伊福・古・前Ⅱ	

竪穴住居37

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20M	(方形)	—		—		N-30°-E	—		—		136
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	—	—	—	—	炭	—	—	(○)	柱痕	伊福・弥・後Ⅳ	

竪穴住居38

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19L	方形	—		—		N-23°-E	—		—		144
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
4/4	凹形	22×20	4	—	炭	—	○	×	柱痕	伊福・弥・後Ⅳ	

竪穴住居39

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19M	方形	395		—		N-18°-E	—		—		158
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
—	×	×	×	—	—	○	×	×	—	伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ	

竪穴住居40

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
19M	方形	455		450		N-18°-E	14.81		20.48		160
主柱穴数	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼土面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期	
	形状	長×短	深さ	長×短							深さ
3/4	×	×	×	—	—	○	×	×	柱痕・柱根	伊福・古・前Ⅱ	

竪穴住居41

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
20M	方形	—		—		N-20°-E	7.76		—		142
主柱穴数	形状	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼上面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
		長×短	深さ	長×短	深さ						
1/4							○	×	○		伊福・弥・後Ⅳ

竪穴住居42

地区	平面形	長軸 (cm)		短軸 (cm)		主軸	残存床面積 (㎡)		復元床面積 (㎡)		床面海拔高 (cm)
17M	長楕円形	(700) 以上		286		N-15°-W	12.94		17.95		137
主柱穴数	形状	中央穴 (cm)		方形土壇 (cm)		焼上面	壁体溝	高床部	礎板	備考	時期
		長×短	深さ	長×短	深さ						
×	×	×	×	×	×		×	×	×		6 C後半～7 C前半

掘立柱建物一覧表

遺構名	地区	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	掘り方	時期	備考
			桁	梁							
掘立柱建物1	17L	2間×4間	170～227	192～230	757.5	426.5	32.31	N-27°-E	方～楕円形	古代	柱根残
掘立柱建物2	20M	1間×2間	188～192	167～196	379.5	181.5	6.88	N-79°-W	不整凹形	古墳後期	柱根残

井戸一覧表

遺構名	地区	構造	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面高 (cm)	時期	備考
井戸1	16L	素掘り	楕円	U字	124	104	134	5	伊福・弥・後Ⅲ	
井戸2	17K	素掘り	楕円	逆台形	137	115	120	-3	伊福・弥・後Ⅲ	
井戸3	19L	素掘り	不整楕円	U字	153	105	219	-32	伊福・弥・後Ⅲ	

土器棺墓一覧表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	器種		時期	備考
								棺身	棺蓋		
土器棺墓1	16M	円	腕	50	42	24	115	壺	鉢	伊福・弥・後Ⅳ	棺身開口は上面
土器棺墓2	18L	楕円	腕	100	80	15	131	壺		伊福・弥・後Ⅲ	棺身開口は水平

溝・河道一覧表

遺構名	地区	上端幅 (m)	深さ (m)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
溝1	18K	0.29	0.12	142	伊福・弥・後Ⅳ	
溝2	18M・19KL	1.00	0.38	120～128	伊福・古・前Ⅱ	
溝3	21M	1.74	0.34	85	中世	
河道1	20・21KLM	5.15以上	1.05以上	-5以下	古代	
河道2	20・21KLM	10.46以上	0.49以上	100	中・近世	

ピット一覧表

遺構名	地区	径 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期
P-1	16K	40	29	122	古墳前期
P-2	16M	21	26	144	古墳前期
P-3	16M	49	24	101	弥生後期
P-4	17M	48	23	108	弥生後期
P-5	18L	40	51	95	古墳前期
P-6	18L	42	26	108	弥生後期
P-7	18M	46	13	127	弥生後期
P-8	19M	44	33	133	弥生後期
P-9	17K	27	71	99	中世
P-10	17L	14	9	144	中世
P-11	17L	46	33	122	中世
P-12	17L	28	33	122	中世
P-13	17J	32	36	120	中世
P-14	16L	24	39	114	中世
P-15	17L	26	40	129	中世
P-16	17K	40	68	100	中世
P-17	17K	32	55	115	中世
P-18	18L	21	32	121	中世
P-19	18M	20	15	152	中世
P-20	18M	43	25	133	中世
P-21	17M	24	7	142	中世
P-22	18M	48	10	158	中世
P-23	18M	23	24	146	中世
P-24	18M	22	22	147	中世
P-25	18M	26	21	131	(中世)
P-26	19M	35	19	154	中世

土壇一覽表

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高 (cm)	時 期	備 考
土壇1	17K	不整円形	碗形	85	(72)	26	117	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇2	17K	不整楕円形	皿形	100	85	13	109	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇3	16L	楕円形	碗形	(92)	50	30	125	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇4	19M	楕円形	碗形	133	70	20	135	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇5	17L	楕円形	碗形	100	82	15	115	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇6	16L	楕円形	碗形	157	134	41	103	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇7	17L	長楕円形	U字形	260	78	36	118	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇8	17L	不整形	逆台形	110	98	9	120	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇9	17L	楕円形	碗形	134	72	21	132	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇10	17K	楕円形	碗形	92	80	28	108	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇11	16L	楕円形	逆台形	90	(80)	27	109	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇12	16L	円形	碗形	49	43	10	146	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇13	16L	円形	碗形	98	85	21	110	伊福・弥・後Ⅲ	柱痕
土壇14	17L	楕円形	碗形	131	76	16	135	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇15	17K	不整円形	逆台形	79	65	29	103	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇16	17L	不整形	逆台形	120	88	23	117	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇17	17L	楕円形	逆台形	(152)	(95)	16	102	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇18	17L	楕円形	碗形	103	75	24	115	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇19	18K	楕円形	碗形	100	(52)	17	118	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇20	17L	楕円形	碗形	70	(65)	17	118	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇21	16M	不整楕円形	皿形	202	(105)	10	129	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇22	16M	不整円形	碗形	(86)	80	24	122	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇23	16M	楕円形	逆台形	110	78	22	112	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇24	16M	長楕円形	逆台形	252	52	28	108	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇25	16M	円形	皿形	140	114	9	139	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇26	17M	楕円形	碗形	(112)	(69)	(30)	116	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇27	17M	円形	碗形	75	—	20	116	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇28	17M	円形	逆台形	134	—	30	116	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇29	16M	楕円形	逆台形	90	65	16	128	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇30	17M	楕円形	碗形	—	68	20	120	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇31	17M	楕円形	碗形	—	(95)	15	117	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇32	16M	不整楕円形	逆台形	135	110	22	87	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇33	16M	隅丸方形	U字形	(116)	80	33	100	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇34	16M	楕円形	碗形	105	80	17	126	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇35	16M	不整形	碗形	(167)	130	30	123	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇36	17M	楕円形	逆台形	78	53	31	126	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇37	17M	楕円形	碗形	92	74	26	118	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇38	17M	円形	逆台形	64	(65)	38	115	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇39	17M	不整円形	方形	110	105	39	110	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇40	17L	円形	U字形	78	60	54	98	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇41	17M	円形	U字形	74	(63)	34	116	伊福・弥・後・後半	柱痕
土壇42	17M	不整円形	逆台形	82	70	28	120	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇43	17M	楕円形	方形	52	44	34	103	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇44	17M	不整円形	皿形	70	55	11	124	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇45	17M	方形	皿形	—	160	23	128	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇46	17M	不整円形	隅丸方形	70	(67)	20	126	伊福・弥・後Ⅳ	やや袋状
土壇47	17M	不整円形	碗形	118	98	35	120	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇48	18L	楕円形	逆台形	70	48	18	116	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇49	18L	円形	方形	78	76	15	144	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇50	18M	円形	方形	123	110	28	120	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇51	18M	不整楕円形	方形	105	70	(20)	135	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇52	18M	不整形	碗形	86	66	22	128	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇53	18M	長楕円形	皿形	294	59	9	142	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇54	18M	円形	方形	50	45	12	138	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇55	18M	不整楕円形	逆台形	118	90	18	120	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇56	18M	楕円形	皿形	80	54	8	125	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇57	17M	楕円形	方形	54	40	(30)	122	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇58	17M	円形	方形	22	23	31	119	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇59	18M	円形	逆台形	39	(36)	10	147	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇60	18M	円形	皿形	102	95	10	140	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇61	18M	楕円形	逆台形	—	97	17	124	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇62	18K	楕円形	U字形	100	90	(40)	113	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇63	18K	円形	碗形	92	91	25	122	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇64	18K	不整楕円形	逆台形	102	50	20	124	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇65	18K	円形	U字形	70	66	27	137	伊福・弥・後Ⅲ	

遺構名	地区	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高 (cm)	時 期	備 考
土壇66	18L	楕円形	碗形	75	53	26	135	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇67	18L	円形	逆台形	44	39	16	122	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	
土壇68	18L	不整形	U字形	95	87	27	131	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇69	19L	円形	U字形	63	—	35	123	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇70	18M	不整形楕円形	逆台形	(100)	(60)	27	135	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇71	18M	不整形	碗形	—	65	17	136	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇72	18M	円形	逆台形	45	40	25	115	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇73	19M	不整形楕円形	方形	132	120	14	148	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇74	19M	円形?	U字形	—	65	25	137	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇75	19K	不整形	逆台形	129	116	15	106	伊福・弥・後Ⅲ	
土壇76	19L	円形?	逆凸形	81	—	21	133	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇77	19L	楕円形	皿形	111	57	9	148	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇78	19L	楕円形	皿形	144	123	20	125	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇79	19L	楕円形	皿形	149	—	10	130	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇80	19L	不整形楕円形	碗形	160	113	32	120	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇81	19L	楕円形	U字形	(60)	49	50	101	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇82	19L	不整形	U字形	60	—	40	89	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇83	20L	不整形楕円形	不整形逆台形	102	73	47	96	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇84	20L	不整形楕円形	逆台形	55	46	14	128	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇85	20M	不整形	逆台形	(55)	48	12	133	伊福・弥・後後半	
土壇86	20M	楕円形	方形	(100)	82	49	97	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇87	19M	不整形楕円形	皿形	120	90	28	124	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇88	20M	楕円形	碗形	147	—	23	132	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇89	20M	楕円形	皿形	105	58	8	152	伊福・弥・後Ⅳ	
土壇90	17L	楕円形	逆凸形	108	70	24	126	伊福・古・前Ⅱ	
土壇91	18M	長方形	皿形	—	95	15	128	伊福・古・前Ⅱ	
土壇92	18K	楕円形	U字形	33	25	23	124	伊福・古・前Ⅱ	
土壇93	19L	楕円形	U字形	64	(44)	14	146	伊福・古・前Ⅱ	
土壇94	19M	不整形楕円形	碗形	170	113	22	151	伊福・古・前Ⅰ	
土壇95	20L	楕円形	方形	49	38	23	116	伊福・弥・後後半	
土壇96	19L	楕円形	碗形	62	52	24	138	伊福・古・前	
土壇97	20L	円形	U字形	63	58	40	105	伊福・古・前Ⅰ	
土壇98	20M	方形	U字形	70	58	52	99	伊福・古・前Ⅰ?	
土壇99	19M	不整形	碗形	76	(74)	38	136	伊福・古・前Ⅱ	
土壇100	19M	不整形	逆台形	(142)	—	38	155	伊福・古・前Ⅱ	
土壇101	20M	楕円形	碗形	115	(77)	15	144	伊福・古・前Ⅰ?	
土壇102	17M	不整形楕円形	碗形	193	157	33	120	古・後(6C末～7C初)	
土壇103	17M	不整形	碗形	—	160	25	120	古・後(TK209)	
土壇104	19K	長方形	皿形	203	—	16	118	古・後	
土壇105	16K	円形	逆台形	114	110	67	89	伊福・中世	
土壇106	17K	円形	逆台形	73	68	51	116	伊福・中世	
土壇107	16K	円形	皿形	76	74	11	143	伊福・14C前半	
土壇108	17L	楕円形	碗形	249	192	68	100	伊福・近世	
土壇109	17M	長楕円形	逆台形	209	88	39	116	伊福・中世	
土壇110	17L	不整形楕円形	逆台形	62	42	47	120	伊福・中世	
土壇111	16M	不整形楕円形	逆凹形	82	—	16	129	伊福・14C前半	
土壇112	17L	円形	U字形	25	23	24	132	伊福・14C前半	
土壇113	18M	楕円形	U字形	51	34	22	32	伊福・13C後半	
土壇114	18K	円形	逆台形	38	38	(58)	109	伊福・14C前半	
土壇115	19M	不整形	逆台形	43	40	52	146	伊福・中世	
土壇116	19L	楕円形	皿形	85	50	7	127	伊福・中世	
土壇117	20M	円形	碗形	43	43	12	152	伊福・13C後半	

土器観察表

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
1	竪穴住居1	弥生土器	壺	16.6	(4.2)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
2	竪穴住居1	弥生土器	壺	—	(8.9)	—	8.5	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：黄灰 (2.5Y6/1)	良好	1/3 以下	
3	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	(2.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：明褐灰 (7.5YR7/2) 内面：黒 (10YR2/1)	良好	1/3 以下	
4	竪穴住居1	弥生土器	甕	—	(4.4)	—	6.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	良好	1/3 以下	黒斑
5	竪穴住居1	弥生土器	高杯	—	(3.2)	—	9.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	脚部し込み痕
6	竪穴住居2	弥生土器	壺	—	(5.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	赤色顔料
7	竪穴住居2	弥生土器	甕	15.9	(20.6)	22.2	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄 (10YR7/2.5)	良好	1/3 以下	煤付着
8	竪穴住居2	弥生土器	高杯	19.2	(5.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
9	竪穴住居2	弥生土器	製塩土器	—	(2.7)	—	4.4	外面：指オサエ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外面：赤褐 (10R5/4) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	
10	竪穴住居3	弥生土器	甕	—	(5.2)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
11	竪穴住居3	弥生土器	高杯	—	(7.0)	—	11.6	外面：ハケメ、指オサエ 内面：ハケメ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 7.5YR7/4	良好	1/3 以下	
12	竪穴住居4	弥生土器	甕	15.8	(4.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
13	竪穴住居4	弥生土器	高杯	—	(6.8)	—	11.9	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：褐灰 (10YR5/1)	良好	1/3 以下	
14	竪穴住居4	弥生土器	高杯	17.7	(8.7)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
15	竪穴住居4	弥生土器	不明	—	—	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	外面に縄文 文、竹筭文、 ヘラ描き線刻
16	竪穴住居4	弥生土器	ミニチュア	2.5	5.7	—	1.7	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	ほぼ 完形	壺形
17	竪穴住居5	弥生土器	甕	14.6	(4.4)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	
18	竪穴住居5	弥生土器	鉢	19.0	(11.1)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
19	竪穴住居6	弥生土器	高杯	—	(5.6)	—	10.6	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
20	竪穴住居 7～9	弥生土器	壺	14.4	(4.4)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、部ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：橙 (5YR6.5/6)	良好	1/3 以下	
21	竪穴住居 7～9	弥生土器	甕	15.6	(24.5)	23.5	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6.5/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6.5/4)	良好	1/3 以下	煤付着
22	竪穴住居 7～9	弥生土器	直口壺	7.9	(4.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR7/8) 内面：橙 (2.5YR7/8)	良好	1/3 以下	
23	竪穴住居 7～9	弥生土器	高杯	—	(2.9)	—	8.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：灰褐 (7.5YR5/2) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	良好	1/3 以下	脚部沈澱3 条
24	竪穴住居 7～9	弥生土器	高杯	—	(4.8)	—	8.2	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR6/3) 内面：にぶい橙 (5YR6/3)	良好	1/3 以下	
25	竪穴住居 7～9	弥生土器	高杯	—	(4.5)	—	10.9	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	脚部工具痕 脚部し込み痕
26	竪穴住居 7～9	弥生土器	鉢	23.0	(6.6)	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	
27	竪穴住居10	弥生土器	甕	—	(4.4)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外面：灰黄 (2.5YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	
28	竪穴住居10	弥生土器	甕	—	(2.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰黄褐 (10YR5/2) 内面：褐灰 (10YR5/1)	良好	1/3 以下	
29	竪穴住居10	弥生土器	鉢	—	(8.6)	—	4.2	外面：ヘラミガキ、ナデ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
30	竪穴住居11	弥生土器	壺	12.3	24.9	18.6	4.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	2/3 以下	黒斑
31	竪穴住居11	弥生土器	鉢	15.7	(9.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、部ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	ほぼ 完形	
32	竪穴住居11	弥生土器	裝飾高杯	14.6	(4.0)	—	—	外面：不明 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y7/1) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	縁部刺突 文
33	竪穴住居11	弥生土器	高杯	13.4	(5.1)	14.0	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
34	竪穴住居11	弥生土器	ミニチュア	4.5	5.0	—	1.5	外面：ヘラミガキ 内面：指オサエ、ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (7.5YR6/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	ほぼ 完形	黒塗、並形
35	竪穴住居12	弥生土器	長頸壺	—	(19.7)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：指オサエ、工具ナデ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 黒雲母 角閃石	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	頸部、貼付突 帯部、赤色顔 料
36	竪穴住居12	弥生土器	甗	17.4	4.4	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5Y7/6) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
37	竪穴住居12	弥生土器	甗	14.4	(4.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	1/3 以下	
38	竪穴住居12	弥生土器	甗	—	(4.4)	—	4.6	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面：灰白 (2.5Y7/1)	良好	1/3 以下	
39	竪穴住居12	弥生土器	台付直口 壺	—	(9.6)	13.3	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2/3 以下	
40	竪穴住居12	弥生土器	裝飾高杯	—	(4.1)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
41	竪穴住居12	弥生土器	高杯	—	—	—	—	外面：不明 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
42	竪穴住居12	弥生土器	鉢	40.2	(12.2)	41.6	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
43	竪穴住居13	弥生土器	高杯	19.6	(4.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6.5/6) 内面：橙 (2.5YR6.5/6)	良好	1/3 以下	
44	竪穴住居13	弥生土器	高杯	—	(4.2)	—	10.5	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 金雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (2.5Y5/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	2/3 以下	
45	竪穴住居13	弥生土器	鉢	9.6	4.7	—	3.0	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 胎土精 良	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：橙 (2.5YR6/8)	良好	ほぼ 完形	
46	竪穴住居14	弥生土器	甗	15.5	(5.8)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰褐 (5YR4/2) 内面：にぶい褐 (7.5YR6/3)	良	1/3 以下	
47	竪穴住居15	弥生土器	甗	(12.0)	(3.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	
48	竪穴住居15	弥生土器	甗	(13.0)	(4.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外面：浅黄 (7.5YR8/3) 内面：灰白 (7.5YR8/1)	良好	1/3 以下	
49	竪穴住居15	弥生土器	裝飾高杯	—	(2.5)	—	22.6	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	銘撰文、波状 文、竹管文
50	竪穴住居16	弥生土器	甗	15.8	(7.5)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
51	竪穴住居16	弥生土器	甗	—	(1.9)	—	4.4	外面：指オサエ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
52	竪穴住居16	弥生土器	高杯	11.35	(4.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	2/3 以下	
53	竪穴住居16	弥生土器	高杯	—	(5.2)	—	9.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：淡赤橙 (2.5YR7/3) 内面：淡赤橙 (2.5YR7/3)	良好	2/3 以下	穿孔
54	竪穴住居16	弥生土器	高杯	—	(6.6)	—	13.2	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/5) 内面：橙 (2.5YR6/5)	良好	1/3 以下	
55	竪穴住居16	弥生土器	裝飾高杯	—	—	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：浅黄橙 (5YR6/6) 内面：浅黄橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
56	竪穴住居16	弥生土器	裝飾高杯	—	—	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	外面赤色顔料 塗布
57	竪穴住居16	弥生土器	ミニチュア	—	(5.0)	5.0	2.1	外面：ナデ 内面：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外面：灰白 (2.5YR8/2) 内面：浅黄 (2.5Y7/4)	良好	2/3 以下	壺形
58	竪穴住居16	弥生土器	ミニチュア	4.8	(4.5)	7.0	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	壺形
59	竪穴住居17	弥生土器	甗	13.5	(4.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	1/3 以下	
60	竪穴住居18	土師器	甗	10.3	12.7	12.6	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2/3 以下	
61	竪穴住居18	土師器	甗	12.7	(5.3)	16.9	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：黄灰 (2.5YR5/1) 内面：灰黄 (2.5YR7/2)	良好	1/3 以下	
62	竪穴住居18	土師器	甗	13.2	(12.1)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：浅黄 (2.5YR7/3) 内面：灰黄 (2.5YR7/2)	良好	1/3 以下	
63	竪穴住居18	土師器	甗	13.0	(9.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/2.5) 内面：にぶい橙 (N2/1)	良好	1/3 以下	内面炭素吸着
64	竪穴住居18	土師器	甗	12.3	(10.9)	16.1	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
65	竪穴住居18	土師器	梨胎土器	—	(2.5)	—	4.8	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙一橙 (2.5YR6/3) 内面：にぶい橙一橙 (2.5YR6/3)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
66	竪穴住居19	土師器	甗	15.6	(3.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5)	良好	1/3 以下	
67	竪穴住居19	土師器	甗	14.9	6.5	16.7	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3 以下	
68	竪穴住居19	土師器	甗	15.7	(3.4)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
69	竪穴住居19	土師器	甗	—	(3.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	
70	竪穴住居19	土師器	鉢	9.9	6.3	10.2	—	外面：不明 内面：指オサエ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
71	竪穴住居20	土師器	二重口縁 甗	16.0	(6.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
72	竪穴住居20	土師器	甗	12.6	(2.9)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
73	竪穴住居20	土師器	甗	12.4	(2.4)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
74	竪穴住居20	土師器	甗	9.5	10.5	11.5	—	外面：不明 内面：ヘラケズリか	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：灰白 (10YR8/2)	良好	1/3 以下	
75	竪穴住居20	土師器	小型丸底 壺	—	(4.3)	—	—	外面：ハケメ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	
76	竪穴住居20	土師器	小型丸底 壺	4.5	5.3	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：指オサエ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	完形	
77	竪穴住居20	土師器	小型丸底 壺	11.9	(6.4)	—	—	外面：指オサエ、ハケメ 内面：土具ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下	
78	竪穴住居20	土師器	小型丸底 壺	12.8	(6.8)	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	
79	竪穴住居21	土師器	甗	15.0	(3.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
80	竪穴住居21	土師器	鉢	3.6	4.7	—	—	外面：ヘラケズリ、指オサエ 内面：指オサエ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	良好	1/3 以下	
81	竪穴住居21	土師器	製塩土器	—	(2.5)	—	2.8	外面：指オサエ、タタキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
82	竪穴住居22	弥生土器	壺	18.4	(6.8)	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 黒色粒 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
83	竪穴住居22	弥生土器	甗	—	(3.5)	—	6.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：黒 (10YR2/1) 内面：灰黄橙 (10YR5/2)	良好	1/3 以下	
84	竪穴住居 23・24	土師器	甗	13.8	(3.6)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
85	竪穴住居 23・24	土師器	高杯	—	(7.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	脚差し込み痕
86	竪穴住居 23・24	弥生土器	高杯	—	(5.4)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	脚差し込み痕
87	竪穴住居 23・24	弥生土器	高杯	19.4	7.0	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	
88	竪穴住居 23・24	土師器	高杯	20.7	(7.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキか	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：橙 (5YR6/6) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	
89	竪穴住居 23・24	土師器	鉢	15.0	(10.5)	—	—	外面：不明 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰 (10YR8/2) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
90	竪穴住居 23・24	弥生土器	鉢	10.0	8.5	10.3	2.35	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：灰黄橙 (10YR6/2)	良好	2/3 以下	
91	竪穴住居 23・24周辺 P-26	土師器	甗	15.4	(6.1)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5)	良好	1/3 以下	黒斑
92	竪穴住居 23・24周辺 P-26	弥生土器	甗	—	(4.0)	—	5.1	外面：土具ナデ 内面：ヘラケズリ 底面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰褐 (7.5YR6/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	煤付着 底部穿孔 底部内面粘土 塵付着
93	竪穴住居 23・24周辺 P-9	弥生土器	高杯	—	(5.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	脚差し込み痕
94	竪穴住居 23・24周辺 P-13	弥生土器	高杯	—	(8.0)	—	13.4	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
95	竪穴住居 23・24周辺 P-13	弥生土器	台付直口 壺	8.9	(9.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/8) 内面：橙 (5YR6/8)	良好	1/3 以下	
96	竪穴住居 23・24周辺 P-13	弥生土器	台付鉢	—	(3.3)	—	4.5	外面：ナデ、ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰黄橙 (10YR4/2) 内面：灰黄 (2.5Y6/2)	良好	1/3 以下	
97	竪穴住居25	弥生土器	高杯	—	(6.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径							底径
98	竪穴住居25	弥生土器	鉢	9.2	8.5	—	3.0	外面：ヘラケズリ、一部ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR7/8) 内面：橙 (2.5YR7/8)	良好	1/3 以下	
99	竪穴住居25	弥生土器	台付鉢	—	(4.5)	—	12.8	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂（中） 細砂（中） 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	
100	竪穴住居27	弥生土器	甗	—	(3.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
101	竪穴住居27	弥生土器	甗	—	(3.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（中） 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	
102	竪穴住居27	弥生土器	甗	15.0	(3.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 礫（稀） 長石 石英 雲母	外面：浅黄橙 (7.5YR8/6) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
103	竪穴住居27	弥生土器	短頸蓋	8.0	(5.3)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	1/3 以下	
104	竪穴住居28	土師器	壺	17.7	(5.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（少） 細砂（少） 礫（稀） 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	良好	1/3 以下	
105	竪穴住居29	土師器	甗	—	(2.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	良好	1/3 以下	煤付着
106	竪穴住居29	土師器	壺	11.3	(2.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	良好	1/3 以下	
107	竪穴住居29	土師器	小型丸底壺	—	(6.6)	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6.5/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6.5/4)	良好	1/3 以下	
108	竪穴住居29	土師器	製塩土器	—	(6.3)	—	3.3	外面：指オサエ 内面：不明	粗砂（少） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい赤橙 (10R6/4) 内面：黒 (N2/1)	良好	1/3 以下	
109	竪穴住居30	土師器	壺	18.0	(6.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（中） 礫（少） 長石 石英	外面：浅黄橙 (7.5YR8/2.5) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/2.5)	良好	1/3 以下	
110	竪穴住居30	土師器	甗	13.0	(6.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
111	竪穴住居30	土師器	甗	14.4	(2.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	
112	竪穴住居30	土師器	甗	13.4	(2.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
113	竪穴住居30	土師器	甗	14.0	(11.5)	19.4	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（中） 礫（少） 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
114	竪穴住居30	土師器	甗	12.6	14.0	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	2/3 以下	
115	竪穴住居30	土師器	小型丸底壺	10.4	(6.1)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヨコナデ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
116	竪穴住居30	土師器	小型丸底壺	13.4	(5.6)	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
117	竪穴住居30	土師器	鉢	11.6	3.7	—	—	外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
118	竪穴住居30	土師器	鉢	15.0	(3.9)	—	—	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（中） 細砂（中） 長石 石英 雲母	外面：褐灰 (7.5YR5/1) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
119	竪穴住居31	土師器	壺	19.0	(17.0)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（中） 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：灰黄橙 (10YR5/2)	良好	2/3 以下	
120	竪穴住居32・33	弥生土器	甗	13.6	(6.9)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	煤付着 肩部粒状刺突痕
121	竪穴住居32・33	土師器	甗	13.2	(5.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
122	竪穴住居32・33	土師器	製塩土器	—	(2.6)	—	4.0	外面：指オサエ 内面：不明	粗砂（少） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：明赤褐 (2.5YR5/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
123	竪穴住居32・33	土師器	製塩土器	—	(2.1)	—	4.6	外面：指オサエ 内面：指オサエ	粗砂（少） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：灰黄 (2.5YR6/2)	良好	1/3 以下	
124	竪穴住居32・33	土師器	製塩土器	—	(2.3)	—	4.2	外面：不明 内面：不明	粗砂（少） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：黒褐 (2.5Y3/1)	良好	1/3 以下	
125	竪穴住居36	土師器	壺	21.0	(8.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
126	竪穴住居36	土師器	壺	20.0	(10.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（中） 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
127	竪穴住居36	土師器	甗	14.5	(6.3)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：明赤褐 (2.5YR5/6) 内面：にぶい赤橙 (5YR5/4)	良好	1/3 以下	
128	竪穴住居36	土師器	甗	11.0	(6.9)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	1/3 以下	
129	竪穴住居36	土師器	甗	12.8	(14.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 雲母	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	
130	竪穴住居36	土師器	甗	12.4	(12.2)	15.9	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR7/6)	不良	1/3 以下	
131	竪穴住居36	土師器	甗	12.7	(10.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 礫（少） 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/5)	良好	1/3 以下	肩部粒状刺突痕
132	竪穴住居36	土師器	甗	13.2	(10)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂（中） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	煤付着
133	竪穴住居36	土師器	甗	7.0	(8.6)	—	—	外面：不明瞭 内面：指オサエ	粗砂（少） 細砂（少） 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：褐灰 (10YR6/1)	良好	2/3 以下	肩部粒状刺突痕
134	竪穴住居36	土師器	甗	12.0	(18.7)	17.0	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂（中） 細砂（中） 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 程度	煤付着 肩部粒状刺突痕

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
135	竪穴住居36	土師器	甗	14.0	(12.9)	18	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：指オサエ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石	外面：明褐色(7.5YR7/2) 内面：にぶい黄橙(10YR7/2)	良好	1/3 以下	煤付着
136	竪穴住居36	土師器	甗	12.8	(13.8)	19.1	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/2) 内面：浅黄橙(7.5YR8/3)	良好	1/3 以下	煤付着
137	竪穴住居36	土師器	高杯	9.3	(7.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：明赤褐(5YR5/8) 内面：明赤褐(2.5YR5/8)	良好	1/3 以下	外・内面赤色 顔料塗布
138	竪穴住居36	土師器	高杯	19.0	(7.4)	—	—	外面：不明瞭 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 やや粗い水こし粘土	外面：浅黄橙(7.5YR8/4) 内面：にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	
139	竪穴住居36	土師器	高杯	—	(7.3)	—	14.0	外面：ヘラミガキ 内面：不明瞭	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙(5YR6/8) 内面：橙(2.5YR7/8)	良好	2/3 以下	
140	竪穴住居36	土師器	器台	—	(10.0)	—	13	外面：ヘラミガキ 内面：上具ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 水こし粘土	外面：橙(2.5YR6.5/6) 内面：橙(5YR6/6)	良好	2/3 以下	
141	竪穴住居36	土師器	鉢	16.2	(3.4)	—	—	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄褐(10YR4/3) 内面：橙(5YR7/6)	良好	1/3 以下	
142	竪穴住居36	土師器	鉢	14.0	(5.1)	—	—	外面：指頭上痕 内面：ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：橙(2.5YR6/6) 内面：黄灰(2.5Y5/1)	良好	1/3 以下	
143	竪穴住居36	土師器	鉢	14.6	5.6	—	—	外面：ヘラケズリ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 胎上精良	外面：橙(5YR6/6) 内面：黄橙(7.5YR6/8)	良好	1/3 程度	
144	竪穴住居36	土師器	鉢	16.4	8.5	—	4.0	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：浅黄(2.5Y7/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	2/3 以下	
145	竪穴住居36	土師器	鉢	36.0	(6.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR6.5/3) 内面：にぶい黄(10YR6.5/3)	良好	1/3 以下	
146	竪穴住居36	土師器	小型丸底 甗	11.8	(6.6)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ハケメか	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外面：橙(2.5YR6/6) 内面：橙(2.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
147	竪穴住居36	土師器	製塩土器	—	(2.5)	—	4.4	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：灰黄(2.5YR6/2)	良好	1/3 以下	
148	竪穴住居36	土師器	製塩土器	—	(2.2)	—	—	外面：指オサエ、ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外面：褐灰(10YR4/1) 内面：褐灰(10YR4/1)	良好	1/3 以下	
149	竪穴住居 37・38	弥生土器	甗	—	(3.8)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙(7.5YR7/3) 内面：にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
150	竪穴住居 37・38	弥生土器	甗	—	(4.4)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 角閃石	外面：にぶい橙(5YR7/4) 内面：にぶい橙(5YR7/4)	良好	1/3 以下	
151	竪穴住居 37・38	弥生土器	鉢	20.0	(6.9)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/2) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	1/3 以下	
152	竪穴住居40	土師器	甗	18.7	(15.5)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英	外面：灰黄(2.5Y6/2) 内面：灰黄(2.5Y7/2)	良好	2/3 以下	肩部稜状刺突 痕
153	竪穴住居40	土師器	甗	19.4	(7.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：灰白(10YR8/2) 内面：灰白(10YR8/2)	良好	1/3 以下	
154	竪穴住居40	土師器	二重口縁 甗	24.0	26.3	40.4	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ、 ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英	外面：にぶい黄橙(10YR7/2) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	2/3 以下	
155	竪穴住居40	土師器	甗	11.8	13.0	12.2	—	外面：タタキ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：灰口(2.5Y7/1) 内面：暗灰黄(2.5Y5/2)	良好	2/3 以下	
156	竪穴住居40	土師器	甗	14.0	(4.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白(10YR8/2.5) 内面：灰白(10YR8/2.5)	良好	1/3 以下	
157	竪穴住居40	土師器	甗	12.0	(3.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：明褐色(7.5YR7/2) 内面：明褐色(7.5YR7/2)	良好	1/3 以下	
158	竪穴住居40	土師器	甗	13.0	(10.6)	18.8	—	外面：ハケメ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 胎上精良	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
159	竪穴住居40	土師器	甗	14.6	(12.8)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 黒雲母 角閃石 黒色粒	外面：灰白(2.5Y7/1) 内面：灰白(5Y7/1)	良好	2/3 以下	肩部稜状刺突 痕 緑部未調整 部分有
160	竪穴住居40	土師器	甗	12.6	(17.3)	17.9	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：浅黄(2.5Y7/3) 内面：明褐色(7.5YR7/2)	良好	2/3 以下	
161	竪穴住居40	土師器	甗	14.7	(19.6)	22.8	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白(10YR8/2) 内面：灰白(10YR8/2)	良好	2/3 以下	
162	竪穴住居40	土師器	高杯	19.8	(6.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙(5YR7/6) 内面：橙(5YR7/8)	良好	1/3 以下	
163	竪穴住居40	土師器	高杯	19.0	(6.3)	—	—	外面：ヘラミガキ、化粧上 内面：不明	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：赤橙(10YR6/8) 内面：橙(2.5YR6/8)	良好	1/3 以下	
164	竪穴住居40	土師器	高杯	18.5	13.0	—	14.9	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：明赤褐(2.5YR5/6) 内面：明赤褐(2.5YR5/6)	良好	2/3 以下	外・内面化粧 上
165	竪穴住居40	弥生土器	鉢	15.0	8.9	15.4	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：灰黄(10YR6/2) 内面：にぶい橙(10YR6/4)	良好	2/3 以下	
166	竪穴住居40	土師器	鉢	17.1	(12.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外面：灰黄(2.5YR7/2) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	良好	1/3 以下	
167	竪穴住居40	土師器	鉢	26.3	14.7	—	—	外面：ハケメ 内面：指オサエ、ハケメ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 黒色粒 黒雲母	外面：浅黄橙(10YR8/3) 内面：浅黄(2.5Y7/3)	良好	ほぼ 完成	黒黄 肩部管による 刺突

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径							底径
168	竪穴住居40	土師器	鉢	-	(18.2)	-	外側：ハケメ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外側：灰黄褐(10YR6/2) 内側：灰黄褐(10YR6/2)	良好	2/3 以下		
169	竪穴住居40	土師器	鉢	12.2	6.25	-	外側：ヨコナデ、ヘラケズリ 内側：ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外側：灰白(2.5Y8/2) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	2/3 以下		
170	竪穴住居40	土師器	鉢	5.4	2.7	-	外側：指オサエ 内側：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外側：にぶい黄緑(10YR7/3) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	ほぼ 完形		
171	竪穴住居40	土師器	鉢	8.0	3.1	-	外側：ナデ 内側：ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 雲母 角閃石	外側：にぶい黄緑(7.5YR7/3) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	ほぼ 完形		
172	竪穴住居40	土師器	製磁土器	-	(1.9)	-	4.2	外側：指オサエ 内側：指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外側：黄灰(2.5Y6/1) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	1/3 以下	
173	竪穴住居40	土師器	製磁土器	-	(2.1)	-	4.2	外側：指オサエ 内側：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外側：にぶい黄緑(2.5YR6/4) 内側：黒褐(2.5YR3/1)	良好	1/3 以下	
174	竪穴住居38	土師器	製磁土器	-	(2.5)	-	4.2	外側：指オサエ 内側：ナデ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 黒色土粒	外側：にぶい黄緑(2.5YR6/3) 内側：にぶい黄緑(2.5YR6/3)	良好	1/3 以下	
175	竪穴住居41	弥生土器	壺	19.2	(3.7)	-	-	外側：ヨコナデ 内側：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外側：にぶい黄緑(10YR7/4) 内側：にぶい黄緑(10YR7/4)	良好	1/3 以下	
176	竪穴住居41	弥生土器	甗	-	(4.0)	-	(5.0)	外側：ハケメ 内側：ヘラケズリ 底側ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外側：にぶい黄緑(10YR6/4) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	1/3 以下	
177	井戸1	弥生土器	壺	-	(14.4)	-	-	外側：ハケメ後ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外側：にぶい黄緑(7.5YR7/3) 内側：にぶい黄緑(7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
178	井戸1	弥生土器	高杯	-	(4.6)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外側：黄(5YR6/6) 内側：黄(5YR6/6)	良好	1/3 以下	
179	井戸1	弥生土器	高杯	-	(7.5)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外側：黄(2.5YR6/8) 内側：黄(2.5YR6/8)	良好	1/3 以下	
180	井戸1	弥生土器	高杯	-	(7.9)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ハケメ、ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外側：にぶい黄緑(10YR6/3) 内側：にぶい黄緑(10YR7/3)	良好	1/3 以下	
181	井戸1	弥生土器	ミニチュア	-	(2.0)	-	1.5	外側：指オサエ 内側：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外側：黄(5YR6/6) 内側：黄(5YR6/6)	良好	2/3 以下	歪形
182	井戸1	弥生土器	製磁土器	-	(2.5)	-	4.5	外側：指オサエ 内側：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外側：赤(10YR5/6) 内側：灰白(5YR8/1)	良好	1/3 以下	
183	井戸2	弥生土器	甗	15.4	(8.2)	-	-	外側：ハケメ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外側：にぶい赤褐(5YR5/4) 内側：にぶい黄緑(7.5Y6/4)	良好	1/3 以下	
184	井戸3	弥生土器	壺	22	(7.3)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外側：にぶい黄緑(5YR6/4) 内側：にぶい黄緑(7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	外・内面に均 塗り
185	井戸3	弥生土器	甗	13.0	(4.6)	-	-	外側：ハケメ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外側：にぶい黄褐(10YR6/4) 内側：灰白(2.5Y8/2)	良好	1/3 以下	
186	井戸3	弥生土器	壺	15.6	(7.2)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外側：灰白(2.5YR8/2) 内側：灰(5Y4/1)	良好	1/3 以下	
187	井戸3	弥生土器	甗	15.8	(6.4)	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外側：浅黄緑(7.5YR8/4) 内側：黄(5YR7/6)	良好	1/3 以下	
188	井戸3	弥生土器	甗	-	(16.4)	20.4	8.0	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外側：にぶい黄緑(7.5YR6/4) 内側：にぶい黄緑(7.5YR6/4)	良好	2/3 程度	煤付着
189	井戸3	弥生土器	台付甗	16.9	(18.8)	19.0	-	外側：ヘラミガキ 内側：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外側：にぶい黄緑(7.5YR6/4) 内側：にぶい黄緑(7.5YR6/4)	良好	ほぼ 完形	被熱部分有り
190	井戸3	弥生土器	台付甗	16.5	15.5	18.1	-	外側：ハケメ、ヘラミガキ 内側：ヘラミガキ状の工具ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外側：にぶい黄緑(10YR7/2) 内側：にぶい黄緑(7.5YR6/3)	良好	ほぼ 完形	黒珪赤色顔料 塗布?
191	井戸3	弥生土器	甗	12.3	17.1	20.2	6.3	外側：ハケメ後ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外側：黄灰(2.5Y6/1) 内側：にぶい黄緑 (10YR7/2.5)	良好	ほぼ 完形	煤付着
192	井戸3	弥生土器	甗	14.0	21.4	17.9	4.6	外側：タタキ、ハケメ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外側：明褐色(7.5YR7/2) 内側：にぶい黄緑(10YR7/2)	良好	1/3 以下	炭化物付着 煤付着
193	井戸3	弥生土器	甗	16.0	25.2	22.0	5.9	外側：ハケメ、ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外側：黒(10YR2/1) 内側：褐灰(10YR4/1)	良好	1/3 以下	煤付着
194	井戸3	弥生土器	甗	13.75	24.7	20.3	6.0	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外側：灰黄(2.5Y7/2) 内側：灰黄(2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	肩部 粒状剝 突痕
195	井戸3	弥生土器	甗	15.8	26.8	21.7	5.8	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外側：洗赤褐(2.5YR7/4) 内側：赤橙(10R6/8)	良好	1/3 以下	煤付着
196	井戸3	弥生土器	甗	14.0	28.0	21.0	6.0	外側：ハケメ、ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外側：灰白(10YR8/2) 内側：灰白(2.5Y8/1)	良好	2/3 以下	
197	井戸3	弥生土器	甗	-	-	-	-	外側：ヘラミガキ 内側：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外側：灰黄褐(10YR5/2) 内側：灰黄(2.5Y6/2)	良好	1/3 以下	底部穿孔
198	井戸3	弥生土器	高杯	11.8	(7.2)	12.6	-	外側：ハケメ後ヘラミガキ 内側：ハケメ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 胎土精 良	外側：明赤褐(2.5YR5/6) 内側：黄(2.5YR6/6)	良好	2/3 以下	
199	井戸3	弥生土器	高杯	14.8	(5.8)	-	-	外側：ハケメ後ヘラミガキ 内側：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 赤色土粒 水こし粘土	外側：黄(7.5YR6/6) 内側：にぶい赤褐(5YR5/4)	良好	2/3 以下	
200	井戸3	弥生土器	高杯	-	(4.6)	-	5.1	外側：ハケメ 内側：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外側：黄(5YR6/6) 内側：黄(5YR6/6)	良好	2/3 以下	
201	井戸3	弥生土器	高杯	11.5	7.8	-	10.1	外側：ハケメ、ヨコナデ 内側：工具ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外側：にぶい黄緑(5YR7/5) 内側：にぶい黄緑(5YR7/5)	良好	ほぼ 完形	黒染

掲載 番号	山上遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎 上	色 調	焼成	残存 状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
202	井戸3	弥生土器	高杯	22.6	(8.85)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰黄 (2.5Y6/2) 内面：灰黄 (2.5Y6/2)	良好	2/3 以下	
203	井戸3	弥生土器	高杯	22.2	(10.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 胎土精良	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	2/3 以下	
204	井戸3	弥生土器	高杯	—	(6.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 黒色土粒	外面：にぶい褐 (7.5YR6/3) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	
205	井戸3	弥生土器	高杯	—	(4.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：灰白 (5Y7/2)	良好	脚部	穿孔
206	井戸3	弥生土器	鉢	8.3	8.75	8.55	3.2	外面：ヘラミガキ 内面：土具ナデ	粗砂(稀) 細砂(稀) 長石 石英 赤色土粒 胎土精 良	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：赤橙 (10YR6/6)	良好	完品	煤付着
207	井戸3	弥生土器	鉢	10.0	9.65	10.1	3.0	外面：不明 内面：土具ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 金雲母 赤色土粒	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：褐灰 (7.5Y4/1)	良好	2/3 以下	
208	井戸3	弥生土器	ミニチュア	6.25	7.9	4.9	1.7	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 胎土精良	外面：灰黄褐 (10YR6.5/2) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	ほぼ 完形	変形
209	井戸3	弥生土器	鉢	33.0	(6.0)	33.4	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	
210	井戸3	弥生土器	大形鉢	43.2	21.8	—	11.3	外面：ハケメ、ヘラケズリ 内面：ハケメ後ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	ほぼ 完形	黒斑 煤付着 内面赤色顔料 底層二次焼成?
211	井戸3	弥生土器	鉢	8.1	5.8	16.6	3.4	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/8)	良好	1/3 以下	
212	土器棺蓋1	弥生土器	鉢	36.7	(13.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：灰黄 (2.5Y7/2) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	土器棺蓋
213	土器棺蓋1	弥生土器	壺	—	(27.1)	36.2	9.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：浅黄 (2.5Y7/3) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	良好	1/3 以下	土器棺蓋
214	土器棺蓋2	弥生土器	壺	—	27.5	29.1	8.0	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	良好	1/3 以下	土器棺蓋、穿孔 1、刺突痕1
215	土器1	弥生土器	壺	15.0	(5.7)	17.7	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：明赤褐 (2.5YR5/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	赤色顔料
216	土器1	弥生土器	高杯	—	(5.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (10YR7/4)	良好	1/3 以下	刺突し込み痕
217	土器3	弥生土器	高杯	16.6	(4.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：橙 (7.5YR7/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
218	土器4	弥生土器	鉢	19.4	(10.4)	—	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：褐灰 (10YR5/1) 内面：褐灰 (10YR6/1)	良	1/3 以下	
219	土器4	弥生土器	高杯	—	(6.8)	—	14.4	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良	1/3 以下	刺突し込み痕 2
220	土器5	弥生土器	壺	—	(5.5)	—	6.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR67/3) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	黒斑 穿孔
221	土器5	弥生土器	製塩土器	—	(3.1)	—	4.5	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：灰白 (5Y8/1)	良好	1/3 以下	
222	土器6	弥生土器	甕	11.7	(6.1)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
223	土器6	弥生土器	甕	14.8	(15.1)	19.0	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	煤付着
224	土器6	弥生土器	甕	14.8	20	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下	
225	土器6	弥生土器	甕	13.4	25.4	19.8	5.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	ほぼ 完形	煤付着
226	土器6	弥生土器	甕	13.4	(16.8)	19.9	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR5.5/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
227	土器6	弥生土器	甕	—	(3.2)	—	6.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：オリーブ黒 (5Y3/1) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	穿孔
228	土器6	弥生土器	高杯	14.1	(9.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	
229	土器6	弥生土器	高杯	—	(5.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	
230	土器6	弥生土器	高杯	—	5.0	—	12.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	
231	土器6	弥生土器	鉢	15.2	6.3	—	—	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：灰白 (10YR8/2)	良好	1/3 以下	
232	土器6	弥生土器	鉢	14.4	6.7	—	4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	ほぼ 完形	黒斑
233	土器7	弥生土器	壺	(13.3)	(5.6)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	頭部内面赤色 顔料か
234	土器7	弥生土器	甕	13.2	(4.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：黒褐 (2.5YR3/1) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
235	土器7	弥生土器	甕	12.8	(2.8)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	

掲載 番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎 土	色 調	焼成 状況	備考	
				口径	器高	最大径						底径
236	土壇7	弥生土器	甕	13.0	(3.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：橙(5YR7/6)	良好 1/3 以下	
237	土壇7	弥生土器	甕	13.7	(5.5)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙2.5YR6.5/8 内面：橙2.5YR6.5/8	良好 1/3 以下	
238	土壇7	弥生土器	甕	14.8	(18.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙(10YR8/3) 内面：浅黄橙(7.5YR8/4)	良好 1/3 以下	
239	土壇7	弥生土器	甕	14.4	(19.9)	19.8	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい橙(7.5YR7/4)	良好 1/3 以下	煤付着
240	土壇7	弥生土器	甕	—	(1.6)	—	5.6	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(中) 長石 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙(7.5YR6/3) 内面：灰(N6.5/1)	良好 1/3 以下	煤付着
241	土壇7	弥生土器	高杯	—	(4.2)	—	9.8	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙(7.5YR7/3) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	良好 1/3 以下	
242	土壇7	弥生土器	高杯	—	(4.9)	—	12.4	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい黄橙(10YR7/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好 1/3 以下	
243	土壇7	弥生土器	高杯	—	(14.7)	—	9.5	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	良好 1/3 以下	
244	土壇7	弥生土器	高杯	—	(6.6)	—	12.1	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙(5YR7/4) 内面：にぶい橙(5YR7/4)	良好 2/3 以下	
245	土壇7	弥生土器	高杯	16.2	8.3	—	10.5	外面：ハケメ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙(5YR6.5/6) 内面：橙(5YR6.5/6)	良好 2/3 以下	
246	土壇7	弥生土器	高杯	19.6	10.6	—	12.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙5YR6/6 内面：橙5YR7/6	良好 1/3 以下	
247	土壇7	弥生土器	台付直口 壺	7.8	(15.8)	15.0	—	外面：ハケメ後ヘラミキ、ヨコ ナデ 内面：ナデ、指	粗砂(少) 細砂(少) 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙(7.5YR6/6) 内面：橙(7.5YR6/6)	良好 2/3 以下	
248	土壇7	弥生土器	台付蓋小 鉢	—	(8.1)	—	11.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙(5YR7/4) 内面：橙(5YR7/6)	良好 1/3 以下	胴部と脚部の 胎土が異なる
249	土壇7	弥生土器	裝飾器台	(38.6)	(4.8)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙(7.5YR8/6) 内面：浅黄橙(7.5YR8/6)	良好 1/3 以下	
250	土壇7	弥生土器	蓋台	—	(3.5)	—	(43.0)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：浅黄橙(10YR8/4)	良好 1/3 以下	
251	土壇7	弥生土器	器台	—	(12.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ハケメ、工具ナデ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：浅黄橙(7.5YR8/3.5) 内面：浅黄橙(7.5YR8/3.5)	良好 1/3 以下	沈箱3条を 単位にして認 める
252	土壇7	弥生土器	鉢	38.0	(12.9)	40.0	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ハケメ後ヘ ラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/2) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	良好 1/3 以下	
253	土壇8	弥生土器	甕	16.0	(6.1)	—	—	外面：不明 内面：不明	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：橙(5YR6/6) 内面：橙(2.5YR6/6)	良好 1/3 以下	
254	土壇9	弥生土器	甕	—	(5.0)	—	4.0	外面：タタキ後ナデ 内面：指オサエ、ナデ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙(10YR7/1.5) 内面：褐灰(10YR6/1)	良好 1/3 以下	
255	土壇9	弥生土器	高杯	15.6	(9.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙(5YR7/4) 内面：橙(5YR7/6)	良好 2/3 以下	黒炭
256	土壇9	土師器	小形鉢	7.6	7.3	—	2.5	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰褐(7.5YR6/2) 内面：灰褐(7.5YR6/2)	良好 ほぼ 完形	
257	土壇9	土師器	台付鉢	15.2	7.7	—	7.7	外面：ハケメ、ヨコナデ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙(7.5YR7/3) 内面：明褐灰(7.5YR7/2)	良好 2/3 以下	
258	土壇10	弥生土器	甕	17.8	(4.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：浅黄橙(10YR8/3) 内面：浅黄橙(10YR8/3)	良好 1/3 以下	
259	土壇10	弥生土器	高杯	—	(4.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外面：灰黄褐(10YR5/2) 内面：にぶい橙(7.5YR6/4)	良好 1/3 以下	
260	土壇11	弥生土器	壺	14.4	(7.8)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5)	良好 1/3 以下	
261	土壇11	弥生土器	甕	11.4	20.9	16.1	4.7	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ 底部：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5)	良好 ほぼ 完形	煤付着 1鉢内面粒状 刺突痕1
262	土壇11	弥生土器	甕	16.2	25.4	20.1	5.0	外面：指オサエ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰黄(2.5Y7/2) 内面：灰黄(2.5Y7/2)	良好 2/3 以下	
263	土壇11	弥生土器	甕	14.8	27.5	21.7	6.1	外面：ハケメ、一部ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰黄(2.5Y7/2) 内面：黄灰(2.5Y5/1)	良好 2/3 以下	
264	土壇11	弥生土器	高杯	20.4	13.7	—	12.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：にぶい黄橙(7.5YR7/4)	良好 完形	
265	土壇11	弥生土器	裝飾高杯	—	—	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好 1/3 以下	
266	土壇11	弥生土器	台付直口 壺	5.8	10.9	13.9	—	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙(7.5YR7/6) 内面：灰(7.5YR5/1)	良好 2/3 以下	
267	土壇11	弥生土器	鉢	12.7	5.65	—	2.9	外面：ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰オリーブ(5Y5/2) 内面：灰黄(2.5Y6/2)	良好 2/3 以下	

掲載 番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎 土	色 調	焼成	残存 状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
268	土塚11	弥生土器	鉢	12.8	6.0	—	5.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ナデカ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3.5) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3.5)	良好	1/3 以下	
269	土塚12	弥生土器	高杯	14.6	9.5	14.9	13.0	外面：ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	2/3 以下	
270	土塚13	弥生土器	甗	14	(5.2)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR 7/4) 内面：にぶい橙 (5YR 7/4)	良好	1/3 以下	
271	土塚13	弥生土器	甗	16.2	(9.9)	21.0	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄 (2.5Y7/3)	良好	1/3 以下	煤付着
272	土塚13	弥生土器	高杯	19.5	(6.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	2/3 以下	
273	土塚13	弥生土器	高杯	—	(7.5)	—	11.7	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下	
274	土塚13	弥生土器	鉢	15.4	(6.5)	15.6	4.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下	
275	土塚13	弥生土器	鉢	18.5	9.15	—	6.1	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ 底面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	ほぼ 完形	
276	土塚13	弥生土器	鉢	19.2	17.1	20.2	6.9	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄 (2.5Y7/3) 内面：浅黄 (2.5Y7/3)	良好	2/3 以下	
277	土塚13	弥生土器	人形鉢	30.8	18.6	35.2	—	外面：ハケメ後ナデ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ、 指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：にぶい橙 (10YR7/2)	良好	1/3 以下	黒斑
278	土塚14	弥生土器	甗	14.9	(4.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
279	土塚14	弥生土器	高杯	—	(5.0)	—	12.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
280	土塚14	弥生土器	台付鉢	—	(4.0)	—	4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰黄 (2.5Y6/2) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	良好	1/3 以下	
281	土塚19	弥生土器	壺	17	(24.7)	28.0	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/6) 内面：灰黄 (2.5YR6/2)	良好	1/3 以下	黒斑
282	土塚19	弥生土器	甗	15.6	29.8	20.9	6.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	良好	2/3 以下	
283	土塚19	弥生土器	甗	13.5	24	19.4	5.6	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：黒褐 (5YR3/1)	良好	2/3 以下	肩部残状刺突 痕
284	土塚20	弥生土器	甗	11.3	(3.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：明褐色 (7.5YR7/2) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	煤付着
285	土塚20	弥生土器	甗	—	(2.8)	—	5.0	外面：指オサエ、ナデ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰褐 (7.5YR6/2) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	煤付着 底部穿孔
286	土塚20	弥生土器	高杯	20.8	(6.2)	21.0	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	
287	土塚20	弥生土器	高杯	—	(6.1)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	沈線4条 刺突文
288	土塚20	弥生土器	高杯	—	(5.0)	—	11.0	外面：不明 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR7/6)	良好	1/3 以下	刺突し込み痕
289	土塚21	弥生土器	甗	15.0	(9.6)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
290	土塚21	弥生土器	高杯	16	8.8	—	10.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/4) 内面：橙 (5YR7/4)	良好	2/3 以下	
291	土塚21	弥生土器	高杯	—	(9.6)	—	12.2	外面：ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
292	土塚21	弥生土器	台付直口 壺	9.0	(11.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/8) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	内面工具痕
293	土塚22	弥生土器	甗	14.35	21.25	—	5.6	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	ほぼ 完形	煤付着 吹きこぼれ痕
294	土塚22	弥生土器	甗	14.7	23.6	18.5	6.0	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良	ほぼ 完形	煤付着
295	土塚23	弥生土器	高杯	—	(5.0)	—	(14.0)	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：灰褐 (5YR5/2)	良好	1/3 以下	
296	土塚24	弥生土器	高杯	—	(8.0)	16.3	12.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	
297	土塚25	弥生土器	壺	10.8	(5.3)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
298	土塚25	弥生土器	甗	15.0	(5.2)	—	—	外面：一部ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎上	色調	焼成状況	備考	
				口径	器高	最大径						底径
299	土塚25	弥生土器	甗	14.5	(7.5)	—	—	外面：ハケメか 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR6.5/4)	良好	1/3 以下
300	土塚25	弥生土器	高杯	20.4	(6.9)	20.7	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキか	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下
301	土塚25	弥生土器	鉢	10.7	4.9	—	—	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2/3 以下
302	土塚25	弥生土器	鉢	14.4	5.1	—	7.8	外面：指オサエ、ナデ 内面：T具ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下
303	土塚26	弥生土器	甗	14.0	(13.8)	18.9	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：黄灰 (2.5Y5/1)	良好	1/3 以下
304	土塚26	弥生土器	甗	15.2	(16.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5Y7/4) 内面：灰黄褐 (10YR5/2)	良好	1/3 以下
305	土塚26	弥生土器	甗	15.0	(24.9)	19.9	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(多) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6) 内面：灰黄 (2.5Y6/2)	良好	1/3 以下
306	土塚26	弥生土器	甗	14.0	25.5	19.0	5.7	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下
307	土塚26	弥生土器	甗	—	18.8	22.0	6.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (YR7/4)	良好	1/3 以下
308	土塚26	弥生土器	大形鉢	42.0	25.0	—	13.0	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (2.5YR6/4)	良好	1/3 以下
309	土塚27	弥生土器	甗	14.6	12.6	—	4.9	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：灰褐 (7.5YR6/2) 内面：褐灰 (10YR6/2)	良好	ほぼ 完形
310	土塚27	弥生土器	高杯	—	(8.2)	—	—	外面：不明 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	2/3 以下
311	土塚27	弥生土器	壺	—	(10.4)	—	10.8	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：橙 (7.5R7/6)	良好	1/3 以下
312	土塚28	弥生土器	壺	15.0	(8.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：灰白 (10YR8/1)	良好	1/3 以下
313	土塚28	弥生土器	甗	15.0	(5.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ後ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下
314	土塚28	弥生土器	甗	—	(3.5)	—	4.4	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下
315	土塚28	弥生土器	高杯	19.5	(10.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR6.5/4)	良好	1/3 以下
316	土塚28	弥生土器	高杯	—	(4.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下
317	土塚29	弥生土器	甗	15.2	(12.5)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3 以下
318	土塚29	弥生土器	鉢	16.2	8.4	—	4.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅橙 (5YR8/4) 内面：橙 (5YR7/8)	良好	ほぼ 完形
319	土塚29	弥生土器	鉢	22.8	(10.2)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ、一部 ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3 以下
320	土塚29	弥生土器	下地形 土器	—	(14.3)	18.7	9.1	外面：ハケメ後ナデ 内面：ヘラケズリ、ハケメ後ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下
321	土塚30	弥生土器	甗	14.9	(4.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：黒 (7.5YR2/1)	良好	1/3 以下
322	土塚30	弥生土器	高杯	12.6	10.3	—	14.2	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下
323	土塚30	弥生土器	台付鉢	—	(4.3)	—	4.3	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：黒 (5Y2/1) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下
324	土塚31	弥生土器	甗	11.1	(13.3)	12.7	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2/3 以下
325	土塚31	弥生土器	甗	13.6	(16.8)	20.4	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR7/4) 内面：橙 (2.5YR7/4)	良好	2/3 以下
326	土塚31	弥生土器	短頸壺	10.5	13.3	15.4	6.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	2/3 以下
327	土塚31	弥生土器	高杯	19.8	(7.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ一部ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下
328	土塚31	弥生土器	裝飾高杯	—	—	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下

掲載番号	山上遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
329	土塚31	弥生土器	高杯	—	(5.7)	—	11.8	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7.5/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	1/3 以下	黒斑
330	土塚31	弥生土器	高杯	—	(13.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 角閃石 黒色粒 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
331	土塚31	弥生土器	高杯	24.9	15.9	—	14.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙10YR7/3 内面：にぶい黄橙10YR7/3	良好	1/3 以下	
332	土塚32	弥生土器	壺	17.4	(26.5)	19.2	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：灰黄 (2.5YR7/3)	良好	2/3 以下	
333	土塚33	弥生土器	壺	16.1	31.0	30.3	12.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	2/3 以下	
334	土塚33	弥生土器	甗	13.6	22.8	18.3	4.6	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	1/2 以下	黒斑 底部穿孔
335	土塚33	弥生土器	細頸壺	9.0	(12.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	黒斑
336	土塚34	土師器	壺	21.6	(8.6)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良	2/3 以下	
337	土塚34	弥生土器	甗	16.6	(16.6)	19.1	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下	
338	土塚34	弥生土器	甗	16.3	21.8	16.4	4.9	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：浅黄 (2.5Y7/3) 内面：浅黄 (2.5Y7/4)	良好	1/3 以下	
339	土塚34	弥生土器	甗	16.0	20.4	18.3	6.0	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：にぶい橙 (5YR7/3.5)	良好	2/3 以下	黒斑 煤付着
340	土塚34	弥生土器	甗	14.4	(21.3)	19.6	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	黒斑 煤付着
341	土塚34	弥生土器	甗	16.0	23.0	—	6.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2/3 以下	底部穿孔 外面一部板状 土具によるミ ガキ状のナ デ
342	土塚34	弥生土器	甗	14.9	25.6	21.0	7.3	外面：タタキ後工具ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	ほぼ 完形	
343	土塚34	弥生土器	甗	14.6	24.7	19.6	6.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	ほぼ 完形	黒斑 肩部粒状刺突 痕
344	土塚34	弥生土器	高杯	16.6	(7.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
345	土塚34	弥生土器	高杯	19.6	(10.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	黒斑
346	土塚34	弥生土器	高杯	16.5	10.5	—	11.6	外面：ヘラミガキ、指オサエ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	2/3 以下	
347	土塚34	弥生土器	高杯	19.3	11.4	—	12.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	ほぼ 完形	割差し込み 痕
348	土塚35	弥生土器	壺	18.8	(12.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
349	土塚35	弥生土器	三重口縁 壺	30.0	(9.7)	—	—	外面：ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
350	土塚35	弥生土器	三重口縁 壺	28.6	(17.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) 内面：橙(7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
351	土塚35	弥生土器	甗	14.2	(4.0)	—	—	外面：土具ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：黒褐 (10UR3.5/1) 内面：黒褐 (10YR3.5/1)	良好	1/3 以下	
352	土塚35	弥生土器	甗	14.0	(3.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	煤付着
353	土塚35	弥生土器	甗	14.2	(3.8)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	煤付着
354	土塚35	弥生土器	甗	15.2	(5.9)	—	—	外面：タタキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7.5/4) 内面：にぶい橙 (5YR7.5/4)	良好	1/3 以下	
355	土塚35	弥生土器	甗	16.5	(10.1)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	黒斑
356	土塚35	弥生土器	甗	17.0	(6.8)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
357	土塚35	弥生土器	甗	13.8	(10.4)	15.0	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：黒 (N2/1)	良好	1/3 以下	
358	土塚35	弥生土器	甗	14.4	(11.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：黄灰 (2.5Y4/1) 内面：黄灰 (2.5Y5/1)	良好	1/3 以下	
359	土塚35	弥生土器	甗	—	(19.7)	—	4.0	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (10YR6/3)	良好	2/3 以下	外面煤付着 内面炭化物付 着
360	土塚35	弥生土器	甗	16.0	20.2	17.0	5.7	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	1/3 以下	煤付着
361	土塚35	弥生土器	高杯	16.9	(4.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (7.5YR7/6) 内面：橙 (7.5YR7/6)	不良	1/3 以下	

掲載 番号	出上通構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎 上	色 調	焼成 状況	備考	
				口径	器高	最大径	底径						
362	土織35	弥生土器	高杯	16.6	(9.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	2/3 以下	
363	土織35	弥生土器	高杯	19.4	(10.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	脚内面差し込 み痕 黒 斑
364	土織35	弥生土器	高杯	19.2	11.3	—	12.4	外面：ハケメ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	
365	土織35	弥生土器	高杯	—	(5.3)	—	11.2	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/7) 内面：橙 (2.5YR6/7)	良好	2/3 以下	脚内面差し込 み痕
366	土織35	弥生土器	高杯	—	(5.1)	—	12.1	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/5) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	2/3 以下	脚差し込み痕
367	土織35	弥生土器	高杯	—	(4.6)	—	13.4	外面：不明 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/8) 内面：橙 (2.5YR7/8)	良好	1/3 以下	
368	土織35	弥生土器	高杯	—	(6.0)	—	11.5	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (2.5Y7/8) 内面：橙 (2.5Y6/8)	良好	1/3 以下	穿孔
369	土織35	弥生土器	高杯	—	5.7	—	12.1	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR7/6)	良好	2/3 以下	脚内面差し込 み痕
370	土織35	弥生土器	高杯	—	(6.1)	—	12.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5Y7/6) 内面：橙 (2.5Y7/6)	良好	2/3 以下	
371	土織35	弥生土器	蓋	—	6.4	—	15.0	外面：ヘラケズリ、ヘラミガキ、 ナデ 内面：工具ナデ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外面：灰褐 (7.5YR6/2) 内面：灰褐 (7.5YR6/2)	良好		
372	土織35	弥生土器	鉢	9.6	(5.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/5) 内面：にぶい橙 (5YR7/5)	良好	1/3 以下	
373	土織35	弥生土器	鉢	10.1	7.9	—	4.0	外面：不明 内面：ハケメ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	ほぼ 完形	
374	土織35	弥生土器	鉢	12.8	(8.5)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
375	土織35	弥生土器	鉢	13.9	12.3	14.7	5.2	外面：ナデ 内面：工具ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 金雲母 赤色土粒	外面：黄橙(7.5YR8/8) 内面：にぶい黄橙(10YR7/2)	良好	ほぼ 完形	外面に布目 黒斑
376	土織35	弥生土器	鉢	13.8	6.9	14.9	4.2	外面：ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	2/3 以下	
377	土織35	弥生土器	大形鉢	34.8	(7.0)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	1/3 以下	
378	土織36	弥生土器	甕	—	(5.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：灰白 (5Y7/2)	良好	1/3 以下	
379	土織36	弥生土器	ミニチュア	3.5	2.8	3.9	2.5	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい橙 (2.5Y6/3) 内面：にぶい橙 (2.5Y6/3)	良好	ほぼ 完形	黒斑、鉢形
380	土織37	弥生土器	甕	12.8	15.6	14.0	2.8	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	良好	2/3 以下	
381	土織37	弥生土器	ミニチュア	2.7	2.1	2.8	2.7	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	ほぼ 完形	煤付着 鉢形
382	土織38	弥生土器	壺	—	(18.0)	—	(8.0)	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：橙 (5YR6/8)	良好	1/3 以下	黒斑 煤付着
383	土織38	弥生土器	甕	14.7	(7.8)	—	—	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	煤付着
384	土織38	弥生土器	甕	16.5	21.4	—	4.7	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3.5) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3.5)	良好	1/3 以下	煤付着
385	土織38	弥生土器	高杯	13.7	(4.9)	—	—	外面：不明 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6.5/6) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
386	土織38	弥生土器	高杯	19.4	9.0	—	11.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2/3 以下	
387	土織38	弥生土器	製福土器	—	(2.9)	—	4.4	外面：不明 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 胎土精良	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：橙 (2.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
388	土織39	弥生土器	甕	10.0	16.9	12.5	4.0	外面：指オサエ、ハケメ、 ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀)	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	完形	黒斑
389	土織39	弥生土器	甕	13.85	19.7	—	4.6	外面：指オサエ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	長石 石英 雲母 粗砂(少) 細砂(中)	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	ほぼ 完形	黒斑 煤付着
390	土織39	弥生土器	甕	13.6	17.4	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：灰黄褐 (10YR4/2)	良好	2/3 以下	
391	土織39	弥生土器	甕	14.9	22.2	—	4.8	外面：指オサエ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	煤付着
392	土織39	弥生土器	甕	13.8	24.1	19.8	6.0	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	
393	土織39	弥生土器	甕	13.9	24.5	17.8	5.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR7/5) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	煤付着
394	土織39	弥生土器	甕	14.0	22.3	18.7	6.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR5/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR5/3)	良好	1/3 以下	煤付着

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
395	土器39	弥生土器	甗	17.8	(9.2)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：褐灰 (10YR4/1) 内面：褐灰 (10YR4/1)	良好	1/3 以下	
396	土器39	弥生土器	鉢	16.9	14.8	—	5.9	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2/3 以下	
397	土器39	弥生土器	高杯	17.0	(5.1)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
398	土器39	弥生土器	高杯	19.9	(5.0)	20.2	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	1/3 以下	
399	土器39	弥生土器	高杯	16.95	8.8	17.6	10.6	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	2/3 以下	脚差し込み痕
400	土器39	弥生土器	高杯	24.0	11.7	—	14.0	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/8) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	2/3 以下	
401	土器39	弥生土器	高杯	—	(4.9)	—	10.4	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (10YR8/6) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	1/3 以下	
402	土器39	弥生土器	高杯	—	(4.5)	—	10.9	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	脚差し込み痕
403	土器39	弥生土器	高杯	—	(5.1)	—	11.5	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3 以下	黒斑 脚差し込み痕
404	土器39	弥生土器	高杯	—	(5.7)	—	10.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
405	土器43	弥生土器	高杯	—	(6.1)	—	11.0	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
406	土器44	弥生土器	鉢	9.9	(5.8)	11.6	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：橙 (7.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
407	土器45	弥生土器	甗	—	(1.8)	—	6.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	黒斑
408	土器45	弥生土器	高杯	—	(7.6)	—	10.8	外面：ハケメ後ヘラミガキ、 ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	
409	土器45	弥生土器	甗	—	(8.3)	—	4.6	外面：摺オサエ、ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：褐灰 (10YR5/1) 内面：灰黄橙 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	
410	土器46	弥生土器	高杯	—	(3.7)	10.6	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
411	土器47	弥生土器	長頸壺	18.4	(24.6)	19.9	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、ナデ、 ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	口縁内面に肩 部外面と同じ 土具による刺 突痕
412	土器47	弥生土器	長頸壺	—	(20.4)	23.4	—	外面：ヘラミガキ、土具ナデ 内面：ヘラケズリ、ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	黒斑 煤片着
413	土器47	弥生土器	壺	20.8	(6.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
414	土器47	弥生土器	甗	21.2	(5.8)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：橙 (5YR7/8)	良好	1/3 以下	
415	土器47	弥生土器	高杯	—	(4.2)	—	11.0	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR7/8)	良好	1/3 以下	
416	土器48	弥生土器	高杯	12.3	(7.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	黒斑
417	土器48	弥生土器	高杯	—	(5.3)	—	15.7	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	
418	土器49	弥生土器	高杯	11.9	(7.0)	12.4	—	外面：不明 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
419	土器49	弥生土器	高杯	—	(2.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
420	土器49	弥生土器	裝飾高杯	—	(6.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	口縁内面具紋 刺突文
421	土器49	弥生土器	高杯	—	(4.7)	—	9.8	外面：ハケメ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	黒斑
422	土器49	弥生土器	高杯	—	(5.1)	—	12.4	外面：ハケメ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	黒斑
423	土器50	弥生土器	高杯	—	(7.1)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	
424	土器50	弥生土器	甗	34.4	(4.6)	—	—	外面：タタキ、ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：灰白 (10YR8/2)	良好	1/3 以下	
425	土器51	弥生土器	壺	10.1	17.4	19.4	6.5	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	ほぼ 完全	黒斑

掲載番号	川上遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成状況	備考
				口径	器高	最大径	底径					
426	土塚53	弥生土器	甕	17.8	(5.3)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい赤褐(5YR5/4) 内面：明赤褐(2.5YR5/6)	良好	1/3以下 土具あたり痕
427	土塚53	弥生土器	高杯	17.4	9.5	—	11.4	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外面：浅黄褐(7.5YR8/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	完形
428	土塚53	弥生土器	高杯	—	(5.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：明褐灰(7.5YR7/2) 内面：にぶい黄橙(10YR7/2)	良好	1/3以下 脚部面指込線 延る
429	土塚53	弥生土器	高杯	—	(5.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(5YR6/5) 内面：褐灰(5YR5/1)	良好	1/3以下
430	土塚53	弥生土器	高杯	—	(5.7)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(5YR6/4) 内面：黄(2.5Y6/6)	良好	1/3以下 脚差し込み痕 2
431	土塚54	弥生土器	甕	16.2	(23.8)	19.0	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤 色土粒	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/3) 内面：にぶい黄橙(7.5YR7/3)	良好	1/3以下 煤付者
432	土塚54	弥生土器	裝飾高杯	—	—	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙(5YR7/4) 内面：にぶい黄橙(5YR7/4)	良好	1/3以下
433	土塚54	弥生土器	高杯	—	(4.8)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：黄(2.5YR6.5/6) 内面：黄(2.5YR6.5/6)	良好	1/3以下
434	土塚55	弥生土器	高杯	22.0	(3.1)	—	—	外面：ハケメ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙(7.5YR7/4)	良好	1/3以下
435	土塚55	弥生土器	鉢	20.0	(6.7)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	1/3以下 煤付者
436	土塚56	弥生土器	甕	16.6	(17.2)	30.4	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙(10YR6/4) 内面：黄(7.5YR7/6)	良好	1/3以下
437	土塚57	弥生土器	直口壺	5.8	(14.1)	16.0	—	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：明赤褐(2.5YR5/6) 内面：明赤褐(2.5YR6/6)	良好	ほぼ 完形 黒斑
438	土塚58	弥生土器	直口壺	7.9	(11.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：黄(5YR6/6) 内面：明赤褐(2.5YR5/8)	良好	1/3以下
439	土塚59	弥生土器	甕	15.7	(5.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/4) 内面：浅黄橙(7.5YR8/4)	良好	1/3以下
440	土塚61	弥生土器	壺	—	(9.0)	26.2	—	外面：ハケメ 内面：ナデ、指オサエ、 ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/4) 内面：灰黄(2.5YR7/2)	良好	2/3以下 黒斑
441	土塚61	弥生土器	壺	8.8	(7.4)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：浅黄橙(10YR8/4)	良好	1/3以下
442	土塚61	弥生土器	甕	8.9	12.5	—	5.4	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ 一部ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(5YR7/4) 内面：黄(5YR6/6)	良好	完形 内面T.具痕多 数
443	土塚61	弥生土器	甕	13.8	4.05	15.3	—	外面：ハケメか 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：灰黄(2.5Y7/2) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	1/3以下
444	土塚61	弥生土器	甕	14.5	(4.3)	—	—	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	1/3以下
445	土塚61	弥生土器	甕	12.6	(11.8)	14.5	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：暗灰黄(2.5Y5/2) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	1/3以下
446	土塚61	弥生土器	高杯	—	7.8	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：黄(5YR6/8) 内面：にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	1/3以下 黒斑 断面煤付者
447	土塚61	弥生土器	鉢	9.8	7.0	10.6	2.0	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/3) 内面：明赤褐(2.5YR5/6)	良好	1/3以下
448	土塚61	弥生土器	鉢	13.3	4.2	13.5	13.5	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：黄(5YR6/6) 内面：黄(5YR6/6)	良好	2/3以下
449	土塚62	弥生土器	甕	—	(25.6)	(31.2)	8.4	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙(10YR7/3) 内面：にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	1/3以下 黒斑
450	土塚62	弥生土器	甕	17.7	(8.6)	—	—	外面：不明 内面：ケズリ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(5YR6/4) 内面：にぶい黄橙(5YR6/4)	良好	1/3以下
451	土塚62	弥生土器	甕	15.0	21.9	—	5.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰褐(7.5YR5/2) 内面：にぶい黄橙(2.5YR6/4)	良好	1/3以下
452	土塚62	弥生土器	甕	—	(13.5)	—	5.8	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(多) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙(5YR7/4) 内面：黄(5YR6/6)	良好	1/3以下 黒斑 底部葉脈痕
453	土塚62	弥生土器	高杯	16.0	(5.9)	—	—	外面：指オサエ、タタキ 内面：一部ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい黄橙(10YR7/2) 内面：灰褐(7.5YR5/2)	良好	1/3以下
454	土塚62	弥生土器	高杯	17.4	(8.2)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 雲母 水こし粘土	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/4) 内面：灰白(2.5YR7/1)	良好	1/3以下 黒斑
455	土塚62	弥生土器	高杯	17.8	(7.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：黄(5YR6/6) 内面：黄灰(2.5YR4/1)	良好	2/3以下
456	土塚62	弥生土器	高杯	16.8	(8.7)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	2/3以下 脚差し込み痕
457	土塚62	弥生土器	高杯	13.2	(4.5)	—	—	外面：不明 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：黄(2.5YR7/6) 内面：黄(2.5YR7/6)	良好	1/3以下 脚部差し込み 痕

掲載番号	山上遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
458	土塚62	弥生土器	山口壺	—	(14.4)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ハケメ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
459	土塚62	弥生土器	台付鉢	18.0	13.0	—	12.4	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙(7.5YR8/3) 内面：にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	難澁し込み痕
460	土塚62	弥生土器	鉢	13.4	8.6	—	2.0	外面：ヘラミガキか 内面：ハケメか	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
461	土塚62	弥生土器	台付鉢	—	(9.7)	19.8	8.0	外面：ハケメ 内面：指オサエ、ハケメ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	黒炭 二次焼成による 胎面剥落
462	土塚63	弥生土器	高杯	14.3	9.4	—	10.9	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	ほぼ 完形	
463	土塚63	弥生土器	鉢	16.8	9.5	—	5.0	外面：指オサエ、ヘラミガキ、 ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/7) 内面：橙 (2.5YR6/7)	良好	2/3 以下	煤付着
464	土塚63	弥生土器	台付鉢	—	(4.9)	—	3.8	外面：不明 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母	外面：浅黄 (2.5Y7/3) 内面：浅黄 (2.5Y7/3)	良好	1/3 以下	
465	土塚64	弥生土器	長頸壺	19	33.4	21.4	8.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	2/3 以下	黒炭
466	土塚65	弥生土器	甕	13.6	(7.2)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	
467	土塚65	弥生土器	甕	13.0	(7.5)	—	—	外面：ハケメか 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (10YR7/1) 内面：灰白 (10YR7/1)	良好	1/3 以下	
468	土塚66	弥生土器	長頸壺	—	(14.3)	20.4	—	外面：ハケメ、ナデ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：黄灰 (2.5Y7/4)	良好	1/3 以下	頸部に文様見 られず
469	土塚66	弥生土器	甕	15.8	(7.3)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
470	土塚66	弥生土器	甕	18.8	(10.4)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
471	土塚66	弥生土器	甕	15.0	(9.6)	17.1	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	煤付着か?
472	土塚66	弥生土器	甕	16.6	(11.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
473	土塚66	弥生土器	甕	14.4	(16.5)	—	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 雲母	外面：黄灰 (2.5YR4/1) 内面：黄灰 (2.5YR4/1)	良好	1/3 以下	
474	土塚66	弥生土器	高杯	—	(4.5)	—	11.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
475	土塚66	弥生土器	高杯	—	(4.8)	—	12.0	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/8) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3 以下	
476	土塚68	弥生土器	甕	14.4	12.0	19.5	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	煤付着
477	土塚68	弥生土器	小形壺	—	(6.0)	10.8	3.6	外面：ヘラミガキ 内面：上只ナデ、ナデ、 指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	良好	2/3 以下	煤付着
478	土塚70	弥生土器	甕	18.0	(10.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
479	土塚70	弥生土器	高杯	25.7	(6.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/5)	良好	2/3 以下	黒炭
480	土塚70	弥生土器	高杯	14.8	(6.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	2/3 以下	
481	土塚72	弥生土器	甕	—	(11.5)	—	5.4	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
482	土塚72	弥生土器	高杯	21.4	(5.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：橙 (7.5YR6/8)	良好	1/3 以下	
483	土塚74	弥生土器	甕	—	(5.0)	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 雲母 石英 長石 角閃石	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	良好	1/3 以下	瘤状垂
484	土塚76	弥生土器	壺	18.6	(13.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 黒色粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：浅黄 (2.5Y8/3)	良好	1/3 以下	
485	土塚76	弥生土器	甕	—	(4.8)	—	6.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
486	土塚76	弥生土器	高杯	—	(2.7)	—	10.4	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR6/8)	良好	1/3 以下	
487	土塚79	弥生土器	甕	15.0	(5.6)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
488	土塚79	弥生土器	甕	15.2	(23.3)	23.9	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	1/3 以下	煤付着
489	土塚79	弥生土器	高杯	15.1	(8.4)	—	13.2	外面：ハケメ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	2/3 以下	
490	土塚79	弥生土器	高杯	—	(9.7)	21.3	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径							底径
491	土壇80	弥生土器	甕	11.0	—	(6.5)	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：浅黄橙 (7.5Y8/6) 内面：にぶい橙 (7.5Y7/4)	良好	1/3 以下	
492	土壇80	弥生土器	甕	15.8	(4.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：褐灰 (7.5YR5.5/1)	良好	1/3 以下	
493	土壇80	弥生土器	甕	12.2	(7.7)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：灰白 (10YR8/2)	良好	1/3 以下	
494	土壇80	弥生土器	甕	15.5	(7.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
495	土壇80	弥生土器	甕	14.6	(4.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 8.7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR6.5/6)	良好	1/3 以下	
496	土壇80	弥生土器	高杯	13.0	(6.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	1/3 以下	
497	土壇80	弥生土器	高杯	—	(6.8)	—	13.2	外面：ハケメ 内面：ハケメ、ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/8)	良好	1/3 以下	
498	土壇80	弥生土器	高杯	17.4	10.3	—	11.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	2/3 以下	
499	土壇81	弥生土器	壺	18.8	(6.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：橙 (7.5YR7/6) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	1/3 以下	
500	土壇82	弥生土器	甕	14.7	(14.3)	19.2	—	外面：ヘラミガキ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：明黄橙 (7.5YR7/1) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	1/3 以下	煤付着
501	土壇82	弥生土器	甕	16.6	(14.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：暗灰 (N3/1)	良好	1/3 以下	
502	土壇83	弥生土器	甕	14.4	(9.0)	—	—	外面：不明 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
503	土壇84	弥生土器	壺	—	(23.0)	27.5	7.2	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 黒色粒	外面：にぶい橙 (10YR7/3) 内面：灰黄褐 (10YR6/3)	良好	2/3 以下	
504	土壇87	弥生土器	甕	13.0	(3.2)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：橙 (5YR6.5/6)	良好	1/3 以下	
505	土壇88	土師器	一重口鉢 壺	20.1	(9.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR5/4) 内面：浅黄橙 (10YR7/6)	良好	1/3 以下	
506	土壇88	弥生土器	高杯	9.0	(5.9)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：橙 (7.5YR6/6) 内面：橙 (7.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
507	土壇91	土師器	甕	13.0	(21.4)	21.7	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(多) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：黄灰 (2.5Y4/1)	良好	2/3 以下	黒染
508	土壇92	土師器	小型丸底 壺	12.8	7.6	—	—	外面：不明 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR7/6) 内面：橙 (5YR7/1)	良好	1/3 以下	
509	土壇94	土師器	壺	16.6	(10.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
510	土壇94	土師器	一重口鉢 壺	16.0	18.0	16.1	—	外面：ヘラミガキ、ハケメ、 ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、ヘラケズリ、 指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2.5)	良好	2/3 以下	畿内系模倣、 底部黒染
511	土壇94	土師器	甕	10.9	12.8	—	—	外面：ヘラケズリ、 タタキハケメ 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3 以下	
512	土壇94	土師器	甕	16.0	(3.6)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	1/3 以下	
513	土壇94	土師器	高杯	—	(1.8)	—	—	外面：ヘラミガキか 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙(5YR7/4) 内面：にぶい橙(5YR7/4) 断面：浅黄橙(7.5YR8/3)	良好	1/3 以下	円孔2段
514	土壇94	土師器	高杯	13.1	12.15	—	15.8	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 水こし粘土	外：面橙 (5YR6/6) 内：面橙 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	
515	土壇94	土師器	高杯	21.5	(8.0)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい橙 (5YR7/4) 内面：橙 (2.5YR6.5/6)	良好	2/3 以下	
516	土壇94	土師器	高杯	21.5	17.1	—	14.8	外面：ヘラミガキ、ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (7.5YR8/6) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	2/3 以下	
517	土壇94	土師器	鉢	10.6	6.0	—	1.6	外面：ハケメ、指オサエ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	2/3 以下	
518	土壇94	土師器	鉢	11.8	7.1	12.2	3.85	外面：ナデ、工具痕 内面：ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	ほぼ 完形	内面底部放射 状の工具痕
519	土壇94	土師器	蓋台	7.7	9.35	—	10.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ハケメ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	ほぼ 完形	
520	土壇94	土師器	付台鉢	22.0	9.5	—	7.2	外面：ヘラミガキ、ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/4)	良好	2/3 以下	山陰系模倣
521	土壇94	土師器	製瓶土器	—	(2.5)	—	4.2	外面：指オサエ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	
522	土壇94	土師器	製瓶土器	—	(2.4)	—	4.6	外面：指オサエ、ハケメ 内面：指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：明赤褐 (5YR5/6) 内面：明赤褐 (5YR5/6)	良好	1/3 以下	
523	土壇98	弥生土器	製瓶土器	—	2.6	—	4.6	外面：不明 内面：不明	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：灰白 (5Y8/2)	良好	1/3 以下	
524	土壇99	土師器	甕	12.0	(2.6)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
525	土壇99	土師器	高杯	16.6	(5.4)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄橙 (10YR8/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3 以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
526	土壇99	土師器	鉢	12.0	(12.0)	—	—	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい椀 (7.5YR7/4) 内面：にぶい椀 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
527	土壇99	土師器	台付鉢	—	(2.6)	—	3.3	外面：タタキ後ヘラミガキ、 ヘラケズリ 内面：ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 水こし粘土	外面：椀 (5YR7/6) 内面：浅黄椀 (7.5YR8/6)	良好	1/3 以下	
528	ビット7	弥生土器	台付鉢	11.1	6.5	11.7	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 水こし粘土	外面：にぶい椀 (7.5YR6/4) 内面：椀 (5YR6/6)	良好	2/3 以下	
529	ビット6	弥生土器	高杯	13.7	(5.8)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい椀 (5YR7/4) 内面：椀 (2.5YR6/6)	良好	1/3 以下	
530	ビット1	弥生土器	鉢	7.5	8.6	9.6	2.0	外面：ハケ状土具ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい椀 (7.5YR6/4) 内面：にぶい椀 (7.5YR6/4)	良好	2/3 以下	黒斑
531	ビット3	弥生土器	鉢	7.1	4.6	—	2.4	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：椀 (5YR6/6) 内面：椀 (5YR6/6)	良	完形	
532	ビット4	弥生土器	鉢	10.0	5.7	—	3.0	外面：指オサエ 内面：ハケメ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい椀 (7.5YR6/4) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	良好	2/3 以下	黒斑
533	ビット2	弥生土器	鉢	8.5	3.6	—	—	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：椀 (7.5YR7/6) 内面：椀 (7.5YR7/6)	良好	2/3 以下	
534	ビット1	弥生土器	鉢	8.5	6.7	—	1.6	外面：ヘラミガキか 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい椀 (7.5YR6/4) 内面：にぶい椀 (7.5YR6/4)	良好	2/3 以下	黒斑
535	ビット5	弥生土器	ミニチュア	—	(2.8)	3.0	—	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：灰 (7.5Y4/1) 内面：灰 (7.5Y5/1)	良好	2/3 以下	壺形
536	ビット8	弥生土器	ミニチュア	2.7	2.0	—	3.5	外面：指オサエ 内面：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：黄灰 (2.5Y6/1) 内面：黄灰 (2.5Y6/1)	良好	完形	鉢形
537	溝2	弥生土器	壺	13.6	(5.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：椀 (7.5YR6/6) 内面：にぶい黄椀 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
538	溝2	土師器	甗	11.7	(3.4)	—	—	外面：不明 内面：不明	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英	外面：椀 (7.5YR6/6) 内面：にぶい黄椀 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
539	溝2	弥生土器	甗	16.8	(8.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい椀 (7.5YR6/4) 内面：にぶい椀 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	
540	溝2	弥生土器	高杯	21.4	(5.2)	—	—	外面：不明 内面：不明	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：浅黄椀 (7.5YR8/4) 内面：椀 (5YR7/4)	良好	1/3 以下	
541	溝2	弥生土器	製塩土器	—	(2.2)	—	5.4	外面：指オサエ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 雲母 赤色土粒	外面：椀 (5YR6/3) 内面：浅黄椀 (7.5YR8/4)	良好	1/3 以下	頸部柱状
542	溝2	弥生土器	ミニチュア	3.3	1.7	3.6	1.9	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：暗灰 (N3/0) 内面：黄灰 (2.5Y5/1)	良好	完形	鉢形
543	溝2	須恵器	杯身	11.0	(4.1)	12.9	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰 (N6/0) 内面：灰 (N6/0)	良好	1/3 以下	
544	溝2	須恵器	高杯	—	(4.3)	—	8.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰 (10Y5/1) 内面：灰 (10Y5/1)	良好	1/3 以下	
545	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	—	(2.9)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (7.5Y8/2) 内面：浅黄椀 (2.5Y8/6)	良好	1/3 以下	内面具象文
546	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	二重口縁壺	—	(4.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：椀 (5Y6/6) 内面：にぶい椀 (7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
547	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	壺	27.0	(3.4)	—	—	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：椀 (2.5YR7/8) 内面：椀 (2.5YR7/6)	良好	1/3 以下	
548	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	壺	27.8	(7.0)	—	—	外面：ハケメ、ヘラミガキ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：浅黄椀 (10YR8/3) 内面：浅黄椀 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
549	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	壺	20.5	—	31.4	8.5	外面：ハケメか 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：明褐色 (7.5YR7/1) 内面：にぶい椀 (10YR6/4)	良好	1/3 以下	
550	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	12.2	16.7	13.4	4.5	外面：ヘラミガキ、ハケメ、 指オサエ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：椀 (5YR6.5/6) 内面：椀 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	煤付着
551	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	12.0	17.6	—	5.6	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：浅黄椀 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	
552	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	15.2	(9.3)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄椀 (10YR8/3) 内面：浅黄椀 (7.5YR8/6)	良好	1/3 以下	煤付着
553	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	13.0	(13.2)	14.2	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：椀 (5YR6.5/6) 内面：椀 (2.5YR6/6)	良好	2/3 以下	煤付着
554	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	14.8	(10.1)	—	—	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：椀 (5YR6/6) 内面：椀 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	
555	遺構に伴わない遺物①	弥生土器	甗	(13.8)	(24.5)	19.2	4.6	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：明褐色 (7.5YR7/2) 内面：にぶい黄椀 (10YR7/3)	良好	1/3 以下	
556	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	高杯	11.8	(5.5)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 水こし粘土	外面：にぶい椀 (7.5YR7/4) 内面：浅黄椀 (10YR8/4)	良好	1/3 以下	
557	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	高杯	20.2	(6.3)	—	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい椀 (10YR7/4) 内面：浅黄椀 (10YR8/3)	良好	1/3 以下	
558	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	高杯	—	(5.0)	—	9.8	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：椀 (5YR6/6) 内面：椀 (12.5YR6/6)	良好	1/3 以下	凹孔2段
559	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	裝飾高杯	—	7.0	—	—	外面：ハケメ、ヨコナデ、 ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい椀 (5YR6/4) 内面：にぶい椀 (5YR6/4)	良好	1/3 以下	外面貼付突帯、波状文刺突文

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)			調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考	
				口径	器高	最大径							底径
560	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	裝飾高杯	-	(3.0)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：橙 (5YR6.5/6)	良好	1/3以下	
561	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	裝飾高杯	-	(2.3)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(中) 長石 石英 細砂(中) 雲母 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	1/3以下	
562	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	裝飾高杯	-	(3.1)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：暗灰 (10YR6/2)	良好	1/3以下	
563	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	裝飾高杯	-	(2.4)	-	19.5	外面：ヨコナデ、一部ハケメ 内面：ヨコナデ、ハケメ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3以下	
564	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	高杯	-	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 角閃石 赤色土粒 水こし粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	1/3以下	ヘラ描きは鋸歯文か
565	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	鉢	5.0	6.6	-	3.6	外面：ハケメ、指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 雲母 角閃石 細砂(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：不明	良好	ほぼ完成	黒斑
566	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	鉢	14.5	6.5	-	4.5	外面：ヘラミガキ、指オサエ 内面：ヘラミガキ	粗砂(多) 長石 石英 細砂(中) 角閃石 赤色土粒	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	2/3以下	
567	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	ミニチュア	-	2.9	-	1.8	外面：指オサエ 内面：指オサエ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 角閃石	外面：灰褐 (7.5YR6/2) 内面：褐灰(7.5YR4/1)	良好	2/3以下	黒斑、歪形
568	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	ミニチュア	7.3	3.5	-	-	外面：指オサエ 内面：指オサエ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：黒褐 (2.5Y3/1) 内面：黒褐 (2.5Y3/1)	良好	完成	壺形
569	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	ミニチュア	6.8	3.6	-	7.0	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(中) 長石 石英 細砂(少) 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	ほぼ完成	黒斑、器台形
570	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	ミニチュア	7.0	4.4	-	2.3	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 雲母 水こし粘土 細砂(少)	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (5YR7/4)	良好	1/3以下	鉢形
571	遺構に伴わない遺物②	土師器	小型丸底壺	11.1	8.6	-	-	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 赤色土粒 水こし粘土	外面：橙 (2.5YR6.5/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	1/3以下	
572	遺構に伴わない遺物②	土師器	鉢	15.4	(5.0)	-	-	外面：ヘラケズリ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	粗砂(中) 長石 石英 細砂(中) 赤色土粒	外面：橙 (5YR6.5/6) 内面：にぶい橙 (5YR6/4)	良好	1/3以下	
573	遺構に伴わない遺物②	土師器	鉢	15.8	5.7	-	2.6	外面：ヘラケズリ 内面：不明	粗砂(少) 長石 石英 細砂(中) 金雲母 角閃石	外面：にぶい橙 (5YR6/4) 内面：にぶい橙 (YR6.5/4)	良好	2/3以下	黒斑
574	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	製瓶土器	-	(1.6)	-	4.3	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(中) 雲母 角閃石	外面：赤橙 (10YR6/6) 内面：赤橙 (10YR6/6)	良好	1/3以下	
575	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	製瓶土器	-	(2.1)	-	4.3	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい橙 (5YR7/3)	良好	1/3以下	
576	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	製瓶土器	-	2.5	-	4.8	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母	外面：にぶい橙 (7.5YR6/3) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/3)	良好	1/3以下	
577	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	製瓶土器	-	3.4	-	4.2	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母	外面：橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (10YR6/4)	良好	1/3以下	
578	遺構に伴わない遺物②	弥生土器	壺か鉢	-	(4.6)	-	-	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ、ヘラミガキ	粗砂(少) 雲母 角閃石 細砂(少) 長石 石英	外面：にぶい褐 (7.5YR6/3) 内面：にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	1/3以下	外面探検 把手状のもの が付く
579	遺構に伴わない遺物②	土師器	手形形土器	-	(10.4)	-	-	外面：ハケメ、ナデ 内面：ハケメ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：橙 (7.5YR7/6) 内面：灰黄 (2.5YR7/2)	良好	覆部	
580	竪穴住居42	須恵器	杯蓋	10.8	4.2	-	-	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、仕上げナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少)	外面：灰白 (10Y7/1) 内面：灰 (5Y6/1)	良好	1/3以下	
581	竪穴住居42	須恵器	杯身	12.0	4.1	14.0	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底部ヘラケズリ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 黒色粒	外面：灰白 (5Y7/1) 内面：灰白 (2.5Y7/1)	良好	2/3以下	
582	竪穴住居42	須恵器	杯身	11.4	(4.2)	13.6	-	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 黒色粒	外面：灰白 (N7/0) 内面：灰(N6/0)	良好	1/3以下	
583	竪穴住居42	須恵器	杯身	13.0	4.1	15.1	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底部ヘラケズリ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(稀)	外面：灰 (N5/0) 内面：灰 (N4/0)	良好	1/3以下	
584	竪穴住居42	須恵器	杯身	13.4	(3.6)	16.0	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 底部ヘラケズリ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少)	外面：灰白 (N6/0) 内面：灰白 (N6/0)	良好	2/3以下	
585	竪穴住居42	須恵器	蓋	10.6	3.9	-	-	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少)	外面：灰 (N6/0) 内面：灰 (N6/1)	良好	1/3以下	
586	竪穴住居42	須恵器	高杯	14.2	(8.1)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(稀)	外面：灰白 (2.5Y7.5/1) 内面：灰白 (2.5Y7.5/1)	良好	1/3以下	
587	竪穴住居42	須恵器	高杯	-	(3.8)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(稀)	外面：灰 (N4/1) 内面：灰 (N4/1)	良好	1/3以下	
588	竪穴住居42	須恵器	平瓶	7.4	(5.7)	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少)	外面：灰 (N5/0) 内面：灰 (N6/0)	良好	1/3以下	
589	竪穴住居42	須恵器	蓋	-	-	-	-	外面：平行タタキ後カキメ 内面：同心円タタキ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(少)	外面：灰 (N5/0) 内面：灰白 (N7/0)	良好	1/3以下	
590	竪穴住居42	土師器	甕	21.8	(8.6)	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(少)	外面：にぶい赤褐 (5YR5/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR5/3)	良好	1/3以下	
591	竪穴住居42	土師器	甕	18.9	(10.9)	-	-	外面：ナデ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 赤色土粒	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：灰黄 (2.5Y7/2)	良好	1/3以下	
592	竪穴住居42	土師器	甕	16.8	(8.0)	-	-	外面：不明 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 雲母 角閃石	外面：灰褐 (7.5YR4/2) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	良好	1/3以下	
593	竪穴住居42	土師器	甕	20.0	(9.5)	-	-	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ、ハケメ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(少) 礫(少)	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	1/3以下	11域内面ヘラ記号
594	竪穴住居42	土師器	甕	25.6	(17.6)	-	-	外面：ナデ、ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 長石 石英 細砂(中) 赤色土粒 礫(少)	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	1/3以下	把手付

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
595	竪穴住居42	土師器	甗	28.4	24.7	39.0	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+橙5YR7/4 内面：にぶい+橙7.5YR7/4	良好	2/3 以下	把手付 黒斑
596	竪穴住居42	土師器	甗	—	(29.0)	34.2	11.3	外面：ハケメ、指オサエ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい+橙(7.5YR7/4) 内面：にぶい+橙(7.5YR7/4)	良好	1/3 以下	
597	竪穴住居42	土師器	甗	—	(11.2)	—	12.5	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙(5YR7/6) 内面：橙(5YR7/6)	良好	1/3 以下	穿孔
598	竪穴住居42	土師器	甗	—	(10.6)	—	10.4	外面：ナデ、ハケメ 内面：ハケメ、ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：橙(2.5YR6/6) 内面：則赤橙(2.5YR5/6)	良好	1/3 以下	
599	竪穴住居42	土師器	甗	—	(6.4)	—	—	外面：ナデ 内面：指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+橙(5YR7/4) 内面：にぶい+橙(5YR7/4)	良好	1/3 以下	把手のみ
600	竪穴住居42	土師器	鉢	14.0	6.1	14.5	—	外面：ハケメ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：灰白(10YR8/2) 内面：灰白(10YR8/2)	良好	2/3 以下	黒斑
601	竪穴住居42	土師器	鉢	15.5	(7.2)	—	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+橙(5YR7/4) 内面：にぶい+橙(5YR7/4)	良好	1/3 以下	
602	竪穴住居42	土師器	製塩土器	—	(6.8)	—	—	外面：タタキ 内面：工貝ナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰黄橙(10YR5/2) 内面：にぶい+黄橙(10YR7/3)	良好	1/3 以下	
603	竪穴住居42	土師器	製塩土器	—	(7.1)	—	—	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+橙(7.5YR7/4) 内面：灰黄橙(10YR6/2)	良好	1/3 以下	
604	竪穴住居42	土師器	製塩土器	—	(7.9)	—	—	外面：ナデ、タタキ 内面：ヘラケズリ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：暗灰黄(2.5YR5/2) 内面：灰黄(2.5YR7/2)	良好	1/3 以下	
605	竪穴住居42	土師器	製塩土器	—	(7.5)	—	—	外面：タタキ、ナデ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰黄橙(10YR5/2) 内面：にぶい+黄橙(10YR7/4)	良好	1/3 以下	
606	竪穴住居42	土師器	製塩土器	9.6	10.4	10.9	—	外面：タタキ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：浅黄橙(2.5YR7/4) 内面：にぶい+赤褐(2.5YR7/1)	良好	2/3 以下	
607	竪立柱 建物1	須恵器	杯蓋	—	(1.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白(N7.5/1) 内面：灰(N5.5/1)	良好	1/3 以下	
608	土壇102	須恵器	杯蓋	12.0	(3.7)	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 黒色粒	外面：灰(N4.5/1) 内面：灰(N4.5/1)	良好	1/3 以下	
609	土壇102	土師器	製塩土器	—	(7.6)	—	—	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+褐(7.5YR5/3) 内面：灰白(7.5YR8/2)	良好	1/3 以下	
610	土壇102	土師器	製塩土器	—	(7.5)	—	—	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：橙(5YR6/6) 内面：灰白(7.5YR8/2.5)	良好	1/3 以下	
611	土壇103	須恵器	高杯	14.9	11.2	15.2	9.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰(N5/0) 内面：灰(N5/0)	良好	1/3 以下	
612	河道1	須恵器	長頸壺	—	(4.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰白(5Y7/1) 内面：灰白(2.5Y7/1)	良好	1/3 以下	
613	河道1	土師器	杯	10.4	2.4	—	7.0	外面：ヨコナデ、ヘラおこし 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：にぶい+褐(7.5YR7/3) 内面：にぶい+橙(7.5YR6/4)	良好	ほぼ 完形	
614	河道1	土師器	杯	12.4	3.8	—	7.5	外面：ヨコナデ、同軸ヘラ切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 糖核粘土	外面：灰黄(2.5Y6/2) 内面：にぶい+橙(5Y6/4)	良好	2/3 以下	内外面付塗り
615	河道1	土師器	杯	13.1	4.3	—	9.3	外面：ヨコナデ、 ヘラおこし後押印 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：暗灰黄(2.5Y5/2) 内面：にぶい+橙(2.5Y6/3)	良好	ほぼ 完形	
616	河道1	土師器	碗	13.8	4.8	—	8.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：にぶい+橙(5YR7/4) 内面：にぶい+橙(7.5YR6/4)	良好	ほぼ 完形	内外面付塗り
617	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯蓋	14.0	4.0	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラ切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(中) 長石 石英	外面：灰白(N7/0) 内面：灰白(N7/0)	良好	1/3 以下	
618	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯蓋	13.6	(4.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N6/0) 内面：灰(N6/0)	良好	1/3 以下	
619	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯蓋	13.0	4.8	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒	外面：灰白(N7/0) 内面：灰白(N7/0)	良好	1/3 以下	
620	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯身	—	4.4	15.4	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N6/1) 内面：灰(N4.5/1)	良好	1/3 以下	
621	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯身	11.3	(3.9)	13.7	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N5/1) 内面：灰(N5/1)	良好	1/3 以下	
622	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯身	12.3	4.0	14.8	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、仕上げナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰白(2.5Y8/2) 内面：灰白(10YR8/1)	不良	1/3 以下	
623	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	高杯	(10.0)	(3.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒	外面：灰(N4.5/1) 内面：灰(5Y6/1)	良好	1/3 以下	
624	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	高杯	12.3	(6.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰白(7.5Y8/2) 内面：灰白(7.5Y8/1)	不良	1/3 以下	
625	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	短頸壺	8.2	(3.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N6/1) 内面：灰(N6/1)	良好	1/3 以下	自然釉
626	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	半瓶	—	—	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石	外面：灰(N5/1) 内面：灰(N6.5/1)	良好	1/3 以下	
627	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯蓋	—	(1.1)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N6/0) 内面：灰(N6/0)	良好	1/3 以下	
628	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯蓋	14.4	1.0	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N7/0) 内面：灰(N7/0)	良好	1/3 以下	
629	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	杯身	—	(2.9)	—	9.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰(N5/0) 内面：灰(N6/0)	良好	1/3 以下	
630	道槽に伴わ ない遺物①	須恵器	壺	—	(2.7)	—	9.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：灰(N4/1) 内面：灰(N4/1)	良好	1/3 以下	
631	道槽に伴わ ない遺物②	土師器	甗	24.8	(13.0)	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい+橙(5YR7/4) 内面：にぶい+褐(5YR7/6)	良好	1/3 以下	煤付着
632	道槽に伴わ ない遺物②	土師器	甗	20.0	(32.4)	26.3	—	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ、指オサエ、 ハケメ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい+橙(7.5YR7/3) 内面：橙(5YR7/6)	良好	1/3 以下	煤付着 口縁内面ヘラ 記号
633	道槽に伴わ ない遺物②	土師器	甗	33.3	20.5	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ、指オサエ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：灰褐(7.5YR6/2) 内面：にぶい+黄橙(10YR6/4)	良好	2/3 以下	煤付着

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
634	過橋に伴わない遺物②	緑釉陶器	碗	—	(0.9)	—	4.6	外面：ヘラケズリ、ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ、施釉	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：オリーブ (5Y5/6)	良好	1/3以下	
635	土壇106	土師器	碗	—	(0.9)	—	5.0	外面：ヨコナデ、ヘラおこし 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 黒色粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	良好	1/3以下	
636	土壇107	土師器	碗	9.5	3.3	—	3.9	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 黒色粒	外面：にぶい黄橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい黄 (7.5YR6/3)	良好	ほぼ完形	
637	土壇107	土師器	碗	9.4	3.5	—	3.3	外面：指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	完形	
638	土壇107	土師器	碗	9.7	3.6	—	3.8	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：淡橙 (5YR8/3) 内面：淡橙 (5YR8/3)	良好	2/3以下	
639	土壇107	土師器	碗	9.4	3.8	—	3.0	外面：ナデ、上具ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	2/3以下	
640	土壇107	土師器	碗	9.5	3.5	—	4.0	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (10YR7.5/2) 内面：灰白 (10YR7.5/2)	良好	1/3以下	
641	土壇107	土師器	碗	10.0	3.9	—	4.2	外面：指オサエ、ナデ 内面：指オサエ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (7.5YR8/2.5) 内面：灰白 (7.5YR8/2.5)	良好	2/3以下	
642	土壇107	土師器	碗	10.0	(3.3)	—	—	外面：ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	2/3以下	
643	土壇107	土師器	碗	10.1	2.9	—	4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	2/3以下	
644	土壇107	土師器	碗	10.3	2.8	—	3.7	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (5YR7/4) 内面：にぶい黄 (5YR7/4)	良好	完形	
645	土壇107	土師器	碗	10.5	3.45	—	3.5	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	1/3以下	
646	土壇107	土師器	碗	10.3	3.3	—	3.8	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	完形	
647	土壇107	土師器	碗	11.1	3.4	—	5.2	外面：指オサエ、ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (10YR7.5/2) 内面：灰白 (10YR7.5/2)	良好	1/3以下	
648	土壇111	土師器	碗	9.3	2.9	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	良好	完形 煤付着	
649	土壇112	土師器	碗	9.2	2.7	—	3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	完形	
650	土壇113	土師器	碗	11.0	3.7	—	4.4	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	完形	
651	土壇114	土師器	碗	9.0	2.6	—	3.5	外面：指オサエ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR7/3)	良好	1/3以下	
652	土壇114	土師器	小皿	6.5	1.3	—	6.2	外面：ナデ 内面：ナデ 底面：ヘラ切り	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 精製粘土	外面：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	完形	
653	土壇115	土師器	碗	11.2	4	—	4.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	ほぼ完形	
654	土壇117	土師器	碗	11.7	4.0	—	5.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	ほぼ完形	
655	土壇117	土師器	碗	11.4	4.0	—	4.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	良好	2/3以下	
656	土壇117	土師器	小皿	7.4	1.9	—	5.3	外面：ナデ、ヘラ切り 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 角閃石 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	ほぼ完形	
657	土壇117	土師器	溝	29.9	(7.9)	—	—	外面：ハケメ、ナデ 内面：ハケメ、ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 角閃石	外面：灰 (5Y6/1) 内面：青灰 (2.5Y5/1)	良好	1/3以下	
658	ビット15	土師器	碗	8.9	2.4	—	2.4	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：にぶい黄橙 (7.5YR7/3.5) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR7/3.5)	良好	完形	
659	ビット17	土師器	碗	8.7	2.6	—	2.6	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：明褐色 (7.5YR7/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	2/3以下	煤付着
660	ビット26	土師器	碗	9.7	2.6	—	4.6	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	完形	
661	ビット10	土師器	碗	9.8	3.5	—	3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	ほぼ完形	
662	ビット12	土師器	碗	9.8	3.8	—	3.6	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (7.5YR8/2) 内面：灰白 (7.5YR8/2)	良好	ほぼ完形	煤付着
663	ビット21	土師器	碗	11.8	4.7	—	3.7	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 雲母	外面：灰白 (10YR8/1) 内面：灰白 (10YR8/1)	良好	1/3以下	内面重ね焼痕 煤付着
664	ビット24	土師器	碗	11.3	3.7	—	4.2	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 精製粘土	外面：灰白 (10YR7.5/2) 内面：灰白 (10YR7.5/2)	良好	完形	
665	ビット19	土師器	小皿	6.0	1.1	—	4.7	外面：ヨコナデ、ヘラ切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6/6) 内面：橙 (2.5YR6/6)	良好	完形	
666	ビット9	土師器	小皿	5.8	1.2	—	4.8	外面：ヨコナデ、ヘラ切り 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 精製粘土	外面：にぶい黄橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	完形	
667	ビット20	土師器	小皿	6.2	1.2	—	5.0	外面：ヨコナデ、ヘラ切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 精製粘土	外面：橙 (5YR6/6) 内面：橙 (5YR7/6)	良好	完形	
668	ビット18	土師器	小皿	6.2	1.5	—	5.1	外面：ヨコナデ、ヘラ切り、 ヘラおこし 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 赤色土粒	外面：橙 (2.5YR6.5/6) 内面：橙 (2.5YR6.5/6)	良好	ほぼ完形	
669	ビット25	青磁	碗	(15.6)	(3.6)	—	—	外面：施釉、 片切り彫り溝並弁 内面：施釉	精良	素地：灰白 (N7/0) 釉調：灰オリーブ (7.5Y5/2)	良好	1/3以下	龍泉
670	河道2	土師器	碗	10.6	3.2	—	3.7	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	1/3以下	

掲載番号	出土遺構名	種類	器種	法量 (cm)				調整・特徴	胎上	色調	焼成	残存状況	備考
				口径	器高	最大径	底径						
671	河道2	土師器	椀	10.5	2.9	—	5.1	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	2/3 以下	内面重ね焼き
672	河道2	土師器	椀	11.0	3.4	—	4.2	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：灰白 (2.5Y8/2) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	2/3 以下	
673	河道2	土師器	椀	10.9	3.6	—	4.4	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒	外面：灰白 (2.5Y8/1) 内面：灰白 (2.5Y8/2)	良好	ほぼ 完形	
674	河道2	土師器	椀	11.7	4.0	—	4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英 黒色粒 赤色土粒	外面：灰白 (7.5Y8/2) 内面：浅黄橙 (2.5Y8/3)	良好	ほぼ 完形	
675	河道2	須恵器	鉢	—	(4.3)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰白 (N8/0) 内面：灰白 (2.5Y7/1)	良好	1/3 以下	東橋系
676	河道2	土師器	鍋	30.8	(7.9)	—	—	外面：ハケメ、指オサエ 内面：指オサエ、ヨコナデ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英	外面：黒褐 (7.5Y3/2) 内面：にふい黄橙 (10YR6/3)	良好	1/3 以下	
677	河道2	土師器	鍋	—	(5.4)	—	—	外面：ハケメ 内面：ハケメ	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰 (7.5Y5/1) 内面：灰白 (N7/0)	良好	1/3 以下	
678	河道2	土師器	鍋(支脚)	—	—	—	—	外面：上具ナデ、ナデ	粗砂(多) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 黒雲母 赤色土粒	外面：橙 (5YR6/6)	良好	1/3 以下	煤付着
679	河道2	土師器	鍋(支脚)	—	—	—	—	外面：上具ナデ、ナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(稀) 長石 石英 角閃石 赤色土粒	外面：にふい黄 (7.5YR6/4)	良好	1/3 以下	煤付着
680	河道2	備前焼	搦鉢	—	(6.9)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、御目	粗砂(中) 細砂(中) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰 (7.5Y4/1) 内面：灰 (7.5Y5/1)	良好	1/3 以下	
681	河道2	備前焼	搦鉢	—	(10.0)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、御目	粗砂(中) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英 赤色土粒	外面：灰炭 (2.5Y6/1) 内面：灰 (N5/0)	良好	1/3 以下	
683	河道2	亀山焼	甕	—	—	—	—	外面：格子目タタキ 内面：不明	粗砂(中) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：灰 (N4/0) 内面：灰白 (5Y8/1)	良好	1/3 以下	
684	河道2	陶器	椀	—	(1.6)	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、 施釉 内面：ヨコナデ、施釉	細砂(少) 長石 石英	外面：にふい黄橙 (10YR7/2) 内面：施釉	良好	1/3 以下	肥前系
685	河道2	陶器	蓋	15.7	2.4	—	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、施釉	細砂(少) 長石 石英	外面：灰黄褐 (10YR6/2) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	良好	1/3 以下	
686	遺構に伴わ ない遺物	土師器	椀	9.0	3.0	—	2.3	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	完形	外面重ね焼き
687	遺構に伴わ ない遺物	土師器	椀	9.9	3.4	—	4.0	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：にふい黄 (7.5YR7/3) 内面：にふい黄 (7.5YR7/3)	良好	2/3 以下	
688	遺構に伴わ ない遺物	土師器	椀	9.8	3.9	—	4.0	外面：指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(稀) 長石 石英	外面：浅黄橙 (10YR8/3) 内面：浅黄橙 (10YR8/3)	良好	2/3 以下	
689	遺構に伴わ ない遺物	土師器	小皿	6.0	1.4	—	—	外面：ヨコナデ、 ヘラ切り後ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂なし 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 精製粘土	外面：にふい黄 (2.5YR6/4) 内面：にふい黄 (2.5YR6/4)	良好	完形	
690	遺構に伴わ ない遺物	土師器	小皿	6.3	1.1	—	5.2	外面：ヨコナデ、 ヘラ切り後ナデ 内面：ヨコナデ	粗砂なし 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 精製粘土	外面：橙 (2.5YR7/6) 内面：橙 (2.5YR7/6)	良好	完形	
691	遺構に伴わ ない遺物	土師器	小皿	6.6	1.7	—	5.0	外面：ヨコナデ、ヘラ切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 赤色土粒 精製粘土	外面：にふい黄橙 (7.5YR7/4) 内面：にふい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	2/3 以下	
692	遺構に伴わ ない遺物	須恵器	鉢	16.4	(5.6)	—	—	外面：ヨコナデ、平行タタキ、 カキメ 内面：同心円タタキ、ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(中) 礫(少) 長石 石英	外面：灰 (N5/1) 内面：灰 (N6/1)	良好	1/3 以下	
693	遺構に伴わ ない遺物	備前焼	甕	—	6.0	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英 黒色粒	外面：灰白 (2.5Y7/1) 内面：灰白 (2.5Y7/1)	良好	1/3 以下	
694	遺構に伴わ ない遺物	備前焼	搦鉢	—	(6.1)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、御目	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：灰 (5Y6/2) 内面：灰褐 (5Y6/1)	良好	1/3 以下	
695	遺構に伴わ ない遺物	備前焼	搦鉢	31.0	(12.7)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、御目	粗砂(少) 細砂(少) 礫(少) 長石 石英	外面：褐灰(10YR4/1) 内面：灰(5Y4/1)	良好	1/3 以下	
696	遺構に伴わ ない遺物	瓦葺上器	鍋	—	(4.5)	—	—	外面：ハケメ、指オサエ、ナデ 内面：ナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 雲母 角閃石	外面：灰 (N4.5/1) 内面：灰 (N4.5/1)	良好	1/3 以下	把手
697	遺構に伴わ ない遺物	青磁	椀	—	(2.9)	—	—	外面：施釉、片切り彫り筋施釉 内面：施釉	精良	素地：灰白 (N8/0) 釉調：淡青緑	良好	1/3 以下	
698	遺構に伴わ ない遺物	備前焼	雀口蓋	5.0	(4.5)	—	—	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英 黒色粒	素地：灰白 (N7/1) 釉調：暗オリーブ (7.5Y4/3)	良好	1/3 以下	局部波状文
699	遺構に伴わ ない遺物	備前焼	小壺	—	(3.5)	—	5.0	外面：ヨコナデ、糸切り 内面：ヨコナデ	粗砂(少) 細砂(少) 長石 石英	外面：橙 (7.5YR7/6) 内面：橙 (7.5YR7/6)	良好	1/3 以下	底部糸切痕
700	遺構に伴わ ない遺物	磁器	猪口	4.6	3.9	—	4.6	外面：ヨコナデ、スタンプ 内面：ヨコナデ、施釉	精良	外面：灰白 (5Y7/1) 内面：灰白 (5Y7/1)	良好	2/3 以下	映○の製造番号刻印

石器・石製品観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S 1	竪穴住居3	不明	79	69.5	59	428.37	角閃ヒン岩	伊福・古・前I	完形	
S 2	竪穴住居4	砥石	(180)	45	21	(262.11)	頁岩	伊福・弥・後III	欠損	
S 3	竪穴住居13	スクレイパー	42	(65)	8	(24.18)	サヌカイト	伊福・弥・後III	欠損	
S 4	竪穴住居16	石包丁か?	41	(59)	11	(31.97)	サヌカイト	伊福・弥・後III~IV	欠損	
S 5	竪穴住居16	石錘	93	83	61	739.25	閃緑岩	伊福・弥・後III~IV	完形	
S 6	竪穴住居19	石錘	33	33	27	(37.35)	花崗閃緑岩	伊福・古・前I	やや欠損	
S 7	竪穴住居21	砥石	(63)	43	20	(98)	流紋岩	伊福・弥・後IV?	欠損	
S 8	竪穴住居29	磨石?	94	80	35	363.28	半花崗岩	伊福・古・前I~II	完形	アブライト
S 9	竪穴住居30	石錘	48	45	26	78.37	閃緑岩	伊福・古・前II	完形	
S 10	竪穴住居32	石錘	75	59	36	(240.68)	ヒン岩	伊福・古・前II	やや欠損	
S 11	竪穴住居32	石錘	81	66	57	396.53	ヒン岩	伊福・古・前II	完形	
S 12	竪穴住居36	砥石	(134)	55	50	(437.99)	流紋岩	伊福・古・前I~II	欠損	
S 13	竪穴住居35	砥石	(78)	(29)	13	(24.03)	流紋岩	伊福・古・前I~II	欠損	
S 14	竪穴住居36	石錘か叩石	98	82	50	550.44	花崗岩	伊福・古・前I~II	完形	
S 15	竪穴住居40	砥石	(80)	(41)	21	(70.48)	流紋岩	伊福・古・前I~II	欠損	
S 16	竪穴住居41	台石か砥石	(197)	(122)	(75)	(250)	花崗斑岩	伊福・古・前II	欠損	
S 17	土壇 2	磨石	66	57	36	172.85	花崗閃緑岩	伊福・弥・後III	完形	
S 18	土壇 6	石錘	80	70	57	429.77	閃緑岩	伊福・弥・後IV	完形	
S 19	土壇 6	磨石	116	99	19	358.31	閃緑岩	伊福・弥・後IV	完形	
S 20	土壇28	磨石か叩石	84	69	28	229.67	ヒン岩	伊福・弥・後IV	完形	
S 21	土壇68	石杵	109	114	81	854.75	流紋岩	伊福・弥・後III	完形	赤色顔料付着
S 22	土壇93	RF	62	58	23	78.5	黒色片岩	伊福・古・前II	完形?	
S 23	土壇94	砥石	82	21	11	(29.45)	頁岩	伊福・古・前I	欠損	
S 24	土壇97	石錘	23	25	11	8.15	砂岩	伊福・古・前I	完形	
S 25	遺構に伴わない	石錘	37	38	38	64.95	閃緑岩	—	完形	細粒、被熱あり
S 26	遺構に伴わない	石錘	47	48	26	79.27	流紋岩	—	完形	
S 27	遺構に伴わない	石錘	56	49	31	117.14	ヒン岩	—	完形	
S 28	遺構に伴わない	石錘	63	36	21	77.77	斑礫岩	—	完形	
S 29	遺構に伴わない	石錘	68	63	38	196.83	閃緑岩	—	完形	細粒
S 30	遺構に伴わない	石錘	87	78	41	371.82	花崗岩	—	完形	
S 31	遺構に伴わない	磨石か石錘	58	53	34	136.73	花崗岩	—	完形	
S 32	遺構に伴わない	石錘?	65	67	42	239.96	花崗閃緑岩	—	完形	
S 33	遺構に伴わない	不明	68	61	41	(216.71)	角閃ヒン岩	—	やや欠損	
S 34	遺構に伴わない	石錘	118	91	66	(976.24)	花崗岩	—	やや欠損	
S 35	遺構に伴わない	投弾?	31	31	23	28.51	流紋岩	—	完形	
S 36	遺構に伴わない	投弾?	37	37	8	15.95	流紋岩	—	完形	
S 37	遺構に伴わない	磨石?	62	48	38	140.82	角閃ヒン岩	—	完形	
S 38	遺構に伴わない	砥石	89	41	30	122.09	流紋岩	—	完形	
S 39	河道 2	砥石	(62)	(44)	(15)	(50.3)	流紋岩	中・近世	欠損	

金属製品観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	時期	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M 1	竪穴住居 6	ヤリガンナ	鉄	(44)	11	3	(5.48)	伊福・弥・後IV	欠損	
M 2	竪穴住居12	鉄鎌	鉄	(52)	(12)	5	(4.83)	伊福・弥・後III~IV	欠損	
M 3	竪穴住居12	不明	鉄	(29)	(3)	2	(1.45)	伊福・弥・後III~IV	欠損	
M 4	竪穴住居16	刀子	鉄	(31)	(12)	4	(2.94)	伊福・弥・後III~IV	欠損	
M 5	竪穴住居17	不明	鉄	(30)	5	5	(0.88)	伊福・弥・後III	欠損	
M 6	竪穴住居19	銅鎌	銅	(27)	(13)	6	(2.49)	伊福・古・前I	欠損	
M 7	竪穴住居19	不明	鉄	(60)	15	12	(8.73)	伊福・古・前I	欠損	
M 8	竪穴住居20	不明	鉄	(63)	9	11	(7.14)	伊福・古・前II	欠損	
M 9	竪穴住居21	不明	鉄	(36)	(8)	5	(4.74)	伊福・古・前I	欠損	
M10	竪穴住居23・24	鉄鎌	鉄	(70)	33	13	(30.62)	伊福・弥・後IV ~伊福・古・前I	欠損	
M11	竪穴住居29	鉄鎌	鉄	(59)	21	5	(8.50)	伊福・古・前I~II	欠損	
M12	土壇 6	刀子	鉄	16	(40)	8	(3.53)	伊福・弥・後IV	欠損	
M13	土壇19	不明	鉄	(22)	(15)	10	(6.15)	伊福・弥・後III	欠損	
M14	土壇42	手鎌	鉄	25	(39)	12	(14.38)	伊福・弥・後III	欠損	
M15	竪穴住居42	鉄滓	鉄	63	32	19	44.65	6C後半~7C前半	欠損	
M16	土壇112	銅銭	銅	24	—	2	3.18	中世	完形	熙寧元寶
M17	ピット22	鏝	鉄	61	14	6	11.07	中世	完形	
M18	ピット11	火打金	鉄	27	65	4	15.09	中世	完形	
M19	ピット23	火打金	鉄	38	(66)	3	(10.41)	中世	欠損	
M20	包含層	銅銭	銅	25	—	2	1.92	中世	欠損	政和通寶

土製品観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
C 1	竪穴住居12	紡錘車木製品	53	50	6	13.21	黒褐色10YR3/1	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	完形	甕胴部転用
C 2	竪穴住居17	勾玉形土製品	48	29	15	14.18	褐灰色10Y6/1	伊福・弥・後Ⅲ	完形	
C 3	竪穴住居21	紡錘車	(26)	(13)	4	(1.20)	にぶい橙色7.5YR7/4	伊福・古・前Ⅰ	欠損	甕胴部転用
C 4	竪穴住居23・24	紡錘車	(28)	(16)	6	(2.88)	灰色5Y5/1	伊福・弥・後Ⅳ ～伊福・古・前Ⅰ	欠損	土器転用か
C 5	竪穴住居32・33	土錘	61	31	10	66.93	にぶい橙色7.5YR7/3	伊福・古・前Ⅱ	完形	
C 6	竪穴住居36	勾玉形土製品	27	18	7	3.35	明褐灰色7.5YR7/2	伊福・古・前Ⅱ	完形	
C 7	土壇20	紡錘車	32	40	6	6.46	褐色10YR6/1	伊福・弥・後Ⅲ	完形	甕胴部転用
C 8	土壇49	環状形土製品	114	—	32	(169.02)	にぶい橙色7.5YR7/3	伊福・弥・後Ⅲ	欠損	
C 9	土壇56	紡錘車木製品	36	39	4	7.10	明褐灰色7.5YR7/2	伊福・弥・後Ⅲ	完形	甕胴部転用
C10	溝2	紡錘車	20	24	4	1.85	灰黄褐色10YR4/2	伊福・古・前Ⅱ	完形	甕胴部転用
C11	包含層	紡錘車	34	30	5	(5.14)	黒褐色10YR3/1	弥生～古墳	欠損	甕胴部転用
C12	包含層	紡錘車	40	37	4	5.75	にぶい橙色7.5Y7/3	弥生～古墳	完形	甕胴部転用
C13	包含層	紡錘車	57	(32)	4	(10.02)	にぶい橙色5YR6/4	弥生～古墳	欠損	甕胴部転用
C14	包含層	紡錘車	(57)	(35)	15	(30.52)	明褐灰色7.5YR7/2	弥生～古墳	欠損	
C15	包含層	土錘	33	33	(19)	(18.15)	にぶい橙色7.5YR7/4	弥生～古墳	欠損	
C16	包含層	土錘	60	36	12.5	84.50	灰白色10YR8/1	弥生～古墳	完形	
C17	包含層	土錘	70	42	(17)	(66.80)	浅黄橙色10YR8/4	弥生～古墳	欠損	
C18	包含層	匙	(42)	(25)	9	(7.06)	にぶい橙色7.5YR7/4	弥生～古墳	欠損	
C19	包含層	匙?	(62)	(27)	(16)	(12.80)	にぶい橙色7.5YR6/4	弥生～古墳	欠損	
C20	包含層	匙?	(68)	(25)	3	(22.71)	橙色7.5YR7/6	弥生～古墳	欠損	
C21	包含層	不明	(57)	(85)	(38)	(88.29)	にぶい橙色7.5YR7/4	弥生～古墳	欠損	
C22	河道2	土錘	(27)	14	(14)	(4.1)	浅黄橙色7.5YR8/3	中・近世	欠損	
C23	河道2	土錘	(61)	29	22	(37.64)	浅黄橙色7.5YR8/3	中・近世	欠損	円孔1
C24	河道2	土錘	(33)	33	14	(18.25)	灰白色2.5Y8/1	中・近世	欠損	円孔2
C25	河道2	土鈴	(25)	(30)	(19)	(5.43)	灰白色2.5Y8/1	中・近世	欠損	
C26	河道2	羽口	(29)	(径80)	29	(34.3)	明褐灰色7.5YR7/1	中・近世	欠損	孔径約25
C27	河道2	平瓦	(83)	(71)	20	(154.0)	灰色N6/	中・近世	欠損	
C28	包含層	土錘	(53)	30	23	(37.62)	浅黄橙色7.5YR8/4	中・近世	欠損	棒状、円孔1

玉類観察表

掲載番号	出土遺構名	器種	材質	計測値 (mm)				重量 (g)	穿孔	色調	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径					
J 1	竪穴住居23・24	管玉	碧玉	8.4	2.7	—	1.1～1.5	0.10	両面	暗青緑色2.5BG2.5/2.5	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	
J 2	竪穴住居25	小玉	ガラス	4.15	4.4	—	—	1.8	—	ターコイズブルー-5B6/8	伊福・弥・後Ⅳ	
J 3	竪穴住居28	管玉	碧玉	10.3	3.8	—	1.1～2.0	0.21	両面	緑青色4G5/4	伊福・古・前Ⅰ	
J 4	竪穴住居30	管玉	碧玉	7.6	3.2	—	—	1.6	両面	暗灰緑色4G4/3.5	伊福・古・前Ⅱ	
J 5	竪穴住居30	管玉	碧玉	9.6	3.5	—	1.4～2.2	0.15	両面	暗緑灰色7.5GY3/1	伊福・古・前Ⅱ	
J 6	竪穴住居36	管玉	碧玉	(11.0)	(3.0)	—	—	1.3	(0.07) 両面	暗灰緑色4G4/3.5	伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ	欠損
J 7	井戸2	管玉	碧玉	9.8	4.5	—	2.1～2.4	(0.22) 両面	両面	灰青緑色10BG5.5/3	伊福・弥・後Ⅳ	欠損
J 8	土壇39	管玉	碧玉	9.3	3.6	—	1.8～2.0	0.18	両面	暗緑灰色7.5GY3/1	伊福・弥・後Ⅲ	
J 9	溝2	円玉	滑石	3.0	4.4	—	—	1.4	—	黒色N2/	古墳中期後半	
J 10	遺構に伴わない	勾玉	滑石	24.4	16.7	3.7	—	2.0	両面	黒色10Y2/1	—	

木製品観察表

掲載 番号	出土遺構名	出土地	器種	計測値 (cm)			樹種	木取り	時期	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
W1	竪穴住居1	P1	礎板	37.0	6.2	4.3	コナラ属アカガシ亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
W2	竪穴住居1	P1	礎板	30.2	17.6	4.3	コナラ属アカガシ亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
W3	竪穴住居1	P1	礎板	30.7	6	5.1	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
	竪穴住居1	P2-a	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属コナラ節	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居1	P2-b	礎板	(約15.0)	—	—	コナラ属コナラ節	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居1	P2-c	礎板	(33.0)	(4.0)	—	コナラ属クヌギ節	半裁	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居1	P3-a	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居1	P3-b	礎板	推約35.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居1	P3-c	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
W4	竪穴住居1	P4	礎板	(35.9)	15.1	3.8	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	14C年代
W5	竪穴住居1	P4	礎板	28.9	5.2	3.7	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
W6	竪穴住居1	P4	礎板	31.4	(9.3)	4.8	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	一部欠損	
	竪穴住居2	P1-a	礎板	—	—	—	マツ属複雑管束亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P1-b	礎板	—	—	—	マツ属複雑管束亜属	—	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P1-c	礎板	推約20.0	—	—	マツ属複雑管束亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P1-d	礎板	(19.0)	—	—	マツ属複雑管束亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P1-e	礎板	推約35.0	—	—	マツ属複雑管束亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P2-a	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	残存せず	
	竪穴住居2	P3-a	礎板	推約40.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居2	P3-b	礎板	(約30.0)	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居4	P1-a	礎板	推約20.0	—	—	シイ属	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居4	P2-a	礎板	(35.0)	(4.4)	(3.5)	クスノキ科	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
W7	竪穴住居5	P1	礎板	32.1	9.3	7.6	ケヤキ	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ	完形	
	竪穴住居5	P1-a	礎板	推約25.0	—	—	ツブラジイ	—	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
W8	竪穴住居5	P2	礎板	31.7	8.5	7.7	ケヤキ	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ	ほぼ完形	
	竪穴住居5	P2-a	礎板	推約20.0	—	—	ヤブツバキ	割材	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居5	P2-b	礎板	推約23.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居5	P2-c	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	破片	
	竪穴住居5	P2-d	礎板	25.7	8.2	2.9	散孔材	割材	伊福・弥・後Ⅳ	ほぼ完形	
W9	竪穴住居6	P2	礎板	41.0	10.1	4.6	コナラ属コナラ節	芯持削出し	伊福・弥・後Ⅳ	完形	
W10	竪穴住居6	P2	礎板	38.0	9.6	4.5	コナラ属コナラ節	芯持削出し	伊福・弥・後Ⅳ	完形	
W11	竪穴住居6	P3	礎板	(34.2)	7.3	4.3	ツブラジイ	割材	伊福・弥・後Ⅳ	一部欠損	
W12	竪穴住居6	P3	礎板	41.6	10.1	7.0	ツブラジイ	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ	一部欠損	
W13	竪穴住居6	P3	礎板	44.5	8.1	3.1	ツブラジイ	割材	伊福・弥・後Ⅳ	一部欠損	
	竪穴住居7・8・9	P2-a	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	粘土化	
	竪穴住居7・8・9	P2-b	礎板	推約55.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	粘土化	
	竪穴住居7・8・9	P2-c	礎板	推約50.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	粘土化	
	竪穴住居7・8・9	P2-d	礎板	推約13.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	粘土化	
	竪穴住居7・8・9	P3-a	礎板	推約20.0	—	—	タブノキ	半裁	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P3-b	礎板	推約8.0	—	—	コナラ属アカガシ亜属	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
W14	竪穴住居7・8・9	P4	礎板	31.1	6.6	6.4	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
	竪穴住居7・8・9	P4-a	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P4-b	礎板	推約45.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P4-c	礎板	推約40.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P4-d	礎板	(約24.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P4-e	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P4-f	礎板	(約20.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P4-g	礎板	(約42.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P5-a	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P5-b	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P6-a	礎板	推約95.0	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅲ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P6-b	礎板	推約55.0	—	—	シイ属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P6-c	礎板	推約55.0	—	—	シイ属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居7・8・9	P7-a	礎板	推約13.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P7-b	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	残存せず	
	竪穴住居7・8・9	P7-c	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	残存せず	
W15	竪穴住居11	P1	礎板	(53.8)	8.5	5.1	タブノキ	半裁	伊福・弥・後Ⅲ	一部欠損	
	竪穴住居11	P2-a	礎板	推約40.0	—	—	タブノキ	割材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
W16	竪穴住居11	P3	礎板	34.8	4.7	3.0	コナラ属コナラ節	割材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	

掲載番号	出土遺構名	出土地	器種	計測値 (cm)			樹種	木取り	時期	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
	竪穴住居11	P4-a	礎板	推約40.0	—	—	タブノキ	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居12	P2-a	礎板	(17.0)	—	—	シイ属	割材	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	破片	
W17	竪穴住居12	P3	礎板	51.0	8.5	5.8	クリ	割材	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	ほぼ完形	
	竪穴住居13	P1-a1	礎板	—	—	—	サクラ属	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居13	P1-a2	礎板	—	—	—	コナラ属アカガシ亜属	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居13	P1-b	礎板	推約38.0	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅲ	粘土化	
	竪穴住居13	P1-c	礎板	推約25.0	—	—	—	—	伊福・弥・後Ⅲ	粘土化	
	竪穴住居14	P1-a	礎板	推約20.0	推約15	—	同定不可	板状?	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
W18	竪穴住居16	P1	礎板	57.4	15.2	7.2	コナラ属コナラ節	半裁削出し	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	完形	
W19	竪穴住居16	P3	礎板	43.9	15.7	6.9	コナラ属コナラ節	半裁削出し	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	完形	
W20	竪穴住居16	P4	礎板	54.2	17.2	10.2	コナラ属コナラ節	芯持削出し	伊福・弥・後Ⅲ～Ⅳ	完形	
W21	竪穴住居17	P1	礎板	46.9	8.8	7.5	マツ属複雑管束亜属	割材削出し	伊福・弥・後Ⅲ	完形	
W22	竪穴住居17	P3	礎板	45.2	7.7	6.9	ヤマグワ	割材	伊福・弥・後Ⅲ	一部欠損	
	竪穴住居17	P3-a	礎板	—	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	残存せず	
	竪穴住居17	P3-b	礎板	(約15.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	粘土化	
W23	竪穴住居17	P2	礎板	42.5	7.0	6.2	コナラ属アカガシ亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	完形	
	竪穴住居17	P4-a	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	破片	
	竪穴住居17	P4-b	礎板	推約47.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	粘土化	
W24	竪穴住居17	P5	礎板	41.3	6.4	5.3	コナラ属アカガシ亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	ほぼ完形	
	竪穴住居17	P5-a	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	粘土化	
	竪穴住居18	P1-a	礎板	—	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅱ	粘土化	
	竪穴住居20	P1-a	礎板	(約18.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
	竪穴住居20	P2-a	礎板	(約18.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
W25	竪穴住居21	P1	礎板	35.3	7.9	4.5	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	一部欠損	
	竪穴住居21	P1-a	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P1-b	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P1-c	礎板	推約25.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P2-a	礎板	推約35.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P2-b	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P2-c	礎板	推約20.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P3-a	礎板	推約35.0	—	—	コナラ属コナラ節	半裁	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P3-b	礎板	推約50.0	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居21	P3-c	礎板	(約41.0)	(約5.5)	—	コナラ属コナラ節	半裁	伊福・古・前Ⅰ	ほぼ完形	
	竪穴住居21	P3-d	礎板	(約40.0)	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居21	P3-e	礎板	(約15.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P1-a	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P1-b	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P1-c	礎板	推約50.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P1-d	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P1-e	礎板	推約45.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P1-f	礎板	推約65.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P2-a	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P2-b	礎板	(約20.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P3-a	礎板	(約18.0)	—	—	未鑑定	芯去材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P3-b	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P3-c	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P3-d	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
W26	竪穴住居23・24	P5	礎板	37.3	6.1	4.9	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	完形	
W27	竪穴住居23・24	P5	礎板	37.7	4.2	4.1	マツ属複雑管束亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	完形	屈曲
W28	竪穴住居23・24	P5	礎板	42.7	5.4	5.2	マツ属複雑管束亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	完形	屈曲
	竪穴住居23・24	P7-a	礎板	推約50.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P7-b	礎板	推約50.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P7-c	礎板	推約45.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P9-a	礎板	(約25.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P9-b	礎板	推約25.0	—	—	シイ属?	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P9-c	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P9-d	礎板	(約6.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P9-e	礎板	(約13.0)	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P10-a	礎板	推約33.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P10-b	礎板	推約45.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P11-a	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P12-a	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P13-a	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	

掲載 番号	出土遺構名	出土地	器種	計測値 (cm)			樹種	木取り	時期	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
	竪穴住居23・24	P13-b	礎板	推約35.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P13-c	礎板	(約17.0)	—	—	未鑑定	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P15-a	礎板	(約25.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P15-b	礎板	(約40.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P15-c	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P15-d	礎板	推約20.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P15-e	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P16-a	礎板	(約29.0)	—	—	コナラ属コナラ節	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P16-b	礎板	推約45.0	—	—	未鑑定	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P16-c	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P16-d	礎板	—	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
W29	竪穴住居23・24	P17	礎板	(65.7)	6.5	5.7	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	一部欠損	
W30	竪穴住居23・24	P17	礎板	61.2	7.6	6.7	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
	竪穴住居23・24	P17-a	礎板	推約50.0	—	—	マツ属複雑管束亜属	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
W31	竪穴住居23・24	P18	礎板	37.3	8.9	4.7	コナラ属クヌギ節	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
W32	竪穴住居23・24	P18	礎板	54.8	6.5	6.0	コナラ属クヌギ節	芯持材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
W33	竪穴住居23・24	P18	礎板	60.3	17.2	9.8	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
	竪穴住居23・24	P18-a	礎板	推約45.0	—	—	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P18-b	礎板	推約35.0	—	—	ツブラジイ	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P18-c	礎板	(約12.0)	—	—	コナラ属コナラ亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P18-d	礎板	—	—	—	マキ属	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P19-a	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P19-b	礎板	推約25.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
W34	竪穴住居23・24	P20	礎板	41.2	6.7	5.4	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	一部欠損	
W35	竪穴住居23・24	P20	礎板	44.7	4.4	3.0	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	完形	
	竪穴住居23・24	P20-a	礎板	推約25.0	—	—	コナラ属クヌギ節	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P20-b	礎板	推約35.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P20-c	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P21-a	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P21-b	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
	竪穴住居23・24	P22-a	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	粘土化	
W36	竪穴住居23・24	P23	礎板	32.8	2.8	1.5	コナラ属アカガシ亜属	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
W37	竪穴住居23・24	P23	礎板	28.6	2.8	1.9	コナラ属アカガシ亜属	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
W38	竪穴住居23・24	P23	礎板	31.2	3.0	1.1	コナラ属アカガシ亜属	割材削出し	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	ほぼ完形	
	竪穴住居23・24	P23-a	礎板	推約15.0	—	—	未鑑定	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P26-a	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
	竪穴住居23・24	P27-a	礎板	推約35.0	—	—	コナラ属アカガシ亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ～古・前Ⅰ	破片	
W39	竪穴住居27	P3	礎板	(35.9)	7.5	4.3	コナラ属アカガシ亜属	割材	伊福・弥・後Ⅳ	一部欠損	
	竪穴住居27	P3-a	礎板	(約15.0)	—	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅳ	粘土化	
	竪穴住居29	P5-a	礎板	推約30.0	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ	破片	
	竪穴住居29	P5-b	礎板	推約35.0	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅰ～Ⅱ	破片	
	竪穴住居30	P6-a	礎板	推約35.0	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅱ	粘土化	
	竪穴住居30	P6-b	礎板	推約40.0	—	—	未鑑定	—	伊福・古・前Ⅱ	粘土化	
W40	竪穴住居32・33	P8	礎板	35.1	11.8	8.7	クリ	芯持削出し	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
W41	竪穴住居32・33	P10	礎板	35.2	6.8	5.2	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
W42	竪穴住居32・33	P10	礎板	33.0	5.7	4.7	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
	竪穴住居32・33	P10-a	礎板	推約25.0	—	—	コナラ属クヌギ節	—	伊福・古・前Ⅱ	破片	
	竪穴住居35	P3-a	礎板	推約35.0	—	—	コナラ属コナラ節	割材	伊福・古・前Ⅱ	破片	11C年代
W43	竪穴住居36	P2	柱	(24.0)	12.2	12.0	シイ属	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	基部のみ	
W44	竪穴住居34～36	P1	礎板	35.4	4.6	3.4	コナラ属クヌギ節	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	ほぼ完形	
W45	竪穴住居37	P5	礎板	28.0	6.9	5.2	未鑑定	芯持削出し	伊福・弥・後Ⅳ	完形	
W46	竪穴住居40	P1	柱	(20.5)	14.0	(9.1)	シイ属	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	基部のみ	
W47	竪穴住居40	P2	柱	(23.3)	14.5	13.3	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・古・前Ⅱ	基部のみ	
W48	竪穴住居41	P1	礎板	45.8	22.9	13.3	コナラ属コナラ節	芯持削出し	伊福・弥・後Ⅳ	ほぼ完形	
W49	井戸1	柄	環	(62.1)	2.3	2.2	未鑑定	割材削出し	伊福・弥・後Ⅲ	一部残存	
W50	井戸1	環	環	(24.0)	(23.0)	—	未鑑定	—	伊福・弥・後Ⅲ	一部欠損	
W51	井戸3	柱	柱	(32.6)	13.0	11.9	コナラ属コナラ節	丸太材	伊福・弥・後Ⅲ	基部のみ	
W52	掘立柱建物1	P2	柱	(29.1)	(13.1)	(12.2)	タブノキ	丸太材	古代	基部のみ	
W53	掘立柱建物1	P4	柱	(30.1)	16.4	16.1	ノグルミ	丸太材	古代	基部のみ	
W54	掘立柱建物1	P7	柱	(22.5)	12.4	(5.2)	タブノキ	丸太材	古代	基部のみ	
W55	掘立柱建物2	P2	柱	(34.6)	25.2	23.2	カヤ	丸太材	古墳後期?	基部のみ	
W56	ピット13	柱	柱	(40.0)	11.7	10.5	未鑑定	丸太材	中世	基部のみ	
W57	ピット15	柱	柱	(20.9)	11.8	10.1	未鑑定	丸太材	中世	基部のみ	

新旧遺構名称対照表

報告遺構名	旧遺構名
竪穴住居 1	住居 142
竪穴住居 2	住居106、土壇171、P1071、P1095、P1105
竪穴住居 3	住居114、土壇176、土壇183
竪穴住居 4	住居194
竪穴住居 5	住居190 住居194ビット 2・3
竪穴住居 6	住居136
竪穴住居 7	住居107c
竪穴住居 8	住居107b
竪穴住居 9	住居107a
竪穴住居10	住居141
竪穴住居11	住居212
竪穴住居12	住居50、土壇61、P1392
竪穴住居13	住居53
竪穴住居14	住居70
竪穴住居15	住居69
竪穴住居16	住居40
竪穴住居17	住居74、土壇77、土壇83、土壇85、土壇89、土壇91、土壇97、P437
竪穴住居18	住居102
竪穴住居19	住居104
竪穴住居20	住居103
竪穴住居21	住居130、土壇154、土壇156、土壇157
竪穴住居22	住居236
竪穴住居23	住居105、住居159、土壇173、土壇177、土壇187、土壇201、土壇204、土壇205、土壇206、土壇207、土壇208、土壇218、土壇221、土壇222、土壇223、土壇228、土壇237、土壇238、土壇240、土壇242、土壇243、土壇244、P1150、P1186、P1265、P1266、P1377、P1229
竪穴住居24	
竪穴住居25	住居117
竪穴住居26	住居118
竪穴住居27	住居165、土壇245、P1402、P1404
竪穴住居28	住居158、住居31
竪穴住居29	住居32、P277、P278
竪穴住居30	住居137、住居24、住居33、住居211、P302、P222
竪穴住居31	住居34
竪穴住居32	住居13
竪穴住居33	住居13
竪穴住居34	住居57
竪穴住居35	住居47
竪穴住居36	住居 5、P247、P251、P342
竪穴住居37	住居 7、P309、P351
竪穴住居38	住居 6、P45
竪穴住居39	住居 4
竪穴住居40	住居 1
竪穴住居41	住居22
竪穴住居42	住居127
掘立柱建物 1	建物170、土壇132、土壇147、土壇192、P589、P608~610、P618、P623、P624、P628、P1036
掘立柱建物 2	土壇63、土壇64、土壇45、土壇46、土壇62
井戸 1	155井戸
井戸 2	234井戸
井戸 3	58井戸
土器棺墓 1	土壇115
土器棺墓 2	土壇164
溝 1	溝125
溝 2	溝 3
溝 3	溝20
河道 1	溝18
河道 2	溝 2

報告遺構名	旧遺構名
土壇 1	土壇138
土壇 2	土壇188
土壇 3	土壇144
土壇 4	土壇99
土壇 5	土壇216
土壇 6	土壇217
土壇 7	土壇139
土壇 8	土壇241
土壇 9	土壇98
土壇10	土壇199
土壇11	土壇143
土壇12	土壇212
土壇13	土壇180
土壇14	土壇100
土壇15	土壇149
土壇16	土壇150
土壇17	土壇232
土壇18	土壇148
土壇19	土壇239
土壇20	土壇247
土壇21	土壇224
土壇22	土壇231
土壇23	土壇226
土壇24	土壇225
土壇25	土壇209
土壇26	土壇230
土壇27	土壇235
土壇28	土壇227
土壇29	土壇163
土壇30	土壇197
土壇31	土壇200
土壇32	土壇210
土壇33	土壇189
土壇34	土壇162
土壇35	土壇129
土壇36	土壇120
土壇37	土壇174
土壇38	土壇124
土壇39	土壇128
土壇40	土壇111
土壇41	土壇146
土壇42	P1134
土壇43	土壇178
土壇44	土壇191
土壇45	土壇175
土壇46	土壇122
土壇47	土壇145
土壇48	P1369
土壇49	土壇119
土壇50	土壇195
土壇51	土壇160
土壇52	土壇198
土壇53	土壇185- 2
土壇54	土壇161
土壇55	土壇229
土壇56	土壇215
土壇57	土壇151
土壇58	土壇179
土壇59	土壇152
土壇60	土壇185- 1
土壇61	土壇219
土壇62	土壇110
土壇63	土壇133
土壇64	P1308
土壇65	土壇167
土壇66	土壇166
土壇67	P1310
土壇68	土壇48
土壇69	土壇39
土壇70	土壇27
土壇71	土壇30

報告遺構名	旧遺構名
土壇72	土壇52
土壇73	土壇26
土壇74	土壇36
土壇75	土壇73
土壇76	土壇37
土壇77	土壇43
土壇78	土壇59
土壇79	土壇66
土壇80	土壇49
土壇81	土壇71
土壇82	土壇75
土壇83	土壇82
土壇84	土壇87
土壇85	土壇86
土壇86	土壇80
土壇87	土壇25
土壇88	土壇14
土壇89	土壇17
土壇90	土壇112
土壇91	土壇42
土壇92	P1293
土壇93	土壇 8
土壇94	土壇16
土壇95	土壇44
土壇96	P44
土壇97	土壇67
土壇98	土壇65
土壇99	土壇 9
土壇100	土壇10
土壇101	土壇15
土壇102	土壇196
土壇103	土壇213
土壇104	土壇38
土壇105	土壇88
土壇106	土壇81
土壇107	土壇84
土壇108	土壇109
土壇109	土壇113
土壇110	P856
土壇111	土壇121
土壇112	P530
土壇113	P806
土壇114	土壇168
土壇115	土壇11
土壇116	土壇29
土壇117	土壇12
ビット 1	P639
ビット 2	P690
ビット 3	P1264
ビット 4	P1222
ビット 5	P1185
ビット 6	P1370
ビット 7	P1348
ビット 8	P146
ビット 9	P378
ビット10	P468
ビット11	P395
ビット12	P503
ビット13	P497
ビット14	P570
ビット15	P429
ビット16	P387
ビット17	P381
ビット18	P578
ビット19	P722
ビット20	P938
ビット21	P957
ビット22	P960
ビット23	P50
ビット24	P104
ビット25	P305
ビット26	P5



1 調査地遠景（南西から）後方に津島遺跡を望む



2 調査区東半部全景（東から）

図版 2



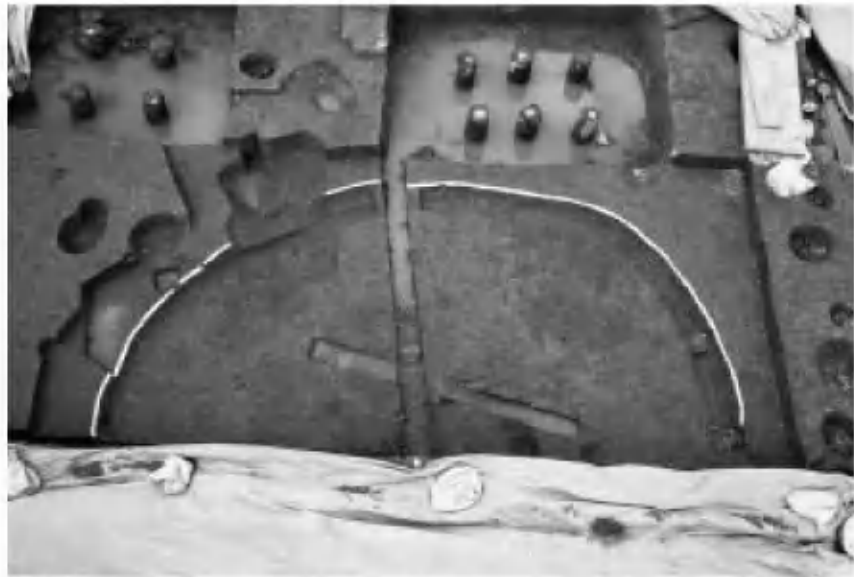
1 豎穴住居 1 (北から)



2 豎穴住居 2 (北から)



3 豎穴住居 3 (東から)



1 豎穴住居 4 (南から)



2 豎穴住居 5 (南から)

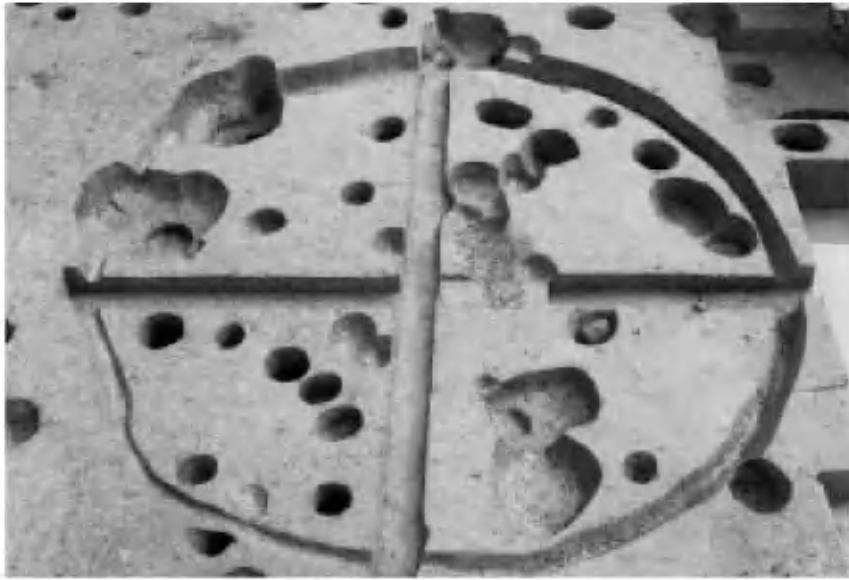


3 豎穴住居 6 (北から)

図版 4



1 豎穴住居 7～9
 (南から)



2 豎穴住居10(西から)



3 豎穴住居11(西から)



1 豎穴住居15(南から)

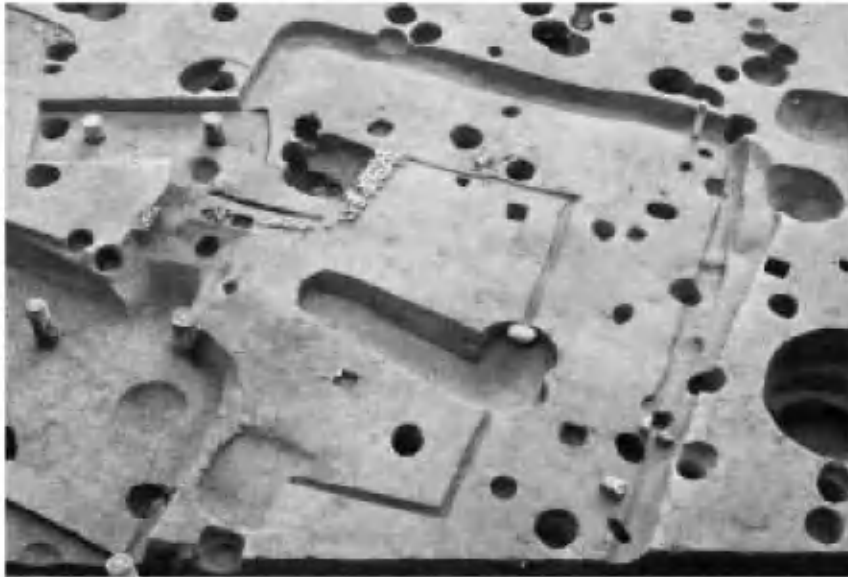


2 豎穴住居16(西から)

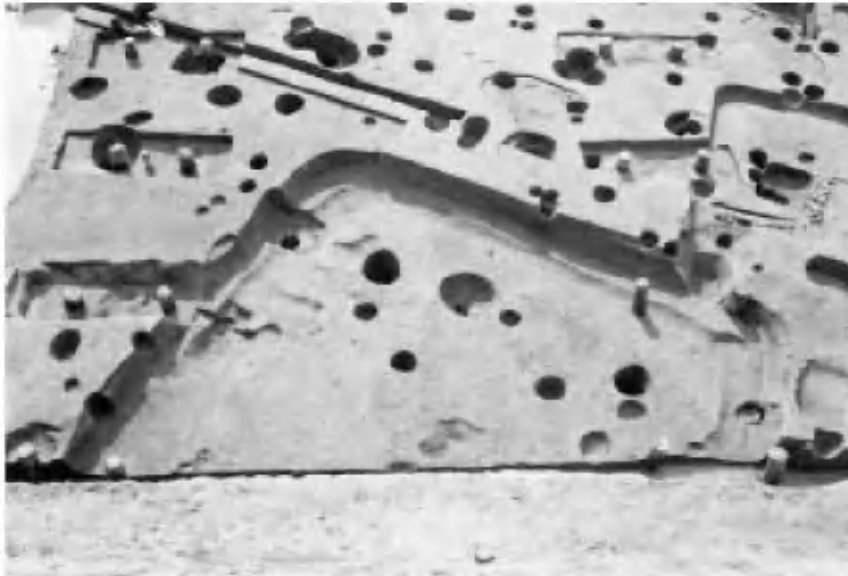


3 豎穴住居18
(北西から)

図版 6



1 竪穴住居19(北から)



2 竪穴住居20(北から)



3 竪穴住居21(南から)

1 竪穴住居23・24
(南西から)



2 竪穴住居25(南から)



3 竪穴住居26(南から)



図版 8



1 豎穴住居27(西から)



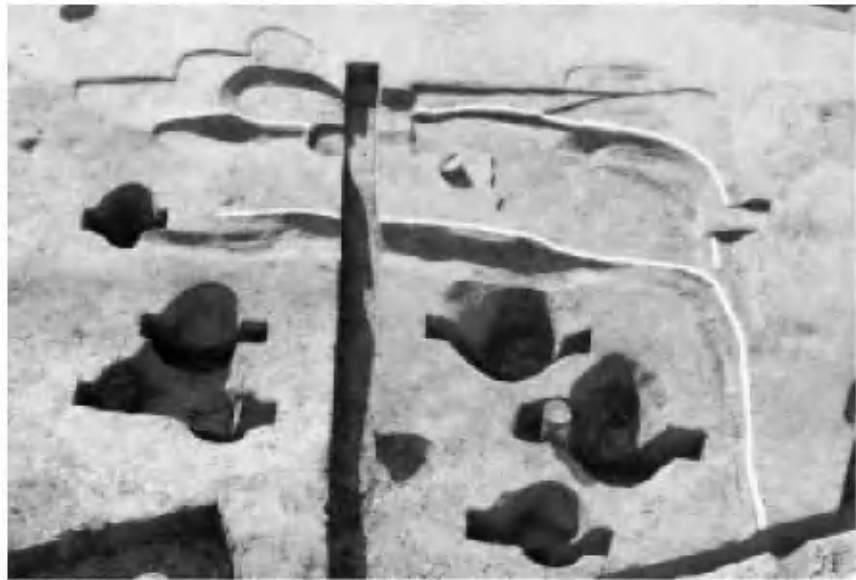
2 豎穴住居30西半
(南から)



3 豎穴住居28~30
東半(南から)



1 豎穴住居31(北から)



2 豎穴住居32・33
(北から)



3 豎穴住居35・36
(南から)

図版10



1 竪穴住居38(南から)



2 竪穴住居39・40
(南から)



3 竪穴住居41(南から)



1 井戸1 (南から)



2 井戸2 (北から)



3 井戸3 (北から)

図版12



1 土器棺墓 1 (西から)



2 土器棺墓 2 (東から)



3 土坑 7 (南西から)



1 土壙13 (南から)



2 土壙26 (南から)



3 土壙29 (東から)

図版14



1 土壙34 (南から)



2 土壙35 (南から)



3 土壙39 (北東から)



1 土壙49 (東から)



2 土壙50 (北西から)



3 土壙63 (東から)

図版16



1 土壙94 (南から)



2 溝2 (北東から)



1 豎穴住居42(南から)



2 掘立柱建物1
(北東から)

図版18



1 土壙107 (南西から)



2 土壙117 (南から)



3 河道2 (南東から)



1 豎穴住居1-P1 (北東から)



2 豎穴住居1-P2 (南東から)



3 豎穴住居1-P3 (北東から)



4 豎穴住居1-P4 (北西から)



5 豎穴住居2-P1 (南から)



6 豎穴住居2-P3 (北から)



7 豎穴住居4-P2 (東から)



8 豎穴住居6-P2・P3 (北東から)

図版20



1 竪穴住居 5-P1 (南から)



2 竪穴住居 5-P2 (東から)



3 竪穴住居 7~9-P2 (北西から)



4 竪穴住居 7~9-P4 (東から)



5 竪穴住居 7~9-P5・P6 (南から)



6 竪穴住居 7~9-P7 (西から)



7 竪穴住居 11-P2 (南から)



8 竪穴住居 11-P3 (西から)



1 豎穴住居11-P4 (南東から)



2 豎穴住居12-P3 (南から)



3 豎穴住居16-P1 (東から)



4 豎穴住居16-P3 (東から)



5 豎穴住居16-P4 (北東から)



6 豎穴住居17-P5 (南西から)



7 豎穴住居20-P1 (北から)



8 豎穴住居20-P2 (北から)

図版22



1 豎穴住居21-P1 (北から)



2 豎穴住居21-P3 (北から)



3 豎穴住居23・24-P1~3 (北から)



4 豎穴住居23・24-P5 (南東から)



5 豎穴住居23・24-P7 (南西から)



6 豎穴住居23・24-P9 (東から)



7 豎穴住居23・24-P17 (東から)



8 豎穴住居23・24-P20 (西から)



1 竪穴住居23・24-P18 (南から)



2 竪穴住居23・24-P18 (南から)



3 竪穴住居29-P3 (北から)



4 竪穴住居30-P5 (西から)



5 竪穴住居32・33-P8 (北から)



6 竪穴住居36-P1 (西から)



7 竪穴住居36-P3 (南西から)



8 竪穴住居41-P1 (西から)



竖穴住居 4・7~9・11・13・16・18~20出土土器



豎穴住居21・23～25・40出土土器



井戸3出土土器



1 土器棺墓1出土土器



2 土壙6·7·9出土土器



土壤11·12出土土器



土壙13·19·22出土土器

图版30



土壤21·27·29·31·34出土土器



土壙34出土土器



土壙35・37~39出土土器



391

392

393

394

395

396

土壙39出土土器

图版34



土壙39·57·58·61~64出土土器



1 土壙94出土土器



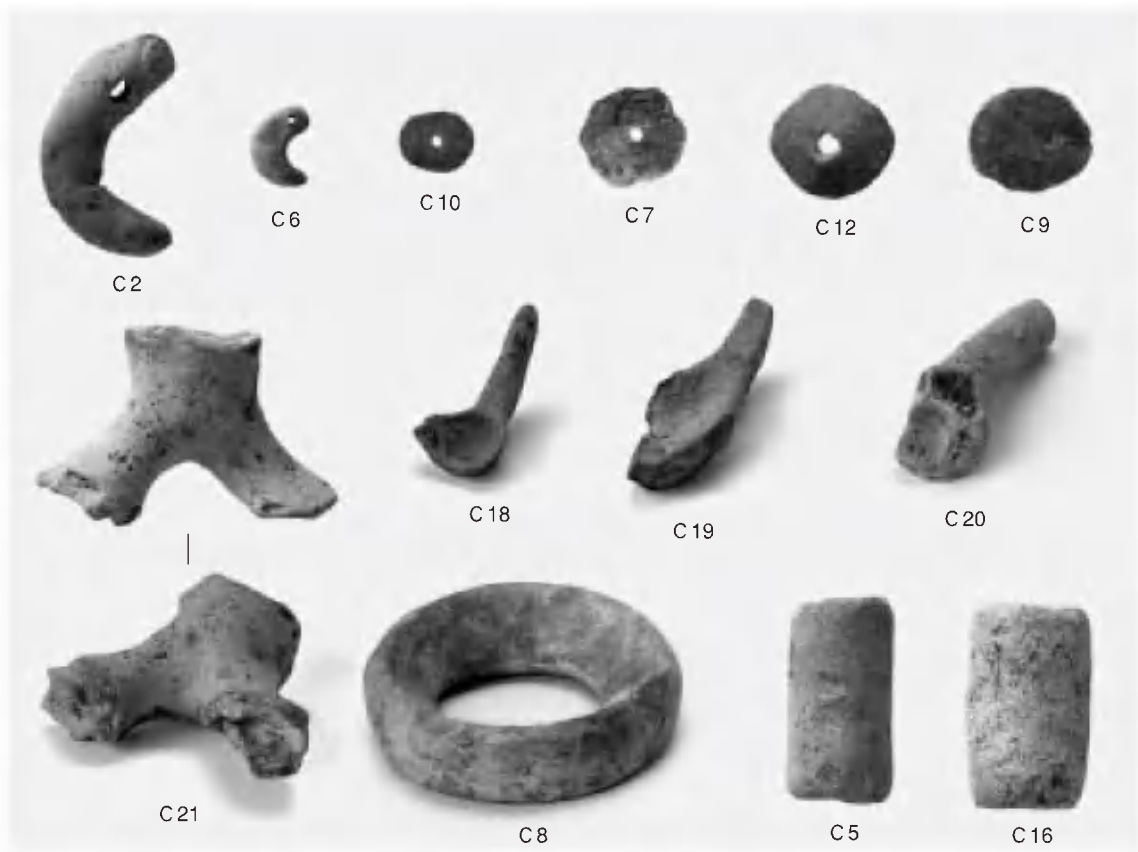
2 豎穴住居42出土土器

図版36

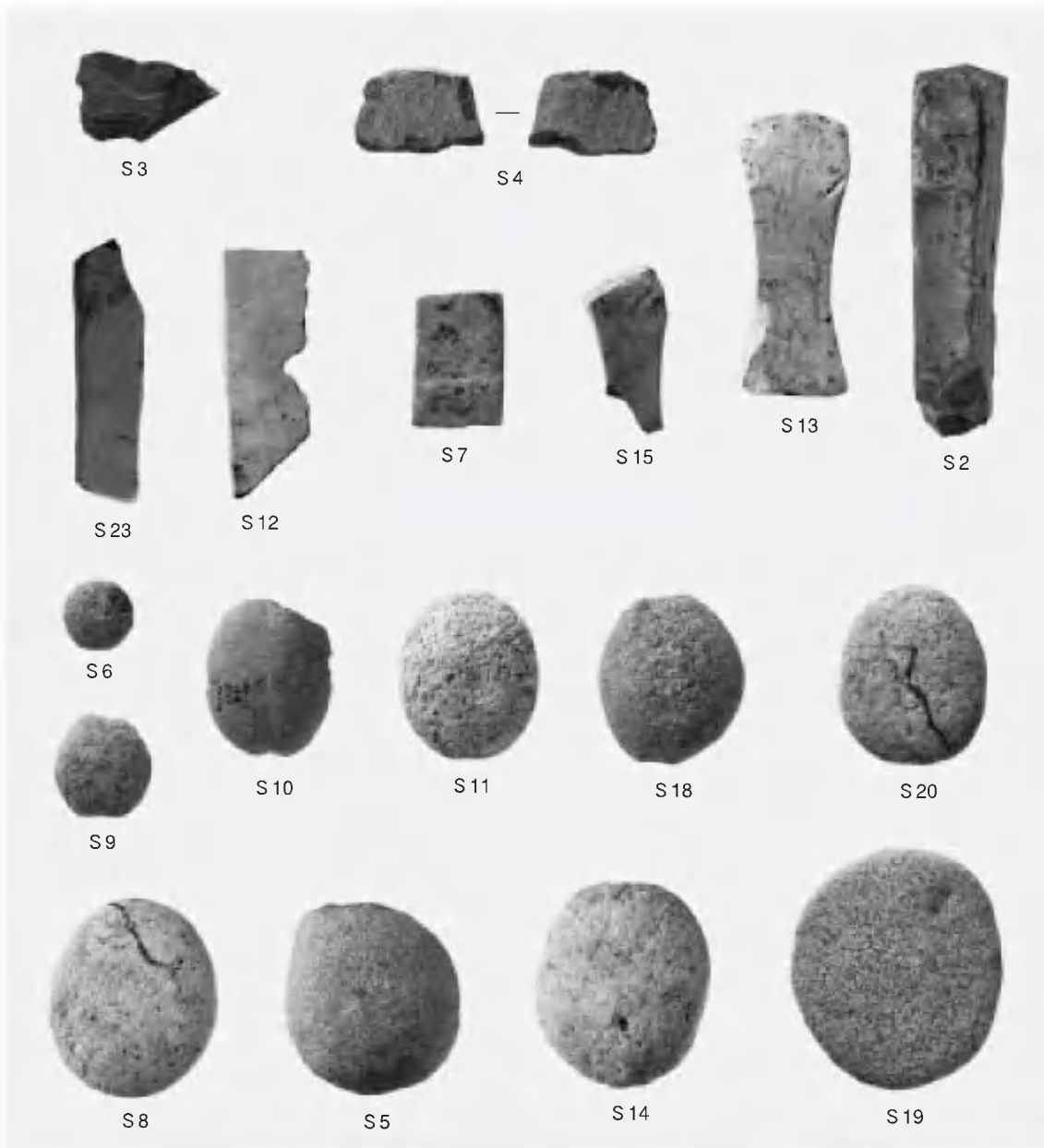


1 古代・中世土器

2 統制陶器



3 土製品



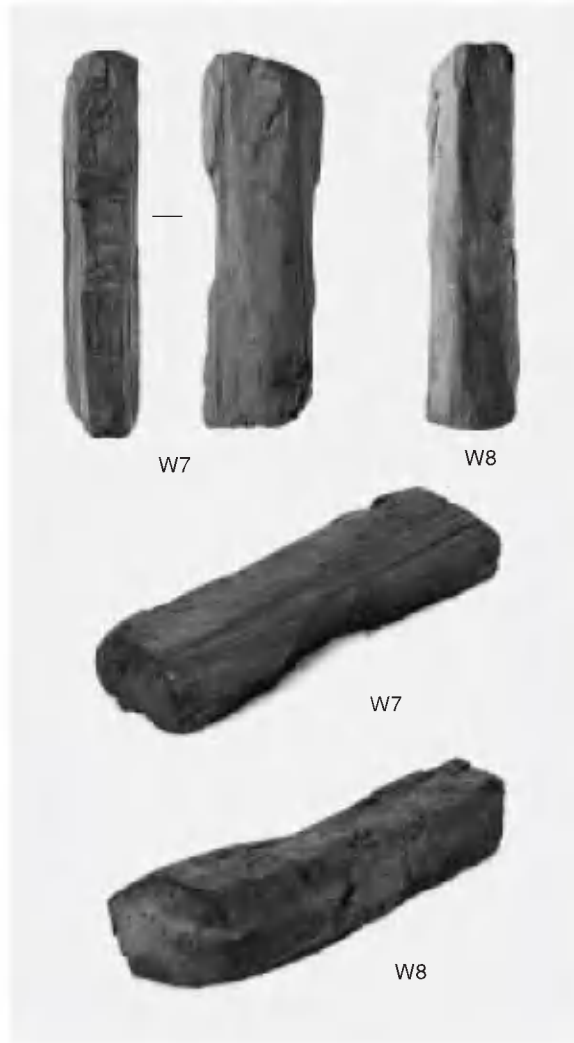
1 石器・石製品



2 金属製品



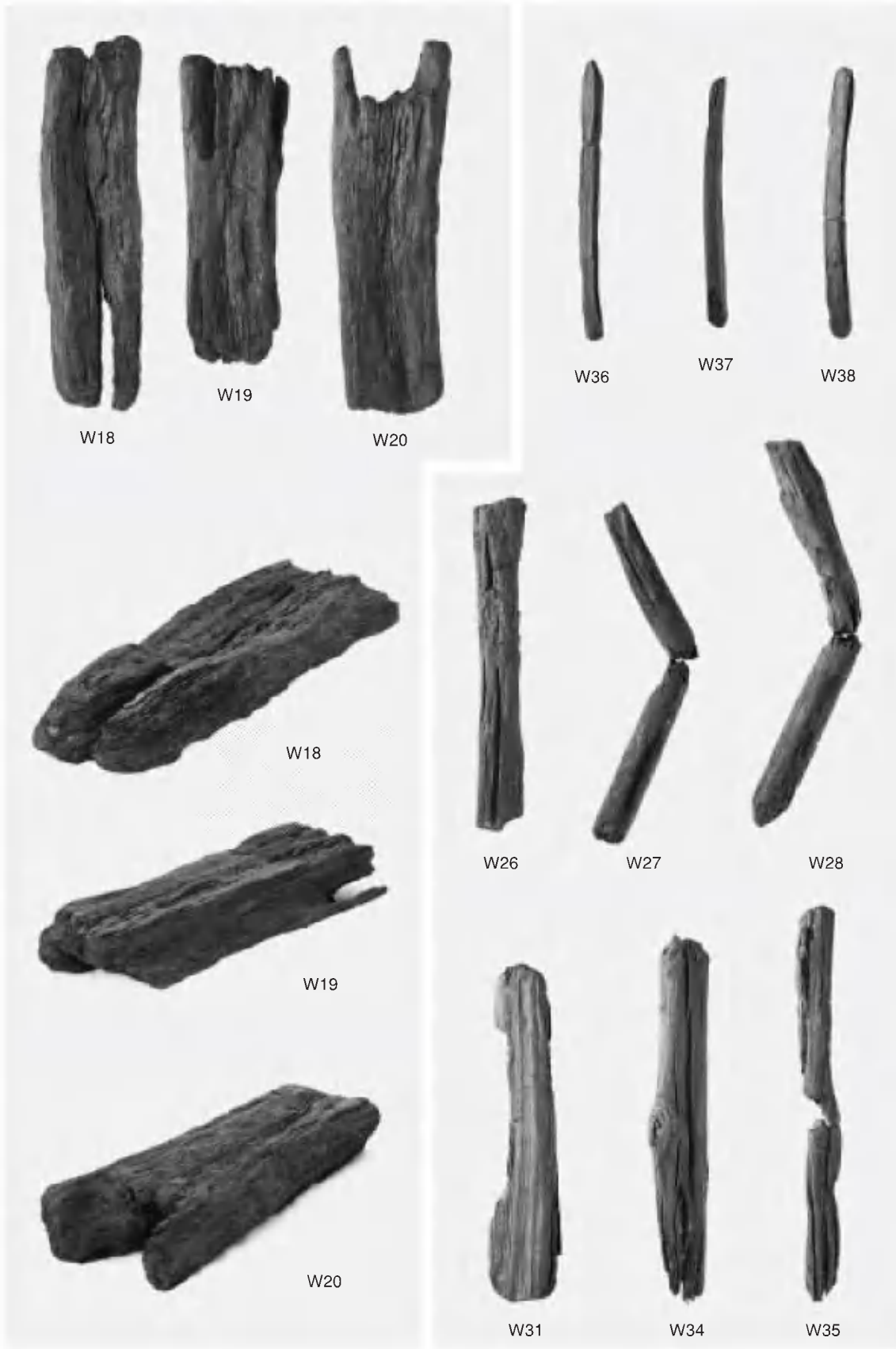
1 豎穴住居 1 出土礎板



2 豎穴住居 5 出土礎板



3 豎穴住居 6 出土礎板



1 竖穴住居16出土礎板

2 竖穴住居23・24周边出土礎板

図版40



1 豎穴住居32・33出土礎板



2 豎穴住居36出土柱根・礎板



3 豎穴住居40出土柱根



4 豎穴住居41出土礎板



5 井戸3出土木製品



6 井戸1出土環



7 掘立柱建物2出土柱根

報告書抄録

ふりがな	いふくさだくにまえいせき							
書名	伊福定国前遺跡2							
副書名	県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	188							
編著者名	金田善敬・亀山行雄・米田克彦・安永周平・稲谷知子・志賀智史・本田光子・木戸博・富岡直人・小林謙一・春成秀樹・坂本 稔・尾寄大真・新免歳靖・村本周三・松崎浩之							
編集機関	岡山県古代古備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3					TEL086-293-3211		
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6					TEL086-224-2111		
発行年月日	2005年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		(㎡)	
いふくさだくにまえいせき 伊福定国前遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 いふくさちょう 伊福町 4丁目3-92	33201	1479	34° 40' 11"	135° 54' 45"	2002.10.1 ~2003.3.31	1080㎡	県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
伊福定国前遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	住居・井戸・ 土器棺墓・土 塋・溝 住居・土塋・ 溝 建物・土塋・ 河道 土塋・溝・河 道	土器（弥生土器・土師器・須恵器） 陶磁器（備前焼・亀山焼・東播系・ 瓦質土器・青磁・唐津焼・ 統制陶器） 石器（スクレイパー・打製石包丁・ 石杵・石錘・砥石・敲石・磨 石） 土製品（紡錘車・勾玉・土鈴・土 錘・環状土製品・匙形土 製品・羽口・平瓦） 玉類（管玉・勾玉・白玉・ガラス 小玉） 金属製品（鉈・鉄鏃・手鎌・火打 金・銅銭） 木器（礎板・建築部材） ガラス滓・鉄滓 獣骨	弥生時代後期～ 古墳時代前期を 中心とした集落 遺跡で、多くの 竪穴住居が密集 して検出され た。また、柱穴 内に礎板が良好 な状態で残存し ていたことが注 目される。			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188

伊福定国前遺跡 2

県立岡山工業高等学校産業教育施設改築に伴う発掘調査

平成17年 2月28日 印刷

平成17年 2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下 2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2



古墳発掘100周年記念事業を機用しての刊行